超絶美少女霊能者箕輪まどかの霊感推理

りったん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超絶美少女霊能者箕輪まどかの霊感推理

【Ｎコード】
Ｎ７７２０Ｊ

【作者名】
りったん

【あらすじ】
私は箕輪まどか。霊感もある超美少女だ。
とうとう中学に進学し、ますますその美しさに磨きがかかって来た。
男の子なんてイチコロよ！　悪霊だってイチコロよ！
そして、今日も私の推理が冴え渡るのよ！
イケメンの彼ができて、ますます過激に生きて行くのよ！
小松崎瑠希弥さんが、Ｇ県に来たのよ！
今度は中学校に椿直美先生が来たのよ！　結構強い人なのよ！
ほとんど一話完結だから、どこから読んでも大丈夫なのよ！

主な登場人物

箕輪まどか
　このお話の主人公。超美少女を自称している。霊感が鋭い。

箕輪慶一郎
　まどかの兄。エロい。G県警の鑑識課に勤務している。モデルは多分沢村さん？

里見まゆ子
　慶一郎の同僚。慶一郎に気がある。

牧野　徹
　まどかの同級生。医者の息子。

力丸卓司（りきまるたくし）
　まどかのクラスメート。肉屋の息子。

力丸（りきまる）あずさ
　卓司の姉。力丸ミートの看板娘。ほとんど登場しない。

近藤明菜
　まどかの親友。ワンポイント毒舌が得意。

江原耕司
　まどかの新しい彼。霊感あり。

江原雅功（えはらまさとし）
　耕司の父。高名な退魔師。

江原菜摘
　耕司の母。M市駅前で占いをしている。感応力に優れている。

美輪幸治
　明菜の彼。喧嘩が強い。江原と共に「やり過ぎコウジ」と呼ばれている。

江原靖子
　耕司の妹。お兄ちゃん大好きっ子。力丸卓司と付き合い始めた。霊感あり。

綾小路さやか
　まどかの同級生。まどかの彼を奪いたくなる性格。

宮川
　G県警鑑識課の最古参。但し、ロリコン。口調がル○ンに似ている。

小倉冬子
　慶一郎の高校の同級生。

濱口わたる
　冬子の幼馴染。退魔師。

西園寺蘭子
　美人霊能者。まどかが只一人尊敬する女性。最強の霊能者。

八木麗華
　美人霊能者。但し物欲と性欲が強いらしい。ファッションセンス

がおかしい。

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）

十九歳の美少女霊能者。男性陣をことごとく虜にする感応力を持つ。

柳原まり

転校生。不思議な力を持っているらしい。

椿　直美

まどかのクラスの副担任。

美少女霊能者登場！

私は小学六年生。名前は箕輪まどか。

近所でも可愛いと評判だが、男子にはあまり人気なし。

何故なら、私は幽霊が見えちゃう美少女だからだ。

自分で「美少女」とか言うと嘘臭いけど、本当なんだから仕方がない。

疑う人には写真を送りたいくらいだ。

今日も登校途中に若い女性の浮遊霊に声をかけられた。

霊感がない人には私の悩みは理解してもらえないと思う。

霊には、「見えちゃう人」が確実にわかるのだ。

だからいくら見えないふりをしても、

「てめえ、何無視してんだよ！？」

と毒づかれる。

無視したからと言って、私には咎められる謂れはないのにね。

「鬱陶しいから、向こうに行って」

私は立ち止まってその浮遊霊に言った。すると彼女は悲しそうな顔をして消えた。

私はホッとしてまた歩き出した。

ところが、「お楽しみ」はこれからだったのだ。

教室に着くと、私はギョッとした。

さっきの浮遊霊がいるのだ。

しかも、私が密かに思いを寄せている男子、牧野君のそばに。

え？　普通美少女は思いを寄せられる設定が多い？

別にいいでしょ、私が思いを寄せても！

私はツカツカと浮遊霊に近づき、

「あんた、何でこんなところにいるのよ？　出て行きなさいよ」

私の突然の大声に、牧野君がビビッたのは言うまでもない。

「な、何、箕輪さん？　僕が何かした？」

牧野君は震えながら尋ねて来た。私はサッと笑顔になり、

「ああ、違うのよ、牧野君。貴方に言ったんじゃないの。ここにいる霊に言ったのよ」

その瞬間、クラスのみんなが教室を逃げ出してしまった。

私はその素早さに声も出なかった。

そして。

「ねえ、あんた、どうして私につきまとうのよ？」

私は誰もいなくなった教室で、霊とサシで話した。

「貴女に私が見えるから」

「でも私はあんたの力にはなれないよ」

「いえ、なれるわ」

「どうしてそう言い切れるの？」

浮遊霊の妙な自信に私は疑問を持った。

「それは・・・」

その時、先生がクラスのみんなを引き連れて教室に入って来た。

そのため、浮遊霊は窓から出て行ってしまった。

私はこってり先生に叱られた。

妙な事を言ってみんなを怖がらせるなと。

いやいや、私が怖がらせたんじゃなくて、みんなが勝手に怖がっただけだから。

そう言いたいのは山々だったが、これ以上何か言われるのは嫌なので、やめておいた。

結局浮遊霊はその日は現れず、次の日も、次の日も現れなかった。

どうしたのだろう？

諦めて違うところに行ったのならいいのだが。

そんな心配をしている自分に驚いた。

そしてさらに次の日。

また登校途中に彼女が現れた。

「何よ。また来たの？　私には何もできないよ」

「できるわ。一緒に来て」

「嫌よ」

「なら、牧野君に一緒に行ってもらうわ」

「何ですって？」

こいつ、意外に狡賢いのかも。

「わかったわよ。でも、時間あまりないからね」

「ええ」

私は通学路から少し外れた空き地に来ていた。

「あの空き地の隅のドラム缶の中に私はいるわ。警察に知らせて。犯人は私の元彼よ」

「ええ！？」

私は霊は怖くないが、死体は怖い。

「わかった。すぐにお兄ちゃんに連絡するわ」

私のお兄ちゃんは県警の鑑識課に勤務している。

「だからなの？　だから私に頼ったの？」

私は疑問が氷解した気がして、彼女に尋ねた。

「違うわ」

「え？」

彼女はとても嬉しそうに私を見た。

「貴女は、口は悪いけど、本当は優しい子だって思ったからよ」

「・・・」

私は照れ臭くなって俯いた。

私の霊感を知っているお兄ちゃんは、すぐに現場に来た。

そして彼女の言った通り、遺体が発見され、犯人の元彼もすぐに確保された。

その日、私は牧野君と一緒に下校していた。

殺人事件を解決した私をみんなが褒めてくれ、先日の事を詫びてくれた。

私は牧野君にコクられ、付き合うことになった。

これも彼女のおかげなのかな？

「あ」

私は彼女が道の向こうに立っているのに気づいた。

「ちょっと待っててね」

「え？」

キョトンとする牧野君を尻目に、私は彼女に近づいた。

「ありがとう、まどかちゃん。貴女の事は忘れないわ」

「わたしこそ、お礼を言わなくちゃ。貴女のおかげでいろいろいい事あったし」

私はチラリと牧野君の方を見た。彼女は微笑んで、

「じゃ、私、行かなくちゃ」

「え？」

私はその言葉に言い知れない寂しさを感じた。

「もう、会えないの？」

「何十年後かにまた会えるわよ」

彼女は屈託のない笑顔で言った。

「そうね。でもその時は私、おばあちゃんだ」

私は涙を拭いながら言った。

彼女は、

「本当にありがとう」

と言い、光に包まれて天に昇って行った。

「さようなら」

私はいつまでも手を振り続けた。牧野君の存在を忘れたまま。

奇麗なお姉さんと出会ったのよ！

私の名前はりったん。

じゃなかった、箕輪まどか。

何であんな中年オババと言い間違えたんだろ？

まだ小学校六年生の美少女なのに。

この前、ハリセン〇ンの死神に似てる奴だろ、と言った他校の男子をフルボッコにした。

話し方が大人び過ぎていて、とても小学生には見えないという誉められてるんだか、貶されてるんだかわからない事を言われた事もある。

そんな私は、あまり大きな声では言えない能力がある。

霊能力だ。

誰、今「零（ゼロ）能力」って言ったの？

後で酷いわよ。覚えてなさいよ。

で、話を戻すけど、私は霊感が強い。

県警の鑑識課にいるお兄ちゃんの依頼で、時々霊視もしている。

将来は県警本部長を目指している訳ではないが、警察に恩を売っておけば、いざという時何か良い事があるだろう。

そんな優れた能力の持ち主である私だから、普段から浮遊霊が近づいて来てウザい事この上ない。

追い払うのに一苦労なのだ。

昨日もたくさんの浮遊霊に寄り付かれ、ようやく逃げ切った。

最近までお付き合いをしていた牧野君とは、そのせいで別れてしまった。

男の子のビビリはカッコ悪い。

もう興味なし。消えて下さいって感じ。

「また今日もウザいんだろうな」

学校へ出かける。

あれ？

いつも現れる幼稚園児の浮遊霊がいない。

園児バスに轢かれて死んでしまった子で、私に霊感があるのを良い事に接近して来た。

享年五歳のくせに、やたらエロくて何度もお尻やおっぱいを触られた。

えっ？　お前におっぱいなんかない？

ホント、怒るよ、いい加減にしないと。

「あ」

私はそのエロ園児の霊が何故私によって来なかったのかわかった。

数メートル先に奴はいた。

そこには、２０代くらいの美人がいたのだ。

しかも、その美人は、私と同じく霊感があるらしい。

園児のエロエロ攻撃を受けて困っているようだ。

具体的にどんな事をしているのかは、読者の皆さんのエロ度に応じて想像して欲しい。

「大丈夫、お姉さん？」

私は駆け寄って声をかけた。するとお姉さんは私を見て、

「ええ、大丈夫よ、箕輪まどかさん」

「へっ？」

私はビックリした。

そのお姉さんとはどう考えても初対面なのに、フルネームで呼ばれたからだ。

「ど、どうして私の名前を？」

「貴女の守護霊様が教えて下さったわ」

「守護霊？」

私にはまだ自分の守護霊と話す力はない。ビックリだ。

お姉さんは近くで見ると、また一段と美しかった。エロ園児が私に寄って来なかったのも納得してしまった。

私にはあの色気はない。完全敗北だ。

「さ、もういいでしょ、ケンジ君。お帰りなさい」

お姉さんは諭すようにエロ園児の霊に言った。

「はーい」

園児の霊は素直に応じて消えた。

私が怒鳴っても言う事聞かないのに。

これだから男は嫌だ。

「自己紹介してなかったわね。私は西園寺蘭子。霊能者よ」

神々しいと言う言葉はこのお姉さんのためにあるのだと確信した。

女の私も惚れ惚れしてしまう。

もしかして、これってお姉さんの能力なのかな？

「貴女を待っていたの」

「えっ？　私を？　どうしてですか？」

私は思わぬ展開に、ドキドキした。

「力を貸して欲しいの」

「えっ？　ほしのあき？」

私のボケは軽く流されてしまい、蘭子お姉さんは何もリアクションしてくれない。

「学校が終わったら、校門のところで落ち合いましょう。一緒に行ってもらいたいところがあるの」

「は、はい」

何があるのかわからないが、とにかく面白そうだ。
しかも蘭子お姉さんは、相当な力の持ち主だ。
それがわかる。
そしてそういう事が出来てしまう私も相当な力の持ち主……と言いたいところだが、蘭子お姉さんには全然敵わない。

私は授業も上の空、先生のお説教もどこ吹く風で一日を過ごし、下校時間になるとダッシュで校門に向かった。
「あれ？」
するとすでにエロ男子共が蘭子お姉さんを取り囲んでいた。
「お姉さん、いくつ？」
「彼氏いるの？」
「今度一緒にプール行こうよ」
男子共のバカさ加減に私は呆れ果てたが、
「蘭子さん、お待たせ」
と声をかけると、まるでクモの子を散らすようにバカ共は走り去った。

私は学校で一番強いのだ。

「悪いわね、まどかちゃん。行きましょうか」

「はい」

蘭子お姉さんは私と共に近くに乗りつけられたメーカー不明のスポーツカーに乗り込んだ。

霊能者が乗るイメージがまるでないような真っ赤な車だ。

もしかして、蘭子お姉さんは山口百恵のファンなのだろうか？

などと下らない妄想を膨らませていると、車は目的地に到着した。

「ここは？」

酷く田舎な感じのするところ。

「こ、ここ……」

私は途端にたくさんの霊気を感じた。

「ここは以前小学校だったの。でも、市の財政事情と子供の数のせいで、廃校になったわ」

蘭子お姉さんは悲しそうに言った。

私にも感じられた。

その建物から、すすり泣く声が聞こえる。

私と同年代くらいで命を落とした女の子達。

何だろう？

死に方がよくわからない。

「彼女達は、この場所を清めるために人柱になったの。彼女達の家の宿命なのよ」

「ああ…」

私はもどかしい感じが解けて行くのを感じた。

自分の意志で命を落としたのに、自殺とは違う波動を出しているのはそのせいなのね。

「封じている怨霊は私が除霊します。貴女は彼女達を解き放ってあげて。もう役目を終えても良いはずだから」

「わかりました」

何があったのかは私には難しくてよくわからないが、女の子達が封じている霊が凄まじい悪意を放っている事は感じ取れた。

「貴女達はもう楽になって良いのよ。もう、ここにいなくてもいいの」

私は女の子達の霊に語りかけた。

「ホント？」

「もちろん。もう大丈夫。私達に任せて」

「わかった。ありがとう、まどかちゃん」

霊に礼を言われると何となく恥ずかしい。ってか、何で私の名前知ってんのよ？

私が彼女達を開放している時、蘭子お姉さんは壮絶な戦いを始めていた。

「貴方達ももうここには留まらなくていいのよ。そろそろ行くべきところにお行きなさい」

蘭子お姉さんは数珠を取り出して振るった。

「オレタチハ　マダマダココニイル　マダタリナイ　マダコロス」

怨霊達の叫び声が聞こえた。しかし蘭子お姉さんは怯まない。

「ここに留まっても何も解決しないわ。私は貴方達を除霊しに来た

のではないわ。助けに来たのよ」

「ソンナコト　シンジラレルカ」

霊達は抵抗した。蘭子お姉さんは、文字通り菩薩のような顔になり、

「オンアロキヤソワカ」

と唱えた。

後で調べて知った事だが、観音菩薩の真言だ。

あらゆる者に救いの手を差し伸べる観音様の力で、怨霊達は鎮まり、悪意は消滅して行った。

「お姉さん」

私は女の子達を開放して、蘭子お姉さんに駆け寄った。

「終わったわ。あの人達も救えた」

蘭子お姉さんはホッと溜息を吐き、私を見るとニコッと微笑んだ。

私も微笑み返した。

「ずっと気になっていたの。何とかならないかと思っていたの」

帰り道、蘭子お姉さんは、どうしてあの廃校に行ったのか話してくれた。

以前、除霊を依頼され、訪れた事があるのだそうだ。

その時はどうする事も出来ず、帰った。

そんな時、私という天才美少女霊能者を知ったとの事。

二人で力を合わせれば、何とかなると考えたのだそうだ。

「でも私なんかより、ずっと力がある人、たくさんいますよ。それなのにどうして？」

謙遜の意味も含めて、私は尋ねた。すると蘭子お姉さんは、

「小学生の貴女でなければ、彼女達は開放できないわ。いくら能力が高くても、大人では無理なの」

「そうなんですか」

難しい話になりそうだったので、私はわかったフリをした。

しばらくして、蘭子お姉さんの車は私の家の前に着いた。

「また声をかけてもいい？」

「もちろん。メアドと携帯の番号交換しましょう」

私が言うと、蘭子お姉さんは、

「まァ、小学生なのに、携帯持っているの？」

「当たり前だのクラッカーです」

お父さんが得意のギャグをかましたが、また受け流されてしまった。

「またね、まどかちゃん」

「はい、蘭子お姉さん」

真っ赤なスポーツカーは爆音を轟かせて走り去った。

その後、蘭子お姉さんをチラッと見かけたお兄ちゃんから、

「紹介しろ」

としつこく言われた。

その話はまたの機会という事で。

今日は疲れた。

もう寝よっと。

寒いギャグオヤジの霊を助けたのよ！

私の名前は箕輪まどか。

決してお笑い芸人ではない。

わざと間違えた男子には「お仕置きだべ～」とキツイお灸をすえた。

私の伯父さんは鍼灸師なのだ。だから本当のお灸をしてあげた。

え？　何で小学生のお前が「鍼灸師」なんていう難しい言葉知ってるのかですって？

当たり前じゃない、作者が年配の方なんだから。

あ、こんな事言わせないでよ。

この前「中年オババ」呼ばわりしたのがばれて、今日まで干されてたんだから。

やめてよね。

最近はライバルのメイドが目立ってるので、非常に不満な美少女なのだ。

前置きが長くなり過ぎたわ。

この前私は尊敬する霊能者である西園寺蘭子さんと共に悪霊退治で大活躍した。

あれ以来蘭子お姉さんからメールもないし、電話もかかって来ない。

もしかして、私が可愛過ぎるので一緒に仕事したくないのかしら？

蘭子お姉さんたら、案外気が小さいのね。

なんて下らない妄想はこのくらいにしてと。

実は県警の鑑識課に所属しているお兄ちゃんからまた霊視の依頼が来た。

警察には恩を売っておきたいのだが、どうも全部手柄をお兄ちゃんに横取りされているらしいのだ。

課長さんに私の携帯の番号教えたのに連絡が来ない。

必ずお兄ちゃん経由だ。

これは中間搾取だ。使い方が正しいかどうかはこの際気にしないでと。

「おい、何ブツブツ独り言言ってるんだ、かまど」

かまど？　誰だ、私の一番嫌いなあだ名を言った奴は！？

私が鬼の形相で声のした方を見ると、そこには見慣れた顔が。

「何だ、お兄ちゃんか。やめてよね、かまどって呼ぶの」

私は口をタコのように尖らせて言った。するとお兄ちゃんは、

「お前がいくら呼んでも返事しないからだよ。現場に着いたぞ」

あ、そうか。警察の車で殺人現場に向かっている途中だった。

私は妄想が始まると、雷が鳴るまで止まらないのだ。

「ほら、早くして。みんな待ってるんだから」

「わかったわよ、中間搾取さん」

「は？」

私の精一杯の皮肉も通じない。

お兄ちゃんは妹の私が言うと「変な関係か？」と疑惑を持たれるのであまり言いたくないのだが、県警一のイケメン警察官だ。

映画の主役もできるくらいカッコいいのである。

でも「妹萌え」ではなく、今は「蘭子さんの携帯番号が何よりも知りたい」エロ鑑識課員だ。

ま、私がこれだけの美少女なのだから、お兄ちゃんがイケメンなのも当たり前だのクラッカーだ。

う、さぶっ……。

現場は県境に近い山奥。

一体何時間車に揺られて来た事か。

そのせいで妄想タイムが長引いて現実世界に戻るのが遅れてしまった。

あ。

早速来た。何だ、この感覚は？

「どうしたの、まどかちゃん？」

と声をかけてくれたのは、鑑識課の紅一点である里見まゆ子さん。奇麗なお姉さんだ。蘭子お姉さんに比べると、ちょっと地味だけどね。仕方ないか、服装が地味だから。

「います。ずっと叫んでる人が」

「聞こえるの？」

まゆ子さんには霊感は全くない。私と反対で死体は怖くないが霊は怖いようだ。

しきりに周囲を見渡している。

でも私には声が聞こえるだけで、姿は見えていない。

どういう事だろう？

「まどか、どうした？」

お兄ちゃんも私の異変に気づいた。

「声は聞こえるんだけど、姿が見えないわ」

お父さんがいなくて良かった。こんな事を言えば、間違いなく、

「まるでお前は屁のような……」

そうそう、そんな事を聞かされてたはずって、今誰か言った？

誰も言ってない。

そうか、霊が言ったのか。昭和ギャグ好きの霊？

「貴方はどこにいるの、寒いギャグ好きの方？」

「失礼な。私はギャグ好きだが、寒くはないぞ」

霊の声が答えた。

今回の霊視は、山の斜面を滑落して亡くなった人の遺体の捜索な

のだ。

でも妙だ。

もし死んでいるのなら、肉体を離れてここまで来られるはず。

「どうして声だけなの？　貴方はどこにいるの？」

「私はここだ。ここにいる」

霊はそう答えるだけで、どこにいるのかわからない。

「どうして？　何でよ？」

私は危険をものともせず、崖っぷちに近づいた。

「この辺から落ちたらしいわ」

「ああ。そこまでは現場検証で判明してる。でも、遺体の位置が全く特定できないんだ」

お兄ちゃんが説明してくれた。

確かに崖下は鬱蒼とした森が広がるばかりで、その下は見えない。

森は行く手を阻むように木々が生い茂り、ヘリコプターも近づけないし、下からも登れない。

唯一残された手段は、この崖からの捜索なのだ。

「わからないか、まどか。遺体がどこにあるのか？」
「わからない。どうしてなんだろう？　声は聞こえるのに……」
私はもう一度ギャグ好きの霊に声をかけた。
「ねえ、どこにいるの？　私にはわからない。教えて」
「私はここだ。嬢ちゃんのかわゆい顔が良く見える。もう少し前に出てくれれば、スカートの中が」
「おい！」
私はエロ親父の霊に覗き見されそうだったのか。慌てて下がった。
「私の顔が見える？　なのにどうして私からは見えないの？　どうしてエロ親父はここに来られないの？」
「私はエロ親父ではないぞ」
「そんな事はどうでもいいわ！　ねえ、貴方の周りに何かない？」
「何か？　木があるぞ」
「あんたは天然メイドか！？　そんな事を聞いているんじゃないわ。何か特別なモノがない？」
「特別なもの？」
しばらくエロ親父からの声が聞こえなくなった。探しているのか？

「ねえ、どうしたの？」

私は堪りかねて尋ねた。

「あったぞ。お札だ。私の周りを取り囲むようにお札がある」

「そういう事だったのね。オジさん、今助けてあげるわ」

私は帝釈天の印を結んだ。

「インダラヤソワカ」

真言と共に落雷が起こり、次の瞬間、エロ親父の霊が森から飛び出して来た。

どうよ、私の実力。ホントは蘭子お姉さんに教えてもらったんだけどね。

「嬢ちゃん！」

エロ親父は私に抱きつこうとしたようだが、すり抜けてしまった。

よかった、相手が霊で。

こうしてエロ親父の霊は開放され、遺体の位置も把握できた。

そしてさらに凄い事がわかった。

親父は殺されたのだという。

しかも奥さんに。

エロが原因かと思ったら、財産目当てだそうだ。

奥さんが若い愛人と殺害を計画し、崖から突き落としたのだそうだ。

そしてお札で結界を作り、遺体を発見できないようにしたらしい。

「そいつらがお札を貼ったのか？」

お兄ちゃんが尋ねた。

「違うわ。あれは明らかに呪術を知っている者の仕業。素人の仕事じゃないわね」

私はカッコ良く決めた。

但し、私の手に負える相手じゃない。

蘭子お姉さんに助けてもらわないと。

何かヤバイ感じがする。

作者の意地悪だろうか？

そんな力ないな、あいつには。

とにかく、大変な事になりそうな予感。

エロ兄貴が蘭子お姉さんを騙したのよ！

私は西園寺蘭子。霊能者。

先日、廃校になった小学校の事件で知り合った箕輪まどかちゃんという小学生の女の子がいます。

彼女も霊能者で、年齢の割には相当な力を持っています。

そのまどかちゃんから、メールが届きました。

あれ以来全然連絡がなかったので、嫌われたかなと思っていたのですが。

少しだけホッとしたのも束の間、内容に驚きました。

ある山で殺人事件があり、その遺体を結界で見つからないようにした術者がいると。

殺人事件は無事解決したらしいのですが、その術者の正体は依頼した犯人も知らないとの事。

殺害現場で知り合い、話を持ちかけられたようです。

詳しい話をしたいので直接会いたいと書かれていました。

私は早速まどかちゃんの住むG県に向かいました。

「確かこの辺だったような……」

私はまどかちゃんの気を探りながら車をゆっくりと進めました。

霊感は鋭いつもりですが、方向音痴なので。

「あ」

私は見覚えのある家の前に着きました。そして、見覚えのある男性が手を振っているのに気づきました。確か、まどかちゃんのお兄さんです。

「お待ちしてました。私はまどかの兄の慶一郎です。よろしく」

お兄さんは私が何も言っていないのにそう挨拶しました。私は車を降りて、

「よろしくお願いします、西園寺蘭子です」

とお辞儀をしました。

「お顔も素敵ですが、お名前も素敵ですね、蘭子さん」

お兄さんは妙に顔を近づけて言いました。

「あ、ありがとうございます」

私は同世代の男性とこんな至近距離で話した事がないので、ドキドキしてしまいました。

それにお兄さんは所謂イケメンで、相当モテる方のように見えました。

女性の生霊がたくさん憑いているのです。

まどかちゃんには見えないのかしら？

「では、参りましょうか」

お兄さんはさっさと助手席のドアを開いて乗り込んでしまいました。

「あの、まどかちゃんは？」

私も慌てて運転席に乗り込みました。するとお兄さんは、

「妹には危険なので、今回は私が同行いたします」

「そうですか。それで、詳しいお話は？」

「現場に向かいながらしましょう。結構遠いのですよ」

「はい……」

マイペースなところはよく似ている兄妹のようです。

お兄さんの話では、結界に使われたお札は陰陽道系だそうです。

ちょっと厄介かも。

「それで、お兄さんは霊感は？」

私は気になっていたことを尋ねました。

「お兄さんだなんて他人行儀ですよ、蘭子さん。慶君と呼んでください」

「はあ」

私は帰りたくなって来ました。でもそうもいきません。お兄さんは前髪を掻き揚げてから、

「残念ながら霊感はからっきしです。見えない、聞こえないです」

「……」

この人は何のために同行しているのだろう？　麗華だったら叩き出してるかも。

「危険ですよ、お兄さん」

「慶君でお願いします」

「では、慶君」

私は恥ずかしいのを我慢して言いました。「慶君」は嬉しそうです。

「大丈夫です。貴女と死ねるのなら本望です」

いえ、私は死にませんから。そう言いたいのをグッと堪えました。

「それから、妹が言うには、かなり大きな組織だと」

「大きな組織？」

「宗教臭がしたそうです」

私は目を見張った。まさか？

別件で八木麗華と追っている悪質な霊感商法をしている宗教法人があるのです。

そこの祭神は「安倍晴明」。ムチャクチャやな、と麗華は言っていました。

「そうですか。もしかすると……」

私は考え込みました。麗華も呼ばないと。攻撃力は彼女の方が上だから。

「後編に続くですか？」

「はい？」

お兄さんの突拍子もない発言に私はキョトンとしてしまいました。

蘭子お姉さん大活躍よ！　私は出ていないけど（泣）

私は霊能者の西園寺蘭子。

箕輪まどかちゃんのお兄さんである慶一郎さんと共にある殺人事件の現場に向かっています。

慶一郎さんの話によると、その事件に陰陽道が関わっているらしいのです。

私は急遽親友八木麗華に連絡を取り、こちらに来てくれるように頼みました。

「すぐ行くで。それまで死ぬんやないで」

麗華からの返事はそれでした。

私と麗華が追っている宗教法人を隠れ蓑にした霊感商法と、今回の事件が繋がろうとしていました。

「ここです」

私は慶一郎さんの案内で、崖の近くに到着しました。

「お札はそのままなんですね？」

「ええ。妹が触らないでと指示していましたので。そのままの形で

残っています」

慶一郎さんは何故か片時も私から視線を外さずに言いました。

「わかりました。ちょっと確認します」

「は？」

慶一郎さんが唖然とするのを横目に、私は崖を飛び降りました。

「危ないですよ！」

ついて来ようとする慶一郎さんに声をかけ、私は下に降り立ちました。

慶一郎さんは完全に固まっています。

その方が静かで仕事がやり易くて助かりますが。

「ここね」

私は陰陽道の波動を探り、すぐにそのお札を見つけ出しました。

「何をするつもりだ？」

突然男の声がしました。

「どこ？」

私は身構えて周囲を見回します。でも誰もいません。

「もしかして？」

私はお札に近づきました。どうやらそのお札を媒体にして、何者かが声を発したようです。

「貴方は誰？」

私はお札に話しかけました。

「私は陰陽師の安倍利明（あべりめい）。安倍晴明（あべのせいめい）が末裔」

「嘘をつかないで下さい。晴明の末裔が、殺人事件の片棒を担いだりする訳がありません」

私が強い調子で言い返すと、

「理屈だな。確かに私は陰陽師ではあるが、晴明の子孫ではない」

「あっさり認めるのね」

私はちょっと拍子抜けしました。

「ああ、認めるさ。もうすぐ死ぬお前に何を話しても何の支障もない」

「何ですって？」

周囲がざわつき始めました。

「何？」

私は強烈な霊気を感じました。何かが近づいて来ます。

「お前は私の資金源を潰そうとしている。だから殺す」

「もしかして、ここでこんな子供じみた仕掛けをしたのも、私と麗華を誘い出すための罠？」

「今頃気づいたか。あんな小便臭いガキが来るとは思わなかったが、お前達に繋がってくれてホッとしている。計画は成功した」

「酷い事を言うわね。まどかちゃんを侮辱するのは許せないわ。彼女は私の友達なのよ」

私は数珠を取り出して言いました。

「ならば後であのガキも始末するさ。お前の仇を討ちに来るだろうからな」

「私の仇を討ちに来る事はないわ」

私は数珠を振り上げてから印を結びました。

「何故だ？　友達ではないのか、そのガキは？」

「私は貴方達に負けたりしないから、仇を討ってもらう必要がないのよ」

「それはどうかな？」

私の背後に悪意に満ちた霊気が迫りました。

「式神？」

陰陽師が操る物の怪（け）です。神などとは程遠い存在です。

「グオオオッ！」

黒い塊が襲いかかって来ます。私は数珠を手首にかけ、印を結びました。

「オンマリシエイソワカ」

摩利支天（まりしてん）の真言です。あらゆる邪を防ぐものです。

「グオオオン！」

黒い塊は私に近づく事ができず、空へと上がりました。

「やるな。しかし、その程度では防ぎ切れんぞ」

もう一度黒い塊が私に接近して来ました。

「えっ？」

数が増えています。

「きゃっ！」

私はその中の一つを防ぎ切れず、数珠を切られてしまいました。

「くっ……」

「次で終わりだ、女！」

私は再び襲いかかって来る黒の集団を見て、終わったと思いました。

「諦めるんやない、蘭子ォッ！」

麗華の声が轟きます。

まさか？　こんなに早く？

「ナウマクサマンダバザラダンカン」

不動明王の真言が響き、黒の集団は全て燃え尽きてしまいました。

「そこや！」

麗華は私のすぐそばに降り立ちました。

彼女は不動明王真言で、お札を全て炎に包み、焼き尽くしました。

「くそう、相棒が来ていたのかァッ！」

「逃がさへんで、偽陰陽師！　ここで退治したる！」

麗華は別の印を結びました。私はギョッとして、

「麗華、それはいけない！」

と止めましたが、

「関係ないわい！」

麗華は私の制止を振り切り、真言を唱えました。

「オンマカキャラヤソワカ！」

それは大黒天（だいこくてん）の真言です。あまりにも強力な真言なので、余程の事がない限り慎むべき秘法なのです。

「バ、バカなーっ！」

お札の向こうにいる安倍利明にその真言が到達したようです。辺りに漂っていた利明の気配がかき消され、結界も消失しました。

「ざまあ見さらせ！」

麗華は得意の絶頂で言い放ちました。

こうして、宗教法人の事件と、まどかちゃんに頼まれた事件の二つが一気に解決しました。

麗華は私がまどかちゃんのところに向かったのを知り、すぐに後を追ったのだそうです。

そして私の気を辿りながら毘沙門天（びしゃもんてん）の真言で高速移動をし、現場に到着しました。

「どや、ウチのフットワーク。大したもんやろ？」

麗華は私の車の助手席で大威張りです。

「はいはい。さすが麗華ね。ありがとう」

私はお座なりに礼を言いました。麗華はそれが気に入らないらしく、

「それが命を助けてくれた人に対する態度かいな？　ホンマに蘭子は、礼儀っちゅうもんを知らんで困るわ」

「……」

麗華にだけは礼儀の事で説教されたくありません。

「いやァ、今日はついてるなァ。こんな美人お二人と一緒にドライブできるなんて」

後部座席で、一体何のために現場に行ったのかわからない慶一郎さんが言いました。

「そやろ？　嬉しいやろ、兄（にい）ちゃん。ウチらは最強の美人霊能者やからな」

麗華はますます調子に乗って来ました。ガハハと笑う麗華と一緒

にされたくはないです。

「そや、今回の退魔料の五千万円、県警に請求すればええんかな、兄ちゃん？」

麗華は真顔で慶一郎さんに言いました。

「は？」

仰天する慶一郎さん。

「麗華、それ、恐喝罪になるわよ」

私がたしなめると、

「冗談や、冗談。今日はオマケにしたる」

「そ、そうですか、良かった」

慶一郎さんはそれでも顔を引きつらせていました。私は苦笑いするしかありません。

しばらくして車はまどかちゃんの家の前に着きました。

「今日は楽しかったです。また今度ドライブしましょう、蘭子さん、麗華さん」

全く懲りていない慶一郎さんが笑顔で言いました。

「兄ちゃん、ええ男やから、ウチの彼氏にしたるわ。今度デートしよか？」

麗華が何か裏がありそうな顔で言うと、慶一郎さんは、

「はい、喜んで」

と何も考えていないような顔で答えました。

本当に知りませんよ、慶一郎さん。麗華はもの凄くお金がかかる子なんですからね。

「それじゃ」

私達はG県を後にして、東京へと走り出しました。

「麗華、本当にありがとう。嬉しかったわ」

私が真剣な顔でそう言うと、麗華は何故か顔を赤らめて、

「や、やめんかい、蘭子。あんたにそない言われると、恥ずかしいわ」

「フフフ」

私はそんな麗華を可愛いと思います。でも、お金への執着心だけは何とかして欲しいと思っています。

ではまた。

今日は里見まゆ子さんと遊園地よ！

私は箕輪まどか。小学六年生。霊感少女と呼ばれている。

本当は「アラフォー」ではないかと噂されるほど耳年増な美少女である。

耳年増の使い方が間違っているとかの非難は受け付けないので悪しからず。

この前、悪知恵の働くお兄ちゃんのせいで、蘭子さんと会えなかった私。

あのエロ兄貴、いつか仕返ししてやる。

そうだ、同僚のまゆ子さんに言いつけてやろう。

彼女はお兄ちゃんに「ほの字」なのだ。

え？　今時そんな古い言い回し使わない？

悪かったわね、お父さんに教わったのよ。

まゆ子さん、お兄ちゃんと一緒に仕事がしたくて鑑識を希望したらしいの。

私はまゆ子さんを応援したい。

その理由。それをこれから話しちゃおうと思う。

私はお兄ちゃんに騙されて、その日遊園地に行った。

その日はG県民の日で、学校が休みだった。

蘭子さんが来て欲しいと連絡をよこしたと言われたのだ。

本当なら疑うべきなのだが、一日無料券をもらったので、あのケチなお兄ちゃんの罠だとは夢にも思わなかったのだ。

後で考えてみると、甘かった。

あのエロ兄貴は、エロのためならカネに糸目をつけない性格なのだ。

蘭子さんと二人で出かけるためなら、遊園地の只券くらいいくらでも買うだろう。

遊園地に行くと、入口のところにまゆ子さんがいた。

「あれ、まゆ子さん。どうしたんですか？」

私は本当に偶然会ったのだと思い、不思議に思って尋ねた。

「あ、ま、まどかちゃん。ぐ、偶然ね」

その仕草の不自然さから、私はすぐに「はめられた」と悟った。

「お兄ちゃんですか？」

「え？」

健気にとぼけるまゆ子さん。いじらしい。

「お兄ちゃんに頼まれたんですか？」

「……」

困った顔で黙り込んでしまうまゆ子さん。

私はまゆ子さんがお兄ちゃんの頼みを断れないのを知っていたので、無性に腹が立った。

「ごめんなさい、まどかちゃん」

まゆ子さんは頭を下げて言った。私はビックリして、

「まゆ子さんが悪いわけじゃないですから。悪いのはあのエロ兄貴です」

「え？」

あ。

もしかすると、まゆ子さんはエロ兄貴が蘭子さんと出かけようとしている事を知らないのかな？

知ったらショックだろうから、言うのやめよう。

「と、とにかくこんなところで会ったのも何かの縁だから、一緒に楽しみましょ、まどかちゃん」

尚もエロ兄貴が主犯だと認めないホントに健気なまゆ子さん。

涙が出ちゃう。女の子だもん。

古いとか言わないでよね。

そんなわけで、私とまゆ子さんはその日一日、遊園地を満喫した。

ジェットコースターは平気なのに、お化け屋敷では小学生の私の陰に隠れてしまうまゆ子さんは最高だった。

「楽しかったわ、まどかちゃん」

まゆ子さんは素敵な笑顔で言った。

私はほんの少しいたずら心が働いて、

「まゆ子さんがお姉さんだったらいいのに」

と言ってみた。するとまゆ子さんは真っ赤になって、

「え、やだ、何言うのよ、まどかちゃん、そんな、お姉さんだなんて、困るわ、いきなり……」

予想以上の動揺に悪い事をしたと思った。

でもお姉さんになって欲しいと思ったのは本当だよ。

ただ、あのエロ兄貴の奥さんだと、苦労が絶えないかもね。

それだけが心配。

運命の出会いよ！　イケメン転校生よ！

私は箕輪まどか。

小学校六年生にして、優れた霊能力を持ち合わせた上、超が付くくらいの美少女である。

そして、くどいようだけど、決してお笑い芸人ではない。

もちろん、死神でもない。

但し、私の事を「かまど」と呼ぶ奴に対してはある意味「死神」に近い存在にはなる。

エロ兄貴の罠にはまって、エロ兄貴に「ほの字」の里見まゆ子さんと遊園地を満喫してから数日後の事だ。

私のクラスに転校生がやって来た。

テレビの学園ドラマとかだと、私のような美少女とか、超イケメンとかが転校して来る。

でも、現実の世界ではそんな事は普通あり得ない。

そう、あり得ないのだ。

ところが、私の通う小学校は、どうやら普通の小学校ではないら

しい。

転校して来たのは、まさしく超イケメンだったのだ。

「僕の名前は白鳥慎之介です。趣味は乗馬で、特技は……」

何という事だろう。これこそが運命の出会い。

白鳥君に比べれば、以前もしかすると付き合っていたかも知れないような気がする牧野君はゴミ。

遂に私と釣り合いの取れる男子が現れたのだ。

白鳥君の登場で、クラスの女子全員が色めき立ち、アホな男共全員がメラメラと無駄なヤキモチの炎を燃え上がらせた。

白鳥君は、私の読み通り、隣の席に着いた。

そこが空いていたからではない。

運命だからだ。

そこ、妄想とか言わない！

白鳥君は、他の女子には決して見せないような笑顔で私に語りかけた。

「よろしくね」

私はごく冷静に対応した。

「こ、こ、こちらこそよろすく」

どうよ、この完璧な返し。

……。

わかってるわよ、しくじったのは！

うん？

うそ。そんな、まさか。

見えてしまった。

こんな時だけは、私は自分の優れた能力を怨んでしまう。

白鳥君の背後に、薄汚い格好のジジイの霊が見えたのだ。

何でこんな汚いジジイが白鳥君に取り憑いてるのよ？

私は尊敬する霊能者である蘭子お姉さんに教わった方法で、そのジジイの霊に語りかけた。手っ取り早く言ってしまえば、「テレパシー」って奴ね。

『貴方は誰？　何故白鳥君に取り憑いているの？』

すると霊はとんでもない事を言った。

『私は慎之介の祖父だ』

そふ？　そーふ？　ああ、おじいちゃん？　ええ？

何でよ？　何で白鳥君のおじいちゃんがこんな薄汚いジジイなのよ？

『娘よ、心の声は皆聞こえている。人の悪口はもっと小さい声で言え』

あらま、それは失礼しました。

『何で白鳥君のそばにいるのよ？　どっか行きなさいよ』

『慎之介に悪い女が近づかないように見張っているのだ』

『悪い女？　大丈夫よ、それなら私が代わりに白鳥君を守るから』

『お前が一番危ない』

「何ですって！？」

つい、声に出してしまった。白鳥君は唖然としている。

先生はカンカン。

私は顔真っ赤。

『もう、恥かいたじゃないのよ。私は悪い女じゃないわ。貴方の味方よ。どうしてそばについていないといけないのか、理由（わけ）を教えてよ』

『わかった』

白鳥君のおじいちゃんは、どうして白鳥君のそばにいるのか話してくれた。

白鳥家は代々霊感が強い家系で、おじいちゃんは霊能者だったそうだ。

しかし、白鳥君のお父さんは全く霊感がなく、霊の存在も信じない人らしい。

で、白鳥君には霊感がある。

但し、彼は私や蘭子お姉さんと違い、自分の力をわかっていないという。

それはとても危険なのだと。

確かに。私も霊感が強い事を知る前には、とにかく只怖いだけだったし。

『心配しないで、私が彼を守るわ。こう見えても、免許皆伝の霊能者なのよ』

『どんな免許皆伝だ。大体、免許皆伝の意味をわかって言っておるのか？』

さすがにジジイは年の功で、変なところで詳しかったりする。

『まあ、お前の能力が高い事はわかった。では任せる。音を上げるなよ』

おじいちゃんはそう言って消えた。

この私を見くびらないでもらいたい。

お兄ちゃんお得意のゼータガン〇ムの中の誰かのセリフを真似てみた。

ところが……。

私は一時間もしないうちに音を上げそうになった。

おじいちゃんがいなくなった途端、クラスの女子達の生き霊が集まり始めたのだ。

そうか、白鳥君て、女の霊を呼び込む体質なのか。

しかも生きていようと死んでいようと関係ないのだ。

『それなら！』

私は蘭子お姉さん直伝の真言を念じた。確か、摩利支天（まりしてん）の真言だ。

『オンマリシエイソワカ』

するとたちまちバカな女子達の生き霊は白鳥君から離れた。

さっすが蘭子お姉さん！　さっすが私！

などと見えないところで奮闘しているうちに、授業は終わった。

「箕輪さん」

えっ？　早速白鳥君が話しかけて来た。

「な、何？」

私は必要以上に瞬きを素早くしている自分に気づいた。

「ちょっといいかな？」

「は、はい」

白鳥君は教室を出て、私を人気のない廊下の端に連れて行った。

何、何？　何が起こるの？

私はドキドキしていた。

白鳥君はその吸い込まれそうなくらい美しい瞳で私を見つめ、言った。

「箕輪さんて、悪霊に取り憑かれているよ」

何ーっ！？　自覚あるんじゃん！　霊、見えてるんじゃん！

「でも大丈夫。僕が守ってあげるから」

「……」

私はそのまま倒れそうになった。でも、倒れると我慢してるおしっこを漏らしそうなので、何とか堪えた。

「これからもよろしくね、霊感少女さん」

白鳥君はどこか怖い眼でそう言って教室に戻って行った。

彼、完全に信用していいのかな？

不安な美少女まどかだった。

イケメン転校生は吸血鬼とお知り合い？

私は箕輪まどか。

もう、いい加減わかってもらえたと思うけど、お笑い芸人とは関係ない。

ちなみに私のお兄ちゃんは超イケメンだが、超エロ兄貴で、実は隠したい家族の筆頭なのだ。

何故、エロ兄貴の話が出て来たのかと言うと……。

その日は日曜日。昨日遊び過ぎた私は、お昼近くまで惰眠を貪っていた。この使い方で正しいのかな？

「まどか、起きてるか？　彼氏が迎えに来たぞ」

エロ兄貴は何度言っても私の部屋にノックもせずに入って来る。

「お兄ちゃん、いい加減にしてよね！　私が着替え中だったらどうするのよ！」

「嘔吐するぜ」

エロ兄貴がバカ兄貴に転職した瞬間だ。私はお兄ちゃんを部屋から追い出して、

「彼って誰よ？　牧野君はもう彼じゃないわよ」

「牧野君じゃないぞ。あいつより、数段イケメンだ。それでも俺には敵わないが」

エロ兄貴のバカ話はさて置き、牧野君より数段イケメンと言えば、あの子しかいない！

私は猛スピードで着替えをすませ、階段を駆け下りて玄関に向かった。

玄関のドアを開くと、そこには彼が立っていた。

白鳥慎之介君。

私の運命の人。

そう思ったのは、初めて会ったあの日だけ。

彼の心の奥底に潜む何か得体の知れない物を感じて以来、できるだけ話をしないようにしていた程だ。

「やあ、箕輪さん。相変わらず可愛いね」

そんな言葉に騙されはしない。

「えへへェ、白鳥君たら、お世辞がうまいんだから」

すっかり騙されモードの私。口からよだれが垂れそうなほど、顔がニヤついてしまっている。

「時間ある？」

「うん、あるある。どうしようもなくあるゥ」

もう自分で話しているとは思えない状態だ。

「じゃ、出かけようか。支度はできてる？」

「いつでもＯＫよん」

私は自分でも恥ずかしくなるくらい白鳥君のとりこになっていた。

「さ、乗って」

彼の家のリムジンに乗り込む。

「行こうか」

「はい」

私は夢見る乙女のような顔で白鳥君を見つめた。

リムジンは走り出した。地獄へと向かって。

いつの間にか、私は眠っていた。

「君の血が必要なんだ。僕の伯父さんを救うためにね」

白鳥君がそんなことを言ったのを耳にした気がする。

次に私が目を覚ましたのは、地下室のような所だった。

部屋には窓がなく、裸電球が一つぶら下がり、私を照らしていた。

私は台の上に縛りつけられている。

「どういうこと？」

周りを見渡しても、誰もいない。

「気がついたかい、僕のプリンセス？」

どこからか、白鳥君の声がした。

「何のマネよ、白鳥君？　私をどうするつもり？」

私は何かとてもいやらしい事をされる気がして、怖かった。

「君には、僕の伯父さんを助けるための生贄（いけにえ）になって欲しいんだ」

「はあ？」

何を言ってるの、白鳥君？　私に「死ね」と言うの？

「あ！」

部屋のドアが開き、白鳥君と妙なオヤジが入って来た。

非常に顔色が悪いオヤジだ。貧血だろうか？

「伯父さんを紹介するよ」

「初めまして」

そのオヤジは風貌に似合わず礼儀正しかった。でも、キモい。

「伯父さんは吸血鬼になってしまったんだ。だから、処女の生き血が必要なのさ」

白鳥君はイケメンの顔をどこかに置いて来たような凶悪な形相で私を見た。

処女の生き血？　マジヤバいじゃない！　おまけに私、美少女だし！

『娘、手助けするぞ』

不意に白鳥君のおじいちゃんが私のそばに現れた。

『あ、おじいちゃん！』

『慎之介は本当は霊は見えんのだ。力はあるのだが、バカな伯父のせいで、おかしな事に興味を持ってしまってな』

『おかしな事？』

『女の子の裸じゃよ』

それは健康な小学生男子なら、全員興味津々です、おじいちゃん。

ちょっと待て。という事は、やっぱり私は服を脱がされるって事？

それは嫌！　絶対嫌！

『奴らの隙を突く。何か連中が怯むような事を言ってくれ』

『怯むようなことって……』

何があるの？　私は考えた。今、こいつらに一番の打撃は？

あ！　これが一番効くはず！

「残念ね、私はもう、牧野君とすませてるのよ！」

「何ーっ！？」

我ながらトンデモ発言だったが、確かに二人は怯んだ。

その隙におじいちゃんが私を縛っている縄を解いてくれた。

「な、何だ？」

白鳥君はビビリまくって後ずさりした。

キモいオヤジは、私の血が吸えない事を知って落ち込んでいる。

「お仕置きよ！　インダラヤソワカ！」

私は二人に雷撃を放った。

「グゲーッ！」

白鳥君とキモいオヤジは痙攣した。

「ち、畜生、このままですむと思うなよ」

白鳥君はそう言いながらオヤジと重なり合うようにして倒れた。

私は地下室を脱出し、お兄ちゃんに連絡をとった。

オヤジは警察に連行され、白鳥君は迎えに来たご両親に叱られ、帰って行った。

『ありがとう、娘。これで慎之介もまともになるだろう』

「そうかな？」

ま、イケメンなんだから、まともになってくれた方が、日本の将来のためだとは思うけどね。

ところが。

前言を撤回するような事が、翌日待っていた。

「箕輪まどかは牧野徹とデキている」

そんな怪文書が、学校の掲示板に張られていたのだ。

白鳥ーッ！

悔しがっても、彼はすでに転校した後だった。

必ず探し出して、シバき倒してやるから！

その後、私は牧野君とよりを戻した。

めでたいの、これって？

関西の悪霊がやって来た！

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、浄霊、お祓いなど、いろいろお受けしています。

また、依頼を受けました。今度は箕輪まどかちゃんのお兄さんである慶一郎さんからです。

悪い霊に取り憑かれて困っているそうです。それなら、まどかちゃんに頼めばいいと思うのですが。

あまり熱心にお願いされたので、私は仕方なく承諾し、まどかちゃんの家に向かいました。

携帯の番号、変えようかしら？　真剣に悩みました。

「あら？」

高速に乗った時、友人の八木麗華からメールが入りました。

私は、サービスエリアに立ち寄り、それを読んでみました。

麗華は、私が慶一郎さんとデートするのだと思い、怒りのメールを送って来たのです。

「こら、蘭子！　慶君はウチの彼氏や！　手ェ出さんといてんか？」

怒りの余り、文章まで関西弁で、ドスを効かせています。

私はすぐに仕事で行く事を返信しました。

ところが疑い深い麗華は、

「ウチも行くさかい、サービスエリアで待っといて」

と返して来ました。

言い出したら聞かない麗華です。もう待つしかありません。

麗華のことですから、毘沙門天（びしゃもんてん）の真言ですぐ来るでしょうけど。

思った通り、麗華は真言で高速移動し、十分後に来ました。

「麗華、人がたくさん集まる場所に空から降りて来ないでよ」

私がそう窘（たしな）めると、麗華は大きな口を開けて笑い、

「大丈夫や、蘭子。みんな、パフォーマンスや思うとるから」

「もう……」

どこまでも麗華は楽天主義者です。

「それにしても早かったわね。東京にいたの？」

「そうや。慶君と昨日デートして、ホテルに泊まった」

「え？」

私は思わずいけないことを想像してしまいました。すると麗華が、

「アホ、変な事想像するな！　ウチはそないに軽い女やないわい」

「そう？」

お金のためなら何でもしそうな麗華の言葉とは思えません。

「一緒に泊まった訳やない。ウチだけや。蘭子も嫉妬からそんな事想像するんか？」

「嫉妬？　誰が、誰に？」

「あんたが、ウチに」

「どうして？」

「ああ、もうええわ」

私は故意に気づかないフリをしました。実際、私は慶一郎さんに恋愛感情はありませんし。

と言うか、私は今まで恋愛感情を抱いた事がないかも知れません。悲しいですけど。

「ほな、行こか」

「ええ」

私達は関越道を疾走し、まどかちゃんの家があるG県に向かいました。

「蘭子さん、お待ちしていました……」

慶一郎さんがフリーズしてしまいました。何故なら、私の車の助手席から、麗華が現れたからです。

「よお、昨日は楽しかったで、慶君」

麗華は陽気に言いましたが、慶一郎さんはフリーズしたままです。

多分、彼の計画が崩壊したのでしょう。

「ああ、そうだ」

急に復旧した慶一郎さんは、家に戻ってまどかちゃんを連れて来ました。

「こいつが僕の妹のまどかです。よろしく」

麗華はまどかちゃんを見て、

「慶君と似とらんな。拾った子か？」

ととんでもない事を言い出します。するとまどかちゃんが、

「今日(こんにち)は、蘭子お姉さん。このオバさん、誰ですか？」

と強烈な返し。麗華はブルブル怒りで震え出し、

「お前なあ！　慶君の妹やから、今こうして生きていられるんやで！」

「オバさんこそ、蘭子お姉さんの友達だから、私も大人しくしてるのよ！」

凄い。性格が似ているとは思っていたけど、ここまで似ていて対立してしまうとは……。

「まあまあ、二人共」

私は間に入って取り成しました。まどかちゃんは私の顔を立ててくれて、引き下がりました。

麗華も私がキッと睨むと、肩を竦めて矛を納めました。

私はまどかちゃんを誘って庭の隅に行きました。

麗華は慶一郎さんと話しています。と言うより、麗華の独り言に近いですが。

「どうしたの、蘭子お姉さん？」

まどかちゃんは不思議そうな顔で尋ねて来ました。私は声を低くして、

「お兄さんに悪い霊が憑いているって言われて来たのだけど、もしかしてそれって麗華の事？」

「多分」

まどかちゃんは愉快そうです。

「金食い虫で困るって言ってましたよ」

「そうなの」

だから私が忠告したのに。でも、もう一人慶一郎さんに生霊が憑いてるのが見えます。

「あの女の人は？」

私はその生霊がとても慎み深い気を放っているので、気になりました。まどかちゃんはキョトンとして、

「え？　お兄ちゃんに生霊が憑いているんですか？」

ああ、そうか。まどかちゃんには見えないのか。多分、慶一郎さんが女性として意識している対象にしか、彼女は見えないのです。そういう事です。

「慶一郎さんの身近に、彼を好きな女性がいる？」

「いますよ。とってもいい人です」

まどかちゃんはその人に敵意はない。そして、彼女にもまどかち

ゃんに対するマイナスイメージはない。

「その人の事、慶一郎さんはどう思っているのかしら？」

「わかりません。同僚としか思っていないかも」

まどかちゃんは悲しそうです。私もその女性の悲しみの気を感じてしまいました。

「もう少し、応援してあげて、その人の事」

「はい。私もその人にお姉さんになってほしいから」

まどかちゃんの明るい気が、その女性の生霊に伝わりました。

（貴女はまどかちゃんに応援されています。大丈夫ですよ）

私はその女性の生霊に語り掛けました。その女性はニッコリして消えました。

解決したようです。長居は無用です。

「麗華、帰るわよ」

「ええ？」

「そんな、蘭子さん」

麗華と慶一郎さんが、ほぼ同時に言いました。

「麗華、置いていくわよ」
「わかった」
麗華は仕方なさそうに私の車に乗り込みました。
「蘭子さん、実はですね……」
慶一郎さんが小声で言いました。私はニッコリして、
「全部解決しましたよ、慶一郎さん。では」
と言うと、車に乗り込みました。まどかちゃんが駆け寄って来ます。
「私、一生懸命応援します、蘭子お姉さん」
「ええ。そうして。あの人は、本当にいい人だから」
「はい」
まどかちゃんは麗華を見て、
「また来てね、オバさん」
「こらあ！」
二人はそんな事を言い合いながらも、ニコッとしてVサインを出し合っています。
大丈夫みたいです。

一人大丈夫ではないのが慶一郎さんのようですが、この際無視します。

「蘭子」

麗華が高速に乗った時に言いました。

「何？」

「ありがとな」

「どうして？」

「ウチも霊能者やで。慶君に思い寄せとる女がおるくらい、感じるわ」

「そうなの」

「ウチにはいくらでも言い寄って来る男はおるからな。慶君くらい、譲ったるわ」

「偉いわ、麗華」

「何やそのバカにしたような言い方は？」

「そんな事ないわよ」

しばらく続く、「蘭子麗華」のボヤキ漫才でした。

奇怪な殺人事件が起こったのよ！

私は箕輪まどか。小学校六年生。美少女霊能者だ。

実は、あのエロ兄貴が最近帰って来ない。

心配している訳ではないが、忙しいらしい。

私のすむG県では、猟奇殺人事件が連続して起こっており、大騒ぎだ。

狙われているのは、小学生。

それも可愛い子ばかり。

「その点、お前は心配無用だ」

とエロ兄貴に言われた。

悔しいけど、全く狙われている様子がない。

私は霊視で捜査に協力しているが、残念な事に犠牲者の子達は皆犯人の顔を見ていない。

霊になってからも、その正体がわからないと言うのだ。

これは謎だった。

普通、いくら顔を隠そうとも、殺された人には犯人がわかる。

私が霊視して解決に導いた事件も数知れない。

今回は特殊だった。

もしかすると、犯人は霊能者かも知れない。

そうなると、解決は難しかった。

県警のおじさん達は現金で、私が霊視しても犯人がわからないと知るとたちまちお払い箱にされた。

お兄ちゃんは言いにくそうに私にその事を告げた。

「これからどうするのよ？　相手は霊能者かも知れないのよ」

「仕方ないよ。上の方針なんだから」

そしてエロ兄貴は言った。

「蘭子さんなら解決できるかも知れない」

酷い。一番酷い言葉だ。実の兄とは思えない。

でもそうかも知れない。蘭子お姉さんなら、犯人に迫れるかも。

「そうすれば、今度こそ蘭子さんと……」

エロ兄貴は、捜査の事ではなく、蘭子お姉さんとのアバンチュールを妄想しているだけだった。

私はこのままでは殺された子達に申し訳ないと思い、もう一度彼女達と話してみる事にした。

捜査は関係ない。

これは、人の命の問題なのだ。もちろん、私のプライドの問題でもあるが。

でも私は今井美樹のファンではない。

その夜、私は家の地下に造ってもらった祭壇に行き、殺された子の霊を呼び出した。

まずは、I第一小の桂香織ちゃん。私と同じ六年生だ。写真で見る限りでは、私に勝るとも劣らない美少女だ。

「犯人の顔がわからないのは何故なの？」

私は神妙な顔で尋ねた。この使い方であってるかな？

「顔がないの。だからわからないのよ」

「顔がない？　他に特徴はないの？」

「身長は二メートルくらいあったわ。凄く大きい人だった」

「二メートル？」

犯人は何者だ？　でか過ぎる。でも、これは参考になる。

「ありがとう。他になにか知ってる事はない？」

「あとは、須坂さんが何か知ってるって言ってたわ」

「須坂月美さん？」

その子は確か、T第三小の子だ。その子も私に迫るような美少女である。

早速須坂月美ちゃんを呼び出してみた。

「何か知ってる事があるの？」

私は月美ちゃんに尋ねた。彼女は長い髪を指にからませながら、

「その人ね、多分人じゃないわ」

「え？　人じゃない？」

「そう。何ていうかなあ、怨念？」

「おんねん？　関西弁？」

「違うわよ。恨みよ。人間の恨みが人の姿になったのかな」

月美ちゃんも、私には及ばないが、霊感があったらしい。

「そうでなければ、私は殺されたりしないわ。とにかく、いきなり現れたんだから」

だんだんわかって来た。相手が人でないとなると、お兄ちゃん達がいくら頑張っても無理だ。

「ありがとう。私が必ず犯人を捕まえるわ」

「頑張ってね、まどかちゃん」

私は地下室を出て、お父さんのパソコンルーム（別名エロビデオ鑑賞部屋）に行った。

まずは殺された子達に共通点がないか調べた。

さすがに私と同クラスの美少女達だ。

様々なコンテストや発表会に出て賞を取っている。

しかし、不思議と重なる子がいない。

共通点なし？　見当違いの事をしていたの？

ブラウザを閉じようとした時、私はある事に気づいた。

違う。共通する事があった。

私は危うく見落としそうだったのだ。

彼女達の共通点ではなく、参加者。

そう、彼女達が参加したコンテストや発表会にいつも名前があった子。

宮野　羊子（ようこ）。

どのコンテストでも、殺された子に負けて、準優勝だ。

私は寒気がした。もし、私の推理通りなら、とんでもない事件だから。

私はお兄ちゃんに連絡をとり、その事を話した。

お兄ちゃんもさすがに信じてくれない。あまりにも信じられない事だから。

私は決断した。そして、宮野さんのいるS村に行く事にした。

次の日。土曜にこんな憂鬱な事をしたくないが、香織ちゃんや月美ちゃんに約束したのだから、今更引き下がれない。

私は、バスを乗り継ぎ、S村に行った。

この前、蘭子お姉さんと行った村よりは開けているが、私が住んでいるM市よりはずっと田舎だ。

宮野さんの家は、地元では有名で、すぐにわかった。

「どちら様ですか？」

驚いた事に、メイドがいた。私はニッコリ笑って、

「箕輪まどかと言います。学校新聞の編集長をしていまして、羊子さんの取材をさせていただこうと思いまして」

「お待ち下さい」

断られるかと思ったが、以外にもすんなり家に入れてくれた。

とんでもないお金持ちのようだ。庭に池があり、錦鯉がたくさん泳いでいる。

「こちらへどうぞ」

私は応接間に通された。この部屋だけで私の部屋の三倍くらいある。

「ようこそ、箕輪さん」

羊子さんが現れた。確かに可愛い。もちろん、私の敵ではないが。

「学校新聞の取材だなんて、嘘をつかなくてもよろしくてよ」

「え？」

見抜かれてる。まずいかも。羊子さんはニッと笑って、

「貴女もお仲間に入れて差し上げましょうか？」

「何ですって！？」

彼女の背後に、巨大な影が現れた。どうやら殺人鬼の本体のようだ。

いや、本体は羊子さんか。

「やっておしまい」

羊子さんの顔が変わった。まるで鬼だ。影がスッと私に接近した。

「オンマリシエイソワカ！」

摩利支天（まりしてん）の真言で退ける。

「さすが、霊感少女ね」

「貴女は、自分の欲望を満たすためだけに、こんな事をしているの？」

「それの何が悪いのよ！」

羊子さんの怒りが増幅し、影が膨張した。

「全部悪いわよ！」

私は影を私の気で跳ね返した。そして、

「インダラヤソワカ！」

帝釈天の真言を唱え、影を滅した。

「きゃああ！」

羊子さんはその影響で倒れた。

その後、羊子さんからいろいろと話を聞いた。

彼女は霊感があるらしい。そして、最初は怖がらせるつもりで始めたのだという。

そのうちに彼女自身が自分の怨念に取り込まれ、逆に操られていたのだ。

真相を全て知り、彼女は泣き伏してしまった。

私はいたたまれなくなり、彼女の家を出た。

彼女は殺人を犯した。でも、罪には問えない。

それでも彼女は自分のした事を背負っていかなければならない。

どうしてこんな事に。

私は後味の悪さに、バカ作者りったんを恨んだ。

男子トイレに初めて入ったのよ！

私は箕輪まどか。

いつもいつも同じ自己紹介でうんざりだけど、美少女霊能者だ。

この前の変態転校生の事件がきっかけで、別れたはずの牧野君とまた付き合うようになって一週間。

彼はすっかり彼氏気取りで私に話しかける。

「み、箕輪さん、おはよう。今日も可愛いね」

え？　脅して言わせてるんだろうって？　そんな事してないわよ。

「ありがとう、マッキー。今日もかっこいいわよん」

「へへへ」

私が心にもないお世辞を言うと、牧野君はニヤニヤした。

そんなうわべだけラブラブな私達に声をかけて来た無礼者がいた。

「おい、箕輪。ちょっと来てくれよ」

そう言って私達の朝の楽しい会話を妨げたのは、クラス一の巨漢、力丸卓司（りきまるたくし）君だ。

多分、体重は私の四倍くらいある。

え？　だったら二百キロですって？　怒るわよ、本当に！

「何よ、リッキー。何の用？」

力丸君は美少女である私に見つめられて照れているようだ。

きっと声をかけるのも一大決心だったに違いない。

「と、とにかく来てくれよ」

彼は私のか細い腕を掴むと、教室から連れ出した。牧野君は呆然としてそれを只見ていた。

後で説教してあげないと！

「痛いから放してよ。どこに行くの？」

「トイレ」

「バカ、勝手に行きなさいよ！」

私は彼の手を振り払って怒鳴った。すると力丸君は泣きそうな顔で、

「頼むよ。トイレに幽霊が出るんだ。お前の力で、追い払ってくれよう」

と手を合わせて来た。私は仏様じゃないぞ！

「仕方ないわね」

幽霊と聞いては、美少女霊能者として見て見ぬフリはできない。

あ。

「ちょ、ちょ、でもそれって男子トイレでしょ？　嫌よ、そんなところに行くの」

私は花も恥らう乙女なのだ。何てとこに連れて行くつもりなのよ！

「大丈夫だよ、今は誰もいないから。それに幽霊の噂が広まって、みんな一階のトイレに行ってるし」

「だったら貴方もそうしなさいよ。はい、解決」

帰ろうとする私の服の襟首を力丸君が掴む。

「待ってくれよ。俺、しょんべんが近いから、一階までもたないんだ。頼むよ」

「紙おむつでも履きなさい！」

私はそれでも冷たく突き放した。力丸君は涙を流した。

ええええ？　ちょっと、まるで私がいじめてるみたいじゃない。

人が集まって来ちゃったわ。

「わ、わかったから、泣かないで」

「あ、ありがとう」

私はいやいやながら、男子トイレに足を踏み入れた。

おお。これが噂の「小便器」か。

あ、いやいや、そんな事はどうでもいい。

「どこよ？」

力丸君に尋ねる。彼はビビッて入って来られず、入口から顔だけ覗かせて、

「一番奥の個室だよ」

うわあ。定番ね。トイレの〇子さんか？

でもこのトイレ、どこからも霊の気配を感じないわ。

どういう事？　騙された？　でも力丸君の怯えよう、嘘とは思えない。

もしかして。

私は個室のドアを開き、中を調べた。

汚い。ちゃんと掃除してるのか、男子！　ま、幽霊にビビッてそれどころじゃないか。

顔を近づけるのが嫌だったが、ここしかないと思い、私は便器の下を覗いた。

あった。お札だ。これ、陰陽師が使う奴ね。

こいつで声を伝えて、男子をビビらせていた訳ね。

「インダラヤソワカ」

私は小さい雷撃でそのお札を燃やした。

これで幽霊騒ぎは一件落着。

「終わったわよ、力丸君」

「あ、ありがとう、箕輪。明日、家からコロッケいっぱい持って来るから」

「ははは、そう」

私は苦笑いした。彼の家、精肉店だったっけ。

また蘭子お姉さんに連絡しないと。あいつら、まだ懲りていないみたい。

でも、蘭子お姉さんを呼ぶと、エロ兄貴が私をはめるし、あの関西弁のおばさんもくっついて来るし。

うまい手立てを考えないとね。

やっぱり私が最強なのよ！

私は西園寺蘭子。霊能者です。

以前、ある事件で仲良くなった（と私は思っているのですが）箕輪まどかちゃんからメールがありました。

前にお仕置きをして鳴りをひそめてた陰陽道の人達が、再び動き出したらしいのです。

しかも今回はまどかちゃんの小学校にお札を貼り、生徒を怖がらせていたのだとか。

この前、私の親友である八木麗華にコテンパンにやられたはずなのに、懲りていないようです。

まどかちゃんは小学校で落ち合いましょうと書いていました。

私も彼女のお兄さんは苦手なので、その方がいいと思い、承諾しました。

まどかちゃんのメールには、追伸として、

「あの関西弁のおばさんには連絡しないで下さい」

と書かれていました。

それは無理でした。そのメールを開いた時、麗華は私の後ろでしっかりそれを読んでしまいましたので。

ああ。憂鬱です。

私と麗華がまどかちゃんの小学校に着いたのは、ちょうど授業が終わる頃でした。

「やっぱ田舎だけあって、辛気臭いのう、建物が。生徒のレベルに合わせとるんかな？」

麗華は大口を開けて笑いながら酷い事を言います。

「げ」

まどかちゃんは私の車に気づいて駆けて来たのですが、麗華に気づいて立ち止まりました。

そして恨めしそうな顔で私を見ました。

「ごめん、まどかちゃん。メールを開いた時、麗華もそばにいたのよ」

「そうですか」

まどかちゃんは怒ってはいないが、がっかりしているようです。

「おい、子供、ようもウチの事、関西のおばはん呼ばわりしてくれたな」

麗華が早速噛み付きました。しかしまどかちゃんも負けてません。
「あーら、それなら、関西の金食い虫の方が良かったですか？」
「むむむ……」
麗華も心当たりがあるのか、何も言い返せません。
「お兄ちゃんは今月金欠なので、デートできないそうですよ」
「……」
麗華は打ちのめされたのか、項垂(うなだ)れています。
「と、とにかく、現場に案内して、まどかちゃん」
「はい」
事前に何も伝えていないので、先生方に拒否されるかと思ったのですが、校長先生も教頭先生もニコニコして出迎えてくれました。
「ようこそいらして下さいました、西園寺先生」
校長先生達も、まどかちゃんから私の事しか聞いていないらしく、麗華を私の付き人だと思ったようです。
「こら、おっさん、ウチも大阪じゃ有名な霊能者や。蘭子の付き人とちゃうで！」
麗華がそう言い放つと、先生方は彼女をその筋の方と勘違いして、

逃げてしまいました。

「麗華、脅かしてどうするのよ」

「ウチはホンマの事ゆうただけや」

本当に仕方のない子です。睡眠薬でも飲ませておいてくれば良かったです。

まどかちゃんは呆れ顔で私と麗華を問題のトイレに案内しました。

何故かギャラリーが増え、私達の後をたくさんの男の子がついて来ます。

まどかちゃんて人気があるのね、と思いました。

「ここです」

現場は二階の男子トイレです。

「一番奥の個室にお札が貼られていました」

まどかちゃんは入りにくそうにしています。

男の子がたくさん見ているのに、男子トイレに入るのは恥ずかしいですよね。

「ほお、そうか」

麗華は恥ずかしいという感情を売ってしまったのでしょうか、ズ

カズカと中に入りました。

「蘭子、来てみい」

「え？」

私も少し躊躇いながら、足を踏み入れました。

「あ」

「どや、あいつらやろ？」

「そうね」

微かにですが、あの時感じたのと同じ波動が残っていました。

「逆探知できる、麗華？」

「難しいけど、やってみるわ」

麗華は九字を切り、印を結びました。

「よし、これでええ。後は待つだけや」

麗華は大股でトイレを出て行きました。私は頭痛がしそうなのを堪えて、トイレを出ました。

「どうでした、蘭子お姉さん？」

まどかちゃんが尋ねて来ました。

「あの時の陰陽師ね。同じ人の波動が残ってたわ」

「そうですか」

麗華は男の子達に囲まれています。

「うおお、巨乳だ！」

麗華の服装は小学校に来ていい格好ではないのに改めて気づきました。

胸が半分くらい見えているのです。恥ずかしい。

「す、すげえ。クラスの女子共とは大違いだ」

こんなものなのですね、小学生の男子って。

「ガハハ、どうや、お姉さんの乳。もっと見たいか？」

麗華は悪乗りしています。あら？

まどかちゃん、男子の一人の子の耳を引っ張って怒っています。

彼のようですね。羨ましいわ。

「お」

男の子達の今にも食いつきそうな勢いを押し留めて、麗華はトイレの中に戻りました。

「蘭子、わかったでえ。けっこう近くや。行こか」

「ええ」

私はまとわり着く男の子達を振り払うようにして、麗華と階段を駆け下りました。

「待って、蘭子お姉さん！」

まどかちゃんが続きます。

「お姉さん、また来てねええ！」

男の子達の熱烈な見送りに、麗華は投げキスをして答えています。

「行くわよ、麗華」

「はいはい」

私達三人は、陰陽師がいる場所へと向かいました。

「ええもんやな、年下も」

麗華はゲラゲラ笑いながら言いました。

「犯罪よ、麗華」

「アホ、今すぐっちゅう話やないわい」

麗華はドスンとシートにもたれました。

「どこなんですか？」

まどかちゃんが興味津々の顔で尋ねます。

「お前にはよう教えん、子供」

麗華は意地悪な笑みを浮かべて言いました。

「貴女に聞いてませんよーだ」

まどかちゃんも負けていません。

「着いたわよ」

「ええ？」

そう、敵さんは、小学校のすぐ近くにいたのです。

「何や、ここは。インチキ臭い神社やな」

麗華の真言でやっつけたので、すっかり組織が小さくなってしまったようです。

「まあええ、さっさと片付けて、夜は慶君とデートや」

麗華はとんでもない事を言って車を降りると、神社の境内に走りました。

「麗華、迂闊よ！」

いくら貧相な神社だとしても、敵の本拠に何の備えもなく飛び込むのは無謀です。

「ひーっ！」

麗華の情けない声が聞こえました。私とまどかちゃんはすぐさま境内に向かいました。

「麗華！」

すると境内の奥から、大きな白蛇を肩にかけた白装束姿の男が現れました。麗華は男に蛇を突きつけられ、後ずさりしています。

「お前達を待っていたよ。私の組織を潰してくれた礼をしたくてね」

男は憎らしい顔で言いました。

「ら、蘭子、ウチ、蛇だけは苦手やねん。助けてえな」

聞いた事がないような弱気な麗華の声。これは大変です。

「私もダメ。爬虫類全般、無理なの」

多分、私は麗華以上に情けない声を出していたと思います。

「わっはっは、どうだ、我が祭神白蛇様の力は。ひれ伏すがいい！」

男は天下でも取ったかのように強がりました。

万事休すかと覚悟しました。

「まあ、可愛い。私、蛇大好き。ねえ、持たせてよ、おじさん」

まどかちゃん！　す、凄い。尊敬してしまいます。

すでに私と麗華は固まったように動けなくなっているのですが。

「お、おう」

おじさんは、一番若いまどかちゃんが全然驚いていないので、すっかり計算が狂ったようです。

「お礼にこれあげる、おじさん」

まどかちゃんは、男にカエルを渡しました。

「ひえええええ！」

男はカエルを手に載せられ、絶叫と共に失神してしまいました。

あ、私はカエルもダメです。すみません、限界です。

私も気絶してしまいました。

しばらくして、私は境内の隅で目を覚ましました。

まどかちゃんと麗華が、呉越同舟で小学校からシートを借りて来てくれて、私はその上に寝ていました。大失態です。

「ありがとう、二人共」

「お、おう」

麗華は相変わらず照れ臭そうです。

「どういたしまして。蘭子お姉さんにはお世話になってますから」

まどかちゃんの方が大人の対応です。

「ごめんなさい、カエルも苦手だって知らなくて」

まどかちゃんはおもちゃのカエルを持っていたようです。

「いいのよ。それより、私、おもちゃでもダメなの」

「ああ、ごめんなさい」

まどかちゃんは動かしていたおもちゃをスカートのポケットにしまいました。

「ひひひ、蘭子の弱点見つけたで。今度試そうかな」

麗華は嬉しそうです。

「麗華、もしそんな事したら、絶交よ」

「冗談や、冗談。本気にせんといてえな」

麗華は私が本気で怒ると怖いのはよく知っているので、すぐに謝りました。

「それにしても、まどかちゃん、凄いわ。蛇もカエルも怖くないのね」

私が感心して言うと、

「はい。私はこの世に怖いものはありません」

まどかちゃんは胸を張って答えました。

「これでお兄ちゃんに取り憑いた悪い霊も追い払えます」

彼女は意味ありげに麗華をチラッと見てから言いました。

「ええ、慶君に悪霊が？　それならウチが払ったるで。もちろん、タダでな」

何も知らない麗華が嬉しそうに口を挟みました。

貴女がその悪霊なのよ、麗華。

とは、可哀相で言えません。

お正月は初詣に行くのよ！

私は箕輪まどか。

年末年始にかけて、私のライバルであるメイドが活躍し過ぎて、すっかり「小島よ〇お」状態になっていた。

間違っても「ハリセン〇ン」ではない事は、ここで改めて言っておきたい。

ウチのエロ兄貴からの情報によると、憧れの蘭子お姉さんとあの下品な関西弁のおばさんが、同じ温泉旅館にいたそうなのだ。

そこでも幽霊騒ぎがあったらしく、除霊完了後にみんなで宴会で盛り上がったらしい。

でも何故かエロ兄貴のテンションは低かった。

どうやら、関西のパワーに負けてしまい、全く蘭子お姉さんと話ができなかったようだ。

神様はいる。そう確信したエピソードだ。

正義は必ず勝つとも言う。

只、一つだけ心配なのは、エロ兄貴に片思いの里見まゆ子さん。

私が陰ながら応援している、とってもいい人なのだが、蘭子お姉さんからの情報によると、お酒が入ったせいなのか、蘭子お姉さん

に「宣戦布告」をしたらしい。

でも、次の日、それを全く覚えていなかったのだとか。

蘭子お姉さんは、エロ兄貴には全然興味がないそうなので、まゆ子さんに教えてあげないとね。

あ、それから、私が余計な事をまゆ子さんに話したのを蘭子お姉さんにやんわりと叱られた。

失敗だ。まさか、まゆ子さんが喋るとは思わなかったもんなァ。

さて。前フリはそれくらいでと。

私は今、仕方なく付き合っている牧野徹君と初詣に出かけていた。

初詣話はもう古い？　今日は成人の日ですって？

うるさいわね。作者がトロイんだから、仕方ないでしょ！

そんな事で、私達は近所にある厄除地蔵があるお寺に行った。

もちろん、お参りをすませたら、そのままデートに行くんだから。

えっ？　仕方なく付き合っているにしては、嬉しそう？

そ、そ、そんな事ないわよ。牧野君は私と付き合えて光栄だって言ってるんだから！

「お賽銭は、五円でいいのよ」

私が言った。すると無学な牧野君は、

「ええ、そんな少しじゃ、神様に願い事聞いてもらえないよ、まどかちゃん」

ちなみに、私達がお参りしているのは厄除地蔵尊で、神様ではない。

牧野君は、学校の成績は私より上だけど、こういう知識は皆無に近いくらいの勉強小僧なのよね。

「いいのよ、マッキー。ご縁がありますようにっていう意味があるの」

「へーっ、そうなんだ。まどかちゃんは、いろいろな事を知ってるね。同級生とは思えないよ」

「えへへ」

などと笑ってみせたが、実は私はお小遣いが少ないので、ケチっただけなのだ。

私達は楽しくお参りをすませ、いよいよ今日のメインイベントに突入しようとしていた。

「あ」

ところがだ。こんなタイミングで、私の特殊能力が発動してしまった。

ターンエンドにしたいくらいだ。

（見えちゃってる……）

私は、地蔵尊から出たところで、お年玉のポチ袋をたくさん抱えた小学校低学年くらいの男の子の霊を見つけてしまった。

「あーあ」

私は無意識のうちにそう言ってしまったらしい。

「ど、どうしたの、まどかちゃん？　ぼ、僕、何かいけない事した？」

怯えまくる牧野君。

「もう、そんなとこに何でいるのよ？」

私は鬱陶しさ丸出しで、その霊に話しかけた。何故か慌てふためく牧野君。

「貴方の事じゃないのよ、マッキー」

私はできる限りの笑顔で牧野君に言った。

「姉ちゃん、僕が見えるのか？」

よく見ると、何か時代遅れな感じの子だ。

表現しにくいのだが、要するに「昭和の香り」がする子なのだ。

「こんなとこじゃ話ができないわ。向こうで話そう」

「ああ」

私は、そのふてぶてしい態度の霊を伴い、地蔵尊の裏の竹薮に行った。

牧野君は、泣き出しそうな顔で、

「待ってよ、まどかちゃーん。悪いところは治すから、置いて行かないでー」

とついて来た。

「私に何か用なの？」

「別に姉ちゃんに用があった訳じゃない。僕は、父ちゃんを待ってるんだ」

「父ちゃん？」

この子の事がわかった。この子は、昔ここに父親とお参りに来て、そのまま迷子になり、何が原因かよくわからないが、死んでしまったようだ。

「父ちゃんはもうここには来ないよ」

私は非情な現実を突きつけた。霊にはこれが一番効く。

「そんな事ないよ。父ちゃんは僕がいなくなったから、探しているんだ。絶対来る」

その子の執念が、少し澱んでいる。

いけない。あまりここにいると、悪霊になってしまうかも。

私はもう一度その子の事を探ってみた。

この子はどうして死んでしまったのだろう？

「あ」

私は泣いていた。知らないうちに、両方の目からポロポロと涙をこぼしていた。

あまりにも酷い事を知ってしまったので。

この子は、今から二十年以上前、この地蔵尊に父親と来て、その帰り道に父親に首を絞められて殺されたのだ。

あまりの事に、私は泣いてしまっていた。

この子は何も覚えていない。

そして、そんな事を思い出させる必要もない。

遺体は、竹薮の中に埋められている。
そっちはお兄ちゃんに任せよう。私はこの子を助ける。
「どうしたんだよ、姉ちゃん？　何泣いてるのさ？」
「うるさいわね。ついて来なさい。父ちゃんに会わせてあげるから」
「ホントか？」
その子は目を輝かせて、私の後をついて来た。
牧野君はすでに置いてきぼり状態だったが。
私はもう一度地蔵尊の境内に入った。
「さ、ここよ。ここに父ちゃんがいるでしょ？」
私はその子を伴って、お堂の前に来た。そして、
「オンカカカビサンマエイソワカ」
と地蔵真言を唱えた。
「ああ」
男の子の霊が、光に包まれ始めた。お地蔵様の慈悲の光だ。
「姉ちゃん、ありがとう。父ちゃんが来たよ」

「うん」

私はまた泣いていた。その子の家族は、皆同じ日に亡くなっていた。

無理心中という、何ともやり切れない事件だった。

お地蔵様が、そんな悲劇の家族を、ここで会わせてくれた。

男の子の霊は、お父さんと、そして兄弟と、お母さんの霊に会えて、嬉しそうだ。

「今度生まれる時は、きっと幸せになるんだよ」

私はその家族が天に登って行く姿をずっと見上げていた。

そして、ふと気づくと、牧野君もいなくなっていた。

ああ。何て事だ……。

まゆ子さんのお友達亜由さんの家に生霊がいっぱい！

私は箕輪まどか。美少女霊能者だ。

どうした事か、今日は学校が休み。

どうやら創立記念日らしいのだが、よく調べてみたら違う日だったらしく、今先生方はその事実の改竄（かいざん）に全力を挙げているらしい。

ところで、改竄て何？

暇を持て余していた私は、散歩でもしようと思って外に出た。

え？　牧野君はどうした？　その名前、出さないでよ。

この前、初詣に行って、あれこれあったので、会ってくれなくなったの。

別れたわけじゃないのよ。

私をふるなんて事、彼にできるわけないんだから。

あ、何でだろ、涙が出ちゃう。

そんな妄想を繰り広げながら、家の前を歩き始めた時だ。

「まゆ子さん？」

私は、電柱の陰に立っている、私のお姉さん候補ナンバーワンの

里見まゆ子さんに気づいた。

まゆ子さんは、携帯で話し中みたいで、私に見られている事に気づいていない。

「そ、そんなんじゃないわよ、亜由ったら！　べ、べ、別に箕輪さんに会いに行くわけじゃないんだから！」

お。ウチに来るつもりだったの？　もう少し、様子を見てみよう。

「そ、そうよ。あんたが困っているから、箕輪さんの妹さんに会いに行くのよ」

あれれ、私に用事？

「おはようございます、まゆ子さん」

「い！」

まゆ子さんは、私が声をかけると、幽霊にでも会ったかのように顔を引きつらせた。

「じゃ、また後でね」

まゆ子さんは慌てて携帯を切り、ショルダーバッグにしまった。

「お、おはよう、まどかちゃん。今日は学校お休み？」

まゆ子さん、白々しい。多分エロ兄貴に訊いて知ってるはずなのに。

「ええ。創立記念日です」
「まあ、そうなの。それは丁度良かったわ」
まゆ子さん、セリフ棒読み。私は苦笑いをして、
「亜由さんに何かあったのですか？」
「え？」
まゆ子さんはまた驚いた。大袈裟だな、全く。聞かれたと思ったのだろう。
でも、心優しい私は、
「私にはわかるんですよ。亜由さんが困っているのが」
「そ、そうなの」
まゆ子さんは少しホッとしたのか、微笑んで言った。
「じゃ、話が早いわ。一緒に来て欲しいの」
「え？　ほしのあき？」
蘭子お姉さんにかましたのと同じボケだ。するとまゆ子さんは、
「アハハ、まどかちゃんたら……」

と笑ってくれた。いや、決して同情ではない。まゆ子さんは、こういうオヤジギャグがツボなのだ。

そして、私は、まゆ子さんの車で亜由さんのところに向かった。

亜由さんはまゆ子さんとは高校の同級生で、エロ兄貴とは中学の同級生なのだ。

亜由さんはエロ兄貴の所業を知っているので、まゆ子さんが兄貴に「ほの字」なのを心配している。

その亜由さんが直接私に連絡をくれないという事は、まゆ子さんが一人で暴走している可能性がある。

だから「箕輪さんに会いに行くわけじゃない」などという言葉が出たのだ。

亜由さんは兄貴とまゆ子さんが同僚なのをとても心配しているくらいだから。

でも何故、まゆ子さんは家まで来ないで、電柱の陰に明子姉ちゃんみたいに立っていたのだろう？

よくわからない。

大人には大人の事情がある。

お父さんにそう言われたのは、朝帰りしてお母さんに締め出され

たのを私が助けてあげた時だった。

「着いたわよ、まどかちゃん」

まゆ子さんのその声に、私の妄想タイムは終了した。

亜由さんはすでに結婚している。

旦那さんは、海外出張中で、今は一人。

「なるほどね」

私は亜由さんの家の前に立つなり、全てがわかった。

旦那さん、凄く恨まれてる。

多分、会社の人達だろうけど、生霊がいっぱい。

それも、ちょっとでも霊感があれば見えるのではないかと思う程、強烈だ。

以前、兄貴に憑いていた生霊とはレベルが違う。

「いらっしゃい、まゆ子、まどかちゃん」

亜由さんが出迎えてくれた。

私達はリビングルームに通された。

「旦那さんはいつお帰りですか？」

私がいきなりそう切り出したので、亜由さんはビックリして、
「あ、あの、明後日よ。それが何か？」
「旦那さんを恨んでいる人達の生霊が、この家に溢れています」
亜由さんは思い当たる事があるのか、暗い顔になった。
「やっぱり」
その言葉にまゆ子さんが、
「知っていたの？」
「知ってはいないけど、何となくそんな予感はしたわ。あの人、同僚を敵としか見ていないから」
亜由さんは悲しそうに言った。
「ここに引っ越す前は、あんなに独善的な人ではなかったのに……。どうしてなのかしら？」
「この家のせいです」
私は周囲を見渡して言った。
「ええ？」
亜由さんとまゆ子さんが同時に言った。私は二人を見て、

「この家を建てた人、亡くなってます。その人の強い思いが、旦那さんに影響しているんです」

「そ、そんな……」

亜由さんは泣きそうだ。私、こういうの苦手。

「どうすればいいの、まどかちゃん」

まゆ子さんが代わりに尋ねる。私は腕組みをして、

「引っ越すのがいいのでしょうけど、そういう訳にもいかないですよね」

「ええ。ローンは始まったばかりだし。私もこのあたりの住環境が気に入っているので」

亜由さんは立っていられなくなったのか、ソファに座った。まゆ子さんがそれを支えるように隣に座る。

「では方法は一つです。この家に取り憑いている男の霊を除霊します」

「……」

そう言われても、亜由さんとまゆ子さんにはわからないだろう。

「？」

そんな会話をしていたせいなのか、その人の霊が現れた。

あれ？　もっと執念深そうな人かと思ったけど、そうでもないみたい。

『待ってくれ。もうここの旦那に私の思いをぶつけるのはやめるから、除霊しないでくれ』

「どういう事？」

私は亜由さんとまゆ子さんがキョトンとするのもかまわず、霊と話した。

『やっとわかってくれそうな人が来たので、つい甘えてしまった。迷惑をかけているようだから、もうやめるよ』

「なるほどね。生霊達が、貴方も鬱陶しかったのね？」

『そういう事だ』

男の霊は苦笑いした。

『じゃ、頼んだよ』

彼はそう言い残し、消えた。

後は生霊達ね。こいつらは、一回追い出せば、もう来なくなるでしょ。

「オンマリシエイソワカ！」

私は摩利支天（まりしてん）の真言を唱えた。

『ひーーーーっ！』

たちまち、生霊達は退散した。

「一件落着です」

私はあるメイドに負けない笑顔全開で言った。

「ほ、本当？」

亜由さんは涙ぐんでいる。まゆ子さんが、

「もちろんよ。まどかちゃんは、凄いんだから」

「ありがとう、まどかちゃん」

亜由さんは立ち上がり、私の両手を握り締めた。

そんな事で、霊現象はあっさり解決。

私とまゆ子さんは、ケーキと紅茶を頂いた。

「あの、料金は？」

玄関で亜由さんにそう言われた。私はニコッとして、

「いただきません。私は、関西の霊能者とは違いますから」

「そ、そうなの」

亜由さんは不思議そうな顔で言った。そして、

「そっか。将を射んと欲さばまず馬を射よ、なのね」

と小声でまゆ子さんに言うのが聞こえてしまった。

「ち、違うわよ、亜由ったら！　まどかちゃんの前で、何て事言うのよ！」

まゆ子さんが酷く慌てて言った。

でもまゆ子さん、何を慌てているのか知らないけど、亜由さんの話の意味、全然わからないから安心してね。

私はまゆ子さんの応援団だしね。

マジでヤバいって感じ？

私は箕輪まどか。美少女霊能者。

只今恋人募集中。

うっそー！

たまにはオープニングトークを変えてみようと思っただけよ。

つ、強がりなんかじゃないんだから！

私はまた、エロ兄貴の依頼で、殺人事件の現場に向かっていた。

「また現場、外なのお？　もう、冷えは女性の大敵なんだからね、お兄ちゃん！」

私は後部座席で口を尖らせて言った。するとエロ兄貴は助手席から、

「何が女性だ！　お前はまだお子ちゃまだろ？」

「な、何よお！」

「まあまあ」

そんな犬も食わない兄妹喧嘩（きょうだいげんか）を仲裁するのは、運転している里見

まゆ子さん。

え？　犬も食わないのは夫婦喧嘩？　どっちだって食わないでしょ！

「お前が不服を言うんじゃないよ。里見さんだって女性なのに、そんな我がまま言わないんだから」

まゆ子さん、自分の名前が出たので、ギクッとしたみたい。

「ねえ、里見さん」

「いえ、私はその……」

おかしな同意を求められて、まゆ子さんは困った顔をした。

本当に兄貴は仕方がない。まゆ子さんの気持ちを全くわかってないんだから。

月に代わってお仕置きしてあげようかしら？

でも私は火星も好きだし、金星もいいなあ。

「着いたぞ、かまど」

兄貴の酷い一言で、私の妄想タイムは終了した。

「かまどって今度言ったら、蘭子お姉さんに言いつけるわよ」

私はまゆ子さんに聞こえないように兄貴に囁いた。

「それがどうした？」

兄貴は強がりを言った。ならば！

「じゃあ、麗華さんに兄貴のもう一つの携帯番号教えちゃうぞ」

「！」

兄貴は仰天して、私を見た。

「お、お前、どうしてそんな事を？」

知っているのか、と言う。なんて言ってみたいわね。

「私は何でも知っているのよ」

「わ、わかったよ」

兄貴は渋々降参し、車を降りた。

「さぶ！」

私はモコモコ重ね着をして来たのだが、それでも現場は寒かった。

G県が誇るG三山の一つ、赤白山（あかしろやま）の大沼が現場なのだ。

沼は氷が厚く張っていて、ワカサギ釣りの人達がたくさん来ていた。

「こっちです」

まゆ子さんが先導してくれる。死体発見現場は、釣り人達が足を踏み入れないところだった。

「気味が悪いな」

兄貴が言う。確かに。人が足を踏み入れなくなるのは、それなりの理由があるのだ。

そこは、ずっと昔、そう兄貴も生まれていないくらい前、殺人事件があったのだ。

それは兄貴達は知らない。

私の優れた霊能力が、全てを見抜いたのだ。

「あ！」

私は、その事件の犯人が、ここで殺された被害者だと知った。

「仇討ち？」

「え？　何、まどかちゃん？」

まゆ子さんが私の独り言を聞きつけて尋ねた。

「まゆ子さん、ここで昔殺人事件があったの。多分、三十年位前にね」

「ええ！？」

兄貴もその話を聞きつけて私を見た。

「どういう事だ？」

「今回の被害者が、その事件の犯人なのよ」

「何だって！？」

被害者は六十代の男性だった。その人は、ここに縛り付けられるように彷徨（さまよ）っていた。

そして今、兄貴のすぐ後ろにいて、私達の話を聞いている。

「その昔の事件は、もう犯人を捕まえられないんでしょ？」

「ああ。三十年以上前だと、時効だ。裁判にかける事はできない」

兄貴は珍しく真面目な顔で言った。

「殺人罪の時効は、今廃止の議論がされているわね」

まゆ子さんが豆知識を披露した。

「そうなんですか」

ああ！　一番言いたくない言葉を言ってしまった！

これ、あのメイドの口癖じゃない！

「よし、いい事がわかったぞ。その事件を調べて、被害者の遺族を探してもらおう」

「そうですね」

ホホホ。どうよ、私の冴え。もう事件解決ね。

兄貴とまゆ子さんは先に歩いて行った。

私はニンマリとして、歩き出した。その時だった！

「ひっ！」

いきなり後ろから羽交い絞めにされて口を汚い手で塞がれ、私は身動き取れなくなった。

「余計な詮索をするな、ガキが！」

「ふご？」

私はもがきまくって、ようやくそいつの腕から離れた。

「畜生……」

悔しそうに私を見ていたのは、私のお父さんと同年代の男だった。

「どういうつもりよ！？」

私は男の臭(にお)いを拭い去るために、何度も口の周りを擦った。

「やっと仇が討てたんだ！　余計な事をするなと言ったんだ！」
どうやらその男は、三十年前の殺人事件の被害者と関係があるようだ。
「お前も殺して、あの二人の警官も殺して……」
男は目が逝ってしまっていた。人を殺した事で、頭が混乱しているのかも知れない。
「死ねーッ！」
男は服の下からナイフを取り出し、私に襲い掛かって来た。
「キャッ！」
私は逃げようとして何かにつまずき、転んだ。
しかも悪い事に厚着のし過ぎで、一人で起き上がれない。
「大丈夫だよ、すぐに楽にしてやるからさあ」
男は涎を垂らしながら近づいて来た。
「うーん！」
いろいろやってみたが、どうにも起きられない。まるで亀状態だ。
回転ジェットでもできれば逃げられるのに、などと思う余裕はな

かった。

「オラーッ！」

男の振り上げたナイフが、私の美しい顔目掛けて振り下ろされた。

ああ！　せめて顔は刺さないで！　などと叫ぶ余裕もない。

「く！」

私は思わず目を瞑った。

あれ？　ナイフが刺さらない。何？

そっと目を開ける。驚いた。

男の腕を、女性の霊が止めていたのだ。

「な、何だ！？　どうして腕が動かないんだ？」

男にはその女性が見えていないらしく、酷く慌てていた。

『ごめんなさい、お嬢さん。この人は私の婚約者だったの。私が止めている隙に、逃げて』

女性の霊が言った。

「で、でも、起きられないのよ！」

私は泣きそうだった。すると、

『ほらよ』

と私を抱き起こしてくれた人がいた。

「あ！」

それは、今回殺された人だった。

『俺は殺されて当然の事をした。でも、お嬢ちゃんは関係ない』

「あ、ありがとう」

私はお礼を言って立ち上がった。そして、

「あんた、そんな事をして、婚約者が喜ぶと思っているの？」

「な、何ィ！？」

男はまだ私を殺す気満々だ。

「あんたが今動けないのは、その婚約者の人が止めているからなのよ！　その思いを踏みにじらないで！」

私はありったけの声で叫んだ。男はガックリと膝を着き、地面に泣き伏してしまった。

『ありがとう、お嬢さん』

女性の霊はそう言うと消えてしまった。男の霊も、

「俺はしばらくここで修行してから行くよ。山の神様にそう言われたのでね」

「そ、そう」

私は苦笑いをして、男の霊を見送った。

まもなくして、私が来ないのを変に思った兄貴達が戻り、私は兄貴とまゆ子さんに事件が解決した事を告げた。

泣き伏していた男は、殺人と殺人未遂の現行犯でその後到着した捜査一課に逮捕された。

「まどか、お手柄だな」

兄貴が珍しく褒めてくれた。まゆ子さんも、

「凄いわ、まどかちゃん」

「えへへ」

私は照れ臭くなって俯いた。

「じゃ、帰ろうか」

兄貴が言った。すかさず私は、

「ご褒美がほしいな、お兄ちゃん」

「よし、肉屋の揚げ立てコロッケだ」

「やだよ、ファミレスでチョコパフェ！」

「いいや、肉屋のコロッケ」

「やだよお！」

そんなバカ兄妹（きょうだい）の会話をニコニコ見ているまゆ子さんは、本当にお姉ちゃん候補ナンバーワンだ。

牧野君のご両親にご挨拶？　そんな大袈裟な事じゃないわよ！

私は箕輪まどか。小学六年生。

多分、四月が来ても、作者の都合で進学しないと思う。

世の中には、小学生でないとダメな人もいるとエロ兄貴が言っていた。

どういう意味なのだろう？　今度ネットで調べてみよう。

そんな訳で……。そこ、どんな訳でとかつまらない突っ込み入れないでよ！

上辺だけ付き合っている牧野君が、私を家に呼んでくれた。

初詣以来、全く学校以外では会ってくれなかったので、ホッとしていたのに。

うん？　日本語が変？　動揺しているのかって？　そ、そんな事ないわよ。

牧野君の家は、実はお医者様なのだ。

お父さんは外科医、お母さんは内科医。

更に牧野君のお兄さんは、私のエロ兄貴と小中と同級生で、女の

子の人気を二分していたらしい。

そのお兄さんは、現在ある大学病院の研修医をしているのだ。

もしかして、私、玉の輿？　やったあ！

でも、玉の輿って何？

などと妄想を繰り広げているうちに、牧野君の家の前に着いた。

でかい。私の家の十倍くらいある。

恐らくお父さんの年収も、ウチのお父さんの十倍くらいあるだろう。

ここにお嫁に来れば、私は親孝行な娘として、箕輪家の歴史に名を刻む事だろう。

「いらっしゃい、まどかちゃん」

そう言って出迎えてくれた牧野君は、顔を引きつらせていた。

どうやら、私はニヤニヤしていたらしい。

「ご招待ありがとう、マッキー」

私はこれ以上はできないというくらいの作り笑いをした。

今日はいつもより短めのスカートに、胸の谷間を強調したVネックのセーターを着ているのだ。

これで牧野君はメロメロで、私の将来はウハウハよ。

「まどかちゃん、そんなに首と足が出ている服装で、寒くない？」

牧野君には、私の勝負服が通じていなかった。まだまだ子供ね。

私は広い玄関を通り抜け、ある部屋に通された。

あら？　何、ここ？　一見診察室にも見えるんだけど？

「いらっしゃい、まどかさん」

白衣を着た男の人が言った。

「僕の父だよ、まどかちゃん」

牧野君が教えてくれた。乳？　ああ、お父さんね。ビックリした。

「息子から貴女の症状は聞いています。私の専門は外科ですが、徹のお友達で、しかもお付き合いをしている貴女が、そんな病気に罹（かか）っているのを放っておけませんので」

「はい？」

何の事？　病気？　私、病気なの？　えええ？

「いつから幽霊が見えるようになったのですか？」

牧野パパはいたって真面目な顔で尋ねる。そういう事か。

「今も見えていますよ、貴方の後ろに、お婆さんの霊が」

私は冗談でそう言ったのだが、牧野パパは真っ青になった。

「うわあああ！　許して、許して、母さん！　僕が悪かったよおお」

パパはいきなり椅子から床に飛び、土下座した。

「パパ、どうしたの？」

牧野君が驚いてパパに駆け寄った。

「どうしても抜けられなかったんだ、大事な手術で……。ごめんよおおお」

パパは遂に涙を流し出した。うわ、ちょっとまずかったかな。

私は牧野パパがどうしてこんなに怯えているのか、探ってみた。

パパは、大学病院で外科手術をしていた。

ちょうどその時、パパのお母さん、つまり牧野君のお婆ちゃんが発作を起こして、家で倒れた。

パパはそれを知らされたけど、手術中だったので、抜けられなかった。

手術が終わり、家に連絡すると、お母さんは息を引き取った後だ

った。

牧野パパはそれが元でずっとお母さんの幻に責められているようだ。

でも、本当のお母さんは、全然パパを怨んでいない。

むしろ、立派な息子だと誇りに思っている。

よし、それなら、本人から話してもらって、誤解を解こう。

私はそう思い、部屋の明かりを消した。

「うわあああ！」

今度はパパだけでなく、牧野君まで怯えだした。

うるさい男共ね。

私は霊界から、牧野君のお婆ちゃんの霊を呼び出した。

「義則」

お婆ちゃんの霊が、パパに語りかけた。

「お、お母さん？」

パパは涙に滲む目でお婆ちゃんを見た。

「そうだよ。お前、何を勘違いしてるんだい。私はお前を怨んだり

していないよ」

「え？」

おばあちゃんはニッコリして、

「お前の事は、立派な医者だと思っているよ。患者を救ってこその医療だよ。私が助からなかったのは、お前のせいじゃない。天命さ」

「お母さん……」

お婆ちゃんの霊は微笑んだまま、

「いつも見守っているよ」

と言うと、霊界に帰って行った。

パパだけでなく、牧野君も、私も、泣いていた。

牧野パパは、お母さんを助けられなかったという思いから、霊の存在を完全に否定していた。

だから、私の話を牧野君から聞き、私を治療しようと思ったようだ。

「貴女を助けようと思ったのに、私が助けられてしまった。長い間、ずっと心の中で燻(くすぶ)り続けていたもどかしさが、ようやく解けたよ。ありがとう、まどかさん」

パパは笑顔で礼を言ってくれた。

「これからも、徹と仲良くして下さい」

「は、はい」

やった！　玉の輿！

などと思ってはいけない。

今日はそんな嫌らしい事を考えてはいけないのだ。

それでは、あの関西のおばさんと同じだ。

私は清々しい思いで、牧野君の家を出た。

旧校舎に何か出るのよ！

私は箕輪まどか。小学校六年生。

ついこの前まで、四月になっても六年生のままだと思っていたけど、そうでもないみたい。

作者のネタが切れて来たので、三月いっぱいで最終回を迎えるかも知れないのだ。

しかも噂によると、私の後は「八木麗華の超霊感推理」が始まるのだとか。

酷い。酷過ぎる……。

などという妄想はそのくらいにしてと。

先日、カムフラージュのために付き合っている牧野君の家に行き、

「是非息子と付き合って下さい」

とお父さんに頼み込まれてから数日が経った。

えっ？　脚色するなって？　いいでしょ、誰にも迷惑かけていないんだから。

ところで、カムフラージュって何？

私が教室に入って行くと、女子達が何か話していた。
「どうしたの、何かあったの？」
私は彼女達に声をかけた。
「裏にある旧校舎に、何か出るんですって」
「妖怪らしいわ」
「うそ、幽霊よ」
「宇宙人かも知れないわ」
……。アホ臭。結局何が出るのかもわからないらしい。
でも旧校舎は、前から私も気になっている場所なのだ。
ここは、お父さんとお母さんの母校でもある。そして、あのエロ兄貴の母校でもある。
お父さん達がいた頃から、旧校舎には何か出ると言われていたのだ。
但し、お父さん達はその旧校舎で勉強していたので「旧校舎」とは呼んでいなかったけど。
「まどか、あんたわからないの？」

女子の一人が何故か上から目線で尋ねた。でも寛大な私はそんな事は気にしない。

「興味ないからわからない」

「なーんだ」

彼女達は私がわからないのをまるでアメリカ人のように肩をすくめてガッカリしてみせた。

ホントはわかっているわよ。でも真相を話すと、あんた達は先生に言いつけるでしょ？

それが嫌だから言わないの。

私は放課後、一人で旧校舎に向かった。

一体何がいるのか知りたくて。

長くそこにいる霊には違いない。

ただ、悪意は感じないので、悪霊ではない事はわかっていた。

「ねえ、あなたは誰？　どうしてここにいるの？」

私は霊気を感じる方に声をかけた。

『倅（そち）は我の事が見えるのか？』

「はい？」

何か聞こえた。しかし、日本語とは思えない言葉なので、思わず聞き返してしまった。

見えるのか、と言ったのはわかった。その前がわからない。

「難しい言葉で話さないでよ。私は日本人よ。日本語でどうぞ」

「我も日の本の民なり。倅は我が言の葉をわからぬと申すか？」

「ヒノモト？　どこよ、その国。日本に近いの？　とにかく、姿を見せて」

私は混乱しかけていたが、何とかそう言った。

「あいわかった」

と声がして、薄暗い奥から、何だか時代劇の人みたいな霊が現れた。

「ああ、もしかして、お侍さん？」

ようやくわかった。彼は昔の人なのだ。だからよくわからない言葉遣いだったのだ。

「やはり倅は我の姿が見えるのだな。ようやく巡り会えたぞ」

「えっ？」

その言葉、愛する人に言う言葉のような気がする。エロ兄貴が、女性を口説く時によく言うセリフに似ているのだ。

「な、何でしょう？」

あまりビビる事がない私も、お侍さんの霊は少し怖い。

斬り捨てられるかも知れないからだ。

「我はこの地で切腹した者。如何にしても、ここより離るる事能わず」

「？？？」

もはや理解不能。何を言っているのか、さっぱりわからない。

「成仏させてくれ」

それはわかった。そうか、この人、ここから出られないのか。

「わかったわ。助けてあげる」

「かたじけない」

「？」

またわからない。多分お礼を言われたのだろうと思っておく。

「地蔵真言を唱えて。そうすれば、出られるわ」

「うむ」

「私に続いて唱えてね」

私は印を結び、真言を唱えた。

「オンカカカビサンマエイソワカ」

「オンカカカビサンマエイソワカ」

一体何回唱えただろう。

お侍さんの霊が、光に包まれた。

「おお」

お侍さんは嬉しそうに叫んだ。

「娘、かたじけない。礼を申す。かたじけない」

お侍さんは何度もわかる言葉とわからない言葉を入り乱れさせながら、天に昇って行った。

「元気でねーっ！」

つい、霊には言ってはいけない言葉を言ってしまった。

うーん、何か良い事した気分。

私はスキップしながら旧校舎を出た。

そして、無断で旧校舎に立ち入った事を先生にこってりと説教されたのは言うまでもない。

ライバルが現れたのよ！

私は箕輪まどか。小学六年生。将来は病院の院長夫人の地位が約束されている。

そしてどうやら、私は中学生になるらしい。そして牧野君とも進展が……。

きゃあああ！

でも、外野がうるさいので、過激な事はできない。

で、外野ってどこ？

そんな訳で、この時期になって何故か転校生。

また変態男かと思ったら、今度は女子。

途端にバカ男子共の期待値が上昇する。

女子達の嫉妬心が渦巻く。

でも、現れたのは、地味な子だった。

メガネっ子でポニーテール。

そう表現すると、一部マニアが喜びそうだが、彼女は本当に地味

な子だった。

その子の名前は、笹木静(ささきしずか)。

自己紹介の声も聞き取れないような子だった。

例によって、私の隣の席が偶然にも空いていて、静ちゃんはそこに座った。

「私、箕輪まどか。よろしくね」

「……」

何も言わなかった訳ではなさそうだ。口は動いていた。

あんたは中森明菜か！？

そして、隣の席のよしみで、私が静ちゃんのお世話を先生に頼まれてしまった。

(何か変。この子、何だろう？)

私はそのつもりがなくても、人の過去が見えてしまう。

見えない時と見える時があるのは、私が興味を持つか持たないかの違いらしい。

静ちゃんは、性格が暗いのではないようだ。

何かが、この子を暗く見せている。

そもそも、こんな時期に転校なんて、絶対妙だし。

（あ……）

静ちゃんの過去。

ご両親が亡くなってるのね？

おばあさんとおじいさん。

二人共とてもいい人。

何だろう？　どうして彼女、こんなに暗く見えるの？

もしかして……。

私は授業が終わると、静ちゃんを誘って使われていない教室に行った。

「ねえ、もしかして、貴女、霊が見える？」

「え？」

おお、初めて声が聞こえたぞ。

「やっぱり。安心して、私もそうだから」

静ちゃんの顔が綻んだ。

「やっと、やっとお友達ができる……」

彼女は泣き出した。

「わわ、どうしたのよ？」

静ちゃんは、霊感が強く、そのため霊が近づきやすいらしい。

それで、教室で心霊現象が起こってしまい、転校を繰り返しているのだそうだ。

「ここは大丈夫よ。私、一年生の時から、心霊現象起こし捲ってるけど、皆わかってくれてるわ」

わかってくれているとは思わなかったが、静ちゃんの心を癒してあげようと思い、そう言ってしまった。

「ホント？」

「ええ。ホントよ」

静ちゃんはニコッとした。私はホッとして、

「さ、授業始まるから、戻ろうか」

「ええ」

私達は手をつないで駆け出した。

そして次の日。

教室に入ると、私の隣の席に、見覚えのない美少女が座っていて、男共が取り巻いていた。

みんなヘラヘラしている。私の上辺だけの彼の牧野君までいるわ！

マッキーは私に気づき、慌てて自分の席に戻った。後でお説教ね。

「どいて！」

私の席を占領していた力丸卓司君をどけた。

「貴女、だ……」

そこまで言いかけて、その美少女が静ちゃんだと気づいた。

「おはよう、まどかちゃん」

静ちゃんは微笑んで言った。メガネっ子がメガネを外すと最強というオチだった。

うわあ。これはまどかピンチかも……。

初めて負けたと感じてしまった。

顔も、霊感も。

静ちゃんのオーラ、あの蘭子お姉さんに迫ってる……。

今のうちに潰しておこうとは思わないけど。

やっぱり、最終回なのかしら？

でもそうではなかった。

「残念な事に、笹木さんは今日で転校する」

先生から衝撃の展開を告げられた。

「えーっ！？」

男子達から漏れる驚きの声。ホッとする女子もいる。

『まどかちゃん』

静ちゃんの声だ。テレパシーもできるの？

『ありがとう、まどかちゃん。私、おじいちゃんのところに戻るの』

『そう。もう平気？』

『うん。まどかちゃんのおかげで、前を向いて歩く勇気が出たわ。ホントにありがとう』

静ちゃんは私を見て微笑んだ。それをバカな男共は自分に笑ってくれたと思い、ヘラヘラしていた。

本当は私、静ちゃんにいて欲しかった。

いくらクラスに馴染んでいても、どうしたって浮く存在だから。

え？　誰よ、「お前が浮いているのは霊感のせいじゃない」って言ったのは！？

フンだ！

取り敢えず、最終回はまぬがれたまどかだった。

ご褒美は今日もコロッケなのよ！

私は箕輪まどか。小学六年生。もうすぐ卒業だ。

果たして卒業できるのだろうか？　心配。

今上辺だけ付き合っている事になっている牧野君とは同じ中学に行くのだろうか？

彼の家がお医者様一家だと知ってから、それだけが心配。

もしかして、有名中学を受けてそっちに行ってしまい、挙げ句の果てにそこで同じく医者の家の女と出会って……。

いけない。おかしな妄想をしてしまった。

別に構わないわ。

もし彼が他の中学に行ってしまったら、私も他の小学校から来る新しいボーイフレンドを作るだけだから。

まどか、負けないから。

そこ、可愛い子のフリしてもダメとか言わないでよ！

私は可愛い子のフリをしているんじゃなくて、可愛いのよ！

間違えないでよね。

そして、今日は憂鬱。またエロ兄貴に頼まれて、捜査協力だ。

「ごめんね、まどかちゃん。今日はお休みなんでしょ？」

里見まゆ子さんがすまなそうに言ってくれるが、お兄ちゃんは、

「里見さん、そんな気遣いしなくていいよ。そいつにはきちんとお礼はしているんだから」

と酷いことを言う。まゆ子さんは苦笑いして私を見る。

「それより、現場はどこ？」

私はサッサと片づけて帰りたいので、何も反論せずに言った。

「この先の袋小路だ。ガイシャは後ろからナイフのような刃物で一突きされて、ほぼ即死。犯人は全くわからない状態だ」

「目撃者もいないのね」

「そうだ」

お兄ちゃんは何時になく真剣だ。

殺されたのは、同じ県警の同僚。

状況から、騙されてそこまで行ったらしいのだ。

現場に着いた。誰も来ないような狭い行き止まりだ。

これでは目撃者はいない。

「何か言ってないか？」

私は被害者の霊を探した。

「あれ？」

いない。どういう事だろう？

仮にここに縛られていなくても、気配くらいは感じるのに。

「いないよ、お兄ちゃん」

「そんなはずはない。よく探せ、かまど」

お兄ちゃんは苛ついていた。

私を「かまど」と呼ぶ時は、相当気が立っている時か、私が上の空の時だ。

「探したわよ。でもいないものはいないの」

「どういう事だ？」

お兄ちゃんは私がふざけていると思ったのか、睨んでいる。

睨まれようが、くすぐられようが、いないものはいないのだ。

私も不思議だ。どういう事なのだろう？

「私が知りたいくらいよ。何の気配も感じないわ。わけがわからない」

お兄ちゃんはまゆ子さんと顔を見合わせた。

「その刑事さんの持ち物はないの？」

「ライターがあるわ」

まゆ子さんがビニール袋に入った百円ライターを渡してくれた。

「あっ！」

感じられた。何故刑事さんの霊がここにいないのかわかった。

「わかったわ。どこにいるのか」

「どこだ？」

私は蒼ざめてしまった。

「今、法医学教室にいるわ！　もうすぐ解剖が始まっちゃう！」

私の慌て方を変に思ったお兄ちゃんは、

「まさか！」

と車に走り、無線を掴むと、

「例の殺人事件のガイシャの解剖、待って下さい。新事実が判明しました！」

「ど、どういう事なんですか？」

まゆ子さんがオロオロした尋ねた。

「その人、生き返ったんです。でもまだ意識が戻っていません」

私が説明した。まゆ子さんも事の重大さに気づいたようだ。

私の読み通りだった。

被害者の刑事さんは、丸一日死んでいて、さっき生き返ったのだ。

もう少し私達の到着が遅ければ、その刑事さんは生きたまま解剖されてしまうところだった。

考えただけで恐ろしい。痛いなんてレベルのものではないだろうから。

そして、生き返った刑事さんの証言で犯人がわかり、事件は無事解決した。

「ご褒美ちょうだい、お兄ちゃん」

私は帰りの車の中で言った。するとお兄ちゃんは、

「よし、力丸ミートの揚げたてコロッケだ」

「何でいつもコロッケなのよ！」

私が口を尖らせて言うと、

「あそこで買うと、必ず一個オマケしてくれるからだ」

「えっ？　そうなの？」

初耳だ。私が買い物に行ってもそんな事はないのだが。

「肉屋の娘が、この慶一郎様に惚れてるからさ」

このバカ兄貴！　まゆ子さんの気持ちも知らないで、そんな事言って！

それにしても、リッキーのお姉さんて見た事ないんだけど、どんな人だっけ？

「でもコロッケは嫌よ！　ファミレスでチョコパフェ！」

私は危うく騙されそうになったのに気づき、すかさず言った。

「買ってあげようよ。あそこの息子、お前に惚れてるんだからさ」

「バ、バカな事言わないでよ！」

リッキーが私に「ほの字」なのは知っている。

でもそんな事、ここで言わないで欲しいわ。

私達の口論はしばらく続いたが、結局ご褒美は力丸ミートのコロッケ二個だった。

店先で私を見つけて、嬉しそうな顔をしているリッキーがいた。

悪い気はしないんだけどね。

霊には霊の事情があるのよ！

私は箕輪まどか。小学校は卒業したわ。

四月からは、「妖艶な香り漂う中学生」になるのよ。

え？　「妖怪の雰囲気漂う」って言ったの、誰？

地獄に行くわよ、そんな酷い事言うと！

そして何と、あの上辺だけ付き合っていた牧野君は、私の予想に反して、私立中学を受験していたの。

しかも、合格までして。どういうつもりなのかしら？　私とは遊びだったのね？

あれ？　涙が出てる。本気じゃなかったのに。

これは悔し涙よ。玉の輿が遠のいてしまったから。

牧野君にふられたからじゃないわ……。

そんな私のところに、またしても警察から霊視の依頼。

嫌なんですけど。そんなテンションじゃないんですけど。

私はお兄ちゃんに「拒否権発動」を宣言した。

お兄ちゃんは驚き、課長さんと話し合うと言っていた。

で、「拒否権発動」って何？

するとどうした事か、課長さんから私の携帯に初めて連絡が入った。

「頼むよ、まどかちゃん。君が来てくれないと、非常に困るんだよ」

「でも霊視してコロッケ二個じゃ、とてもお受けできませんわ」

お嬢様口調で反論する私。

「わかった！　じゃあ、ファミレスでチョコパフェでどうだ」

「了解しました」

やや食い気味に返事をした。こうして決裂したかに見えた会談は成功した。

現場は繁華街の一角。スナックのママが殺されたのだ。

四月から中学生になる純真な乙女に、何て現場を見させるのよ、課長！

「わ」

私は仰天した。ママは自分が死んだ事に気づいていない。

またお店で仕込みをしたり、お酒の注文書を書いたりしている。

でも、霊になってしまっているから、仕込みはポルターガイストだし、注文書を記入するのは自動書記だ。

見えない人が見たら、おしっこ漏らしそう。

多分、同級生だった力丸君なら、間違いなく漏らしてる。

「ねえ、ママさん、貴女はもう死んでしまったのよ。そんな事はしなくてもいいの」

私はママの霊に呼びかけた。するとママは、

「何冗談言ってるのよ。私は死んでなんかいないわよ」

と笑って取り合わない。どうしよう？

そうだ。昔、Gメンの人が言ってた。

霊には水が飲めないから、水を飲ませてみなさいって。

早速私は水を用意してもらった。

「ママさん、疲れたでしょ？　水でも飲んで下さい」

「あら、貴女、小さいのに気が利くわね。ありがと」

ママの霊はコップを持ち、グッと水を飲んだ。

でも、水はバシャッと床に溢れてしまったので、ママはビックリした。

「何これ？　何かのドッキリなの？」

「違うわ、ママさん。貴女は死んでしまったの。今、貴女は霊だから、水は飲めないのよ」

私はママが悪霊にならないように説得した。

でもママは聞かない。

「そんな事ないわ。私は死んでなんかいない！　生きてるわよ！」

ママはもう一度水を飲んでみる。でも同じ。水は床に落ちる。

「いや、ウソよ、何のトリックなの？　私を皆で騙して、それで楽しんでるんでしょ？」

ママは泣き叫んだ。

「違うわよ。私は、ママにちゃんと天国に行って欲しいから、話をしているの。ママは死んでしまったのよ」

「……」

ママの霊は呆然としてしまった。

ようやく自分の死に気づいたのだが、受け入れる事ができないのだ。

「ママ？」

私はもう一度話しかけた。ママは弱々しく微笑んで、

「ありがとう、お嬢ちゃん。私、死んでしまったのね」

「貴女は誰に殺されたの？」

ママはまたビックリした。

「ええ？　私、殺されたの？」

「ええ。お風呂場で、背中から血を流して死んでいたのよ」

ママは蒼ざめたようだ。いや、霊だから顔色は最初から蒼ざめているのだが。

「ああ」

思い出したようだ。

「誰に殺されたか、わかったの？」

「ええ」

「教えて」

「いやよ」

「え？」

私はビックリした。何でよ？　何で自分を殺した犯人を教えるのが嫌なの？

意味がわかんないわ。

「どうして教えたくないの？　せめて理由を教えて」

ママは私の言葉にちょっと考えてから、

「私はその人に殺されても仕方のないような仕打ちをしたのよ。だから、教えられない。私が悪いんだから」

「そうなの」

私は仕方なく、経緯を課長さんに言った。課長さんは刑事課の人達と話してから、

「わかったよ、まどかちゃん。ママにはもう天国に行くように行ってくれ」

課長さんの言葉の意味もよくわからないまま、私はママに告げた。

「わかったわ。ママ、もう天国に行ってね。仕事はしなくていいのよ」

「うん。ありがとう、お嬢ちゃん。それとね」

「何？」

ママは嬉しそうに、

「あっちの世界にも、スナックとかあるのかな？」

「さあ、私は行った事がないから」

「あはは、そうね。ごめんね」

ママはそう言うと、陽気な笑顔で天に昇って行った。

何か悲しかった。殺されても仕方がないから、犯人は教えられないって。

ママの魂の色は、そんな極悪人ではなかった。

犯人の逆恨みだと思う。

何ていい人なの、ママ。尊敬しちゃうわ。

私はママの遺志を尊重してもらおうと思い、課長さんに言った。

「ママの霊が、私は殺されても仕方のない女だから、犯人は教えられないと言っていたって、関係者の人達に教えて下さい」

「そんな事をして、どうするのかね？」

「いいから！」

私は強引にその作戦を課長さんに頼み込み、刑事課の人達にも協力してもらって、ママの知り合いの人達全員に話してもらった。

そして一週間後。

課長さんから連絡があった。

スナックに勤めていたウエイターの人が、自首して来たそうだ。

ママは、これを望んでいたのか？　それとも、本当に教えたくなかったのか？

もう知る事はできない。

でも、私は思った。

ママは庇って気がすんだだろうけど、ウエイターの人は、死ぬまでその罪の重さに耐えなければならないのよね。

もしかして、そっち？　ママはそれが望みだったの？

ずっと、ママを殺した事で苦しんで欲しかったの？

益々大人の世界が怖くなるまどかだった。

凄い生霊が現れたのよ！

私は箕輪まどか。小学校を卒業し、四月からは大人の女になるの。

中坊が何抜かしてんねん！　とか、あの関西のおばさんに言われそうだ。

実は暇である。

牧野君とは、卒業式以来全く連絡をとっていない。

何？　友達いないのかって？　うるさいわね。

たくさんいるわよ。何よ、バカにして！

そんな事で、今日は親友の近藤明菜の所に来ている。

え？　相方？　誰が女芸人なのよ！？

明菜は、私には敵わないけど美少女なんだから！

二人で街を歩けば、男の子なんてイチコロよ。

え？　歌が古い？　魔女っこ？　何の事よ、私は平成生まれよ！

メグちゃんなんて知らないわよ！

「何一人で話してるの、まどか？」

ほらごらんなさい、明菜の冷静な突込みが入ったじゃないの。

彼女は私と違い、霊感はない。でも、頭は私と同じくらい良い。

え？　大した事ない？　だからそういうチャチャ入れないでよ、話が進まないから！

「このままずっと部屋で貴女の独り言聞いているの、嫌なんだけど？」

明菜は腕組みをして私を見る。その視線が冷たい。

「じゃあ、どこかに出かけようか、明菜？」

私の提案に明菜は、

「私が出かけようとした時に貴女が来て、部屋で遊ぼうって言ったのよ」

とまた冷静に突っ込む。私は苦笑いするしかない。

「ごめん。やっぱり出かけよう、明菜。若者が部屋にいるなんて寂しいわ」

私の言葉を半目で見ている。明菜はどうしてこんなに大人びているのか。

羨ましいまどかだった。

そんな事で、私達は明菜の家を出て、ゲームセンターに向かった。

「ボウリングでもしようか、明菜」

「二人でしてもつまんないわ」

「じゃ、男子を呼ぶ？」

私は愛想笑いをして尋ねた。しかし明菜は、

「私、男嫌い。あいつら、嫌らしい事しか考えていないんだもの」

「そ、そうね」

明菜は、男子に何度もスカート捲りをされて、「同級生の男はクズ」と思っている。

私みたいに思いっ切り蹴り上げてやればいいのよ。そうすれば二度と捲られないから。

「それよりさ」

明菜は急に目をキラキラさせた。

「な、何？」

私はドキッとして明菜を見る。すると彼女は、

「貴女のお兄さん、今どうしてるの？」
と顔を赤らめて言った。
はあ？　何言ってんのよ、明菜？　エロ兄貴は今日は……。
「おう、まどか。こんなところで会うなんて奇遇だな」
何故か目の前にいたエロ兄貴。しかも同僚の里見まゆ子さんもいる。
「ああ、お兄ちゃん。もしかして、まゆ子さんとデート？」
私はすかさず突っ込む。するとエロ兄貴は、
「違うって。里見さんは俺になんか興味ないよ。ね、里見さん？」
うわあ。そんな事言われたら、まゆ子さん、泣いちゃいそう。
「そ、そんな事ないですよ」
まゆ子さんは苦笑いして答えた。頑張れ、まゆ子さん！
「まどかちゃんのお兄様ですか？」
そこへ強引に割り込む明菜。あんたねえ……。
「あ、君、まどかの友達の明菜ちゃんだよね？　まどかと違って可愛いなあ」

「あら、そんな事ありませんわ」

何なの、このバカ二人は？　もしかして、明菜ってエロ兄貴が好みのタイプ？

変だ。絶対変だ。

うん？　おかしい。明菜の身体に何か別のものが憑いてる。

もしや、生霊？

「誰、あんた？」

私は明菜に取り憑いている生霊に話しかけた。

「おや、気づいたようだね」

明菜は急に口調が変わり、顔つきまで変わった。

「な、何だ！？」

実はとてもビビりな兄貴は、ビックリしてまゆ子さんにしがみついた。

「ああ、箕輪さん、ちょっと！」

慌てながらも、嬉しそうなまゆ子さん。取り敢えず、おめでとう。

「私は小倉冬子。慶君とは高校時代付き合っていたのよ」

「何ですって？」

私はエロ兄貴を見た。エロ兄貴は首をブンブン横に振っている。

「違うみたいだけど？」

私は小倉冬子さんの生霊に言った。すると冬子さんは急に怒り出した。

「ふざけんじゃないわよ！　最近、慶君たら私の事忘れて、変な関西弁の女とデートしたり、ボーッとした東京女にうつつを抜かしたり、仕事の同僚の、大して胸もない女に色目を使ったりして！　許せないのよ！」

関西弁の女に関しては、私も同意するけど。

ボーッとした東京女って蘭子お姉さんの事？　酷い。

胸のない女って、まゆ子さんの事？

本人はエロ兄貴にしがみつかれたせいで、気づいていないみたいだからいいけど、酷い。

「どうでもいいけど、僻み過ぎなのよ、貴女は！　文句があるなら、お兄ちゃんに面と向かって言いなさいよ！」

私は頭に来たので思い切り怒鳴った。

「それから、私の友達の身体に取り憑いたりしないで！」

私は摩利支天の真言を唱えた。

「オンマリシエイソワカ！」

「ギャーッ！」

小倉冬子さんの生霊は絶叫し、消えた。

それにしても、とんでもなく気性の激しい人だった。

あんな同級生、いたんだ……。

「こ、怖かったよう！」

エロ兄貴は、まだまゆ子さんにしがみついて怯えていた。

まゆ子さんも嬉しそうだから、そのままにしとこう。

「あの……」

蚊の鳴くような声が背後でした。

「は？」

私は声の主を見ようと振り向いた。

そこには、黒縁メガネをかけた、地味ーな女性が立っていた。

服は上下黒で、髪は顔が半分隠れてしまうほど長い。

誰、この人？

「小倉さん？」

ようやく冷静さを取り戻したエロ兄貴が言った。

えええええ！？　この人が、さっきの生霊さん？

信じられない。

「ごめんなさい、箕輪さん。許して下さい」

小倉さんはそう言うと、ダッと逃げてしまった。

こうして生霊事件はあっさり解決した。

取り憑かれていた明菜は、私が家に行った事も覚えていなかった。

どうやらここ何日か、冬子さんに操られていたようだ。

まあ、何もなくて良かった。

いや、一つあった。

まゆ子さんが大変なのだ。

エロ兄貴にしがみつかれたので、その後倒れてしまった。

まあ、そのせいで兄貴がまゆ子さんを病院まで連れて行き、まゆ

子さんは夢のような時間を過ごせたらしいから、いいんだけどね。

これでまゆ子さんを私のお姉ちゃんにする計画が一歩前進した。

私、応援してるからね、まゆ子さん！

里見まゆ子さんを助けるのよ！

私は箕輪まどか。もうすぐ美少女中学生になる。

私の行く中学は、制服が可愛いので有名だ。

セーラー服なのだ。マニアなら垂涎（すいぜん）ものらしい。

難しい漢字なので意味がわからないけど。

今日は先日ある事が原因で入院した里見まゆ子さんのお見舞いに行く事になっている。

まゆ子さんは、県警の鑑識課勤務で、私のエロ兄貴の同僚である。

しかも、まゆ子さんはエロ兄貴に「ほの字」なのだ。

また！　「ほの字」が死語だっていう事は知ってるわよ！

「行くぞ、かまど」

エロ兄貴が言った。私は「かまど」と呼ばれるのが一番嫌いだ。

「やめてよ、お兄ちゃん！　蘭子お姉さんに言いつけるわよ」

「かまわんさ」

エロ兄貴は開き直った。何、この言い草は？

「もう、蘭子さんは過去の女性さ。未練はない」

「はあ？」

私は呆れた。え、でももしかして、ようやくこのエロ兄貴もまゆ子さんの良さに気づいたのか？

「今はM駅前交番の、代田（だいた）ひかり巡査が一番さ」

このエロガッパ！　お前は何を考えているんだ！？

そう叫びたかったが、今日はお見舞いの帰りにチョコレートパフェを食べるので我慢した。

食べ物で口をつぐむ情けない奴って思ったでしょ？

その通りよ。フンだ！

ごめんね、まゆ子さん、こんなダメな妹（まどか）で。

「あら？」

病院に着くと、様子がおかしい。

「何かあったんですか？」

兄貴が近くにいた美人看護師さんに尋ねた。看護師さんは兄貴に間近で見つめられて赤くなり、

「五号室の里見まゆ子さんの容態が急変したんです」
「ええ！？」
さすがの兄貴もビックリした。そして私も。
「まゆ子さん！」
そんなバカな！　まゆ子さん、病気で入院した訳じゃないのに！
私は走りながら、まゆ子さんの気を探った。
「お兄ちゃん、大変！　まゆ子さんが冬子さんに呪われてるわ！」
「何だって！？」
先日、まゆ子さんが入院するきっかけを作ったのが、兄貴の高校の同級生である小倉冬子さん。
その冬子さんは、兄貴に「ほの字」で、生霊となって私の親友近藤明菜に取り憑いていた。
私の優れた霊能力により、冬子さんの生霊を明菜から退け、事件は解決したはずだった。
でも冬子さんの執念は、そんなものでは収まらなかったようだ。
まゆ子さんの病室の前に着くと、すでに面会謝絶になっていて、兄貴が事情を説明したが、入れてもらえない。

「くそ、どうしたらいいんだ！？」

いつになく苛立っている兄貴を見て、私は希望を見出した。

「お兄ちゃん、方法が一つだけあるんだけど、やってみる？」

「どんな方法だ？　何でもするぞ」

兄貴は本当はまゆ子さんが好きなのかな？　そう思った。

「お兄ちゃんを幽体離脱させて、冬子さんのところに行ってもらうの。そして、冬子さんを説得するのよ」

「えええ！？」

ビビり出すヘボ兄貴。

「大丈夫なのか、そんな事して？」

「私を信じなさい」

「だから心配なんだ！」

イラッとするなあ。でも、まゆ子さんのためだから、この際我慢しよう。

「四の五の言わない！　えい！」

私は兄貴の了承も得ず（と言うか、話が長くなりそうなので）、

いきなり幽体離脱をさせた。

「ひいいい！」

自分が「幽霊」になったのに気づき、更にビビる兄貴。

「早く冬子さんのところへ行くのよ！　まゆ子さんが死んじゃうわ！」

「わ、わかった」

兄貴は渋々了解し、冬子さんのところへと飛んだ。

え？　普通に会いに行けばいいのでは、ですって？

それじゃあ冬子さんに伝わらないの。

兄貴が魂の叫びで冬子さんを説得してこそ、意味があるのよ。

しばらくすると、まゆ子さんの容態は回復し、嘘のように元気になった。

どうやら兄貴の説得がうまくいったようだ。

「お帰り」

「た、只今」

自分の肉体に戻り、ホッとしたのか、兄貴はその場にしゃがみ込んだ。

「うまくいったようね？」

私が言うと、兄貴は項垂れて、

「交換条件で、今度の日曜日にデートだ……」

「……」

うまくいったのかどうか微妙だ。ご愁傷様、エロ兄貴。

私達はまゆ子さんのお見舞いをすませて、ファミレスに寄った。

「えへ」

もう至福の時を過ごす私と対称的に、兄貴はションボリしていた。

私はそんな兄貴に追い討ちをかけるように、

「お兄ちゃんさ」

「何だよ？」

ムッとして私を見る兄貴。

「ホントはまゆ子さんの事が好きなんでしょ？」

「ど、どうしてそう思うんだよ？」

わかりやすくオロオロしている。

「人の魂は嘘を吐けないのよ。お兄ちゃんが幽体離脱した時、まゆ子さんに対する思いがはっきり見えたの」

私は嘘を吐いた。でも、こういうのを「嘘も方便」って言うのよね？

「……」

図星なのか、兄貴は何も言わない。

「可愛いとこあるのね、お兄ちゃんも」

「う、うるさいよ！」

赤くなる兄貴なんて初めて見た。

よかったね、まゆ子さん。まゆ子さんの思いは、通じているよ。

本格的なライバル登場なのよ！

私は箕輪まどか。

遂に中学一年生。大人の女よ。え？　お前はずっとお子ちゃまですって？

フフフ。今までの私だったら、汚い言葉で怒ったでしょうけどね。

もう大人の私は、それくらいの事では怒らなくてよ。

それにしても驚いたのは、あの上辺だけ付き合っているフリをしていた牧野徹君が、私立の中学に行かず、私と同じ公立に進んだ事だ。

ああ、美しいって罪ね。マッキーッたら、私の事が忘れられなかったんだわ。

男の人の人生を狂わせてしまうほどの美少女。ああ、私は自分の美しさが怖い。

「おい、いつまで独り言言ってるんだ、かまど」

ハッと我に返った。「かまど」は私にとって「ＮＧワード」なのだ。

普通の人がそれを口にしたら、死を以って償わせるところだが、相手がエロ兄貴では仕方がない。

ところで「NGワード」って何？

「何よ、お兄ちゃん！　かまどって呼ばないでよ！　私も中学一年生なんだから」

「関係ないね」

エロ兄貴は誰かの物まねをしたようだが、さすがの私もわからなかった。

「牧野君が来てるぞ」

私はまさしく猛スピードで玄関へと駆け下りた。

「いらっしゃい、マッキー……」

笑顔全開でドアを開いたが、一瞬にしてそれは凍りついた。

牧野君はいつも通りの天然キャラだったが、その隣に見たこともない美少女がいたのだ。

「こちら、どなた？」

私は顔が引きつるのを感じながら、尋ねた。牧野君はニッコリして、

「ああ、この子、僕のフィアンセの綾小路さやかさん」

「よろしく」

その美少女は勝ち誇った笑顔で私に会釈した。

フィアンセ？　フィアンセって何、なんてボケる事もできないほど、私は驚いていた。

「さやかさんと僕は、生まれた時からのフィアンセなんだ」

「そ、そうなの……」

途中から私の耳は何も聞こえなくなっていた。

どういう事？　私とは遊びだったの、牧野君！？

もう少しで彼を絞め殺しそうになるのを必死に堪えた。

冷静になろうとした。

あ。

綾小路さん……。まさか……。

この子、霊能者だ。それも、私より強力な。

彼女は牧野君を操っている。

二人はフィアンセなんかじゃない。

綾小路さんは、隣町の小学校出身で、牧野君とは本屋さんで偶然出会ったようだ。

それにしても、何て力なの。牧野君だけでなく、ご両親まで騙している。

『箕輪さん、聞こえるかしら？』

綾小路さんがテレパシーで話しかけて来た。

『もちろんよ。どういうつもりなの、こんな事して？』

『玉の輿に乗るのよ。牧野君の家は、お医者様一家ですからね』

うう。その点では、私は何も言えない……。

『邪魔しないでね。邪魔したら、貴女を消すわよ』

『何ですって！？』

『牧野君は諦めなさい。貴女程度では、私には敵わないわ』

それは確かにそうかも知れなかった。

「どうしたの、二人共？」

何も聞こえていない牧野君が不思議そうな顔で言った。

「何でもないわ、徹君。箕輪さんて、可愛い方ね」

「そ、そうだね」

綾小路さん。私は負けないわよ。今日のところは引き下がるけど、

このままではすまさないわ。

「じゃあね、まどかちゃん」

牧野君は綾小路さんと手をつないで帰って行った。

私はすぐに部屋に戻り、考えた。

自分の力を高めて、綾小路さんの力に対抗するためには……。

そうだわ。自分の好きなものを断って、願いを叶える呪法があったはず。

そうすれば、綾小路さんに勝てる。

えーと、何をやめようかな？

チョコレートパフェ？　無理。絶対無理。あれを諦めるくらいなら、牧野君を諦めるわ。

力丸ミートのコロッケ？　あれもおいしいしなあ。りっきーにも悪いし。

駅前のケーキ屋さんのモンブラン？　それも無理。あれなしの人生なんて考えられないわ。

む？　私、さっきから食べ物ばかり思いついてる。

しかも、牧野君と天秤にかけると、全部牧野君が負ける。

という事は？　牧野君を諦めるのが正解？

結局、堂々巡りのまどかだった。

リッキーが活躍（？）したのよ！

私は箕輪まどか。

中学校に進学して、新しい恋の予感。

私はこれほどの美少女だから、毎日男子達から逃げ回る事になりそうだわ。

大人のまどかは、更に魅力的だから。ウフ。

そう思っていた。

ところが、だ。

先日、わざわざ私（ひと）の家まで押しかけて、宣戦布告した悪役美少女の綾小路さやかが、

「箕輪まどかさんは、霊が見えるんですって」

と言いふらし、すっかり私は「オカルトキャラ」にされてしまった。

同じ小学校出身のお喋り共には、きつく念を押しておいたので、喋る事はない。

だから安心していたのだ。

男子ばかりでなく、女子達までもが私を恐れて近づいてくれない。

ううう。さやかめー！　あんたも見えるんでしょう！？

言いふらしてあげようかしら？

でもそれでは、あの悪役と同レベル。

私はそこまで次元が低くはない。

どちらかというと、次元大介はルパンより好きである。

おっと。そんな天然は、私の性（しょう）に合わない。

しかも私は天然は嫌いだ。

という訳で、さやかに直接抗議する事にした。

「ちょっと、綾小路さん」

私は廊下でさやかに声をかけた。

「あら、箕輪さん。私に霊が憑いているの？」

さやかはその悪役キャラ全開で、私に嫌味を言って来た。

途端に近くに来た男子も女子も、逃げ出す。

「違うわよ。話があるの。ちょっといい？」

「いやん。私を霊を使っていたぶるつもりね。徹君！」

か弱い女のフリをして、さやかは私の元彼の牧野君を呼んだ。
「まどかさん、さやかさんをいじめないでよ。可哀相だよ」
牧野君は操られたような棒読みで言った。
さやかの奴、まだ牧野君を？
「綾小路さん、貴女、卑怯だわ。誰かの力を借りないと、私と対決する事ができないのね」
「何ですって？」
さやかが本性を現した。目が凶悪だ。
「ホントは弱いんでしょ？」
私は更に挑発した。さやかは私を睨みつける。
「そこまで言うなら、いいわ。相手になってあげる」
さやかが気を高め始めた。げ。やっぱり私より凄そうだ。
「貴女も私の操り人形になりなさい」
彼女の目がギラッと輝く。
「オンマリシエイソワカ！」
私は摩利支天（まりしてん）の真言を唱え、さやかの邪気を跳ね除けた。

「やるわね。決着は放課後よ」

「ええ」

始業のチャイムが鳴ったので、私達はそれぞれの教室に戻った。

幸いな事に、さやかとは違うクラスなのだが、牧野君とも別。

しかもさやかと牧野君は同じクラスなのだ。

私のクラスには、親友の近藤明菜と、肉屋の力丸卓司君がいる。

「まどか、顔が怖いわよ。どうしたの？」

明菜は朝から失礼な事を言う。

「ごめん。ちょっとね」

私は作り笑いをして応じた。

私は憂鬱な思いでその日の授業を受けた。

「どうしたんだ、箕輪？　元気ないな？」

リッキー（力丸君のあだ名）は私に声をかけてくれた。でも彼には柔道家の兄はいない。

そう、今では彼は私と話をしてくれる数少ない友人。

「コロッケ食べるか？」

リッキーはかばんからビニール袋に入ったコロッケを出した。

「何で学校にそんなもの持って来ているのよ！」

私が注意すると、

「給食だけじゃ、腹がもたないんだよ」

リッキーはニコニコして答えた。

呆れるしかない。今日は食欲がない私の分までたいらげたのに。

「私、用事があるから」

リッキーには悪いけど、あいつとの決着はつけないと。

私はコロッケを一人で食べるリッキーを残し、さやかのクラスに向かった。

「遅かったわね。逃げたのかと思ったわ」

教室にはさやかが一人で待っていた。

「あら、牧野君は？　応援してもらわなくていいの？」

私が挑発すると、さやかは、

「貴女が制服をボロボロに切り裂かれてしまうのを見せたくないで

しょ？」

「あんた、変態？」

私は後ずさりして尋ねた。さやかはムッとして、

「違うわよ！　たとえよ、たとえ！」

「どうだか」

私は疑いの眼差しでさやかを見た。

「そこまで私をバカにするなら、もう容赦しないわ！　覚悟なさい！」

さやかがまた気を高めた。

来る！　私も気を高めた。勝てるの？　私の中の私が尋ねる。

「ああ、こんなとこにいたのか、箕輪」

そこへいきなりリッキーが入って来た。

「リッキー、危ないわ、出てなさいよ！」

私がそう声をかけた時、

「いやあああ、デ、デ〇ーッ！」

さやかが絶叫して教室から出て行ってしまった。

「何だ、あの女。失礼な奴だな」

リッキーはコロッケを食べながらぼやいた。

さやかの発言は一部の方を不愉快にさせるため、自粛した。

そうか。あの女、リッキータイプが苦手なのね。

ムフフ。これは面白い事になって来たわ。

「何、リッキー。私と一緒に帰りたいの？」

私はニコッとしてリッキーに言った。小首まで傾げてみせる。

「え、その、あの……」

可愛いわ、リッキー。照れてるのね。

「こ、これ渡そうと思って」

リッキーは封筒を差し出した。

ま、まさか！　これって、恋文（ラヴ・レター）？　ハートのマークで封をしてある。

リッキーッたら、突然すぎるわ。

それに貴方はタイプじゃないし。

「姉ちゃんが、お兄さんに渡してくれって」

「は？」

私は妄想を粉微塵に打ち砕かれた。

そしてちなみに、リッキーのお姉さんは彼とは似ても似つかない美人だ。

名前はあずさ。でも芸人ではない。力丸ミートの看板娘だ。

エロ兄貴、やっぱりもてるな。

私のお姉さん候補である里見まゆ子さんが、ピンチかも。

そして私も。

部活を見に行ったのよ！

私は箕輪まどか。

登校拒否一歩手前だ。

え？　お前はそんな繊細な奴じゃないって？

酷いわ。

いつもなら激怒するのに、今日は泣いてしまう。

それほど私は、あの偽物のセレブ女の綾小路さやかに意地悪をされていた。

陰湿さでは、小公女を上回るかも知れない。

明るい美少女が、暗い美少女になってしまう。

「ふう」

私は一人ベランダで溜息を吐いた。

「どうしたの、まどか？　元気ないね」

親友の近藤明菜が声をかけてくれた。

「ああ、アッキーナ。私、くじけそうよ」

私は本当に参っていたので、弱気な事を言った。

「綾小路さんの事？」

「ええ」

明菜は腕組みして、

「あいつ、本当に頭良いわよね。貴女に酷い事を言わずに、他の生徒達に貴女が幽霊を操れるって陰口言ってるんだから。これじゃ、先生に言っても取り合ってもらえないわ」

「うん……」

わかってくれているのは、彼女と肉屋のリッキーだけ。

頼みの綱のはずの牧野君は、完全にさやかの虜だし。

「気晴らしに、部活の見学に行かない？　まだ入部決めてないんでしょ？」

明菜が誘ってくれた。

「わかった」

本当は気乗りしなかったけど、明菜の心遣いに感謝して、行ってみる事にした。

「あ、俺も」

何故かリッキーもついて来る。相変わらず、コロッケを食べながらね。

明菜が連れて来てくれたのは、体育館。

そこでは、体操部やバスケ部、卓球部が新入生に練習風景を見学させていた。

「あ、危ない！」

声がした。ハッとして見ると、悪霊に操られたバスケットボールが、明菜に向かっていた。

「インダラヤソワカ！」

私はすかさず帝釈天の真言を唱え、ボールを弾き飛ばした。

「きゃあああ！」

その周辺にいた皆が、その衝撃に驚いて逃げ出した。

「やめてよ、箕輪さん！　幽霊を使って人を驚かすのは！」

その中には、さやかがいた。こいつ、自分で仕掛けておいて！

ムカついたが、証拠がない。

「箕輪じゃないよ。箕輪はアッキーナを助けたんだ。変な事言うな

よ、綾小路」

リッキーがコロッケを食べながら反論してくれた。

嬉しいわ、リッキー。後でコロッケ買いに行くからね。

「そうよ、綾小路さん。まどかに変な噂を流してるの、貴女でしょ？　やめなさいよ」

明菜もガツンと言ってくれた。

「みんな、見た？　この二人、箕輪さんに操られているのよ！」

さやかは怯えたフリをして叫んだ。

こいつ、どこまで嫌な女なのよ？

しかも、体育館の一同はすでにさやかの術中で、私を化け物を見るような目で見ている。

「え？」

操られたみんなは、バスケットボールやピンポン玉を持ち、私を睨んでいる。

「な、何するの？」

「やっつけて！」

さやかの号令で、一斉にボールが私目掛けて飛んで来た。

「危ない、箕輪！」
リッキーが命より大事なはずのコロッケを投げ出し、私を庇った。
「うう……」
リッキーにボールが当たり、彼は倒れてしまった。
「綾小路、あんたねええ！」
私は怒りを爆発させ、
「オンマリシエイソワカ！」
と摩利支天（まりしてん）の真言を唱え、さやかの術を消し飛ばした。
操られていたみんなはキョトンとして互いを見ている。
「く！」
さやかは悔しそうな顔をして逃げた。
「リッキー！」
私は倒れたリッキーに駆け寄った。明菜も駆けて来た。
「大丈夫？」
「うん。良かったよ、箕輪が無事で」

「リッキー」

私は思わず彼を抱きしめた。

「わ、わ、箕輪、恥ずかしいよ、やめてくれよ」

リッキーは顔を真っ赤にして言った。

「ありがとう、リッキー」

いつも素直じゃない私が、久しぶりに素直に言ったお礼だった。

え？　やっと素直じゃないのを自覚したのかって？

うるさいわね！

こうして、みんなに本当は綾小路さやかの陰謀だと気づいてもらえた。

「まどかさん、さやかさんをいじめないでよ」

それでも牧野君だけは操られたままだ。

でもいいや。今はリッキーがいる。

私はリッキーにウィンクした。

またリッキーは真っ赤になった。

可愛い。本当にありがとね、リッキー。

愛してはいないけど、好きよ。ウフ。

何故かエロ兄貴が活躍したのよ！

私は箕輪まどか。超美少女にして、優れた霊能者だ。

今日は学校はお休み。それにしてもムカつく。

結局、あの意地悪な同級生である綾小路さやかのせいで、部活の見学もできず、入部の申し込みもできないままだ。

ただ、私が悪い子でないのはわかってもらえたんだけど、霊感があるのもはっきりしたので、怖がられているのに変わりはない。

ま、今までと違って、小学校からの同級生達は普通に接してくれるのでホッとしたけど。

牧野君（もしかすると元彼だったかも知れない男子）は未だに操られたまま。

そして、騒ぎの当事者として職員室に呼び出されて、こってり説教された。

何故かさやかの奴は呼ばれず、私だけが叱られたのだ。

え？　自業自得？　うるさいわね、余計なこと言わないでよ！

ところで、自業自得って何？

さやかが難を逃れたのは、あいつの母親がＰＴＡの会長で、校長先生と知り合いだからしい。

証拠がないから、文句も言えないけど。

私は気だるい状態で起き出し、遅めの朝食を採ろうと階段を降りた。

「おはよう、箕輪」

「へ？」

何故か玄関に肉屋のリッキーがいた。

「わ、な、何よ！？」

私は慌ててキッチンに逃げ込んだ。パジャマ姿を見られたからだ。

どうして中にいたの？　今日はみんなお出かけで、鍵がかかっていたはずなのに！

「何であんたがそこにいるのよ、リッキー！？」

私は顔だけ覗かせて尋ねた。リッキーはヘラヘラ笑って、

「玄関が開いてたからだよ」

うわ。あのバカ兄貴、また鍵閉め忘れたな！

可愛い妹が、暴漢に襲われたらどうするのよ？

「と、とにかく、居間にいて。着替えて来るから」
「うん。お邪魔しまーす」
それにしても、勝手にドアを開けて入って来るなんて、リッキーも図々しいわね。
私は彼が居間に入るのを確認し、階段を駆け上がった。
「それにしても、何しに来たのかな？」
私は着替えながら、リッキーの訪問の目的を考えた。
まさか、デートのお誘い？
私は付き合うつもりはないけど、この前誤解を招く事をしてしまったからなあ。
一度くらいは、いいか。嫌いではないし。
「お待たせ。ところで、何の用？」
私は居間に入るなりそう言った。するとリッキーは、ニヤリとしてかけていたソファから立ち上がり、
「まあまあ、慌てないで。取り敢えず、座りなよ、箕輪」
「？」

何だ、こいつ？　様子が変だぞ。警戒しないと。
私はリッキーを見たままで、向かいのソファに座った。
何故かリッキーは立ったままだ。
「箕輪に伝えたい事があるんだ」
「何？」
私はギクッとして尋ねた。リッキーはいきなり私に近づき、
「ずっと好きだったんだ！　キスさせろよ！」
「えーっ！？」
もの凄い力で、私はソファに押し倒された。リッキーは体重を利用して私の動きを封じる。
「うーん」
唇をタコのように突き出し、リッキーが顔を近づける。
「やめて、リッキー！　貴方とはそんな関係にはなれない！」
「関係ないね」
急にリッキーの顔つきが変わった。もしかして！？
「貴方、操られているのね？」

でも全く表情が変わらない。さやかめ！

「オンマリシエイソワカ！」

摩利支天（まりしてん）の真言を唱えた。

「わあああ！」

リッキーに取り憑いていた悪霊が消滅し、リッキーは気を失った。

「ぐえええ」

私はリッキーの身体に押し潰されそうになった。このまま死んだら、もの凄く恥ずかしい！

「おいおい、まどか。こんな時間から、お盛んだな」

何故かバカ兄貴が居間に入って来て言った。

「バカ言ってないで、こいつどかしてよ！」

「仕方がない」

兄貴は肩を竦めてリッキーを私の上からどけた。

「何があったんだ？」

いつもと違い、兄貴が真剣な表情で尋ねる。

私は気を失ったままの哀れなリッキーを見て、
「ちょっとね」
と理由を説明した。

「なるほど。それは少しやり過ぎだな、その子」
兄貴は深刻な表情で言った。
「わかった。お兄さんに任せなさい。見事に解決してみせよう」
「はあ？」
兄貴がおかしくなった。ホントにそう思ってしまった。

その後、リッキーは目を覚ました。何故私の家にいるのかわからないらしい。
心優しい私は、あの悪夢のような出来事をリッキーには話さず、彼を送り出した。
それより心配なのは兄貴だ。一体何をするつもりなのだろう？
しばらくして兄貴が帰って来たが、何も教えてくれず、

「学校に行けばわかるさ」
とだけ言った。

そして月曜日。
私は不安な思いを抱きつつ、学校に行った。
「おはよう、箕輪さん」
さやかがにこやかな笑顔で私に近づいて来た。
「お、おはよう。何か用？」
警戒心ＭＡＸで尋ねる。するとさやかは、
「あらあ、そんなに睨まないでよお。今までごめんなさいね」
「え？」
私はまだ何か企んでるのかと思い、さやかから離れた。
「知らなかったのよ、貴女が妹さんだって」
「？？？」
謎の言葉。何なのよ？

そして謎が解けた。

私の兄貴が、さやかのお姉さんと大学の同級生だったのだ。

あのエロ兄貴、どこまで女性関係を拡大して行くんだ？

まゆ子さんはどうなるのよ？

お姉さんはもう結婚して子供までいるらしいのだが、兄貴の事を覚えていて、

「慶君の妹さんと仲良くね」

と言われたのだそうだ。二人はちょっとだけ付き合っていたらしい。

兄貴はエロだが、別れ際は鮮やかで、今まで付き合っていた女性に怨まれた事はない。

もちろん、勝手に恋人気取りだった「冬子さん」は別だ。

「その代わり、牧野君の事を諦めてくれたんですってね。ホッとしたわ」

さやかはそう言うと、自分の教室に歩いて行った。

ええええ！？　あのバカ兄貴、勝手にそんな事を交換条件にしてえ！

まあ、いいわ。牧野君はもう過去の男だし。

あれ？　涙が止まらない。うううう……。

再びあの人が登場したのよ！

私は箕輪まどか。超絶美少女にして、優れた霊能者だ。

どうも最近、自己紹介の内容があまりにも自信満々な感じで、ちょっとだけ気にかかる。

このところ、あの尊敬している西園寺蘭子お姉様から連絡がない。

「今度中学生になりました」

とメールをしたのに、返事がない。

もしかして、進学祝を請求したと思われたのだろうか？

関西のオバさんと一緒にしないで欲しいけど。

ちょっぴり寂しいまどかである。

そして、連休の初日に蘭子お姉さんから電話があった。

それも何故か家電（いえでん）にである。

「どうしたんですか、お姉さん？」

私はとても不思議に思って尋ねた。

「携帯が壊れて、データが全部消えてしまったの。ごめんなさいね、メールいただいたみたいで」

「そうだったんんですか。良かった、嫌われたのかと思ってました」

私は冗談ではなく、本当にそう思いかけていたのだ。

最近、マイナス思考なのだ。

「まさか。まどかちゃんは大事な親友よ。あ、もう中学生だから、まどかさんの方がいいかしら？」

嬉しい。涙が出そうだ。ただ、「もう中学生」という言葉にはギクッとした。

私は芸人ではないのに。

「まどかちゃんでお願いします。まだまだ子供ですから」

私がおどけて言ったので、蘭子お姉さんはクスクス笑っているようだ。

「そう？　十分大人だと思うわよ」

「ありがとうございます」

で、どうして電話をかけて来たのかな？

「そうそう。用件を忘れてしまうところだったわ」

蘭子お姉さんてば、お茶目さんね。

「麗華がそちらに出向いたの」

「え？」

誰、麗華って？　ああ、関西のオバさんか。そんな名前だった気がする。

「あの子ね、東京で知らない女性とデートしている慶一郎さんを見かけて、逆上していたわ」

「ええ？」

慶一郎とは私の兄貴だ。東京でデートって、誰と？

「だから、慶一郎さんに避難するように伝えてほしいの」

遅かったかも知れない。

記憶が定かではないのだが、兄貴は朝早く出かけた。

思えば顔色が悪かったような気がする。

「手遅れです。もう拉致されていますよ、兄は」

私は残念でならないという感じで、蘭子お姉さんに答えた。

「もう？　さすがに早いわね、麗華は」

「ええ」

私は兄貴の消息を知るため、携帯にかける事にし、蘭子お姉さんとの通話を終えた。

お姉さんも心配なのでG県に来るそうだ。

でも、兄貴のデート相手って、誰？

あのオバさんが知らないのだから、同僚の里見まゆ子さんではないし。

むむむ？　一体誰だろう？　また新しい彼女？

「あ！」

その時、兄貴から着信あり。

「どこにいるの、お兄ちゃん？」

私はすぐに携帯に出て尋ねた。

「まどかー、助けてくれー！　麗華さんがピンチなんだよお」

「ええ？　どういう事、お兄ちゃん？」

ブツッと通話が切れ、かけ直しても繋がらない。電源を切られたようだ。

オバさんがピンチって、どういう事？

何が起こっているのよ？

とにかく、兄貴の居場所を探らないと。

私は気を集中し、兄貴の気を探った。

あれ？　意外に近いぞ。

私は現場へと走った。

うん？　このダークな気は、覚えがあるぞ。もしかして……。

私が到着したのは、家の近くにあるショッピングモール。

兄貴達は、その屋外駐車場の端にいた。

「お兄ちゃん！」

私は大声で呼びかけた。

「まどかあ！」

兄貴は情けない声で応じた。

そこには、兄貴の他に関西のオバさんとあの小倉冬子さんがいた。

見た目はあの「テレビから這い出て来る人」にそっくりだ。

オバさんは冬子さんの呪い攻撃で倒れていた。

オバさんの周囲には、黒い妖気が漂っている。

冬子さんは兄貴の携帯をベキッとへし折り、投げ捨てた。

それにしても、冬子さんて、もの凄く強いのね。

「慶君、こんな下品な女と付き合ってはダメよ」

「は、はい」

すでに兄貴は恐怖のあまり冬子さんの言いなりになっていた。

「まだ懲りてないの、あんたは！？」

私は冬子さんの前に立ち、怒鳴った。冬子さんは、長い髪の間から私を見る。

怖い。怖過ぎるよお。

「あら、まどかちゃん。今度中学生になったんですってね。私も何かお祝いあげなくちゃね」

「は、はい」

そうか、私は兄貴の身内だから、敵意はないのか。

でもこのままじゃ、「まゆ子さんお姉さん化計画」が遂行できないわ。

「冬子さん、お兄ちゃんは貴女の事好きじゃないのよ。つきまとうのはやめて」

しかし、冬子さんには通じていない。

「まあ、まどかちゃんたら、私にお兄さんを取られて、ヤキモチ妬いてるのね」

スーパーが付くようなプラス思考だ。

どうしたらわかってくれるのだろう？

兄貴が言えれば一番いいのだが、今はそんな状態ではない。

生まれたてのチワワ並みに震えている。

よし、もう最後の手段だ。

「冬子さん、お兄ちゃんは、好きな人が東京にいるの。その人の名前は西園寺蘭子さんよ」

「さいおんじ、らんこ？」

冬子さんは首を傾げて、そう呟いた。

ごめんなさい、蘭子お姉さん。冬子さんに勝てるのは、お姉さんしかいないわ。

後の事、よろしくお願いします！

私は無責任にも小〇政権のように丸投げしてしまった。

「ひいいいい！　さいおんじ、らんこ？　さいおんじ、らんこ！」

何故か冬子さんはそう叫び、その場から駆け去ってしまった。

何だ？　わけがわからない。

それからしばらくして、蘭子お姉さんがやって来た。

お姉さんは関西のオバさんを復活させ、リベンジを叫ぶオバさんを宥めて車に乗せた。

そして、私が事件の全貌を説明した。

「小倉冬子さんか……。何か聞き覚えがあるような気が……」

しばらく蘭子お姉さんは考え込んだ。

「ああ、思い出した。小学校の同級生にいたわ、同じ名前の子が」

「お姉さんて、G県出身なんですか？」

「違うわ。冬子さんが東京にいたのよ。それで、お父さんの仕事の都合で三年生の時に転校したのよ」

「そうなんですか」

あ、しまった、またこのフレーズを……。言いたくなかったのに！

「よく遊んだから、覚えているわ。そうか、あの子だったのか」

私は懐かしそうに笑う蘭子お姉さんを見て、ふと思った。

あれほど強力な力を持ち、関西のオバさんすら倒した冬子さんが、蘭子お姉さんの名を聞いただけで逃げてしまった。

当時、一体何があったのよ？　その方が気になった。

追伸

以前冬子さんが登場した時に「ボーッとした東京女」と言っていたのは、蘭子お姉さんではないらしい事をここで言い添えておきます。

まどか

今回はバッドエンド（？）なのよ！

私は箕輪まどか。美少女で、霊能者でもある。

親友の近藤明菜に誘われて、部活の見学をいくつかしたけど、どうにも気が乗らないので入部を断念した。

私はスポーツが苦手な訳ではない。

もちろん、文化部でもいいのだが、そちらは尚更気が乗らない。

あの意地悪な綾小路さやかとは和解して、今では普通に話すようになっていたが、あいつの残したしこりは大きく、結局、

「箕輪まどかは霊が見える」

がどんどん一人歩きし、私はまるで魔女のような扱いになってしまった。

明菜とリッキーが励ましてくれたおかげで、不登校にはならなかったが、それでも部活をしようという気にはならなかった。

「元気出せよ、箕輪」

肉屋のリッキーはそう言ってコロッケを差し出す。

「リッキー、私を出荷したいの？」

そんなものばかり食べていたら、美少女が台無しになってしまう。

「太った豚より痩せた女芸人」

ということわざを知らないのだろうか？

え？　そんなことわざない？　うるさいわね！

「大丈夫だよ。ウチの姉ちゃんは俺より食うけど、全然太ってないよ」

リッキーは笑顔で返す。それはまた羨ましい体質だこと。

確かにリッキーのお姉さんは、美人でスタイルいいのよね。

エロ兄貴が店に通う訳だ。

「ありがとう。でも、今はいいよ」

私は遠慮ではなく断わった。

「そうか。明日はメンチカツ持って来るよ」

全然通じていなかった。コロッケに飽きたわけではないのに。

そして下校時。

帰宅部の私は、サッサと校舎を出て、家へと向かった。

「箕輪まどかさんですね？」

突然声をかけられ、私はギクッとして声の主を見た。

「誰？」

眉間に皺を寄せて尋ねる。パッと見、もの凄く怪しいオジさんが二人。

「警視庁の捜査一課の者です。G県警の鑑識課の紹介で来ました」

「え？　紹介？」

G県警の鑑識課とは、私のエロ兄貴が勤務している部署だ。

仕事の依頼？

「貴女に霊視して欲しい場所があるのです」

「？？？」

返事を待つ訳でもなく、私はそのオジさん二人に抱えられるように連れて行かれ、黒塗りの車に押し込められた。

「ちょっと、何よ、私の都合も聞かないで！」

私は喚き散らした。

「ご両親には連絡済です。時間がないのです」

オジさんの一人は私の隣に乗り、もう一人は運転席に座った。

「現場に向かいながら説明します。失礼はお許し下さい」

二人のオジさんは、捜査一課の刑事で、東京とG県で連続して起きている通り魔殺人の犯人を追っているのだという。

その事件は、兄貴たちも関わっている。

何のつながりもない人達が、次々に殺されているのだ。

つい昨日、兄貴たちと一緒に現場に行き、霊視したばかりだ。

東京の事件とつながったのは、犯人が現場に残して行く血文字。

「天誅」

いつもその言葉が、被害者の血で近くに書かれているのだ。

私は現場で感じた事を兄貴達に伝えた。

犯人は二十代の男。痩せていて、目が異常なまでに鋭く、いつも何かブツブツと呟いている。

自分に自信があり、決して捕まらないと思っている相当な自惚れ屋。

只、わかったのはそこまでで、何故かそいつのいる場所はわからなかった。

「役に立たないな」

エロ兄貴に酷い事を言われ、ムッとしたのを思い出した。

私自身、どうして犯人の居場所がわからないのか不思議だった。

だから、兄貴の暴言はあまり気にならなかった。

「犯人はわからなかったんですよ」

私はあっさりと降参宣言した。しかし、隣に座っているオジさんが、

「それなんです。ある現場で、妙なものが見つかりまして。それを是非見て欲しいんです」

「ここまで持って来てよ。私、忙しいんだから」

イライラして言ってしまった。ところが、

「持って来られないものなんです。とにかく、見て下さい」

と運転席のオジさんが口を挟んだ。

隣に座っているのは、田中刑事、運転しているのは山根刑事だと名乗られた。

どこかで聞いた事がある気がするが、気のせいだろう。

到着したのは、東京のはずれ。山々が迫って来るような森の奥だった。

「こちらです」

すでに薄暗くなって来ている山道を、途中からは徒歩で進む。

辛い。運動してない私には、とても過酷だ。

「え？」

私は、急にそれを感じた。

「こっちね！」

「あ！」

私がいきなり走り出したので、二人のオジさんは慌てた。

「危ないですよ！」

そんな言葉には耳を貸さず、私は現場へと走る。

そうか。そういう事だったのか。だから居場所がわからなかったんだ！

現場に辿り着いた。そこにも、「天誅」の血文字は書かれていたが、現場の脇にある大きな石に別の言葉が血で書かれていた。

「それです。どういう意味か、わかりますか？」

田中刑事が息を切らせて尋ねる。

私は、石を見て、

「終わりでしょ？　それ以外、どう解釈するのよ？」

「え？」

田中・山根の両刑事はキョトンとした。

「犯人は、死んでいるわ。だからどこにいるのかわからなかったのよ」

「ええ！？」

仰天するオジさん二人。そのうち踊り出すのかな？

「悪霊が人から人へと渡り歩いて殺人を繰り返していたのよ。最初に私が霊視した犯人像は、その時殺された被害者の残留思念だったの」

「はあ」

高度な話なので、刑事さん達は理解できないらしい。

「事件は終わり、という事ですか？」

「取り敢えずはね。でも、また起こるかも知れない」

私は石の血文字を見たままで、

「こいつは、面白がっているのよ。人を殺すのが楽しいみたいね。許せないわ」

私の言葉に、オジさん刑事は固まってしまった。

この悪霊、またやらかすわ。

でも今度は惑わされない。

絶対に捕まえてやる！

怒りに燃えるまどかだった。

超悪霊をやっつけるのよ！

私は箕輪まどか。中学一年生の超美少女にして、霊能者だ。

先日、殺人を楽しんでいる悪霊に逃げられてしまい、とても悔しい思いをした。

でも、相手は霊。捕まえたところで逮捕もできないし、裁判にかけて刑務所に送る事もできない。

どうする事もできないのだ。

しかし、私は何としても、あのムカつく悪霊をぶちのめしたかった。

人の命を何だと思っているんだ！

え？　お前にそんな正義感があるとは思わなかった？

失礼ね。私は正義感の塊よ！

誰、今、「脂肪の塊」って言ったのは！？

私の抜群のプロポーションを見てから言って欲しいわ。

え？　スリーサイズ？　そんな事、教えられないわよ。

セクハラで訴えるわよ！

そんな事で、私は一人部活として、悪霊探しを始めた。

奴の気はこの前感じたので、付近に現れればすぐに探知する自信はある。

でも全く現れる様子がない。

考えてみれば、あいつがまた現れるなんて保証はないのだ。

さらに悔しくなった。

「あーあ」

何かヒントはないかと思い、エロ兄貴に連絡した。

「小遣いならあげないぞ」

私からの連絡だと、必ずその言葉を言う。多分、この兄貴はバカなんだと思う。

「違うよ、お兄ちゃん。この前の悪霊の事件なんだけどさ」

「ああ、お前が犯人を取り逃がした事件か？」

相変わらず酷い事を言う。その前に冬子さんから守ってあげたのを忘れているの？

「その事件の資料、見せてもらえないかな？」

「鑑識にあるから、勝手に見ろ。話は通しておくよ」

「ありがと、お兄ちゃん。大好きよ」

お世辞で言ったのがわかったのか、何のリアクションもなく通話が切れた。

私は早速県警本部に向かった。

蘭子お姉さんのように、真言で高速移動ができるといいんだけど、私にはまだ無理。

県警本部は家から自転車で十五分。それほど遠くないので助かった。

「よう、まどかちゃん。兄貴は出かけてるぞ」

鑑識の最古参である宮川さんが言った。鑑識の制服を着ていなければ、百パーセントヲタクだ。

「知ってます。今日は兄貴に会いに来たんじゃないです」

「じゃあ、オジさんに会いに来たの？」

う。この人、そういう人だったのを忘れてた。

警察関係者はそういう人が多いのだろうか？（＊あくまで個人的な意見です）

「あはは、さよなら～」
私は宮川さんから逃げ出した。
そして資料室を探し当てて中に入った。
「いらっしゃい、まどかちゃん」
そこには私のお姉さん候補ナンバーワンの、里見まゆ子さんがいた。
「こんにちは。まゆ子さんがいてくれて、助かりました」
「え？　どうして？」
私はドアを閉じながら、
「宮川さんに会ったんですよ」
「ああ」
まゆ子さんも、宮川さんがそういう人なのを知っているようだ。
「はい、これがあの事件の捜査資料よ。何を探すの？」
まゆ子さんはニコニコして、手伝う気満々だ。
「何って、具体的に何かある訳じゃないんですけど」
「そうなの」

まゆ子さんはガッカリしたようだ。でも本当なんだから仕方がない。

「取り敢えず、見せて下さい。何か感じられれば……」

「わかったわ」

一度見た捜査資料。そこから何かわかるとは思えなかった。

しかし、あいつの気を間近で感じて、あいつの考えている事が少しだけわかったような気がするのだ。

気がするだけなんだけど。

いくら何でも、本当に誰でも良かったとは思えないのだ。

「あれ？」

ふと手を止める。

「何かわかった？」

別の資料を見ていたまゆ子さんが顔を上げる。

「まゆ子さん、これ」

私は二人の被害者の資料を指し示した。

「どっちの人も、もうすぐ結婚する予定でした」

「え？」

まゆ子さんの顔が引きつる。「結婚」はＮＧワードなの？

私、まゆ子さんに殺されちゃう？

「それは誰も気にしていなかったわね。凄いわ、まどかちゃん。さすがね」

「えへへ」

私はすっかり嬉しくなり、他の被害者の資料も調べてみた。

恐ろしくなった。本当に全員が、男女問わず結婚間近だったのだ。

「そんな事が、殺害動機だって言うの！？」

あの温厚なまゆ子さんが大声を出した。

やっぱり「結婚」はＮＧワードのようだ。以後気をつけよう。

でも確かに酷い。人の幸せを妬むにも程がある。

これであいつの動機はわかった。となれば、罠も仕掛けようがある。

「ねえ、もう一つ共通項があったわ。式場が同じ系列の会社なのよ」

まゆ子さんが震える声で言った。

ムフフ。これで罠を仕掛ける場所も決まった。

「な、何、まどかちゃん？」

私はニヤリとしてまゆ子さんを見た。

まゆ子さんはその私の目に何か恐ろしいものを感じたようだった。

「何で俺がこんな事をしなくちゃならないんだ？」

さっきから助手席のエロ兄貴がうるさい。五月の蝿より鬱陶しい。

「す、すみません、私のせいで……」

運転席のまゆ子さんが申し訳なさそうに言う。

私の作戦は、ずばり、「あつあつカップルを演出して、悪霊を呼び出そう」作戦である。

要するに、兄貴とまゆ子さんにカップルになってもらい、式場に行ってもらうのだ。

そうすれば、あの悪霊が現れるという段取り。

「お兄ちゃんだって嬉しいくせに」

私は後部座席でニヤニヤして言った。すると兄貴は、

「黙れ、かまど！」

とかなりおかんむりである。

「こんな子供でも引っかからないような罠、成功するのか？」

「やってみなければわからないじゃん」

私はちょっとだけムッとして言い返した。すると顔が赤いまゆ子さんが、

「そ、そうですよ。やってみなければわかりませんよ」

「けっ」

兄貴はまゆ子さんにそう言われて、仕方なさそうに黙り込んだ。

間もなく車は式場に到着し、私は車の中で悪霊の登場を待つ事にした。

「ホントに現れた時、お前間違いなく助けてくれるんだろうな？」

ビビりの兄貴が念を押す。

「もちろん。それは心配しないで」

私には秘策があったのだ。

「行きましょう」

すっかり恋人気分のまゆ子さんは、グイグイと兄貴を引っ張って行った。

ついでにこのまま結婚しちゃえばいいのに、なんて思ってしまった。

「え？」

私はあの気配を感じた。

（嘘？　もう現れたの？）

奴の居場所を探る。

「え？」

奴は外にいた。あれ、これはどういう事？

気を探って見つけたのは、奴ではなく、おっさんだった。

「あんた、誰！？」

いきなり背後から怒鳴る。おっさんはビクッとしたが、

「おお。お前か、箕輪まどか。久しぶりだな」

といかにも知り合いのような口ぶりで話しかけて来た。

「ごめん、マジで知らないんすけど？」

私の本気の謝罪におっさんはショックを受けていた。
「何だと！？　この私を忘れたというのか？」
「うん」
更に止めを刺す私。基本的にオヤジには容赦がない。
「私は陰陽師の安倍利明（あべりめい）だ」
名前を言われても、知らないものは知らない。
「全くわからない」
「……」
おっさんは項垂れていたが、
「ならば、知らずに死ね！」
と言うと、あの悪霊を呼び出した。
「あんたが黒幕なの、おっさん？」
「おっさんじゃない！　私はまだ三十一歳だ！」
おっさんは何故か誇らしそうに言った。
「十分おっさんよ！」

中学生の女子にとって、三十代はおっさんである。これは仕方がない。常識だ。

「抜かせ！」

おっさんは激怒したようだ。悪霊が私に向かって来た。

もっと苦戦するかと思ったんだけど、案外簡単に終わりそうだ。

そこ、拍子抜けとか言わないでよ。先に釘刺しとくからね。

「インダラヤソワカ！」

私は帝釈天の真言を唱え、悪霊に雷撃を見舞った。

しかし、悪霊はそれを難なくかわし、更に私に接近した。

「この前の礼をさせてもらうぞ、箕輪まどか！」

おっさんは私が覚えていないと主張しているにも関わらず、まだしつこく言っている。

変態なのだろうか？

「インダラヤソワカ！」

私はもう一度雷撃を放つ。しかし悪霊はそれをかわしてしまう。

「グアオーッ！」

悪霊は雄叫びを上げて、私に突っ込んで来た。

「待ってたわよ、この外道！」

私は制服の下からお札を出した。

この前、蘭子お姉さんからもらった強力なお祓いのお札である。

「フグオーッ！」

悪霊はお札の放つ力でもがき苦しみ始めた。

やがて悪霊は粉々に砕けて霧状になり、消滅した。

「な、何と！」

おっさんは仰天している。私はツカツカとおっさんに近づき、

「ようやく思い出したわ。はい、これあげる」

とカエルを渡した。

「ぎえええっ！」

おっさんはまさしくカエルのような声を発して、そのまま仰向けに倒れてしまった。

こうして、あの事件の犯人は呆気なく倒れた。

おっさんは、ライバルの会社に依頼され、その式場に訪れるカップルの片方を悪霊に襲わせていた。

何故二人共襲わなかったのかと言うと、その理由が怖い。

愛する者が命を落とす事によって、残された者が出す「負のオーラ」が悪霊を活性化させるのだと言う。

何て恐ろしい事を考えるのか？

どうやらおっさんは、ライバル会社の要望以上に、自分の野望を達成するために動いていたようだ。

ライバル会社の重役達を事情聴取したところ、人を殺せとは頼んでいないと言ったそうだ。

怖がらせて帰らせるように頼んだと言う。

おっさんはその状況を悪用し、罪のない人達をたくさん殺し、悪霊を育て、自分の野望を叶えようとしていたのだ。

そんな奴のバカげた望みのために命を失った人達があまりにも可哀想で、私は泣いた。

そして同時に祈った。

迷わず、天国に行けるようにと。

でも重役達も酷い。

人が殺されたのはニュースで知っていたはずなのに、警察に届けなかったのは、許せる事ではない。

彼等は我が身可愛さに口を噤んでいた。

きっと彼等は地獄に堕ちる。そう思った。

いつになくシリアスな話になったので、いつになくセンチメンタルなまどかだった。

生活指導室に初めて入ったのよ！

私は箕輪まどか。超絶美少女にして、最強の霊能者。更に成績優秀な、スーパー中学生である。

言ってて、自分で恥ずかしいわ。いつの間にそんなに大袈裟なプロフィールになったのよ？

最近は、学校生活には何も支障がない。

あの犬猿の仲だった綾小路さやかも、私が牧野君を諦めたというウチのエロ兄貴の誤情報によって、すっかり大人しくなり、私に仕掛けてくる事はない。

次第に私は、周囲から怖がられる存在から、好かれる存在に変貌しつつあった。

うう。難しい言葉で話すと、舌噛みそう。

こんな可愛い女の子が、好かれないはずがないのだ。

え？　そういう事は、自分で言わないのが普通ですって？

うるさいわね。余計なお世話よ！

「箕輪、ちょっといいか？」

「は？」

私は廊下を歩いていて、突然生活指導担当の藤本先生に声をかけられた。

四十代の体育の先生で、女子達の間では「セクハラエロ教師」で有名だ。

それにしても、スカートの丈は短くしてないし、髪も校則違反じゃないのに。

やっぱり、セクハラ目的？　私が可愛過ぎるから？

「話があるんだ。中に入ってくれ」

私は、普段決して足を踏み入れる事がない生活指導室に招き入れられた。

「な、何でしょうか？」

背中を見せると危険だと思い、すぐに藤本先生を見る。

「まあ、座ってくれ。話は長くなると思うから」

「はい」

私は言われるがままにパイプ椅子に座った。

藤本先生はいつもと違い、テンションが低い。どうしたのだろう？

それが作戦？　騙されないわよ、エロ先生！

「そんなに緊張しなくていいよ。別にお前を咎めるために呼び止めたんじゃないから」

藤本先生は、力なく微笑み、私の前にパイプ椅子を持って来て座った。

「はい？」

私はますますわからなくなった。それにしても、ちょっと顔が近いんすけど。

ああ、先生の顔がでかいだけか。どこかで聞いたギャグとか言わないでよ。

「実は、ここ何日か、死んだ女房が学校の行き帰りに現れるんだ」

「え？」

そっちの話？　何だ、驚かさないでよ。

「お前、幽霊が見えるんだろ？　女房に理由を聞いて欲しいんだ。どうして急に出て来るようになったのか」

「はあ」

私は先生の後ろに、奥さんの霊がいるのに気づいた。不意に現れたのだ。

「今聞いてもいいですか？」

私の言葉に、先生はギクッとした。

「い、いるのか、ここに？」

先生は、酷く慌てたように周囲を見始める。

「奥さんが亡くなったのは、もう十年前なんですね」

「そんな事もわかるのか？」

藤本先生は驚いて目を見開いた。私を誰だと思ってるのよ、先生？

「もちろんです。そして、どうして奥さんが現れたのかもわかりました」

私は奥さんの霊から先生に視線を移して言った。

「お、俺をまだ怨んでいるのか？」

先生がそう言ったのには理由がある。

奥さんは十年前、交通事故で亡くなっている。

出先で車が故障した藤本先生が、迎えに来てくれるように頼み、そこへ向かう途中での事故だ。

確かにその時、先生は奥さんのご両親に随分と罵られた。

先生は何も言い返さなかった。

そして、奥さんのご両親は、そのまま先生との関係を絶ち、今日まで行き来がないままなのだ。

藤本先生と奥さんには子供がいなかったため、連絡さえもなくなった。

「奥さんは先生を怨んでなんかいませんよ。ご両親との関係が途絶えているのを悲しんでます」

「……！」

藤本先生の顔色が変わった。

「でも、何で今更……。十年も途絶えたままなのに……」

「わかりませんか、先生？　十年経てば、人は老いるんですよ」

私は奥さんの思いをそのまま先生に伝えた。

「ご両親が、奥さんの弟さんとの同居を弟さんの奥さんに拒まれて、困っているんです。助けて欲しいと言ってます」

「……」

あの藤本先生が泣いている。デジカメで撮りたいくらいだが、私もそれほどバカではない。

「会いに行ってあげて下さい」

私はそう言い残すと、生活指導室を出た。

我ながらいい事をしたと思う。心が満足感で溢れた。

そして翌日、

「箕輪まどかは藤本と付き合っている」

という、とんでもないデマが飛びかったのは、本当にムカついた。

果たし状が届いたのよ！

私は箕輪まどか。優れた霊能者であり、神がかった美しさの中学生である。

ああ。

言ってて虚しい。私はそれほど傲慢ではないよ。

誰かのセリフをパクりたい心境だ。

先日の感動的な事件から一週間。

私の生活リズムは、すっかり通常に戻っていた。

その私の生活をかき乱す事が起こった。

「おーい、まどか。お前に果たし状が届いてるぞ」

「キャーッ！」

私のバカ兄貴は、G県警の鑑識課員であるが、エロ男爵でもある。

と言うか、妹の私にはまるで気を遣う事がない失礼な兄貴だ。

「お兄ちゃん、入る時はノックしてよ！　それから、いくら兄妹（きょうだい）でも、いきなり入って来ないで！　プライバシーの侵害よ！」

私は脱ぎかけたパジャマを慌てて着直した。

「お前にプライバシーを語る資格はない」

「何でよ！」

「ほれ」

バカエロ兄貴は、私の抗議を無視して、白い封筒を置いて出て行った。

「何、これ？」

宛名は私だけど、住所が書いてない。そして裏には差出人の名前がない。

「誰からだろ？」

私は封筒の口を切り、中から便箋を取り出す。

書いてあったのは、たった一言。

「お前をぶっ飛ばす」

それにしても下手な字だ。小学生でももう少しましな字を書く。

でも何か妙だ。

中身は脅迫状みたいだけど、封筒は可愛い子犬のイラストが入っ

ている。

残念な人からの手紙？

「あ！」

そこでハッと気づく。

あのエロ兄貴、またしても鑑識課のプロの技を使って、封筒の中身を見たな！

いつか仕返ししてやる！

私は書いた人間を探るために、便箋に意識を集中した。

隣町？　差出人は、中学生男子。男子？

前に私がフルボッコにした奴とは違う。

結構好みのタイプかも。

野生的で、喧嘩が強くて、でも女子にはさり気なく優しい。

あ。

そうだった、こいつは私をぶっ飛ばすと言ってるんだ。

心惹かれてどうする、まどか！

でも何で？　理由がわからない。

「あれ？」

ふと時計を見ると、もうすぐ始業ベルが鳴る時間。

「ギエーッ！」

私は大慌てで着替えをすませ、何も食べずに家を飛び出した。

私の家族は何て白状揃いなの！？

考えてみると、お父さんもお母さんも、家を出るのが早いのだ。

ううう。

学校に辿り着くと、すでに校門は閉ざされ、私は恥じらいもなくそれを乗り越えて中に入った。

当然の事ながら、あの体育の先生である藤本先生が仁王立ちで待っていた。

「箕輪、今日は見逃してやる。次は許さないぞ」

「はい」

そうか、この前の事、少しは恩を感じてくれてるのね。

教室に入ると先生はすでに来ていて、気まずい中、席に着く。

「どうしたのよ、まどか？　寝坊？」

親友の近藤明菜が小声で尋ねる。

「うん、ちょっとね」

私は苦笑いをして応じた。

結局私は、あの妙な手紙のせいで、その日は散々だった。

先生には何度も注意されるし、階段から転げ落ちそうになるし。

手紙は家に置いて来てしまったから、探りようがないのだが、どうにも腹が立つ。

相手はわかっているから、そいつのところに行って、どっちが強いのかわからせてあげるわ！

私は明菜との買い物をキャンセルして、文句を言う明菜を置き去りにし、学校を出た。

「確か、この先」

ズンズンと進むと、敵のアジトが見えて来た。

気を探ってみようと思ったけど、わかっているのは顔と名前だけなので、私はそばにいた男子に尋ねる事にした。

「ねえ、江原耕司君て、まだ学校にいる？」

その男子は、私の美しさに声もないのか、唖然としていたが、

「あわわわ！」

と叫ぶと、走り出した。

「え、江原くーん、き、来たよ、来た！」

え？　何よ、それ？　待ち構えていたの？

すると、校庭の向こうから、奴が現れた。背が高くて、シュッとした顔。

お？　実物の方がカッコいいかもって、だからこいつはそういう相手じゃないんだってば！

「あんた、どういうつもりよ？」

私はG県警の刑事さん仕込みのドスをきかせて言った。すると江原君は、

「あの手紙に書いた通りだよ」

と何故か照れ臭そうに答えた。こいつ、バカ？

「私をぶっ飛ばすって、どういう事よ！？」

「は？」

江原君は、完全にキョトンとしている。恍けているのでない事は、彼の気でわかった。

あれれ？　何だかおかしいぞ。

「あああ！」

江原君は何かに思い当たったようだ。鞄をガサゴソと探り、封筒を取り出した。

「わわ！」

彼は中から便箋を取り出し、オロオロしている。

「ご、ごめん、間違えて出したんだ。こっちが君宛なんだ」

江原君はそう言いながら頭を下げ、私に便箋を差し出した。

「？」

私は仕方なくそれを受け取った。

内容の公表は差し控えるが、それは紛れもなく「恋文（ラブレター）」だった。

私は顔が赤くなるのを感じた。

「返事は今すぐでなくてもいいです。よろしくお願いします！」

江原君はもう一度深々と頭を下げ、走り去った。

そして、私の返事はもちろん、「ＯＫ」。

何となく運命を感じたし、江原君の態度に好感を持ったからだ。

その日、私達はあるコンビニで待ち合わせをして、一緒に帰った。

「それにしてもさ」

江原君が私をチラチラ見ながら言い出す。

「何？」

私は居酒屋のメイドに負けない笑顔で彼を見上げる。

「何で、あの手紙、俺からだってわかったの？」

「え？」

ギクッとする私。

確かに、後から渡された手紙には、彼の名前と学校名が書かれていたが、最初の果たし状には何も書いてなかった。

それは不思議に思うのが当然だ。

まさか、

「私、霊感があるから、見えたの」

とは言えない。

「何でだろうねえ。江原ッチの思いが強かったからじゃない？」

「そうかな」

うまく誤魔化せたみたいだ。

嬉しそうに笑う江原君。ちょっとだけおバカみたいだけど、いい人。

とにかく、これからどうしよう？

心配事が尽きないまどかだった。

またあいつがしゃしゃり出て来たのよ！

私は箕輪まどか。日本で一番の美少女だ。そして、霊能者でもある。

ふう。

毎回、私のプロフィールがエスカレートしてるんですけど？

そのうち、「宇宙一」とか言わされそうで怖い。

私は今、とっても幸せだ。

何故なら、イケメンの彼ができたから。

もしかすると付き合っていたかも知れない牧野君とは違って、ちょっぴりおバカだけど。

そこがいいのよねえ。

うるさいわね、「メロメロだな、おい」とか、オヤジみたいな事言わないでよ！

苗字は「江原」で、私と同じ関係の人のような気がする。

でも、名前が「耕司」なので、思いっ切り芸人つながりの気もしてしまう。

取り敢えず、親友の近藤明菜にだけは、紹介した。

「いいなあ、まどかは。彼の友達を紹介してよ」

いきなり明菜に懇願されてしまった。

「いいけどさあ」

こういう事で優越感に浸ったのは、生まれて初めてかも知れない。

「お願いよ、まどか」

明菜は何故かかなり本気モードだ。

私に本格的な彼ができて、焦っているのだろうか？

「箕輪」

力丸ミートの跡継ぎである卓司君が声をかけて来た。

「なあに、リッキー？」

ご機嫌な私は、これ以上はできないというくらいの笑顔で応じる。

多分、あのメイドにも勝てると思う。

「お前、男ができたのか？」

まるで父親のようなセリフだ。しかも男って……。

「私に彼ができると、いけないの？」

「え、いや、そんな事は……」

リッキーが私の事を好きなのは知ってる。

でも、恋愛は同情でしてはいけないのだ。

同情するなら、コロッケを買ってあげた方が彼のためだ。

「リッキー、ごめんね」

それでも私は、以前助けられた恩を忘れるほど酷い女ではない。

「貴女には、私の彼の妹を紹介してあげる」

「え、ほ、ホント？」

リッキーは満面の笑みで訊いて来る。うーん。そこは一つ、

「俺は箕輪が好きなんだ！」

と言って欲しかったと思う私は、悪魔だろうか？

そんなこんなで、明菜とリッキーの願いを聞き入れ、私は江原ッチの学校へと向かった。

「世紀の美男美女カップル誕生」

とか騒がれそうな組合せなのだ。江原ッチの中学校では、私は大人気なのだ。

え？　正確な情報が伝わっていない？　うるさいわね！

お！　噂をすれば、江原ッチだわ。待ち切れなくて、私に会いに来たのね。

やっぱり可愛いわ。牧野君とは大違い。

「ああ、まどかりん」

笑顔で手を振りながら、私に近づいて来る。

「江原ッチ」

まだ手を繋いだだけだけど、心は通じ合っている。

そのまま、近所の公園でデート。

私は早速、明菜とリッキーの願いを江原ッチに話した。

「ふうん。俺の親友でいいなら、紹介するよ」

「ありがとう、江原ッチ」

私は笑顔全開でお礼を言った。

「妹の方は、あいつの都合もあるだろうから、ちょっと待ってね」
「うん、いいよ」
私達は、周囲を気にしながらも手を繋いだ。
「あ、あのさ」
江原ッチが急に立ち止まって私を見下ろす。
二人は身長差が二十センチ。
もしかして、ファーストキス？　ドキドキ。
「俺、まどかりんに隠していた事があるんだ」
「え？」
よもやの二股告白？　やめてー！
でも違うようだ。江原ッチは私をジッと見ている。
何だか恥ずかしくなった。
「な、何？　早く言ってよ」
「お、俺さ、その、笑われるかも知れないけど……」
「何？」

言葉に詰まる江原ッチを促す。江原ッチはまた私をジッと見る。

「幽霊が見えるんだ」

「え？」

おおお。まさかの告白。これはちょっと良かったかも知れない。

「俺の死んだ祖父ちゃんが夢に出て来て、『隣町の箕輪まどかさんと付き合いなさい』って言ったんだ」

「ええ？」

私はその意外な展開にビックリした。

「だから、いきなり手紙をまどかりんの家まで持って行ったんだ。間違えちゃったけど」

照れ臭そうに笑う江原ッチ。

「ウチは、霊能者一家なんだ。親父はテレビ出捲りの、バリバリの退魔師だし、お袋はM市の駅前で占いやってるし」

「そうなんだ」

私の家より凄い。私の家は、霊感あるのは私だけ。

「驚いたろ？　嫌いになった？」

「嫌いになんてならないよ」

私がそう言うと、江原ッチは本当に嬉しそうな顔をして、

「良かったあ」

私は気になった事を訊いてみた。

「貴方のお祖父さんは、どうして私と付き合うように言ったの？」

「それはわからないんだ。でも、祖父ちゃんも凄い霊能者だったから、その言葉を信じた」

江原ッチは、真っ直ぐな人だ。惚れ直しちゃう。

「その理由、何となくわかる気がする」

私は意を決して言った。江原ッチはキョトンとした。

「どういう事？」

「私も霊が見えるの」

「え？」

江原ッチは驚いたようだ。そして、

「あ、いや、まどかりん、別に俺に合わせてそんな事言わなくてもいいんだよ」

と言い出した。

「私がウソを吐いてると思ってるの？」

「あ、その、そういうつもりはないけど……」

私は肩を竦めて、

「百聞は一見にしかず、ね」

「え？」

またキョトンとする江原ッチの手を握り、公園を進む。そして、大きな池の畔（ほとり）に来た。

「池の真ん中に、女の人がいるでしょ？」

「え？」

江原ッチは、ようやく私が本当の事を言っているのに気づいたようだ。

「ほ、本当に見えるのか、まどかりん」

「うん」

もしかすると、引かれてしまうかも知れないと危惧したが、それは取越苦労だった。

「良かった。祖父ちゃんの言葉を信じて、正解だった」

江原ッチは、これで完全に私の彼になった気がした。

その後、江原ッチの妹の靖子さんに連絡し、彼女に彼がいない事を確認した上で、リッキーの事を告げた。

すると驚いた事に靖子さんはリッキーの事を知っており、友達からならＯＫという話になった。

何もかもうまく行くと思った時だった。

「あーら、箕輪さん。デート？」

あの綾小路さやかが、元彼である牧野君と現れたのだ。牧野君は、居た堪れないような顔で俯いた。

「誰？」

江原ッチが小声で尋ねる。

「同級生よ。綾小路さやかさんと、牧野徹君」

「初めまして」

それぞれが会釈した。するとさやかが、

「牧野君は、箕輪さんと小学校時代に付き合っていたのよね」

ととんでもない事を言い出す。私はムッとしたが、

「へえ。奇遇だね。元彼とこんなところで会うなんて」
江原ッチは気にしていないようだ。ホッとした。
「それじゃあ、ご機嫌よう」
どこの貴族だ、というような事を言って、さやかは牧野君と立ち去った。
「何だい、あの女？　まどかりんに敵意剥き出しでさ」
江原ッチも感じたみたいだ。さやかの奴、江原ッチが霊能者だってわからなかったようだ。
「私、あいつに牧野君との仲を裂かれたの」
言ってしまってから、私はハッとして江原ッチを見上げる。
「でも、だから俺とまどかりんは出会えたんだよ」
キザなセリフをサラッと言ってのける江原ッチ。カッコいい。
「そうね」
以前の私なら、すぐに突っ込んでいただろうが、今の私はそんな事はしない。
でも不安だ。

さやかは牧野君と付き合えればいいはずなのに、また私に敵意を持っているなんて、どういう事？

油断ができないまどかだった。

壮絶な展開になったのよ！

私は箕輪まどか。中学一年生。彼氏あり、まだキスはしてない。

ああ。今までとは別の意味で恥ずかしいわ。

今までは、「どんだけ傲慢？」っていう自己紹介だったけど、今回は何よ！？

どうして私が、キスは未経験だって事まで暴露されなければならないのよ！

え？　牧野君とはどうなのかって？

ノーコメント。何もお答えする立場にはありません。

テレビで偉い人達がよく言っているのを真似てみたわ。

先日、あの悪役の権化である綾小路さやかが、また私の「抵抗勢力」になりつつあるのを知った。

内閣が変わったからって、あいつまで変わる必要ないのにね。

私だって、新聞くらい読むのよ。

綾小路じゃなくて、O沢って苗字にすればお似合いだわ。

オホホホ。

私は第一級警戒態勢を敷き、登校した。

しかし、さやかは挨拶こそしたが、何も仕掛けて来ないし、話しかけても来ない。

引っかかった？　あいつ、私をからかっただけなの？

何かムカつくんですけど。

「まあ、何事もないようで、良かったじゃない」

親友の近藤明菜が言ってくれた。

彼女は、私の彼の江原耕司君の親友である美輪幸治君と付き合い始めたらしい。

だから最近、妙にテンションが高いのだ。

江原君と美輪君は、「やり過ぎコウジ」と呼ばれ、付近の不良達に恐れられているとか。

美輪君はイケメンなのに目つきが鋭くて、そんな雰囲気なんだけど、江原ッチに関しては、どうしてもそうは見えない。

霊感が強いもの同士だから余計わかるのだが、彼は美輪君に付き合って喧嘩をしているだけのようだ。

美輪君は小学校低学年の時に苛められていた江原ッチを守ってくれたのだ。

義理堅い江原ッチは、その恩に報いているのだという。

でも、喧嘩は良くない。

私はダブルデートをした時、江原ッチと美輪君に切々と喧嘩をしないように言った。

明菜も同調してくれて、江原ッチと美輪君は、喧嘩をしない約束をしてくれた。

「まどかりんも、喧嘩するなよ」

江原ッチに言われてしまった。どうやら、明菜がチクッたらしい。

「わ、私は喧嘩じゃなくて、説得をしただけだよ」

何とか誤魔化そうとしたが、江原ッチはニヤッとして、

「説得するのに、金〇蹴り上げるのは良くないよ、まどかりん」

私は真っ赤になって明菜を睨んだ。

何でそんな事まで喋るのよ、この！　明菜は知らん顔だ。

そんな事があったりしたが、私達二人はその後も何回か仲良くダブルデートをし、江原ッチ達も喧嘩をしなくなったようだ。

ホッとした。

しかし、ホッとしたのも束の間だった。

（まどかりん、助けてくれ！）

江原ッチの叫び声が聞こえた。

（どうしたの、江原ッチ？）

慌てて呼びかけたが、彼からの返事はなかった。

不安になった私は、明菜と共に江原ッチの中学校に向かった。

「え？」

以前感じた、嫌な気。それが、彼の中学校全体を覆いつくしている。

それは、あの綾小路さやかの気だ。

あいつ、江原ッチに何をしたのよ！？

怒りに震えながら、私は校庭に駆け込んだ。

「あーら、お早いお着きね、箕輪さん」

さやかがいた。しかも何故か、江原ッチと手を繋いだ状態で。

やられた。牧野君の時と同じ手だ。

どこまでいやらしい性格なの、さやか！

「江原君は、私と付き合いたいんですって、箕輪さん。どうする？」

さやかが憎たらしい笑みで私を挑発する。

「綾小路、あんたねえ！」

明菜が切れている。ところが、

「アッキーナ、邪魔しちゃいけないよ。江原はさやかさんと付き合うって決めたんだからさ」

何と美輪君までさやかの術中だ。明菜は呆然としている。

どうしたらいいの！？

「負け犬は、サッサと自分の小屋にお帰りなさいな」

さやかは更に挑発して来る。力ではあいつには勝てない。

まどか最大のピンチだ。

その時だった。

「私の可愛い妹を苛めるのは誰？」

禍々しい妖気と共に、そんな声が轟いた。

誰？　などとボケる必要もない。

この妖気、そして、私の事を「妹」と呼ぶのは、多分あの人。

また復活したのか……。めげない人ね。

「だ、誰！？」

さやかもその尋常ではない妖気を感じて、辺りを見回す。

「私よ」

校門のところに、まるで明子姉ちゃんのようにひっそりと立つ黒尽くめの服の女性。

「冬子さん！」

予想通りとは言え、この人の登場シーンは怖い。明菜はビックリして動かない。

周囲で見ていた子達が、一斉に逃げ出す。

「あんた、誰！？」

ビビりながらも、さやかは冬子さんに怒鳴った。

「私は小倉冬子。まどかちゃんのお兄さんの婚約者よ」

「は？」

さやかは呆気に取られたようだ。それはそうだ。誰でもそうなる。

「まどかちゃんを苛める悪い子。私が成敗してあげるわ」

冬子さんはユラーッとさやかに近づく。

「ひっ！」

さやかはその動きに仰天し、後ずさりした。そして、江原ッチを見捨てて逃げ出してしまったのだ。

「いやーっ！」

冬子さんは戦わずして勝ってしまった。

「まどかちゃん」

冬子さんは、恐らく微笑んだのだと思うが、それは顔が痙攣したようにしか見えなかった。

「は、はい」

私は緊張した。いくら冬子さんが私に敵意がないからと言って、安心はできないのだ。

「今度苛められたら、これを吹いて。そうすれば、私はどこからでも駆けつけるから」

「はい」

私はオカリナを手渡された。冬子さんに似合い過ぎて怖いほどのアイテムだ。

「じゃあね」

冬子さんは不気味な笑みを浮かべてから、スーッと立ち去ってしまった。

こうして、江原ッチと美輪君は、冬子さんのおかげでさやかの呪縛から解き放たれた。

「凄い人がいるんだね」

江原ッチは身震いして言った。私は苦笑いして、

「そうね」

としか言えなかった。

助かったのだろうか、私達は？　大いなる疑問だった。

デートを邪魔されてムカつくのよ！

私は箕輪まどか。鋭い霊能力を持つ美少女中学生だ。

ようやくまともそうな自己紹介になって良かった。

今日は日曜日。現在ラブラブ中の江原耕司君とデート。

のはずだった。

それが！

あのエロバカ空気読めない兄貴のせいで「オジャン」になった。

え？　霊感少女だけに「死語の世界」が得意だね、ですって？

ねづっちみたいな事言わないでよ！　「整いました」はこの話ではＮＧワードにするからね！

私は、エロ兄貴と兄貴のお嫁さん候補にして私のお姉さん候補ナンバーワンの里見まゆ子さんと共に、殺人現場に向かっているところだ。

「いつまで剥れているんだ、かまど」

兄貴がイラついて助手席から言って来る。

「仕方ないですよ。彼とデートだったのに、私達が無理矢理来てもらったのですから」

運転席のまゆ子さんが兄貴を宥める。

「そんな事は関係ない。妹はかっこいい兄のために動くのが義務だ」

エロ兄貴は意味不明な事を口走った。

「名づけて『イモートコントロール』だ」

何故か「どや顔」の兄貴。車の中に何とも形容しがたい空気が漂う。

私は珍獣ハンターではないのだ。

まゆ子さんですら、フォローしてくれない。

「バッカみたい」

私は追い討ちをかけるつもりで言い放った。

さすがの兄貴も落ち込んでいた。

やがて私達は現場に到着した。山奥の河原だ。石がゴロゴロしていて歩きにくい。

げ。何故か、鑑識課の最古参、宮川さんが来ている。

宮川さんはあの世界の住人なので、できるだけ接触したくないのに。

「おおお、まーどかちゃん。来てくれたねえ」

私は不二子じゃありません！　そんな事を言うと、更に接近されそうなので、

「ども」

と会釈して、サッサと兄貴の後ろに隠れる。

「箕輪あ、まーどかちゃんはブラコンなのかあ？　問題だぞお」

宮川さんは兄貴に近づくフリをして、私に近づいて来る。

「ワハハ、そうなんですよ、宮川さん。まだ一緒にお風呂に入りたいとか言われて、困ってます」

えええ！？　バカな事言わないでよ、エロ兄貴！

あれ？　でも、宮川さんのテンションがガタ落ちになったぞ。

「そ、そうなのか……」

宮川さんは可哀相なくらい暗くなり、離れて行った。

「ありがとう、お兄ちゃん」

私は兄貴が助けてくれたと思い、お礼を言った。

「何だ、ホントに一緒に入りたかったのか、風呂？」

兄貴は照れ隠しなのか、またとんでもない事を言う。

「違うわよ！」

そんな私達のバカ会話を、まゆ子さんは驚愕の眼差しで見ていた。

気を取り直して現場に向かう。

「ここが遺体があったところだ。何か感じるか、まどか？」

兄貴はすっかり鑑識課の顔になっていた。まゆ子さんも現状付近を這いずり回って調べている。

「えーと……」

ギクッとした。

被害者の霊がいた。二十代前半の女性だ。奇麗だったが、顔をボコボコにされて殺されている。

酷い殺され方だ。でも、どうしてあんなところにいるのだろう？

彼女は、捜査一課の刑事さんの一人の頭の上にいる。つまり、浮いているのだ。

どういう事？　あの人が殺人犯？

でも違う。取り憑いている訳ではないようだ。

あれえ？　刑事さんが移動したら、地面に降りて来たぞ。

「ねえ、どうしてそこにいるの？」

私はその女性の霊に話しかけた。

「え？」

女性の霊は私が見えている事に驚いたようだ。死にたての人は、こんな感じなのが多い。

「ここに、私を殴ったものが埋まっているからなの」

その人は地面を指差した。

確かに良く見ると石が動かされた形跡がある。

「お兄ちゃん、ちょっと！」

「何だ？」

私の声にみんなが集まって来た。

「この石の下に凶器が埋まっているわ。探してみて」

「わかった」

兄貴はまゆ子さんと目配せし、石をどかした。
それを心配そうに女性の霊が見守っている。
「おお！」
土を掘り起こすと、そこから血塗れのスパナが出て来た。
「うわああ、それ、それよ！　それが私を！」
霊が興奮し出した。
「落ち着いて！」
私は女性の霊を宥める。
「貴女を殺したのは誰なの？　教えて」
でも女性の霊は興奮が収まらず、喚き散らし続けた。
「私は、私は、私はあああ！」
私は仕方なく、観世音菩薩の真言を唱えた。
「オンアロリキャソワカ」
女性の霊は観音様の慈悲の力で、やっと落ち着きを取り戻した。
「貴女はもう大丈夫よ。安心して、向こうの世界に行きなさい」

彼女は自分の顔が元に戻っている事に気づいてくれたようだ。

「ありがとう」

微笑んで天に昇って行く。私はそれを黙って見送った。

「犯人は被害者の女性の兄。妹可愛さに、殺してしまったの」

ギョッとする兄貴。そして、

「許せない。自分の妹を殺すなんて、外道だ」

「え？」

何か今キュンと来た。涙が出そう。

「そうですよね。妹を殺すなんて、酷いですよね」

まゆ子さんが同調した。すると兄貴は私を見て、

「可愛い妹を殺すなんて本当に考えられない。幸い俺には可愛い妹はいないが」

と言って、ニヤリとした。

このバカ兄貴！　ちょっとキュンとした私がバカだった！

本当に散々な一日のまどかだった。

関西の悪霊からエロ兄貴を守るのよ！

私は箕輪まどか。超美少女にして、優れた霊能者だ。だからクラスの人気者。

……。

人気は、ない。

残念な事だが、人気はない。

二度も言わせないでよ！　涙が出そうになったわ。

綾小路さやかが引き起こした事件が元で、私は一時クラスで孤立しかけたが、今はそれはない。

でも相変わらず、違う小学校から来た子達は、私が怖いようだ。

最近は少しは話をしてくれるようにはなったけどね。

そんなある日。教室に入って行くと、どうした事か、男子達がベランダに出て外を見ている。

中には口笛を吹くバカもいた。

何事？　女子達は、「バッカみたい」と呟き、傍観しているようだ。

気になって私もベランダに出た。

「げ」

なぜか校庭に、あの関西のオバさんが恥ずかしいファッションで立っていた。

しかもオバさんは自覚症状がないらしく、ベランダのバカ男子達に投げキッスをしている。

「おう、お前、そこにおったんか。ちょっと話がある。降りて来てくれへんか？」

「嫌です」

私はきっぱりと言い返した。

「何やと！？　ウチに逆らうつもりか、この命知らずが！？」

ギャアギャア喚いてうるさいので、仕方がない。

「わかりました。今行きます」

私は何故か羨望の眼差しを向ける男子達を残し、ベランダから教室に戻り、校庭に出た。

「何ですか、一体？」

これから授業が始まるというのに、何を考えているんだ、このオ

バさんは？

ところでこの人の名前、何だっけ？

「久しぶりやなあ、まどかちゃん。元気そうで何よりや」

は？　以前は確か、「子供」って呼ばれていたような気がするのだが？

しかも言い慣れていない事を言ったために、オバさんは顔が引きつっている。

「慶君は元気か？」

結局この人は、私の兄貴に用があるのだ。

「知りません。県警に行って訊いて下さい」

私は素っ気なく言った。

「あはは。相変わらず、きっついなあ、あんたは」

妙に低姿勢になったのが怖い。何を企んでいるのだろう？

「ウチな、真剣にあんたのお兄さんと交際したいねん。そやから、あんたの助けが借りたいねん」

「え？」

「ほな、県警に行こか」

オバさんは私の手を掴み、歩き出す。

「私はこれから授業なんですよ！　一緒になんて行けません！」

私はオバさんの手を振り解いて言った。

「大丈夫や。今日は病欠という事で、校長には話、通してあるから」

「……」

何という用意周到な……。侮り難い。

「さ、行こか」

オバさんはまた私の手を掴んで、歩き出した。

このままではエロ兄貴が危ない。

と同時に、私の「里見まゆ子さんをお姉さんにする作戦」も危ない。

どうしよう？

その時、私に悪魔が囁いた。

『あれ、使っちゃえよ』

あれ？　あれって何？　ウルトラブレスレット？　そんなの持ってないし。

あれこれ考えているうちに、私はオバさんのド派手な車に乗せられ、県警に向かっていた。

「あ」

その時、鞄の中におぞましい物が入っている事を思い出した。

小倉冬子さんに渡されたオカリナ。あれを吹けば、冬子さんが「助け」に来てくれるらしい。

ちょっと怖いけど、使ってみるか。

毒を盛ったら毒を飲まされた、という諺(ことわざ)があるしね。

え？　そんな諺ない？　うるさいわね！　細かい事気にしないの！

う。何か口をつけるのを躊躇ってしまいそう。

でも、意を決して吹いた。

「な、何や？」

その突拍子もない高音に、オバさんが驚いて私を見た。

「あんた、何しとんねん？」

オバさんは車を路肩に寄せて停める。

その時だった。

「私の可愛い妹を苛めるのは、誰？」

地獄の門番も逃げ出すような声が聞こえた。

冬子さんが来たのだ。本当に来た。

「誰や？」

オバさんは真顔になり、車を降りる。私も身の危険を感じて、車を離れた。

「私よ」

電柱の陰から半分だけ顔を覗かせて、黒ずくめの服の冬子さんが立っていた。

怖過ぎるんですけど。オバさんは冬子さんを見て、

「おう。あんたか。待ってたで」

え？　待っていた？　どういう事？

「慶君かこの子にちょっかい出せば、絶対に現れる思うてたで。作戦成功やな」

そういう事か。このオバさん、リベンジに来たのね。

「この前は油断してやられたが、今日はそうはいかんで。覚悟しいや！」

オバさんはおっぱいの間からお札を何枚も取り出した。それ、悪霊退治のお札じゃん！

確かに冬子さんは悪霊みたいだけど、一応人間よ、オバさん。

「妹を苛める悪い人。許さないわ」

冬子さんには、オバさんの事情など関係ないらしい。

「もがき苦しむがいい！」

冬子さんの両手の先から、禍々しいオーラを纏った悪霊が出て来た。

もしかして、更に強くなってます？

「させるかい！」

オバさんもすかさずお札を投げつける。悪霊はお札によって消滅した。

「ならば！」

冬子さんが何やら呪文を唱えている。

普通の人なら、その姿を見ただけで卒倒しそうだ。

「呪いか！？」

オバさんは冬子さんから離れた。

「ウチも関西では恐れられた霊能者や。あんたみたいな呪術師に負ける訳にはいかんのや！」

オバさんも冬子さんに負けないくらいの怖い顔で言い返す。

「オンマカキャラヤソワカ！」

オバさんの大黒天の真言が、冬子さんの呪い攻撃を弾き飛ばす。

凄い戦いだ。いつの間にか、周囲は野次馬でいっぱい。

みんな、撮影か何かだと思っているみたい。

「危ないから、下がって！」

私の叫びも虚しく、野次馬さん達は下がろうとしない。

「これで仕舞いや、妖怪！」

オバさんは冬子さんに突進し、

「インダラヤソワカ！」

と帝釈天の真言を唱えた。

「イヤーッ！」

冬子さんはそれをまともに食らってしまい、倒れた。

「とどめじゃ！」

オバさんが更に追い討ちをかけようとした。

「やめて！」

私は思わず二人の間に入っていた。

「邪魔するな！　あんたかて、そいつに迷惑してるんやろ！？」

オバさんは私を睨んだ。でも私は怯まない。

「冬子さんは、私の友達だから！」

そうだ。力を怖がられて、みんなから疎まれ、孤立する。

私だって、いつそうなるかわからない。

だから、助けたい。

「そうか。わかった」

オバさんは苦笑いして車に戻り、

「慶君によろしくな」

と言うと、走り去った。

「まどかちゃん」

冬子さんの声で私は我に返った。

「ありがとう」

確かにそう言われた。冬子さんはそのままスーッといなくなってしまった。

「あ」

自分の現実に愕然とする。

学校までどうやって戻るのよ！？

ついていないまどかだった。

ところで、あのオバさんの名前、本当に何だっけ？

私には私の魅力があるのよ！

私は箕輪まどか。中学生なのに大人の魅力溢れる美少女霊能者だ。

……。

また自己紹介がおかしい。でも、もう気にしない事にした。

多分、作者の老化現象だろうから。

という訳で、今日はまた日曜日。

今日こそ、私にメロメロの江原耕司君とデート。

今までは親友の近藤明菜と、彼女のボーイフレンドの美輪幸治君とのダブルデートだった。

今日は違う。今日は二人きりで、本格的なデート。

のはずだった。

「初めまして、耕司の父の雅功（まさとし）です」

何故か、山伏の格好をした江原ッチのお父さんがいた。確か、有名な退魔師だ。

「は、初めまして、箕輪まどかです」

私は、ドキドキしていた。江原ッチ、お父さんが一緒ってもしかして、結納？

そんな訳はない。そもそも私達は結婚を前提のお付き合いではない。

私は、何故かG県の山奥に来ていた。

こんなところで結納をするはずがないし、デートもできない。

「耕司、奇麗なお嬢さんじゃないか。良かったな」

「う、うん」

嬉しそうに頷く江原ッチを見て、私は何も言えなくなった。

「お休みの日に申し訳ないね、まどかさん」

「あ、いえ」

愛想笑いが板について来た。

「貴女にご同行願ったのは、貴女のその類い稀なる能力を見込んでなのです」

「はい」

何か照れ臭い。江原ッチが大きく頷いているのも、恥ずかしい。

「この山の奥に、悪霊が棲む廃墟があります。そこへ出向き、除霊をします」

「はい」

そうじゃないかと思ったんだけど、やっぱりそうか。溜息を吐きそうになるが、こらえる。

「さあ、行きましょう」

「はい」

お父さんが歩き出す。おお。

今気づいたんだけど、凄い。お父さん、多分あの西園寺蘭子さんに匹敵するオーラだ。

もしかして、それほど強いの、今日の悪霊さんは？

怖いフリをして、江原ッチにしがみつく。

「まどかりん、大丈夫だよ」

彼は私の肩を優しく抱きしめてくれた。

よーし。そこがどこだろうが、その気になればデート気分になれそうだ！

私は燃えて来た。

しばらく獣道のような細い林道を歩いて行くと、前方にそれとわかる大きな家が見えて来た。

よくホラー映画で登場する「化け物屋敷」だ。

雑草が生い茂り、蔦が壁一面に走っている。

窓ガラスは全て割れ、玄関のドアは朽ち、その向こうに闇が見える。

いる。相当昔からここにいる奴が。

多分、この建物ができる前からいる。

え？　どういう事？

「気づきましたか、まどかさん。ここに棲む悪霊は、この家の住人を全員殺したのです」

「それって、まさか？」

私は震えた。生まれて初めて、霊が怖いと思った。

「ここの土地そのものが悪霊と一体になっています。今まで除霊して来た霊とは、ラベルが違いますよ」

お父さん。もしかして、今のギャグですか？

思い出すなあ、あの寒いギャグ親父を。

「来るよ、父さん」

江原ッチが見た事もない真剣な表情で言った。ああん、カッコいい！

「臨兵闘者皆陣列在前！」（りんぴょうとうしゃかいじんれつざいぜん）

お父さんが早九字を切る。山伏の基本だ。

蔦が動き始める。雑草もまるで鞭のようにしなる。

「まどかりん、俺の後ろにいて。まどかりんは、俺が絶対守るから」

「うん」

私は江原ッチの背中にしがみついた。

「まどかりん、背中に何か固いものが当たるんだけど？」

「え？」

ギクッとした。まずい。胸の偽装がバレる。

「ええ？　何の事？」

私は飛びっきりの笑顔で上目遣いに江原ッチを見た。

「な、何でもないよ」

江原ッチは真っ赤になって言った。可愛い。

「耕司、来たぞ！」

お父さんが叫ぶ。

「はい！」

江原ッチは私の手をしっかりと握り締め、走った。

「オンマリシエイソワカ！」

摩利支天（まりしてん）の真言を唱え、雑草と蔦の攻撃を撃退する江原ッチ。

ああん、結婚してえ！　そう叫びそうだ。

「インダラヤソワカ！」

次に帝釈天の真言で反撃開始。もう好きにしてえ！

いけない、私が暴走してしまいそうだ。

でも、江原ッチ、カッコ良過ぎ！

関西のオバさんに見つかったら、襲われそう。

その時は私が絶対守るからね、江原ッチ。

「あ！」

そんな江原ッチの隙を突いて、蔦が彼の身体を締め上げる。

「うわああ！」

「耕司！」

「江原ッチ！」

お父さんは別の雑草軍団と交戦中で、こちらには来られない。

「あんた達、私の彼に何するのよォッ！」

私は出せる力を振り絞り、まだ無理だからと蘭子お姉さんに止められていた大黒天真言を唱えた。

「オンマカキャラヤソワカ！」

ドーンと身体中に衝撃が走った。眩暈がする。視界がグルグル回る。

倒れそうだ。

「グオオオオッ！」

悪霊の叫び声が響いた。

次の瞬間、私は気を失った。

「まどかりん」

目を開けると、心配そうな顔の江原ッチがいた。

「良かった、気がついたね」

私は江原ッチの腕の中にいた。途端に顔が紅潮するのがわかる。

「さすが、祖父ちゃんが夢で言っただけの事はあるなあ。大黒天の真言なんて、俺には使えないよ」

江原ッチはニコニコして言った。私は顔が爆発しそうなので、慌てて彼の腕の中から飛び出した。

「あ、ありがとう」

するとお父さんが、

「礼を言うのは私達の方ですよ、まどかさん。貴女が大黒天真言を唱えてくれなければ、私も耕司も危なかった。ありがとう」

「そ、そうなんですか」

また言いたくなかったフレーズを言ってしまったが、その時の私にはそれすらわからなかった。

「これからも、耕司と仲良くして下さいね」

「はい」

私はメイドに負けない笑顔で応じた。

「あのさ、まどかりん」

江原ッチが何故か小声で言う。

「何、江原ッチ？」

私は笑顔全開。フルスロットルだ。でも何故か江原ッチは言いにくそう。

「何よ、言ってよ」

「う、うん」

江原ッチは耳元に顔を近づけて、

「俺、巨乳は嫌いなんだ」

「……」

見破られてた！

もう胸の偽装はやめようと思うまどかだった。

時代は移り行くものなのよ！

私は箕輪まどか。中学生である。そして霊感が鋭い。しかも美少女だ。

でも、人気はない。

こら！　少しまともそうな自己紹介だと思ったら、何よ？

人気がないとか、言わせないでよね。

私には隠れファンがたくさんいるのよ。

多分。

きっと。

恐らく。

ううう。本当に泣きそうだから、もうやめて。

最近は、今までより早めに家を出て、絶対彼氏の江原耕司君と途中で待ち合わせし、登校する。

それが私のささやかな幸せ。ムフ。

「じゃあ、放課後ね」

江原ッチと手を振り合いながら、別々の道を歩き出す。

ああ。遠距離恋愛している人達って、こんな感じ？

どんな感じよ？

まあ、いいわ。

「箕輪さん」

聞きなれない声で呼びかけられる。

「はい？」

つい、妙なトーンで返してしまった。これでは水〇豊だ。

そこには、同じ中学校に通う女子がいた。

しかし、顔を合わせるのは初めてだ。

「何ですか？」

私はにこやかに尋ねたのだが、その子はどうした事か、一歩退き、

「あ、あの、幽霊が見えるんですよね？」

「はい」

それか。興味本位で話しかけないでよね。

「わ、私の通学路に、女の子の幽霊が出るんです。霊視して下さい！」

といきなり「寸志」と書かれた熨斗袋を差し出された。

「あのね、私は商売で霊視してるんじゃないから、お金なんていらないわよ」

私は関西のオバさんとは違う。

私の目標は西園寺蘭子さん。あの人は、この前も只働きをしたそうだ。

私達霊能者の鑑だ。

「い、いえ、お金じゃないんです。力丸ミートのコロッケ無料券です」

「はあ？」

何だ、それ？　どうしてリッキーの家のコロッケ無料券なの？

「まどかさんの大好物だと聞いたので」

苦笑いするしかない。大好物ではないけど、無料券は魅力だ。

「どうか、お願いします！」

「わかったわ。放課後にもう一度話を聞かせて。それから？」

私が何を聞こうとしたのか、彼女にはわかったらしい。

「私、井本和子って言います。よろしくお願いします！」

井本さんね。この子、多少は霊感があるみたい。

そして私達は、始業時間が迫っているのに気づき、慌てて駆け出した。

早く行かないと、あの顔の大きい藤本先生に説教されちゃう！

そして、あっと言う間に放課後。

私は江原ッチに急用ができたとメールした。

江原ッチの残念そうな返信メールを見て、気持ちが揺らいだが、コロッケ無料券をもらってしまった以上、今更断るわけにもいかない。

「まどかさん」

校門の前で待っていると、井本さんがやって来た。

「ごめんなさい、日直だったので」

「大丈夫よ。現場に案内して」

「はい」

井本さんは、話をしてみると、あの綾小路さやかと同じクラスのようだ。

一瞬嫌な予感がするが、彼女からはさやかの気配はしない。

「この先なんです」

井本さんが路地の角を曲がり、前方を指差す。

「？」

何、今の？　一瞬、風景が江戸時代に見えたんだけど？

「私、その女の子の霊が見える時と見えない時があって、何か伝えようとしているのはわかるのだけど、急に見えなくなってしまったりして……」

「そうなの」

ああ、危ない。危うく、NGワードを言ってしまうところだった。

それにしても、何、ここ？

私の住んでいるところから、それほど離れていないのに、こんなところがあるなんて知らなかった。

「あ」

原因がわかった。

ここら辺は、今までずっと道路の整備ができなかった区域なのだ。

古い佇まいの家がたくさん並んでいたが、遂に工事が始まることになり、その町並みが消滅するのだ。

「最後の江戸の風景なのね」

私は不意に現れた着物姿の幼い少女の霊に語りかけた。

「まどかさん、あの子が来ているんですか？」

井本さんが辺りを見回す。彼女には見えていない。

そう、女の子の霊は、ここの佇まいと共に存在していたのだ。

工事が進み、完全に取り壊しが完了すると、彼女はここに留まれなくなる。

「ごめんね、力になれなくて」

私は女の子に言った。女の子は悲しそうな顔をしていたが、

「ありがとう」

とだけ言うと、スーッと消えてしまった。

「行ってしまったわ」

「え？」

何も見えていない井本さんは、キョトンとして私を見た。

「彼女は、江戸時代の火事でこの辺りで亡くなった子なの。それでもいくつか焼け残った当時の家や塀と共に、ここにいたの。でも、もうそれもできなくなったので、誰かに気づいて欲しくて、貴女に声をかけて来たのよ」

「そうなんですか」

うわあ！　井本さんにNGワードを言われた！

「だから、祈りましょう。彼女が成仏できる事を」

「はい」

私達は、空を見上げて手を合わせた。

たまにはいい話で終わる事もあるまどかだった。

みんなで遊園地に行ったのよ！（前書き）

わかる人にはわかる「妖精の国」と「空の国公園」です。

みんなで遊園地に行ったのよ！

私は箕輪まどか。美少女霊能者だ。中学一年生の、ピッチピチよ。

変態キャラか！

どうも作者に自己紹介で遊ばれている気がする。

呪ってやりたいのだが、噂だとあの冬子さんより強いらしいからやめておこう。

さて、一学期ももうすぐ終わり。

嫌な事が多い毎日だったが、それでも終盤に江原耕司君というイケメンの彼ができて、帳尻は合ってると思う。

「期末テストも終わったし、どこかに遊びに行こうか？」

親友の近藤明菜が提案した。

「おう、行こう、行こう。どこにする？」

何故か肉屋の力丸卓司君が話に割り込んで来た。

彼は、遂に江原ッチの妹さんである靖子さんと付き合う事になったらしい。

「小学生と付き合えるなんて、羨ましいなあ、おい」
と言ったのは、エロ兄貴の同僚で、G県警鑑識課の最古参、宮川さんだ。
あの人、最近、発言が危な過ぎる。
なるべく近づかないようにしよう。
「靖子ちゃんは、遊園地がいいって言ってたぞ」
リッキーはもうヘラヘラしながら言う。
「あんた、関係ないでしょ？」
明菜はムッとしていた。彼女はリッキーがあまり好きではないらしい。
「暑い時にあんたと行動すると、余計暑くなるわ」
「ひでえなあ、アッキーナ。そんな事言わないで、参加させてよ。靖子ちゃんも、お兄ちゃんと一緒がいいって言ってるんだよ」
リッキーのその一言で、私は彼の味方になった。
靖子ちゃんは、私が嫉妬してしまうほどの美少女で、しかも江原ッチとととても仲良しなのだ。
江原ッチも靖子ちゃんの事を凄く可愛がっているので、私はリッキーに賛成だ。

ウチのエロ兄貴とは大違い。

「アッキーナ、そんなつれない事言わないでよ。ねえ？」

何故か明菜に対してお色気作戦だ。そこ！　表現が古いとか言わないの！

「仕方ないわね」

明菜は不満そうだが、彼女の彼である美輪幸治君も靖子ちゃんを凄く可愛がっているので、諦めたようだ。

もしかして、明菜の奴、靖子ちゃんに嫉妬してる？

こうして、私達は「遊園地に遊びに行く」で一致した。

近いのはT市にある「妖精の国」なのだが、今は改装中で無理だ。仕方がないので、ちょっと遠いのだが、S市の「空の国公園」に行く事にした。

「楽しみだね。まどかりん、お化け屋敷に入るから、思い切り怖がってね」

江原ッチから、そんなメールが来た。

おお！　チャンス到来！　思い切り怖がって、抱きついてあげよう。

ムフ。

いけないまどかだった。

そして当日。

私達はバスを乗り継ぎ、空の国公園に到着した。

「楽しみだね、リッキー」

靖子ちゃんがリッキーにしっかりとしがみつき、言った。

「楽しみだよ、靖子ちゃん」

リッキーは鼻の下が顎の下になりそうなくらい伸びている。

クールな明菜はベタベタしてはいないが、いつもよりテンションが高そうだ。

「美輪君、私、怖いの苦手なの。お化け屋敷とか、ジェットコースターとか」

「ああ、そうなんだ。俺も苦手」

美輪君は優しい。江原ッチの話では、ジェットコースターマニアだそうだ。

「それじゃあ、俺達は観覧車に乗るよ」

美輪・近藤コンビは、そう言うとサッサと歩き出す。
「ええ？　観覧車って、締めで乗るものじゃないの？」
私が言うと、江原ッチが、
「そうだけど、みんな好き好きだしね」
「そだね」
江原ッチには「イエス女」のまどかだ。
「じゃあ、私達はお化け屋敷という事で」
「わーい！　お化け屋敷、大好き！」
靖子ちゃんが嫌そうなオーラ全開のリッキーを引き摺るようにして連れて行く。
「俺達も行こうか、まどかりん」
「うん」
私達は手を繋ぎ、ニコニコしながら歩いた。
「うわあああああ！」
先に入ったリッキーの絶叫が聞こえる。ご愁傷様、リッキー。

霊能一家の女の子と付き合う厳しさを知ってね。

「いやああん、怖いィ！」

私はわざとらしく叫び、江原ッチに抱きつく。

江原ッチはヘラヘラしながら、

「大丈夫だよ、まどかりん」

と言ってくれた。臭いセリフだけど、キュンと来る。

「あ」

お互い、顔を見合わせる。

いる。

本物だ。まずい。しかもかなり強烈。

こういう場所には、どうしても集まりやすいのだが、これほど凄いのは珍しい。

「江原ッチ」

「まどかりん」

江原ッチはジーパンのポケットから数珠を取り出した。

私は印を結ぶ。

後から入って来たお客さんは、何かのアトラクションだと思ったみたいだ。

「ぐおおおお！」

悪霊が現れた。しかもこいつ、霊感がなくても見えるくらいだ。

「いやあああ！」

後ろの女性が失神した。

「ああ、しっかりして」

と言いながら、隣の男性は嬉しそうだ。介抱するフリをして、あちこち触っている。

全く、男って奴は！

などと思っている場合ではない。

「行くわよ、江原ッチ！」

「了解、まどかりん！」

江原ッチが数珠を振るう。私は、

「インダラヤソワカ！」

と帝釈天（たいしゃくてん）の真言を唱えた。

「がああああ！」

悪霊は私達の力で消滅した。

「おおおお！」

そこにいた他の人達が拍手した。完全にアトラクションだと思われたらしい。

「どうも」

いつまでも拍手に答えている江原ッチを引き摺り、私はお化け屋敷を出た。

「こんなところで除霊するなんて思わなかったよ」

江原ッチは数珠をしまいながら爽やかな笑顔で言う。ああん、カッコいい、江原ッチ！

「ホントね」

私も飛びっきりの笑顔で応じた。

「ねえ、何かあったの？」

すぐそばのベンチでリッキーを介抱していた靖子ちゃんが尋ねた。

私は事情を説明した。

「へェ、凄い、まどかお姉さん。さすが、お兄ちゃんの彼女だわ！」

「えへへ」

私は靖子ちゃんに絶賛されて照れた。しかも「まどかお姉さん」だなんて、余計恥ずかしい。

「何だ、リッキーは気絶してるの？」

明菜達がやって来た。

そして気がついたリッキーと共に、私達はランチにした。

遊園地の中央に、一面芝で覆われた広場があるので、そこに行く。

みんな、各々手作りのお弁当を持って来ている。

え？　お前に料理ができるのかですって？

し、失礼な事言わないでよ！

私のお母さんは、料理学校の先生だったのよ！

今朝も素晴らしいお弁当を作ってくれたんだから……。

それ以上、突っ込まないで。武士の情けよ。

みんなで楽しく食事をしていると、遊園地のスタッフの人達がやって来た。

あれ？　ここってもしかして、あのネズミの国と一緒で、食べ物持ち込み禁止だっけ？

「あの、先ほどお化け屋敷で除霊をして下さった方ですよね？」

「は？」

良かった、お弁当の事じゃなくて。

「実は、当園のお化け屋敷は毎年本物が来てしまって、いつもある霊能者の方にお祓いして頂いていたのですが」

「そうなんですか」

わわ！　江原ッチがＮＧワードを言ってしまった。

「それで、今回はあなた方がお祓いして下さったので、おいくらお支払すればよろしいかと思いまして」

どうやら、その人はこの遊園地の支配人のようだ。

「俺らは、仕事でお祓いしてる訳じゃないですから。お金なんて要らないですよ」

江原ッチがクールに決めてくれた。ああん、惚れ直してしまう！

「ええ、本当ですか？」

支配人さんが随分驚いたので、私は、

「その霊能者さんには、一体いくらお支払していたんですか？」
と訊いてみた。そして、その金額を聞き、今度は私達が、
「えええ！？」
と叫んでしまった。
もうその人が誰なのか、確認するまでもない。
あの人だ。えーと、名前忘れちゃった。
関西の露出狂のオバさん。
「あ」
私は支配人さん達が何度もお礼を言って立ち去ってから、ある事に気づいた。
「どうしたの、まどかりん？」
江原ッチが尋ねる。私は江原ッチに小声で、
「その霊能者さんの仕事取っちゃったかも」
「ああ、そうだね」
江原ッチは気づいていない。
オバさんが怒って私達に襲いかかって来るかも知れないのだ。

でもその時は、蘭子お姉さんに助けてもらおう。

計算高いまどかだった。

里見まゆ子さんが怖いのよ！

私は箕輪まどか。自己紹介は省略します。

タイトルがいつの間にか変えられていて、もの凄く恥ずかしいから……。

私はそれ程傲慢ではないよ。

お父さんが好きだった某サンライズのアニメのドバ総司令の言葉を引用した。

それにしても暑い。

霊感少女でも、暑いのはどうしようもない。

しかも最近の暑さは、「暑い」ではなく、「熱い」なのだ。

もしやこれは妖怪の仕業……。

それでは、鬼〇郎か、ぬー〇ーになってしまうので、あり得ない。

作者の奴、ヒロインが自分と同名なので、ぬー〇ーに嵌っているらしい。

お願いだから、露骨にパクらないで欲しい。

私の方がずっと美少女なんだから。

あ。やな奴になりそうだ……。

先日、空の国公園のお化け屋敷で一騒動あったが、私の憧れの西園寺蘭子お姉さんの話だと、あの関西のオバさんは関係ないらしい。

ホッとした。

最悪の場合、私のエロ兄貴を生け贄に捧げて、鎮まっていただこうかとも考えたほどだ。

でもそれだと、私の「お姉さん候補ナンバーワン」の、里見まゆ子さんが可哀相だし。

エロ兄貴なんてどうなろうと構わないんだけどね。

で。そんなどうでもいいエロ兄貴に言われて、また霊視の仕事だ。

でも、今日はルンルンなのだ。

え？　今時「ルンルン」なんて、林真理子だって言わないって？

うるさいわね。ほっといてよ！

今日は私の絶対彼氏の江原耕司君も一緒なのだ。

兄貴の奴、どこで知ったのか、江原ッチのお父さんが高名な退魔師である江原雅功(えはらまさとし)さんである事を突き止めていた。

いつもながら、「長いものには積極的に巻かれる」という生き様を曲げない兄貴だ。

そういうところだけは、感心してしまう。

更に悪い事に、まゆ子さんが妙に嬉しそうなのだ。

普段は私が後部座席、助手席が兄貴で、まゆ子さんが運転。

しかし、今日は助手席に江原ッチが乗り、兄貴が後部座席。

ううう。

現場に到着するまでの「後部座席でイチャイチャ構想」が脆くも崩れたわ。

まゆ子さん、恋する乙女の目で、江原ッチを見ているの。

私達は、今までの諍(いさか)いを全部T根川に流して、共闘する事にした。

ここへ来て、ようやく兄貴もまゆ子さんの魅力に気づき、本気で狙い始めたのだ。

「耕司君、モテるでしょ？」

まゆ子さん、涎(よだれ)が出そうな口で言う。

この人、もしかして、ショタコン？

そんな趣味があるなんて……。ショックだわ、まゆ子さん。

で、ショタコンて何？

「ショタコンとは、半ズボンの男の子が好きという意味だ」

何故か訊いてもいないのに兄貴が答えた。

「へえ」

私は思わず、ありもしないボタンを連打した。

江原ッチは頭を掻きながら、

「モテないっすよ。それに俺は今、まどかりん一筋ですから」

「まあ」

まゆ子さんはニコッとして私をルームミラー越しに見た。

私は照れ笑いをしたが、まゆ子さんの目が笑っていない事に気づき、恐怖した。

殺される？　そんな事を考えてしまったほどだ。

ふと隣を見ると、何故か兄貴は泣きそうな顔をしていた。

心配しないで、お兄ちゃん。江原ッチはまゆ子さんになびいたりしないわ。

彼、私にメロメロなのよ。

何だか、凄く嬉しい気分になった。

そして、車は現場に着いた。場所はM市の中心街のビル。

「さ、現場はこっちよ、耕司君」

「あ、はい」

まゆ子さんは江原ッチの手を掴み、サッサとビルの中に入って行く。

「行くぞ、かまど」

「う、うん」

兄貴に「かまど」と言われても突っ込めないほど、私は動揺していた。

江原ッチがまゆ子さんに盗られたりはしないだろうけど。

兄貴もイラついているようだ。

「ここです。血痕の量からして、被害者は死亡していると思われま

す。只、遺体が発見されていません。それを探して欲しいのです」

現場はビルの中の空き室。床一面に大量の血痕があるだけで、他に物証は何もない。

「探すまでもありません」

私は部屋中に響く声で高らかに宣言した。

「え？　どういう事？」

江原ッチがキョトンとする。私はまゆ子さんを指差し、

「何故なら、ここで殺された女性の霊は、まゆ子さんに取り憑いているからです！」

「ええ！？」

兄貴と江原ッチが仰天してまゆ子さんを見た。

「江原ッチ、離れて！」

「あ、ああ」

江原ッチもまゆ子さんから発せられる得体の知れない何かを感じたようだ。

「よく気がついたわね、お嬢さん」

まゆ子さんではないまゆ子さんが言う。ああ、ややこしい！

「まゆ子さんはショタコンじゃないのよ。そんな事より、貴女を解放してあげたいの。遺体はどこ？」

私はまゆ子さんに取り憑いた霊に呼びかけた。

「そんなの、探さなくていいわ。私はこの女を乗っ取って、この女として生きて行くのよ！」

まゆ子さんの顔が兇悪になった。兄貴は言葉も出ないほど驚いている。

「そんな事言っちゃダメだよ」

江原ッチが言った。

「そんな事言っていると、貴女は本当に悪霊になってしまうよ。貴女を殺害した犯人を突き止めるためにも、教えて下さい」

何故かまゆ子さんは顔を赤くした。この霊、本気で江原ッチに惚れてるの？

「わかったわ」

あれ？　あっさり承諾した。拍子抜けだな。

「でも、一つだけお願いがあるの」

「何？」

江原ッチは菩薩様のような笑顔で尋ねる。すると調子に乗った霊は、

「私を強く抱きしめて。そしたら、この女から離れるわ」

「何ーッ！？」

さすが兄妹（きょうだい）と言われてしまうくらい、兄貴と私のハモりは素晴らしかった。

「いいよ」

江原ッチは微笑んだままでまゆ子さんに近づく。

「これでいいかな？」

江原ッチはそっとまゆ子さんを抱きしめた。

私は血の涙を流し、飛び掛ろうとする兄貴を止めた。

「ありがとう、耕司君」

まゆ子さんの身体から、フワッと女性の霊が離れた。

「おおお！」

今度は兄貴が歓喜の声を上げる。どうやら、女性の霊が見えているらしい。

こいつ、美人の霊は見えるのか？　そして兄貴は魂の叫びを上げ

た。

「メルアド教えて下さい」

「さようなら」

女性の霊は私と江原ッチだけに自分の遺体のある場所と犯人を教えて、兄貴を無視したまま、消えてしまった。

「おっと！」

倒れかけたまゆ子さんを江原ッチが抱き止め、

「お兄さん」

と兄貴に預ける。

「俺はお前のお兄さんじゃない！」

兄貴は小姑のような事を言いながら、まゆ子さんを抱き上げた。

こうして、死体なき殺人事件は無事解決した。

ずっと霊に乗っ取られていたまゆ子さんは、どうやってここまで来たのかも覚えていない。

昨日現場検証に来た時、乗り移られたようだ。

でも、私達はまゆ子さんの事を考え、全部隠す事にした。

その方が丸く収まるからだ。

「ねえ、まどかちゃん」

車に戻りながら、まゆ子さんが小声で話しかけて来る。

「何ですか、まゆ子さん？」

「江原君て、カッコいいわね」

「は？」

ギクッとした。まさかまゆ子さん、そういう趣味があるから、あの霊に乗り移られたの？

「あんなカッコいい弟、欲しいなあ」

まゆ子さんは顔を赤らめて言い、走り出した。

大丈夫ですよ、まゆ子さん。

兄貴の気持ちは、貴女に向いてますから。

できますって。カッコいい弟が。

ついついニヤけてしまうまどかだった。

不思議な事件に遭遇したのよ！（前編）

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

あれ？　自己紹介がまともになった。

ようやく作者の「バカ」が治ったのかな？

ああ、無理か。治る訳ないな。

最近、憧れの女性である西園寺蘭子さんと連絡が取れない。

噂によると、弟子ができてその育成に忙しいらしいのだ。

その人、羨ましいな。私も蘭子お姉さんに弟子入りして最強の霊能者の名を手に入れたい。

あ。野望がある訳じゃないんだからね。

勘違いしないでよ。

取り敢えず、あの忌ま忌ましい悪役の綾小路さやかより強くなりたいというのが、当面の目標だ。

え？　さやかって誰ですって？　忘れたのなら、思い出してくれなくてよろしくてよ。

そこ、気持ち悪いとか言わないの！

そして。

待ちに待った夏休みだ。

結局部活動はパスした私は、勉強に打ち込む夏休みにするつもり。

見え透いた嘘ではない。本気だ。

だって、私の絶対彼氏の江原耕司君は、G県でトップクラスの高校を受けるんだもの。

私もそこに入れるように頑張らないと。

だから、勉強に打ち込むのよ。

江原ッチはちょっとおバカなイメージだったけど、天然なだけで、頭はいいのよ。

天然というのが、少しだけ引っかかるんだけどね。

ところが！

そんな二人の仲を裂くように、あのエロ兄貴が登場する。

「明日、また霊視の仕事を受けたんで、頼むぞ」

「えーっ、嫌だよ。明日は江原ッチと図書館でお勉強するの！」

私は必死で抗議したが、

「ご褒美は、ファミレスでケーキ食べ放題だぞ」

と悪魔の囁きを受け、あっさり承知した。

ごめんね、江原ッチ。まだ、色気より食い気のまどかなの。

「あいつは同伴不可だからな」

兄貴に先に釘を刺された。江原ッチも一緒にと言おうとしたのを見破られたのだ。

この前、兄貴の同僚の里見まゆ子さんが、霊のせいで江原ッチに色目を使ったのを兄貴は覚えていて、まだ警戒しているのだ。

しかもまゆ子さんは、

「江原君て、カッコいいですね」

と兄貴に言ったらしいのだ。まゆ子さん、正直過ぎ。

そんな訳で、江原ッチに敵対心を持つ兄貴は、彼が来るのを拒否した。

「じゃあ、私も行かない」

そう言って抵抗する事ができない弱い私だった。ケーキの魅力に

負けたのよ……。

そんな妄想を繰り広げていると、現場に到着した。

「被害者は女性です。犯人は被害者の反撃で怪我をしたようですが、大量の血痕を残したまま、姿を消してしまいました」

まゆ子さんが説明してくれた。

「どうだ、何かわかったか？」

兄貴はせっかち過ぎる。黙って座ればピタリと当たるなんて事、現実にはあり得ないのだ。

「あれ？　被害者の霊は、ここにはいないわ」

「え？　また適当な事を言ってるんじゃないだろうな？」

兄貴が疑惑の眼差しを向けて来る。私はムッとして、

「そんな事しないわよ！　恐らく、犯人に取り憑いているんだと思うわ」

「それじゃあ、ここにいても犯人の足取りは掴めないのか」

兄貴は悔しそうだ。

「そういう事ね。被害者側からは、何もわからないわ」

そう言ってから、私はハッとした。

「あれ？」

辺りをもう一度見渡すと、男の霊が立っているのが見えた。

「あんた、誰？」

私はそいつにツカツカと近づき、話しかけた。

「冗談じゃないぞ。殺されたのは俺の方だ！　あいつは俺を殺して、俺の遺体を隠したんだよ！」

「ええ！？」

私はあまりの展開に驚き、事情を兄貴達に話した。

「どういう事だ？　被害者の女性の遺体はここにあったんだぞ。それなのに、男の方が被害者って、どういう事だ？」

「私が聞きたいわよ！」

事件はあまりに謎めいていた。

犯人と思われた男が実は被害者で、遺体で発見された女性が加害者？

じゃあ、女性の霊はどこに行ってしまったの？

取り敢えず、男の霊の証言に基づき、遺体を捜索すると、確かに言われた場所に埋められていた。

「あの女、俺が殺そうとしているのを知って、俺を罠にかけて殺したんだ」

何だかドロドロして来た。怖い。

「でも、俺もそのままじゃ引き下がれなくて、あいつを道連れにしてやったのさ。だから、あそこであいつは死んでいたんだ」

「じゃあ、その人の霊はどこに行ったの？　どうして現場にいないのよ？」

私は男の霊に詰め寄った。

「お、俺だってわからねえよ」

ダメだ。謎が解明できない。どうしよう？

その時、ふとある事に思い当たった。

「ねえ、一つ教えて。その女性は、何かの宗教に入っていなかった？」

「ああ、入ってたな。俺にもしつこく入信を勧めやがってさ。それも鬱陶しくて、殺したんだ」

「やっぱりね」

私はようやく謎を解明する事ができた。

「何だ、何かわかったのか？」

兄貴とまゆ子さんが私を見る。私は胸を張って、

「謎は解けたわ。女性の霊は、恐らくある宗教団体の総本山に取り込まれたのよ」

「ええ？」

兄貴もまゆ子さんもキョトンとしている。

「前に聞いた事があるのよ、江原ッチのお父さんに。入信した人の魂を吸い取る教祖がいるってね」

「妖怪か、そいつ？」

ビビりの兄貴は、まゆ子さんの陰に隠れている。

「妖怪じゃないわ。魂を吸い取るって言うのは大袈裟だろうけど、何か怪しい事をしているのは確かね」

という事で、しばらくぶりの前編のまどかだった。

後編に続く～。

不思議な事件に遭遇したのよ！（後編）

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

先日、殺されたはずの女性が実は殺人犯で、その霊体が行方不明になるという事件が起きた。

本来なら、私の尊敬する西園寺蘭子お姉様にお願いするのがいいのだが、蘭子お姉さんは忙しいみたいなので、私が解決黒頭巾する事にした。

そこ！　古いって言わないの！　お父さんの持ちギャグなんだから！

最近お父さん、元気ないの。藤田さんが亡くなったせいでね。

ご冥福をお祈り致します。なむー。

そして何より、今回は状況が違う。

元々この一件は、私の絶対彼氏である江原耕司君のお父様である雅功（まさとし）さんが調べていたものだ。

だから私は、すぐに江原ッチに連絡を取り、彼の家にお邪魔した。

え？　いい口実ができたな、ですって？

そういう事をここで言わないの！　恥ずかしいじゃない！

江原ッチの家には、初めて来た。

さすが霊能一族だけあって、建物が古風だ。

まるで武家屋敷だ。うん？　忍者屋敷かな？

どうでもいいや。

で、私は道場のような広間に通された。板の間で正座して待つのは辛いけど、隣で一緒に正座している江原ッチの手前、私だけやめる事はできない。

「お待たせして申し訳ないですね、まどかさん」

お父さんが居間に入って来た。その後ろにいる奇麗な女性が、江原ッチのお母さん？

確か、M市の駅前で占い師をしているはず。確かお名前は菜摘さんだ。

あれ？　雅功と菜摘？　どこかで聞いたような組合せだけど、気のせいだろう。

私のお母さんも「剣術小町（某漫画とは関係ないわよ！）」と呼ばれた程の美人だけど、江原ッチのお母さんは、女優みたいだ。巫女姿もバッチリ似合ってる。

長い髪をポニーテールにしていて、一部マニアには涎（よだれ）モノかも知

れない。

「初めまして、まどかさん。息子がお世話になっています」

お母さんは女の私がドキッとするほどの妖艶さで微笑む。

エロ兄貴がいたら、速攻で口説いてるな。

兄貴、未婚既婚の見境がないから。

「は、初めまして。こちらこそ、お世話になっています」

私はチラッと江原ッチを見て応じた。江原ッチも私をチラッと見て微笑む。

お父さんとお母さんは私達と向かい合って正座した。

「例の宗教団体の痕跡がある事件が起こったそうですね」

お父さんが切り出した。私は頷いて、

「はい。お話を聞いておりましたので、すぐに思い当たりました」

あああ。こんな堅い喋り方、きつい……。しかも足の感覚がなくなってる。

「ふむ。もうしばらく様子を見るつもりでしたが、そうもいきませんね」

お父さんは腕組みしてお母さんを見る。

「ええ。私の所に来るお客さんからも、親戚の人や友達が入信して家を出てしまったと聞きました」

お母さんが答える。お父さんは私と江原ッチを見て、

「総本山は富士の樹海に程近い場所にあります。行きますか、まどかさん？」

「はい、もちろん。このままにはしておけません」

私は江原ッチと顔を見合わせてから言った。江原ッチも、

「俺の友達の姉さんも入信して、行方不明なんだ。多分、総本山にいるんだろうけど」

「警察はどう動いているのですか？」

お母さんが私を見て尋ねる。私は、

「兄の話ですと、誘拐とは断定できない上、総本山側が行方不明者はここにはいないと答えているため、何もできない状態のようです」

「教祖は政界や財界にも顔が利くと噂されています。警察も動けないのでしょう」

こういうケースは、私達霊能者にしか解決できない。

私は燃えて来た。

「では、行きましょう」

お父さんとお母さんが立ち上がる。江原ッチもスッと立ち上がった。

しかし、私はある事情で立つ事ができない。

「どうしたの、まどかりん？」

江原ッチが不思議そうな顔で私を見る。

「あ、足が痺れて……」

私が小声で言うと、

「何だ、言ってくれればいいのに」

彼は私をヒョイと抱え上げてくれた。お姫様だっこだ。

「わ、わ！」

私は真っ赤になった。何しろ、お父さんとお母さんの前なのだ。

「申し訳なかったですね、まどかさん。ウチでは普通の事でも、他のご家庭では厳しかったですか」

お父さんがそう言ってくれたが、私は苦笑いして、

「いえ、その、何とか大丈夫です」

と強がりを言ってしまった。

そして、私達は富士山の麓にあるその宗教の総本山に行く事になった。

もちろん、空なんか飛ばないわよ。

そんな事ができる訳ないでしょ！

江原ッチのお父さんは見かけ通りのアウトドア派で、車はそれっぽい奴。

スポーティなタイプ。しかも、服装をすっかり山登りに行くようなものに着替えてる。

お母さんもそれに合わせて着替えて来た。もちろん、江原ッチも。

私だけが制服姿で、まるで家出した美少女のようだ。

え？　さりげなく、「美少女」と言うところが嫌らしいですって？

うるさいわね！　ほっといてよ！

「まどかりん、着替えに戻る？」

江原ッチが訊いてくれたが、

「私、そういう服持ってないから」

「では、靖子の服をお貸ししましょう」
お母さんが提案してくれた。
「あ、そうだね。靖子のなら、大丈夫だね」
江原ッチが言った。
そして、私は江原ッチの妹の靖子さんのジャージを借りた。
ピンクで可愛いんだけどね。
うーん。これなら、制服の方がいいかも……。

それから数時間後、私達の視界には、富士の樹海が見えて来た。
「あれですね」
お父さんが言う。樹海に埋もれるように、金ピカの塔が見える。
まるで異国の寺院のようだ。
「耕司、結界が張ってあります。破りますよ」
お母さんが言った。
お父さんの強さは、この前ご一緒して見ているが、お母さんは初

めて。

「はあ！」

気合と共に、爆発的な勢いで気が放出され、結界が消滅した。

凄い。何だか、この二人だけで大丈夫な気がして来る。

「何人いますか、耕司？」

お母さんが江原ッチに尋ねた。江原ッチは目を瞑って辺りを探っていたが、

「五十人くらいいますね」

「え？」

そんなにいるの？　やばくない？

「ではここからは徒歩です」

お父さんは車を停めて降りた。私達も降りる。

「あ」

知らないうちに忍者みたいな装束姿の一団に囲まれた。

「怪我をしたくなければ、このまま帰れ」

そいつらの一人が言った。しかしお父さんはニッと笑って、

「それはこっちのセリフです」

と言ったかと思うと、目にも留まらぬ速さで忍者もどきを倒してしまった。

「ウォーミングアップになったかな」

お父さんは私を見て微笑んだ。

「そうなんですか」

ああ、NGワードを言ってしまった！

「急ぎますよ」

お父さんが走り出す。お母さんが続く。

「さ、まどかりん」

江原ッチがおんぶの態勢。え？

「二人は速過ぎて追いつけないから、俺がおんぶするよ」

「そ、そう」

恥ずかしかったけど、私は江原ッチの背中に飛びついた。

「あ」

江原ッチが顔を赤らめる。

「どうしたの？」

「あ、うん、まどかりんのその……」

口篭る江原ッチ。

「何でもない！」

そう言って、彼は駆け出した。私を背負っているのに、相当な速さだ。

江原一族は、どちらかと言うと修験者系の霊能者らしい。

先に進んで行くと、何人もの敵が倒れていた。

「お父さん達、仕事早いわね」

「うん。早いのが取り柄」

「岡本信人？」

私のボケに、江原ッチは気づかず、

「誰、それ？」

と言った。やっぱりお父さんのギャグは古過ぎるようだ。

そしてようやく総本山の建物であるあの金ピカ寺院に辿り着いた。
お父さんとお母さんは、すでに門番を倒し、中へと進んだみたいだ。
「もう大丈夫よ、降ろして、江原ッチ」
「う、うん」
何故か前かがみの江原ッチ。どうしたのかしら？
「まどかりん、あのさ、ジャージの下、何も着てないの？」
江原ッチが赤くなって訊いて来た。
「ああ！」
私はドキッとした。ジャージは私の部屋着兼パジャマの場合がある。
横着な私は、家に帰ると締め付けるものを全部外してしまう。
今回もその癖が出てしまった。
今の私は所謂（いわゆる）一つの「ノーブラ」だったのだ。
「ご、ごめん」
何故か謝り、寺院の中へと駆け出す江原ッチ。

「江原ッチ……」

そうか。私の「巨乳」が江原ッチに当たっていたのね。

可愛いんだから、江原ッチったら。

え？　誰が「巨乳」だって？　うるさいわね、ホントに！

私はジャージのファスナーを一番上まで上げて、襟を折り返し、江原ッチを追いかけた。

寺院を奥へと進むと、巨大な祭壇の前で、醜い顔で、体重が「トン」で表示した方がいいのではないかと思うくらいの巨体の男が、お父さんとお母さんに追い詰められていた。そいつは、金ピカの袈裟を着ていて、キモさを倍増している。ほとんど妖怪だ。

「さあ、もうあなた一人ですよ。観念しなさい」

お父さんが決めゼリフを言った。するとその妖怪モドキは、

「私はお前ら如きにやられはせぬ。食らえ！」

と叫ぶと、口から何か出した。白い塊だ。

ちょっと！

食事中の人が読んでたらどうするのよ、と言いたくなったが、ど

うやらそういうモノではないらしい。

「あいつが練り上げた邪(よこしま)な霊の集合体だ。みんな、下がって」

お父さんとお母さんが教祖から離れた。

教祖の口から出て来た霊体は、巨大化し、鎌倉の南大門にある金剛力士像のような姿になった。

「我らを襲撃した報いを受けよ！」

教祖はそのキモい顔を更にキモくして笑った。オエエ。吐きそう。

「ほうおおお！」

金剛力士像モドキは、手に持った槍のようなものを振り回した。

「く！」

お父さんもお母さんも反撃ができず、防戦一方だ。

「我らの尊さを知れ、愚か者共め！」

教祖が叫ぶ。すでに目が逝ってしまってる。

「まどかりん、俺が気を分けてあげるから、大黒天真言を使って！」

「わかった！」

江原ッチは赤くなりながらも私の肩に両手を置いた。私は江原ッ

チから受け取った気を感じながら、

「オンマカキャラヤソワカ！」

私の気と江原ッチの気が融合し、ラブラブパワーも加わった超強力な大黒天真言が炸裂した。

多分、蘭子お姉さんのそれを上回ったと思う。

「ぐはああ！」

金剛力士像モドキは消し飛び、その後ろにいた教祖も祭壇まで飛ばされて気を失った。

「やった！」

私は思わず江原ッチと抱き合った。あ、しまった、私、「ノーブラ」！

「ま、まどかりん、当たっている……」

江原ッチが鼻血を吹き出してしまった。

「江原ッチ！」

こうして、私達は、「魂消失事件」の黒幕を倒し、事件は解決した。

教祖は元はある寺の住職だったが、ふとしたきっかけで邪教に手を染めてしまい、人の魂を吸い取ってそれを化け物に変えていたらしい。

死んでしまった人達は生き返れないけど、奴に捕まっていた人達は助け出せた。

「私達も常に自分を律していかないとね」

お父さんの言葉は重みがあった。

私達もいつあの教祖のような状態になってもおかしくないのだ。

気をつけないと。

いつになく、シリアスに終わるまどかだった。

奇麗なお姉さんと出会ったのよ！ＰＡＲＴ２

私は箕輪まどか。中学生だけど、優れた霊能者よ。

あれ？　美少女は言わないの？

霊能者は強調しなくて良いから、「美少女」は忘れないでよ。

あ、私、誰と話してるのかしら？

という事で、夏休み。

私と絶対彼氏の江原耕司君は、家の近くにあるＭ市の市営プールに来ている。

プールデートと言いたいところなんだけど、今日の目的は除霊。

親友の近藤明菜が彼氏の美輪幸治君と来た時、幽霊騒ぎがあったのだ。

昔から、市営プールにはその手の話はある。

私は何回も来ているけど、見た事がないので、都市伝説だと思っていた。

でも、明菜と美輪君の話を聞くと、そうでもないらしい事がわかって来た。

「いるわね、確かに」

私は、ビキニの水着をバッチリ決めて言った。

誰よ、今「パット詰め過ぎだぞ」って言ったの？　失礼ね！

「ああ、確かにいるね。女の子だ」

隣に立つ江原ッチも、小島〇しおバリのブーメランパンツだ。

目のやり場に困るんですけど……。

え？　さっきからジッと見てるじゃないか、ですって！？

バ、馬鹿な事言わないでよ！　そ、そんな訳ないでしょ！

「カッコいい、誰あの子？」

周りにいる同年代の女子達が江原君に向ける熱い視線を感じて、

私は優越感に浸った。

「こっちだよ、まどかりん」

江原ッチが私の手を握って駆け出す。周囲から、

「イヤーッ！」

と絶叫が聞こえた。ムフフ。勝ったわ。

私達が辿り着いたのは、流れるプールの中にある渦巻きプールだった。

そこは十五歳未満禁止のところだ。別にエッチなところではない。

すぐ隣には、水深五メートルのプールがある。

「あそこ」

江原ッチが指差す。私もしゃがんでいる女の子の霊に気づいた。小学校五年生。去年の夏にここで溺死している。

「でもあの子、悪霊じゃないよ、江原ッチ。只あそこにいるだけみたい」

「そうだね。アッキーナと美輪の話が、大袈裟だったのかな?」

江原ッチは腕組みして考え込んだ。私は女の子の霊に話しかけようと彼女に近づいた。

「来るな!」

急に女の子の顔つきが変わる。

「な、何だ!?」

江原ッチも女の子の異変に気づいた。

「わわ！」

突然、深いプールの水が竜巻のように巻き上げられた。

辺りにいた人達が仰天して逃げ出す。

「何なの、一体！？」

私は女の子に話しかけた。しかし、女の子は収まらない。

「うるさい！　来るな！」

女の子の顔は、まさに悪霊そのものになっていた。

何がきっかけなのかわからず、私と江原ッチはその場を離れた。

「あれ？」

すると、女の子はまた穏やかな顔になり、その場にしゃがんだ。

高く上がっていた水も元に戻った。

「どういう事？」

私と江原ッチは顔を見合わせてしまった。

「こういう事です」

後ろで声がした。

振り返ると、ボン、キュ、ボンという音が似合う、凄いプロポーションのお姉さんが立っていた。

但し、水着は着ていない。黒いスーツとスカート姿なのに、スタイルの良さがわかる。

しかも、かけている眼鏡も黒。何だか、カッコいい。

「見ていてね」

そのお姉さんが女の子に近づいたが、女の子はしゃがんだままだ。

「わかった、まどかちゃん？」

「は？」

どうしてこの人、私の事を知ってるの？

私はあの居酒屋のメイドと違って、人の顔を忘れたりしないわよ！

「この子は他の子が自分と同じ目に遭わないように、十五歳未満の子が近づくと怒ったのよ」

お姉さんの解説で、私と江原ッチは納得した。

「ところで、貴女は？」

私はデレデレしている江原ッチを睨みつけてから、お姉さんに尋ねた。

「私は、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）。西園寺先生のところで修行中の霊能者よ」

「ああ！」

そうか、この人が蘭子お姉さんのお弟子さん？

凄い。オーラが「パねえ」っす。

「ありがとう。でも、貴女ももう行くべきところに行かないとね」

私はその女の子の優しさに感動したのだが、やはり諭さなければならない。

「うん。ありがとう、まどかお姉さん」

その子はニコッと微笑むと、天へと昇って行った。

「お見事です。さすが、西園寺先生が誉めておられただけの事はありますね」

小松崎さんが手を叩いて言ってくれた。

「いやあ、それほどでも……」

私は照れ臭くなって、頭を掻いた。すると小松崎さんはニコッとして、

「それじゃ、私はこれで……」

と立ち去りかけたのだが、

「キャーッ！」

と叫ぶと、流れるプールに落ちてしまった。

「……」

私と江原ッチは顔を見合わせてしまった。

何で落ちたの？　つまずいた様子はなかったのに？

もしかして、芸人体質？

「ああん、ずぶ濡れェ」

そう言いながらプールから上がった小松崎さんを素早く助ける江原ッチ。

「大丈夫ですか、瑠希弥さん？」

何故名前で呼ぶの、江原ッチ！？

「ええ。ありがとう」

小松崎さんは江原ッチをチワワのような目で見る。

「いえ、どういたしまして……」

赤くなる江原ッチ。

まさかとは思うけど、この人、恋のライバル？

天然ぽいところが、余計に気になる。

ここへ来て急に不安なまどかだった。

豪華メンバー揃い踏みなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者。でも貧乳。

おい！

どうしていつも、まともな自己紹介させてくれないのよ！？

そ、それに、私、「貧乳」じゃないし！

……。

ごめんなさい、もうウソは吐きませんから……。

先日、M市の市営プールで出会った霊能者の小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さん。

私の憧れの西園寺蘭子お姉さんのお弟子さんで、しかも私の絶対彼氏である江原耕司君を惑わせるような抜群のプロポーションと美貌の持ち主だ。

私は危機感を抱いたが、瑠希弥さんは江原ッチには全然興味がないらしく、江原ッチはあっさり撃沈した。

「お仕置きだべー」

私は瑠希弥さんと別れた後、江原ッチにお説教した。

「私の目の前で、他の女性に気を取られないでよ、江原ッチ！」

すると江原ッチは頭を掻いて、

「ごめん、まどかりん。多分、あの人、霊的な力で男を惑わせているんだよ」

「フーン」

私は軽蔑の眼差しで江原ッチを見た。

「わわ、もうまどかりん以外の女の子に気を取られたりしません！」

ミエミエのウソがバレたと悟った江原ッチは、土下座した。

「わかればよろしい」

「ははー！」

まるで遠山の金さんだ。

そして私達は、思った以上に早く片づいた幽霊騒動のおかげで時間ができ、プールデートを満喫した。

そして帰り道、途中の喫茶店で休憩。

ムフフ。一つのアップルジュースを二つのストローで飲む。

小さい頃から憧れていた光景だ。

私達は、客観的に見ると恥ずかしいくらい見つめ合い、ジュースを飲んだ。

「ブ！」

私は思わずジュースを吹いてしまった。

「ひっ！」

当然すぐ目の前にいた江原ッチにかかってしまう。

「ひどいよ、まどかりん……」

泣きそうな顔で言う江原ッチ。私はそれどころではなく、

「あ、あれ見て、江原ッチ！」

と江原ッチの後方を指差した。

「え？」

江原ッチはおしぼりで顔を拭きながら振り向く。

「あ」

そこには、あの悪役少女の綾小路さやかが男子といた。

しかも一緒にいるのは、かつて私が付き合っていたかも知れない

気がする牧野徹君ではなく、江原ッチの親友で、私の親友近藤明菜の彼、美輪幸治君だったのだ。

「み、美輪……」

さすがの江原ッチも驚いている。私もビックリだ。明菜が知れば、卒倒しているはず。

「あーら、偶然ね、箕輪さん、江原君。ご機嫌いかが？」

さやかは、その悪役ぶりを存分に発揮し、ニヤリとした。

「おい、美輪、何やってるんだよ？　アッキーナはどうしたんだ？」

江原ッチは頭に血が上ったらしく、いきなり美輪君の襟首をねじ上げた。

「何するんだよ。あいつとは別れたんだよ。放せよ」

美輪君はムッとした顔で言い返す。

おかしい。彼はさやかに操られている様子はない。

そしてウソを吐いてもいない。

でもどうして？

私達がプールに行ったのは、二人に幽霊騒動を教えられたからなのに。

「出ましょう、美輪君。乱暴な方とは関わらない方がよろしくてよ」
「ああ」
美輪君は、江原ッチの手を振り払い、席を立つとレジに向かう。
「待てよ！」
「江原ッチ！」
追いかけようとする江原ッチを、私は止めた。
何だろう？　さやかが何かしたのは確かなのに、あいつからは何も感じない。
私は携帯を取り出し、明菜に連絡した。
「はい」
元々ハスキーな声で、電話だと暗い印象がある明菜の声だが、その時はもっと暗かった。
私は時間が惜しかったし、文字数が大変なので、単刀直入に尋ねた。
「本当だよ。美輪君とは、昨日別れた」
「ええ？」
私は江原ッチと顔を見合わせた。

「とにかく、今から会えない？　話がしたいの」
渋る明菜を説得して、私達は明菜の家に行った。

「どうぞ。誰もいないから」
玄関で出迎えてくれた明菜は、目が真っ赤だった。
「俺、遠慮しようか？」
江原ッチが気まずそうに言う。でも私は、
「一緒にいて」
と彼を引っ張って、明菜の家に入った。
「何があったの、明菜？」
私は明菜の気を探ってみたが、彼女の心が閉ざされてしまっていて、何もわからない。
で、直接訊いてみた。
「隣町の中学の男子に声をかけられたの。私は無視して歩き出したんだけど、そいつはいつまでも私をつけて来て……」
私は息を呑んだ。そいつがいきなり明菜に飛び掛り、強引にキス

したのだ。

その光景が、まるで雪崩のように私の頭に押し寄せて来た。

明菜の感情の気が爆発し、解放されたのだ。

しかも、そいつから、さやかの気を感じた。

あの女！　一気に怒りが頂点に達した。

明菜はその時、その男子からさやかの気を移され、さやかの操り人形になった。

明菜はあろう事か、その男子と共に美輪君を訪ね、

「今度この人と付き合う事にしたから」

と言い捨てたのだ。

全部さやかの仕業。美輪君には一切何もせず、明菜と別れさせた。

そしてさやかは傷心の美輪君に泥棒猫のように近づいたのだ。

「ひでえ……」

江原ッチもその光景を見たようだ。両手をワナワナと震わせている。

「どういうつもりなんだ、あの女は！？」

江原ッチがいきなり怒り出したので、事情がわからない明菜は仰天していた。

「ありがとう、明菜。心配しないで。正義は必ず勝つから」

「え、ええ……」

唖然とする明菜を残し、私と江原ッチはさやかを探すために明菜の家を出た。

どこに行ったのか、さやかの気は感じられなかった。

私達は街中の空き地にいる。

仕方ないので、私はあまり使いたくない切り札を使う事にした。

「何、それ？」

ドン引きの江原ッチに苦笑いし、私はオカリナを吹いた。

甲高い音が鳴り響き、辺りに妖気が漂い始めた。

「え？　これってもしかして？」

江原ッチも思い出したようだ。電柱の陰に立つ黒尽くめの女性。

「まどかちゃん、どうしたの？」

小倉冬子さん。私のエロ兄貴の高校の同級生で、兄貴のフィアンセだと思い込んでいる人だ。

「冬子さん、この前私を苛めた女が今度は私の親友を苛めているんです。どこにいるかわかりますか？」

随分と虫のいい話だが、冬子さんはその顔を引きつらせて、

「そう。まどかちゃんの親友は私にとっても大事な人。その人を苛める女は私が許さない」

冬子さんは、何やら聞いてはいけないようなおぞましい声で呪文を唱え始めた。

江原ッチはすでに泣きそうだ。

「こっちよ、まどかちゃん」

冬子さんは、ユラーッと走り出す。私と江原ッチは慌てて彼女を追いかける。

私達は、しばらく走って街外れに出た。

そこは新しい道路ができる予定地で、近くに立ち退いたのだろうか、無人の家があった。

「あの中よ。お札で自分の気を消しているけど、私には通じないわ」

冬子さんはまた顔を引きつらせた。多分、笑ったのだろう。

「行きましょう！」

私達はその空き家に踏み込んだ。

「げ！」

そこには驚くべき光景が広がっていた。

ビキニ姿のさやかが、海パン姿の美輪君を寝かせて、妙な油を降りかけていたのだ。

「わ、まどか！」

さすがにこれほど早く私達が来るとは思っていなかったのだろう、さやかはいつになく慌てていた。

「美輪！」

江原ッチがさやかを突き飛ばして美輪君に近づく。美輪君は気を失っているらしく、反応がない。

「江原ッチ、美輪君を連れ出して！」

私は冬子さんと共にさやかを追い詰めながら言った。

「了解！」

江原ッチは美輪君を担ぐと、空き家を飛び出した。

「さやか、あんた、一体どういうつもりよ！」

私は今度という今度は、絶対に彼女を許せなかった。

私に嫌がらせするだけなら我慢するけど、関係ない明菜や美輪君まで巻き込んで！

「あいつがいけないのよ！」

「え？」

さやかが泣いている。何だ？

今、さやかは純情満開だ。どうしたんだろ？

「あ、あいつが、プールでおぼれかけた私を助けてくれて、それで、すっごく優しくしてくれたのよ！　だからいけないのよ！」

何だ。要するに、さやかが美輪君に「ほの字」だったのね。

そこ！　「久しぶりに出たな、死語の世界」とか言うんじゃないの！

「だから、だから、いけないのよ……」

さやかは泣き伏してしまった。

「わかる、その気持ち……」

冬子さんがボソリと呟いた。

私の怒りも消えていた。

結局さやかは、術で惚れさせていた牧野君ともうまくいかず、精神的にヘロヘロだったのだ。

「人のものを盗ったりしたらダメだよ、さやか」

私はそれだけ言うと、空き家を出た。

「友達になれそう」

冬子さんはそう言うと、

「まどかちゃん、またね」

と引きつり笑いをしながら、行ってしまった。

こうして、明菜と美輪君は元の鞘に戻った。

無事解決してホッとする。

冬子さんとさやかが友達になる？

なんだか怖いけど、さやかもちょっとだけ可哀想だしね。

今回は「いつもより余計に回しています」のまどかだった。

それ、どういう意味？

図書館でお勉強するのよ！

私は箕輪まどか。セーラー服が似合う中学生の美少女霊能者よ！
キャピ☆

……。

作者様、無理しなくて良いから。若ぶっても仕方ないでしょ？
今までいろいろ嫌味を言ったけど、本気じゃないからね。
お身体、大事にしてね。

え？　お前が優しいと気味が悪いですって！？

フンだ！

この前、悪役少女の綾小路さやかが騒動を起こした。
結局彼女も寂しかったのだ。
これからは優しくしてあげようと思った。
ホントよ。
ってか、私は元々優しいしね。

何よ、みんなして白い目で見て！

まどか、負けないから！

ってな訳で、今日は絶対彼氏の江原耕司君と図書館で仲良くお勉強の約束。

親友の近藤明菜と、彼女の彼氏で江原ッチの親友である美輪幸治君も合流する。

二人はさやかの策略で別れかけたけど、今はもう大丈夫だ。

そして何故か、力丸ミートの跡継ぎ、力丸卓司君も、江原ッチの妹さんの靖子ちゃんとやって来るらしい。

「どうしてリッキーが来るのよ」

明菜はリッキーが苦手なのだ。しかし美輪君が、

「そんな事言うなよ、アッキーナ。靖子ちゃんがお兄ちゃんと勉強したいんだってさ」

と言うと、

「仕方ないわね」

明菜は美輪君にはメロメロなのだ。絶対行動には出さないけどね。

そして私達は図書館で落ち合い、お勉強タイム。

「きゃあ！」

館内に響く、女性の悲鳴。

「何？」

私と江原ッチは、霊的な波動を感じて、受付へと走った。

「痛いよおお」

受付の前で、小学校低学年の男の子が、腕から血を流して泣いていた。

「何があったの？」

私と江原ッチは周囲を見渡した。

「いない……」

さっき感じたのは、強い怒りの波動。その怒りの波動は、血を流して泣いている男の子に向けられていた。

「まどかりん、危ないぞ、これ。無差別に襲いかかっているのかも」

江原ッチが囁く。私は、

「しばらく様子を見ましょう」

その男の子は、間もなく駆けつけた母親に付き添われ、図書館を出て行った。

「またよ」

図書館の人が囁くのを私は聞き逃さなかった。

「どうしたんですか？」

私はすかさず尋ねた。図書館の人はビクッとしたが、

「ああ、あの子、いつも借りた本に落書きするんですよ。母親に言っても、取り合ってくれなくて」

「そうでしたか」

ああ、危ない。危うくNGワードを言ってしまうとこだったわ。

それにしても、最近はマナーの悪い利用者が多いらしい。

「いたっ！」

今度は中年の男性が叫んだ。その人も同じく手から血を流している。

「大丈夫ですか？」

図書館の人が声をかけた。男性は痛みのあまり、膝を着いてしまった。

「江原ッチ！」

私はまたさっきの怒りの波動を感じ、江原ッチと辺りを見回した。
いた。フロアの隅に、老人の霊が。
怒りの波動は、その老人の霊から出ていた。
「何であんな事をするのよ、おじいちゃん？」
私が話しかけると、老人の霊はキッと私達を睨んだ。
「儂の寄贈した本を傷つけるからだ」
「え？」
私は思わず江原ッチと顔を見合わせた。
「儂は遺言で、儂の書斎にある全ての本をこの図書館に贈った。生まれ育ったこの町が好きだったからな」
老人は悲しそうだ。私もその悲しみを感じ、気分が落ち込む。
「しかし、最近、その本に落書きをしたり、自分の欲しいところを破り取ったりする馬鹿者が増えた。悲しい事だ」
私も江原ッチも、何も言えない。
「だから、そういう不逞（ふてい）の輩（やから）には、制裁を加えるのだ」
何だか難しい事を言ってる。あれれ？　波動が変わってる！

老人の顔が兇悪になった。いけない！　悪霊になってしまう。

「わかった、おじいさん。俺が代わりに注意するよ。だから、もう逝くべきところに逝ってくれ。貴方が悪霊になるのは、見たくない」

江原ッチが静かに諭す。すると老人の顔が穏やかさを取り戻した。

「ありがとう、少年よ。そうするよ。後は頼むよ」

老人は笑顔で消えて行った。

さすが江原ッチ。

「カッコ良かった、江原ッチ。まどか、惚れ直したわん」

私は江原ッチの腕を掴んで言った。

「へへ、そう？」

江原ッチは照れ笑いして言った。

図書館の人に確かめてみると、さっき怪我をした中年男性は、本の中身を破り取っていたらしい。

その人は、結構頻繁にそんな事をしていたので、遂に警察を呼ばれた。

当然の報いね。反省しなさい。

私達は明菜達のところに戻った。
そしてさっきあった事を話した。
「許せないわね、そういうバカは」
不正が大嫌いな明菜は憤激した。美輪君が、
「今度そういう奴を見つけたら、俺が制裁を加えてやる」
と妙に嬉しそうに言ったのは、ちょっと怖い。
「これもそのおじいちゃんに怒られる？」
靖子ちゃんが指差したのは、本の上に涎（よだれ）を垂らして眠っているリッキーだった。
「今制裁を加えてあげるわ！」
私はリッキーの頭をゴツンと殴った。
「いて！」
涎まみれのリッキーがムクリと起き上がる。それを見た美輪君が、
「良かったな、力丸、頭殴られただけで。まどかちゃんは怒ると、金た……」

と言いかけたのを、明菜が真っ赤になって口を塞いで止めてくれた。

「図書館で何言い出すのよ、美輪君！」

明菜は自分のお喋りのせいで私の必殺技（？）を美輪君に知られたのを気にしているようだ。

それにしても、やめてよね、美輪君！　江原ッチも笑い過ぎよ！

でも、ちょっぴりいい体験をしたまどかだった。

謎の溺死事件を解決するのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

やっとまともな自己紹介になったわね。

え？　普通自分の事を「美少女」って言う奴はいないですって？

仕方ないじゃない、本当の事なんだから。

文句がある人は、「りったん」あてにメッセ送って頂戴（ウソです、送らないで下さい）。

今日は、私の住んでいるM市の隣、T市の市営プールに来ている。

デートではない。霊視の仕事でだ。だから、プールは臨時休業で、私達以外誰もいない。

一緒にいるのは、エロ兄貴の慶一郎と鑑識課員さん達だ。

「何でえ何でえ。今日は、まーどかちゃんの水着姿を拝めると思って来たのになあ」

鑑識最古参の宮川さんが恐ろしい事を言った。

この人、会うたびに「危ない度数」がアップしてる気がする。

「ここが現場だ。被害者の霊はいるか？」

宮川さんを完全に無視して、兄貴が尋ねる。

兄貴は宮川さんがいると、私に優しい。

だから、宮川さんには会いたくないけど、帰りのご褒美のためにはいて欲しいのだ。

複雑な思いのまどかである。

「ちょっと待って」

被害者は、二十代の女性。高校時代、水泳の選手だった人だ。

その人が、深さ一メートルのプールで溺死した。

事件性があると判断され、私にお呼びがかかったのだ。

「一緒に来ていた友人もプールの監視員達も、彼女のそばに不審な人物がいるのを目撃していないんだ」

兄貴は今日は大真面目だ。何故なら、その被害者の女性は兄貴の同級生の妹さんなのだ。

被害者が知り合いだから真面目に仕事するって、どうなのよ？

まずいんじゃないの、そういうのって？

「だから、被害者の霊に直接訊いて、犯人を割り出したいの」

私のお姉さん候補確定目前の里見まゆ子さんが付け加えた。
最近、兄貴とまゆ子さんは、こっそり付き合っているらしい。
何だか凄く嬉しい。
おっと。仕事ね。
辺りを見渡す。いた。
あれ？　どうしてプールサイドの端にいるの？
水の中にいないって事は、地縛霊にはなっていないのか。
「どうしてそんなところにいるんですか？」
私は怯えたように身を縮めているその女性の霊に声をかけた。
「わ、私、殺されたの……」
「え？」
いきなりの展開だ。殺人事件？
「誰に？」
「わからない。突然、凄い力で水の中に引き込まれて……」
彼女は泣き出してしまった。

その時、私は別の波動を感じた。

「こっち？」

私はプールに近づく。そうか。そういう事ね。

「謎は全て解けたわ、お兄ちゃん」

私は胸を張って言った。

「まどかちゃん、いいなあ。そのペッタンコな胸がいい」

宮川さんのキモい発言を無視して、私は続ける。

「犯人は、プールの中にいるわ」

「え？」

鑑識さん達が一斉にプールを見た。

私は摩利支天（まりしてん）の真言を唱えた。

「オンマリシエイソワカ！」

「グギャーッ！」

雄叫びを上げて、プールの底に潜んでいた霊が飛び出して来た。

三十代後半の男の霊だ。

こいつも溺死したのだろうか、身体がプヨプヨしている。

しかも海パン姿なので、キモい。

宮川さんといい勝負だ。

「どうしたんだ？」

兄貴が尋ねる。残念な事に、私以外このキモいおっさんの霊が見えない。

「まゆ子さん、離れて下さい。男の霊です。こいつ、若くて奇麗な女性が大好きなんです」

「え？」

まゆ子さんは、「若くて奇麗な女性」に反応して、赤くなってしまって動かない。

ああ、言葉の選択を間違えたかな。

「里見さん！」

兄貴がまゆ子さんをプールから遠ざけてくれた。

「グヘヘ、俺の邪魔すんなよ、ガキ！　俺は若い姉ちゃんが大好きなんだよォッ！」

男の霊は、悪霊になっていた。こうなったら、除霊するしかない。

「ガキで悪かったわね！　でも将来、あんたみたいなキモい奴に襲われたら嫌だから、逝かせてあげるわ！」

私のその言葉を聞き、何故か宮川さんが悶絶したらしいが、そんな事はどうでもいい。

「インダラヤソワカ！」

バチバチバチッと雷撃が走り、キモいおっさんの霊を直撃した。

「ウギャギャーッ！」

おっさんの霊は断末魔と共に消失した。

「除霊完了」

私はホッとして微笑んだ。そして、女性の霊を見る。

「もう大丈夫。だから貴女も、ね？」

女性の霊は笑顔になった。

「ありがとう。本当にありがとう」

彼女は光に包まれ、天へと消えた。

こうして、事件は無事解決した。

そして県警に向かう車の中。

恒例のおねだりタイムである。

「今日は折角T市まで来たんだから、パスタが食べたいよお、お兄ちゃん」

私は甘えた声で助手席の兄貴に言った。T市はパスタ料理で有名なのだ。

「宮川さんに頼めば、高級イタリアンレストランで食べさせてくれるぞ」

「やだよお、あの人、キモいんだもん」

すると運転席のまゆ子さんが、

「この先に人気のお店がありますから、そこでお昼にしませんか？」

と提案してくれた。ああん、大好き、まゆ子さん！

「そ、そうですか。ま、里見さんがそう言うのなら……」

兄貴は仕方なさそうに言ったが、ホントは嬉しいのだ。

二人きりの時は、

「慶君」

「まゆりん」

と呼び合っているらしいから。

いいなあ、職場が一緒の恋人同士って。

私の彼の江原ッチの場合、お父さんの跡を継ぐのだろうから、一緒に働くって事は、結婚？

きゃあああ！

妄想が暴走しそうなまどかだった。

綾小路さやかが転校するのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。人は私の事を「霊感美少女」と呼ぶ。

何か変よ、今日の自己紹介。

まァ、いいわ。

夏休みも終わり、新学期が始まった。

クラスのみんなと再会するのは嬉しいんだけど、私の絶対彼氏の江原耕司君は学校が違うから、また放課後しか会えなくなってしまう。

「転校してよ」

江原ッチにそう言いたかったが、さすがにそんな身勝手な言動は許されない。

何より、江原ッチのご両親に呆れられる。

そんな事になれば、玉の輿を逃してしまいかねないのだ。

コホン。そんな野望は抱いてないから。

ホントよ。

校庭に入ると、いきなり嫌な奴と目が合った。
悪役商会からスカウトが来るんじゃないかと思う綾小路さやかが、こっちを見ていたのだ。
「何、何か用？」
私は警戒しながら尋ねた。するとさやかは、
「今日でお別れね」
「えっ？」
さやかは寂しそうに笑い、
「私、転校するの」
「天候？」
「違うわよ、転校！」
さすがさやか、私の発したボケを霊感で読み取ってくれた。
「今までいろいろとあったけど、貴女の事は忘れないわ、箕輪さん。ありがとう」
「え、うん」

突然切れ出された転校話に、私はすっかり面食らった。
さやかの気を探ったが、私をからかっている様子もない。
嘘を吐いている訳でもないようだ。
この前の一件が響いて、この学校に居辛くなったのだろうか？
何となく悲しくなった。
嫌な奴だったけど、お互いが理解し合える者同士だとも思っていたから。
私達は出会うのが遅過ぎたのよ。そんな名セリフが浮かんで来た。

「まどかーっ！」
廊下を歩いていると、親友の近藤明菜が走って来た。
「廊下を走るな、アッキーナ」
私はいつも明菜に言われている事を、ここぞとばかりに言い返した。
すると明菜は息を切らせたまま、
「それどころじゃないわよ！　早く教室に来て！」

「どうしたの？」

明菜は私の手を掴んでまた走り出す。

教室に入って、私はその理由を知った。

どうした事か、そこでは、肉屋の力丸卓司君と、私の元彼の牧野徹君が取っ組み合いの喧嘩をしていたのだ。

似合わない。リッキーにもマッキー（この呼び方超久しぶり）にも、肉弾戦は。

「やめなさいよ、喧嘩なんて！」

みんなが遠巻きに見ているのを尻目に、私は二人に近づいて言った。

その途端、霊の波動を感じた。

「うるさいよ、まどか！　お前、関係ないだろ！」

リッキーとマッキーが声を揃えて私に怒鳴る。この言葉も、二人には似合わない。

「何ですってェッ！？」

私は切れた。こうなったら、「月に代わってお仕置き」よ！

「インダラヤソワカ！」

私は帝釈天の真言でリッキーとマッキーを叩きのめした。
「グヒャッ！」
二人は感電して、気を失った。
私は微かに残る黒幕の気を感じ、教室を駆け出した。
「さやか、あんたねェッ！」
私はさやかがいる教室に飛び込んで怒鳴った。
「あーら、箕輪さん。どうしたの？　私に会いたくなったのかしら？」
さやかは相変わらずの憎々しさで言った。
「ふざけるんじゃないわよ。どうしてあんな事を！？」
するとさやかはニヤリとした。悪代官か、お前は！？
「お別れの挨拶代わりよ。牧野君はもう貴女にお返しするわ」
「えっ？」
私は意外な答えにギョッとした。牧野君を返す？　どういう意味？
その時、始業のチャイムが鳴った。

「話はまた後で！」

私は自分の教室へと走った。

「こらァッ、廊下を走るな、箕輪！」

顔の大きい藤本先生が大声で叫ぶ。

「はーい！」

私は空返事をしてそのまま走り続けた。

そして結局、私はさやかと対決する事なく、放課後を迎えてしまった。

「さーやーかーっ！」

私は授業が終わると、先生より早く教室を飛び出し、さやかがいる教室を目指す。

「待っていたわ、箕輪さん」

廊下の先でさやかが言った。心なしか、彼女は寂しそうだった。

「最後まで仲良くなれなかったけど、貴女と出会えて良かったわ。元気でね」

「あ、うん」

何だが拍子抜してしまった。

さやかはニコッとして廊下を歩いて行った。

うーん。確かに仲良くなれなかったのは残念な気がする。

私達は、「わかり合える」はずだったのに。

そして私は家路に着いた。

って言うより、愛しの江原ッチの待つコンビニへと向かった。

長い一日だった気がする。疲れた……。

しかし、それは始まりでしかなかったのだ。

翌々日の朝。衝撃が走った。江原ッチからのメール。

「まどかりん、綾小路さやかがウチの中学に転校して来たよ」

うわあああっ！　あの女ァッ！

超不安なまどかだった。

牧野徹君が久々にメインで登場なのよ！

私は箕輪まどか。中学生で霊能力がある。そしてみんな、私の事を「美少女霊能者」と呼ぶ。

……。あのね。

最近、自己紹介で完全に遊んでるでしょ？

え？　「美少女を入れろって言ったのはお前だろ？」ですって？

言ったかも知れないけど、言い方ってモノがあるでしょ！

もう、いいわよ、いじわる！

この前、涙で別れた綾小路さやかが、実は私の絶対彼氏の江原耕司君が通っている中学に転校したのを知った。

あの時の涙を返して！　そう叫びたかった。

さやかの転校を知り、誰よりも動揺したのは、親友の近藤明菜だ。

この前、明菜の彼氏の美輪幸治君が、さやかの策略であいつの彼氏になりかけたからだ。

明菜はそれでも表面上は冷静を装い、

「あ、美輪君」

と言いながら間違って私の携帯にかけるという、昭和の時代のお約束をやってくれた。

「大丈夫よ、アッキーナ。美輪君には江原ッチがついているから。心配しないで」

私はそう言って明菜を宥(なだ)めたが、前回の事件が事件だけに、彼女の動揺は収まらなかった。

階段から転げ落ちそうになったり、間違って男子トイレに入り、しかも気づかずに用を足してしまったりと、明菜とは思えない混乱振りだった。

「ああ、死にたい……。男子トイレに入って気づかないなんて……」

明菜は机に顔を突っ伏したまま、呟く。

「いやあ、俺、ビックリして、ションベン止まっちまったよ」

肉屋の力丸卓司君が無神経な事を言う。

いつもなら、リッキーに鋭い突込みを入れる明菜だが、そんな気力はないようなので、

「アッキーナを苛めると、靖子ちゃんに言いつけるぞ！」

と代わりに言ってあげた。

靖子ちゃんとは、江原ッチの妹さんで、驚いた事に現在リッキーと付き合っている可愛い小学生の事だ。

「や、やめてくれよ、箕輪ァ」

靖子ちゃんの名前を出されると、リッキーは途端に大人しくなる。

そんな会話を交わしている間も、明菜は机に顔を埋めたままだった。

「今日、様子を見に行って来るから」

私が言うと、明菜はようやく顔を上げて、

「ありがとう……。私、怖くて行けないから、後でメールで教えて」

「わかった」

明菜がこれほど落ち込むような事をしたさやかが許せない！

きっちり話をつけてあげるわ！

そして放課後。

私は江原ッチにさやかの監視を頼み、江原ッチの中学校へ向かった。

すると、

「まどかちゃん」

と何もかも皆懐かしい声。決して沖田艦長ではない。

振り返ると、そこにはかつて私と付き合った痕跡がわずかながら残っていると思われる牧野君がいた。

「どうしたの、マッキー？」

私が尋ねると、彼は苦笑いして、

「まだそう呼んでくれるんだ。嬉しいよ、まどかちゃん」

「そ、そう？」

牧野君は何故か悲しそうだ。彼の気を探った。

何て事？　牧野君は、さやかがいなくなって寂しいのだ。

「マッキー、さやかがいなくなって寂しいの？」

私は単刀直入に訊いた。もったいぶった言い方は好きではないのだ。

「え？　どうしてそんな事がわかるの？」

「顔に書いてある」

私は悪戯っぽく笑って言った。牧野君は赤くなった。

「そ、そうなんだ」

彼は俯いて、

「最初は、彼女に操られていた。だから、まどかちゃんと別れさせられて、凄く悲しかったし、悔しかった」

私は黙ったままで彼の話を聞いた。

「でも、さやかちゃんと一緒に帰ったり、いろいろなところに行ったりしているうちに、彼女に操られていないのに、さやかちゃんといると楽しいって思うようになっていたんだ」

「そうなんだ」

牧野君は、私や明菜の知らないさやかを見ていたんだ。

「で、気づいたんだ。僕はさやかちゃんが本当に好きなんだって」

胸がズキンとしなかったと言えば嘘になる。

今でこそ、牧野君は只の同級生だけど、小学校の時は密かに憧れていた存在だったのだから。

「だから、この気持ちを彼女に伝えに行こうと思うんだ」

牧野君は私を真っ直ぐに見た。付き合っていた時、私達はこれほど相手を見ながら話しただろうか？

あれは恋愛と思っていただけの只の「お遊び」に過ぎなかったのかも知れない。

「だから、僕も一緒に行きたいんだ。いいかな、まどかちゃん？」

何だか、急に牧野君が大人っぽく見える。

「いいよ。でも、手はつながないからね」

「アハハ」

そんな冗談でも言わないと、私は泣いてしまいそうだったのだ。

心のどこかで、私は牧野君に酷い事をしているのではないかと思っていたのかも知れない。

だから、牧野君を応援したかった。

でも、それを言葉にするのは恥ずかしかったので、ついあんな事を言ってしまった。

ごめんね、牧野君。素直じゃないまどかを許してね。

私達はしばらくして江原ッチのいる中学に着いた。

私と牧野君が一緒に現れたので、江原ッチが動揺しているのがわかって、何だか嬉しくなった。

「ま、ま、ま、まどかりん、まさか、縒(よ)りをもどしたんじゃないよね」

「違うよ、江原君。僕はさやかちゃんに会いに来たんだ」

牧野君の大人な発言に、江原ッチはすっかり飲まれていた。

「あーら、やっとおでましね、箕輪さん……」

さやかには、私が話があると伝えてもらっていたので、彼女は牧野君が来る事は知らない。

あんなに驚いているさやかを見るのは初めてだった。

「ど、どうして貴方がここにいるのよ、牧野君?」

さやかは逆ギレのような態度で怒鳴った。しかし、大人の牧野君は、

「さやかちゃんにどうしても僕の本当の気持ちを伝えたかったので、来たんだ」

さやかはますます動揺した。おかしくて笑ってしまいそうだったが、何とか堪える。

「僕は確かに最初は君の力で操られて、君の事を好きだと思い込まされていた」

「そうよ! その通りよ。貴方は私の事なんか好きじゃないのよ。私も貴方の事なんか、好きじゃないけどね」

そんな強がりを言いながら、さやかは涙ぐんでいた。

どうしてこいつ、こんなにツンデレなのよ。私みたいに素直になりなさいよ。

「あんたにだけは言われたくないわ！」

私の心を読んださやかに言われた。

「でも、今は違うよ。君に操られていないのに、君の事が好きなんだ」

牧野君のその言葉に、私と江原ッチまで顔が赤くなった。

「嘘吐かないでよ！　あんたは私の事なんか、好きじゃないわ！からかうのはやめて！」

さやかは泣きじゃくりながらもまだツンデレキャラを続けていている。

周囲に他の生徒達が集まり始めた。

いい加減、そのツンデレ、やめればいいのに。

「だから、あんたにだけは言われたくないわ！」

また心を読まれて怒鳴られた。

「からかってなんかいないよ。僕は本当にさやかちゃんの事が好き

なんだ。だから、もう一度僕と付き合って欲しい」

牧野君は、さっき私を見てくれたのと同じ真っ直ぐな目で、さやかを見ていた。

「私は、あんたを利用したのよ。弄(もてあそ)んだのよ。なのにどうして、そんな私を好きになったりするのよ？」

さやかのツンデレは国宝級だ。私も彼女には敵わない。

「だから、何度も言わすな！　あんたにだけは言われたくない！」

更に突っ込まれた。

「何でかな？　多分、本当は、さやかちゃんがいい子だってわかったからかな」

牧野君のセリフは、往年の大〇テレビにも負けないくらい臭かった。

堀ち〇みもビックリです、教官！

さやかは大泣きしながら、歩み寄った牧野君の胸に飛び込んだ。

私も江原ッチも、その昭和爆発の恋愛ドラマに涙してしまっていた。

「ありがとう、まどかちゃん」

牧野君は何故か私にお礼を言って、泣いたままのさやかをしっか

りと支えたまま、校庭を出て行った。

「これにて一件落着だね、まどかりん」

江原ッチが爽やかな笑顔で言った。私もあのメイドに負けない笑顔で、

「そうね、江原ッチ」

と応じた。

今回は珍しく、霊が出て来ないまどか劇場だった。

私は曲がった事が大嫌いなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。しいて言えば、美少女である。

……。

いじわる！　もう何も言わない！

この前、お騒がせ女の綾小路さやかが、私の絶対彼氏の江原耕司君と同じ中学に転校するという事件が起こった。

私はそれほどでもなかったのだが、親友の近藤明菜が酷く動揺し、生活に支障が出てしまった。

そこで私がひと肌脱ぎ、さやかと話をつけに行く事にした。

すると、その機会を窺っていたかのように、私の元彼の牧野徹君が現れ、一緒に行きたいと言われた。

え？　何でおじさん、興奮しているのよ？

変な人ね、全く。

話を続けるわね。

で、牧野君と共にさやかのところに行った私だったが、何故かメインは牧野君で、彼はさやかに告白し、さやかを連れて帰ってしま

った。

要するに、「お持ち帰り」？

え、意味が違うんですか、まゆ子さん？

そんな訳で、今日は久しぶりに明菜達とダブルデート。

だと思っていたら、肉屋の力丸卓司君が江原ッチの妹の靖子ちゃんと共に現れ、トリプルデートになった。

私は別に構わないのだが、リッキーの事が苦手な明菜は、ちょっとご機嫌斜め。

でも、明菜の彼氏の美輪幸治君は靖子ちゃんと仲がいいので、明菜も表立って嫌な顔はできないのだ。

私達は、この前行けなかったT市の「妖精の国」に行く事になった。

「あそこのお化け屋敷、日本で四番目に怖いらしいよ」

江原ッチが嬉しそうに言う。

四番目って、何だか微妙だ。誰が決めたのだろう？

「靖子ちゃん、お化け屋敷は勘弁してよお。俺、今度は漏らしそうだよお」

リッキーが中に入る前からそんな事を言っている。
「わかったわよ、リッキー。じゃあ、まどかお姉さんと入るから」
「それも寂しいよお、靖子ちゃん」
リッキーは泣きそうだ。ここぞとばかりに明菜が突っ込む。
「意気地なしね、力丸君は」
明菜の言葉にカチンと来たのか、リッキーが奮起した。
「そこまで言われたら、引き下がれない。よし、靖子ちゃん、お化け屋敷に入ろう！」
「わーい、リッキー大好き！」
「でへへ……」
リッキーは鼻の下が地面に着きそうなくらいデレデレしていた。
江原ッチが私を見る。
「まどかりんはどうする？」
「もちろん、入るわ。私を一人にしないでね、江原ッチ」
私は飛びっきりの笑顔とウィンクで言った。

「任せといて、まどかりん」

江原ッチは爽やかな笑顔で、ポンと胸を叩いた。

「じゃあ、俺達はいつものように観覧車に行くよ」

美輪君は本当はデレデレの明菜の手を取り、歩いて行く。

明菜が怖がりなのは知ってるけど、美輪君はどうなのかしら？

まあ、いいか。

そして私は江原ッチに定期的に抱きつきながら、お化け屋敷を堪能した。

リッキーは前回と同様に、ベンチで伸びていた。

「もう、リッキー、しっかりしてよ。情けないわね」

靖子ちゃんも呆れ気味だ。

「こ、この前より怖かったよお」

リッキーはうわ言のように言った。

確かに、前回入った「空の国公園」のお化け屋敷より、ビックリさせるお化けがたくさんいたので、迫力はあったかも。

「本当に怖いお化け屋敷は、誰もいないお化け屋敷だと思うな」

江原ッチは楽しそうに言った。私もそう思う。

「そう言えば、アッキーナ達、遅いわね」

私は観覧車の方を見た。

すると、何故か観覧車は止まっていた。

「江原ッチ！」

「うん！」

私と江原ッチは、観覧車の方に漂う霊の波動を感じて、走った。

「ああ、お兄ちゃん！」

靖子ちゃんが慌てる。

「お前はそこにいろ、靖子！　すぐ戻るから」

江原ッチは靖子ちゃんにそう言った。

観覧車の下まで行くと、明菜と美輪君が乗っているゴンドラは、一番高いところで止まっていた。

「美輪、大丈夫か？」

江原ッチがすぐに携帯で連絡した。
「大丈夫だ。しっかし、これはお得だなあ。こんな高いところで、アッキーナと二人きりでさ」
美輪君は余裕らしい。
「明菜は大丈夫なの、美輪君？」
私は会話に割り込んだ。
「大丈夫。何があっても、アッキーナは俺が守るよ、まどかちゃん」
「お願いね」
多分明菜は歯の根も合わないほど震えているのだろう。
そんな波動が伝わって来る。
私は江原ッチと目配せして、周囲を探った。
そこへ遊園地の作業員さん達がやって来て、機械を調べ始めた。
「どこも異常はないのに、どうして止まってしまったんだ？」
皆首を傾げている。
「いたよ、まどかりん。美輪達のゴンドラの隣」

江原ッチが指差した。

そこには、二十代の女性の霊が立っていた。

って言うより、浮いているのね。

「何をしたいのかしら？」

私にはその女性の霊の考えがわからない。

気を集中させ、その人の事を探る。

その人は、この観覧車から転落して死んだ人だ。

その際、警察は事故で捜査を終えたが、真相は違う。

女性と一緒に観覧車に乗った男が、女性を突き落としたのだ。

その男は、他に付き合っている女性がいて、その女性が妊娠したため、彼女と別れようとしていた。

しかし、別れ話に応じない彼女を邪魔に思い、やり直しのデートと偽ってここに来た。

そして観覧車に乗り、彼女を突き落としたのだ。

何と、その時の鑑識課の中に、私のエロ兄貴もいた。

でも、霊関係の事件ではないため、私は呼ばれなかったのだ。

どうしてそんな簡単に事故で処理されてしまったの？

「まどかりん……」

江原ッチが驚いて私を見た。私も驚いた。

男の父親が県警の上層部の人間だったのだ。

それで、捜査は申し訳程度で終わり、事故で処理された。

「バカ兄貴！」

下っ端の兄貴に毒づいても仕方ないのだが、私は腹が立った。

その時、女性の霊が私達のそばに降りて来た。

「……」

私はあまりに決まりが悪くて、彼女をまともに見る事ができなかった。

『箕輪まどかさんね？』

女性の霊が言った。私は何とか彼女を見て、

「はい。ごめんなさい。警察の関係者として、お詫びします」

『いいのよ。それより、事件の方、真犯人を……』

彼女は悲しそうに言いかけ、口を噤んだ。

「もちろんです。絶対に許しません。任せて下さい」

江原ッチが言った。カッコいい、江原ッチ。

でも、ちょっとだけ気になるのは、女性の霊が凄く美人な事。

『ありがとう』

女性の霊はスーッと消えてしまった。

同時に観覧車が動き出した。

「良かった」

私と江原ッチは顔を見合わせ、微笑み合った。

しばらくして明菜達も下に降りて来た。

明菜は相変わらず強がっていたが、膝が完全に笑っており、美輪君に支えられて、遊園地内の医務室に連れて行かれた。

私は兄貴に連絡し、事情を説明した。そして、あの女性が消える間際に残してくれたメッセージも。

「鑑識の人が見落とした証拠があるわ。ゴンドラの屋根の上にね」

彼女は突き落とされた時、咄嗟に男の服のボタンを掴み、それを

隣のゴンドラの屋根の上に落としたのだ。

風雨に晒されながらも、それがそこに残っていたのは、まさしくあの女性の霊の執念だろう。

さすがに誤魔化し切れないと思ったのか、それとも事件の真相は霊能者が彼女自身から聞き出したと鑑識課長が脅かしてくれたからなのか、犯人の男はあっさりと自白したそうだ。

当然の事だが、そいつの父親は県警を懲戒免職になり、関係者がたくさん処分された。

どうよ。私はいい事をしたと、満足感でいっぱいだった。

しかし、一つ困った事があった。

「お前のせいで、俺も怒られたぞ、かまど！」

エロ兄貴にまで処分が下されたのだ。

そのせいで私は、今回の活躍のご褒美がもらえなかった。

何となく納得がいかないまどかだった。

辛い別れもあるのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。ちなみに美少女だ。

まあ、いいわ。何も言わない。

今日は久しぶりにエロ兄貴と兄貴の彼女になったらしい里見まゆ子さんと一緒に霊視の仕事。

「お邪魔じゃないですか、まゆ子さん？」

私が車の後部座席で言うと、まゆ子さんは真っ赤になって、

「や、やだ、まどかちゃん、変な事言わないでよ」

「はーい」

私はあまりに愉快だったので、ニヤニヤしながら兄貴を見た。

「かまど、ふざけてると、降りてもらうぞ」

何故か兄貴は不機嫌だ。

この前の処分の事、まだ根に持っているのかと思ったのだが。

違った。今回の霊視の対象は、小学校の裏山で発見された白骨化した死体なのだ。

幸い、白骨死体はすでに県警に運ばれたので、私が見る事はないのだが、問題は死体の推定年齢。

十歳から十二歳。男子。埋められていた土壌の状態から、死後十五年程経っているらしい。

年齢的に兄貴と同じくらいの歳の人なのだ。

兄貴の同級生には一人、行方不明の男の子がいた。

その子は未だにどこにいるのかわからず、ご両親はまだその子の無事を信じているのだと言う。

もし、その白骨死体がその子なら、あまりに悲し過ぎる。

今回発見に至ったのは、ゲリラ豪雨で山の土砂が流失したためだった。

小学校の裏なので、補強工事がすぐに決まり、重機で掘り返していて発見されたのだ。

「その白骨死体、ＤＮＡ鑑定すれば、すぐにわかるんでしょ？」

私は兄貴に訊いてみた。すると兄貴は悲しそうな顔で、

「ご両親にそんな事頼めるかよ。今でも生きているって信じてるんだぞ」

「そうだね……」

私もしんみりしてしまった。

間もなく、現場に到着した。

同じM市なのだが、学区が違うので、来た事がない小学校だ。

「あ」

学校の裏の道で、早速その子の霊を見つけた。

小学校五年生。名前は……。

涙が出て来た。名前は、進藤航（しんどうわたる）。兄貴の同級生だ。

「どうした、まどか？」

急に涙を流した私を見て、兄貴とまゆ子さんが驚いている。

「まさか？」

兄貴が気づいた。そして、

「そうか。航君なのか……」

と言うと、私とまゆ子さんから離れた。兄貴、泣いてた。

「箕輪さん？」

まゆ子さんが兄貴に近づこうとしたので、
「一人にしてあげて、まゆ子さん」
私は涙を拭いながらまゆ子さんを引き止めた。
「そ、そうね」
まゆ子さんも兄貴と私の様子から何かを感じたのか、そう答えた。
私は意を決して航さんに近づく。
航さんも、私に自分の事が見えているのを気づいたようで、私を見ている。
「こんにちは。私、箕輪慶一郎の妹のまどかです」
航さんはニコッとして、
「ああ、慶君の？　知らなかったな、慶君にこんなに可愛い妹さんがいるなんて」
嬉しい事を言われて、これほど悲しくなるのは初めてだ。
航さんは、時の経過を感じていないのだ。
わかっているのは、自分が死んでいるという事。
「航さん、あのね」

私が話を切り出そうとすると、航さんは、
「わかってるよ。僕は殺されたんだ、変なオジさんに。あれから何年経つのかな？」
「十五年です」
私は涙を堪えて答えた。航さんは悲しそうに微笑んで、
「そんなに経ってたんだ……」
私は堪え切れなくなって声を上げて泣いてしまった。
「まどか！」
「まどかちゃん！」
兄貴とまゆ子さんが驚いて私に近づいた。
「慶君？」
航さんが兄貴の顔に昔の面影を見たのか、そう言った。
「はい。私の兄です」
私は何とか嗚咽を抑えて、航さんを見た。私のその言葉に兄貴が反応した。
「航君？　いるのか？」

兄貴にはすぐ目の前にいる航さんが見えない。やり切れないだろうな。

「そうか、慶君、夢を叶えたんだね。警察官になったんだ」

兄貴の制服に気づいた航さんは嬉しそうに言った。私は、

「そうです。だから教えて下さい。貴方を殺したのは、誰なんですか？」

と心苦しかったが、尋ねた。

「僕を殺した人は、もう死んじゃったよ。捕まえる事はできないよ」

航さんは淡々と答えた。

「そんな……」

私は唖然とした。

「それより、慶君に伝えてほしいんだ、まどかさん」

航さんは私を見た。私も航さんを見る。

「僕のお父さんとお母さんには僕から伝えるから、慶君は何も心配しないでって」

「はい」

私はまた涙で前が見えなくなっていた。

「じゃあね」

航さんはスーッと消えてしまった。

翌日、航さんのご両親が県警を訪れ、白骨死体の引き取りを申し出た。

お二人は、涙を見せなかったらしい。

航さんに「泣かないで」と言われたのだそうだ。

犯人が捕まえられなかったのは悔しいけど、航さんとご両親がお話できたのは良かった。

今回は、泣きっぱなしのまどかだった。

今日は久しぶりのデートなのよ！

私は箕輪まどか。中学生にして霊能者でもある美少女だ。

でも、コンテストで優勝した事はない。

……。

涙が出そうな事、言わせないでよ。

先日は、泣いてばかりの事件だった。残念な結果だったし。

そして今日は土曜日。

絶対彼氏の江原耕司君とデートだ。

この前はトリプルデートだったので、今日こそはと思っている。

え？　何の事か教えろですって？

嫌よ。教えてあげない。

「待った、まどかりん？」

M駅前で待ち合わせ。時間通りに来た江原ッチが、爽やかな笑顔

で言う。

「ぜーんぜん。私も今来たとこだよ」

ホントは一時間も前に来て、近くのコンビニで立ち読みしてたなんて言えない。

「そうなんだ」

江原ッチ、危ない！　もう少しでＮＧワードよ。

そして私達は電車で隣のＴ市へ出かけた。

「すっかり秋だね」

江原ッチが窓の外を見て言った。私は江原ッチを見上げて、

「そうかなあ。私と江原ッチは一年中夏だと思うけど？」

と目をキラキラさせて言ってみた。

「そ、そうかもね」

江原ッチは私の顔が近いので、照れてるみたいだ。

やがて電車はＴ駅に到着した。

私達は西口から街に繰り出す。今日は二人で映画を見るのだ。そ

れからお買い物も楽しむ予定。

「こっちだよ、まどかりん。俺の手を放さないでね」

人混みの中で、江原ッチが私の手をギュッと握る。

「うん」

その力強さにキュンとなり、返事をする。

その時だった。

「江原ッチ！」

私は駅前のデパートの屋上の端に立つ高校生のお姉さんを見つけて指差した。

「え？」

江原ッチもそちらを見た。

「わわ、危ない」

私達は慌てて駅前の交番に駆け込んだ。

「お、おまわりさん、あのデパートの屋上で、高校生のお姉さんが！」

私と江原ッチは年配のおまわりさんを引き摺るようにして外に連れ出した。

「どこだね、お嬢さん？」

おまわりさんは辺りを見渡しながら尋ねる。

「どこって、あそこに！」

私は屋上を指差す。そこにはまだフラフラしたままの高校生のお姉さんが立っていた。

「どこにもおらんじゃないか。からかわんでくれ」

おまわりさんはムッとして交番に戻ってしまった。

「ええ？」

そして、あっと思い当たる。

「霊？」

江原ッチが言った。私ももう一度屋上の女子高生を見た。

確かに良く見ると向こうが透けている。

「行ってみよう、まどかりん」

「ええ」

私達はデパートに入り、屋上を目指した。

そこはすでにビアガーデンを取り壊している最中で、他の催し物はまだ何日か先らしく、人はほとんどいない。

いるのは、人目を憚りたいカップルだけ。抱き合ったり、キスしたりしている。

私と江原ッチは顔を見合わせた。

「な、何だか気まずいね、ここ」

「う、うん」

私達は互いに顔を赤らめながら、さっき見た女子高生の霊を探した。

「いた！」

彼女は、少しずつ移動していたらしく、屋上の角に立っていた。

「お姉さん、そんなところで何してるの？」

私はいきなり声をかけた。霊だから驚いて落ちたりしないだろう。

「ああ？　私の事？」

近くで見ると、結構奇麗だ。髪は長く、黒い。細身で可憐な感じの人。

江原ッチの顔がニヤけているのが癪に障る。

「痛！」

私は彼の腕をつねった。

「このデパートの屋上の周りを三周できると、好きな人と両思いになれるんだよ」

お姉さんは楽しそうに言った。

彼女は自分が死んでいる事に気づいていないようだ。

「今二周目なんだ。あと一周なの」

私は何も言えなくなった。

彼女は、その両思いになりたい男子を狙っている意地悪なクラスメートに騙されたのだ。

そして、一周目の途中で転落してしまったのだ。

しかもその女、その事を黙っていただけでなく、その男子と付き合っている。

何て女だ！　私は怒りに震えた。

「許せないね、まどかりん」

江原ッチが仕事人モードになりかけてる。そいつをボコるつもりだ。

でも私は、

「江原ッチ、それは少し待って」

「え？　どうして？」

江原ッチはキョトンとした。

「じゃあさ、私達がお姉さんを応援してあげる。頑張って！」

「ありがとう。それなら、頑張れるかも！」

お姉さんは嬉しそうに言った。私は涙が出そうなのを堪えて、

「頑張れ、お姉さん！」

「うん」

お姉さんはフラフラしながら歩く。

やがて二周目が終了し、ラスト一周になった。

「頑張って、お姉さん！」

「ファイト！」

私達は本当に一生懸命彼女を応援した。

願いが叶う事はないとわかっていたけど。

辺りにいるカップル達は、私達を不思議そうに眺めている。
でも気にならなかった。お姉さんの健気さに感動しているから。
そして、彼女は最後の角を曲がる。
あともう一息だ。
「もう少しよ、お姉さん！」
私はまたこみ上げて来た涙を堪え、叫んだ。
そして、とうとう彼女はゴールした。
「やったあ！」
私と江原ッチは自分の事のように喜んだ。
「ありがとう」
彼女は微笑んでいた。そして、
「ホントはみんなわかってたんだ。私がもう死んじゃってる事も、こんな事しても両思いになんてなれない事も」
私は驚いた。江原ッチも仰天しているようだ。
「でも、これですっきりした。それに、あなた達のような優しい子に最後に会えて嬉しかった」

彼女は泣いていた。私も思わずもらい泣き。

「ありがとう。もう、逝くね」

お姉さんは光に包まれた。この世への未練が消えて、あちらの世界に行く事ができるみたいだ。

「さようなら。いつまでも仲良くね」

お姉さんは笑顔で天に昇り、光と共に消えて行く。

「さようなら」

私と江原ッチは手を振った。

そしてお姉さんは消えた。

「よし、あの女をボコる！」

江原ッチは涙を拭って言った。

「ダメ！　そんな事をしたら、お姉さんの気持ちを踏みにじる事になるから！」

私は江原ッチを引き止めた。

「でもそれじゃあ、俺の気持ちが収まらないよ、まどかりん！」

何だか江原ッチは熱血していた。キュンとしてしまう。

「じゃあ、これで気持ちを収まらせてあげる」
私は江原ッチの首に抱きつき、キスをした。
ほっぺじゃないわよ！　唇によ！
周りの雰囲気に呑まれたのかも知れない。
でも、今日は映画を見たら、キスって決めてたから……。
「まどかりん……」
江原ッチは真っ赤になっていた。
多分私も負けないくらい顔が赤いだろう。
「どう？　収まった？」
「う、うん」
何だか、違う気持ちが収まらなくなりそうな江原ッチだったが、
「今日はここまで」
と念を押してあげる。
「じゃあ、続きはいつ？」
「バカ！」

私はまた江原ッチの腕をつねった。

「痛！」

今日は急展開のまどかだった。ムフ。

マッキーを守るのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

しかもイケメンの彼氏までいるリア充である。

え？　使い方、間違ってる？

気にしないでよ、一休さん。

この前、私は絶対彼氏の江原耕司君ととうとうキスをした。

し、し、しかも、く、唇同士で！

きゃあああああ！

今思い出しても顔が赤くなる。

江原ッチをかなり刺激してしまったようで、彼は夜眠れなかったとメールをくれた。

それは私もだった。

以前付き合っていた牧野徹君とは、手を繋ぐだけで、ほっぺにすらキスした事はなかった。

彼も、あの悪役商会の予備軍のような綾小路さやかと順調なのだ

ろうか？

さやかも相当なツンデレだから、牧野君みたいな草食系がいいのかもね。

「だから、あんたにツンデレとか言われたくないって何度言えばわかるのよ！」

え？　さやかの声が聞こえる。

とうとう幻聴？　私ってやばいの？

「いつまで妄想に耽ってるのよ、まどか！」

ふと顔を上げると、そこにはそのツンデレがいた。

「だからツンデレ言うな！」

さやかは髪の毛が逆立つほど怒っていた。

「あれ？　ここはどこ？」

状況が飲み込めない。どうしてさやかがいるの？

そこはファミレスだった。

更にさやかの横には、マッキーこと牧野君がいた。

ああ！　ようやく思い出した。

大通りを歩いていた時、牧野君に声をかけられて、ここに入ったんだ。

でも何故さやかが？

「私も一緒にいたでしょ！」

さやかはまだ怒っている。

「まどかちゃん、江原君は？」

いつもの笑顔でマッキーが尋ねた。私は憤(いきどお)るさやかを無視して、

「今、ちょっと冷却期間中なの」

私は苦笑いして答える。

江原ッチが、

「今まどかりんと会うと、まどかりんを襲っちゃいそうなので、しばらく頭を冷やさせて」

とメールをよこしたのだ。

襲われるのは困るので、私も承諾したのだが、会えないのはやっぱり寂しかった。

「あーら、もう倦怠期(けんたいき)なの、まどか？」

さやかが嬉しそうに言った。私はムッとしたが、

「まあね。ラブラブ過ぎると、そんな事もあるのよ」
と強がってみせる。
ところで、倦怠期って何？
「実は、まどかちゃんに相談があるんだけど」
マッキーが深刻な顔で話し出す。さやかもマッキーを心配そうに見ている。
どうしたのだろう？　マッキーの気がどんよりしている。
以前、彼のお父さんが悩んでいるのを解決してあげた事があるけど。
「僕、狙われてるんだ」
「え？　どういう事？」
私はキョトンとした。するとさやかが、
「以前私が付き合っていた奴が、牧野君と私の事に気づいて、牧野君をつけ狙っているのよ」
「ええ！？」
さやかが以前付き合っていた男？

それは性質(たち)が悪そうだ。

「全部聞こえてるんだから、言葉には気をつけてよね」

さやかが呆れ気味の顔で私を見る。

「でもさ、以前付き合っていたって、いつよ？　マッキーとは六年の時からでしょ？」

「幼稚園の時」

何故か恥ずかしそうに答えるさやか。

それ、付き合ってたの？　大いに疑問だ。

「そいつも霊感強くて、よく幼稚園の帰りに除霊して遊んでたの」

それは凄い。私も除霊ができるようになったのは、まだそれほど前じゃないのに。

「ずっと連絡取れてなかったんだけど、この前偶然、そいつと会ったの」

私はさやかの気を通じて、その幼稚園時代の男を探ってみた。

うわ！　何、こいつ？

結構霊感強いんですけど。

しかも、何気にイケメンで、さやかってば、そいつに気持ちが動

きかけてるわ。

「まどか」

さやかは私を引き摺るようにしてトイレに行く。

「私はおしっこしたくないわよ」

「違うわよ！　牧野君に聞かれたくないの！」

さやかは顔を赤らめている。

「あ、あいつに気持ちが向きそうなのは、牧野君に知られたくないわ。だから……」

「わかってるわよ。そんな事、私がすると思ったの？」

私は微笑んで言った。するとさやかは、

「思った」

と酷い返し。

「あんたねえ！」

取り敢えず、その話題には触れない事で、トイレ会談は終了した。

「だったら、さやかがきっちり話しつければいいんじゃないの？」

私が言うと、さやかは、

「それができれば苦労はしないわ。あいつ、私の気を知っているから、私がいると近づかないのよ」

牧野君は恥ずかしそうに、

「それで、中学が同じまどかちゃんに助けてもらえればと思ったんだ」

なるほど。そいつはマッキーが一人の時を狙って来るのか。

「わかったわ。元カノとして、助けてあげる」

私は笑顔全開で応じた。

「ありがとう、まどかちゃん」

「頼んだわよ、まどか」

さやかが高圧的なのは気に食わないけど、マッキーの顔に免じて許してあげよう。

こうして交渉は無事終了し、両首脳は帰宅したのだった。

そして翌日。

いつ以来だろう？

私は牧野君と登校。多分、中学生になってからは初めてだ。

「何だか、緊張するなあ」

牧野君は照れながら言う。そんな顔をされると、私も照れてしまう。

「あれえ、何だ、何だ、浮気か、箕輪？」

肉屋の力丸卓司君が近づいて来た。事情を説明するのが面倒臭いので、

「靖子ちゃんに言いつけるわよ」

と呪いの言葉を吐いた。リッキーはビックリして、

「ひいい！」

と叫び、逃げて行った。効果てきめんだ。

その時だった。

「牧野徹、さやかちゃんと別れろと言ったのがわからないらしいな。痛い目に遭わせるぞ」

と声が聞こえた。

「ま、まどかちゃん……」

牧野君は私の背中にしがみついた。

この辺は、小学校時代と変わらないな。

「うーん？　その子は誰？　もしかして、新しい彼女かな、泣き虫君？」

そう言って現れたのは、昨日さやかを通じて感じたイケメンだ。

パッと見はそれなりだが、どことなく胡散臭いのは何故だろう？

「誰よ、あんた？」

イケメンは自分の気でガードしたので、それ以上は心の中はわからない。

「僕の名は、叶秀明（かのうひであき）。通称イケメン仮面だ」

何故かバラをくわえた。どういうつもりだろう？

ああ。痛い子なのか。

「可哀想な子を見るような目をするな！」

叶と名乗ったその男が言う。そして牧野君を見ると、

「さやかちゃんは僕にこそ相応しいのだよ、泣き虫君。君はコオロギにでも愛を囁いていたまえ」

と意味不明な事を言った。

「さやかは、あんたなんか嫌いだって言ってたわよ、ツケメン仮面さん」

私がわざと間違えると、

「イケメン仮面だ！　お前、ちょっと可愛いと思っていい気になるなよ。自分で思っているほど、お前は可愛くなんかないんだからな！」

と毒づいて来た。

「私はちょっと可愛いんじゃなくて、凄く可愛いのよ、ラーメン仮面さん」

「また間違えたな！　許さない！」

そいつはヒステリーを起こした。

「地獄を見せてやる！　インダラヤソワカ！」

叶は帝釈天の真言を唱えた。私は牧野君と共にその場から飛ぶ。

雷撃が虚しく地面を貫いた次の瞬間、

「インダラヤソワカ！」

私の帝釈天の真言が、叶を襲った。

「グギャギャーッ！」

叶は感電して、その場に倒れた。
「世の中には、上には上がいるって事を知りなさい」
「は、はひ……」
感電しながら、叶は反省の弁を述べた。
こうして事件はあっさり解決した。
と思われた……。
ところが！

下校時。私は江原ッチにメールで、
「襲われてもいいから、会いたい！」
と送信し、コンビニで待ち合わせ。
もう少しで着くところだった。
「まどかさん」
不意にそいつは現れた。
「か、叶！　まだ懲りないの！？」

私は再び印を結んだ。すると叶は慌てて、

「あああ、違う、違う！　リベンジに来たんじゃないよ。これを」

と封筒を差し出した。

「はあ？」

「じゃ！」

叶は照れ笑いをしながら走り去った。

中身を開いてみる。

「好きです。付き合って下さい」

私は全身に鳥肌が立った。

とんでもない展開になったよお！

モテ過ぎるのもどうかと思うまどかだった。

最強の男（？）が現れたのよ！

私は箕輪まどか。中学生で霊感も強い、モテ期の美少女だ。

何よ、モテ期って？　私は昔からモテるわよ。

え？　ウソを吐くな？

う、うるさいわね！

この前、あの綾小路さやかと牧野徹君に頼まれて、叶秀明（かのうひであき）とか言う自称「イケメン」と対決した。

そいつも霊能者だったが、私の足元にも及ばず、呆気なくケリがついた。

ところが、その叶が、事もあろうに私にラブレターをよこしたのだ。

もちろん私にそんな気はない。

そして何より、私の絶対彼氏の江原耕司（えはらこうじ）君が、

「俺がぶっ飛ばす！」

と怒り心頭なのだ。

で、心頭って何？

私達はコンビニで待ち合わせて、遠回りをしながらの下校兼デート中だ。

「ダメよ、江原ッチ。弱い者いじめは良くないわ」

「そ、そだね」

江原ッチは何かを期待していた様子だったが、私はそれほどワンパターンではない。

「ねえ、江原ッチ」

「な、何？」

妙に焦る江原ッチが面白い。

「今、私にキスして欲しかったの？」

私はニヤーッとして彼の顔を覗き込む。

「あ、いや、その、えーと……」

江原ッチは真っ赤になった。肯定する事はできないし、かと言って否定したら私の機嫌を損ねると思ったのだろう。

「素直にそう言えばいいの」

私は誰もいないのを確認して、彼のほっぺにチュッとしてあげた。

「わあお！」

江原ッチは飛び上がって喜んだ。

「ほっぺくらいなら、いつでもいいわよ」

私はあの探偵事務所のメイドに負けない笑顔で言った。

「ま、まどかりん！」

江原ッチは号泣していた。

そんなに喜んでもらえれば、私もした甲斐があるわ。

その時だった。

「僕のまどかさんにチューさせたのは、お前か？」

どこかで聞いた事のある気持ち悪い声がした。

「誰だ！？」

号泣をピタッとやめて、江原ッチが周囲を見渡す。まさか、ウソ泣きじゃないわよね？

「僕だよ」

思った通り、叶が現れた。何なのよ、こいつ？

「あいつが、さっき話した自称イケメンよ」
私は江原ッチに囁いた。
「そうか。向こうからやられに来るとは、バカな奴だね」
「手加減してね、江原ッチ」
私が言うと、江原ッチはフッと笑って、
「わかってるよ」
すると叶は卑怯にもその隙を突いた。
「インダラヤソワカ！」
「うわ！」
江原ッチはかわす事も防御する事もできず、雷撃を受けてしまった。
「江原ッチ！」
私は痙攣（けいれん）しながら倒れる江原ッチに駆け寄る。
「まどかさん、そんな弱い奴と別れて、僕と付き合おうよ」
「はあ？」
私は江原ッチを助け起こしながら、叶を睨みつける。

「あんた、自分の実力をわかってないの？」

私もお返しとばかりに帝釈天の真言を唱えた。

「インダラヤソワカ！」

「無駄だよ」

雷撃は何故か叶の手前で消滅した。

「何？」

私は仰天した。

「光明真言（こうみょうしんごん）か……」

江原ッチが起き上がって言った。

叶はニヤリとして、

「へえ、君、詳しいね。そう、僕はいかなる真言も弾いてしまう真言を身体に書いているのさ」

と言うと、いきなり服を脱ぎ始めた。

「キャッ！」

一応乙女っぽく、手で顔を覆ってみせる。

そこ！　ホントは見る気満々とか言わないでよ！

「オンアボキャベイロシャノウマカボダラマニパドマジンバラハラバリタヤウン。これさえ唱えれば、全ての仏様と通じ合える。だから、僕にはどんな真言も通用しない」

指の間から覗くと、上半身にびっしりと墨で真言を書いた叶が見えた。

「さてと。君にはもう少し眠っていてもらおうかな、元彼君！」

叶が兇悪な顔で江原ッチを見下ろす。

私も江原ッチもなす術がない。

「江原ッチ！」

「まどかりん！」

私達は目を閉じて抱き合った。

生まれ変わっても、また付き合おうね、と心の中で思った。

ボカン、ドサッ。

何かが倒れる音がした。

「おいおい、江原、こんなとこでラブシーンかよ」

聞いた事のある声ＰＡＲＴ２だ。

私達は目を開いて声の主を見た。

そこには、私の親友近藤明菜と、明菜の彼の美輪幸治君がいた。

ふと見ると、地面に叶が倒れている。美輪君に殴られたようだ。

「こいつが二人に何かしようとしてるのをアッキーナが見つけて、俺を呼んだんだよ」

すると明菜が冷たく一言言う。

「いつまで抱き合ってるのよ、あんた達」

周りには野次馬が集まっていた。

「わわ！」

私と江原ッチは、真っ赤になって離れた。

「それにしても、この変態、何者？」

明菜が叶を軽く蹴飛ばして尋ねる。

「綾小路さやかのストーカー」

「は？」

明菜と美輪君は、キョトンとした。

私は明菜達に簡単に事情を説明した。ここはコンビニの通称「たむろ場」。

「全く、あの女、いつまで私達に迷惑かければ気がすむのよ」

明菜はさやかにかなり深い恨みがあるから、いつになくご立腹だ。

「まあ、そう言わないでよ。今は牧野君と付き合っていて、大人しくしてるんだからさ」

私は怒る明菜を宥(なだ)めた。

「そうだよ、アッキーナ。人を怨むと醜くなるんだぜ」

美輪君がそう言うと、

「え、私って、そんなに醜いの？」

明菜が狼狽える。美輪君は、

「少し醜くなった方がいいくらい可愛いよ」

と臆面もなくいってのけた。、私と江原ッチは呆れて顔を見合わせた。

「あら、やだ、美輪君たら……」

おおお。照れる明菜なんて初めて見たぞ。

それにしても……。

叶の奴、あれで諦めてくれたのかな？

不安が残るまどかだった。

自称イケメンがまた現れたのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

絶対彼氏の江原耕司君とはラブラブ。

ちなみにAまで行った。

え？　表現が古い？　仕方ないじゃない、作者が昭和生まれなんだから。

ラブラブの江原ッチが、自称イケメンの叶秀明（かのうひであき）に酷い目に遭わされた。

奴は「光明真言」を自分の身体に書いて、私達の攻撃を封じていたのだ。

絶体絶命のピンチを救ってくれたのは、私の親友近藤明菜の彼で、江原ッチの親友の美輪幸治君だった。

叶の光明真言も、美輪君の拳を封じる事はできなかったのだ。

そんな訳で、私と江原ッチは、コンビニのたまり場で作戦会議。

「今度あいつが現れたら、俺がぶん殴る。で、身体に書いてある真

言を消した後、まどかりんが止めを刺して」

「うん」

何だか、非常に単純極まりない作戦だが、叶がそれほど頭がいいとは思えないので、その程度で十分なはずだ。

「じゃ、帰ろうか」

私達はコンビニを出て、手を繋いだまま道を歩いた。

みんながジロジロ見ているが、そんな事は気にならない。

「あ！」

江原ッチが私を見て叫ぶ。何故か顔が赤い。

「どうしたの、江原ッチ？」

私は不思議に思って尋ねた。

いくら私が可愛くても、もう赤くならないで欲しいものだ。

「ま、まどかりん、スカート！」

「え？」

私はふと自分を見た。

「げ！」

さっきコンビニのトイレに入った時、やってしまったようだ。
私はスカートの裾を捲り上げたまま、歩いていたのだ。
要するに「パンツ丸見え」状態である。
「……」
顔が破裂するくらい赤くなった。
「こら、見るな！」
江原ッチが周りにいる人を威嚇してくれているが、余計注目されているような気がする。
私はすぐに裾を直した。
「ごめん、まどかりん。俺が気づくべきだった」
優しい江原ッチは私に頭を下げた。
「気にしないで、江原ッチ。私が不注意だったんだから」
私は江原ッチの男気に嬉しくて涙が出そうだった。
私達の絆は、更に強くなったと思う。
そしていつもの分かれ道。

ここで一緒に下校するルートはおしまい。
それぞれ別の方向へ帰る事になる。
「じゃあね、江原ッチ。また明日」
「うん、まどかりん」
私がふざけて投げキッスをすると、江原ッチは犬の真似をしてそれに飛びつく動きをした。
そして互いに手を振り、別方向に歩き出す。
（それにしても、恥ずかしかったなあ……）
私はさっきの事を思い出して、また顔が火照った。
「え！？」
その時、江原ッチの声がした。
（まどかりん、逃げろ！）
え？　どういう事？
私は心配になり、江原ッチの後を追った。
「ああ！」
江原ッチは、高校生らしき連中に囲まれていた。

相手は五人。しかも悪そうでバカそうだ。いろいろな髪型がいて、妙に笑える。

でも、どうして私に「逃げろ！」と伝えて来たの？

「！」

その時、私は高校生の後ろにいる叶に気づいた。

あのバカ、こんな方法で江原ッチを！

ムカついてしまう。

「おお、お姫様のご登場だ」

叶が私を見た。するとバカ高校生のうちの三人も私を見た。

「へえ、噂通り、可愛いじゃんよ。俺、付き合っちゃおうかなあ」

その三人の中でも一番頭が悪そうな奴が気持ち悪い笑い方をした。

左半分だけ刈り上げている変な奴だ。

可愛いと言われてもちっとも嬉しくない。

「まどかりん、逃げろ。こいつらは俺だけで大丈夫だ」

江原ッチが叫ぶ。

「うるせえよ、中坊が！」

残りの二人のうちの坊主頭が、いきなり江原ッチに殴りかかる。

「インダラヤソワカ！」

江原ッチはその攻撃をかわし、帝釈天の真言を唱えた。

「グゲッ！」

坊主頭は雷撃を食らい、倒れた。

「皆さん、お姫様をお願いします」

叶の言葉に三人の高校生が私に向かって歩き出す。

「待てよ！」

江原ッチが追いかけようとすると、

「てめえの相手は、俺だよ！」

と残った高校生が江原ッチに掴みかかる。こいつは頭頂部の髪を長く伸ばし、周りを刈り上げている。

「うるせえ！」

江原ッチの雷撃がそいつにも炸裂した。しかし、

「効かねえよ」

そいつの直前で、雷撃が消えた。

まさか！

「叶君のおかげで、心配ないのさ」

その刈り上げ君はニヤリとした。

「くそ！」

江原ッチはそいつと距離をとった。

「ほい、お姫様」

気がつくと私は三人に囲まれていた。

「触るな！」

私も印を結ぶ。

「げ！」

三人はギョッとして離れた。

こいつらには光明真言は書いていないようだ。

「まどかさん、暴れないでよ。君が暴れると、江原君が怪我するよ」

叶がニタリとして私を見る。

「皆さんはまどかさんが逃げられないように囲んでいて下さい。僕が彼女を捕まえますので」

叶はまだ光明真言を身体に書いたままみたいだ。

「まどかりん！」

江原ッチが刈り上げ君を威嚇しながら叫ぶ。

「光明真言は万能じゃない！」

「え？」

江原ッチの言葉は謎めいていた。

「強がり言うなよ、江原君。真言を封じられた君なんて、只の中坊だよ」

叶が江原ッチを睨んで言う。江原ッチはそんな叶を無視して、私を見て頷いた。

そうか！　そういう事か！　二人で力を合わせて、叶の力以上の真言をぶつければ、破れるはずだ！

私も江原ッチに頷いた。そして呼吸を合わせる。

「何だい、何をするつもりさ？」

叶は私達を交互に見てせせら笑う。

「インダラヤソワカ！」

私と江原ッチが、帝釈天真言を同時に唱えた。

「何！？」

するとさっき江原ッチの真言を弾いた刈り上げ君に雷撃が決まる。

「ぎえええ！」

刈り上げ君がプスプスと音を立てて倒れる。

更に私を囲んでいた三人にも雷が落ちる。

「ぎょえええ！」

三人ともダウン。そして残ったのは叶だけ。

「ひ！」

奴は見苦しいほど狼狽えていた。

「わ、わ、ごめん、まどかさん、もうしないから、許して！」

泣きながら詫びる叶を、私は冷たい目で見て、

「許さない。二度と私達にチョッカイ出せないくらい痛めつける！」

「ひいい！」

叶が絶叫する。私は叶に近づき、

「この！」

とデコピンした。それだけなのに、叶は硬直して動かなくなった。

「わ！」

しかも奴は、失禁までしている。

「ばっちいな、もう！」

私は慌てて離れた。

「よし、デジカメで撮ってあげよう」

江原ッチが叶の醜態を撮影した。

「今度俺達にチョッカイ出したら、これをネットで公開するぞ」

江原ッチの言葉が叶に聞こえていたのかは、定かでない。

只、それ以降、叶は私達を見ると逃げるようになったので、聞こえていたのかも知れない。

取り敢えず、一件落着のまどかだった。

恐ろしい敵が現れたのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

どうやら、これで落ち着くのね。

もう何も言わないわ。

この前、自称イケメンの叶秀明（かのうひであき）を懲らしめて、それ以降奴がチョッカイを出して来る事はない。

おかげで私と私の絶対彼氏の江原耕司（えはらこうじ）君は、今まで以上にラブラブだ。

そんな中、少しだけ気になっている事がある。

私の尊敬する西園寺蘭子お姉さんと連絡が取れないのだ。

携帯は繋がらないし、以前聞いた事務所の電話も不通になっている。

何かあったのだろうか？

ちょっと嫌だったけど、エロ兄貴に相談してみた。

「え？　蘭子さん？　誰？」

今は県警鑑識課の同僚である里見まゆ子さんとラブラブな兄貴には、すでに蘭子お姉さんは過去の人らしい。

全く、なんて冷たいの！？

次に私は、オカリナを吹いてみた。

兄貴の婚約者と思い込んでいる小倉冬子さんなら、何か知っていると思ったのだ。

でも、冬子さんも来てくれない。

どういう事？　何かあったのかしら？

で、もう本当に嫌だったんだけど、関西のおばさんの携帯にもかけてみた。

おばさんも出ない。

何これ？　もしかして、どっきり？

更に、一度しか会っていないけど、名刺をもらった蘭子お姉さんのお弟子さんである小松崎さんの携帯に電話してみた。

でも出ない。

もしかして、私って「パジキ」っすか？

泣きそうになったが、蘭子お姉さんの事務所の電話が「不通」だったのが気にかかった。

嫌な予感がしたので、私は江原ッチの家に行った。

「まどかりん！」

いきなり現れた私を、江原ッチがもの凄く喜んでくれたが、

「ごめん、江原ッチ、お父さんいる？」

「え？」

何故か顔を赤らめる江原ッチ。何を考えたのだろう？

「まどかさん、お待ちしていましたよ」

ヘラヘラしている江原ッチの後ろから、彼のおとうさんの雅功（まさとし）さんが現れた。

私はまた、あの道場に通された。但し、今回は椅子が用意されている。

「おかけ下さい」

江原ッチのお母さんの菜摘さんもいた。私は椅子に座って、

「あの、何かあったんですか？」

お父さんはお母さんと顔を見合わせてから、

「貴女のお友達の西園寺蘭子さん達が、警察に指名手配されているのです」

「ええ？」

何の冗談だろう？　蘭子お姉さんが指名手配？

「どういう事ですか？」

私はようやく言葉を言えた。お母さんが、

「西園寺さんは、日本の闇を牛耳っているサヨカ会に睨まれてしまったのです」

「サヨカ会？」

随分とふざけた名前だ。

「それで、罠に嵌められ、警察に連行されたのですが、その後脱出したようです。しかし、そのために全国指名手配にされたのです」

お父さんが続けた。私は思わず江原ッチと顔を見合わせた。

「西園寺さんは、八木麗華さん、小倉冬子さん、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと一緒にいるようです」

ああ。八木麗華って言うんだっけ、関西のおばさん。

「サヨカ会は政界にも財界にも、そして警察や検察にもその勢力を

及ぼしているカルト教団です。西園寺さん達が危険です」

お父さんは深刻な顔で言う。

「どうすればいいんですか？」

私は泣きそうになるのを堪えて、お父さんに尋ねた。

「何とか西園寺さんとコンタクトを取って、サヨカ会を壊滅させるしかありません」

お父さんの言う事は正しいだろうけど、そんな大きな組織を壊滅させるなんてできるのだろうか？

「私は、サヨカ会の宗主である鴻池大仙（こうのいけだいせん）に辿り着ければ、勝機があると思っています」

お母さんが言った。江原ッチが、

「どういう意味？」

お母さんは江原ッチを見て、

「鴻池大仙は、邪悪なものと取引して、強大な力を手に入れたの。だから、大仙さえ倒せば、組織は壊滅するわ」

「そうなんですか」

わわ！　油断して、ＮＧワードを自分で言ってしまった！

「で、その親玉はどこにいるのさ？」

江原ッチは俄然（がぜん）やる気だ。

「本部は山梨県側の富士山麓にある。しかし、大仙には影武者がいて、どこにいるのか遠くからではわからないのだ」

お父さんが答えた。

「そこにはいない可能性もあるわ」

お母さんが付け加える。

「どうしてですか？」

私は疑問に思って尋ねた。お母さんは深刻な顔をして、

「西園寺さん達をそこへおびき出そうとしている念を感じたのよ」

「蘭子お姉さん達は、それに気づいているのですか？」

私はドキドキしながら重ねて尋ねた。

「もちろん。だからこそ、その前に合流したいのよ、西園寺さん達と」

「はい」

私は江原ッチを見た。江原ッチが笑顔で頷く。

「彼女達の気を感じる事はできますが、交信はできません。恐らく、サヨカ会の陰陽師集団の妨害工作でしょう。ですから、彼女達の気を探り、合流するしかありません」

お母さんが言った。私と江原ッチはお母さんを見た。お父さんが立ち上がる。

「では、参りましょうか、まどかさん」

「はい」

私はかつてない敵との戦いに震えていた。

高速道路は危険がいっぱいなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者よ。

今回は急いでるから、何も突っ込んであげないわよ！

何でそんなに悲しそうな目で私を見るのよ！？

私は、私の彼の江原耕司君と、彼のご両親である雅功（まさとし）さんと菜摘さんと共に山梨県に向かっていた。この前乗せてもらった四駆車だ。

「西園寺さん達はすでに山梨県に入っているようね。急がないと」

助手席で菜摘さんが言う。すると雅功さんが、

「そうだね。できるだけ、急ごう」

と応じ、アクセルを吹かす。四駆車はグングン加速して、遅い車を抜いた。

「まどかさん、西園寺さん達に呼びかけてみて下さい。サヨカ会が妨害しているので、難しいでしょうが」

雅功さんが言った。後部座席に江原ッチと座っている私は大きく頷き、

「やってみます」

と答えると目を瞑って念じた。

（蘭子お姉さん、聞こえますか？　瑠希弥さん、聞こえますか？
冬子さん、答えて！）

あれ、もう一人いたような気がするけど……。ま、いっか。

「まどかりん、俺も手伝うよ」

江原ッチが爽やかな笑顔で言ってくれた。

「ありがとう、江原ッチ」

私はニコッとして応じたのだが、

「瑠希弥さん、答えて下さい」

と嬉しそうな顔で呟く江原ッチを見て、

「この！」

と頭を叩いた。すると江原ッチは、

「誤解だよお、まどかりん。瑠希弥さんが一番感応力が強いから、
瑠希弥さんに呼びかけたんだよ」

「ホント？」

私は疑いの眼差しを向けた。江原ッチは苦笑いをして、

「ホントだって。まどかりんも瑠希弥さんに集中してよ。それが一番効率がいいはずだから」

「わかった」

その時、ふと気づく。

「江原ッチ」

「何？」

私の声のトーンが変わったので、江原ッチはギクッとしたようだ。

「何で瑠希弥さんが感応力が一番強いって知ってるの？」

「う……」

容疑者耕司の目が泳ぐ。

「答えなさい」

「すみません、メールしてるんです」

「……」

私は呆れてしまった。確かに瑠希弥さんの名刺には、メールアドレスが入っていたけど。

「瑠希弥さんは霊媒師の家系だから、感応力は高いって言ってたん

だよお。許してよお」

江原ッチは私を仏様のように拝んでいる。

「わかった。信じる」

私は前を見て、

「それから、瑠希弥さんて呼ぶの、やめて」

江原ッチは何か言いたそうだったが、

「わ、わかったよ、まどかりん」

私はニコッとして江原ッチを見た。江原ッチはホッとした顔で、

「何だか嬉しいな」

「何が？」

意味不明だ。江原ッチは俯いて、

「まどかりんにヤキモチ妬かれた気がしてさ」

私は耳まで赤くなった。

「そ、そう」

それは、妬くわよ！

瑠希弥さんて、蘭子お姉さんと違って、江原ッチの恋愛対象に入るんだもの。

瑠希弥さんが全く江原ッチに興味がないみたいだから、それほど心配はしてないけど。

それでも、江原ッチが嬉しそうに瑠希弥さんに呼びかけるのは気分が悪いの！

「と、とにかく、二人で呼びかけるわよ、江原ッチ」

「おう」

私達は瑠希弥さんに集中して念を送った。

私と江原ッチの必死の呼びかけにもかかわらず、全然瑠希弥さんと交信できない。

「サヨカ会が相当強い妨害の念を送っているようだね。困ったな」

雅功さんが呟く。ところが、私はそれどころではなかった。

緊急事態なのだ。

所謂(いわゆる)尿意が押し寄せている。

でも、何となく切り出しにくい状況だ。

かと言って、このまま最後まで我慢できる水位は超えてしまった。

私は涙目で江原ッチを見た。

すると江原ッチはすぐに気づいてくれて、

「父さん、次のサービスエリアで停めてよ。俺、もう漏れそうだから」

と言った。ああ、惚れ直したわ、江原ッチ！

「わかった。少し休憩しようか」

四駆車は新しくできた狭山パーキングエリアに入った。

「まどかりんも行く？」

江原ッチのフォローに泣きそうになる。

「う、うん、一応」

私達は全員車を降り、トイレに行った。

江原ッチは私に気を遣ってくれて、

「急ごう！」

と駆け出す。私は限界水位を気にしながら、急いだ。

「ふう」

つい溜息を吐いてしまうほど、私は安堵感に包まれていた。

「さあ、出発しようか」

雅功さんが運転席に座り、エンジンをかけた時だった。

「え？」

周囲にいた観光客達が一斉に私達の車を取り囲んだのだ。

「サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ、サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ……」

大きな鈴を鳴らしながら、その人達がそう叫んでいる。何？

「サヨカ会の信者達だ！」

雅功さんが叫んだ。私と江原ッチはギョッとして顔を見合わせた。

「一体何人いるのかしら？」

菜摘さんが周囲を見渡して呟く。

「百人ではきかないな」

雅功さんも歯軋りしていた。

「サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ、サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ……」

信者達は次第にその数を増やし、私達の車を何重にも取り囲み始めた。

「仕方ないな。突破するぞ、菜摘」

「はい」

雅功さんがハンドルから手を放し、早九字を切った。

「臨兵闘者皆陣列在前！」

途端に車の前にいた信者達が、

「ぐあああ！」

と呻き出して車から離れた。

「まどかりん、行くよ！」

「うん！」

叶秀明との戦いで修得した私と江原ッチの合体攻撃よ！

「インダラヤソワカ！」

雷撃が信者達を遠ざける。

「今だ！」

雅功さんがその隙を見逃さずに車をスタートさせた。

「サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ、サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ……」

信者達はブツブツ言いながら、近くにあった観光バスに乗り込んだ。

そして、追いかけて来た。

「何て事だ……。連中がここまでするなんて……」

雅功さんがドアミラーを見て言う。

サヨカ会。恐ろしいところね。

でも、絶対に蘭子お姉さん達と合流しようと心に誓うまどかだった。

富士山麓を目指すのよ！

私は箕輪まどか。今回は緊迫した状態なので、自己紹介のボケは省略ね。

私は、絶対彼氏の江原耕司君と江原君のご両親と共に富士山麓を目指している。

尊敬する西園寺蘭子さん達が、サヨカ会という奇天烈な団体に狙われているのだ。

蘭子お姉さん達は一発逆転をするために、サヨカ会の本部がある富士山の麓に向かった。

私達もその応援のため、関越道から圏央道に入り、山梨を目指していた。

その途中、パーキングエリアでサヨカ会の信者達に襲撃され、私達は何とかその包囲網を突破して先へと進んだ。

「もう追いかけて来ないみたね」

ドアミラーを見て、菜摘さんが言った。

「恐らく、彼らは仕立てられた信者だ。どこかに彼らを操った陰陽師が潜んでいるはずだよ」

雅功(まさとし)さんが前を見たままで言う。

「サヨカ会の信者の大半は、そうやって無意識のうちに入信させられているんだ。だからこそ、宗主の鴻池大仙(こうのいけたいせん)を叩く必要がある」

雅功さんは力強く語った。さすが江原ッチのお父様！　カッコいいわ！

「耕司、西園寺さんとは交信できないか？」

「まだだよ。全然ダメ。さっきより難しくなってる」

江原ッチは残念そうだ。交信できないのが残念なのか、小松崎瑠(こまつざきる)希弥(きや)さんの声が聞けないのが残念なのか、後でじっくり聞いてみたい。

「サヨカ会の本部に近づくにつれ、妨害の念が強くなっています。そのせいでしょう」

菜摘さんが言った。

「ならば交信は余計な力の消費になる。もうやめなさい、耕司。まどかさんもね」

「はい」

私はそっと江原ッチを見た。すると江原ッチは悲しそうな顔で、

「瑠希弥さん……」

と呟いた。

「は！」

彼は私の殺気を感じたらしく、ビクッとして私を見る。

「あ、いや、その……」

身体がカサカサになるくらい大量の汗を掻く江原ッチ。しかし私は笑顔全開で、

「後でゆっくり話しましょ、江原ッチ」

「はい……」

江原ッチの顔色が更に悪くなった。

その後はサービスエリアに立ち寄っても何事もなく、車は順調に進み、山梨県に入った。

「うわ！」

トンネルを出た途端、波動が変わった。

「これは……？」

私は思わず耳を塞いだ。雅功さんが富士山の方を睨んで、

「サヨカ会が何かを始めたようだね。思念の強度が変わった。急いだ方がいいようだ」

と言うと、四駆車を加速させた。

そして河口湖インターチェンジで高速を降り、料金所を通過した。するとパトカーが近づいて来た。

「停まって下さい」

おまわりさんが降りて来て、四駆車を誘導し、端に停まらせた。

「お忙しいところ、失礼致します」

おまわりさんが敬礼して雅功さんに話しかけた。

「何でしょう？」

雅功さんは窓を開いて尋ねた。

「あなた方に逮捕状が出ています。大人しくなさい」

「嫌です」

雅功さんはアクセルを吹かすと、パトカーを避けてその場から逃げ出した。

「えええ！？」

大丈夫なの、こんな事して？

「父さん、今のは？」

江原ッチが慌てて尋ねた。雅功さんはハンドルを切りながら、

「手首に数珠を巻いていた。あれはサヨカ会の数珠だ。信者だよ」

「え？」

私と江原ッチは顔を見合わせた。

「逮捕状の話はハッタリよ。心配しなくていいわ」

菜摘さんが水晶を覗きながら言った。

取りあえず、ホッとする。

それにしても、何て団体なの、サヨカ会って？

「いよいよ連中の本拠地が近いという事だ。耕司、まどかさん、警戒してくれ」

「はい」

私と江原ッチは声を揃えて答えた。

心配だ。蘭子お姉さん達は大丈夫だろうか？

蘭子お姉さんの事だから、私が心配する事はないだろうけど。

それに瑠希弥さんと冬子さんも一緒だし。
多分、最強トリオよね。
あれ？　もう一人いたような……。
ま、いっか。
「見えて来たよ」
雅功さんの声に反応し、窓の外を見た。
「何、あの不気味な建物？」
何だか、いろいろな宗教を全部一緒にしたような造りだ。
大仙とか言うおっさんの美意識がおかしいのだろうか？
信仰心をバカにしたような建物は、何だか気分が悪い。
いよいよ本拠地に乗り込む。
思わず江原ッチの手を握り締めた。
「まどかりん、大丈夫。まどかりんは絶対に俺が守るから」
「うん」
私は半分だけその言葉を信じた。だってえ……。

今はサヨカ会より瑠希弥さんが脅威のまどかだった。

サヨカ会本部に突入するのよ！

私は箕輪まどか。

現在、サヨカ会と言う宗教団体の本部を目指している。

私の憧れの西園寺蘭子さん達がピンチなのだ。

そして私達自身も。

心強い江原耕司君のご家族と一緒だから、何も心配はしていないのだけど、一つだけ心配な事がある。

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さん。

高校を卒業したばかりの、ボンキュッ、ボンのお姉さんだ。

私の絶対彼氏のはずの江原ッチが、瑠希弥さんに心惹かれている。

それは確かに私はまた「スルペタ」かも知れないけど……。

但し、「スルペタがいい」と言うG県警鑑識課の宮川さんは嫌だ。

「まどかりん、着いたよ」

私の妄想タイムは終わった。

今は江原ッチを信じるしかない。

「行きますよ、まどかさん」
江原ッチのお父さんの雅功さんが言った。
「はい」
私達は車を降りた。
「あれは？」
車が一台停まっている。蘭子お姉さんのとは違う。
誰のだろう？
「急ぎましょう。異変があったようです」
お母さんの菜摘さんが告げた。
確かに強烈な波動だ。
これ、蘭子お姉さんの波動に似ている。
でも、何か違う感じがするのは、何故？
「何者だ、お前達は！？」
中から怪しい黒尽くめのおっさん達が現れた。
「正義の味方ですよ」

雅功さんのギャグが炸裂する。雅功さんと菜摘さんは瞬く間に男達を打ち倒した。

「先は長い。行きますよ」

「はい！」

私達は、その奇妙な建物の中に飛び込んだ。

中は天井の高い廊下がずっと続いていた。

次々に現れる敵を雅功さんと菜摘さんが倒す。

不意に現れる陰陽師の式神（しきがみ）を私と江原ッチが連携して吹き飛ばす。

どれほどの敵を倒したのかわからなくなった頃、前から見た事のある人達が駆けて来た。

冬子さんと瑠希弥さんと……。誰だっけ？

「ご無事でしたか？」

雅功さんが笑顔で言った。

「まだ蘭子が戦ってるとこや。あのおっさん、無限に死霊を繰り出して来るねん。キリがないで」

見た事はあるが、名前が思い出せない関西のオバさんが言う。

「大仙の術具を見つけないと、蘭子さんが危ないわ」

冬子さんが言った。雅功さんが頷き、

「私達はその術具を探しましょう。西園寺さんは大丈夫です。負けたりしませんよ」

「わかりました」

瑠希弥さんは泣いていた。蘭子お姉さんが心配なのだろう。

こんないい人に嫉妬するなんて、私は何て嫌な奴なのだろう。

自分を恥じた。

「さあ、行きましょう」

雅功さんが走り出す。それに続いて菜摘さんと関西のオバさん、冬子さんが走り出す。

「行きましょう」

江原ッチが私を忘れ、瑠希弥さんの手を取って走り出した。

「え・は・ら・っ・ち！」

私は呪いの言葉を吐くように江原ッチを呼んだ。

「あ」

江原ッチは瑠希弥さんに詫びてから、私のところに戻って来た。
「ご、ごめん、まどかりん。俺、泣いてる女性に弱くてさ……」
「知らない！」
私は顔を背け、
「行きましょう、瑠希弥さん」
「え、ええ」
瑠希弥さんは私に手を取られて驚いていたが、そのまま走り出す。
「まどかりーん」
江原ッチが泣きそうな顔でついて来た。
「冬子さん、術具がどこにあるかわからんか？」
関西のオバさんが尋ねた。
「さっきの広間にはなかったわ。どこかに隠しているようね」
冬子さんが普通に話しているのを初めて見た。
「探してみるわ」
冬子さんの身体から、得体の知れない何かが飛び出し、あちこち

に消えた。

何、今の？

「貴様ら！」

また雑魚が現れた。今度は関西のオバさんが一人で全員倒してしまった。

「邪魔じゃ、ボケ！」

やっぱりこの人、強いんだ。蘭子お姉さんが「親友」というだけの事はある。

今度こそ名前を覚えよう。

「こっちね」

大回廊とも言うべき廊下を右に曲がり、私達は進んだ。

「ここから先は行かせんぞ！」

陰陽師軍団が大挙して現れた。大量の式神が放たれ、私達に襲い掛かる。

「行くわよ、江原ッチ」

「う、うん！」

私が笑顔で声をかけると、江原ッチはようやく元気を取り戻した。

喧嘩は後でできる。

今は蘭子お姉さんのために戦う！

「オンマカキャラヤソワカ！」

江原ッチとのダブルパワーで威力倍増の大黒天真言を放つ。

「ぐえええ！」

式神が全部消え、陰陽師達も倒れた。

「凄いわ、まどかさん。さすが、先生が一目置く存在です」

瑠希弥さんにそう言われ、私は照れた。

「いやあ、それほどでも……」

何故か一緒に照れている江原ッチは放置する事にした。

「さ、先を急ごう」

雅功さんが走る。

私達もそれに続いた。

遂に大詰めなのよ！

私は箕輪まどか。只今壮絶戦闘中だ。

サヨカ会というふざけた名前の団体の本部で、私達は戦っている。

「こっち」

小倉冬子さんが先頭で走る。冬子さんてこんなに敏捷だったのね。

私達は次第に暗くなる廊下をひたすら走った。

何故か信者達も陰陽師達も襲って来ないのが不気味だ。

「蘭子が頑張っとるんやな。みんなそっちの援護に行ったんやろ」

関西のオバさん、いや、八木麗華さんが言う。

「いくら西園寺さんが強くても、今のままでは消耗戦です。早く術具を見つけないと」

雅功さんが言う。菜摘さんが頷き、

「西園寺さんの霊威が衰えて来ています」

「先生」

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが悲しそうに呟くのを、私の絶対彼氏の江原ッチが心配そうに見ている。

嫉妬はしないと決めているが、何となく不愉快なのはどうしようもない。

「もうすぐよ。その先」

冬子さんが言った。私達は廊下の角を曲がった。

その先には、巨大な鉄の扉があった。

「この中に大仙の術具があるわ。しかも、大仙の本体もここにいる！」

冬子さんの言葉は、私達に衝撃を与えた。

「じゃあ、先生が戦っているのは？」

瑠希弥さんが蒼ざめた。

「大仙の影。陰陽道で作り出した分身よ」

冬子さんは鉄の扉を射るように睨む。

「それやったらなんぼ攻撃しても埒が開かん。蘭子を疲れさせるのが目的なんか、あのおっさんは？」

麗華さんが苦々しそうな顔で言った。

「ほおお！」

いきなり瑠希弥さんの気が変わった。

「先生は私が助けます！」

瑠希弥さんの身体から凄まじいオーラが出た。

「バッチャ、いいよね、使って」

瑠希弥さんはそう呟くと、

「オンマケイシバラヤソワカ！」

と真言を唱えた。私は聞いた事がないのでキョトンとした。

「瑠希弥、無茶や！」

麗華さんが焦っている。

何？

「きゃああ！」

瑠希弥さんが吹き飛んだ。彼女の服はボロボロだ。

何が起こったの？

「瑠希弥！」

麗華さんが駆け寄り、下着姿の瑠希弥さんを男の人から隠す。

雅功さんはすぐに顔を背けたが、江原ッチは凝視していた。

「こら！」

私が怒ると、

「ご、ごめん！」

江原ッチは慌てて背を向ける。

「扉は吹き飛んだわ。ありがとう、瑠希弥さん」

冬子さんが言い、中へ入った。それに雅功さんが続く。そして私と江原ッチも。

菜摘さんが替えの服を瑠希弥さんに渡したようだ。

「先に行っていて。すぐに行くから」

菜摘さんの言葉に雅功さんは手を上げて応じた。

中は薄暗く、蝋燭の明かりがあるだけだ。

その部屋の中央に祭壇があり、注連縄のようなものに囲まれて立つおっさんがいた。

「鴻池大仙（こうのいけだいせん）か？」

雅功さんが尋ねた。するとそのおっさんはニヤリとして、
「いかにも。ようこそ、我が館へ。そして次は地獄だ」
と言った。途端にたくさんの死霊が集まり出した。
「どうやら、私の影が西園寺蘭子にやられたらしいのでね。急がないといけないのだ」
大仙はその手に奇妙な形の独鈷（どっこ）を持っていた。
「あれが術具か？」
江原ッチが囁く。
「そうみたいね」
私は彼を見ないで応じた。
「私の魂を返してもらうわ、大仙」
冬子さんが進み出て言った。大仙は冬子さんを見て、
「その必要はあるまい。お前らは全員ここで死ぬのだからな」
死霊の数はまるでねずみ算式のように増えていた。
まどか危機一髪だ。

正義は必ず勝つのよ！

私は箕輪まどか。現在トンデモオヤジと戦っている。

オヤジの名は鴻池大仙（こうのいけだいせん）。「サヨカ会」という宗教団体の宗主だ。

大仙のオヤジは、死霊を操る術具を持っていて、ねずみ算式に増えて行く死霊が纏わりついていた。

すでに気持ち悪い程の数になっている。

「手早く片づけないと、とんでもない事になりそうですね」

私の彼である江原耕司君のお父さんの雅功さんが呟く。

確かに「マジヤバい」状況だ。

「間髪入れずに行くで、みんな！」

関西のオバさんが叫ぶ。

「インダラヤソワカ！」

帝釈天の真言を連発する。しかし、オヤジには届かない。

「その程度でこの私に対抗しようと言うのか？　西園寺蘭子並みの破壊力のある真言でなくては、全く意味をなさないぞ」

オヤジは嫌らしい笑みを浮かべ、私達を見ている。蝋燭の明かり

がオヤジの顔を浮かび上がらせているので、キモさ倍増なのだ。

「ほならこれならどうじゃ！」

オバさんが目配せする。大黒天真言を使うつもりのようだ。それなら効くだろう。

私は江原ッチと呼吸を合わせた。

「行くで、おっさん！」

まずは関西のオバさんが真言を唱えた。

「オンマカキャラヤソワカ！」

続けて私と江原ッチのダブル真言だ。

「オンマカキャラヤソワカ！」

更に、後からやって来た小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんも真言を唱える。

「オンマカキャラヤソワカ！」

大黒天真言の三連弾だ。これで効かないのなら、もうどうしようもない。

「うおおお！」

さすがのオヤジも効いたらしく、叫び声を上げた。

「やったか？」
雅功さんと菜摘さんが身を乗り出す。
オヤジは祭壇の上に転がりそうになった。確実に効いているようだ。
「なーんてな」
うん？　いかりやさん？　そんなはずはない。
「効かぬぞ。何だ、今のは？　手を抜いているのか、お前達は？」
オヤジは余裕の笑みを浮かべて私達を見た。
ムカつく！　オヤジは私達をからかっていたのだ。
「何やて？」
関西のオバさんも驚いている。瑠希弥さんもだ。
「おしまいか？　ならばこちらから行くぞ」
オヤジの周囲の死霊達が私達に向かって来た。
「きゃっ！」
私は死霊に急襲され、倒れかけた。
「まどかりん！」

江原ッチがそれを支えてくれた。

「皆さん、固まって下さい。一人になると危ない」

雅功さんが指示する。私達は雅功さんを中心にして円陣を組んだ。

「フン、そんな事は時間稼ぎにもならぬぞ。私の可愛いペット達の力、存分に味わうがいい」

オヤジは目を血走らせ、叫んだ。途端に死霊達がまるで竜巻のような勢いで回転し始め、私達の円陣目がけて飛んで来た。

「はっ！」

小倉冬子さんが何かを放つ。その何かは死霊に向かい、死霊を食らい始めた。

「おのれ、小倉冬子！」

オヤジは死霊の全てを冬子さんに向けた。

「くっ！」

冬子さんはさすがに捌き切れなくなっている。

「オンマリシエイソワカ！」

私と瑠希弥さんが摩利支天の真言で死霊を弾き、江原ッチが冬子さんを助ける。

「インダラヤソワカ！」

しかし、そんなものは本当に焼石に水状態だった。

死霊の数は増えるばかりだ。

「消耗戦だな……」

雅功さんが呟いた。

もしかすると、オヤジの奴、私達が疲れるのを待っているのか？

あいつは術具の力で死霊を動かしているだけだから、全然疲れてはいないのだ。

このままでは私達がどんどん消耗してしまい、力を使い切ってしまう。

「やっぱり、あの術具を奪わない事には……」

その時だった。

懐かしい波動を感じた。これは……。

私は扉の方を見た。そこには、西園寺蘭子さんが立っていた。

「蘭子！」

「先生！」

「蘭子お姉さん！」

「西園寺さん」

みんなが蘭子お姉さんを見た。蘭子お姉さんは頷いて、

「遅くなりました。さあ、最後の仕上げをしましょう」

とオヤジを睨む。するとオヤジが、

「西園寺蘭子、お前ももうほとんど力が残っておらんだろう。仲良く地獄に送ってやるから、安心して死ぬがいい！」

と言い放った。どこまでも憎らしい奴だ。

「どうして地獄なの？」

お姉さんは負けていない。するとオヤジは高笑いして、

「神であるこの私に逆らった者は皆地獄に行くのだよ！」

「誰が神よ！？」

蘭子お姉さんは関西のオバさんと冬子さんが目で合図したのを見て、

「貴方だって疲れているでしょ？　死霊の動きが乱れているわよ」

オヤジは蘭子お姉さんを嘲るように見て、

「そんな戯言に惑わされるか、小娘。神の力を見るがいい！」

死霊がまた増殖している。本当にヤバい数だ。

「皆さん、力を貸して下さい！」

蘭子お姉さんは摩利支天（まりしてん）の印を結んだ。

私と江原ッチ、そして瑠希弥さん、それから雅功さんと菜摘さんも印を結んだ。

多分これが囮なんだろう。関西のオバさんと冬子さんがオヤジの視界からソッと外れる。

「オンマリシエイソワカ！」

死霊が一瞬だけ弾き飛ばされた。

「無駄だ、その程度の力！」

高笑いするオヤジの懐にオバさんと冬子さんが飛び込んだ。

「何！？」

オヤジはビックリしていた。ざまあ見ろ。

「おっさん、ボディががら空きやで」

オバさんの左の拳がオヤジの脇腹にぶち当たった。

「ぐえええ！」

オヤジが苦しむ隙を突き、冬子さんがオヤジの手から独鈷を奪い取った。作戦成功だ。

「ざまあ見さらせ、ジジイ！　これはウチのうんこの分や！」

関西のオバさんが凄い事を言い放ち、踵落としを炸裂させた。

「ぐはあ！」

オヤジはそのまま後ろに倒れた。

術具を奪った冬子さんは何やら呪文を唱え、死霊達を呪縛から解放している。

相変わらず凄い人だ。敵にしたくない。

あれほどたくさんいた死霊達はたちどころに消えてしまった。

「勝ったな」

関西のオバさんが「どや顔」で言った。

蘭子お姉さんが微笑んで私達を見た。

「危ない！」

冬子さんが叫び、オバさんを抱きかかえてオヤジから離れた。

オヤジはまだ動く余力があったようだ。立ち上がり、その右手に銃を持った。

「貴様ら、よくもここまでやってくれたな！」

オヤジは注連縄から出て来て、銃を私達に向けた。

「おっさん、無駄や。やめとき」

オバさんが近づこうとすると、

「寄るな！」

オヤジはいきなり銃を撃った。

オバさんは弾道を読んでいたらしく、見事にそれをかわした。

「よくかわしたな。次は外さんぞ」

ギョッとした。オヤジは事もあろうにこの私に銃を向けたのだ。

「まどかりん！」

咄嗟に江原ッチが私の前に立ち塞がってくれた。

「死ねえ！」

オヤジがそう叫んだ時だ。

私はビクッとした。

オヤジの後ろに黒い着物の少女が現れたのだ。何者？

少女はフッと笑った。ゾクッとする。

霊？　それにしても何て威圧感なの？

オヤジが引き金を引くと、銃が暴発した。

「ぐはあ！」

その衝撃でオヤジは後ろによろめき、祭壇に倒れた。

注連縄が切れ、周囲にあった蝋燭が炎を吹き上げながらオヤジの上に落ちて行った。

「うわあああ！」

蝋燭の火とは思えない勢いで炎がオヤジを焼いて行く。

江原ッチがその惨状を私に見せないように抱きしめてくれた。

「わはははは！」

何故かオヤジは大笑いをしながら燃え尽きたようだ。

黒い着物の少女は、私達を見てゾッとするような笑みを浮かべると、オヤジの魂を伴い、消えてしまった。

戦いが終わったのを悟ったのは、それからしばらくしてからだった。

新たなる戦いが始まるのよ！

私は箕輪まどか。

尊敬する西園寺蘭子さんが窮地に立たされるというかつてない強大な敵との戦いも終わった。

「ありがとう、まどかちゃん。助かったわ」

蘭子お姉さんにそう言われ、私は本当に嬉しくて天に昇りそうだ。

「そ、そんな……。蘭子お姉さんには凄くお世話になっているから、当然の事をしただけです」

私は顔を火照らせて言った。

「謙虚なのね、まどかちゃんは」

「えへへ」

それにしても蘭子お姉さんて、女の私も惚れてまうやろーなくらいだ。

エロ兄貴がよく諦めたと思う。

まあ、兄貴は兄貴なりに身の程を知ったという事か。

あ、今の発言、兄貴の彼女である里見まゆ子さんに失礼かな？

ふと見ると、私の絶対彼氏の江原耕司君は性懲りもなく、また小松崎瑠希弥さんとデレデレしながら話している。

「さすが、江原ご夫妻のお子さんですね、耕司君。素晴らしいです」

瑠希弥さんが賞賛するのをヘラヘラしながら聞いている江原ッチ。

私はソッと彼の背後に回った。

「ひっ！」

私が強烈な視線で睨んでいるのに気づいた江原ッチは、

「ま、まどかりん、誤解しないでね。俺は別に瑠希弥さんと仲良くなろうなんて考えていないんだからね」

と見苦しい程狼狽えている。

私は蘭子お姉さんがいるのでその場は我慢した。

「後でゆっくり話しましょう、江原耕司君」

「……」

私が「江原ッチ」と呼ばずにフルネームで呼んだので、江原ッチは蒼くなっていた。

そこへ江原ッチのお父さんである雅功さんが近づいて来た。

「まどかさん、菜摘と耕司と三人で先に帰って下さい。私は西園寺

さん達と話があるので」

「はい」

有無を言わせない雰囲気を感じ、私は何も質問をしないで返事だけした。

まさかその時は、蘭子お姉さんとしばしの別れになるとは知るべくもなかった。

江原ッチのお母さんである菜摘さんの運転で、私達はG県への帰路に着いた。

かなり疲労していた私と江原ッチは、人目も憚らずに抱き合うようにして爆睡してしまった。

やがてG県に着き、家の前まで送ってもらった頃には、日が暮れかけていた。

「また明日ね、江原ッチ」

「うん、まどかりん」

私は菜摘さんを見て、

「ありがとうございました」

菜摘さんは私を見て、

「今日はゆっくりお休みなさい、まどかさん」

「はい」

私は車が見えなくなるまで手を振り、家に入った。

あれほど車の中で眠ったのに、夕食を食べてお風呂に入ると、また睡魔が襲って来た。

（壮絶な戦いだったもんなあ）

思い出すだけで怖くなる。

いや、サヨカ会のオッさんの事ではない。

あの黒い着物の少女。

一体何者なんだろう？

悪霊なんて言う、そんなチャチな存在ではない。

あれほど威圧感のある悪霊は今まで見た事がないのだ。

蘭子お姉さんと瑠希弥さんは見た事があるらしかったけど。

霊を怖いと思った事はないけど、あの少女だけは震えるほど恐ろしかった。

そんな事を回想しているうちに、私は眠りに落ちていた。

そして翌日。

私はどうしても気になる事があり、江原ッチの家に行った。

「おはようございます」

玄関に入り、奥に声をかける。

「はーい」

聞いた事がある声が応えた。あれ？　誰だっけ？

「いらっしゃい、まどかさん。どうぞ」

何故かエプロン姿の瑠希弥さんが現れた。

「えっ？」

私は混乱して、何も考えられなくなった。

「落ち着いた、まどかさん？」

ふと我に返ると、私は居間に通され、ソファに座っていた。私を

心配そうに見ている瑠希弥さんと菜摘さんがいる。

「あ、あの……」

私は菜摘さんを見た。菜摘さんは微笑んで、

「ごめんなさいね。まどかさんに何の断わりもなく、雅功が話を進めてしまって」

「はい？」

事情が呑み込めない私に菜摘さんが説明してくれた。

蘭子お姉さんと関西のオバさんが山形に修行に行った事。

そして、瑠希弥さんの能力をもっと引き出すために菜摘さんが瑠希弥さんを指導する事になった事。

更に、江原ッチと私は、瑠希弥さんの指導の下、真言の会得を更に進める事になった事。

「男はそういう事に鈍感なので困ります。まどかさんは耕司の彼女なのに、瑠希弥さんのような若い女性を同じ邸内に住まわせる事がどんな影響を与えるのか考えもしないのですから」

菜摘さんは呆れ顔で言った。

どうやら、雅功さんは菜摘さんに意見されて、しょんぼりしているらしい。

そして江原ッチは、瑠希弥さんが同居する事を知ってあまり嬉しがったので、菜摘さんに窘(たしな)められて落ち込んでいるようだ。

「あ、その、私、別に……」

私の動揺をすっかり見抜かれている気がして、顔が火照る。

「まどかさん、心配しないで。私は貴女の彼を取ったりしないから」

瑠希弥さんが神妙そうな顔で言う。私はバツが悪くなり、

「そんな事、心配していませんから……」

と言うのが精一杯だった。

瑠希弥さんが江原ッチに恋愛感情ゼロなのは以前からわかっている。

この場合心配なのは、江原ッチの理性だ。

美人を見ると過敏に反応する江原ッチ。

しかも、ストライクゾーンは蘭子お姉さんより年齢が下で、妹の靖子ちゃんより上。

つまり、瑠希弥さんはほぼど真ん中なのだ。

ああ。私にも欲しい、あの巨乳が……。

本当はもっと他にも心配事があるはずなのに、やっぱり一番心配なのは江原ッチだという悲しい境遇のまどかだった。

瑠希弥さんはモテモテなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

……。

何だかその自己紹介、恥ずかしい。

今、私の絶対彼氏の江原耕司君の家に西園寺蘭子お姉さんのお弟子さんである小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんがいる。

江原ッチのお母さんである菜摘さんの指導で、瑠希弥さんはもっと霊媒能力を高めるのだという。

私は口では心配していないような事を言いながら、本当は酷く焦っていた。

だって、瑠希弥さんに勝てる要素が一つもないんだもん。

美人だし、性格は穏やかだし、頭も良いし、スタイルもボン、キュッ、ボンだし。

え？　口は勝てるだろう、ですって？

フンだ！

私は気もそぞろで学校に行き、授業中何度も先生に注意された。

「どうしたんだ、箕輪？」

クラスメートの力丸卓司君が声をかけてくれた。

その隣で親友の近藤明菜も心配そうな顔をしている。

「ああ、ごめん、ちょっと疲れてるの」

「大丈夫？　保健室に行く？」

明菜が言った。私は苦笑いして、

「保健室に行っても良くならないよ」

「そんなに重傷なのか？」

リッキーが惚けた事を訊く。江原ッチの妹の靖子ちゃんに言いつけるぞ！

「まどかはこの前、凄い敵と戦ったの」

明菜が説明してくれた。

「そうなんだ」

リッキーはもう今晩の夕食を考えている顔だ。

よだれを垂らしながら教室を出て行った。

明菜にだけは、本当の事を話そうと思い、ソッと打ち明けた。

明菜は呆れ顔になった。

「心配性ね、まどかも」

「あんたには言われたくないわよ！」

ホントにそうだ。明菜の嫉妬深さには、私も驚くのだから。

「まあ、お互いモテる彼を持ったんだから、仕方ないと割り切るしかないわ」

「そうなんだけど。江原ッチの場合は、瑠希弥さんが全然そんなつもりがないから、余計心配なのよ」

「どうして？」

明菜は不思議そうだ。

「私がそうだったように、瑠希弥さんも江原ッチに落とされるんじゃないかって……」

「同じ霊能者だから？」

明菜が腕組みをして言う。私は黙って頷いた。

「そんなに心配なら、美輪君に頼んで意見してもらおうか？　あんた達には、助けてもらった事があるから」

「ありがとう、明菜」

美輪幸治君は、江原ッチの親友だから、江原ッチにビシッと言ってくれるだろう。

私は気持ちが楽になった。

ところが、だ。とんでもない展開が待ち受けていた。

「まどか、どうしてくれるのよ！」

教室に入るなり、明菜に泣きつかれた。

「どういう事よ？」

私は訳がわからずに尋ねた。明菜は泣きそうな顔で、

「美輪君が江原君に話をしに行って、瑠希弥さんと会っちゃったのよ！」

「え？」

嫌な予感。冷や汗が出て来る。

「あのバカ、『瑠希弥さんて、スタイルいいよなあ』ですって！もう、許せない！」

明菜が叫ぶ。ああ。瑠希弥さん、パワーあり過ぎ。どうしたらい

いの？

「しかも、江原君と意気投合して、瑠希弥さんのファンクラブを立ち上げるとか言ってるのよ」

「何ーっ！？」

さすがにそれは聞き捨てならなかった私は、放課後、江原ッチの家に明菜と行く事にした。

ホントに、男って奴は！

これほど一日を長く感じた事はなかった。

私と明菜は風のような勢いで教室を飛び出し、

「廊下を走るな！」

と怒鳴る藤本先生を無視し、校舎を出た。

「許さない！」

それが二人の合言葉だ。

江原ッチの家の前まで来て、私達は唖然とした。

バカはこんなにたくさんいるのか？

辺り一面男子中学生だらけだ。

いつの間に作ったのか、瑠希弥さんのポスターが門に貼られている。

「押さないでね……」

行列を整理している江原ッチと美輪君が私と明菜の闘気に気づき、蒼ざめた。

「後で話があるから」

私と明菜はそのまま屋敷の中に入った。

「いらっしゃい、まどかさん」

玄関でエプロン姿の瑠希弥さんが出迎えてくれた。

明菜はビックリしているようだ。

「勝てない……」

彼女は無条件降伏してしまった。

「耕司君と美輪君、ホントにいい子ね。私、こっちに来て、友達も知り合いもいないからって、いろいろ考えてくれて」

「……」

嬉しそうに話す瑠希弥さん。私と明菜は顔を見合わせた。

「ちょっと大袈裟だけど、とっても嬉しい」

邪心のない瑠希弥さんの笑顔に、私と明菜は恥ずかしくなった。

そして、この人なら、絶対に江原ッチに落とされたりしないと感じた。

「どうぞ、上がって」

「は、はい」

私は明菜と目配せして、靴を脱いだ。

奥の居間に通された私達は、菜摘さんに話を聞いた。

「ごめんなさいね、お二人共。多分、それは瑠希弥さんの霊能力が上がっているせいなの」

「え？」

私は菜摘さんと瑠希弥さんを交互に見た。

「瑠希弥さんの感応力はあの西園寺さん以上。ですから、その一点に絞って指導しました。その副産物として、瑠希弥さんの魅力が向上したのね」

「はあ」

それじゃあ、ますますまずいのでは……。また明菜と顔を見合わせる。

「もう少し経てば、瑠希弥さんが自分の力を制御できるようになるから、それまでは我慢してね」

菜摘さんが申し訳なさそうに言った。私と明菜は、

「はい」

と応じた。まあ、それなら仕方ないか。

「制御できるようになったら、まどかさんにも教えるわね」

瑠希弥さんが屈託のない笑顔で言った。私はついニヤけてしまった。

隣で明菜が冷たい視線を浴びせているのも気づかずに。

その後、私と明菜は、江原ッチと美輪君に、事情はどうあれ、しっかりお説教した。

心配事が尽きそうにないまどかだった。

瑠希弥さんと霊視に行くのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

え？　「美少女」ってどうして入れないのかですって？

恥ずかしくって無理だからよ！

知ってて訊いているでしょ、意地悪！

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんを思い浮かべると、自分はまだまだお子ちゃまだって思い知らされるのよ。

ようやく現実に気がついたな、ですって？

フンだ！

そんな訳で、一時は降板の噂も流れた（？）エロ兄貴が、久しぶりに霊視の話を持って来た。

現場は隣のT市郊外。

昔は古墳だったのかと思われるような小高い丘にうっそうと木が生い茂っている場所だ。

その森の中で、若い女性の遺体が発見された。

今流行の山ガールという訳ではない。

そこは単なる私有地で、観光名所ではないからだ。

近くに大きな白衣観音像があって、そこは観光地だけどね。

今日はエロ兄貴が妙に嬉しそうだ。

それに反して、すでに婚約間近という噂の里見まゆ子さんは浮かない顔をしている。

周囲が引くくらい最近ラブラブだった兄貴とまゆ子さんに何があったのかと言うと……。

瑠希弥さんだ。

今回の霊視の仕事には、瑠希弥さんが同行しているのだ。

私の絶対彼氏の江原耕司君のお母さんである菜摘さんが、瑠希弥さんに私と同行するように勧めたらしい。

将来の義理の母である菜摘さんの意向を無視するわけにもいかないし、私もできるだけ瑠希弥さんと話がしたかったので同意した。

最初は不服そうだった兄貴と、私に賛同してくれたまゆ子さんは、瑠希弥さんに会ってから、立場が入れ替った。

兄貴は大賛成派に早代わりし、まゆ子さんは慎重派に変身。

瑠希弥パワー恐るべしなのだ。

そして今は移動中の車の中。

運転するまゆ子さん。助手席で嬉しそうにしているバカ兄貴。

何も知らずに後部座席に座っている瑠希弥さん。

それを横目で見ながら、エロ兄貴のアホさ加減に呆れる私。

瑠希弥さんはこの前会った時より魅力がアップしているらしく、同行を切望した江原ッチは菜摘さんに却下され、只今精神修養中らしい。

ちょっとだけ可哀想な気もする。

でも、瑠希弥さんに実際会ってみて、女の私でさえクラッとするくらいの力を感じる。

身体の半分がエロからできている兄貴に瑠希弥さんを会わせたのは大きな間違いだったかも知れない。

エロに関しては、三歳児ほどの理性もないのだから。

車が急停車した。

瑠希弥さんをチラチラ見ている兄貴に怒ったまゆ子さんが急ブレーキをかけたのだ。

「きゃ！」

私はまゆ子さんの様子に気づいていたので平気だったが、無防備だった瑠希弥さんは驚いたようだ。

瑠希弥さん、ちょっと天然が入っていて、そこだけが気にかかる。

「着きました」

ぶっきら棒にそう言うと、まゆ子さんはさっさと車を降り、トランクから鑑識セットを取り出す。

「ここは……」

私は異様な雰囲気にビクッとした。

そこは古い合戦場のようだ。

たくさんの人が戦死している。

その人達の霊はすでにいないが、その人達の怨念が留まったままだ。

「いけませんね」

瑠希弥さんが必須アイテムの黒縁眼鏡をクイッと上げて呟く。

「何がですか？」

瑠希弥さんの言葉は全て拾う兄貴のエロ耳が聞き逃すはずがない。

それに気づき、まゆ子さんがまたムッとする。

「はい！」

兄貴に叩きつけるように鑑識セットの入ったジェラルミンのケースを渡した。

「ここ、悪意が集積しています。その悪意に呑まれた人物が、女性を殺害したようです」

い！　商売上がったりだわ、瑠希弥さん！

私が何も感じていないのにそこまでわかるなんて！

「まどかさん、行きましょう。お二人はここにいて下さい」

瑠希弥さんは兄貴達にそう言うと、私に目配せし、森に入って行く。

「う……」

さっきより気持ちが悪い気が吹き溜まりのように留まっているのを感じる。

「わかりますか、まどかさん？」

瑠希弥さんの目は、初めて会った時の西園寺蘭子お姉さんの目と似ていた。

私はドキッとした。

（かっこいい、瑠希弥さん……）

瑠希弥さんは木々の間を歩いて行き、悪意の中心を目指した。

私もそれに続く。

「まず、被害者の女性の霊を守りましょう」

「はい」

殺害された女性の霊は、ここの悪意に取り込まれそうになっていた。

「オンマリシエイソワカ！」

私と瑠希弥さんは摩利支天（まりしてん）の真言を唱えた。

周囲の悪意が散り、女性の霊は解放された。

「オンカカカビサンマエイソワカ」

次に地蔵真言を唱え、女性の霊を霊界へと送る。

そして仕上げだ。

ここをこのままにしておくと、また同じような事件が起こる。

「相手は霊ではないから、容赦しなくていいわ、まどかさん」

「はい」

私達は印を結び、大黒天真言を唱えた。

「オンマカキャラヤソワカ！」

瑠希弥さんと私の力が合わさったので、その大黒天真言は江原ッチとの合体技より凄まじかった。

つむじ風のように悪意を巻き込み、その全てを浄化した。

「任務完了ね」

瑠希弥さんがニコッとして私を見た。私も微笑み返した。

何だか瑠希弥さんにドキドキしたのは、そういう事ではないと思うけど。

私達は兄貴達のところに戻った。

「犯人は被害者の恋人です。但し、彼は自分が殺した事を知りません。難しい事件になるでしょう」

瑠希弥さんが兄貴に説明した。

「そうですか」

兄貴もまゆ子さんに怒られたのか、ようやく鑑識課員の顔になった。

「片づけて下さい」

まゆ子さんに言われるがままになっている兄貴はこっけいだった。

「小松崎さん」

まゆ子さんが瑠希弥さんに声をかけた。

何だか気まずそうなのがわかる。

「はい、何でしょうか？」

瑠希弥さんは相変わらず屈託のない笑顔だ。

「ごめんなさい。それだけです」

まゆ子さんはペコリと頭を下げると、車に乗り込んでしまった。

「何でしょうか？」

不思議そうな顔で私を見る瑠希弥さん。

「さあ」

私は笑顔で肩を竦めた。

この雰囲気、叶わないなあ。

瑠希弥さんがその気になったら、落ちない男子なんていないだろう。

絶対そんな事しないと思うけど。

あれ？

そう言えば瑠希弥さん、自分の力を制御できるようになったら、私にその力のつけ方を教えてくれるって言ってたよね。

何だか楽しみなまどかだった。ムフ。

瑠希弥さんと旅に出たのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

もうすっかり、「美少女」を封印したい気分。

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さん。

あの人と話していて、私がどれほど思い上がっているのか、よくわかった。

え？　今頃気づいたのか、ですって？

フンだ！

瑠希弥さんは謙虚だ。あの謙虚さが私にはない。

だからこれからは謙虚になろうと思う。

え？　似合わないからやめろ？　そんな事をしたら、瑠希弥さんに主役の座を奪われる？

そうかも。あの極悪な作者の事だから、考えられなくもない。

そして、土曜日の朝。

私はまだベッドの中でまどろんでいた。

「おい、まどか、瑠希弥さんが来ているぞ」
エロ兄貴に揺り動かされて、私は目を覚ました。
「え？」
また兄貴の奴、私の部屋に無断で侵入してる！
「お兄ちゃん、いい加減にしてよ！　怒るわよ！」
「いくら呼びかけても、いびきを掻いて寝てたのは誰だよ」
兄貴は悪びれもしない。
「失礼ね、私、イビキなんか掻かないわよ！」
「どうして自分でわかるんだよ」
「美少女はいびき掻かないの！」
あ、言ってしまった、美少女って。
「そうなんですか」
兄貴はわざと私の嫌いな言葉で返して来る。
「とにかく、急いで着替えろ。瑠希弥さんを待たせたら悪いぞ」
「だったら早く出て行け、変態兄貴！」

私は兄貴の足を踏みつけて、ようやく撃退し、着替えた。
階下(した)に行くと、瑠希弥さんは居間のソファに座っていた。
そして何故か里見まゆ子さんもその向かいにいる。
「あ、おはようございます」
私が怪訝そうな顔で挨拶すると、まゆ子さんは、
「ああ、偶然小松崎さんと道で会ったので、ここまでご案内したの」
と訊いてもいないのに答えてくれた。多分、瑠希弥さんを尾行していたのだろう。
まだ心配なのかな、兄貴の事。
まあ、今までが今までだから、仕方ないか。
この状況だから、兄貴が起こしに来たのね。
いくら兄貴でも、瑠希弥さんとまゆ子さんに挟まれた状態では、怖過ぎて心臓が停止しかねないからね。
「そうなの。助かりました、里見さん」
瑠希弥さんは全然まゆ子さんの心の内など知らないようだ。
探ろうとすれば、全部わかってしまうのだろうが、瑠希弥さんは

そういう事はしないみたい。

「えっと、瑠希弥さん、私にご用なんですか？」

私はまゆ子さんの隣に座った。これが最善の選択だと思う。

「ええ。これから、西園寺先生のところにお伺いするの。一緒に行きませんか？」

「え？」

蘭子お姉さんに会いに行く？　これは何としても行きたい。

「は、はい、是非！」

私は身を乗り出して答えた。まゆ子さんはホッとしたようだ。

「未成年者二人だけの旅行は危ないな。保護者がついて行かないと」

急に姿を現す兄貴。エロ度がアップしている顔だ。

「そうですね。私、暇だから、一緒に行けるわよ、まどかちゃん」

まゆ子さんが鋭い一瞥を兄貴に向け、威嚇した。兄貴はスゴスゴ引き下がる。

するとその一触即発の状況を気づかないのか、

「大丈夫ですよ、私達だけで」

と瑠希弥さんがあっさり却下した。でもまゆ子さんはニコッとした。
なるほど、まゆ子さんは兄貴の「暴走」を阻止するために言っただけなのか。
あれ？　兄貴、本当に心配みたいだ。
つい兄貴の心を覗いてしまった。
ごめんね、お兄ちゃん。まどかはもう大人だよ。
「では、行きましょうか、まどかさん」
瑠希弥さんが立ち上がった。
「え？　今すぐですか？」
「はい」
私は面食らった。
「着替えますから、待ってて下さい」
私はジャージ上下なので焦った。
こうして私と瑠希弥さんは、買ったばかりのバリバリのスポーツカーで、蘭子お姉さんのいる山形へと向かう事になった。

兄貴は最後までふざけていたが、本当は可愛い妹が心配なのだ。

お土産くらい、買って来てあげよう。

取り敢えず、私はお小遣いの中から五千円を出した。

瑠希弥さんはお金なんかもたなくてもいいからって言ってくれたけどね。

「さあ、行きましょうか」

「はい」

グワン！　何だか、もの凄いエンジン音を響かせて、車が発進した。

気がつくと、私達はすでに高速に乗っていた。

「瑠希弥さんて、走り屋なんですか？」

私は、あまりに凄い運転なので、顔を引きつらせて尋ねた。

「ううん、ペーパードライバーなの」

「……」

血の気が引いた。

運転が乱暴なのではなく、下手？

無事に山形まで辿り着けるのか、不安なまどかだった。

サービスエリアは危険がいっぱいなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

只今、関越道を北へ爆走中。

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの運転で、憧れの西園寺蘭子お姉さんがいる山形に向かっている。

決してビートきよしさんに会いに行くのではない。

それより……。

瑠希弥さんの顔から笑顔が消えているのが気にかかる。

どこかのメイドと違って、いつも笑っている訳ではないけど、瑠希弥さんも笑顔のイメージがある。

しかし、高速を走り始めてから、瑠希弥さん、眉間に皺が寄りっ放し！

何だか怖い。

「あの、瑠希弥さん、どこかでトイレタイムしませんか？」

私は声をかけるのも怖いくらいだったが、勇気を振り絞って言った。

「そ、そうね。そうしましょう」

瑠希弥さんは私をチラリとも見ないで答えた。
不安がまた増した……。
瑠希弥さんは一番近いサービスエリアに入ってくれた。
つい、溜息を吐いてしまう。
「ごめんなさい、まどかさん」
瑠希弥さんは駐車スペースに車を停めるなりそう言った。
私はギクッとした。
怖がっていたのがわかってしまったようだ。
「いえ、その、えーと……」
作り笑顔で取り繕おうとした。
「トイレ、我慢してたのね。気がつかなくてごめんなさいね」
「……」
瑠希弥さんは全く別の事を詫びていたのだ。私は苦笑いした。
「あ、ありがとうございます」
瑠希弥さんはトイレには行かず、売店の方へと歩き出した。

私は成り行き上、したくもないのにトイレに向かった。

「あれ？」

トイレの途中にある看板の前。

そのサービスエリアはいつもは利用しない所なので、初めて立ち寄ったのだが、妙な気が漂っているのがわかった。

（霊？　何だか微妙だ）

そんな事を考えていると、本当に尿意が訪れてしまった。

「ふう」

取り敢えず、トイレをすませ、また気を感じた所に戻った。

（何だろう、これ？）

考えていると、また尿意。

え？　どういう事？

今度は強烈だ。走った。

危なかった。漏れそうになったのだ。

「もしかして……」

さっきの場所を遠くから霊視してみる。

原因がわかった。

生霊という訳ではないのだが、トイレが混雑した時にあの辺りでたくさんの人が我慢していたようだ。

その念だけが漂っていて、そこで休憩したり、立ち止まったりすると、念の影響で尿意を催すみたいだ。

私はそこを通らないようにして、車に戻った。

その間に、何も知らないカップルがそこでイチャイチャし始めた。

予想通り、二人は同時に尿意を催し、トイレに走った。

「浄霊した方がいいのかな？」

私が呟くと、

「差し支えないでしょう。大丈夫ですよ、まどかさん」

瑠希弥さんが笑顔で缶コーヒーを差し出して言った。

「そうですか」

危ない。もう少しでＮＧワードだ。

「勝手に選んで買ってしまったけど、大丈夫？」

「はい。私はコーンポタージュ以外でしたら」

ハッと気づくと、そのコーンポタージュを飲んでいた瑠希弥さん。

嫌味に聞こえたかな？　ちょっとバツが悪い。

「そうなんですか」

わや！　言われてしまった、ＮＧワード。

「あの念は、あと二、三日で消えますから、そのままで大丈夫です。それより、問題なのは私の車です」

「え？　どうしたんですか？」

私は瑠希弥さんの車を見た。

そして、ギョッとした。

さっきまで何もいなかったはずなのに、ワラワラと妙な霊が取り憑いている。

良く見ると、若い男の生霊だ。どういう事だろう？

「売店で飲み物を買っていたら、妙な男の人達に囲まれて、怖かったので」

「ナンパですか？」

私は鋭い目で周囲を見回す。私の彼氏の江原ッチや、親友の近藤

明菜の彼氏の美輪幸治君を無意識のうちに落としてしまう瑠希弥さんの能力なら、その辺のエロ男など、あっと言う間だろう。

「ちょっと帝釈天の真言で追い払ったのですが……」

「え？」

いきなり雷撃っすか？　瑠希弥さん、結構過激かも。

なるほど、連中は気を失ったけど、生霊が瑠希弥さんを追いかけて来たのね。

「まどかさん、お願いしていいかしら？」

瑠希弥さんが申し訳なさそうに言う。

つまり、瑠希弥さんが攻撃すると、そいつらは更に瑠希弥さんに惹きつけられてしまうという事らしい。

「わかりました。全部まとめて吹き飛ばします」

私は印を結び、

「インダラヤソワカ！」

と唱えた。

生霊達は車から弾き飛ばされ、肉体に戻ったようだ。

「車で来たのは失敗でしたね。先生に、電車は人が集まるから良く

ないと言われたのですが」

瑠希弥さんは人、特にエロい男共をどんどん引き寄せてしまうようだ。

「運転していても、前と後ろの車から、強烈な念が放射されて、本当に疲れました」

「そうなんですか」

わあ！　自分で言ってしまった、ＮＧワード。

そういう事だったのか？　瑠希弥さん、運転が下手な訳じゃなかったのね。

「ちょっと先生に相談してみます」

瑠希弥さんが携帯を出してかける。

途端に周囲にいた男達が瑠希弥さんに気づき、近づき始めた。

もしかすると、電波の影響？

車の中でも、ラジオを聴いていたからかな？

ああ、瑠希弥さん、男共に取り囲まれてる！

私はすかさず、

「インダラヤソワカ！」

と雷撃をお見舞いする。するとその力で、瑠希弥さんの周りに漂っていたいわゆる「淫の気」って奴が消えた。

瑠希弥さんは全くそんなつもりはないのだが、瑠希弥さんの感応力が強過ぎるために、男共の淫の気を呼び起こしてしまうようだ。

これはあくまで私の推理でしかないけど。

「摩利支天(まりしてん)真言を唱えて、数珠を手首に巻けばいいみたいです」

瑠希弥さんは周囲に集まって呆けたようになっている男達を気にするでもなく、私に言った。

「そうですか。良かったですね、解決して」

瑠希弥さんは早速摩利支天真言を唱え、数珠を巻いた。

私にもわかるくらい、瑠希弥さんの気が落ち着いた。

「さすが、蘭子お姉さんですね」

「はい。私なんか、まだまだです」

瑠希弥さんは笑顔で言ったが、ちょっと落ち込んでいるみたいだ。

蘭子お姉さん。まだまだ私には遠い存在だ。

当面の目標は瑠希弥さんにしよう。

今は、どちらかと言うと、瑠希弥さんの感応力より「ボン、キュ、ボン」のスタイルがほしいまどかだった。

即身仏は強烈なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。人は私の事を「霊感少女」と呼ぶ。

私は、憧れの女性である西園寺蘭子お姉さんがいる山形に行くため、蘭子お姉さんのお弟子さんである小松崎瑠希弥（こまつざき るきや）さんの車に乗っている。

バリバリのスポーツカーは、やがて新潟県の胎内市で高速を降りた。

って言うか、ここで高速終了なのだ。

山形までずっと高速だと思っていた私はちょっとだけ驚いた。

「ここからは一般道になります」

瑠希弥さんがにこやかに言う。

走り始めの頃は、妙な気のせいで眉間に皺を寄せていた瑠希弥さんだったが、真言のおかげで気を追い払う事ができ、嬉しそうだ。

「どこかでお昼を食べましょう」

私達は沿道のお蕎麦屋さんに立ち寄った。

「あちゃあ」

駐車場に車を停めて歩き出すと、店の前で事故死した女子高生の霊が現れた。

「携帯貸して。家に電話しなくちゃ。帰り、遅くなるって」

その人は死ぬ直前の記憶を固定され、ずっとそう言っているようだ。

「はい、どうぞ」

瑠希弥さんが自分の気を変化させて携帯電話のようなものを作り、彼女に渡した。

「ありがとう」

女子高生のお姉さんは瑠希弥さんに笑顔で礼を言い、そのまま消えた。

ようやく縛りが解けたのだ。良かった。

「凄いですね、瑠希弥さん。今度教えて下さい」

「いいですよ」

私達は店に入り、ざる蕎麦を頼んで食べた。

「もう一息ですね。行きましょうか」

少し休憩してから、再び山形を目指す。

高速道路ではないので、信号で停まったりがある。

そのたび、交差点で事故死した霊に遭遇した。

全部祓いながら行く事はできないので、寄って来る霊以外は相手にせず、先を急ぐ事にした。

「こんなに事故死している人の霊が多いなんて、驚きました」

私が言うと、瑠希弥さんは、

「私のせいなんですよ、まどかさん。事故死した霊は普段は霊威がほとんどないので、意識しないと見えないのです。でも、私が影響してしまって、鎮まっている霊まで出て来ているんです」

「そう、でしたか」

あやうくNGワードを言うところだった。

私はなるべくそちらを見ないようにした。

しばらく進むと、日本海が間近に見えて来た。

太陽は西に傾き始めているので、海面がキラキラ光っている。

日本海は、小学校の臨海学校以来だ。

「もうすぐ山形に入るわ」

瑠希弥さん、疲れないのかな？　運転を替われないので、どうにもならないけど。

「瑠希弥さん、休まなくて平気ですか？」

それでも言ってみた。

「大丈夫。ありがとう、まどかさん」

「そう、ですか」

危ない。またＮＧワードを言いかけた。

「あ」

その時、県境の標識を越えたのに気づいた。

山形県鶴岡市だ。

とうとう来た。何だか、感動している。

私、東北地方に来たのって、生まれて初めてだったから。

鶴岡市。

そこには即身仏があるお寺が何軒かあるのだ。

即身仏とは、生きたまま土の中に埋められたりして瞑想状態のまま亡くなった高僧の事。

私にはよくわからないのだが、もの凄い力を持っていらっしゃるのだとか。

蘭子お姉さんが、

「是非寄って来て」

と瑠希弥さんに言ったそうだ。

私は霊は怖くないのだが、死体は怖い。

即身仏って、確かミイラなのよね。

平気かなあ。瑠希弥さんの前で倒れたりしたら、恥ずかしい。

瑠希弥さんの車は快調に海沿いの国道を走り、鶴岡市の市街へと向かった。

「お！」

我がG県の大手企業であるY田電機の看板だ！　凄いぞ、Y田電機！　山形にもあるのか！

何だか妙に嬉しい。

やがて車はあるお寺に着いた。

即身仏で有名なお寺なので、観光客がたくさんいる。

誰もが即身仏の霊力にすがりに来ているのだ。

「さあ、行きましょう」

瑠希弥さんに促され、私はゴクリと唾を飲み込むと、境内に足を踏み入れた。

「わあ」

途端に感じた。壮大な慈悲の心。

何という温かい波動。本当に人間のものなのか、と思うほど、凄い。

やがて人垣の向こうに即身仏が見えて来た。

ミイラ。一言で言ってしまうとそうなのだが、実際は違う。

この世のあらゆる苦しみを一心に背負ったような大きな心を感じた。

生きたまま土の中に入り、そのまま死を迎える。

想像がつかないほどの苦行だ。

だからこそ、そのお姿は尊いし、ありがたいと思った。

私は知らないうちに手を合わせ、涙を流していた。

「まどかさん、大丈夫？」

瑠希弥さんが動かなくなった私を心配して声をかけてくれた。

「は、はい、大丈夫です」

私はハッとして瑠希弥さんに答えた。

「行きましょうか」

「はい」

瑠希弥さんも泣いていたようだ。

それはそうだ。

このお坊様の苦行を感じて泣かない霊能者はいない。

同時に、自分の存在の小ささを改めて思い知らされた。

「先生の修行場は羽黒山です。もう少しですよ」

瑠希弥さんが行った。

早く蘭子お姉さんに会いたい。

あれ？　もう一人誰かいるんだっけ？

まあ、いいや。

とにかく、貴重な体験をしたまどかだった。

蘭子お姉さんは修行中なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

今私は、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと共に山形県鶴岡市にある出羽三山を目指している。

そこには、私の憧れの人、西園寺蘭子さんがいるのだ。

あれ？　誰かもう一人いたような気がするけど？

まあ、いっか。

「凄い」

私は瑠希弥さんの車で入口に到着し、山の気を感じて思わずそう言ってしまった。

「本当ね。私もここに来るのは初めてだから、楽しみにしていたの」

瑠希弥さんが周囲の巨木を眺めて言った。

「先生はこちらにいらっしゃるわ。行きましょう」

「はい」

私は胸の高鳴りを抑えながら、瑠希弥さんについて行く。

道はやがて未舗装になり、ゴツゴツした石がたくさん飛び出している歩きにくいものになって来た。

「大丈夫、まどかさん？」

瑠希弥さんが振り返って尋ねる。私は作り笑いをして、

「だ、大丈夫です！　こう見えても、足腰強いんですよ」

「そうなんだ」

わ！　瑠希弥さん、危うくＮＧワード。

でも、本当はかなりきつい。

普段運動をしないので、すでにふくらはぎの辺りがパンパンだ。

「ここからは下るようです」

瑠希弥さんが道しるべを見ながら言った。それには、

「この先滝修行場」

と書かれていた。

げ。この寒いのに、蘭子お姉さんたら、滝に打たれてるの？

子供が産めなくなってしまうわ！

なんて心配はいらないか。

「ひ」

下りだと思って気を抜いていたら、あまりにもきつい勾配で、上りより大変だ。

「まどかさん、本当に大丈夫？　ここで待ってる？」

瑠希弥さんは私が限界に近いのを感じたのか、また振り返って尋ねて来た。

ここまで来たら、行かない方がつらい。

「大丈夫です。今日は蘭子お姉さんに会いに来たんですから」

「わかったわ。足元気をつけてね」

「はい」

私は歯を食いしばって瑠希弥さんについて行った。

瑠希弥さんは、平坦な道を歩いているようにスイスイと進む。

実力の差って奴ね。ふう。落ち込みそう。

「ああ」

滝の落ちる音が聞こえて来る。そしてかすかに水の匂い。

「もう少しよ、まどかさん」

瑠希弥さんが笑顔で励ましてくれる。私はヘロヘロになりながら、

「はい」

と応じた。

「おお！」

視界が開けた。真っ白な滝が見えた。しぶきを上げて下へと落ちている。

その手前の河原の小屋のような建物の前に焚き火があり、懐かしい顔が見えた。

「先生！」

「蘭子お姉さん！」

瑠希弥さんと私は同時に走り出していた。

「瑠希弥、まどかちゃん！」

蘭子お姉さんは白装束を着ていたが、その美しさに変わりはない。

「おう、よう来たな、二人共」

白装束姿の関西のオバさん。そうだ、この人もいたんだっけ。あれ、名前忘れた。

「ご無沙汰しています」
瑠希弥さんは二人に頭を下げた。私も慌てて、
「お久しぶりです」
とお辞儀した。
「滝に打たれるんですか？」
私は怖々と尋ねた。蘭子お姉さんはニコッとして、
「ええ。集中力を高めるにはうってつけよ」
「あんたらもするか？」
オバさんがニヤリとして言う。
「はい、是非」
瑠希弥さんが笑顔で応じた。え？
「瑠希弥はいいけど、まどかちゃんは無理よ、麗華」
蘭子お姉さんが助け舟を出してくれた。良かった。
ああ、そうか、オバさん、麗華さんだっけ。
「わわ」

瑠希弥さん、誰もいないからって、いきなり服を脱ぎ始めたわ。

凄い。凄過ぎます、瑠希弥さん。そのスタイル、女の私でもドキドキします。

「じゃあ、これを着てね」

「はい」

蘭子お姉さんが白装束を渡した。瑠希弥さんがそれを慣れた手つきで着る。

「ばっちゃとはよく滝行をしました。懐かしいです」

「そうなんだ」

わわ！　蘭子お姉さんまでＮＧワードを言いそう。

「ほな、入ろか」

麗華さんがザブザブと滝壺に入って行く。

大したものだ。冷たくないのだろうか？

「じゃあ、私達も」

「はい」

蘭子お姉さんと瑠希弥さんも滝壺に入る。

「さすがに冷たいわね」

「私は大丈夫です」

何だか、羨ましいなあ、あの関係。私も入りたいけど、やっぱり無理。

そして、しばらく三人の滝行が続いた。

その間、私は蘭子お姉さんに言われて、辺りの気を感じる訓練をした。

さすが、山伏の山。荘厳な気が押し寄せて来る。

身体の中に力がみなぎって来るようだ。

やがて滝行が終了し、私達は改めて再会を喜び合った。

「あれから何か起こったりしてない？」

蘭子お姉さんは「サヨカ会」の事を心配しているらしい。

「大丈夫です。江原ご夫妻が、お仲間を通じていろいろと手を尽くして下さったようです」

瑠希弥さんが濡れた髪をポニーテールにしながら言う。

ああ、これ、絶対江原ッチに見せられない。

可愛過ぎます、瑠希弥さん。もちろん、エロ兄貴にはもっと見せられない。

「そうなの」

蘭子お姉さんはホッとしたようだ。蘭子お姉さんのツインテールも可愛い。

「そや、小倉冬子さんはどないしてる？」

麗華さんは河原の大きな石に胡坐を掻いて座った。見えてるんですけど、いけないところが。

「連絡はないです。どうしているのか」

私も心配になって言った。

「ま、あの人の事やから、大丈夫やろけどな」

麗華さんはガハハと笑った。そうかも知れない。

あの冬子さんがそんな簡単にやられたりする訳ないわ。

やがて蘭子お姉さん達は小屋で着替えをした。

「私達がお世話になっている修験者の方の所に行きましょうか」
蘭子お姉さんが言った。
私達は、瑠希弥さんの車に乗り込み、蘭子お姉さんの運転でその修験者の家に向かった。
そう言えば、帰り道は全然苦痛ではなかった。
山の気を吸ったおかげだろうか？　疲れも残っていない。
「その人、何ていうお名前なんですか？」
助手席で私が尋ねると、蘭子お姉さんは微笑んで、
「遠野泉進さんよ。高齢な方だけど、かなりの術者ね」
「そうなんですか」
しまったああ！　自分でＮＧワードを言ってしまった。
遠野泉進？　どこかで聞いた事があるな。
どこだろう？
気になるまどかだった。

遠野泉進さんはあの人と知り合いなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

今、私は憧れの人、西園寺蘭子お姉さんと共に偉大な修験者の所に向かっている。

「遠野泉進様は、あの姫巫女流古神道の小野宗家の宮司様とお知り合いなの」

蘭子お姉さんが言った。しかし、世間に関心がない私は、

「そうなんですか」

と開始早々レッドカードを出してしまった。

「確か、その宮司さんの娘さんが勤めている学園が消滅したとか聞いたで」

後部座席の麗華さんが言う。すると蘭子お姉さんは、

「娘さんじゃなくて、お孫さんよ。宮司様は息子さんご夫婦を早くに喪ったのよ」

「ほう、さよか」

麗華さんはあまり関心がないようだ。私もだけど。

「その学園、しばらく前には、とんでもない悪ガキがおったらしい

し。ケッタイなとこやな」

楽屋落ちのような話なので、私は聞き流した。

でも、小松崎瑠希弥(こまつざきるきや)さんは真剣に聞いている。

ああ、私も欲しいわ、あの純真さが。

え？　お前は薄汚れているから、絶対無理ですって？

フンだ！

やがて車は高い木々で日差しが遮られた道に入った。

舗装されていない道なので、私は悪酔いしそうだ。

「大丈夫、まどかちゃん？」

蘭子お姉さんが気遣ってくれる。その優しさが今はつらい。

「大丈夫です。死んでも戻したりしません」

瑠希弥さんの車で戻したりしたら、恥ずかしくて生きて行けないわ。

「無理しないでね、まどかさん」

瑠希弥さんにまで優しい言葉をかけてもらい、私は「そっち」よ

り涙が出そうだ。

「ま、ウチの車やないから、盛大に噴射してもかまへんけどな」

麗華さんは相変わらずだ。蘭子お姉さんにミラー越しに睨まれてギクッとしている。

そして、本当に臨界点に達する寸前に車は遠野泉進さんの屋敷に着いた。

もっと豪邸かと思っていたが、私の家より小さい。昔ながらの平屋建てだ。

「おう、これはまた、若い女の子が増えて、嬉しいぞ」

泉進さんは、もっと厳つい感じの人かと思ったが、その辺にいるお爺ちゃんという感じだ。

但し、着ているのは白装束で、山伏っぽい。

「よろしくお願いします」

瑠希弥さんが頭を下げる。私も慌てて頭を下げた。

「さてと。昨日の続きでもするか」

泉進さんはサッサと歩き出し、屋敷の裏へ行ってしまった。

「さ、私達も」

蘭子お姉さんが麗華さんを促す。

「またあれかいな。あれ、ホンマ、疲れるんやで」

麗華さんはウンザリ顔で蘭子お姉さんを追いかける。

私も瑠希弥さんと顔を見合わせてから、二人に続いた。

屋敷の裏に行くと、切り出された木が山積みになっていて、どうやら薪割りをしていたようだ。

「では、蘭子ちゃんからだな」

泉進さんはまるで親戚のお爺ちゃんのようにこやかな顔で言った。

え？　薪割りをするの？　でも、木を割る物がないんだけど？

「はい」

蘭子お姉さんは真剣な表情で進み出て、切り株の上に薪用の木を置いた。

まさか！？

まさにそのまさかだった。

「はあ！」

蘭子お姉さんの気合で、木に衝撃が加えられ、真ん中から二つに裂けた。

「おう、見違えるような進歩だな、蘭子ちゃん」

何故か泉進さんは麗華さんを見てニヤリとする。

このお爺ちゃん、案外お茶目さんなのかも。

しかも私と気が合いそう。

「じゃ、麗華」

蘭子お姉さんが麗華さんを見る。

麗華さんはムスッとしたままでお姉さんと入れ替り、切り株に木を立てた。

「はあ！」

麗華さんが気合を入れた。しかし、木は少しだけ切れただけで、割れなかった。

「麗華ちゃん、力が分散しとる。容量は麗華ちゃんの方が多いのだから、もっと大きい木でも割れるはずだぞ」

泉進さんが言った。麗華さんは相変わらずムスッとしたままだ。

「容量が多いってどういう事ですか？」

私は素朴な疑問を蘭子お姉さんにしてみた。

「麗華の方が霊力の総量が多いって事。私の二倍はあるらしいわ」

「そう、ですか」

危ない、危ない。立て続けにＮＧワードを口にしたら、入院してしまうわ。

「霊力の少ない蘭子ちゃんにできて、麗華ちゃんにできんはずがない」

「は、はい！」

ようやくやる気になったようだ。

麗華さんのやる気は、蘭子お姉さんに対するライバル意識に左右されているのかも知れない。

「ふうう！」

麗華さんが集中し始めた。周囲の空気が張り詰めて行くのがわかる。

「はあ！」

麗華さんが気合を放った。すると上の木だけでなく、切り株まで

二つに裂けた。

「おお！　さすが麗華ちゃんじゃ！　霊力もおっぱいも蘭子ちゃんの二倍なのは伊達ではないな！」

「ハハハ」

麗華さんは照れている。

「先生！」

セクハラ発言された蘭子お姉さんは怒っている。胸を押さえているのは、恥ずかしいからだろうか？

瑠希弥さんはつい二人の胸を見比べてしまったようだ。

そして、夕暮れ時、私達は縁側でお茶をいただいた。

「滝行も、薪割りも、要は集中力の修行。集中力なくして、霊力の向上はない」

泉進さんがお茶をすすって言った。

「はい」

私達は声を揃えて応じた。

「さてと。二人が割ってくれた薪で、風呂を沸かすとしよう」

「先生、誉めてもらって何やけど、覗かんといてや」

麗華さんが言い放つ。泉進さんは豪快に笑って何も答えない。

「ええ！？　お風呂覗くんですか、あのお爺ちゃん？」

私が驚いて言うと、

「心配するな。子供の裸には興味はない」

泉進さんはわざわざ戻って来て言った。

「……」

何だか、妙に悔しいまどかだった。

今日、私はモテモテ？なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

今、私は、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと入浴中。

恥ずかしい。

瑠希弥さん、おっぱい大き過ぎ。

腰、くびれ過ぎ。

それに比べて……。コホン。

「どうしたの、まどかさん？」

瑠希弥さんは不思議そうな顔で私を見る。

「いえ、別に」

まさか、巨乳が羨ましいです、とは言えない。

瑠希弥さんは身体を洗い終わり、湯船に浸かった。

私はその隙を突いて素早く髪を洗い、身体を洗い、ソッと湯船に浸かる。

「昔、ばっちゃとこうして一緒にお風呂に入りました。懐かしいな」

瑠希弥さんはニコッとして言った。

「そ、そうですか」

危ない、危ない。またＮＧワードを言ってしまいそうになった。

すっかり忘れかけていたが、今私達がいるのは、山形県鶴岡市の山奥にある遠野泉進という修験者のお爺さんの家だ。

私と瑠希弥さんは、お風呂から出ると食事の支度を手伝いに行く。

「あ、瑠希弥、抜け駆けしたな。まどかと風呂入りおって」

麗華さんが言った。え？　いつから私、この人に呼び捨てにされるようになったの？

まあ、「子供」って呼ばれるよりはマシだけど。

「え？　そうなんですか？　申し訳ありません、八木先生」

素直な瑠希弥さんはあっさり謝罪した。しかも、ＮＧワードもあっさり言った。

「まどかは覗きジジイ除けなんや。まあええ、もう一度一緒に入ろか、まどか？」

麗華さんは有無を言わせぬ雰囲気で私に言う。すると蘭子お姉さんが、

「何言ってるの、麗華。貴女は一人で入りなさい」

「え、何でや？　ウチがジイさんに覗かれてもええんか、蘭子は？」

麗華さんは蘭子お姉さんに食ってかかった。しかし蘭子お姉さんは、

「貴女がお風呂に入っている間、私が泉進様の相手をするから、大丈夫よ」

「そ、そうか。わかった」

麗華さんは大鍋を覗きこんで、

「もうええんちゃうか、これ？」

と味見をした。

「まどかちゃん、私と一緒にお風呂入って」

蘭子お姉さんが小声で言って来た。私はドキッとした。

「頼むわね」

蘭子お姉さんはウィンクして、また料理に取り掛かる。

「あ、手伝います」

瑠希弥さんが蘭子お姉さんの危なっかしい包丁捌きを見かねて言

った。

そして夕食がすみ、一休みしてから、蘭子お姉さんに付き合って本日二度目の入浴タイム。

泉進さんの話だと、蘭子お姉さんは麗華さんの半分しかおっぱいがないという事だったが、それはどうやら嘘のようだ。

蘭子お姉さんも立派な胸だ。

「な、何？」

身体を洗っていた蘭子お姉さんが私の視線に気づいた。

「蘭子お姉さんも、胸、大きいじゃないですか」

「ありがとう。そう言ってくれるの、まどかちゃんだけよ」

お姉さんはよほど嬉しかったのか、抱きしめてくれた。

何だか恥ずかしいし、おっぱいが直に顔に当たってるんですけど。

「麗華と一緒にいると、どうしても自分の胸が貧相に思えて……」

他人が思う以上に、貧乳だと思っている人は大きさに敏感なのだ。

私も含めて。

「私ももっと大きくなりたいです」

「まどかちゃんは成長期だから、まだこれからよ。でも私はもう……」

あらあ。また落ち込ませてしまったみたい。

お姉さんには胸の話はＮＧのようだ。

すると、

「こら、蘭子、何抜け駆けしとるねん！」

麗華さんがどこも隠さないでいきなり入って来た。

爆乳だ。それと……熊の手？　そっちは解説不要か。

「れ、麗華、何なのよ！？」

「何なのやあらへんがな！」

しばらくパニック状態だった。

結局、麗華さんが乱入したせいで、泉進さんは覗きたい放題だったようだ。

私まで見られたの？

そして翌日。

まだ夜も明けない時間に、私は起こされた。
「修行に行くそうです。まどかさんはどうしますか？」
同室の瑠希弥さんが尋ねた。私は欠伸をして、
「無理みたいです。ご遠慮します」
「わかりました。ごめんなさい、起こしてしまって」
瑠希弥さんは爽やかな笑顔で言い、部屋を出て行った。
私も、二度寝する気にはなれず、起き出して部屋を出た。
「おはようございます」
廊下で泉進さんと会った。何故か顔が少し腫れている理由は訊かないでおこう。
「おう、嬢ちゃん、おはよう。修行には行かんのか？」
「はい。朝は弱いので」
泉進さんは豪快に笑った。
「まあ良い。嬢ちゃんにはまだ早いからの。あと二、三年したらまたおいで」
「はい」

私は愛想笑いをして応じた。

「蘭子ちゃんは、裏の人格を何とかしたいと思っておるようだ」

泉進さんは急に真顔で話し始めた。

「裏の人格？」

私は見た事がないのだが、とにかく滅茶苦茶強くて、残忍な人格らしいのは知っていた。

「あの子は優しい。その優しさ故にいろいろと危ない目にも遭っている。裏の人格は、その優しさが生み出した影。そして、心のどこかで、霊能力を疎ましく思っているために、裏の人格の凶暴性に拍車をかけてしまっている」

「そう、ですか」

私は何とかＮＧワードの危機を乗り越えた。

「蘭子ちゃんは、嬢ちゃんに随分と心を開いておるようだ。あの子の力になってあげてくれ」

「はい」

私は何だか凄く嬉しかった。蘭子お姉さんが私に心を開いてくれていると聞いて。

やがて蘭子お姉さん達が早朝修行から戻り、朝食タイムになった。
「瑠希弥が手伝(てつど)うてくれたから、いつもより美味そうやな」
麗華さんが舌なめずりして言う。蘭子お姉さんは苦笑いして、
「私も麗華も、お料理苦手だからね」
「わはは」
麗華さんは大笑いして、
「やっぱり瑠希弥もここにいたらええねん」
「ええと、私は……」
瑠希弥さんは困り顔で蘭子お姉さんを見た。
「瑠希弥には瑠希弥の役目があるのよ、麗華。勝手な事言わないの」
蘭子お姉さんは瑠希弥さんを笑顔で見ながら言った。
ちょっぴり悲しそうだったのは、気のせいだろうか？
瑠希弥さんもそうだった。
そして、私と瑠希弥さんは、帰る事になった。

「お世話になりました」

泉進さんにお礼を行った。

「いつでも遊びに来なさい。特に瑠希弥ちゃん」

「はい」

瑠希弥さんは只一人、泉進さんの魔の手を逃れているので、全然警戒する事なく応じている。

「嬢ちゃんもな」

付け足しのように言われた。

「はい」

私は苦笑いして応じた。

「またね、瑠希弥、まどかちゃん」

蘭子お姉さん、心なしか涙ぐんでる。

「はい」

私達は声を揃えて返事をした。

「またな、瑠希弥、まどか」

「はい」

麗華さんも、蘭子お姉さんに影響されたのか、涙目だ。

私達はたっぷりと別れを惜しみ、出発した。

「ありがとう、まどかさん。まどかさんが一緒に来てくれなければ、私挫けてしまって、西園寺先生に叱られてしまっていたわ」

「そうなんですか」

うわあ！　また言ってしまった。

「このままここにいられたら、なんて思ってしまったわ。それでは、菜摘先生に申し訳ないのにね」

瑠希弥さんはやっぱり強い。私なら残ってしまっただろう。

「瑠希弥さんて、本当に素敵です。尊敬しちゃいます」

「ありがとう」

瑠希弥さんの涙が、太陽の光を反射した。奇麗だ。

帰りは、特に何事もなく、私達はG県に戻って来た。

「付き合ってくれてありがとう、まどかさん」
「こちらこそ、ありがとうございました」
私は家の前まで送ってもらった。
瑠希弥さんの車が走り去るまで、手を振る。
あれ？　何か忘れているような……。
ハッとして財布を見る。
出がけに入れた五千円札（ひぐちさん）がそのままだ。
兄貴にお土産買ってくるの忘れてた。
まあ、いっか。可愛い妹が無事に帰って来たのが、一番のお土産だから。

結構、ポジティブシンキングなまどかだった。
ところで、ポジティブシンキングって何？

リッキーのお姉さんが本格的に登場なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

私の絶対彼氏の江原耕司君のところに住み込みで修行中の小松崎（こまつざき）瑠希弥（るきや）さんと共に、憧れの人である西園寺蘭子さんがいる山形県鶴岡市に行って来た。

すごく貴重な体験をした。得るものも多かった気がする。

「俺も行きたかったよお、まどかりん」

江原ッチが後で知って、泣きメールを送って来た。

多分、お母さんの菜摘さんが、江原ッチに教えなかったのだろう。

何しろ、江原ッチは、瑠希弥さんにメロメロなのだから。

とても腹立たしい事なのだけど、瑠希弥さんが力を制御できるまでの辛抱。

それにいくら江原ッチがその気になっても、瑠希弥さんの眼中にはないから、その点では安心なのだ。

瑠希弥さんの蘭子お姉さんへの思いは、もしかすると「ガールズラブ」なのかも知れないとエロ兄貴が言っていた。

ガールズラブって、もしかして、「百合族」とかの事？

私はそういうのは全然興味ないけど、蘭子お姉さんと瑠希弥さんだったら、ありでもいいかな。

おっと。横道にそれ過ぎ。

今日は、同級生の力丸卓司君の家の力丸ミートに来ている。

べ、別にコロッケに釣られた訳じゃないんだから！

瑠希弥さんも一緒だし。

私達はお店の奥に通された。

休憩室兼食堂のようなところだ。

「ごめんなさいね、まどかさん。お兄さんに無理言ってしまって」

リッキーのお姉さんのあずささんは、リッキーとは似ても似つかない美人で、しかもエロ兄貴とは小学校・中学校の同級生だ。

一時は付き合うのではないかと思われたのだが、兄貴のモテモテぶりに、あずささんの方が引いてしまったようだ。

正解だったと思う。

高校生の頃まで、兄貴は異常なほどモテてたし。

今でこそ、落ち着いて来たけど、あの頃は私にまで近づいて来る女子達がいて、迷惑だったのだ。

幼稚園児の私にラブレターとか頼まないで、と思ったものだ。

「いえ、大丈夫ですよ」

兄貴め、あずささんに何ていったんだ？

あまりある事ない事言って、妙な期待されたりすると困るんだけど。

さっきからリッキーは一言も発していない。

奴の目は、瑠希弥さんの胸に釘付けだ。

交際中の江原靖子ちゃんに言いつけるぞ、エロヤロウ！

「その霊と強い因縁を感じます。お心当たりはありませんか？」

瑠希弥さんがいきなり話し始めた。私達はギクッとして瑠希弥さんを見た。

あずささんは泣きそうな顔で、

「全然心当たりがないんです。中年の男の人だったのですけど、霊だとは思わなくて……」

あずささんは、霊のストーカーに取り憑かれているらしいのだ。

それを調べて欲しいと依頼を受けたのだ。

兄貴の同級生で、しかもその弟のリッキーは私の同級生だから、

私は二つ返事で承諾したのだ。

だからこそ、兄貴があずささんに何と言ったのか気にかかる。

「中年？　私にはあずささんと同年代くらいに感じましたけど」

私もあずささんを霊視して感じた事を言った。

「え？」

あずささんの顔色が変わった。

「お心当たりがあるのですね？」

瑠希弥さんが微笑んで尋ねる。あずささんは瑠希弥さんを見て、

「つい先日、同級生の男の子が亡くなって……」

それ、知ってる。兄貴も葬式に行ったから。

中学の時の同級生で、当時酷い虐めを受けていたらしい。

卒業するとM市から離れた高校に通い、その後長く付き合いはなかったそうだ。

確か、自殺だった。

高校では虐められなかったらしいのだけれど、卒業して就職した会社に中学の時の同級生がいて、また虐められていたそうだ。

でもその虐めもすぐなくなり、その人は転職したと言う。

だとすると、自殺の原因は何だろう？

あずささんの後ろに見えたその人は、あずささんを怨んでいるようではない。

「ちょっと待って下さい」

瑠希弥さんの顔つきが変わった。どうしたのだろう？

「まどかさん、場所を変えましょう。江原先生の道場がいいと思います」

「は、はい」

私も瑠希弥さんの只ならぬ表情を見て、返事をするのがやっとだった。

私達は、あずささんを伴い、ついて来たがるリッキーを振り切って、江原ッチの家に行った。

「まどかりーん」

何故か檻に入れられた江原ッチが玄関の脇にいた。

「どうしたの、江原ッチ？」

江原ッチは泣きそうな顔で、

「瑠希弥さんが家に戻る時は、ここに入らされるんだ」

「そうなんだ」

危ない、危ない！　危うくＮＧワード言うところだったわ！

涙ぐむ江原ッチに慰めの言葉をかけ、私達は邸の奥の道場に行った。

「お待ちしていました」

そこには江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんが正座していた。

「こちらへ」

あずささんは雅功さんに導かれ、注連縄で囲まれたところに入った。

途端に、バチンという強烈なラップ音がした。

霊が現れる前触れだ。

「がああ！」

あずささんの背後に悪霊が現れた。それは中年のオヤジだった。

あずささんが見た霊だ。

「てめえら、何の権利があってこんな事をする！？　今すぐやめろ！」

オヤジの霊は怒鳴り散らした。

あずささんにはオヤジの姿も見えず、声も聞こえないようだが、怯えている。

何かを感じているようだ。

「貴方こそ、何の権利があって、その女性に取り憑いているのですか？」

雅功さんが冷静に尋ねる。オヤジの霊はますます凶悪な顔になり、

「うるせえ！　皆道連れだ！　一人でも多く、あの世に連れて行くんだ！」

何だろう、こいつ？　何をそんなに猛り狂ってるの？

あ！　わかった！　こいつ！

「あんた、何勝手な事言ってるのよ！　ギャンブルに溺れて、借金返せなくなって、無理心中して、奥さんとお子さんだけ成仏してしまって、一人になったから、誰かを一緒に連れて行くなんて、とんでもないわよ！」

私は大声で怒鳴り返した。

瑠希弥さんも、あずささんも、雅功さんんも驚いていた。

私自身、どうしてそこまでわかったのか不思議だったくらいだ。
その時、私はオヤジの後ろに私と同年代の女の子を見た。
このオヤジの娘さん？
そうか、あの子が教えてくれたんだ。
「瑠希弥さん」
私は瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんは私の思いに気づいてくれて、女の子の霊を自分の身体に降霊した。
「お父さん、やめて。そんな事を続けていれば、お父さんは地獄に落ちてしまう。お願いだから、やめて」
瑠希弥さんの口を借りて、娘さんが叫んだ。
するとオヤジの霊が鎮まった。
「亜美……。すまない、すまない」
オヤジは涙を流し、霊威を消して行った。
私達はオヤジの霊を清め、娘さんの霊と共に霊界へと送った。
「さて。もう一つ片づけないといけませんね」
雅功さんが言った。あずささんの背後には、同級生の男の人の霊

がいた。

「ありがとうございました」

その人はいきなりそう言った。

「へ？」

私はキョトンとして瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんは男の人の霊を見て、

「あなたは、あの男性の霊によって、マンションのベランダから飛び降りさせられたのですね？」

「はい。その時、ふと、力丸さんの事を思い出してしまって……」

どうやら、この人は、あずささんにずっと片思いしていたらしい。

虐められていた時、エロ兄貴とあずささんだけが庇ってくれたのだと言う。

へえ。お兄ちゃん、見直したわ。

その時からずっと、あずささんの事が好きだったけど、あずささんがエロ兄貴の事が好きなのを知っていたので、言えなかったんだって。

「僕があずささんの事を思い出してしまったせいで、あの人があずささんまで道連れにしようとしたので、何とか食い止めようとしたのですが……」

恥ずかしそうに語るその人は、本当にいい人だった。

何でこんないい人を道連れにしようとしたのよ、あのバカオヤジは！？

全てを知ったあずささんは、見えてはいないのだろうけど、その同級生の方を見て言った。

「ありがとう、私を守ってくれて。貴方の事、忘れないわ」

あずささんは泣いていた。

「嬉しいよ、あずささん。そう言ってもらえただけで、僕は満足だよ」

やがてその人の霊も霊界に消えて行った。

「人間と同じように、霊にも相性があるのですよ」

雅功さんが説明してくれた。

「あの人は本当にお気の毒ですが、あの悪霊と相性が合ってしまったのです。だから取り殺されてしまったのです」

「そうなんですか」

深刻な場面なので、ＮＧワード騒ぎはしない。

「しかし、まどかさんとあの女の子の相性が合っていたおかげで、

悪霊を鎮められたのです」

あずささんは泣き崩れた。瑠希弥さんがそれを優しく抱きしめた。

私も思わずもらい泣きした。

「私、彼の家にお線香を上げに行きます」

ひとしきり泣いてから、あずささんが言った。

「今日はどうもありがとうございました」

あずささんは、ここから近いからと、一人でその人の実家に行った。

どんな気持ちなのだろう？

自分の事を好きだと言ってくれた人が亡くなるって……。

今日もまた、貴重な体験をしたまどかだった。

冬休みは江原ッチとデートなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

という訳で、冬休み。

待ちに待った、と言うほどでもないけど、それなりに嬉しい。

成績は思ったより悪く、大らかなお父さんは笑ってすませてくれたけど、お母さんには、

「お弁当のおかずを一品減らします」

と残酷な仕打ちをされた。

え？　初めてお母さんとの会話が出て来たな、ですって？

仕方ないじゃない、この話は、家族団らんを描くのが苦手な作者が書いているんだから。

あ！　何て事言わせるのよ！？　また怨まれちゃうわ、私……。

そんな私の事を感じてくれたのか、絶対彼氏の江原耕司君からメールが来た。

「今日、デートしませんか？」

私は速攻で了解の返信した。

すると今度は江原ッチから電話。

「どこに行く、まどかりん？」

「ハワイがいいな」

私がふざけて言うと、江原ッチは、

「そこは新婚旅行で行こうよ、まどかりん」

「まあ」

江原ッチはそういう事をサラッと言ってのけるけど、全然嫌味にならないのが素敵。

取り敢えず、近所のファミレスで落ち合う事にして携帯を切った。

「おい、どこ行くんだ？」

玄関で鉢合わせしたエロ兄貴に尋ねられた。

「江原ッチとデート」

「許さん！」

兄貴は時々全然笑えない事を言う。

「意味わかんない」

私は兄貴が更に何かを言っているのを無視して、

「行って来ます」

と外に出た。

「さぶ！」

G県は北部山沿いを除いてまだ雪は降っていないが、G県名物の空っ風が吹いている。

特に私の家があるM市は、とりわけその空っ風が強い地域なのだ。

危なくて、ミニスカートなんか履いて行けない。

だから今日はしっかりジーパンだ。

足フェチの江原ッチは、私がスカートを履いて行かないとテンションが落ちるのだが、そこは譲れない。

ファミレスに着くと、江原ッチはまだ来ていなかった。

いつものようにカウンターに座り、お目当てのクリームソーダを注文する。

「あれ？」

建物の中なのに、強烈な風が吹いた気がした。しかし、周囲の人は誰も騒がない。

「きゃあ！」

私の後ろを通り過ぎようとしていたお店のお姉さんが叫んだ。

あれ、と思って振り返ると、お姉さんは足から血を流してうずくまっている。

「大丈夫ですか？」

私はビックリしてお姉さんに声をかけた。周囲の人達も何事かと私達を見ている。

「怪我人です！」

私はカウンターの中にいた女性に声をかけた。

その女性も驚いてお姉さんに近づいた。

「どうしたの、川崎さん？」

お姉さんの名前のようだ。

「すみません、主任。いきなり足に痛みがあって……」

私はさっきの妙なつむじ風もどきを思い出した。

あれは風じゃない。

その証拠に私のクリームソーダの脇にあるストローは飛ばされも

せず、そのままだ。
「とにかく、手当てを」
二人は私に礼を言い、店の奥へと行った。
霊現象？　それしか考えられない。
「まどかりん、何かあったの？」
江原ッチが入って来た。
「胸騒ぎがしたんで、急いで来たんだ」
私は江原ッチにさっきあった事を話した。
「かまいたちかな？」
「サウンドノベルの？」
私のボケは気づいてもらえなかった。
「でも、今は何にも感じられないね」
「ええ」
さっきはつむじ風もどきを起こした霊を感じたのだけど、今は何も感じられない。
「もしかして……」

私は江原ッチに目配せして、カウンターから離れ、店の奥を見た。
「そういう事か」
さすが、箕輪まどかね。　もう事件は解決よ。
「奥にいる女の人に何か憑いてるね」
江原ッチもわかったようだ。
「理由を話しても取り合ってもらえないだろうから、取り敢えず入っちゃおうか」
江原ッチは勝手にカウンターの奥へと入って行く。
「ああ、お客様、困ります……」
押し問答が続くかと思ったが、
「大丈夫だよ、まどかりん。入って」
「う、うん」
江原ッチが笑顔で言ったので、私はキョトンとしながらカウンターの中に入った。
「あれ？」
奥に行くと、従業員の女性達が何故かウットリして江原ッチを見

ている。

何なの、一体？

一番奥に、川崎さんがいた。

彼女は椅子に崩れるように座っている。

憑依現象だ。

霊に取り憑かれ、意志を支配されている。

「川崎さん、しっかりして！」

店長らしき大きな身体の男の人が川崎さんに声をかけるが、反応はない。

「生霊？」

私は霊の正体を見破った。

川崎さんの元彼だ。

川崎さんはすでに別れたつもりらしいのだけれど、元彼は納得していない。

しかも悪い事に元彼は霊能力があるようだ。

更に悪い事にそいつはあのサヨカ会と関わりがある。

「オンマリシエイソワカ！」
私と江原ッチは声を揃えて摩利支天の真言を唱えた。
「グゲェ！」
生霊は川崎さんの身体から弾き飛び、
「おのれ、覚えていろ！」
と悪代官のような捨てゼリフを吐いて消えた。
「もう大丈夫ですよ、川崎さん」
江原ッチが笑顔で言うと、周囲の女性達がざわつく。
「はい、ありがとうございました」
川崎さんまで目がハートになっていた。
おまけに店長まで、江原ッチに熱い視線を向けていた。
怖い……。

こうしてファミレス生霊事件は解決し、私達はクリームソーダの代金をサービスされ、おまけにケーキまでお土産に頂いてしまった。
「いい事すると、気持ちいいね、まどかりん」

江原ッチは何かを誤魔化そうとするようにスタスタと歩き出す。

「江原ッチ、正直に答えなさい。さっき、ファミレスのお姉さん達に何かしたでしょ？」

私は仁王立ちで江原ッチの行く手を遮った。

江原ッチの全身から汗が流れ出す。

相当焦っているのがわかる。

「言いなさい！」

「は、はい！」

江原ッチは観念して、話し始めた。

あろう事か、江原ッチはあの小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんから、「魅力アップ」の方法を伝授されたのだと言う。

私を差し置いて、何してるのよ、全く！

「まどかりんが誰かに取られないようにするために、教えてもらったんだ。だから怒らないで」

江原ッチはいきなり土下座をした。

「ちょ、ちょっと、やめてよ」

ここは公道だ。たくさんの人達が歩いているのだ。
これでは私が悪い人みたいでしょ！
「許してくれる、まどかりん？」
江原ッチは上目遣いのウルウル瞳で私を見る。
「し、仕方ないわね」
私は半分嬉しいのを我慢して言った。
「良かったあ」
江原ッチは大喜びして立ち上がり、
「じゃ、デート行こう」
と私の手を掴んで走り出す。
「ちょっと待って、江原ッチ！」
私は転びそうになりながら、走った。

でも。

川崎さんの元彼は、サヨカ会のメンバーだった。

しかも霊能力者だ。

不安だ。何か起こるような気がする。

でも、私は負けない。

今は江原ッチと、瑠希弥さんもいるのだから。

どうして瑠希弥さんは、私より先に江原ッチに「魅力アップ法」を伝授したのだろうと、少しだけ不満なまどかだった。

小倉冬子さんが久々の登場なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。

この前、私の絶対彼氏の江原耕司君とデートの待ち合わせをしたファミレスで奇怪な事件に遭遇した。

生霊がファミレスの従業員のお姉さんに取り憑いたのだ。

しかも、悪い事にその生霊の正体はあのサヨカ会のメンバーだったのだ。

嫌な予感がした。

そして、たちまち年が明けた。

思い返してみると、去年の初詣は牧野徹君と行った。

近所の地蔵尊に行って、父親に殺された男の子の霊と出会ったんだっけ。

遠い昔の出来事のようだ。

今年は江原ッチと初詣。

しかも、去年とは違う所に行く。

江原ッチが毎年行っている神社だそうだ。
私はウキウキしながら彼の家に行った。
するとそこには、いつものメンバーがいた。
機嫌が悪そうな親友の近藤明菜。
その明菜にいろいろと話しかけて宥めている明菜の彼の美輪幸治君。
新年早々コロッケを食べながらニヤニヤしている同級生の力丸卓司君。
明菜が機嫌が悪いのは、呼んでもいないリッキーが来ていたからだ。
「しかたないよ、アッキーナ。力丸は、靖子ちゃんと付き合ってるんだからさ」
美輪君は必死だ。しかし明菜はムスッとしたまま。
明菜ったら、本当に子供なんだから。
「お待たせ、リッキー」
靖子ちゃんが現れると、リッキーのニヤけ度が更にアップした。
「でへへ、おめでとう、靖子ちゃん。今年もよろしくね」

「うん」

靖子ちゃんは笑顔全開で応じた。

どうしてこんな可愛い子の交際相手が、よりによってリッキーなのか、本当に不思議。

「まどかりん、お待たせ」

やっと江原ッチが現れた。

みんなが顔を会わせたのは久しぶりだ。

和やかに会話が弾むと思った時だった。

「皆さん、明けましておめでとうございます」

そこへ小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが現れた。

途端に、江原ッチも美輪君もリッキーも、私達を無視して瑠希弥さんを見る。

「明けましておめでとうございます。瑠希弥さん」

三人のバカ男共は、練習したのかと言いたいくらい見事なハモりで挨拶した。

また明菜の機嫌が悪くなる。

靖子ちゃんはリッキーの腕をつねっているが、リッキーは気づか

ないくらい瑠希弥さんに夢中だ。

「私は菜摘先生との修行がありますので、ここで」

瑠希弥さんは笑顔のまま家の中に行ってしまった。

私と明菜と靖子ちゃんはホッと溜息を吐いた。

「あーあ」

三バカ男共は大きな声で溜息を吐いた。後でお説教ね。

「ほら、早く行きましょう」

私は江原ッチの腕をぐいと引いて歩き出す。

「あわわ、まどかりん、そんなに引っ張らないでよ」

江原ッチは転びそうになりながら言った。

私達はようやく初詣へと出かける事ができた。

それにしても、今年こそ良い年にしたい。

去年はいろいろあり過ぎたから。

でもダメなんだろうな。

作者の性格が悪過ぎるから。

あの人、可愛い子が大嫌いみたいだし。

「この角を曲がると、鳥居が見えて来るよ」

江原ッチが言った。

基本的に歩くのが苦手な私とリッキーは思わずホッとした。

「まどかちゃん、久しぶりね」

そんな声が聞こえた。江原ッチがビクッとする。

明菜も何かトラウマを思い出したように震え出す。

「大丈夫だよ、アッキーナ。何があっても俺が君を守る」

美輪君が明菜を優しく抱きしめる。

あれあれ、ドサクサに紛れてっていう奴？

「冬子さん、無事だったんですね？」

そう。あのサヨカ会との闘い以来姿を見せなかった小倉冬子さんが現れたのだ。

「ええ。今年もよろしくね、まどかちゃん」

冬子さんは微笑んだらしい。

相変わらず、表情に乏しいのは変わりないが、少しだけ明るくなったようだ。

髪も肩上までで、顔を半分隠していた部分も切ったようだ。

冬子さんは、身だしなみに気をつければ、結構綺麗な人なのだ。

ちょっと怖いのは確かだけど。

「話があるのだけれど、その前に初詣をすませましょうか」

「はい」

冬子さんも合流して、私達は神社で初詣をすませた。

明菜と美輪君は更にこれからデートらしい。

明菜はトラウマを乗り越えられなかったらしく、最後まで冬子さんを見なかった。

「じゃあね」

美輪君に支えられて、明菜は去って行った。

「僕らもデートに行くので」

リッキーが鼻の下を伸ばして言う。

「じゃあね、お兄ちゃん、まどかお姉さん」

靖子ちゃんはニコニコしてリッキーと去って行く。

私達は境内の端に行った。

「サヨカ会の宗主の鴻池大仙（こうのいけだいせん）には、子供がいたらしいわ」

冬子さんが切り出した。

私はその話に思わず江原ッチと顔を見合わせた。

「その子供の配下が、私が持っている独鈷を狙っているらしいの」

この前の戦いで、冬子さんは大仙が持っていた独鈷を手に入れ、封じられた自分の記憶を取り戻すはずだった。

でも冬子さんは、私達との記憶をリセットするのを拒否して、封じられた記憶は独鈷の中なのだ。

そればかりではない。

その独鈷は、邪（よこしま）な奴が持つと、とんでもない武器になる。

大仙は霊能者ではなかったが、死霊を操り、多くの人の命を奪った。

「霊能者でない者が持っても、あれほどの力を発揮できるものなら、霊能者が悪用しようとすれば、もっと大変な事になるわ」

冬子さんは相変わらずの無表情で話す。

「蘭子お姉さん達に話した方がいいかしら？」

私は言ってみた。すると冬子さんはゆっくりと首を横に振り、

「いいえ。蘭子さん達には言わない方がいいわ。それに連中は蘭子さん達の居場所を探しているの。私達が連絡すれば、気づかれてしまうわ」

「でも、この前、私と瑠希弥さんで山形に行きましたよ。もう知られているのではないですか？」

私はドキドキしながら尋ねた。すると冬子さんは、

「サヨカ会の残党が動き出したのは、十二月の末。だからまだ気づいていないわ」

「そうなんですか」

また言ってしまったＮＧワード。今年こそ、言わずにすませようと思ったのに！

「瑠希弥さんには言ってもいいですか？」

「ええ。彼女には力を貸して欲しいの。それに江原ご夫妻にも」

冬子さんが江原ッチを見た。何故か江原ッチは顔を赤らめた。

こいつ、女性だと見境ないのか？

「また連絡するわ、まどかちゃん」

「はい」

冬子さんは浮遊するように歩き、去って行った。

「さてと。俺達もデートに行こうか、まどかりん」

いつもなら、そう言われればすぐに応じた私だが、今日は違う。

「デートはまた後で。今は瑠希弥さんと話をしないと」

「あ、そうだね。瑠希弥さんと話をしないといけないよね。俺、何考えてるんだろうなあ」

妙に嬉しそうなのが気にかかるが、まあ、いいでしょ。

またいろいろと問題山積な一年になりそうなまどかだった。

新学期が始まったのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

楽しかった冬休みも終わり、今日から学校が始まる。

毎日会っていた絶対彼氏の江原耕司君とも、これからは会える時間が少なくなる。

心配だ。

この前、小倉冬子さんが現れて、サヨカ会の残党が冬子さんが持っている独鈷を狙っていると言っていた。

その事が心配なのではない。

心配なのは江原ッチだ。

江原ッチの家には、あの小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんがいる。

瑠希弥さんには、私は何一つ勝てる要素がない。

その瑠希弥さんに、江原ッチは惹かれている。

もちろん、私を裏切るつもりはないって言ってくれているけど、

この前も冬子さんに、

「瑠希弥さんに力を貸して欲しい」

と言われ、江原ッチは随分喜んでいた。

公然と瑠希弥さんに接触する事ができるからだ。

一計を案じた私は、江原ッチのお母さんの菜摘さんに連絡した。

「わかりました。瑠希弥さんには私から話をします。耕司は近づかせませんから」

菜摘さんの言葉に私はホッとすると同時に悪い事をしたとも思った。

「耕司は修行が足らないのです。本来であれば、瑠希弥さんの感応力を撥ね除けるのが当たり前なのです。ですから、まどかさんが気に止む事はありませんよ」

「はい」

菜摘さんのその言葉に私はいくらか気持ちが楽になった。

「それから、くれぐれも瑠希弥さんを嫌いにならないで下さいね」

「そ、そんな事絶対にないですから」

私はギクッとした。

瑠希弥さんの事を嫌いにはならないが、苦手になりかけていたからだ。

瑠希弥さんは何も悪くないのに。

私は深く反省した。

学校帰りにコンビニで待ち合わせして、江原ッチと下校デートした。

江原ッチは、菜摘さんに強く言われたせいで、結構落ち込んでいた。

「ごめん、まどかりん。俺が中途半端なせいで、迷惑かけて」

「そんな事ないよ。私こそ、嫉妬深くてごめん」

私は詫びる江原ッチに驚いて、詫び返した。

「でもさ、嫉妬されるって、いいよね」

ヘラヘラしながら言う江原ッチはちょっとだけ気持ち悪い。

「それだけ、まどかりんが、俺の事を好きだって事だもんね」

「や、やだ……」

そんな事を言われると思っていなかったので、私は思い切り恥ずかしくなった。

ふと前を見た。するとそこには瑠希弥さんがいた。

買い物の帰りらしい。瑠希弥さんも当然の事ながら、私達に気づいていた。

「お帰りなさい、まどかさん、耕司君」

「只今、瑠希弥さん」

江原ッチはニヤけそうな顔を引き締めて応じた。

何だかそれがおかしくなった。

しかも、瑠希弥さん、只今最強モードだ。

長い髪をポニーテールにして、可愛いエプロンを着て、エコバッグを提げている。

江原ッチばかりでなく、道行く男性陣が皆、瑠希弥さんの魅力にやられていた。

新婚さんみたいな雰囲気だ。

私は思わず心配になり、江原ッチの家まで行く事にした。

ついでに瑠希弥さんにこの前の話をした。

「そうなんですか」

瑠希弥さんも、あの時かなり痛めつけられたので、顔が深刻になる。

だから、ＮＧワードを言われた事を指摘する事もできない。

瑠希弥さん自身、あまり思い出したくないのかも知れない。

「わかりました。私がＧ県に来たのは、あなた達を守るように西園寺先生に言われたからです」

瑠希弥さんは真剣な表情で私達を見た。

「ありがとうございます」

私は嬉しくなって瑠希弥さんに言った。

「冬子さんに直接会って、お話がしたいですね。連絡先、わかりますか？」

そう訊かれてハッとする。

あれ？　冬子さん、携帯とか持ってるんだっけ？

それより何より、私、連絡先知らない。

そして更に思い出す。

あれ、まだ有効なのかな？

私は鞄の奥に沈み込んでいたあるアイテムを取り出した。

オカリナ。

ずっと以前、冬子さんに、
「私を呼びたい時に吹いて」
と渡されたものだ。
「それは？」
瑠希弥さんが不思議そうな顔で尋ねる。江原ッチはギクッとしている。
「冬子さんに連絡を取れるアイテムです」
私は苦笑いして、それを吹いた。
「ホントに呼べるの？」
瑠希弥さんは半信半疑のようだ。それが当たり前の反応だろう。
「呼んだ、まどかちゃん？」
冬子さんが現れた。瑠希弥さんは驚愕している。江原ッチは思わず私の陰に隠れた。
「冬子さん、瑠希弥さんが話をしたいそうです」
「ああ、そうなの」
また冬子さんは笑ったらしい。

そして、冬子さんと瑠希弥さんは、近くの公園で話をした。

「この独鈷は、貴女が持っていて。その方が安全よ」

冬子さんが言った。瑠希弥さんは頷き、冬子さんから独鈷を受け取った。

「この独鈷は、邪な心を持っている者が手にすると、たちまちその者を悪の権化に変えてしまうわ。貴女なら、大丈夫」

「邪な心をねえ」

私は思わず江原ッチを見た。江原ッチはピクンとして、

「な、何、まどかりん？」

と酷く狼狽えた。思い当たるのか、やっぱり。

「それから、これが私の携帯の番号とメルアド。登録しておいて」

冬子さんはメモ用紙を私にくれた。

「じゃあ、またね」

そう言って、冬子さんはスーッといなくなってしまった。

「これをサヨカ会の残党が狙っているのね」

瑠希弥さんが独鈷をジッと見つめる。

また何か良からぬ事が起こるのだろうか？

新学期早々、大きな問題を抱えるまどかだった。

新年早々、ややこしい除霊なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

私の絶対彼氏の江原耕司君の家に、尊敬する西園寺蘭子お姉さんのお弟子さんである小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんがいる。

瑠希弥さんは美人で性格が良くて、その上家事全般もこなせる人なので、私は全く太刀打ちできない。

しかも、霊能力の一種である感応力が強く、蘭子お姉さんをも上回る。

それに加えて、江原ッチのお母さんの菜摘さんが、瑠希弥さんを指導したので、感応力は更にアップし、今や「官能力」に近い。

それでも、瑠希弥さんの努力と菜摘さんの教えにより、その力は押さえ込めるようになったようだ。

その証拠に、今日、江原ッチの家に行ったら、江原ッチは檻の中にはいなかった。

「今日はどうしたんですか、瑠希弥さん？」

私は江原ッチではなく、瑠希弥さんに呼ばれて来たのだ。

「今日は大学入試センターの依頼で、ある大学に行きます」

「大学入試センター？」

聞いた事があるようなないような。

「毎年恒例のあれっすね」

江原ッチが嬉しそうなのは、瑠希弥さんと話せるからではないと信じよう。

「毎年恒例って？」

私はキョトンとして江原ッチを見た。

「この時期になると、出て来るんだよ」

江原ッチは、「幽霊のポーズ」をしてみせた。

今時流行らないよ、それ。

「では、行きますよ」

「はい」

江原ッチも同行すると知り、私は気が気ではない。

確かに、以前に比べると瑠希弥さんの感応力は制御されてはいる。

しかし、私のエロ兄貴ほどではないにしても、江原ッチもどちらかというとそっちの世界の住人だから、まだ不安なのだ。

そんな事を考えていると、早速江原ッチが瑠希弥さんの車の助手

席に乗ろうとしているので、
「貴方は後ろ」
と耳たぶを掴んでどかした。
「あいでで」
江原ッチは涙ぐんで後部座席に座った。
スポーツカー仕様なので、後ろは狭いのだ。でも構わない。
そして、私達は目的地へと出かけた。

車中で、詳しい話を聞いた。
毎年この時期になると、志望校に合格できずに自殺してしまった受験生の霊が現れ、その年の受験生を惑わせようとするらしい。
しかも、いくら除霊しても、どこからともなく集まってくるので、毎年恒例になってしまっているらしい。
「原因はわからないの？」
私は江原ッチに尋ねた。
「今のところはね。どうしてその大学に集まって来るのか、不明なんだ」

「そうなんだ」

あ、危ない。NGワードを言いそうだったわ。

やがて車は目的の大学に到着した。

駐車場に、学長と事務長が待っている。

どっちもその辺のおじいちゃんだ。何となく、品があるのはわかるけど。

「ようこそおいで下さいました、小松崎先生」

学長が言うと、瑠希弥さんは顔を赤らめて、

「先生だなんてやめて下さい」

と恥ずかしそうだ。私なら喜んじゃうんだけど。

「すでに現れているようですね」

瑠希弥さんの顔が真剣モードになる。

「はい。こちらです」

私達は、二人のおじいちゃんについて行った。

案内されたのは、試験会場になる大きな教室だ。
収容人員は五百名。ここの他、いくつか会場が用意されるらしい。
「あそこですね」
瑠希弥さんが、教室の一角の机を見て言った。
そこには、ドンヨリした気を放ちながら、ブツブツ恨み言を呟く元受験生の霊が座っていた。
どれほどショックだか知らないけど、自殺はいけないわ。
みっちり説教してあげようかしら？
「君」
すると、私が動くより早く、瑠希弥さんが動いた。
「何だよお？」
その霊は、恨みがましい目で瑠希弥さんを見た。
「どうしてここにいるの？」
瑠希弥さんは菩薩様のような微笑みで尋ねる。
江原ッチがニヘラッとしたのがわかる。

いや、そればかりではない。

おじいちゃんズもヘラヘラしている。

恐るべし、瑠希弥さん！

「だ、大学に合格するためだよ」

元受験生の霊は、顔を赤らめて答えた。

霊にまで影響するなんて、もう人智を超えているわ、瑠希弥さん。

「でも、貴方はもう死んでしまったの。受験はできないのよ」

「知ってるよ。でも、ここで受験すると、生き返れるんだ」

妙な事を言う霊だ。どういう事だろう？

おお！　瑠希弥さんのサーチ機能が全開になった。

この霊がどうしてそんな事を言ったのか、調査中だ。

私も試しにサーチしてみたが、途中で挫折した。

幾重にも張り巡らされた結界のようなもののせいで、その先に進めないのだ。

「こいつは凄いね」

江原ッチも挑戦したのか、そう言った。

瑠希弥さんは確実に結界もどきを突破し、先へと進んでいるらしい。

さすが！

「サヨカ会？」

瑠希弥さんの呟きに、私と江原ッチはギョッとして顔を見合わせた。

「貴方は騙されているのよ。ここで受験しても合格はできないし、ましてや生き返る事なんてできないわ」

瑠希弥さんが霊を諭す。霊も瑠希弥さんに真実を見せられたようだ。

「本当だ。どうしてそんな嘘を信じてしまったんだろう……」

彼は悲しそうだ。

「わかった。ありがとう、美人のお姉さん」

元受験生の霊は瑠希弥さんに礼を言って、天に昇って行った。

「どういたしまして」

瑠希弥さんはニコッとした。

「まどかさん、耕司君、この教室の四方にお札が埋め込まれています。探して下さい」

瑠希弥さんが私達を見て言った。

「はい」

私と江原ッチは手分けして室内を隈なくサーチする。

どこかに妙な気の流れがあるのはわかるが、あまりに微かでわからない。

多分、瑠希弥さんがいなければ、気づく事もなかっただろう。

「ここね」

瑠希弥さんは黒板の右側で見つけたらしい。摩利支天の真言を唱えた。

「オンマリシエイソワカ」

ボシュッと音がして、お札が消滅したのがわかる。

「あった！」

私と江原ッチはほぼ同時にお札を見つけて、

「オンマリシエイソワカ」

と真言を唱え、消滅させた。

瑠希弥さんは更にもう一箇所を探り当て、消滅させた。

「相当以前に仕掛けられたようです。お心当たりはありませんか？」

瑠希弥さんが学長に尋ねる。

「私にはわかりません。事務長は？」

学長が事務長に無茶ぶりした。事務長は慌てている。

「私にもわかりません。ここは改修工事をした事がないですから、恐らく建設した当時でしょう。私もその頃はここにおりませんで」

二人共、知らないのは本当のようだ。

「わかりました」

瑠希弥さんはニコッとして言った。

え？　いいの？

私達は、二人のおじいちゃんにたくさんお礼を言われ、大学を出発した。

「瑠希弥さん」

私は気になったので訊いてみる事にした。

「どうしましたか、まどかさん？」

瑠希弥さんは前を向いたままで言う。

「サヨカ会が絡んでいるのなら、何か手立てを……」

「心配ないですよ」

「え？」

私ばかりでなく、江原ッチも驚く。

「あの仕掛けをしたのは、鴻池大仙（こうのいけだいせん）です。彼はもうこの世にいませんから、大丈夫ですよ」

「そうなんです……ね」

何とか踏み止まって、ＮＧワードを回避した。

凄いな、瑠希弥さん。そこまでわかるなんて。

「それより、心配なのは冬子さんです」

「え？　冬子さん？」

冬子さんは、サヨカ会の残党に独鈷を狙われていた。

でも、その独鈷は瑠希弥さんが預かり、今は江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんが保管しているのだ。

冬子さんはもう、安全だと思うんだけど？

「冬子さんは、私達に危害が及ばないように嘘を吐いたのです。サヨカ会の残党の目的は独鈷ではありません。冬子さん自身なんです」

瑠希弥さんの言葉に、私と江原ッチは衝撃を受けた。

更に不安が高まるまどかだった。

里見まゆ子さんは嫉妬深いのよ！

私は箕輪まどか。中学一年生だけど、霊能者だ。

考えてみると、もうすぐ中二なのよね。

世の中、「中二病」とかいう病があるらしいけど、私には関係ない。

だって、私はリア充だから。

で、中二病って何？

今日は日曜日。

そして私のエロ兄貴は寝て曜日らしい。

お父さん並みの「寒いギャグ」をかまして来る。

恋人の里見まゆ子さんと喧嘩したらしく、デートをキャンセルされ、腐っている。

だったら、昔のようにたくさんいるはずのガールフレンドに連絡すれば良さそうなものだが、まゆ子さんと付き合うに当たって、今までの「女性関係」を全て清算させられたらしい。

携帯に溢れんばかりに登録されていた女性達は、皆削除させられ

たのだと言う。

まゆ子さん、恐るべし。

そして、それに素直に応じた兄貴もアッパレだ。

私は張本さんじゃないけど。

そんな兄貴を慰めるでもなく、私はサッサと家を出て、絶対彼氏の江原耕司君の家に向かう。

今日は江原ッチの家で、食事会なのだ。

だから私は朝食も抜いて、準備万端だ。

えっ？　どこまで食い意地が張っているんだって？

大きなお世話よ、フンだ。

いよいよ江原家が見えて来た時だった。

「まどかちゃん」

どこからか、私を呼ぶ声がする。しかも聞き覚えがある。

「こっち、こっち」

今流行りの資格取得のＣＭかと思ったら、違った。

兄貴の恋人にして、私の将来の義理のお姉さんの、まゆ子さんだ

った。

明子姉ちゃんみたいに電柱の陰から私に手招きしている。

デジャヴって奴？

「まゆ子さん、どうしたんですか？」

私は不思議な偶然に驚いた。まさかまゆ子さん、江原家の食事会目当て？

そんなはずはないな。

「今から、そのお屋敷に行くんでしょ？」

まゆ子さんは江原家の門を見て尋ねる。

「はい、そうですけど。それが何か？」

私はますます意味がわからず、尋ね返す。

「だったら、私も一緒に行っていいかしら？」

「えっ？」

ドキッとした。まさかまゆ子さん、本当にお食事会目当てなの？

「小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんとお話したいの」

まゆ子さんの言葉に私はビックリした。

もうそれは終わったはずなのに。

まゆ子さん、意外に嫉妬深いのかな？

「兄貴はもう、瑠希弥さんとは連絡取ってませんよ」

「それはわかってる。でも、念のため。ね？」

まゆ子さんの目が怖い。私は逆らう事ができなくなっていた。

「わかりました」

仕方なく、私はまゆ子さんを伴い、江原家の門をくぐった。

「いらっしゃい、まどかりん……」

江原ッチが出迎えてくれたが、まゆ子さんがついて来ているので、驚いている。

「お久しぶりね」

まゆ子さんはニコッとして江原ッチを見る。江原ッチは「ショタコン事件」（里見まゆ子さんが怖いのよ！参照）の事を思い出したのか、顔を赤らめて、

「ど、どうも」

とだけ言った。

「瑠希弥さんはいる？」

私が代わりに尋ねる。

「いるけど。どうしたの？」

江原ッチは不思議そうだ。それはそうだろう。

「お話があるの」

まゆ子さんは穏やかに言ったつもりなのだろうが、私と江原ッチは殺されると思った程だった。

「よ、呼んできます」

江原ッチはまさに逃げるように家の中に駆け込んだ。

私をまゆ子さんと二人きりにしないでよ。

そう言いたかったが、言えなかった。

あれ？　何だろう、この違和感は？

何かを感じるのだけど、それが何なのかわからない。

もう限界、と思い始めた時、

「お待たせ致しました」

と瑠希弥さんが来てくれた。

江原ッチは、玄関の扉からこっちを覗いているだけで、出て来ようとしない。

「今日は、小松崎さん」

まゆ子さんが怖い笑顔で挨拶する。

しかし、霊感は鋭いのにそういうのにはまるで鈍感な瑠希弥さんは、

「今日は、里見さん。お久しぶりです」

とごく普通に挨拶した。

まゆ子さんの嫉妬パワーが跳ね上がるのがわかった。

あっ！　私は思わず瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんが頷く。

「まどかさん、摩利支天真言を」

「はい」

私達は印を結び、真言を同時に唱えた。

「オンマリシエイソワカ」

真言が二重に膨れ上がり、まゆ子さんを押し包む。

「きゃっ！」

まゆ子さんの身体に幾重にも取り憑いていた生霊が一気に引き剥がされ、消えて行った。

瑠希弥さんが来た事で、私にもわかった。

まゆ子さんは、兄貴と縁を切られた女性達の生霊に取り憑かれ、嫉妬の塊にされていたのだ。

もしかして、まゆ子さんて、霊媒体質なのかしら？

「あら？　私、何していたの？」

生霊が離れたので、まゆ子さんは自分を取り戻したようだ。

私は動揺するまゆ子さんに事情を説明した。

まゆ子さんは真っ赤になった。

「恥ずかしいわ。私、そんな事を……」

穴があったら入りたい。それが今のまゆ子さんの心境だろう。

「慶一郎さんに言います。携帯の登録を元に戻していいって」

まゆ子さんは申し訳なさそうに言った。

「それがいいですね。過剰な束縛は、亀裂の原因です」

瑠希弥さんが言った。

「お食事の用意もできていますから、里見さんもどうぞ」

「あ、はい」

結局、まゆ子さんは食事会に参加する事になった。

いろいろと話をした二人は、携帯番号とメールアドレスを交換したようだ。

良かった。

知っている人同士の関係がうまくいかないのは、見ていて気持ちのいいものではないから。

私も反省しなくちゃ。江原ッチが気が多いのは、私の嫉妬も一因なのがわかったから。

「ご馳走様でした」

私とまゆ子さんは、江原家を後にした。

「いろいろありがとう、まどかちゃん」

まゆ子さんが帰り道で言う。

「私は別に……。みんな、瑠希弥さんのおかげですよ」

私は苦笑いして応じた。

「西園寺さんも、小松崎さんも、全然慶一郎さんには気が向いていないのに、私、嫉妬ばかりして……。本当に恥ずかしいわ」

まゆ子さんはまた赤くなった。

「でも、何か嬉しいですよ、妹としては」

「えっ？」

まゆ子さんはビックリして私を見た。

「だって、それだけまゆ子さんはお兄ちゃんを好きだって事ですから」

私はニヤッとして言った。するとまゆ子さんはゆでダコみたいに赤くなり、

「や、やだ、まどかちゃんたら……」

と言うと、足早に歩き出した。

そんなまゆ子さんを可愛いと思う。

今日は何となくいい日だと感じるまどかだった。

人生は長さだけではないのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

先日、エロ兄貴の恋人の里見まゆ子さんが、この世で一番兄貴の事を好きでいてくれているのを知り、嬉しかった。

兄貴もまゆ子さんの思いに気づいて、今では他所の女性にうつつを抜かすなどという事はなくなった。

と思う。多分。恐らく。きっと。

自信がない。

今日は日曜日。

私は親友の近藤明菜、そしてクラスメートで、もしかして将来義理の弟になるかも知れないというおぞましい事実に気づいた力丸卓司君と共に、同級生の女の子のお見舞いに、G県最大の総合病院である、G大付属病院に来ている。

その子の名前は、岡本まり子さん。

以前から入退院を繰り返していて、ほとんど学校に来ていない。

今回私達がお見舞いに来たのは、彼女のお母さんから電話をもらったから。

多分、今年の桜は見られないだろうという話だ。

その話を聞き、私は言葉を返せなかった。

中学生で、人生が終わってしまうなんて……。

人の死は、その人の人生の長さに関係なく、悲しくて辛い事だけど、それにしてもやるせない。

何故お母さんが私に連絡をくれたのかというと、まり子さんが私に密かに憧れていたからなのだそうだ。

嘘じゃないわよ！　こんな事で嘘を吐くほど、私も冷酷な女じゃないわ。

「箕輪さんは、奇麗で、頭も良くて、明るくて、自分にないものをたくさん持っているから、憧れているのだそうです」

お母さんの感情が、受話器を通して伝わって来る。

本当は泣き出してしまいそうなのを必死に堪えているのがわかり、私は声を出さずに涙した。

誉められているのに嬉しいという感情が湧いてこないほど、打ちのめされた。

私は今まで、どれほどの人生を生きて来たのだろう？

多分、自分に死が訪れるなんて全く意識しないまま、ボンヤリ生きて来たような気がする。

「是非、あの子に会って下さい。ご迷惑でしょうが」

「とんでもないです」

私は涙を拭いながら答えた。

そして、翌日、私は明菜に話をし、一緒に行く事にした。

「私もその子とほとんど話した事ないな」

普段クールな明菜が、目を潤ませて呟く。

「どうしたんだ、近藤？　食い過ぎで腹が痛いのか？」

食べる事以外の思考回路が欠如しているリッキーが、また明菜の感情を逆なでする。

「うるさい、デ〇！」

一応自粛した。

こうして、リッキーも一緒に行く事になった。

「病院にコロッケ持って行かないでよね」

まさかとは思ったが、取り敢えず釘を刺しておく。するとリッキーは目を丸くして、

「え？　ダメなの？」

やっぱり……。こいつは……。

そして今、私達三人は、まり子さんがいる病室の前にいる。

「あら、いらっしゃい」

お母さんが笑顔で迎えてくれた。

「こんにちは」

私達は病室に入った。個室だ。

まり子さんは、大きなベッドの中で、以前学校で見た時より小さくなった印象で、横になっていた。

ベッドの頭の方が起こしてあり、まり子さんは痩せこけた顔で私達を見て、力なく微笑む。

「箕輪さん……。来てくれて、ありがとう……」

私はお見舞いの花束をお母さんに渡した。

「花瓶に活けるね」

お母さんは嬉しそうに言い、部屋の端にある洗面台で花瓶に水を入れ、花を挿している。

私は微笑んで、再びまり子さんを見た。

その時、背筋が寒くなった。

まり子さんの背後に蠢く黒い影。

確か、霊界の案内人だ。

こんなタイミングで現れるなんて……。

私が呼び寄せたんじゃないよね？　怖くなって来た。

「どうしたの、まどか？」

明菜に声をかけられて、私は我に返った。

「いっぱい食べないと、元気になれないぞ、岡本」

リッキーが言う言葉は、入院患者には酷な言葉。しかし、彼なりの思いやりと優しさなのだから、責められない。

「うん」

まり子さんは微かに頷き、微笑む。

「ほら、まり子、奇麗よ、お花」
お母さんが花瓶を持って来た。
「ここがいいかしらね」
お母さんは花瓶をまり子さんの脇にあるワゴンの上に置いた。
「奇麗……。ありがとう」
まり子さんは私達を見て、また微かに微笑む。
また、ギクッとした。
黒い影が濃くなって来ている。
近いのだ。霊界に戻る時が……。
足が震える。
「あれ、寒いのか、箕輪？」
リッキーが私の異変に気づいたらしく、そう言った。
「そんな訳ないでしょ」
私は必死になって震えを止め、リッキーを見た。
「ねえ、お母さん」

まり子さんが不意に言う。

「何、まり子？」

お母さんは努めて冷静に尋ねる。

「箕輪さんと二人きりでお話がしたいの」

「え？」

私とお母さんは同時に驚いた。

「そんな、まり子、他の皆さんに失礼よ」

意味がわからないお母さんはオロオロしている。

私には、どうしてまり子さんがそんな事を言い出したのかわかった。

そして、何故私に憧れていると言ったのかも。

「私達は別に構いませんよ、お母さん」

明菜が言ってくれた。彼女には霊感はないが、場の空気を読む天才だ。

「え？　どうして……」

リッキーはポカンとしたまま、明菜に連れ出された。

「お母さんも、お願い」

まり子さんは真剣な表情で告げる。お母さんは泣き出しそうな顔で、

「わかった」

とだけ言うと、病室を出た。

「箕輪さん」

お母さんが部屋を出ると同時に、まり子さんが私を呼んだ。

「何？」

私は平静を装いながら尋ねる。

「見えてるんでしょ、私の後ろにいる何かが」

「……」

やっぱり。彼女、霊感があるんだ。だから、私を呼んだ。

「お察しの通り、私、霊感があるの。でも、貴女ほどではなくて、何かいるなって、感じられる程度なの」

「そうなんだ」

ＮＧワードはこの際どうでもいい。今はまり子さんとの会話に集中する。

「ねえ、箕輪さん、私の後ろにいる人に訊いてくれる？　私をいつ連れて行くのかって」

「まり子さん……」

あまりにストレートなお願いに、私はビックリした。

それは私にもわからない。

そういう場に立ち会った事がないから。

それでも、私はまり子さんの背後に蠢く黒い影を見る。

何かわからないかと思い、意識を集中した。

しかし、思った通り、霊界の案内人は、何も答えてくれない。

「ごめん、岡本さん。わからない」

まり子さんを見て答える。嘘は吐いていない。わからないのは事実だから。

「そう。残念だわ」

「ごめんね、力になれなくて」

涙を堪えて言った。するとまり子さんは微笑んで、

「そんな事ないよ。来てくれて嬉しかった」

「岡本さん」

私はまり子さんに近づき、その細くなった手を握った。

「お母さんを呼んで。話があるの」

「うん」

岡本さんから手を放すと、岡本さんは、

「ありがとう、箕輪さん」

「う、うん」

もう涙が止められない。でも、泣きながらお母さんを呼びに行ったら、変に思われる。

私は気持ちを落ち着かせ、涙を拭って、病室を出た。

「箕輪さん？」

突然出て来た私に、お母さんはドキッとしたようだ。

「まり子さんが、お母さんと話があるそうです」

「そ、そうですか」

お母さんはその言葉だけで動揺している。

「まり子」

お母さんは私達に会釈すると、病室に消えた。

「行きましょう」

私は廊下を歩き出す。

「え、まどか、いいの、このまま帰っちゃって？」

明菜が追いかけて来る。

「何だ、腹減ったのか？」

リッキーが場違いなボケをかましても、私は突っ込まなかった。

だって、振り向いたり、話したりしたら、多分涙が止まらなくなるから。

霊感なんて、ない方がいい。

久しぶりにそう思った。

今日は終始真面目なまどかだった。

冬子さんを助けるのよ！

私は箕輪まどか。もうすぐ中学二年生の霊能者だ。ちなみに美少女である。

うーん。

久しぶりに妙な自己紹介が復活したのは、作者が錯乱しているの？

G県は、北部山沿いは豪雪地帯で、南部は空っ風が吹きすさぶところだ。

今日も私は、強風にスカートが巻き上げられないように注意しながら、家路を急いでいた。

親友の明菜がインフルエンザで休んでいるので、お見舞いに行くのだ。

明菜には会えないけど、花とメッセージカードを渡すつもりだ。

ところが、そうはイカの……。おっと危ない！

お父さん並みの昭和ギャグで、しかもエロ兄貴さえ言わないような下ネタを言ってしまうところだったわ。

しかし、思い通りにいかないのが、私の人生だ。

「まどかりん！」

私の絶対彼氏の江原耕司君の声がした。

空耳？　でもかなりはっきり聞こえたぞ。

「まどかりん、こっちこっち」

またか。ユー〇ャンのＣＭのような台詞と共に、江原ッチが現れた。

「え！？」

しかも、驚いた事に、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの運転するスポーツカーの助手席に乗っていたのだ。

「どういう事よ！？」

私は窓から身を乗り出して私に手を振っている江原ッチの襟首をねじ上げた。

「く、苦しいよ、まどかりん」

江原ッチが泣きそうな顔で言う。

「小倉冬子さんが狙われています。早く乗って下さい」

瑠希弥さんが言った。

「え？　冬子さんが？」

私は江原ッチを素早く後部座席に押し込み、助手席に乗った。
「小倉さんは、赤白山の山頂付近に結界を張って潜んでいたらしいのですが、サヨカ会の残党に見つかってしまったようです」
「え？」
赤白山の山頂？　あの某テレビ番組で毎年恒例だったワカサギ釣りをしている辺り？
今確か、氷点下よ、そこって。
冬子さん、サヨカ会に見つかる前に凍死しちゃうわ。
「行きますよ」
瑠希弥さんがアクセルを踏み込む。
車は唸りを上げて走り出した。
「山頂付近て、雪がありますよね。大丈夫なんですか？」
私は不安になって尋ねた。
「え？」
瑠希弥さんが蒼ざめる。
「瑠希弥さん、まさか、タイヤを履き替えていないんですか？」

江原ッチが後部座席から身を乗り出して言った。

「はい」

瑠希弥さんは悲しそうな顔をして答えた。

どうしよう？　今からタイヤ交換をしていたら、間に合わない。

「オヤジの四駆なら、確かスタッドレスタイヤのはず。一回家に戻りましょう、瑠希弥さん」

「はい」

瑠希弥さんは嬉しそうな顔で応じた。

私達は江原ッチの家に行った。

ところが、更に難問が待ち構えていた。

「私、マニュアル車は運転できないんです」

瑠希弥さんが恥ずかしそうに言う。

免許がない私には意味不明だが、どうやら瑠希弥さんは「オートマチック車限定免許」を持っているらしいのだ。

その免許だと、江原ッチのお父さんの車は運転できないのだ。

しかも、悪い事に、今日はお父さんもお母さんも不在。

「どうしよう？」

自分のせいで動きが取れないと思ってしまった瑠希弥さんは、泣きそうな顔になった。

「兄貴に連絡してみます」

私は意を決してG県警鑑識課の兄貴の携帯にかけた。

「何だ！？」

仕事中らしく、もの凄く不機嫌な兄貴が出る。

「代わって、まどかさん」

瑠希弥さんに携帯を渡す。

「お仕事中申し訳ありません、慶一郎さん。小松崎瑠希弥です」

「えええ！？」

そばで聞いている私達にも聞こえるくらい、兄貴は大声を上げた。

瑠希弥さんは手短に状況を説明した。すると、

「付近にいるパトカーで迎えに来て下さるそうです」

瑠希弥さんは嬉しそうに言った。

凄い。さすが瑠希弥さん、エロ兄貴をイチコロ……。

そして、わずか一分少々で、パトカーが現れた。

「どうぞ、乗って下さい」

迎えに来たのは、付近をパトロール中の交通課のおまわりさんだった。

「申し訳ありません」

どうやら、この人も瑠希弥効果で急いで来たらしい。何て事だ。

大丈夫か、G県警？

「いえいえ」

瑠希弥さんに頭を下げられて、ニヤついているのが嫌だが、今はそんな事を考えている場合ではない。

パトカーに乗るなんて、久しぶりだが、何度乗っても乗り心地が悪い。

さすが、天下のG県警だ。嘘のように早く、赤白山山頂付近に着いた。

「急ぎましょう、まどかさん、耕司君」

瑠希弥さんはパトカーを降りると、走り出した。

「きゃあ！」

案の定、瑠希弥さんは雪の上で盛大に転んだ。

「大丈夫ですか？」

パトカーのおまわりさんが、機敏な行動で瑠希弥さんを助け起こす。

チッと舌打ちした江原ッチを、私は思い切り睨んだ。

江原ッチの顔色が途端に悪くなる。

「ごめんなさい」

次は慎重に歩を進める瑠希弥さんだった。

私達は、雪の上をそろそろと歩き、冬子さんがいると思われる沼の反対側に来た。

ここら辺は確か、去年も来たところだ（マジでヤバいって感じ？参照）。

でも、去年と違って、一面雪景色だ。

沼の上でワカサギ釣りをしている人達がたくさんいる。

「こっちね」

瑠希弥さんは細心の注意を払いながら、林の中を進む。

少し開けたところがあり、そこに雪に埋もれかけた小さな小屋が建っていた。

「冬子さん！」

私は思わず駆け出し、叫んだ。

「まどかちゃん」

すると小屋の扉がギイッと開き、冬子さんが現れた。

「どうしたの、小松崎さんまで？」

「は？」

私達は呆気に取られた。

冬子さんの話では、サヨカ会の残党の気配を感じたのだが、彼らは現れていないという。

「でも、結界を破ろうとしている気を感じたのですが？」

瑠希弥さんが不思議そうな顔で冬子さんに尋ねる。

「麓の結界を破ったのまでは感じたけれど、それより上の結界は破られていないわ。さっき、あなた達の気を感じて、結界を解いたところなの」

「そうなんですか。いずれにしても、何事もなくて良かったです」

瑠希弥さんはさり気なくＮＧワードを言い、笑顔になった。

「ここも知られてしまったから、別の場所に移らないといけない」

冬子さんは小屋を見て言った。すると江原ッチが、

「ウチに来ませんか？　ウチなら、安全ですよ」

と言い出した。私はギクッとした。江原ッチ、冬子さんまで？

「ありがとう。でも、皆さんに迷惑をかけられないわ」

冬子さんは最近笑顔が素敵になって来ている。

「かけてもいいんじゃないですか？　俺達、共に戦った仲間ですよね？」

江原ッチは真剣な表情で言った。

私はウルッと来た。瑠希弥さんも目を潤ませて江原ッチを見ている。

「ありがとう、江原君。お言葉に甘えるわ」

こうして、冬子さんも江原ッチの家に行く事になった。

江原ッチはすぐにお父さんに連絡を取った。

「大歓迎ですって、オヤジ。若い女性が増えて、嬉しいみたいです」

江原ッチの言葉に、冬子さんが赤面した。

おお。冬子さんが恥ずかしがるのって、初めて見た気がする。

あれ？　もしかして、冬子さんて、案外年上が好み？

まあ、いっか。

私達はまたパトカーに乗せてもらい、江原ッチの家に帰った。

私達は知らなかった。

サヨカ会の残党のメンバーが、赤白山山頂に向かう途中で、道路でスリップして、林の中に突っ込んでいたのを。

雪道は安全運転で走行して欲しいと願うまどかだった。

たまにはジーンと来るお話なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。多くの人が、私の事を「美少女霊能者」と呼ぶ。

まあ、嘘じゃないけど、「多くの人」の実際の数が問題よね。

という訳で、放課後。

いきなり放課後かよ、なんて思わないでね。

これからが本番なんだから。

私はいつものように絶対彼氏の江原耕司君に会うため、中間地点のコンビニに向かっていた。

中間地点と聞くと、「バラン星か？」と思う人は、立派なヤマトフリークなんですって。

どういう意味？

その道すがら、あからさまに悲しそうなお婆ちゃんを見かけた。

申し訳ないとは思ったけど、気になったので、お婆ちゃんの心を覗いた。

お婆ちゃんの旦那さんが入院中で、しかも意識不明の状態が何ヶ

月も続いている。

お婆ちゃん自身、相当疲れていて、精神的にも限界のようだ。

「大丈夫、お婆ちゃん？」

全くの初対面だったが、声をかけずにいられなかった。

え？　お前にしては珍しいな、ですって？

どんだけ私の事、冷たい人間て思ってるのよ！？

「ありがとう、お嬢さん。大丈夫よ」

そう言いながら、お婆ちゃんはヨロヨロして歩いて行く。

様子がおかしい。

更に気になり、お婆ちゃんをおいかけ、もう一度心を覗いた。

お婆ちゃんは、旦那さんが元気な頃、

「もしわしが倒れて意識不明になったら、そのまま逝かせてくれ。延命治療なんてするな」

と言われていたらしい。

でも、実際に旦那さんが倒れると、約束を思い出す事もなく、何とか意識を取り戻して欲しいと願い、病院で治療をしてもらっている。

そんなある日、お婆ちゃんの夢に旦那さんが現れた。

旦那さんは、

「約束を守ってくれ」

と言ったようだ。

お婆ちゃん心の中の事なので、それが本当に旦那さんの言葉なのかはわからない。

でも、お婆ちゃんは旦那さんが怒っていると思っている。

約束を守らなかったので、夢枕に立ったのだと。

私は、驚かれるのを覚悟で、お婆ちゃんに声をかけた。

「旦那さんとの約束の事が気になるの、お婆ちゃん？」

お婆ちゃんは目を丸くして私を見た。

それはそうだろう。

初対面の人間にそんな事を言われたら、私だって驚く。

「どうしてそれを？」

私は事情を説明した。怒られるかも知れないと思ったけど、力になりたかったから。

「そう。そんな事ができるの。私もほしいねえ、その力」

お婆ちゃんは弱弱しく微笑んでそう言った。

「お爺ちゃんの本当の気持ちを知りたいと思わない、お婆ちゃん？お節介かも知れないけど、その方がいいと思うの」

私は一息で言い切った。お婆ちゃんは一瞬呆気にとられた顔をしたが、

「そうね。お爺さんの気持ち、聞いてみたいね」

と言ってくれた。

「ありがとう、お婆ちゃん」

私はおばあちゃんについて、病院に行った。

そこは、以前同級生の岡本まり子さんが入院していたG大付属病院だった。

まり子さんはあれから間もなく容態が急変して、短い生涯を終えた。

お通夜もお葬式も出席したけど、悲し過ぎてほとんど覚えていない。

親友の近藤明菜も、肉屋の力丸卓司君も泣いていた。

ああ、また涙が出て来た。

「どうしたの、お嬢さん？」

お婆ちゃんが私の異変に気づいて声をかけてくれた。

「ごめんなさい、何でもない」

私は微笑んで誤魔化した。

旦那さんが入院しているのは、まり子さんとは違う病棟だった。

ナースセンターを通り過ぎる時、妙な感覚に襲われた。

ふと看護師さん達の方を見ると、老人の霊が立っている。

しかも、生霊だ。

老人の霊は、お婆ちゃんに気づき、驚いた顔をしてナースセンターから病室の方へと飛んで行った。

どうやら、その人がお婆ちゃんの旦那さんのようだ。

霊体は元気そうだな。っていうか、ナースセンターで何してたのよ？

私達は病室に入った。そこは個室で、ベッドに寝かされている人は、さっき見かけたお爺さんだった。

酸素吸入をされていて、いくつもの管が腕や脚に取り付けられている。

私は、ベッドの脇で自分の様子を見ている旦那さんに声をかけた。

「本当の気持ちを教えてくれない、お爺ちゃん？」

旦那さんはビックリして、私を見た。

お婆ちゃんも私が誰もいない空間に向かって話しているので、仰天している。

「わしが見えるのか、嬢ちゃん？」

「ええ。普通の人と同じくらいはっきりとね」

旦那さんは苦笑いした。

「じゃあ、さっき、ナースセンターにいたのも？」

「ええ、もちろん」

「婆さんには内緒にしてくれ」

旦那さんは手を合わせて懇願した。私はクスッと笑い、

「はいはい。それより、お婆ちゃんが気にしている事なんだけど？」

すると旦那さんは頭を掻いて、

「婆さんには、大見得を切って、治療するななんて言ったけど、本当は感謝してるんだよ。だから、無理するなって言いに行ったんだが、婆さんには聞こえなかったみたいだな」

「じゃあ、構わないのね、今のままで？」

「ああ、もちろん。わしも頑張るから、と伝えてくれ。ありがとな、嬢ちゃん」

「うん」

私はいつの間にか泣いていた。

旦那さんの気持ちが良くわかって、感動したのだ。

「あの……」

私が突然泣き出したので、お婆ちゃんが驚いて声をかけた。

「あ、ごめんなさい、お婆ちゃん。お爺ちゃんと話をしました。感謝してるって。わしも頑張るからって言ってました」

「そう」

お婆ちゃんの目に涙が浮かぶ。

「ありがとう、お嬢さん」

「どういたしまして」

私達は涙を拭いながら微笑み合った。

私が感動している頃、江原ッチは必死になって私の携帯にメールしていたが、病院にいた私の携帯は電源オフだった。

ごめんね、江原ッチ。

今日は気持ちのいい日の、まどかだった。

バレンタインデーイヴは大騒ぎなのよ！

私は箕輪まどか。中学生にして、霊能者。

そんな特殊能力を持つ私も、恋する乙女。

今日はバレンタインデー前日。

私の絶対彼氏の江原耕司君のために手作りチョコを作るのだ。

お父さんには、コンビニの百円チョコでいいとして。

え？　可哀想？　そんな事ないでしょ、全然。

同級生の女子で、父親にチョコ上げる子、ほとんどいないんだから。

取り敢えず、江原ッチにチョコの好みを聞こうと思い、メールした。

するとすぐに江原ッチから電話。

もう、そんなに私の声が聞きたいの？

「まどかりん、ウチに来てよ。瑠希弥（るきや）さんが大変なんだ」

「え？」

瑠希弥さんが大変？　私は仰天し、

「すぐ行く！」

と返事をして携帯を切り、家を飛び出して自転車に飛び乗った。

こんな事もあろうかと、今日はジーパンなのだ。

パンチラはないので、ご心配なく。

「瑠希弥さん！」

私は江原ッチの邸に着くと、自転車から飛び降りるようにして、玄関へと走った。

「ああ、まどかさん、ごめんなさい、呼んでしまって」

すると奥から、チョコ塗れの瑠希弥さんが現れた。

「え？」

私は呆然としてしまった。

落ち着いてから話を聞いたら、瑠希弥さんが手作りチョコを作っているらしい。

そして、それを知った江原ッチが、私も一緒に作ると二度美味しいと考えたらしいのだ。

「江原耕司君、後でお話があります」

私は冷めた目で江原ッチに言った。

「ひいい、まどかりん、怒らないでえ」

江原ッチは涙ぐんで土下座した。

「お世話になっている皆さんにチョコをお渡ししたいんです。手伝って下さい、まどかさん」

瑠希弥さんに笑顔で言われると、何も言えない。

「はい」

同意するしかない私は、苦笑いして応じた。瑠希弥さんは先にキッチンに行った。

「そう言えば、冬子さんは？」

私は気になって尋ねた。すると江原ッチが、

「冬子さんはオヤジと出かけたよ」

「え？」

思わずいけない想像をしてしまう私だったが、そんな事はあり得ない。

「オヤジのお師匠様に当たる人のところに行ったんだ。冬子さんには、妙な霊がついているらしくて」

「そうなんだ」

危ない、危ない。NGワードを言いそうだったわ。

「その霊を祓えば、冬子さんも力を失う代わりに、普通の生活ができるらしいよ」

心なしか寂しそうな江原ッチ。こいつ、そこなしの女好きだな。

エロ兄貴といい勝負だ。

「そう言えば、お母さんは？」

「ああ、お袋も、占い師の会合で出かけてるんだ」

江原ッチの言葉に、私はビクッとした。

「って事は、さっきまで江原ッチは、瑠希弥さんと二人きり？」

私が鬼の形相で尋ねると、江原ッチは涙目で、

「妹の靖子もいるけど、今日はそれどころじゃなかったんだよ」

「どういう事？」

毎年、江原ッチは、バレンタインデー近くになると、同級生や下級生、果ては女子高生に至るまで、あらゆる人達につきまとわれるのだそうだ。

妹の靖子ちゃんも、お兄さん宛の手紙やプレゼントを頼まれて、迷惑しているらしい。

うーむ。私のエロ兄貴の中学時代と同じだ。

しかも、江原ッチは霊能力があるため、生霊までまとわりついて来るようだ。

「今年は、まどかりんの存在を知って、近づくのを止めた人達がたくさんいて、少なくなってはいるんだけどね」

何か、嫌だな、それ。私が怖がられているみたいで。

「そのせいなのか、逆に生霊が去年より多いんだよ」

「ふーん」

私はその言葉を信じていない。

何故なら、今近寄り始めている生霊の皆さんは、瑠希弥さんに敵意剥き出しだからだ。

「そういう事？　私は瑠希弥さんの弾除けなのね？」

白い目で江原ッチを見る。

「ち、違うんだよ、まどかりん！　誤解だよお」
また涙ぐむ江原ッチ。まあ、いいか。
「じゃあ、生霊の皆さんに嫉妬させればいいのね」
「へ？」
私の言葉に、江原ッチはキョトンとした。
「あ」
今日はまだイヴだけど、特別。
私は江原ッチにキスした。
ほっぺじゃないわよ。唇によ！
きゃああ！
途端に生霊の皆さんが、私に壮絶な敵意を向けて来た。
ザワザワとたくさん集まり始めている。
何だか、凄い人数なんですけど？
これももしかして、「瑠希弥さん効果」なの？
「ごめんなさいね、皆さん。でも、迷惑だから、お帰り下さいね！」

摩利支天の真言を唱える。

「オンマリシエイソワカ」

バシンという音がして、生霊の皆さんが弾け飛ぶ。

辺りは一瞬にして、鎮まった。

「任務完了」

私は微笑んで江原ッチを見た。

すると江原ッチは鼻血を垂らしていた。

「江原ッチ？」

私は微動だにしない江原ッチに声をかけた。

「まどかりん！」

いきなり我に返った江原ッチに抱きしめられた。

「わわ！」

今度は私が動けなくなる。

「大好きだよ、まどかりん。やっぱりまどかりんが最高だ」

耳元で囁かれ、私は失神しそうになった。

しばらくして、靖子ちゃんも加わって、チョコ作りを開始。

瑠希弥さんの腕前は、一流のパティシエもびっくりだ。

私と靖子ちゃんは、自分のチョコの出来が恥ずかしくなってしまった。

「うわあ！」

キッチンのテーブルに着き、私と瑠希弥さんと靖子ちゃんからチョコをもらった江原ッチは、感動していた。

「いただきます」

私は見逃さなかった。

江原ッチが、一瞬、瑠希弥さんのチョコに手を伸ばしかけて、慌てて私のチョコを手に取ったのを。

「えへへ、間違えちゃった」

見え透いた嘘を吐き、頭を掻く江原ッチを、それでもやっぱり好きだと思う。

私と靖子ちゃんは、瑠希弥さんのチョコを頂いた。

うまい！　美味過ぎる！　鎧塚さんもビックリだ。

「美味しい、瑠希弥さん！」

私と靖子ちゃんは、口を揃えて絶賛した。

「ありがとう」

瑠希弥さんは本当に嬉しそうに微笑んだ。

親友の近藤明菜を誘ってみたが、明菜の奴、彼氏の美輪幸治君とどこかにイヴデートに出かけてるみたいで、

「今は行けない」

と言われた。追及したいところだが、それは野暮なのでやめにした。

そして江原ッチは、チョコの食べ過ぎなのか、本日二度目の鼻血。

「お兄ちゃん、汚い！」

靖子ちゃんが軽蔑する。瑠希弥さんが慌ててティッシュを取りに走る。

「何想像してるのよ？」

私はポケットからハンカチを取り出し、鼻血を拭った。

「ああ、まどかお姉さん、勿体ない！」

靖子ちゃんが驚いた。瑠希弥さんはボックスティッシュを持ったまま、微笑んでいる。

「ありがとう、まどかりん」

江原ッチは恥ずかしそうに言った。

「どういたしまして」

私も照れ臭くなって言った。

今日は幸せな気分のまどかだった。

ロリコン伯爵に会ったのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。ついでに美少女ね。

……。

何なのよ、本当に！　何か私に恨みでもあるの？

え？　恨みしかない？　酷い……。

そんな事で、今日は大雪注意報が出ているG県南部。

私の住むM市も、積雪が五センチを超えると予報で言っていた。

雪は嫌いじゃないけど、すべるから嫌なのよね。

え？　今の時期、すべるとか言うなって？

ああ、受験シーズンだからね。

でも、言われなくても、すべる人はすべるんだから、気にしても仕方ないわよ。

え？　酷過ぎるって？　まあ、スルーしてよ。

ところでスルーって何？

今度こそ本題ね。

大雪は私達の登下校を直撃し、私は慎重に歩を進め、家に帰った。

バレンタインイヴを美輪君と過ごした親友の近藤明菜は、雪のせいで体調を崩し、寝込んでしまったようだ。

先生から渡されたプリントを届けるため、私は苦労して明菜の家に向かう。

舗道は車が跳ねた汚い雪と、道路伝いの家が集めた山のような雪で狭くなっている。

車の跳ねる雪を避けようとすると、屋根から落ちて来る雪が傘を揺らす。

「もう！」

私はついイラッとして叫んだ。

「おうおう、まーどかちゃんじゃないか」

その時、一番会いたくない人の声が聞こえた。

G県警鑑識課最古参の宮川さんだ。ロリコン伯爵である。

「こ、こんにちは」

私は震えながら宮川さんを見た。

「相変わらず、可愛いなあ、まーどかちゃんは」

鑑識の制服を着た宮川さんは大きな傘を差して、笑顔全開だ。怖過ぎる。

あれ？　宮川さん、花束を持っている。

「お、これか？　残念だけど、まーどかちゃんにあげるために買ったんじゃないんだ。また後でね」

宮川さんは、私が花束を見たのを勘違いしてそんな事を言い出した。

「いえ、別にいいです」

私は作り笑いをして応じた。貴方からの花束なんて、未来永劫結構ですから。そう言いたかった。

あれ？　その花束、何だか……？

ウソ……。宮川さんて、離婚してるんだ。

知らなかった。っていうか、結婚してたんだ。

手に持っている花束は、亡くなった娘さんのお墓に供えるために買ったものだ。

娘さんもいたんだ。更に驚きだ。

「お墓参りですか？」

私は探るような目で尋ねる。すると宮川さんは見た事がない顔になった。悲しそうだ。

「そうだよ。娘の墓参り。女房と離婚してから、娘が病気になってさ」

「そうなんでありますか」

NGワードを避けるためとはいえ、酷く場違いな言い回しをしてしまった。

「ずっと知らせてもらえなかったんだよ。やっと知らせが来た時は、葬儀も終わってからだった」

宮川さん、可哀想。奥さんのご両親が、宮川さんを嫌っているのだ。いや、憎んでいる。

駆け落ち同然に、大学生の時結婚したのだ。

ご両親は、その時すでに妊娠していた奥さんとお腹の中の娘さんのために入籍は認めたけど、結婚式は挙げさせなかった。

「娘のお墓がある場所も、知り合いの葬儀屋が教えてくれたので、何とかわかったんだ。でなきゃ、未だに墓参りもできなかった」

宮川さんは涙ぐみながら、歩き出した。あれ？　これは一緒に行くしかない展開？

「昼夜別なく仕事に出る酷い夫だったからね。離婚は仕方なかった。言われるままに応じたよ。でも、慰謝料はいらないから、娘に会わないでくれという条件は、本当に辛かった」

私は何も言えなかった。いつも能天気な宮川さんからは全く感じられない話だったので。

娘さんが亡くなったのは、三年前。小学校五年生だった。

あれ？　私と同じ学年？

「ここだよ。やっと娘に謝れる」

宮川さんは、あるお寺の脇にある墓地に入って行く。私も後に続いた。

「あ」

墓地の先に女の子の霊が立っている。

宮川さんの娘さんだ。

彼女は、私に見えている事を悟ったのか、お辞儀をした。

「娘さんがいますよ、宮川さん」

私が言うと、宮川さんはハッとして、

「見えるのかい、まどかちゃん？」

何だ、宮川さん、「まどかちゃん」て言えるの？

今度からは普通に呼んでよね。

「ええ。お墓の前で待ってますよ」

宮川さんは、傘を投げ出し、雪塗れになりながら、走った。

私も歩を早める。

「お父さん、ごめんなさい。お祖父ちゃんとお婆ちゃんとお母さんを許してね」

娘さんの名前は、円（まどか）さん。そうか、そうだったのか。

「円……」

宮川さんは、お墓の前で泣き崩れた。宮川さんの制服に雪が降り積もる。

「宮川さん、円さんが、お祖父ちゃんとお婆ちゃんとお母さんを許してって言ってます」

私は円さんの言葉を伝えた。宮川さんは涙でグチャグチャな顔を私に向けた。そして、お墓に向き直り、

「許すも許さないもないよ、円。お父さんが全部悪いんだから。お前にまで心配かけて、本当に悪いお父さんだな」

宮川さんはまた泣き崩れた。円さんも泣いている。

「お父さん」

すがりつきたくてもそれができない円さんは、号泣する宮川さんを見つめる事しかできない。

「円さん、私の身体を貸すわ」

「え？」

円さんはキョトンとした。私は微笑んで頷く。

「ありがとう、まどかさん」

円さんは私が同じ「まどか」だと知り、私の身体に入って来た。

「お父さん、ありがとう。そして、ごめんなさい」

円さんは何年かぶりに父親の背中に抱きついた。

「円……」

宮川さんは顔を上げて私を見た。今の私は、円さんに見えているはずだ。

「まどかあ！」

宮川さんが円さんを抱きしめた。

「お父さん！」

二人はしばらく抱き合ったまま泣いた。

雪も小降りになった頃、お別れの時が来た。

「お父さん、ありがとう。私、行くね」

円さんが言う。

「ああ。また会えるかな？」

「もちろん。また会えるわ」

円さんが私から離れる。

「さようなら、お父さん。いつか、お母さんと仲直りしてね」

「ああ、頑張るよ」

宮川さんはまた涙ぐんでいる。

円さんは光に包まれ、天に上がって行った。

「円……」

宮川さんは、見えてはいないのだろうけど、ずっと空を見ていた。

「ありがとう、まどかちゃん。本当にありがとう」

宮川さんが私を見て言った。私は照れ臭くなった。

「大した事じゃないですよ」

宮川さんの事が好きになれそうだ。

本当はロリコンじゃなかったのかも知れない。

「また、円と会わせてくれるかな？」

心なしか、顔を赤らめた宮川さん。

「ええ、いいですよ」

私は笑顔全開で応じた。

「このままデートに行こうか、まーどかちゃん」

「嫌です」

やっぱりロリコン伯爵なの？　照れ隠し？

そして、明菜の所に行った後、身体が冷え切って、寝込んでしまったまどかだった。

人生最大の驚きなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。どちらかと言うと、美少女である。

相変わらず、何だかよくわからない自己紹介をさせるわね。

もう、いいけどね。

今日は日曜日。

普通なら、絶対彼氏の江原耕司君とデートなのだが、今日はまたエロ兄貴のせいで事件の捜査に協力している。

今私がいるのは、スキー場。G県北部にある角沼高原スキー場だ。

でも私は学校の制服を着て、マフラーを巻き、毛糸の手袋を着けている。

要するに、スキーをする格好はしていないという事だ。

殺人事件が、ゲレンデで起こったのだ。

「寒いよ、お兄ちゃん。早く終わりにしたいよ」

私は足をガクガクさせながら、兄貴に抗議する。

「だったら、サッサと霊視しろ」

そんな事を言っている兄貴は、G県警支給の厚手のコートを着ている。

恋人の里見まゆ子さんも、申し訳なさそうな顔をしているが、しっかり完全防備だ。

扱いが酷過ぎる。私に凍死しろというのだろうか？

今日のご褒美は、力丸ミートのコロッケでは許さない。

ラーソンのプレミアム生チョコケーキを三つ。

それ未満は断固拒否だ。

次回の依頼もボイコットだ。

ところで、ボイコットって何？

周囲を見渡す。今日は捜査のため、スキー場は休業だ。

でなければ、私は悲し過ぎて霊視などできない。

だってそうでしょ？

何が悲しくて、カップル達が楽しそうにスキーをしている横で、震えながら霊視しなきゃならないのよ？

それも、そういう連中のために！

今回の霊視場所は、リフト付近。

あまりにも落下事故が続くので、地元の警察が調査に乗り出したのだ。

しかし、機械には何の不具合もなく、原因は不明。

その上、調査をしている最中に、突然リフトが動き出したり、誰もいない機械室から笑い声が聞こえたりしたらしい。

そこで、この私に白羽の矢が立ったのだ。

で、白羽の矢って何？

どうして私一人なのかと言うと、エロ兄貴の陰謀なのだ。

江原ッチには、別の捜査に協力させるという、何ともえげつない妨害工作だった。

更に、兄貴もしてやられていた。

まゆ子さんが、江原ッチのお母さんの菜摘さんに連絡し、小松崎（こまつざき）瑠希弥（るきや）さんを同行させないように手を回したのだ。

恐るべし、嫉妬ブロック。

兄貴は江原ッチがまゆ子さんを落とすかもと警戒し、まゆ子さん

は、瑠希弥さんが兄貴を誑(たぶら)かすと思ったようだ。

二人共、心が狭過ぎる。

え？　お前にだけは言われたくない？　うううう……。反論できない……。

「何もいないよ、お兄ちゃん」

私は身体を震わせながら言った。

「そんなはずはない。よく探せ、かまど。見つけるまで帰れないぞ」

兄貴は瑠希弥さんが来なかったので、酷く苛ついている。

「そんな事言われても、いないものはいないのよ」

私は、少しでも温かくなるように大声を張り上げた。

「よし、わかった。お前では無理のようだ。瑠希弥さんに頼もう」

それが言いたかったんかい！

するとまゆ子さんが動いた。

「まどかちゃん、寒いから見えないのね。はい、温まるわよ」

まゆ子さんは熱い甘酒を持って来てくれた。

「ありがとうございます」

私はそれを受け取り、冷えきった手を温める。

そして次にそっと唇をカップの縁に近づけ、ゆっくりと飲む。

ああ。温まる。こんなに美味しい甘酒は久しぶりだ。

すると、不思議な事に霊視能力がアップしたような気がした。

「お！」

もう一度見上げると、リフトの支柱に妙なオヤジの霊が取り憑いているのが見えた。

どうやら、リフトから落下してお亡くなりになった方のようだ。

「そんな所で何してるの、オジさん？」

私はオヤジの霊に話しかけた。

「え？　俺が見えるのか、嬢ちゃん？」

何だか懐かしいやり取りのような気がする。

「オジさん、そんなとこで悪戯しちゃダメよ。降りて来なさいよ」

するとオヤジは私を睨んで、

「俺は、スキー場の連中の機械の操作ミスで落ちて死んだのに、泥酔しているのを押し切って無理矢理乗った結果、落下した事にされ

たんだ。許せないんだよ、このスキー場が！」

「ええ？」

意外な真相だ。オヤジは嘘を言っていない。

確かにその通りなのだ。

「わかった。それは私が何とかするから、もう行くべき所に行って」

「わかったよ。嬢ちゃんを信じるよ」

オヤジは私の可愛さに免じて、折れてくれたようだ。

え？　嘘を吐くな？　何がよ？

私は、兄貴達にオヤジから聞いた事を話した。

しかし、その件は、オヤジの遺族が示談をしてしまっていて、ひっくり返すのは難しいらしい。

「刑事事件ではないから、スキー場に対して警察が介入するには無理だな。示談前なら何とかなったかも知れないが」

いつになく真剣な表情で語る兄貴を見て、私は自分の無力を知った。

オヤジ、ごめん、ダメだった。

私は心の中で詫びた。

「嬢ちゃん、いいよ。ありがとう。嬢ちゃんに話を聞いてもらえて、気持ちがスッとしたよ」

オヤジの声がした。

「うん」

私も嬉しくなった。

只、このまま帰るのはあまりにも癪だったので、私はスキー場の人達を集めてもらい、オヤジの無念を話し、事故現場にせめて手を合わせてくれるように頼んだ。

私の願いをスキー場の人達が聞き届けてくれたのかは知らない。

こうして、取り敢えず事件は解決したので、私は帰りの車中でおねだりタイムを敢行した。

「ラーソンのプレミアム生チョコケーキを三つ」

「却下」

兄貴は即答した。

「お前は事件を解決していない。その上、スキー場の皆さんに恐怖心を植えつけた」

「何でよお」

兄貴は非情だった。今度から、「天知茂」と呼んでやる！

ところで、天知茂って誰？　本日三度目の質問だ。

そんな不毛な兄妹（きょうだい）の言い争いを繰り広げているうちに、車はM市に戻って来た。

「あれ？」

私は、舗道を歩く江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんを見かけた。

その隣には、見た事もない美人が歩いている。

全身黒の服で決めている大人の女性だ。誰だろう？　まさか、不倫？

「お兄ちゃん、江原ッチのお父さんよ」

私の声に兄貴は素早く反応し、

「里見さん、車止めて」

と言い、停まると同時に飛び降りた。

どこまで太鼓持ち体質なんだ、あの兄貴は？

「お久しぶりです、江原先生」

兄貴は揉み手をしながら雅功さんに声をかける。

「おお、これはこれは、まどかさんのお兄さん」

雅功さんも笑顔で応じた。私も素早く駆け寄った。

私達の軽いフットワークを、まゆ子さんは運転席から唖然として眺めている。

「こんにちは」

私も雅功さんに挨拶した。

「あら、慶君にまどかちゃん。こんにちは」

女性が言った。その声に私と兄貴は硬直した。

それは、紛れもなく、小倉冬子さんの声だったのだ。

「えええ!?」

私と兄貴は、冬子さんのあまりの変わりように仰天した。

落ち着いてから聞いたのだが、冬子さんに憑いていた悪い霊が祓われ、冬子さんは普通の人になったようだ。

そのおかげで、乏しかった表情が豊かになり、元々綺麗だった顔に戻ったのだという。

「良かったですね、冬子さん」

私が言うと、冬子さんは照れ臭そうに笑った。

兄貴は複雑な表情をしていたが、確実に兄貴の中の冬子さんの地位が赤丸急上昇なのは間違いない。

そして、まゆ子さんが嫉妬の炎を燃やしているのをその時私は感じる事ができなかった。

兄貴、危うしかも。

今日は、良かった事と怖い事があったまどかだった。

またあいつらが動き出したのよ！

私は箕輪まどか。中学生ながら、霊能力で殺人事件の捜査の手伝いをしている。

おお。久しぶりに自己紹介が様になったわね。

てな訳で、自己紹介通り、私は殺人事件の捜査協力のため、エロ兄貴と里見まゆ子さんと共に現場に行った。

私の住んでいるG県M市は、たびたび紹介している通り、空っ風が吹きすさぶところだ。

昨日も、

「台風？」

というくらいの強風が吹き荒れた。

「ああ、昨日のは春一番よ」

運転中のまゆ子さんが教えてくれた。

え？　そうなの？

「相変わらず、バカだな、かまど」

助手席のエロ兄貴がヘラヘラ笑いながら言う。

「瑠希弥(るきや)さんとメールしてる人に言われたくない」

私の言葉に兄貴は蒼ざめ、まゆ子さんは兄貴を睨みつける。

やば。まゆ子さんがいるのに、いつものノリで言ってしまったわ。

「あはは、何言ってるのかな、まどか。お前は本当に可愛い妹だなあ」

兄貴の棒読みの賛辞に、私は背筋をゾッとさせた。

「慶一郎さん、後でお話があります」

「はい」

まゆ子さんが「慶一郎さん」と呼ぶ時は、強烈に怒っている時だ。

哀れな兄貴。

そして、現場に到着。G県の三山の一つ、H山に行く途中の急カーブの一角。

やや広い空き地のような所があり、トラックドライバーなどの休憩所になっている。

当然の事ながら、本日は誰も休憩している人はもいない。

すでに他の鑑識の人や、捜査一課の刑事さん、所轄の方々もいらしていた。

「おお、まーどかちゃん、待ってたよ」

宮川さんまでいた。

この前、宮川さんの別の一面を知り、少しは気を許せるかなと思ってはいるのだけど。

「被害者は、若い女性と思われますが、身元を示すものが何もありません。犯人が持ち去ったか、どこかに遺棄したものと思われます」

若い刑事さんが、現場を見に来ている捜査一課の課長さんに説明している。

「おう、箕輪。妹さんを連れて来てくれたか」

課長さんが私達に気づき、近づいて来た。

「よろしくお願いします」

私は笑顔で挨拶した。課長さんもニコッとして、

「じゃあ、頼みますよ」

「はい」

兄貴とまゆ子さんに伴われて、私は遺体が発見された場所に近づ

いた。

「あれ？」

発見場所には、殺された女性の気配は残っているけど、霊がいない。

「殺人現場はここじゃないわ、お兄ちゃん」

私は兄貴を見上げて言った。そこにいた全員が私を見る。

い！　注目され過ぎ。

「おおう、さーすが、まーどかちゃん。そんな事がわかっちゃうんだあ」

宮川さんが嬉しそうに近づいて来る。

刑事さん達はジッと私を見ている。

「あああ！」

私は霊視を広げていって、恐ろしい事に気づいた。

サヨカ会。あいつらが関わっている。

サヨカ会自体は、何かの法律で解体させられたらしい。

でも、残党は時々活動している。

女性はサヨカ会のG県本部があったM市のビルの一室に監禁され、この辺りに生息している植物の種を服のポケットに入れられたり、付近にある川の水を飲まされたりした挙げ句、殺された。

そして、ここまで運んで来られたのだ。

「どうした、まどか？　何が見えたんだ？」

兄貴の問いかけに我に返った私は、見た事、感じた事を説明した。

サヨカ会の名前が出ると、刑事さん達がどよめいた。

「被害者の女性は、サヨカ会の信者だった人です。昨年、会が解体され、幹部達が逮捕されたりしましたが、宗主だった鴻池大仙氏の子供は、うまく捜査の目を逃れ、今でも何人かの人間と共にどこかに潜伏しています」

私の説明に、課長さんは腕組みして考え込む。

「そいつの居場所はわからないのか？」

兄貴が当然の質問をする。

「わからないわ。付き従っているのが陰陽師で、結界を張っているの。私には見えないわ」

「そうか。ならば、瑠希弥さんに応援を要請……」

兄貴がそこまで妄想を繰り広げると、

「江原耕司君のご一家に協力を要請しましょう」

まゆ子さんが兄貴を押しのけて、課長さんに言った。

「そうだな。まどかさん、頼みますよ」

「はい」

江原ッチを公然と呼べるので、私はつい嬉しくなってしまった。

江原ッチに電話をすると、そばで聞いていた江原ッチのお父さんの雅功(まさとし)さんが電話を代わり、

「まどかさん、現場の風景を念で送ってみて下さい」

ととっても難しい事を言って来た。

「わかりました」

私は意を決して、目の前の風景を念じた。

「ありがとう、まどかさん。お陰で実行犯達が誰なのかわかりました。課長さんと代わって下さい」

「はい」

私は携帯を課長さんに渡した。

いい大人が、私の携帯で真剣な話をしていると笑いそうになる。

携帯ストラップがたくさんついていて、派手派手なのだ。

「はい、まどかさん」

課長さんは話を終え、私に携帯を返してくれた。

「まどかさん、成長してますね。さっきの念の送信、耕司にはまだできませんよ」

雅功さんが褒めてくれた。電話の向こうで、「それは言わないでよお」と叫ぶ江原ッチの声がした。

「そうなんですか」

褒められて気が緩んだせいで、うっかりＮＧワードを言ってしまった。

雅功さんの霊視で判明した建物に警察が乗り込み、実行犯は逮捕されたが、そこまでだった。

実行犯達は、黒幕の事を何も知らないのだ。

金で雇われた元暴力団の構成員だった。

私は、現場から家に帰ると、すぐに江原ッチの家に行った。

「サヨカ会、潰したつもりでしたが、息を吹き返しているようですね」

雅功さんが言った。

「全く彼等の気配が感じられなかったのは何故でしょうか？」

瑠希弥さんが言った。そうなのだ。私はともかく、雅功さんや菜摘さん、瑠希弥さんに気づかれないなんて。

「もしかすると、大仙が持っていた術具は、あの独鈷だけではなかったのかも知れません」

菜摘さんが水晶を見ながら言います。

私は思わず江原ッチと顔を見合わせてしまった。

「とにかく、警戒するしかありません。耕司は、まどかさんを何があっても守りなさい」

雅功さんが言ってくれた。嬉しいです、未来のお義父(とう)さん。

「もちろんだよ」

江原ッチが私を優しい目で見て言う。私も江原ッチを見上げる。

不安だけど、絶対に負けないと誓うまどかだった。

ちょっと新展開なのよ！

私は箕輪まどか。中学生で霊能力もある、ちょっとした美少女だ。

はあ？　何よ、「ちょっとした美少女」って？　意味わかんないんですけど？

先日、サヨカ会の残党が起こした事件で、また一気に緊迫した感じだったが、数日何もないと少し安心する。

いよいよ三年生達は高校受験だ。皆、顔つきが違っている気がする。

エロ兄貴は、成績も優秀だったので、塾にも行かなかったし、私の記憶が正しければ、試験の前日も遊び呆けていたはず。

それで志望校に行ってしまうのだから、本当に申し訳ないほど世間を舐めている男だ。

一度くらい挫折を味わった方が、人生経験になると思う。

でなければ、世の中間違っている。

「また明日ね」

私は親友の近藤明菜と校門の前で別れ、いつものように私の絶対彼氏の江原耕司君が待ついつものコンビニへと向かう。

その時だった。

「一年の、箕輪まどかさんだよね？」

不意に私の目の前に前生徒会長の原西誠司（はらにしせいじ）さんが現れた。

学校一のイケメンで、常に成績トップの人だ。でも、何故か誰とも付き合っていないのだ。

一時は、「あっちの方？」と噂をされたらしい。

で、あっちってどっち？

周囲の女子達が、私に対して「これでもか！」というくらいの敵意と嫉妬の感情をぶつけて来た。

心配しなくても、そんな話じゃないわよ、皆さん。

原西さんだって、私が江原ッチと付き合っているのは知ってるんだから。

「何でしょうか、原西さん？」

私はあのメイドに負けないくらいの笑顔で尋ねた。

すると原西さんは、東幹久も逃げ出すような白い歯を見せて微笑み、

「前から好きでした。付き合って下さい」

と言った。

周囲にいた女子達の嫉妬が殺気に変わるのがわかる。

何だか、野次馬がたくさん集まり始めた。

「ごめんなさい、原西さん。私、付き合ってる人がいるんです」

「知ってます。それを承知で告白してるんです。それだけ真剣なんです」

原西さんは、こんな事を冗談で言うような性格ではない。

とにかく真面目で、女子のプレゼントには全部お礼状を付けてお返しをする紳士である。

江原ッチに出会っていなかったら、交際をＯＫしていたかも知れないのだ。

「でも……」

私は困ってしまった。

こんなにモテる人からの告白なんてされた事ないし、こんなに注目された事もない。

「返事は今でなくてもいいです」

原西さんは爽やかな笑顔で立ち去った。決して「俺やで」とは言

わない。

途端に私は上級生の女子達に囲まれた。

「どういう事、箕輪さん？」

その中でも凄まじい形相だったのが、生徒会の副会長を務め、学校一の美人と言われている三年生の隅田真保（すみたまほ）さんだ。

隅田さんは常に成績で原西さんとトップを争う人で、原西さんと付き合っていると噂された事もある。

実際には付き合っていなかったのだが。

しかもその噂の震源地が、当の隅田さんらしいというのだから、怖い。

「どういう事もこういう事もないです。お聞きになった通りで、私はお断りしましたから」

私は隅田さんの迫力に圧倒され、後退りして答えた。

「断わるのは当然です。貴女には、原西君と付き合う資格などないのですから」

うわあ。何だ、この高飛車度は？　あの女医より凄いぞ。

「そうですね。では、そういう事で」

私はサッサとその場を逃走した。

「お待ちなさいよ、まだ話は終わっていないわ！」

更にヒートアップしている隅田さんのせいで、他の上級生達は白けてしまったようだ。

うざったいので、ちょっと脅かす事にした。

摩利支天の真言を唱える。

「オンマリシエイソワカ」

すると、バシュウッと何かが弾ける音がした。

「ヒン！」

隅田さんはピョンと跳ねて、倒れた。

「憑依現象？」

ちょっと驚いて隅田さんに駆け寄る。

あれ程いた野次馬と敵意の塊達は恐れをなして逃走した。

「まさか！？」

ほんの微かだが、隅田さんからサヨカ会の念を感じた。

「まどかりん！」

そこへ江原ッチが駆けつけてくれた。

「心配で来てみたんだ。何があったの？」

私は洗いざらい事情を説明した。

原西さんに告られたところで、江原ッチの顔が引きつったのがわかった。

「この人、サヨカ会に入っていたのかな？」

江原ッチは気を失っている隅田さんを嬉しそうに見ている。

「江原耕司君、何、その顔？」

私は江原ッチの背後に立ち、言った。

「わああ、誤解だよ、まどかりん！　そんなつもりでは……」

ホント、こいつ、底なしの女好きかも。

江原ッチは、手回しの良い事に小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんに連絡していた。

瑠希弥さんは車で駆けつけてくれて、隅田さんを後部座席に乗せた。

「江原先生に診てもらいましょう」

「はい」

私は、江原ッチを置き去りにし、瑠希弥さんと共に江原ッチの家に向かった。

「まどかりーん、許してよお」

江原ッチが叫びながら、走って来る。

江原ッチの邸に到着すると、雅功(まさとし)さんが待っていて、すぐに道場に隅田さんを運んだ。

「この子は、何も知らないようです。完全に操られただけですね」

雅功さんのその言葉に、私はギクッとした。

「サヨカ会の残党が、すぐ近くまで来ているという事ですね」

小倉冬子さんが道場に入って来て言う。また奇麗になったみたいだ。

「何も覚えていないでしょうから、心配いりません。只、まどかさんは気をつけて下さい」

雅功さんが言った。

「俺、転校しようか、まどかりん?」

江原ッチが息を切らせながら言った。今着いたのね。

「私が、学校に入ります」

瑠希弥さんが言った。

「すぐに転校に手続きを……」

江原ッチは、誰のために転校するのかわからない笑顔で言う。バカめ！

「そうですね。まどかさんの学校には、教育委員会を通じて話をつけておきます」

完全に無視された形の江原ッチは項垂れている。

「そうなんですか」

ああ。雅功さんの言葉に驚いて、ＮＧワードを言ってしまった。

貴方は一体何者なんですか？

それにしても、新展開なまどかだった。

瑠希弥さんが学校に来たのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。ついでに言えば、美少女である。

ついで、ね。……。

先日、私は三年生の原西誠司さんにいきなり告白され、全校の女子達を敵に回しかけた。

原西さんは前生徒会長で、学年トップの成績を誇る超人気者なのだ。

しかも、原西さんは、私に彼がいるのを承知で告白していた。そして、

「返事は今でなくていいです」

などと言って立ち去った。危うく、

「付き合って下さい」

とどこかのアホ作者みたいに軽く落とされてしまいそうになった。

でも、そうはならないのが箕輪まどかである。えっへん！

私は、絶対彼氏の江原耕司君一筋なのだから。

え？　以前は牧野徹君と付き合っていたくせに、ですって？

細かい過去にはこだわらないでよね。

その私と原西さんの関係を特に快く思わなかったのが、三年生の隅田真保(すみたまほ)さん。

隅田さんは前生徒会副会長で、原西さんと付き合っていると自分で噂を流していたと言う噂の人だ。

何だかややこしい事になりそうだったが、隅田さんはサヨカ会の残党に操られていたのがわかった。

私の身を案じてくれた将来の義理のお父さんの江原雅功(えはらまさとし)さんが教育委員会に話をしてくれて、小松崎瑠希弥(こまつざきるきや)さんが学校に潜入する事になった。

「俺も転校したい」

江原ッチが小声でそう言ったのを私は聞き逃さず、

「後で話があります、江原耕司君」

と脅しのメールを送っておいた。

そして、瑠希弥さんが学校にやって来る日になった。

私と親友の近藤明菜はいつものように一緒に登校し、教室に向かおうとした。

「何、あれ？」

明菜が職員室の前に群がっている男子達に気づいた。

「ああ、気にしないで。バカ男子共だから」

私はそれを無視して階段を昇り始める。

そのバカ男子の先頭にいたのがあの力丸卓司君だった事は、彼の交際相手で江原ッチの妹さんの靖子ちゃんには内緒にしてあげよう。

「まどか、何か知ってるの？」

明菜が階段を駆け上がって、私に尋ねる。

「瑠希弥さんよ」

「え？」

これでは意味不明なので、私は明菜に事情を説明した。

「なるほどね」

明菜はあからさまに嫌な顔をした。

「それでわかった。美輪君が『今日のデート、アッキーナの学校でしようよ』って言って来た理由が」

あれま、明菜の彼の美輪幸治君まで、瑠希弥さんの事を知ってる

の。

江原ッチのお喋りめ、後でお仕置きね。

「美輪君、お仕置きしないとね」

明菜が憤然として言った。

明菜はネチネチと言葉で美輪君を責めるのだ。

関係ない私まで落ち込んでしまう程、明菜の言葉責めはきつい。

可哀想な美輪君。

そんなこんなで、一時間目が終了。

私と明菜がトイレに向かう途中、瑠希弥さんの声が聞こえた。

（まどかさん、職員室に来て下さい）

え？　何？　職員室に来て下さいは、生徒にはＮＧワードよ、瑠希弥さん。

「明菜、ちょっとごめん」

私はトイレを素早くすませ、職員室に走った。

「こらあ、廊下を走るな！」

体育の藤本先生が怒鳴った。

「ちょりーす」

ふざけてそう言うと、何故か嬉しそうな顔になるので、藤本先生は面白い。

「失礼します」

私は恐る恐るドアを開き、職員室に入った。

「まどかさん、こっちこっち」

紺のスーツに黒眼鏡と言う最強形態の瑠希弥さんが、某ＣＭのように職員室の端で呼ぶ。

設定では、事務員さんとの事だ。

私が姿を見せたので、瑠希弥さんに蠅のように纏(まと)わりついていた男の先生達がサッと逃げ出した。

奥さんに言いつけますよ、本当に。

「どうしたんですか、瑠希弥さん？」

私は時間を気にしながら尋ねた。

「江原先生の予想通り、この学校にサヨカ会の残党の気配があります」

瑠希弥さんが声をひそめて言う。

「え？」

私はギクッとした。

「人が集まる所にいれば、正体が発覚しにくいと判断したのでしょう。私にもどの人がそうなのか、わかりません」

「そう、ですか」

ああ、危ない。今回は絶対にＮＧワードは言わないぞ。

「但し、職員室にはいませんね」

「そうなのですね」

またもやギリセーフだ。職員室にいないとなると、生徒の中にいるのだろうか？

「しかも、一人なのか大勢なのかもわかりません。ですから、一人での行動は慎んで下さい」

「わかりました」

私は大きく頷き、チャイムが鳴ったので、職員室を出る。

「まどかさん、これを」

瑠希弥さんが数珠を渡してくれた。

「これは西園寺先生から頂いたものです。魔を退け、まどかさんの力を増幅してくれるはずです」

「あ、はい」

私は緊張してその数珠を受け取った。蘭子お姉さんの数珠か。心強いな。

私は職員室を後にして、廊下を走る。

「階段を駆け上がるのは危険だよ、箕輪さん」

偶然、原西さんと踊り場で会った。

「すみません」

私は原西さんの顔を見ないようにして頭を下げ、すれ違う。

「可愛いね、箕輪さんて」

その時、原西さんが囁いた。私は心臓が大きく鼓動するのを感じた。

何、今の？　私、原西さんに惹かれているの？

そのドキドキは、教室に戻っても収まらない。

顔が火照っているのがわかる。

私、どうしちゃったのかな？

自分の気持ちが理解できないまどかだった。

職員室でバトルなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。その上美少女と来たもんだ。

……。

虚しいわ、ホントに。まるで植木等さんでしょ、それじゃあ。

私は非常に心が揺れていた。

確かに、自分でも気が退けるほどの美しさだけど、それにしてもモテ過ぎだとは思う。

え？　血迷った事を言うな、ですって？　うるさいわね。

前生徒会長の原西誠司さんに、

「可愛いね、箕輪さんて」

と言わせてしまったのよ？　美しさは罪よね。

何て事を言っている場合ではない。

私は原西さんの様子がおかしいと思ったので、放課後、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんに会いに行った。

またしても瑠希弥さんは、エロ男性教師達（これは語弊がある？）

に囲まれていた。
さすがに亡くなった奥さんが自分を見ている事を知っている藤本先生はいなかったけど。
「瑠希弥さん」
私が近づくと、蜘蛛の子を散らすように解散するのが気に食わない。
私は簡単に瑠希弥さんに事情を説明した。
「そうなんですか」
わわっと！　いきなりＮＧワードからですか、瑠希弥さん。
油断してたので、直撃を受けてしまった。
「原西君のクラスを教えて下さい。透視してみます」
「はい」
すご！　瑠希弥さん、そんな事までできるんだ。
尊敬してしまう。
「三年五組です」
「ありがとう」

瑠希弥さんが目を瞑り、透視を始める。

職員室の先生で、男の先生はウットリして見ていて、女の先生方はムッとして見ている。

瑠希弥さんの気が集中し、原西さんを探り始めたのがわかった。

その時だった。

「うらあ！」

いきなり大柄な男が、職員室のドアを蹴破って入って来た。

水戸黄門で悪代官を演じそうな顔だ。

「我らの邪魔をするのは、お前か！？」

大男は私の前まで来て怒鳴った。

先生方は恐怖におののき、身動きが取れないようだ。

「待て！」

そこに颯爽と現れる原西さん。

ええ？　どういう事？

「とう！」

原西さんの正拳突きが大男の腹に決まった。

「ぐおお、やられた……」

大男は、今時流行らないわざとらしい口調で職員室から逃げて行った。

何なの、この茶番は？

「箕輪さん、怪我はない？」

原西さんが爽やかな笑顔で言った。

「はい」

私は警戒しながら答えた。

「もう大丈夫だよ、箕輪さん。さあ、僕が家まで送ってあげるよ」

原西さんはそう言うと私の肩を抱いた。

ギクッとした。

身体に力が入らない。何、これ？

「待ちなさい」

瑠希弥さんが言った。すると原西さんは、

「貴女ですね、僕の可愛いまどかさんを騙しているのは？」

と鋭い視線を瑠希弥さんに向ける。台詞は嬉しいけど、原西さんの身体からサヨカ会の気配がする。

「まだそんな事を言っているのですか？　もう貴方は逃げられませんよ」

瑠希弥さんが原西さんに近づく。

「それ以上近づくな。この女の命が惜しくないのか？」

原西さんはいつの間にか凶悪な顔になっていた。

でも私は動けない。決して落とされたからではない。

「まどかさん、摩利支天（まりしてん）の真言を！」

瑠希弥さんが叫ぶ。私は原西さんから放射される強い気に何とか抗いながら、

「オンマリシエイソワカ」

と唱えた。

「ぐわ！」

原西さんが苦しみながら、私から離れる。

「インダラヤソワカ」

瑠希弥さんが間髪入れずに帝釈天真言を唱えた。

「ぐげげ！」

原西さんは雷撃を受けて倒れた。

「キーッ！」

その時、原西さんの身体から逃げ去る霊が見えた。

「逃がしませんよ」

瑠希弥さんは数珠を取り出し、霊に投げつけた。

「ギギエーッ！」

霊は数珠に囲まれ、のた打ち回りながら、消滅した。

数珠は床に落ちた。

「悪霊を憑依させ、その人を意のままに操っていたのですね。さっきの大男は別の者に命じられて動いていたようです」

瑠希弥さんは数珠を拾いながら言った。

原西さんは保健室に運ばれ、意識を取り戻したが、ここ二、三日の記憶がないようだ。

つまり、私に告白したのは霊が操っていたからなのだ。

ちょっとだけ寂しいが、それは言わない事にする。

「一つ思い出した事があります」

原西さんは、自分をジッと見つめている瑠希弥さんに顔を赤らめながら告げた。

何だか、ムッとしてしまう。

「何ですか？」

瑠希弥さんが微笑む。ますます顔を赤らめる原西さん。

「大通りにあるゲームセンターの前である男の人に声をかけられてから、記憶がないんです」

「ゲームセンター、ですか」

瑠希弥さんは私を見た。私は小さく頷く。

私達は、次に校長室で待たせておいた前生徒会副会長の隅田真保（すみた まほ）さんに会った。

「私もゲームセンターの前で男の人に声をかけられてから、記憶がありません」

隅田さんも同じだった。

「ゲームセンターが鍵ですね」

瑠希弥さんが呟く。

そして私は私の彼氏の江原耕司君に連絡を取り、そのゲームセンターに向かった。

サヨカ会。一体何が目的なの？

ドキドキが止まらないまどかだった。

ゲームセンター捕物帖なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

今私は、私の師匠的存在の小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと共に、瑠希弥さんの車でM市の外れにあるゲームセンターに向かっている。

途中で、嬉しそうな顔で待っていた彼氏の江原耕司君を乗せるのをやめようかと思ったが、

「まどかりんの思い過ごしだよお」

と泣いて懇願したので、仕方なく後部座席に乗せてあげた。私の車じゃないんだけどね。

やがて私達は、とても同じM市内とは思えないくらい長閑な風景の広がる場所に来た。

辺りは見渡す限り田んぼと畑。

何となく、素晴らしい香りも漂って来る。

「ここね」

瑠希弥さんは颯爽と車を降りて言った。

私も助手席から降りて、ゲームセンターの建物を見上げる。

やかましいほどの宣伝文句に彩られた電飾看板を横目に見て、瑠希弥さんと私は中に進む。

「置いてかないでよお、まどかりーん」

情けない声を発しながら、江原ッチが駆けて来た。

ゲームセンターの中に入ると、そこには学校帰りの小中生、高校生、果てはスーツ姿のサラリーマンまでいる。

「どこかしら？」

瑠希弥さんが奥へと歩き出すと、辺りにいたスケベそうな男共が集まり始めた。

「よお、彼女お。俺達遊ばない？」

その中の一人が言う。すると瑠希弥さんはいきなり、

「インダラヤソワカ」

と帝釈天真言を放った。

「ぎええ！」

男共は雷撃で失神した。過激過ぎ、瑠希弥さん。

それを見て、同じ事を考えていたらしい連中が足を止めた。
うざい連中を一掃できて良かったのかな？
「まどかりんは俺が守るからね」
江原ッチが私の肩を抱いて言ってくれた。
「ありがとう」
私はキュンとして江原ッチを見上げる。
しかし、江原ッチは、瑠希弥さんを見てヘラヘラしていた。
「江原耕司君、後でお話しましょう」
私は絶対零度の冷たさで言った。
「ひいい！」
江原ッチは慌てて瑠希弥さんを見るのを止めた。
ホント、懲りない奴。
「あの向こう？」
瑠希弥さんは正面に見えるドアを見つめた。
私も感じる。ドアの向こうに誰かがいる。

しかも、相当強烈な霊力を持っている奴が。

「行っちゃいますよ！」

江原ッチがドアを蹴破った。

そのドアの向こうには大きな机があり、その更に向こうの革張りの椅子に黒いスーツの男が座っていた。

「ようこそ、サヨカ会G県本部へ」

男は言った。サヨカ会G県本部ですって？　どういう事？

「壊滅させたと思ったのかね、箕輪まどかさん？　それと小松崎瑠希弥さんだったかな？」

男はニヤリとして嬉しそうに言う。

「俺は江原耕司だ！」

名前を呼ばれなかった江原ッチがムッとして叫んだ。

「私は、鴻池仙一（こうのいせんいち）。大仙（だいせん）の息子だ」

私達は思わず顔を見合わせた。サヨカ会の宗主だった大仙の息子？

「父の敵である君達には、たっぷりと礼をしようと思っていた。よく来てくれたね、罠とも知らずに」

ギクッとして振り返ると、目も虚ろな連中が入口を塞ぐように集

まって来ていた。

「そう怖がる事はないよ。君達は囮(おとり)に過ぎない。西園寺蘭子をおびき出すためのね」

仙一はフッと笑って言った。寒気がする。

「何ですって！？」

瑠希弥さんの顔色が変わった。蘭子お姉さんの事になると、瑠希弥さんは感情が高ぶる。

「大人しくしてもらうよ」

仙一は内ポケットから鈴(りん)を取り出した。仏壇に必ず置かれている仏具だ。

「眠れ」

仙一が鈴を撥(ばち)で叩くと、気味の悪い音が鳴り響いた。

頭の中を蜂が飛んでいるようだ。

「うう……」

私達はなす術もなく、その場に倒れてしまった。

あれが、江原ッチのお父さんの雅功(まさとし)さんが言っていた、大仙が持っていた他の術具なのだろうか？

私の思考はそこで途切れた。

次に私が目を覚ましたのは、薄暗い部屋だった。

裸電球が一つだけ光っているのが見える。

私も瑠希弥さんも江原ッチも、手足を縛られ、猿轡(さるぐつわ)を噛まされている。

ふと見上げると、憎々しい顔で、仙一が私達を見下ろしていた。

「ここはゲームセンターの下に造らせた地下室だ。西園寺蘭子が現れるまで、君達にはここで過ごしてもらう」

私と瑠希弥さんは、仙一を睨んだ。

江原ッチはモゾモゾしていて、背中を向けている。

この緊急時に何してるのよ!?

「では、また後でな」

仙一はニヤリとし、地下室を出て行ってしまった。

どうしよう?

絶体絶命のまどかだった。

まどか危機一髪なのよ！

私は箕輪まどか。

鴻池大仙（こうのいけだいせん）が当主だったサヨカ会。

その残党が動いているのを知った私達は、噂のゲームセンターに行った。

しかし、それは連中の罠で、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと私、そして私の絶対彼氏の江原耕司君も囚われの身となってしまった。

江原ッチは私達に背を向けたままで、モゾモゾと動いている。

まさか、この緊急時に！

私は顔から火が出そうになった。

そんな奴だったなんて！

許せない。

でも、どうすれば？

私は瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんは戒（いまし）めを解こうとして身を捩（よじ）っている。

何だか妙に色っぽいので、江原ッチには見せられない。

私もせめて猿轡が解けないか、顔を動かしてみた。

ダメだ。顔の筋肉が攣りそうになる。

「ほが！（こら）」

私はまだモゾモゾしている江原ッチに近づき、頭突きを食らわせた。

「ほがあ」

涙目で私を見る江原ッチ。私は江原ッチを睨みつける。

「ほがほがほが」

何か必死に訴えているようだが、全く何を言っているのかわからない。

「ほ？」

よく見ると、江原ッチは携帯を取り出していた。

「ほがが？」

でも意味がわからない。

『まどかさん、聞こえますか？』

その時、瑠希弥さんがテレパシーで語りかけて来た。

『はい、聞こえます』

私は瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんが頷く。

『この方法も、長く続けるとあいつらに気づかれます。何とか江原先生達に連絡を取りましょう』

『はい』

私と瑠希弥さんは精神を集中して、江原ッチのお父さんとお母さんに念を送った。

しかし、応答がない。

どうやら、地下室に結界が張られているようだ。

『どうしますか、瑠希弥さん？』

私は瑠希弥さんに尋ねた。瑠希弥さんも考え込んでいる。

『まどかりん』

今度は江原ッチが語りかけて来た。

『江原ッチ！　おかしな事してないで、対策考えなさいよ！』

『おかしな事？　俺、さっきから一生懸命携帯のメール打ってたんだよ』

『え？』

私はギクッとした。そうなの？

『おかしな事って、何、まどかりん？』

『そんな事、どうでもいいの！』

私はまた顔が真っ赤になった。

するとそこへ鴻池仙一が部下達と共に戻って来た。

「残念だったねえ。ここは結界の間だ。念を送る事も、念を受ける事もできないよ。そして、真言も使えない」

仙一はニヤリとして言った。私と瑠希弥さんは思わず顔を見合わせてしまった。

「助けを呼んでもらった方が良かったかな？　誰が来ようと、この部屋に入れば、只の人間だからね」

江原ッチのご両親である雅功（まさとし）さんと菜摘さんが来ても、人質が増えるだけだったの？

結果的には良かったけれど、このままではまずい事に代わりはない。

「まあいいさ。連中には、また別の罠を仕掛けるつもりだからね」

仙一の顔が凶悪になる。私は寒気がした。

その時だった。

「どりゃあ！」

かけ声と共にドアを蹴破り、江原ッチの親友の美輪幸治君が飛び込んで来た。

「何だ、お前は？」

仙一が仰天して美輪君を睨む。美輪君はフッと笑って（私の親友の近藤明菜が見れば失神してるわ）、

「お前らの味方じゃないのは確かだぜ」

仙一は鈴（りん）と撥（ばち）を取り出した。

「お前も人質だ！」

仙一は気味の悪い笑みを浮かべ、鈴を叩く。

あの気持ち悪い音が地下室に響いた。

美輪君、逃げてェッ！

そう叫びたかったが、

「ひがぐん、ひげげー！」

としか言えない、情けない私。

ところが……。

「はあ？　何してるんだよ、おっさん？」

美輪君は何ともないようだ。私達はまた気絶しそうなのだが……。

「どういう事だ？　お前は何者だ？」

「うるせえよ、おっさん！　寝言は寝てから言いな！」

美輪君はたちまちそこにいた連中を叩きのめした。

「くう！」

仙一は部下を楯にし、地下室を出て行ってしまった。

「大丈夫ですか？」

美輪君は真っ先に瑠希弥さんを助けた。そして、私と江原ッチの冷たい視線に気づき、

「あ、あの、アッキーナには内緒ね」

と言った。

美輪君は、江原ッチからのメールでゲームセンターに来たのだそうだ。

「さすが、江原ッチね」
私は絶賛したが、
「さっきの頭突きがまだ痛いよお、まどかりん」
と言われてしまった。
「ごめん」
私は苦笑いして詫びた。
ゲームセンターを出て、すぐに付近を探ったが、鴻池仙一の気は感じられなかった。
「先生……」
瑠希弥さんは、山形にいる西園寺蘭子お姉さんを心配している。
「それにしても、どうして美輪には鈴が通じなかったのかな？」
江原ッチが言った。それは私も不思議だ。
「リン？　何の事だ？」
美輪君にも自覚はないみたいだ。
「不思議です。美輪君、調べさせて下さい」
瑠希弥さんが言うと、美輪君は嬉しそうに、

「はいはい、どうぞどうぞ」

と言った。

「美輪君」

絶対零度の明菜の声が響いた。

ゲーセンの外で待っていたのを美輪君が忘れていたのだ。

「もしもの時は、アッキーナが連絡してくれる手筈だったんだ。ハハハ」

美輪君は笑って誤魔化そうとした。明菜は呆れて、私を見た。私は肩を竦めた。

その後、エロ兄貴に連絡して、警察に来てもらったのだが、仙一の部下達は全員操られていただけで、何も知らなかった。

「まどか、今度は何に関わってるんだ？」

兄貴が珍しく心配そうに訊く。

「サヨカ会の残党よ」

サヨカ会と聞き、兄貴はビクッとした。

「蘭子さん、大丈夫かな？」

兄貴が小声でそう呟いたのを、恋人の里見まゆ子さんに伝えるかどうか迷うまどかだった。

サヨカ会対策を練るのよ！

私は箕輪まどか。もうすぐ中二の霊能者。ちなみに美少女である。

何なのよ、ホントに……。

只、「中二」を言いたかっただけでしょ？

2ちゃんで話題になったからって、嬉しがってるんじゃないわよ、全く。

ちなみに、久しぶりに念を押すのだが、私は決してお笑い芸人ではない。

更に、銭形平次のライバルの親分でもないからね。

古過ぎて、日下部先生くらいしかわからないわよ！

先日、私達はある宗教団体の残党に拉致監禁され、危うく命を落とすところだった。

そいつらは、サヨカ会というカルト教団のメンバーだった。

但し、宗主であった鴻池大仙（こうのいけだいせん）の息子の仙一（せんいち）を除けば、洗脳されていただけだった。

多くのカルト教団がそうらしい。

ところで、カルトって何？

今回は、ちょうど私達が春休みだという事もあり、私の絶対彼氏の江原耕司君の邸で研修会だ。

あれれ？

確か、連中に拉致されたのは、卒業式前だったはずなのに……。

様々な事情で、思ったより時間がかかったので、いつの間にか、あの前生徒会長である原西誠司さんと生徒会副会長の隅田真保（すみた まほ）さんは卒業していた。

可哀想な二人ではあったが、時の流れは無情なのだ。

江原邸の道場には、江原家の四人と私、そして私のお師匠様でもある小松崎瑠希弥（こまつざき るきや）さん、それから、すでに力は失っているけれど、サヨカ会の事情に詳しい小倉冬子さんがいた。

実は、江原ッチの親友にして、私の親友近藤明菜の彼氏である美輪幸治君も、研修会に出たがっていたのだが、明菜の強烈な反対に遭い、あえなく撃沈した。

要するに、美輪君は「瑠希弥さん目当て」がバレバレだったのである。

私だって、江原ッチに参加して欲しくないくらいなのだ。

現に江原ッチは、瑠希弥さんをヘラヘラして見ている。

瑠希弥さんは感応力を制御しているはずなのだが、一度瑠希弥さんの虜になった男はなかなかその呪縛から抜け出せないらしい。

江原ッチのお母さんの菜摘さんの話によると、症状は「デレデレしてしまう」で留まるので、あまり心配はいらないらしいのだが。

「今回は、三人共無事で何よりでした」

講師である江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんが言う。

私達はそれに応じて黙って会釈した。

「サヨカ会の残党がああも大胆な手口で近づくとは思ってもみませんでした」

雅功さんが続ける。

「予測通り、彼等が別の術具を持っている事がわかったのは収穫でした」

菜摘さんが付け加えた。

そう。仙一は、「鈴（りん）」と「撥（ばち）」を持っていたのだ。

それを打ち鳴らされると、気を失ってしまう。

ところが、何故か美輪君にはそれが通じなかった。

その事もあったので、雅功さんは美輪君を呼びたかったのだが、

明菜の反対があまりに壮絶だったので、諦めたのだ。

「美輪君の事に関しては、私と菜摘で彼に会って調査する事にしました」

雅功さんはチラッと瑠希弥さんを見た。

ちょっと天然な瑠希弥さんはそれに気づかない。

「私も同行したいのですが？」

瑠希弥さんが思わぬ参加要請。ゲゲ。

雅功さんと菜摘さんは顔を見合わせてしまった。

「ダメよ、小松崎さん。貴女は行ってはいけない」

冬子さんが言ってくれた。

瑠希弥さんはキョトンとしてしまった。

真面目な性格の瑠希弥さんは、美輪君に、

「はいはい、どうぞどうぞ」

と言われたので、行くべきだと思ったのだ。他意はない。あるはずがない。

「貴女の感応力が美輪君に影響してしまうから、今回は遠慮して」

冬子さんは優しく微笑んで言った。

「そうなんですか」

わわ！　油断してたら、やっぱり瑠希弥さんがＮＧワードを放り込んで来た。

どことなく悲しそうな瑠希弥さんに、江原ッチはキュンとしているようだ。

まあ、我慢だ。あれは仕方ない。私もキュンとしてしまったのだから。

「靖子は必ず耕司と登校するように。お前が狙われないとも限らないからね」

雅功さんの言葉に私はドキッとした。

江原ッチの妹の靖子ちゃんは、四月から中学生だ。

お兄ちゃんの江原ッチが一緒にいれば、靖子ちゃんも安心だろう。

「靖子は俺が守るから」

いつになく凛々しい顔で靖子ちゃんを見る江原ッチ。

ちょっとだけ、靖子ちゃんに嫉妬してしまう。

「ありがとう、お兄ちゃん」

靖子ちゃんは笑顔で応じた。可愛い。

え？　お前と同じ妹属性なのに、全然違うな、ですって？

ほっといてよ！

兄貴の質が違うのよ、ウチとは！

「それで、その鈴対策なのですが」

雅功さんが話を進める。

「どうやら、使用者の敵意に反応して、対象を攻撃するようです。私の師匠に問い合わせて、それがわかりました」

「つまり、鴻池仙一の憎しみが深い程、対象者は鈴の力の影響を受けるようです」

菜摘さんが付け加えた。だとすると……。

「西園寺先生が……」

瑠希弥さんが呟いた。雅功さんがそれに気づき、

「西園寺蘭子さん達には遠野泉進さんを通じて連絡します。安心して下さい」

「そうなんですか」

瑠希弥さんはニコッとして言った。ああ、またＮＧワード。

でも、瑠希弥さんの嬉しそうな顔に免じて、何も言わない。

最終決戦が近い事を感じ、最終回じゃないだろうな、と不安になるまどかだった。

いろいろと複雑な心境なのよ！

私は箕輪まどか。とうとう中二だ。でも、私は負けない。

何に負けないのかはわからないが。

今日は入学式。

G県では、全県的に今日が中学校の入学式のようだ。

桜も咲いたし、陽気もよくなったし。

そんな中、私にとって驚愕すべき事があった。

私の絶対彼氏の江原耕司君の妹さんの靖子ちゃんが、何故か私と同じ中学校に入学して来たのだ。

江原ッチから事前に知らされていなかった私は、靖子ちゃんとお母さんの菜摘さんを見かけて驚いた。

いろいろと考えた結果、私と同じ中学に越境入学する事になったそうだ。

「やっぱり、同じ女性であるまどかさんと一緒の方が、靖子も安心でしょうから。よろしくお願いしますね」

菜摘さんにそう言われ、私は驚きながらも感激した。

「よろしくお願いします、まどかお姉さん」

制服姿が初々しい靖子ちゃん。可愛い。私にそういう趣味はないけど。

G県警鑑識課の宮川さんには絶対に会わせないようにしないと。

菜摘さんが警戒しているのは、言うまでもなくサヨカ会残党の動き。

まだ力があまりない靖子ちゃんを狙って来る事が考えられるからだ。

それにしても、「靖子は俺が守る」と言っていた江原ッチは今頃どうしているのだろう？

「耕司は、まだ瑠希弥さんの影響から抜け出せていないので、転校は認めませんでした」

ああ、そうか。私のお師匠様の小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんも同じ学校にいるんだっけ。

なら、靖子ちゃんは安心ね。

「私、まどかお姉さんと同じ中学に通えるので、本当に嬉しいです」

「そうなんだ」

危ない、危ない。NGワードを言ってしまうとこだったわ。

「その代わり、別の人に転校してもらいました」
菜摘さんが妙な事を言ったと思ったら、
「おはよう、まどか」
私の親友の近藤明菜が、彼氏の美輪幸治君と現れたのだ。
「おはよう、まどかちゃん。靖子ちゃんを守るために、転校して来たぜ」
美輪君はポーズを決めて言った。
「嬉しい、美輪さん！」
靖子ちゃんは大喜びだ。何となく面白くなさそうな明菜だったが、
「靖子ちゃーん」
力丸ミートの御曹司のリッキーが現れると、少し機嫌が良くなった。
靖子ちゃんの注意がリッキーに向いたからである。
どこまで嫉妬深いのよ、明菜。
え？　お前にだけは言われたくないだろう、ですって？　フンだ！
「わーい、リッキー」

靖子ちゃんは両手を振ってリッキーを歓迎する。

「お母さん、僕が靖子ちゃんを必ず守ります」

リッキーはコロッケがいっぱい詰まった紙袋を菜摘さんに手渡しながら、真顔で言った。

「そうなんですか」

菜摘さんが苦笑いでＮＧワードを言った。ああ。

やがて入学式が始まった。

涙ぐんでいるご両親もチラホラ。

ウチの親は、エロ兄貴の卒業式や入学式では泣いたらしいが、私の時は泣くどころか、欠伸をしていたらしい。

この差は何なのだろう？　ムカつく。

そしてその日の行事が全て終わり、

「今日はまどかお姉さんの家に行きたい」

という靖子ちゃんの願いで、明菜もリッキーも美輪君までも伴って、

我が家へ向かった。

「どうぞ、上がって」

ウチの親共はどこに出かけたのか、いない。

その代わり、エロ兄貴と恋人の里見まゆ子さんがいた。

「あれれ、邪魔しちゃったかな、俺達？」

美輪君が早速からかう。

「い、いやね、そんな事ないわよ。ねえ、慶一郎さん？」

まゆ子さんは顔を赤らめて否定する。

「そうだよ。変な勘ぐりするなよ」

兄貴も顔が赤い。

「ゆっくりしていってね、靖子さん」

そう言いながら、兄貴とまゆ子さんは出かけた。

「どこに行くんだろうな？　羨ましいな」

リッキーが呟く。エロい事は考えていないと思うが、涎(よだれ)を垂らさないで欲しい。

しばらくして、瑠希弥さんが現れた。

途端にニヘラとするリッキーと美輪君。
殺気立つ明菜と靖子ちゃん。
こんなに一同が一緒になったのは初めてかも知れない。
更に、どこで聞きつけたのか、江原ッチも現れた。
何だか、非常にまずい雰囲気。
最終回が近いのだろうか？
しかし、特に何もなく楽しい時が経過した。
「まどかりん、ちょっと」
私は江原ッチに誘われて、庭に出た。
何？　いきなりの展開？
「どうしたの、江原ッチ？」
ドキドキして尋ねる。
「鴻池仙一（こうのいせんいち）の居所がわかったんだ」
「え？　どこなの？」
私は声をひそめる。

「新潟県村上市」

「ええ？」

ギクッとした。そこって、その向こうは山形じゃないの……。

「蘭子お姉さんが危ないの？」

「そうかも知れませんが、これはチャンスです」

瑠希弥さんが現れた。私と江原ッチは瑠希弥さんを見る。

「先生には連絡がついています。双方から挟み撃ちにして、今度こそ一網打尽にしましょう」

瑠希弥さんの凛々しい顔には、江原ッチだけでなく、私もドキッとした。

最終決戦が終わると、やはり最終回なのかと危惧するまどかだった。

小倉冬子さんが危機一髪なのよ！

私は箕輪まどか。中二の霊能者。

何だか、随分問題ある子みたいで嫌だわ、その自己紹介。

先日、サヨカ会対策を練った私達は、サヨカ会の残党が新潟県村上市にいる事を知った。

山形にいる西園寺蘭子お姉さん達と挟み撃ちにして、今度こそあの憎たらしい鴻池仙一（こうのいせんいち）をやっつけてあげるわ。

今日はコンビニで私の彼氏の江原耕司君と待ち合わせ。

でも、デートではない。

江原ッチの妹さんの靖子ちゃんが、越境入学して、私と同じ中学校なのだ。

サヨカ会は靖子ちゃんも狙って来る可能性があるので、江原ッチと私とで連携して守る事にした。

「靖子を頼むね、まどかりん」

江原ッチは凛々しい顔で言う。ドキッとしてしまった。

ときめいている場合じゃないのだけど。

「よろしくお願いします、まどかお姉さん」

靖子ちゃんは深々とお辞儀をしてくれた。

何だか照れてしまう。

名残惜しかったが、涙ぐむ江原ッチと別れ、靖子ちゃんと共に学校へ向かう。

「おはよう、まどか」

途中で親友の近藤明菜と会った。

彼女も危険な可能性があるので、彼氏の美輪幸治君が一緒だ。

本当は、美輪君は靖子ちゃんを守るために転校したのだが、明菜には、

「アッキーナを守るためだよ」

と言っている。

それで二人がうまく行くなら、それは嘘ではないと思う。

何しろ、美輪君は、仙一が持っていた「鈴（りん）」の得体の知れない力を受け付けないという特殊能力があるのだ。

尚の事、頼もしい。江原ッチよりもね。内緒だけど。

楽しく話しながら、私達は学校まで歩いた。

「あ」

校門の前に、小松崎瑠希弥(こまつざきるきや)さんが立っている。

「瑠希弥さん！」

美輪君が思わず嬉しそうに手を振りかけ、私達女子の冷たい視線に気づいてやめた。

とりわけ、明菜は氷点下の視線だった。

「おはようございます」

何も知らない瑠希弥さんは、笑顔で私達に挨拶した。

「おはようございます」

明菜以外は皆愛想良く挨拶を返した。明菜ったら、嫉妬深過ぎよ。

何にしても、無事に登校できて良かった。

「ああ！」

校庭を歩き出した時、いきなり瑠希弥さんが叫んだ。

なになに？　忘れ物？

「まどかさん、緊急事態です！　一緒に来て下さい」
「えええ！？」
私は瑠希弥さんに引き摺られるようにして学校から離れて行く。
「どうしたんですか？」
美輪君が追いかけて来た。
「美輪君は明菜さんや靖子さん達を守ってあげて下さい。私達は冬子さんを助けに行きます」
瑠希弥さんが言うと、美輪君は何かのトラウマを思い出したのか、
「あ、そうですか、わかりました」
と明菜達のところに戻って行った。
「瑠希弥さん、冬子さんが危ないんですか？」
私はビックリして尋ねた。
「ええ。サヨカ会が接近しています」
「そうなのでございますか」
ＮＧワード回避のためとは言え、妙な言葉を発してしまった。

私達が着いたのは、学校から少し離れた公園。

そこには、目も虚ろな公園デビュー間もないママ達十人程が集まり、冬子さんを取り囲んでいた。

「何なの？」

その光景にギクッとする。

「サーヨカサヨカサヨカサヨカ、サーヨカサヨカサヨカ……」

以前に聞いたあの不気味な合唱をしながら、ママ達は冬子さんに迫る。

「まどかさん、行きます！」

瑠希弥さんが印を結び、私もそれに倣う。

「オンマリシエイソワカ」

摩利支天（まりしてん）の真言を唱えた。

「ひいい！」

ママ達の何人かがたじろぐ。

「まどかさんは、ママさん達の赤ちゃんを！」

瑠希弥さんが駆け出した。

「はい」

私は、ほったらかしにされて大泣きしている赤ちゃんのそばに走る。

「オンカカカビサンマエイソワカ」

地蔵真言を唱え、赤ちゃん達を落ち着かせる。

瑠希弥さんを見ると、苦戦していた。

ママ達にかけられた呪縛は、簡単に解けないもののようだ。

かと言って、あまり強烈な真言を使うと、ママ達の身が危なくなってしまう。

「オンマリシエイソワカ」

摩利支天の真言でコツコツ解いて行くしかなさそうだ。

「ああ！」

遂に何人かのママが、冬子さんの腕や身体を掴み始めた。

「うううう！」

赤ちゃんも心配だけど、冬子さんも……。

瑠希弥さんもピンチだ。ママ達が取り囲み始めた。

「わ！」

ふと振り向くと、私の背後にも、ママの別働隊が迫っていた。

この辺り、一体何人の公園デビューママがいるのよ！？

私も摩利支天（まりしてん）の真言を唱えた。

しかし、ママ達はちょっと怯むだけでまた近づき始める。

「その戦い方では、只消耗するだけですよ、お嬢さん方」

どこからか、男の人の声がした。

誰だ？

「大元（おおもと）を叩かないとね」

「大元？」

私と瑠希弥さんは思わず顔を見合わせた。

「オンマカキャラヤソワカ！」

大黒天の真言が聞こえた。

「ぐげええ！」

どこかでヒキガエルが鳴いた気がした。
次の瞬間、バシンと音がして、何かが弾けた。
操っていた者が倒され、ママ達が正気に戻ったようだ。
「怪我はないかい、冬子」
男の人が、冬子さんを支えていた。
誰？
「わたる君なの？」
冬子さんが驚いた顔で男の人を見ている。

しばらくして、男の人の正体がわかった。
その人の名は、濱口わたるさん。決して「獲ったどー！」とか叫んだりしない、真面目そうな人だ。
黒のスーツに身を包み、髪をキチッと七三に分けている。
わたるさんは、冬子さんの幼馴染なのだ。
まだ冬子さんが霊に取り憑かれる前に惹かれ合った仲らしい。
とは言っても、幼稚園の時だけどね。

「お師匠様から、冬子が危ないと聞いて、駆けつけたんだよ」

「わたる君」

冬子さんの目は、完全に恋する乙女の目だ。

焼きまんじゅうに火が点いたって奴ね。

え？　違う？　細かい事気にしないでよ。

ちなみに焼きまんじゅうはG県の名物である。

わたるさんは、有名な退魔師のお弟子さんだそうだ。

冬子さんが妙な霊に取り憑かれたのを助けようと、ずっと修行していたらしい。

「結局、力になれなかったけどね」

寂しそうに言うわたるさんに、冬子さんだけでなく、私も瑠希弥さんもキュンとなってしまった。

闘争本能をくすぐるって奴ね。　え？　これも違うの？

ギン〇ナム隊に入隊しろ、ですって？　何よ、それ？

取り敢えず、私と瑠希弥さんは邪魔者のようなので、わたるさんが倒した術者を縛り、江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんに連絡し、公園を出た。

「この男は、サヨカ会のナンバー2ですね」

車で来た雅功さんが言った。

「そうなんですか」

あああ。また、瑠希弥さんがNGワードを……。

「冬子さんを狙って来るとはね。まあ、濱口君が来てくれたのなら、もう安心でしょう」

わたるさんは、雅功さんも一目置く実力者だそうだ。

「心強い味方が増えましたね」

「はい」

さあ、これでメンツは揃った。

サヨカ会の残党を一網打尽よ。

で、一網打尽て、何？

最後までボケまくるまどかだった。

本当に久しぶりにあいつが現れたのよ！

私は箕輪まどか。中二の霊能者。ちなみに「厨二病」ではない。

小倉冬子さんがサヨカ会残党に襲われ、冬子さんの幼馴染の濱口わたるさんが現れ、冬子さんを救った。

その力は、私の尊敬する西園寺蘭子さんに匹敵すると思われた。

わたるさんが倒した残党の男は、サヨカ会のかつての幹部で、職を失って路頭に迷い、冬子さんを襲ったらしい。

「サヨカ会の幹部の多くも、鴻池大仙（こうのいけだいせん）に操られていたに過ぎません。彼らのケアも考えないと、事件が拡大してしまいますね」

私の絶対彼氏の江原耕司君のお父さんの雅功（まさとし）さんが言った言葉だ。

確かに、只敵を倒すだけでは、何も解決しないのだと思い知らされた。

で、ケアって何？　え？　やっぱり中二だな、ですって？　うるさいわね！

わたるさんはしばらく江原家に留まるらしい。

みんなの準備が出来次第、一緒に新潟県の村上市に向かう予定だそうだ。

冬子さんは恋する乙女モード全開だ。

エロ兄貴が見たら、ちょっとだけショックを受けるかも。

兄貴ったら、冬子さんがすっかり回復して、昔の美貌を取り戻したのを知って、

「高校生の時に知っていれば……」

などと不届きな事を抜かしていた。

彼女の里見まゆ子さんに言いつけちゃおうかしら？

私と江原ッチの妹さんの靖子ちゃんは、コンビニで待ち合わせて一緒に登校。

途中で、親友の近藤明菜とその彼氏である美輪幸治君と合流する。

「さ、行きましょう」

私がそう言った時だった。

「お久しぶりね、箕輪さん」

目の前に美少女が現れた。

誰？　マジでわかんないんすけど。

「忘れたんかい！」

その子はムッとして怒鳴る。

「あんた、性懲りもなく！」

明菜が切れる。どうしたの？

何故か、美輪君がビクッとして明菜の後ろに隠れる。

靖子ちゃんも私の後ろに隠れた。

「綾小路さやか、何の用よ！？」

明菜の怒りの理由がわかった。

そうか、こいつ、綾小路さやかか。すっかり記憶から消していた。

かつて私と付き合っていたかも知れない気がする牧野徹君と本格的に付き合い始めた女だ。

「ハリ〇ンボンのお二人には用はないわ」

「何ですって！？」

私と明菜は同時に切れた。それは一番言われたくない台詞。

「私が用があるのは、あ・な・た」

さやかは美輪君に熱視線を送った。決して安〇地帯ではない。

「……」

美輪君は全身総毛だったみたいだ。震えている。

「困るのよ、貴方が箕輪さん達と一緒にいると。付き合いをやめてくれない？」

さやかはニコッとして酷い事を言う。

「どういう意味よ！？」

私は嫌な予感がして、ズイッと前に進み出た。

さやかはフッと笑って私を見ると、

「決まってるじゃない？　サヨカ会復活の邪魔になるからよ」

「何ですって！？」

「何だって！？」

私達は異口同音に叫んだ。

さやかはにやりとした。まるで魔女みたいな顔だ。

「さあ、美輪君、私と一緒に行きましょう」

「はい」

美輪君はさやかの術中だ。すがりつく明菜を振り払い、さやかに近づく。

「さやか、あんたって人は！」

私は激怒した。メロスでなくても、怒髪天だ。

「やる気、箕輪さん？」

さやかが気を解放した。

元々私より力は上だったけど、以前にも増して強くなっている。

サヨカ会残党のせい？

それにどうして、さやかが？

「インダラヤソワカ」

さやかが帝釈天の真言を唱える。

「危ない！」

私は靖子ちゃんと明菜を庇い、雷撃から逃れた。

「ご機嫌よう」

その隙を突き、さやかは美輪君と共に歩き去ろうとする。

「待ちなさいよ！」

私は明菜と靖子ちゃんを下がらせ、さやかを追った。

「オンマカキャラヤソワカ」

さやかが大黒天の真言を唱えた。

「く！」

私は辛うじてそれを回避し、また追いかけようと足を踏み出す。

「あんたねえ、いい加減にしなさいよ！」

明菜が私より早くさやかに追いつき、美輪君をビビらせたと噂のビンタを繰り出した。

「きゃ！」

さやかはそれをまともに食らい、地面に倒れた。

「美輪君、しっかりしなさい！」

そして明菜は美輪君にも愛のビンタ。美輪君はハッとした。

「アッキーナ」

「良かった」

明菜は美輪君が正気を取り戻したので、ニコッとした。

そして、起き上がろうとしているさやかを仁王立ちで見下ろし、
「あんたね！　まどかをさんざん虐めて、牧野君と付き合うようになって、それでも飽き足らず、まだ私達にチョッカイ出そうって言うのなら、この場で私が叩きのめしてあげるわ！」
明菜の迫力には、美輪君だけでなく、私も靖子ちゃんもビビッた。
「く……」
さやかは悔しそうに明菜を睨んでいる。
「明菜さん、許してあげて」
そこにラブラブカップルの冬子さんとわたるさんが現れた。
今度は明菜がビビッた。トラウマはそう簡単には抜けないのだ。
「私には、その子の悲しみがわかるの。だから、許してあげて」
冬子さんはそう言うとさやかに近づき、彼女を立ち上がらせ、抱きしめた。
「うわあああ！」
その途端、さやかが泣き出した。大泣きだ。うるさいくらい。
「その子は、小さい頃から誰かを虐める事で、自分が人と違う能力を持っている事を忘れようとして来たんです。だから、まどかさん

には彼女の味方でいて欲しい」

わたるさんは爽やかな笑顔で言った。何だか、キュンとしてしまった。

「まどかちゃんは以前、私が八木麗華さんと戦った時、私を庇ってくれたわよね。あの時は本当に嬉しかった。だから、この子にもその優しさで接してほしいの」

冬子さんは涙ぐんで私を見る。私も涙ぐみそうになった。

「はい」

私は零れ落ちた涙を拭い、頷いた。

今回はいろいろと思い出したまどかだった。

サヨカ会残党退治に出かけるのよ！

私は箕輪まどか。中二の霊能者。ちなみに、美少女でもある。

……。

本日は、ノーコメントで。

この前、かつての同級生の綾小路さやかが久しぶりに現れ、私達を追いつめた。

しかし、彼氏の美輪幸治君を思う近藤明菜の怒りがさやかの力を凌駕し、勝利した。

そこにやって来た小倉冬子さんと幼馴染みの浜口わたるさんの計らいで、さやかは明菜の制裁を免れた。

考えてみれば、さやかも犠牲者なのだ。

きっと操られていたのだろう。

と、思った。

放課後、大人しくなったさやかを連れて、私の彼氏の江原耕司君の邸にある道場に行くと、意外な事実がわかった。

「さやかさんは洗脳されていませんよ。自分の意志でサヨカ会復活

を手助けしようとしたのです」

さやかを霊視し、深層心理まで覗いた結果を、江原ッチのお父さんである雅功(まさとし)さんが教えてくれた。

「こいつ、やっぱりそういう奴なのよ！」

明菜が激高する。さやかはすっかり怯え、私の陰に隠れた。

「それは違います。さやかさんは言葉巧みにサヨカ会に誘導されたのです」

雅功さんは明菜を落ち着かせて続ける。明菜はキョトンとしてしまった。

「どういう事ですか？」

美輪君が代わりに尋ねた。

「さやかさんは、孤独に対する恐怖が普通の人に比べて強いのです。彼等はそこを巧みに突き、さやかさんを仲間に引き入れたのですよ」

雅功さんは私達を見渡して答えてくれた。

そうか。さやかは強がりを言うけど、本当は寂しがり屋だったのか。

私と一緒ね。

「それは違う」

私の陰に隠れているくせに、さやかは私の心の声を盗み聞き、そう囁く。

「何がよ！？」

私は思わず大声でさやかに言う。

「だって、あんた、寂しがりなんかじゃないでしょ？」

さやかは涙目で抗議するように言った。

うう。そう言われると、一言もない。

「何故そんな事をしたのでしょうか？」

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが尋ねた。

相変わらず、瑠希弥さんが話すと、江原ッチと美輪君がうっとりするのはムカつく。

明菜は美輪君の脇腹を思い切り抓（つね）った。

「いて！」

美輪君は思わず飛び上がる。

「江原耕司さん、後でお話があります」

私はいつもより怖い言い方で江原ッチの背後で囁く。

「ひいい！」

江原ッチは痙攣(けいれん)しそうになった。

「それは、さやかさんの力を必要としたからです。操ったままでは、さやかさんは力を発揮できないからです」

雅功さんが答えた。

「なるほど」

私達は揃って納得した。

「急がないといけません。サヨカ会残党は、日本各地で霊能者を拉致しているようです。彼等が力を蓄える前に叩かないと」

江原ッチのお母さんの菜摘さんが言った。

「週末、新潟県の村上市に行きます」

雅功さんは瑠希弥さんと私を見た。そして、最後に美輪君を見る。

「今回の戦いには、美輪君の力が不可欠です。是非、同行して下さい」

雅功さんの言葉が終わらないうちに、明菜が叫ぶ。

「だったら、私も連れて行って下さい」

雅功さんは、明菜の申し出に思わず菜摘さんと顔を見合わせた。

「俺からもお願いします。アッキーナが近くにいた方が、守り易いですから」

美輪君が進み出て言う。明菜は感激しているようだ。

「わかりました」

雅功さんは菜摘さんに目配せして応じ、続ける。

「浜口さんには先に出かけてもらって、西園寺さん達と落ち合ってもらう手筈です」

「私はここに残り、靖子、冬子さん、まどかさんのお兄さんを守ります」

菜摘さんが言った。え？　エロ兄貴もヤバいの？

でも、菜摘さんと靖子ちゃんと冬子さんとエロ兄貴だと、靖子ちゃんは大丈夫だろうけど、冬子さんと菜摘さんが、別の意味で危ないかも知れない。

そう思った私はある提案をした。

「兄の恋人の里見まゆ子さんも一緒に守ってあげて下さい」

「そうですね。そうしましょう」

菜摘さんは、私が何故そんな事を提案したのか理由を聞かずに受

け入れてくれた。

良かった、面倒臭い事にならなくて。

私達はサヨカ会対策を練り、フォーメーションを考えた。

雅功さんの運転で、美輪君と明菜と江原ッチ。

瑠希弥さんの運転で、私とさやか。

私は江原ッチと別々なのが悲しいが、瑠希弥さんと江原ッチを同じ車内にしたくないので諦めた。

さやかは、今度こそ本当に反省したようなので、メンバーに加えたのだが、明菜が未だに敵視しているので、この中では比較的顔見知りの私と一緒に行く事になったのだ。

「俺もまどかりんと同じ車がいいなあ」

江原ッチは嬉しい事を言ってくれたが、その目は私ではなく、瑠希弥さんを見ていた。

「江原耕司様、後でお話を致したく存じます」

さっきよりも怖い敬語で言う。

江原ッチは蒼ざめた。

いよいよ最終決戦。

まさか、とうとう最終回が近いのかと、また不安になるまどかだった。

敵の本拠地に乗り込むのよ！

私は箕輪まどか。中二の美少女霊能者だ。

飽きないわね、その自己紹介。少しはパターンを変えたら？

週末。とうとう私達は、サヨカ会残党が根城を構える新潟県村上市に向けて出発した。

朝五時集合が、宵っ張りの私には辛い。

ところで、「根城」と「宵っ張り」って何？

エロ兄貴は、西園寺蘭子さんと会えるらしいのを知り、

「俺も行く」

などと不謹慎発言をした。

「ダメです」

当然の事ながら、G県警鑑識課の同僚で、恋人でもある里見まゆ子さんにあっさりと却下された。

何を考えているのだろう？　我が兄貴ながら、理解不能だ。

私は兄貴の車で、私の彼氏の江原耕司君の邸まで送ってもらった。
まゆ子さんも一緒だ。
「まどかを頼むぞ。絶対に守ってくれよ」
珍しく真顔の兄貴が、江原ッチに言う。
「はい、お兄さん」
江原ッチも真顔だ。
しかし私とまゆ子さんにはわかっていた。
このエロ男二人は、私に右半分の顔を見せ、左の目でしっかりと小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの赤いジャージ姿を見ていたのだ。
「箕輪慶一郎さん、後でお話があります」
まゆ子さんは目が笑っていない得意の笑顔で言った。
「ひいい！」
兄貴は顔を引きつらせた。
「江原耕司さん、貴方にも後でお話があります」
「ひいい！」
江原ッチも顔を引きつらせた。

朝から疲れる事させないでほしいわ。

「恥ずかしいから、あまり見ないで下さい」

部屋着のジャージ姿で、モジモジしている瑠希弥さんは、私も可愛いと思ったけど。

「寝過ごしてしまったので、出先で着替えます」

瑠希弥さんはスーツを車のトランクに積み込む。それを手伝う綾小路さやか。

彼女は夕べは江原家に泊まって、瑠希弥さんと一緒に寝たらしい。

「おはよう」

そこへ親友の近藤明菜と、彼氏の美輪幸治君が現れた。

「あれれ、昨日の夜は一緒だったのかな？」

私が冗談で言うと、

「バ、バカな事言わないでよ！」

明菜は酷く動揺した。え？　まずい事言ったの、私？

「ハハハ」

笑っているだけの美輪君。真相はどうなのだろう？

「揃いましたね。では、出発しましょうか」

江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんが言った。

私達は大きく頷き、それぞれの車に分乗した。

車はまずMインターチェンジで高速道路に入り、新潟県の胎内市まで向かう。

私はさやかに気を使って、彼女を助手席に座らせた。

「ありがとう、まどか」

さやかは嬉しそうだ。

昨日一晩で瑠希弥さんと随分仲良くなったようだ。

「何か、懐かしいですね、まどかさん」

瑠希弥さんが言った。

昨年の秋に二人で山形県の鶴岡市にいる蘭子お姉さんに会いに行った時の事を思い出す。

「はい」

私は笑顔で応じた。

「そこにあるバッグにお弁当が入っているから、お腹が空いたら食べてね」

瑠希弥さんがミラー越しに言った。

「もちろん、さやかさんもね」

「はい」

さやかは本当に嬉しそうに返事をする。

確かに瑠希弥さんて、優しさオーラが半端ないからなあ。

蘭子お姉さんと過ごした日々が、瑠希弥さんを強くしただけでなく、優しくしたのだと雅功さんから聞いた事があったけど。

さすが、蘭子お姉さんね。

車がトンネルを越え、新潟県に入った頃、お腹がグウと鳴ってしまった私は、

「お弁当いただきます」

とバッグから可愛いお弁当箱を取り出す。

「私はまだ大丈夫」

さやかは言った。何だか一人で食べるの、恥ずかしいな。

「おお！」

タコさんウィンナーとうさぎの林檎だ。

江原ッチのお母さんの菜摘さんが作ってくれたのだ。

「いただきます！」

奇麗な形の玉子焼きとまだ温かい手ごねハンバーグ。

よだれが垂れそうだ。

「美味しそうな匂いね」

瑠希弥さんが言った。さやかも気になったのか、振り返る。

「やっぱり、食べる」

彼女が恥ずかしそうに言うのは、初めて見た気がする。

私は箸を置き、バッグから別のお弁当箱を取り出して、さやかに渡した。

こんな日が来るなんて、想像もしなかったけど、私はさやかと笑顔をかわしながら、お弁当を食べた。

途中、トイレタイム等のため、サービスエリアに立ち寄る。

富士山麓にあったサヨカ会本部に向かった時は、サービスエリアで妙な一団に囲まれたっけ。

「心配いりませんよ。ここにはサヨカ会の連中はいないですから」

雅功さんが言ってくれた。

瑠希弥さんはトイレで着替えをすませ、雅功さんと一緒にお弁当を食べている。

それを遠くからジッと見ている江原ッチと美輪君。

「こら！」

私と明菜はソッと後ろから近づき、脅かした。

「ひいい！」

江原ッチと美輪君はギャグマンガのように飛び上がって驚いた。

やがて休憩を終え、また先へと進む。

車は新潟市を越え、新発田市に入る。

もう少しだ。

サヨカ会の連中との戦いより、蘭子お姉さんと会える事の方が私の気持ちを占めていた。

私達は知らなかった。ずっと私達の車を尾行している黒塗りの車がいた事を。

敵に背後をとられたのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者。

今は忙しいので、自己紹介に突っ込むのはやめにしとくわね。

私達はG県をあとにし、新潟県の村上市に向かった。

え？　どうして、G県なのに、新潟県はN県じゃないの、ですって？

私がどこに住んでるのかわかったら、まずいでしょ！　だからなの。

お前がどこに住んでいようが、日本の大半の国民には関係ない、ですって？

フンだ！

「あ」

運転している小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの携帯が鳴り出した。

「出てくれる、さやかさん」

瑠希弥さんは胸のポケットに入っている携帯を目で示して言った。
「はい」
助手席の綾小路さやかが携帯を苦労して取り出した。
どうしてすんなり取り出せなかったのかは、十五禁になるので描写しないわよ。
「はい、綾小路です」
さやかが応答した。そして、ギョッとして私を見た。
「な、何？」
私は理由がわからず、さやかに尋ねた。
「後ろ！」
さやかは私ではなく、瑠希弥さんの車の後ろを走っている黒い車を見ていたのだ。
「さっきから、ずっとつけられているみたいです」
さやかが言う。瑠希弥さんはルームミラーで後方を確認して、
「全然気づかなかったという事は、何かを施しているという事ね」
私とさやかは思わず顔を見合わせた。

「はい、わかりました」

さやかは携帯を切り、

「ここでは危険だから、高速を降りてから相手をしましょうとの事です」

「わかりました」

瑠希弥さんは携帯をさやかに預け、運転に集中する。

私は相手に気取られないように身を屈めて後ろの車を見る。

乗っているのは、あまりお会いしたくないような無精ひげのオヤジ四人。

何故か、オヤジたちは霊能者かどうかわからない。

「まどかさん、高速をもうすぐ降りるわ」

瑠希弥さんが言った。

「はい」

私は前を向き、シートベルトをかけ直す。

前を走る江原雅功（えはらまさとし）さん達の乗る車が終点の一個手前のインターチェンジ出口へと車線を変更する。

瑠希弥さんもそれに倣う。

すると、予想通り、ムサオヤジ達の車もついて来る。

「やっぱりね」

瑠希弥さんはミラーで見ながら言う。

私達の車はＥＴＣが着いているので、すんなり料金所を通過。

ムサオヤジ達の車は違うらしく、料金所で停まっていた。

「やったあ！」

私とさやかは思わずハイタッチした。

こいつとこんな事する時が来るなんて、思ってもみなかったけど。

「貴女の心の声、全部聞こえてるんだけど、まどか」

さやかがムッとした顔で私を見た。

「あはは」

私は無理とは思ったが、笑って誤魔化そうとした。

私達の車は、ムサオヤジの車をまくためにあちこち細い道を進んだ。

「これでもう大丈夫でしょう」

路肩に車を停め、しばらく様子を見てから、雅功さんが言った。

「それにしても、間抜けな連中だよね」

江原ッチと美輪君が大笑いする。

しかし、敵もさるもの、ひっかくもの（とお父さんが大好きなフレーズで言ってみたわ）だったのだ。

私達は元のルートに戻り、一路村上市を目指した。

「情報では、海沿いにある廃寺（はいじ）を拠点にしているらしいわ」

瑠希弥さんが言った。

「アルプスの少女じゃないわよ、まどか」

さやかが、私のボケを封じる事を言った。

「ちっ」

思わず舌打ちしてしまう。瑠希弥さんはクスッと笑い、

「まどかさんて、本当に楽しい人ね」

「あはは」

何だか泣きそうだ。

「だって、女の子だもん、とか言わないでよ」

「……」

またさやかに先に言われてしまった。

段々こいつの事が嫌いになりそうだ。

「え？」

さやかがドキッとした顔で私を見る。しかも、涙ぐんでいる。

「ああ、そんな事ないよ。全然気にしてないから」

私は瑠希弥さんの手前、事を荒立てたくないので、慌ててそう言った。

「うっそー」

さやかはニヤリとした。

「あんたねえ！」

私がさやかに掴みかかろうとした時だ。

「え？」

前方から、強烈な気を感じた。

「何？」

私とさやかはほぼ同時に前を見た。

「誰？」

瑠希弥さんは、雅功さんの車が停止したので、その後ろに車を停めた。

「何者？」

道路の真ん中に大きな笠を被って黒い袈裟を着たお坊さんが立っている。

「危ねえぞ、坊主。どけよ」

気の短い美輪君がいきなり怒鳴る。

「ここから先は行かせぬぞ」

そのお坊さんが言った。どういう事よ？

「なるほど、早くもお出迎えですか？」

雅功さんが余裕の笑みで応じた。

ところがだ！

「きゃっ！」

私とさやかはいきなり後ろから羽交い絞めにされてしまった。

「く！」

瑠希弥さんは辛うじて振り払ったようだ。

「あ、あんた達は！？」

臭い息を頭から浴びせられながらも、私は相手の顔を見た。

それは、さっきまいたはずのムサオヤジ達だったのだ。

「まどかりん！」

江原ッチが叫ぶ。

「さやかさん！」

瑠希弥さんが叫ぶ。

「コンのヤロウ！」

美輪君が振り返って駆け出す。

「いけない、美輪君」

瑠希弥さんが美輪君の腕を掴んで止めた。

明菜、そこで嫉妬しないの！

「うまくまいたつもりだったのだろうが、残念だったな」

ムサオヤジの一人が、瑠希弥さんの車に近づき、車の後ろに付けられた小さな機械を取った。

「発信機か？」

江原ッチが歯軋りした。

「お前らは機械には疎いからな。それにこの発信機にも、仙一様のご加護がある」

ムサオヤジはドヤ顔で言った。

仙一って言っても、楽天の監督じゃないわよ。

サヨカ会の宗主だった鴻池大仙（こうのいけたいせん）の息子だ。

私達が退治に行くのが、そいつである。

「挟み撃ちにするつもりが、挟まれていましたか……」

雅功さんの顔から笑みが消えた。

え？　って事は、マジでヤバいの？

突然ピンチのまどかだった。

裏の裏の裏をかくのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者だ。

突っ込んでる余裕ないから、華麗にスルーね。

私達は、以前戦ったサヨカ会の残党の本拠地がある新潟県村上市に向かう途中、敵の挟み撃ちに遭ってしまった。

前にいるのは黒い袈裟を着た僧侶。

後ろには私達の車をつけて来ていたムサオヤジ達。

しかも、私と綾小路さやかがムサオヤジ達に捕まってしまったのだ。

今までにないピンチと展開だ。

「この嬢ちゃん達の命が惜しかったら、大人しくしな」

悪役の聞き飽きた台詞。他に言う事はないのだろうか？

それから、羽交い絞めにしたままで喋らないで欲しい。

口、臭過ぎ。歯を磨いた事ないでしょ？

「あ、そうか」

私は両手が開いている事に気づき、さやかにアイコンタクトをとった。

さやかもそれに気づき、頷く。

「インダラヤソワカ」

私とさやかは、帝釈天の真言を同時詠唱した。

雷撃がムサオヤジ達を襲う。

「無駄だ」

誰かがそう言った。

「何で？」

その誰かの言葉通り、雷撃は途中で消えてしまった。どういう事？

「我らには、最高神のご加護がある。その程度の真言など、通じぬ」

前方にいる僧侶が言ったようだ。笠を持ち上げ、こちらを見ると、ニヤリとした。

「なるほど。光明真言ですか。しかし、それは万能ではありませんよ」

私の彼氏の江原耕司君のお父さん、江原雅功（えはらまさとし）さんが言った。

そうよ！　私も以前、光明真言のせいで危なかった事があったけど、それ以上の力を合わせれば破れるのよ！

「万能ではないが、今のお前達には破れぬ。我らの方が数段力が上だからな」

僧侶は笠を投げ捨て、その顔を露にした。それなりに年取ってる感じの僧侶だ。

「ほう。貴方でしたか」

雅功さんはフッと笑った。知り合いなの？

「我が名は乗如（じょうにょ）。以前、西園寺蘭子に苦杯を嘗めさせられた者だ。今回はそうはいかんぞ」

乗如？　確か、G県のS村の自害沢で騒ぎを起こした腐れ坊主だ。

蘭子お姉さんに聞いた覚えがある。

根に持つタイプか。嫌だな。

「そうですか？　私にはそうは思えませんがね」

雅功さんは負けずに言い返す。

乗如という坊主がどれほどの力の持ち主かわからないが、ムサオヤジ達は霊能者じゃないみたいだし、勝ち目ないと思うんだけど？

「では、行くぞ」

乗如がニヤリとして印を結ぶ。途端に奴の気が一気に高まった。

「江原雅功、お前がちょっとでも動けば、あの二人のガキの命はないぞ」

乗如はドヤ顔で言った。そういう事か。

蘭子お姉さんにボコボコにされるはずだ。

「了解だ！」

いきなり美輪幸治君が走り出す。

「美輪君！」

私の親友で、美輪君の彼女である近藤明菜が叫んだ。

「な、に、い！？」

乗如は何もできないまま、美輪君のパンチで吹っ飛んだ。

「おのれ！　ガキ共を殺せ！」

顔を腫らした乗如がムサオヤジ達に怒鳴る。

「そうはいかないですよ」

どこからか声がした。この声は確か……。

「何！？」

ムサオヤジ達はギョッとして振り返った。

そこには、小倉冬子さんの幼馴染にして、現在いい感じの人でもある、濱口わたるさんがいた。

「はああ！」

わたるさんが気合を入れると、ムサオヤジ達は硬直してしまった。

不動金縛りの術だ。すごい！

「まどかりんから離れろ、この！」

動けなくなったムサオヤジを江原ッチが蹴飛ばす。

「江原ッチ！」

「まどかりん！」

私と江原ッチは人目も憚らず、抱き合った。

「無事で良かった」

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんがさやかを助けた。

「江原耕司君」

私は、さやかと瑠希弥さんが抱き合っているのをジッと見ている江原ッチに言った。

「ご、ごめんよお、まどかりん」

江原ッチは慌てて土下座した。全く、懲りないんだから。

ふと見ると、美輪君も明菜に正座させられていた。

ホント、男って……。

「貴様ら、許さんぞ！」

そうそう、まだ乗如が片づいていない。

「我が秘術で、全員あの世行きだ！」

乗如が立ち上がって印を結んだ時だった。

「あら、貴方、どうしてここにいるの？」

懐かしい声がした。

「い？」

乗如の顔色が悪くなる。汗がダラダラと頭頂部から流れ落ちるのが見える。

「ひいいい！」

彼は声の主を見ると、
「お、覚えておれ！」
とものすごい速さで逃げ去ってしまった。
「失礼ね、全く。私を見て、絶叫するなんて」
そう言って、不満そうに腕組みをした女性。
西園寺蘭子お姉さんだった。
「先生！」
瑠希弥さんが誰よりも早く反応し、駆け出す。
「瑠希弥」
蘭子お姉さんは、まるで菩薩様のような穏やかな笑顔で返した。
「会いたかったです！」
瑠希弥さんはいきなり蘭子お姉さんに抱きついた。
やっぱりこの二人ってば……。
「お久しぶりです、西園寺さん」
雅功さんが言った。蘭子お姉さんはすでに号泣している瑠希弥さ

んの頭を撫でながら、
「お久しぶりです、江原先生」
あれ？　誰かいない気がするけど？
「そう言えば、八木麗華さんはどうされましたか？」
雅功さんが尋ねた。すると蘭子お姉さんは苦笑いして、
「この先で検問に引っかかって、今警察の人と揉めてます」
私達は思わず顔を見合わせた。麗華さんらしいな。
「とにかく、皆さん、ご無事で何よりです」
蘭子お姉さんは瑠希弥さんを宥(なだ)めすかしながら、私を見た。
「まどかちゃん、大人っぽくなったわね。見違えたわ」
「あ、ありがとうございます」
何だか恥ずかしい。胸は全然成長していないけど。
「では、参りましょうか、鬼退治に」
蘭子お姉さんは真顔になった。
私達はそれに応じて頷いた。

さあ、本番だ。

山寺に着いたのよ！

私は箕輪まどか。中二の美少女霊能者だ。

今、私達は、サヨカ会というカルト教団の残党が巣食う新潟県村上市の廃寺に向かっている。

廃寺と言っても、「アルプスの少女」と関係ないのは既出だ。

え？　無理してネラーッぽく振舞うな、ですって？

そ、そんなつもりないわよ！　へ、変な事言わないでよね！

山形から、親友の八木麗華さんとやって来た西園寺蘭子さん。私の憧れの人。

蘭子お姉さんは、小倉冬子さんの幼馴染の濱口わたるさんと共に麗華さんの車に同乗している。

「これだけのメンバーが揃ったんだから、楽勝だね、まどかりん」

いつの間にか、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの車に移って来た私の彼氏の江原耕司君。

本当は嫌だったんだけど、仕方がない。

「後ろでイチャイチャしないでよね」

綾小路さやかがしっかり助手席を確保し、私達を見る。

「それどころじゃないわよ。ね、江原ッチ」

私は鋭い視線を江原ッチに投げかける。江原ッチは即座にその意味を悟ったのか、

「は、はい」

と妙に丁寧な受け答えだ。瑠希弥さんは、そんな私達のやり取りをクスクス笑いながらルームミラーで見ていた。

「あ」

瑠希弥さんの大きな胸が振動する。あ、いや、胸のポケットに入っている携帯が鳴る。

「あ、俺、出ます」

江原ッチがなんの躊躇いもなく、瑠希弥さんの胸に手を伸ばした瞬間だった。

「私が出ます」

さやかが江原ッチの伸ばした手をバチンとはねつけ、瑠希弥さんの胸のポケットから携帯を取り出す。

ナイスさやか！　私とさやかはハイタッチしてファインプレーを喜ぶ。

「江原耕司君、ここで車を降りてもらっても構いませんよ」

私は呪いの言葉を吐くように言う。

「ひいい！」

江原ッチはビクッとして身を縮めた。

「見えて来たわ。あれがそうみたい」

さやかが、江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんからの連絡で、前方に見える小高い山の上に建つ小さなお寺を指差す。

言い忘れたけど、電話をかけて来たのは私の親友の近藤明菜の彼の美輪幸治君で、雅功さんは隣で話しているだけよ。

交通ルールは守ってるんだからね。

「禍々しいわね」

瑠希弥さんがその寺を見て呟く。私も微かにだが、寺の妖気のようなものを感じた。

雅功さんの話では、サヨカ会の宗主だった鴻池大仙（こうのいけだいせん）と同じく、息子の仙一も霊能者ではないらしい。

だからこそ、日本各地で霊能者を拉致しているのだ。

「あんな事、二度とさせない」

以前の戦いを思い出したのか、江原ッチは拳をギュッと握りしめた。

久しぶりに見る凛々しい江原ッチだ。何か、カッコいい。

寺に近づくにつれ、道は細くなり、やがて舗装のされていないガタガタ道になった。

周りは昼尚暗い森。カラスの鳴き声が妙にたくさん聞こえるのも、何だか不気味だ。

「何も仕掛けて来ませんね」

江原ッチは周囲を警戒しながら言う。敬語で言ったという事は、会話の対象は瑠希弥さんだという事だ。

「ええ。返って気味が悪いわね」

瑠希弥さんはパワー全開で周囲を索敵中だ。

ところで、索敵って何？

やがて、森の木々が途切れ、私達の車は寺の山門の前に到着した。

その山門の奥には、気が遠くなるほどの石段が見える。その先に

寺があるのだ。

何年も前から放置されているらしく、山門はボロボロだ。

野犬やその他の森の動物達の住処になっていたようだ。

サヨカ会残党が使うようになって、動物達は追いやられたらしいけど。

「結界が張られていますね」

車を降り、雅功さんが山門を見上げて言う。

「いっちょ、ぶち破ったろか！」

麗華さんが嬉しそうに右腕をグルグル回しながら言った。

「その必要はないみたいですよ」

わたるさんが言った。

「何でですの？」

聞いた事がないような猫撫で声を使い、麗華さんがニッコリ微笑んでわたるさんに近づく。

もしや、狙っているのか、わたるさんを？

それは怖い。第二次「冬子麗華戦争」が始まりそうだ。

「結界が解かれたからよ」

蘭子お姉さんが代わりに答えた。

「ほォ、さよか」

わたるさんとの会話を邪魔された麗華さんは不機嫌そうに言った。

「ほうほう、皆さん、たいそうなお顔ぶれですな」

ニコニコしながら山門の奥から現れたのは、鴻池仙一とその手下ＡＢＣだ。

「そうや。これだけのメンバー呼んだんやから、ギャラは高いで、おっさん」

早速凄む麗華さん。すると仙一は、

「それは困りましたね。当方は見ての通りの貧乏寺でして、お金はありませんよ」

ととぼける。麗華さんはヒートアップし、

「ふざけるな、ボケ！　すぐに降参させたるから、覚悟しいや！」

といきなり印を結んだ。

「そんな強気でよろしいのですかな？　当方には、客人がいらっしゃるのですよ」

仙一はニヤリとして言う。客人？　何だ、それ？

「あああ……」

何故かさやかが震え出し、涙を流し始める。

「どうしたの、さやか？」

私はしゃがみ込んでしまったさやかに近づいた。

その時、懐かしい気を感じた。これって、まさか？

私は仙一を睨んだ。

奴の後ろから現れたのは、目も虚ろな牧野徹君。

私の元彼にして、さやかの彼。

「な、何や？」

牧野君と面識がない（いや、本当はあるはずなんだけど、覚えていないのだ）麗華さんは、キョトンとして蘭子お姉さんを見る。

「卑怯ね、貴方」

蘭子お姉さんの目が鋭くなる。

「その言葉、光栄ですねえ」

仙一はそう言って、高笑いをした。

形勢不利のまどか達だった。

山門の戦いなのよ！

私は箕輪まどか。中二の霊能美少女。

私達は、カルト教団「サヨカ会」の残党が巣食う新潟県村上市の廃寺にやって来た。

山門まで辿り着いた時、敵のトップである鴻池仙一（こうのいせんいち）が現れた。

しかも、驚いた事に、かつての私の彼である牧野徹君と共に。

「アホか、おのれは？　そないなガキ一人人質にして、ウチらがほー、さいでっか、てなる思うたら、大間違いやで！」

西園寺蘭子さんの親友の八木麗華さんは、牧野君の事など全然気にしていないらしい。

「ほお。そうですか。ならば容赦なく攻撃を仕掛けて下さい。私は全くの無防備ですから、すぐに仕留められますよ」

仙一は小憎らしい笑みを浮かべ、麗華さんを挑発した。

「何やと、こらあ！」

麗華さんは本当に攻撃しそうな勢いだ。

「やめてええ！　お願いだから！」

綾小路さやかが、麗華さんにすがりついた。

こんなに動揺して泣くさやかは見た事がない。

写メに撮っておきたいくらいだ。

「まどか、あんたねえ！」

泣きながらも、私の心の声を聞き逃さないのはさすがだ。

「牧野君は、私の全てなの！　お願いだから、止めて！」

さやかは本当に必死になって麗華さんに訴えている。

「く……」

麗華さんも、さやかの訴えに折れ、遂に印を解いた。

「ほっほっほ、そうですか。攻撃しないのですか。ならば、私から行きますよ」

仙一がニヤリとして私達を見渡す。

来るのか、あれが？

「食らいなさい、愚かな方々！」

仙一は「鈴（りん）」と「撥（ばち）」を取り出し、鳴らした。

「うううう！」

私達は、なす術なく動けなくなる。

感応力の強い小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが、一番強く反応している。

その悶え方は、女の私もドキドキしてしまいそうだが、今はそんな余裕はない。

「瑠希弥！」

蘭子お姉さんと麗華さんは必死に鈴の音に抵抗しているようだが、そこまでが限界みたいだ。

瑠希弥さんのところまで行く事はできない。

「ぬう……」

私の彼氏の江原耕司君も、彼のお父さんの雅功（まさとし）さんも動けない。

そして、小倉冬子さんの幼馴染みの濱口わたるさんも同じだ。

「はっはっは！　どうです。参りましたか？」

仙一がドヤ顔で言う。悔しいが、どうする事もできない。

「俺には効かないぜ！」

そこへ、救いの神である私の親友の近藤明菜の彼氏である美輪幸治君が見参。

「そんなもの、この美輪幸治様には通じねえよ！」

美輪君は仙一の手下ＡＢＣをたちどころに倒し、仙一に掴みかかる。

「このオヤジがあ！」

美輪君は仙一の持っていた鈴を叩き落とし、撥を奪い取った。

やった！　作戦成功だ！

「ふふふ、はははは！」

ところが、仙一が高笑いを始めた。

「引っかかりましたね。その撥は、私以外の者が持つと、大変な事が起こるのですよ」

え？　何？　鈴の恐怖から解放されたのも束の間、次なる罠が待っていたのだ。

「うわあああ！」

撥を持った美輪君が苦しみ出す。どうしたの？

「しまった！」

雅功さんが焦りの色を見せたので、思わずギョッとした。

「くそ、悪霊を仕込んどったんか？」

麗華さんが悔しそうに呟く。

「フフフ、これでこの忌ま忌ましい存在だった坊やも、私の下僕です」

仙一が言った。美輪君はその仙一に対して、跪いた。

「何してるのよ、美輪君！」

明菜が自分の彼の変貌に驚愕して叫ぶ。

「なら、悪霊を吹き飛ばしたる！」

麗華さんが印を結ぶ。すると仙一が、

「おっと。そんな事はさせませんよ。もしあなた方の誰かが真言を使ったら、この二人の坊やの命はありませんので、悪しからず」

麗華さんは歯軋りして仙一を睨んだ。私も悔しくて仕方がない。

どうすればいいんだ？

「さあ、狂ってしまいなさい、邪魔な方々よ！」

仙一が、操られた美輪君から撥を受け取り、再び鈴を打ち鳴らした。

「くううう！」

私達はまた、動きを封じられた。
鈴に対して耐性のある美輪君は仙一の手の内。
絶体絶命だ。
「さあ！」
更に打ち鳴らされる鈴。もうどうかしてしまいそうだ。
その時だった。
「美輪君、何してんのよ！？　貴方はそんなに弱い人だったの！？」
明菜が泣きながら怒鳴り始めた。
「そんな弱い美輪君なんて大嫌いよ！」
明菜は絶叫した。
「うおおお！」
美輪君がその明菜の魂の叫びに呼応したかのように雄叫びをあげた。
「俺は弱くねえ！　俺は強いぜ、アッキーナアッ！」
美輪君に取り憑いていた悪霊が美輪君を離れた。

「何だと！？」

仙一はこれには面食らったようだ。

「おらあ！」

美輪君の回し蹴りが仙一の鈴と撥を跳ね飛ばした。

「来い！」

美輪君は牧野君の手を取り、仙一から離れた。

「おお！」

私と江原ッチは思わずハモりで感動した。

「オンマリシエイソワカ」

すかさず蘭子お姉さんが摩利支天の真言で悪霊を除霊した。

「おのれ！」

仙一は手下ＡＢＣを引き連れ、山門の奥へと逃げ、階段を駆け上がる。

「逃がさへんで、ボケ！」

麗華さんが真っ先に追いかける。それに続く蘭子お姉さん、瑠希弥さん、わたるさん。

「美輪君、アッキーナとさやかと牧野君をお願いね！」

「おお、任せとけ、まどかちゃん！」

美輪君はＶサインを出して応じてくれた。

私と江原ッチは頷き合い、雅功さんと共に蘭子お姉さん達を追いかける。

いよいよ最終決戦が近い。

そして、またしても、最終回の予感に怯えるまどかだった。

山寺の決戦開始なのよ！

私は箕輪まどか。中二の霊能少女。

今、私達は、新潟県村上市の一角にある森の奥の廃寺の石段を激走している。

「待てや！」

西園寺蘭子お姉さんの親友である八木麗華さんは、短いスカートを履いているにも拘らず、猛烈な勢いと大股で石段を駆け上がっている。

「麗華、丸見えよ」

冷静な蘭子お姉さんが突っ込むが、

「知るか！」

麗華さんは後から駆けている濱口わたるさんが視線を逸らせてしまう程、お構いなしだ。

「八木先生……」

何故か、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんは感動しているみたい。

「私も！」

瑠希弥さんは麗華さんに触発されて、スピードアップした。タイ

トスカートが裂けそうな速さだ。

「お、俺も負けてられない！」

私の彼氏の江原耕司君が遥か後方から追い上げる。

「江原耕司君、後でお話があります」

私は息を切らせながらも、そう言った。

「まどかりん、お説教は後でね！」

江原ッチは何故か爽やかな笑顔を見せ、石段を二段抜きで駆け上がる。

「俺は、霊感のない人を巻き込む奴が許せない！　美輪や牧野君を利用した鴻池仙一（こうのいせんいち）が許せないんだ！」

「江原ッチ……」

私は江原ッチを誤解していた事を恥じた。

「わかった、江原ッチ」

感動してそう言った直後だった。

「瑠希弥さん、大丈夫ですか？」

江原ッチはよろけそうになった瑠希弥さんを支えた。

「ありがとう」
瑠希弥さんが笑顔で答える。
「江原ッチ！」
私は加速装置を使ったゼロゼロナインのように速く走った。
「ナウマクサマンダボダナンベイシラマンダヤソワカ」
私は毘沙門天の真言を唱えたのだ。
「やった！」
石段を一番最初に昇り終えたのは、私だった。
いや、そんな事はどうでも良いのだ。
「速いなあ、まどかちゃん」
麗華さんはヘロヘロになっていた。
あまりにも頭に血が上り過ぎて、真言を使うのを忘れたらしい。
そして、次に瑠希弥さん、江原ッチ、蘭子お姉さん、わたるさん、江原ッチのお父さんの雅功さんが昇り終えた。
「ほっほっほ、ようこそ、我が教団の新しい本部へ」
そこは廃寺の境内だったが、そのほぼ真ん中に立っている仙一が

言った。

「随分余裕やな？　撥(ばち)と鈴(りん)もないくせに」

麗華さんが呼吸を整えながら言う。

「そんなものは必要ありません。あなた方の相手をするのは、私ではありませんから」

仙一は、これぞやられ役という台詞を吐いた。

「何！？」

麗華さんが一歩踏み出そうとした時だった。

「麗華、いけない、動かないで！」

蘭子お姉さんが叫んだ。

「何や？」

境内が揺れる。元々崩れかけていた灯籠が全部倒れ、廃寺の本殿も揺れている。

「あなた方は大きな勘違いをしています。我が父である大仙(だいせん)は肉体は滅びましたが、魂は滅んでいないのです！」

仙一が叫んだ。

そんなはずはない。大仙はあの時、地獄の使いの黒い着物の少女

に連れて行かれたのだ。

魂がこの世に戻る事などできないはず。

「魂じゃないわ、まどかちゃん。大仙の残留思念。それを増幅させたもののようよ」

蘭子お姉さんが私の肩を抱き、後ろに下がる。

やばいのだ。それは私もわかったので、蘭子お姉さんに合わせた。

「欲望が一人歩きして、この世を彷徨(さまよ)っているのですか？　醜いですね」

雅功さんが言った。

「何とでも言いなさい。我が父は無敵。いかなる真言でも倒せない。何故なら、我が父は神だからだ」

仙一は狂気に満ちた目で叫ぶ。

次の瞬間、本殿の屋根を吹き飛ばして、気持ちが悪くなりそうな念の塊が飛び出して来た。

「日本中で霊能者を拉致していたのは、このためか。人間のする事じゃない」

わたるさんが悔しそうに言った。

そうだ。とんでもない事をしたのだ、この仙一という男は。

この残留思念を増幅させるためにたくさんの霊能者の力を吸い取って殺したのだ。

「日本中の優秀な霊能者の力を頂く事が、そんなにいけない事ですか？」

仙一は肩を竦めてみせる。そして、

「後はあなた達の力をいただけば完了です。世界征服に出かけられます」

もう異常だ。どうかしている。でも、決してブラマヨ吉田ではない。

「ウチらに勝てる思うてるのか、おっさん？』

麗華さんが凄む。

「勝てますよ、簡単にね」

仙一のその言葉に呼応するように、残留思念は人の形となり、やがてあのキモいおっさんだった大仙の姿になった。

但し、その大きさは、廃寺の本殿の屋根より遥かに高い。

恐らく、二十メートルくらいありそうだ。

ほとんど妖怪だ。

もし、仙一が言うように、真言が通じないのだとすると、本当にヤバいかも知れない。

「真言が通じん訳ないやろ、ボケ」

麗華さんが印を結び、

「オンマカキャラヤソワカ！」

と大黒天真言を唱えた。

「え？」

しかし、真言は不発だった。麗華さんは唖然とした。

「結界、か」

わたるさんが周囲を見渡して言った。

「その通り。この境内は、我が結界の中。如何なる真言も使えぬ」

いつの間に来たのか、あの乗如という坊主が現れた。

「貴方、まだ懲りていないのね？」

蘭子お姉さんが静かに言うと、また坊主はビビっようだ。

「お、脅かしても無駄だ。西園寺蘭子得意の奥義も使えないぞ」

蘭子お姉さんは軽く落ち込んだ。どうして？

「さあ、ショータイムです」

仙一は、憎らしい程の笑顔で告げた。

最終回がますます濃厚で、気が気ではないまどかだった。

残留思念は恐ろしいのよ！

私は箕輪まどか。中二の霊感少女だ。

今、私達美貌の戦士とイケメン戦士達は、不細工な悪党と戦っている。

ああ、引かないでよお。

悪の権化とも言うべき、鴻池仙一（こうのいせんいち）。

奴は、自分の父親である大仙（だいせん）の残留思念を使って、巨大な「キモいおっさん」を作り出した。

二十メートルはあるその不気味は物体は、ズシンズシンと私達の方に近づき始めた。

「何や、結界に守られとるだけやないか、ボケ！」

麗華さんが相変わらずの強烈な言葉で罵る。

「何とでも言いなさい、下劣な服装のアホ女が」

仙一はニヤリとして言い返した。

「何やと！？　ウチのどこが下劣やねん！？」

麗華さんは更にヒートアップしたが、誰も同情してくれなかった。

確かに、麗華さんのファッションセンスに関してだけは、奴と同意見だ。

麗華さん、ごめんなさい。

「まどかりん、違う真言を連続して唱えれば、効くかも知れないよ」

江原ッチが囁いた。

私は小松崎瑠希弥(こまつざき るきや)さんに目配せする。瑠希弥さんが頷き、蘭子お姉さんを見る。蘭子お姉さんも頷く。

「インダラヤソワカ」

私が帝釈天の真言を唱える。しかし、反応がない。

やっぱり、あの乗如っていう坊主の結界のせい？

その時私は、濱口わたるさんがゆっくりと乗如の背後に回っているのに気づいた。

そうか、江原ッチはこの機会を作るために私にあんな事を……。

と思ったが、

「瑠希弥さん、今です！」

江原ッチは私を無視して、瑠希弥さんと走り出した。

てめえの血は何色だ！？　思わず南斗水鳥拳の使い手の名台詞が

頭をよぎった。

「チョロチョロしないでくれないか、坊や達！」

乗如が江原ッチの誘いに乗ったようだ。

「オンアミリタテイゼイカラウン」

乗如が阿弥陀如来の真言を唱えた。すると乗如の気が高まる。

その時だった。

「お疲れ様です、乗如さん。貴方の役目は終わりましたよ」

仙一が謎の言葉を吐いた。

「何！？」

乗如がギョッとして仙一を見た。

「ぐわおぐあ！」

その途端、大仙の残留思念が動き、乗如を襲った。

「があ！」

乗如は残留思念に飲み込まれ、消えてしまった。

そばまで行っていたわたるさんは素早く回避して難を逃れた。

「何、今の？」

江原ッチが瑠希弥さんと顔を見合わせる。

顔を見合わせる相手が違うでしょ、江原ッチ！

「貴方っていう人は……」

蘭子お姉さんがキッとして仙一を睨んだ。凄みがあるなあ。

「彼も我が神の生け贄となれて、本望でしょう」

仙一はゲラゲラと笑った。おかしいよ、こいつ！

大仙の残留思念は、乗如の気を取り込み、更に巨大化し始めた。

「皆さん、離れて！」

江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんが叫んだ。

私達は境内の端まで下がった。

「坊主が消えたんで、結界なくなったで！」

麗華さんがその機を逃さず、

「オンマカキャラヤソワカ」

と大黒天真言を唱えた。真言は有効だったようだが、大仙の残留思念を消し飛ばす事はなかった。

「何やて？」

麗華さんはビクンとして、蘭子お姉さんを見る。

「どういう事？」

蘭子お姉さんにもわからないようだ。

「そういう事ですか」

雅功さんが呟いた。

「どういう事さ、父さん？」

江原ッチが尋ねた。雅功さんは大仙の残留思念を見上げたままで、

「これは人間でも霊体でもない。要するに、真言の理（ことわり）を理解しない只の憎悪の塊。だから、真言は通じない」

仙一は感心したように拍手してみせる。

「さすが、江原雅功。当代随一の退魔師と言われるだけの事はありますねえ」

「ほなら、おっさんをぶっ潰せばええんやろ？」

麗華さんが仙一を睨みつける。しかし、蘭子お姉さんが、

「無駄よ。残留思念はその男とは関係なく動いているわ。こいつそ

のものを何とかしないと」

「く……」

麗華さんは歯軋りして残留思念を見上げた。

「そういう事ですよ、八木麗華さん。残念でしたね」

仙一のその挑戦的な言い方に麗華さんはぶち切れそうだ。

どうすればいいんだろう？

私は何かいい方法がないか考えた。

しかし、何も思い浮かばない。

こんな憎しみの塊とどうやって戦えばいいの？

命があるじゃないか。

某艦長の恐ろしい台詞を思い起こす。

それは嫌だ。

もっと建設的で、前向きで、後味の悪くない解決方法はないの、作者さん！

不安に怯えるまどかだった。

蘭子お姉さんの新必殺技なのよ！

私は箕輪まどか。現在、キモいおっさんの残留思念と交戦中。

うう、気持ち悪いよお。

「真言の使えないあなた方など、只の変人集団です。死になさい」

鴻池仙一（こうのいせんいち）が言い放つ。

「あんたねえ、言うに事欠いて、変人集団て何よ！？」

私は激怒した。もうこうなったら、どんな手を使っても、あのキモいおっさんを吹っ飛ばす！

命があるじゃないか。

また、あの「呪いの言葉」が頭の中を駆け巡る。

嫌よ！　こんなキモいおっさんの残留思念を消し飛ばすために、命を捨てるなんて！

「変人集団でお気に召さなければ、イカれた集団でどうです？」

仙一はゲラゲラ笑いながら言った。

「何やと、こらあ！」

麗華さんが切れた。

「残留思念に通じなくても、あんたには通じるやろ、おっさん！」

麗華さんは印を結んだ。

「オンマケイシバラヤソワカ！」

大自在天真言が炸裂した。

「おお！」

仙一は仰天したようだ。しかし、

「ふうおお！」

大仙（だいせん）（つまり、キモいおっさん）の残留思念が麗華さんの真言を吸収し、消してしまった。

「くっ！」

麗華さんが歯軋りする。仙一はニヤリとして、

「ダメですよ、私を攻撃しても。あなた方の相手は、我が父にして神であらせられる大仙様ですからね」

私は私の彼の江原耕司君のお父さんの雅功（まさとし）さんを見た。しかし、雅功さんは悔しそうに仙一を見ているだけだ。

小倉冬子さんの幼馴染の濱口わたるさんを見る。わたるさんも歯軋りしている。

続いて、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんを見た。

瑠希弥さんは歯軋りしていないし、悔しがってもいない。

「先生、一つだけ方法があります」

瑠希弥さんはその超絶的な感応力を駆使して、キモいおっさんの弱点を探っていたのだ。

「瑠希弥！」

蘭子お姉さんが嬉しそうに瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんも嬉しそうだ。

ああ、やっぱり、この二人って……。

「デタラメを言ってはダメですよ、小松崎さん。我が神に弱点などありませんよ」

仙一は瑠希弥さんを嘲笑った。すると蘭子お姉さんが、

「嘘ではないわ、仙一さん。貴方が知らないだけよ」

「何！？」

仙一はギクッとしたようだ。そして、

「ええい、うるさい！　さあ、神よ、まとめて生け贄として下さい！」

とキモいおっさんに叫んだ。

「ふおああ！」

キモいおっさんは雄叫びを上げ、また進み始めた。

「麗華、下がって。ここは私と瑠希弥で何とかするわ」

蘭子お姉さんが言うと、麗華さんは、

「アホ抜かせ！　この八木麗華様には、後退はないわい！」

と言い返したが、

「麗華！」

麗華さんは蘭子お姉さん会心の睨みにビクッとし、

「わ、わかった」

と引き下がった。ちょっと怖い、蘭子お姉さん……。

「瑠希弥」

「はい、先生」

二人は進み出て、キモいおっさんの前に立ち塞がった。

「何をするつもりです、西園寺さん？」

仙一は凶悪な顔をしながらも、妙に丁寧な言葉遣いなのが気色悪い。

「残留思念は霊体ではないから、確かに真言は通じない。でも、残留思念はその人が生きていた時に培ったものの現れ。ならば、生きていた時の事を思い出してもらうわ」

蘭子お姉さんはそう言うと、瑠希弥さんと共に印を結び、真言を唱えた。

「だから、真言は効かないと言っているでしょう？　バカなのですか、貴女は？」

仙一は肩を竦めて言う。

私もチラッとだけど思ってしまった。ごめんなさい、蘭子お姉さん。

「この真言は攻撃のための真言ではないわ」

蘭子お姉さんは慈愛に満ちた目で仙一を見た。瑠希弥さんも。

ふと気づくと、江原ッチが鼻の下を伸ばしている。

ちょっとムカついたが、あの二人のこの気を当てられては、そうならない方が凄い。

「オンカカカビサンマエイソワカ」

蘭子お姉さんと瑠希弥さんは地蔵真言を唱えていたのだ。

どうするつもりなのだろう？

「が？」

キモいおっさんの動きが止まる。おっさんの前に光が現れ、それがやがて女性の姿になった。

奇麗な人だ。誰だろう？

「か、母さん！」

仙一のその言葉に私は仰天した。

あの奇麗な女性が、キモいおっさんの奥さんで、仙一のお母さん？

世の中、どうなってるのよ？

「貴方、何をしているの？　愚かしい事を」

女性はにこやかに残留思念に語りかける。

「ぐおおお！」

しかし、残留思念は反論しているようだ。女性に何か言い返している。

始めはニコニコして聞いていた女性の霊だったが、

「やかましい、このごくつぶしが！　あんたが甲斐性がないから、私は苦労して、それが元で過労死したんだ！　その上、息子の仙一まで、こんなくだらない事に巻き込んで！」

と急に変貌を遂げた。残留思念が後退りする。仙一も呆気に取られている。

「消えな！　あんたはもうこの世にはいないんだ。これ以上皆さんに迷惑かけるんじゃないよ！」

奥さんの霊に罵倒され、残留思念はスーッと萎んで行き、消滅してしまった。

「仙一」

女性の霊が鋭い目つきで仙一を睨む。

「は、はい！」

仙一は直立不動になった。

「あんたも、いい加減真っ当になりなさい」

「はい」

母親に叱責され、仙一は項垂れてしまった。

「しっかり償うのよ、仙一」

母親の霊はまたにこやかな顔に戻り、天へと消えて行った。

「母さん……」

仙一は涙を流しながらそれを見送った。

こうして、私達は、最大のピンチを切り抜けたのだった。

大人しくなった仙一は雅功さんとわたるさんに連れられて石段を降りて行く。

「さすがやな、蘭子、瑠希弥」

麗華さんが二人を褒め称えた。すると瑠希弥さんは、

「私は先生のお手伝いをしただけですから」

と照れたように俯いた。相変わらず謙虚な瑠希弥さんだ。

え？　お前も少しは見習え、ですって？　うるさいわね！

「ちょっと失敗しちゃったのよ、実は」

蘭子お姉さんもチロッと舌を出して言う。可愛い。

江原ッチは蘭子お姉さんにも熱い視線を送っている。

後でお仕置きね、やっぱり。

「失敗って、どういう事ですか？」

私は不思議に思って尋ねた。何も失敗していないと思ったからだ。

すると蘭子お姉さんは、

「実は、あの女性の霊は、私と瑠希弥で作り出したものなの。大仙の奥さんの霊は呼べなかったので」

「ええ？」

じゃあ、あの迫力のある女性は？

「瑠希弥が女性を作り出して、私が喋らせたんだけど、本当は慈愛で改心させるつもりだったの。でも、途中でその、切れちゃって……」

蘭子お姉さんが恥ずかしそうに言うと、麗華さんがガハハと笑い、

「つい、裏蘭子が出たんか？」

と言った。蘭子お姉さんはキッと麗華さんを睨む。麗華さんはビクッとした。

「修行が足らないわね」

蘭子お姉さんは私と江原ッチを見て自嘲気味に言う。

「そんな事ないですよ。すごかったです。感動しました」

江原ッチが蘭子お姉さんの手を握って言った。

「そ、そうですか？」

蘭子お姉さんは、あまりに積極的な江原ッチに驚いたのか、手を振り払えないようだ。

「先生を動揺させないで下さい、江原君」

瑠希弥さんが江原ッチの手をスッと蘭子お姉さんから放す。

「は、はい！」

江原ッチは瑠希弥さんに手を掴まれて、鼻血を出して倒れかけてしまった。

「だ、大丈夫、江原君？」

瑠希弥さんと蘭子お姉さんが驚いて江原ッチを支えた。

「いろいろと大変やな、まどかちゃん」

麗華さんが私に囁く。私は苦笑いして麗華さんを見た。

そして。

瑠希弥さんは蘭子お姉さんと東京に戻る事を切望した。

しかし、蘭子お姉さんは、

「まだまだ修行が足りないのよ、私は。もう少し、出羽で修行するわ」

「そうなんですか」

うわっと！　また瑠希弥さんにＮＧワードを言われてしまった。

久しぶりだったので、油断していた。

「瑠希弥はまどかちゃんとさやかさんの先生なんだから、頑張ってね」

蘭子お姉さんのその言葉に、瑠希弥さんは泣き出してしまった。

「先生！」

「瑠希弥」

抱き合う二人を見て、江原ッチはまた鼻血を出している。

「江原耕司君」

私は江原ッチの背後に回り、囁いた。

「は、はい！」

江原ッチはビクッとして背筋（せすじ）を伸ばした。

蘭子お姉さんと麗華さんは山形へ、そして私達はG県へと出発した。

最終回は何とか免れたまどかだった。

綾小路さやかと仲良くお勉強なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年生の美少女霊能者だ。

もう好きにして。突っ込んでも無視しても一緒なんでしょ？

あの鴻池仙一（こうのいせんいち）率いるサヨカ会残党との戦いも私達美貌の戦士とイケメン戦士達の勝利に終わった。

仙一は、私の彼氏の江原耕司君のお父さんの雅功（まさとし）さんが、お師匠様のところに連れて行き、改心の修行をさせるらしい。

言っとくけど、お師匠様って言っても、鼻血猿のお師匠様じゃないからね！

サヨカ会残党との戦いがあまりにも壮絶だったため、私はＧＷも楽しめず、中間試験もどうしたのか記憶にない。

それもこれも、作者が話を長引かせたせいだ。恨みます。

そして今日は土曜日。

私は何故かお休みなのにお勉強中だ。

え？　お前が休みの日に勉強するなんて、雪でも降るんじゃないか、ですって？

相変わらず発想が「昭和」ね。違うわよ。

私は、江原ッチの邸に来て、綾小路さやかと勉強中なのだ。

さやかは、この前の戦いで彼氏の牧野徹君が危ない目に遭ったので、もっと霊能力を高めたいと言った。

それを受けて、雅功さんが企画したのが、「小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの集中講座」だったのだ。

まるでタイトルが予備校みたいだけど、気にしないで。

それを聞いた私も、急遽その講座に参加する事にした。

さやかとは以前随分いろいろあったけど、今では友達だから。

あいつ、私以外に友達がいないのよ。可哀想でしょ？

「全部聞こえてるんだけど、まどか」

さやかが言った。しまった、こいつには私の心の声が丸聞こえなんだ。

「少しは自覚しなさいよね」

さやかはムッとして言った。私は苦笑いをして、

「冗談よ。怒らないでよ、さーやかちゃん」

と、G県警鑑識課の最古参である宮川さんの物真似をした。

「何、それ？」

白い目で見られた。

私とさやかは、江原ッチの邸の道場で瑠希弥さんの講義を受ける。

板の間に正座なのはきついが、さやかには負けたくないので、我慢だ。

「よろしくお願いします」

瑠希弥さんと相対して、お辞儀をする。

さやかも、瑠希弥さんの事は心から尊敬しているようで、いつもと違ってにこやかだ。

「軽く悪口言わないでよ」

また聞かれていて、睨まれた。私は大袈裟に肩を竦めた。

「まずは気の高め方を覚えてもらいます」

瑠希弥さんは私とさやかの「コント」を軽くスルーして、講義を

始めた。

私もさやかも真剣に瑠希弥さんの話を聴く。

「まずは下腹部にある丹田(たんでん)に気を集中します」

瑠希弥さんが自分のお腹を触って説明する。

ちなみに私達は全員、汗を掻いてもいいようにTシャツに短パンだ。

だから、さやかに付き添って来た牧野君も、私を心配してくれている江原ッチも出入り禁止だ。

江原ッチのお母さんの菜摘さんの配慮だ。

Tシャツ短パンの瑠希弥さんなんて、江原ッチと牧野君には刺激が強過ぎるからだ。

それに私とさやかも、結構悩殺的な姿だしね。

「あんたはお子ちゃま体型だから大丈夫でしょ」

さやかに嫌みを言われた。私は反論できなかった。

ちなみに丹田とは、気を集めて煉(ね)る事により霊薬の内丹を作り出すための体内の部位の事だ。

要するに身体の中の気を集約する場所。

ここをうまく使いこなせないと、霊能力も高まらないと言う。

「意識してみて下さい」

瑠希弥さんが言う。私とさやかは、下腹部に手を当て、気をそこに集める事を意識した。

おお！　自分の気がそこに集まり出すのを感じた。

「いいですよ。そのまま、限界まで高めてみて下さい」

瑠希弥さんがにこやかな顔で言う。

下腹部の気は、そこを打ち破りそうなくらい集中して来た。

「それではその気を身体の様々な場所に移す事をイメージしてみて下さい」

瑠希弥さんの指導で、私とさやかは、集まった気を右手、頭、左手、右足、左足、胸と、様々な場所に移動させた。

「それを意識せずにできるようになるまで訓練します」

瑠希弥さんが立ち上がり、手本を示す。

本当に自然に気を移動させる瑠希弥さん。驚きだ。

私とさやかは思わず顔を見合わせた。

「さあ、やってみて下さい」

私達も立ち上がり、気の移動を試みる。

しかし、移動がぎこちない。

それに異常に疲労する。

「気を意識し過ぎると、体力と精神力を消耗します。なるべく意識せずに移動させるように」

瑠希弥さんは私とさやかの気の動きを見ながら、いろいろとアドバイスをしてくれた。

「はい、それまで。少し休みましょう」

瑠希弥さんが言うと、私とさやかはその場にドスンと座り込み、ベタンと倒れた。

「疲れたあ」

私は大声で言った。すると瑠希弥さんが、

「最初は相当消耗しますが、慣れれば大丈夫。二人ともスジがいいですよ」

「そ、そうですか」

私は起き上がって瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんは呼吸も乱れていないし、汗も掻いていない。

それに比べて私とさやかは、Tシャツが汗でグショグショだ。

「はい。汗を拭いて下さい」

瑠希弥さんがタオルを渡してくれる。

「ありがとうございます！」

私とさやかは礼を言い、タオルで汗を拭った。

「へえ、まどかもブラしてるんだ」

さやかがまた嫌みな事を言う。汗で下着が透けて見えているのだ。

「う、うるさいわね！」

確かにスカスカだけど、してるわよ！　って、何言わせるの！

しばらく休憩してから、私達は再び気の巡らしを行った。

時間が経つにつれ、私達は気をスムーズに移動できるようになった。

でも、どうしても意識してしまうので、疲れが溜まる。

「はい、そこまで。今日はこれで終わりにします。また来週ね」

「ありがとうございました」

私達は互いに向き合って正座し、お辞儀をした。

そして、その後は楽しいランチタイム。

江原ッチと牧野君も同席するので、私達はシャワーを浴びてから着替えをすませ、江原家のキッチンに行った。

菜摘さんお手製のよだれが出そうな料理の数々を見て、疲れが吹き飛ぶ。

「さあ、召し上がれ」

菜摘さんの言葉を合図に、

「いただきます」

と私達は食事を始めた。

「残念だなあ。まどかりんの短パン姿、見たかったなあ」

江原ッチが囁いた。

「嘘ばっかり。本当は瑠希弥さんの短パン姿を見たかったんでしょ？」

私が言い返すと、江原ッチはわかりやすく動揺した。

全く、男って奴は……。

さやかは仲良く牧野君と歓談しながら食事をしていた。

こいつも、あの嫌みな性格を直してくれれば、いい子なんだけどなあ。

「聞こえてるわよ、まどか」

さやかが私をチラッと睨んだ。私はテヘッと戯(おど)けてみせる。

まだまだ憧れの人である西園寺蘭子さんは遠い存在だと思うまどかだった。

小倉冬子さんが結婚するのよ！

私は箕輪まどか。中学二年生の霊能者。それなりに美少女である。

だーかーら、突っ込まないって言ってるでしょ！

今日は日曜日。お父さんに言わせると、

「ねてようび」

なのだそうだ。メモメモ。

私も、先日の新潟での戦いと、綾小路さやかと受けた小松崎瑠希（こまつざきるき）弥（や）さんの集中講座が効いて、今日は惰眠を貪っている。

だからといって、某漫画の兄貴の方ではない。

「おい、かまど、冬子さんが来てるぞ」

相変わらず、エロ兄貴は常識がない。

いくら妹とは言え、ノックなしでの来室は固くお断わりしたいのだ。

「何よ、お兄ちゃん！　いきなり部屋に入って来ないでよ！」

私は脱ぎかけたTシャツを慌てて着直した。

「心配するな。お前の裸なんか見たくもないから」

よく見ると、兄貴は何故か涙ぐんでいる。

「いいから出てって！」

疑問が残る展開だが、今は叩き出すのが先決だ。

そして、無事可愛い服に着替えた私は階段を駆け下り、玄関に行った。

「今日は、まどかちゃん。ごめんなさいね、お休みの日に」

そこには、「誰？」と訊きたくなるほど奇麗になった小倉冬子さんと、冬子さんの幼馴染の濱口わたるさんが並んで立っていた。

何だろう、一体？

「ここでは何ですから、リビングにどうぞ」

私が言うと、冬子さんはわたるさんと顔を見合わせてから、

「江原先生のところにも行かなくてはならないので、ここでいいわ」

「そうなんですか」

うわお！　起き抜けで油断してたので、自分でＮＧワードを言ってしまった。

「僕達、結婚する事になったんです」

わたるさんが爽やかな笑顔で言う。エロ兄貴にはない表情だ。

え？　結婚？　えええ！？

私は思わず二人をジッと見てしまった。そして、言葉を失った。

「まどかさんとは、僕はほとんど話した事なかったけど、冬子がたくさんお世話になったって聞いたから、是非挨拶にと思って」

「そ、そうでございましたか」

私は顔を引きつらせて言った。いくら何でも、一日に二回もＮＧワードは言いたくない。

「式は挙げないで、籍だけ入れるので、お世話になった人達に挨拶に回っているんです」

わたるさんは冬子さんと顔を見合わせ、微笑む。

何て爽やかなカップルなのだろう。

「おめでとうございます、お二人共」

私はハッとなって、お辞儀をした。

「ありがとう、まどかちゃん」

冬子さんは照れ臭そうに言った。

冬子さんと初めて会った時こんな事になるなんて全然思わなかった。

本当に驚きだ。八木麗華さんが知ったら、腰を抜かすかも知れない。

「では、これで失礼します」

冬子さんとわたるさんはしっかりと手を繋いで、玄関を出て行った。

「行ったか？」

後ろで声がした。

振り返ると、血の涙を流しそうな顔の兄貴がいる。

「冬子さん、どうしてあんなに奇麗になったんだあ！」

兄貴は絶叫し、階段を駆け上がった。

何考えてるのよ、全く。

兄貴には、里見まゆ子さんていう、可愛らしい恋人がいるじゃないの。

どこまで女好きなのよ。まゆ子さんが知ったら、どうなると思ってるの？

少しは考えて欲しいわ。

そして、私はエロ兄貴をそのまま放置し、遅めの朝食を採ると、彼氏の江原耕司君が待つコンビニへと出かける。

心配しなくても、ホラーなコンビニじゃないから。

「まどかりん」

私がコンビニに入ると、悲しそうな江原ッチがいた。

「どうしたの、江原ッチ？」

私は聖母（マドンナ）のような笑顔で問いかけた。

すると江原ッチは、

「冬子さんが結婚しちゃうんだよお」

とヌケヌケと言ってのけた。

「はあ！？」

私の笑顔は途端に般若（はんにゃ）に変わる。でも妙なダンスはしないわよ。

「わわ、ごめんなさい！」

江原ッチは私の闘気を感じたのか、すぐに謝った。

「まあ、いいわよ」

私ももうあと数ヶ月で十四歳になるのだから、広い心を持たないとね。

え？　誕生日いつだって？　九月よ。何かくれるの？

訊いてみただけ？　フンだ！

私と江原ッチはコンビニを出て、駅に向かう。

久しぶりにT市の遊園地に行くのだ。

「冬子さんがいなくなるって知って、瑠希弥さんが寂しそうなんだ」

江原ッチは恐る恐る言う。そこまで怖がられると、その方がムカつくわ。

「瑠希弥さん、こっちではまだ親しい友人がいないから、冬子さんとは仲良くしててさ」

「そうなんだ」

危ない、危ない。まあ、江原ッチ相手にNGワードは言わないけどね。

瑠希弥さんも、蘭子お姉さんに会って、蘭子お姉さんがまだ戻れ

ないって言ったから、最近元気なかったし。

多分、瑠希弥さんを元気付かせるために、江原ッチのお母さんの菜摘さんが、集中講座を開かせたのね。

「さやかに連絡して、もう一度瑠希弥さんに気の講義をしてもらおうかな」

私が言うと、江原ッチはニコニコして、

「いいねえ。今度は僕と牧野君も一緒に」

「断わる」

光速で却下した。江原ッチは落ち込んだが、こればかりは譲れない。

結局それが目的なんじゃないの？　ホントに、男って奴は！

牧野君まで巻き込まないでよ。

彼とは終わった仲だけど、あれはいつまでも「いい思い出」にしておきたいんだから。

なんて、さやかに悪いか。

私は予定を変更して、瑠希弥さんの講義を受ける事にした。

さやかに連絡しようと思ったけど、私は連絡先を知らなかった。

「俺、知ってるよ」

江原ッチが携帯を取り出し、さやかに電話する。

「何で知ってるのよ！？」

私が鬼の形相で尋ねると、

「瑠希弥さんと教え合っているところに居合わせたからだよお。訊いた訳じゃないよお」

江原ッチは泣きながら言い訳した。仕方ない。信じてあげよう。

そして、さやかも江原ッチの邸にやって来て、集中講座を受ける。

瑠希弥さんはよほど嬉しかったのか、前回より気合が入りまくり、私とさやかは燃え尽きそうになった。

いずれにしても、今日もG県は平和だったと思うまどかである。

瑠希弥さんと手合わせしたのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者だ。ついでに美少女でもある。

いろいろ仕掛けて来ているけど、私は動じないわよ。

もうすぐ十四歳なんだからね。

え？　いずれにしてもお子ちゃまだな、ですって？　フンだ！

共に戦った仲間であり、友人でもある小倉冬子さんが、幼馴染の濱口わたるさんと結婚した。

とは言え、籍を入れただけで、結婚式も披露宴もしていない。

でも、私はそんな二人にすごく共感した。

イベントばかりに目を奪われてばかりで、真実の愛を誓い合ったカップルが、どれほどいるだろうか？

コホン。ちょっと偉そうだったかな？

冬子さんとわたるさんは、わたるさんの生まれ故郷である北海道に行くそうだ。

何かいいなあ、北海道って。

食べ物はおいしいし、景色は奇麗だし。

只、冬が寒いのは辛いけど。

私は寒いのが毛虫の次に嫌いなのだ。

え？　比べる相手がおかしい？　いいでしょ、別に！

冬子さんとわたるさんは、わたるさんの四駆車で北海道まで行くそうだ。

私の彼氏の江原耕司君の邸に皆で集まって、二人の送別会を開いた。

「いつでも遊びに来てね」

冬子さんが涙ぐみながら言うと、私の親友の近藤明菜の彼である美輪幸治君が、

「新婚さんを邪魔するほど、俺達は野暮じゃありませんよ」

と言ったので、冬子さんは顔を赤くした。美輪君はその後で明菜にこってり説教されたらしい。

江原ッチのお母さんの菜摘さんと小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの手料理をみんなで頂いた。

そして、冬子さんとわたるさんは、私達の祝福の言葉の中、出発した。

私は知らなかったのだが、エロ兄貴が恋人の里見まゆ子さんに内緒でこっそり見送りに来て、泣いていたらしい。

全く、バカ兄貴め！

それから数日後、私は瑠希弥さんからメールをもらった。

「まどかさんへ

明日、お手合わせいただきたく、お願い申し上げます」

何だかかしこまったメールに、私はギョッとして瑠希弥さんに電話した。

「メールを見てもらえましたか？」

瑠希弥さんは電話に出るなり言った。

「はい。びっくりしました。どういう事ですか？」

「書いたままです。まどかさんと手合わせしたいんです」

えええ！？　無理よ、無理無理。

瑠希弥さんの力は、あの西園寺欄子お姉さんに迫るものなのよ。

私と手合わせなんて、レベルが違い過ぎるわ。

「瑠希弥さん、私なんて相手になりませんよ」

謙遜ではなく、本気でそう思っている。しかし瑠希弥さんは、

「そんな事ないですよ。この前の気の講義で、まどかさんは十分私と同じだけの実力があると確信しました」

「とんでもないです。そうだ、さやかの方が力がありますよ。さやかと手合わせしたらどうですか？」

私は綾小路さやかに犠牲になってもらおうと思ってそう言った訳ではない。

「そんなに私と手合わせするのが嫌なんですか、まどかさん？」

瑠希弥さんは悲しそうな声で言う。そんな風に言われると、断わりにくくなる。

「いえ、決してそういう事では……」

「では、決まりですね」

「は？」

とうとう私は瑠希弥さんと手合わせする事になってしまった。

そして翌日の土曜日。

私は江原ッチの邸の道場で、Tシャツ短パン姿で瑠希弥さんと向かい合っていた。

瑠希弥さんも同じ格好だ。

立会人は、江原ッチのお父さんの雅功さんと菜摘さん。

そして見届け人は、さやかと明菜。

江原ッチと美輪君は、道場の外で待機。入場は禁じられた。

「一本勝負です。どちらかが参ったと言うまで、気をぶつけ合って下さい」

雅功さんが言う。私と瑠希弥さんは黙って頷く。

「では、始め」

静かに手合わせの幕が切って落とされた。

瑠希弥さんはジワジワと気を高めて行く。

私は、長期戦になると不利だと判断し、一気に気を高めた。

「はい！」

私は瑠希弥さんに高めた気をぶつけた。しかし、瑠希弥さんはそれを軽くいなした。

「はい、はい！」

瑠希弥さんの小さい気が続けざまに私に向かって来る。

「は！」

私もそれをいなし、次の攻撃を繰り出そうとした。

「わ！」

すると更に大きな気が迫っていた。

「うお！」

私はそれを辛うじていなし、また気を練る。

「はーい！」

瑠希弥さんは私に休む間を与えないつもりか、次の気を放つ。

それはフワッと浮き上がり、滝のように私に襲いかかって来た。

「はい！」

私はそれを練った気で受け止め、弾き飛ばす。

「はい！」

ところが、次の気が足下に迫っていた。

私はそれをかわす事ができず、倒れてしまう。

「はい！」

瑠希弥さんは手を抜かない。倒れた私に次の気を打って来た。

「はあ！」

私は気を使って身体を跳ね上がらせ、攻撃をかわし、反撃に転じる。

「えーい！」

右手に集中した気を瑠希弥さんに放った。

そして間髪入れずに次の気を打つ。

しかし、瑠希弥さんはそれを完全に予測していたようで、簡単にいなされてしまった。

「は！」

一瞬の気の緩みが勝敗を分ける。

私は瑠希弥さんの放った気をまともに食らい、板の間に叩きつけられた。

「ま、参った……」

私はそのまま板の間にのびた。

雅功さんがすぐに私に癒しの気を当ててくれる。お陰ですぐに回復した。

「さすがです、瑠希弥さん。全然敵いませんでした」

私は起き上がると、瑠希弥さんに言った。すると瑠希弥さんは微笑んで、

「そんな事ないですよ、まどかさん。私も、ほら」

と腕と脚にできたあざを見せてくれた。

「貴女の気は重いです。ですから、当たると効くんですよ」

「そうなんですか」

うわお！　またしても油断したため、NGワードを言ってしまった。

「いい手合わせでしたよ、二人共」

雅功さんが褒めてくれた。私は照れ臭くなって頭を掻いた。

「瑠希弥さん、見事でした。そして、まどかさんもよく返していましたね」

菜摘さんが言った。

「これからも精進して下さい。世の中には、貴女達の助けを待っている人達がたくさんいるのですから」

「はい」

瑠希弥さんと私は、汗を拭いながら返事をした。

そして、その後一週間、全身筋肉痛で登下校に支障出まくりになるまどかだった。

トホホ。

久しぶりに江原ッチとデートなのよ！

私は箕輪まどか。中学二年生の美少女。そして優れた霊能者でもある。

しかし、嫉妬深いのが玉に瑕。

何よ！　昔懐かしい魔法使い〇リーのエンディング曲みたいな事言わせないでよ！

確かに嫉妬深いのは認めるけど……。

でも、ご機嫌だから、もう許してあげる。

今日は久しぶりに私の絶対彼氏の江原耕司君と放課後デートなのだ。

ここ何日か、私は私のお師匠様の小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと気の特訓をしていたので、江原ッチを放ったらかしにしていたのだ。

ごめんね、江原ッチ。

そう言おうと思ったら、江原ッチは親友の美輪幸治君と共に瑠希弥さんが庭の花に水を上げているのをこっそり覗いていた。

私は速攻で私の親友である近藤明菜に連絡し、二人でダブルコージをお説教した。

ホントに全く、男って生き物は！

そりゃあ、瑠希弥さんに比べれば、私も明菜も貧乳だし、腰はくびれてないけど。

「あんたと一緒にしないでよ」

明菜は自分のウエストを無理矢理引き絞り、そう主張する。

ブラも全然サイズと違うものを着けて、見栄を張っている。

「あんたに言われたくないわ」

明菜はムッとして言った。まあね。

そんなこんなで、私と江原ッチはいつものコンビニで落ち合い、公園まで一緒に歩く。

「やっぱり、まどかりんが一番だよ」

江原ッチが言ってくれた。

「ありがとう、江原ッチ」

江原ッチは照れ臭そうに笑って、

「瑠希弥さんや蘭子さんは、俺には過ぎた人だからさ」

うん？　遠回しに私は貶(けな)されているのだろうか？

「それに俺、前にも言ったけど、巨乳は好きじゃないんだ」

江原ッチはそう言いながらも、通りの反対側を歩くお姉さんをジッと見ている。

胸の谷間が丸見えの人だ。おまけに太腿(ふともも)も剥き出しのミニスカート。

「江原耕司様、デートは取りやめになさいますか？」

私はにこやかに提案した。

「ごめーん、まどかりん」

江原ッチは慌てて土下座した。

「全く、しょうがないんだから」

そう言いながらも、そんな江原ッチを可愛いと思ってしまうまどかである。

やがて私達は公園に到着した。

その日は何故かどのベンチもカップルだらけ。

皆それぞれ、愛を囁き合っている。

わお！　キスしてる人達もいる。

おお！　中二の私にはちょっと表現できない事をしている人達も……。

「まどかりん、ジロジロ見たら悪いよ」

江原ッチは私を引き摺るようにして歩く。

「あら？」

私はその時、一組のカップルに目を引かれた。

「江原ッチ、あれ」

私はそのカップルを指し示す。江原ッチもそのカップルに気づいたようだ。

「まどかりん、あれは？」

そう。不思議なカップルなのだ。

男性は生きているのだが、女性はすでに霊になっている。

生者と死者のカップルである。年は、二十代前半だろうか。

霊能力がない人が見ると、男の人がパントマイムをしているように見えるだろう。

でも実は、二人は愛を確かめ合うようにキスしているのだ。

何だかロマンチックだ。

「あら？」

でも妙だ。男の人の影が段々薄れている。

まさか！？

私は江原ッチと目配せして、そのカップルの元に駆け寄った。

二人は私達が近づくのを感じたのか、キスを止めて私達を見た。

「あなた達には、私が見えるのですね？」

女性の霊が話しかけて来た。

「はい。今、男性の方の影が薄くなったのがわかったので、何が起こったのだろうと思って……」

江原ッチが説明すると、男性の方がクスッと笑って、

「恥ずかしいなあ。そんなのまで見えていたんですか？」

「どういう事ですか？」

私は不思議に思って尋ねた。すると女性の霊が、

「私、消えかけているんです。もうすぐ完全に霊界に行かなければならないので」

「そうなんですか」

おおっと！　江原ッチがいきなりのＮＧワードだ。びっくりした。

「ですから、僕が彼女に生気を吹き込んで、下界に留まれるようにしているんです」

「そうなん……」

また江原ッチがＮＧワードを言いかけたので、私は慌てて口を塞いだ。

でも、そんな事をしていると、男性の方が……。

「わかっています。霊界の掟を犯しているのは承知の上なんです」

男性は力強い声で言った。

私は感動していた。禁じられた愛。何てすごいの！

「だから、僕は自分の寿命を縮めているんです。それが禁忌を犯した者の取るべき道だと思っています」

「そんな……」

どうやら、男性は、女性が不治の病で亡くなったのを残念に思うあまり、自らの命を絶とうとしているのだ。

しかし、自殺をすれば、自分は地獄に堕ちてしまう。だから、こんな方法を選んだの？

「でも、それは間違って……」

江原ッチが正論を説こうとしたので、私はまた口を塞ぎ、

「お邪魔しました」

とその場を離れた。

「どうしたの、まどかりん？　あの男の人の考えは間違っているんだよ」

江原ッチは真っすぐな目で言う。

私もそう思う。しかし、その人の人生は、その人が決める事だ。

「江原ッチ、もし、私が江原ッチより先に死んでしまったら、貴方はどうする？」

私は江原ッチを真っすぐに見て尋ねる。

「そんな事、僕が絶対に防ぐ。まどかりんを先に死なせたりしないよ」

「それは嬉しいんだけど、それじゃ答えになっていないわ。ちゃんと答えて」

私は江原ッチの目を見つめる。江原ッチは私の目を見つめ返して、
「まどかりんの分まで生きるよ」
「おい！」
私は全力で突っ込んだ。そこは、
「まどかりんのいない人生なんて意味がないよ」
とか言って欲しいのに！
「僕はそれが正しい道だと信じている。だから、まどかりんも僕が先に死んでも生き続けて欲しい」
「江原ッチ……」
私は感動して、江原ッチの手を握りしめた。
あ。こいつ、自分の言った事に酔ってる……。仕方ない奴。
でも、江原ッチのカッコ良さを再認識した。
そして、デート終わりに久しぶりのチュウをしたまどかだった。
ムフフ。

瑠希弥さんと捜査に協力するのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。そして人も羨(うらや)む美少女である。

だから、ノーコメントだって言ってるでしょ！

いい加減、諦めなさいよね。

今日は土曜日。

久しぶりにエロ兄貴の仕事の手伝いだ。

しかも、今日は何故か、私のお師匠様である小松崎(こまつざき)瑠希弥(るきや)さんも一緒。

よく兄貴の恋人の里見まゆ子さんが許したなあと思ったら、G県警の上層部の関係者が事件の被害者で、私だけだと心もとないので、瑠希弥さんを呼んだのだという。

多分兄貴の作り話だ。だから悔しくない。

兄貴は、小倉冬子さんが幼馴染の濱口わたるさんと結婚して北海道に行ってしまってから、様子がおかしいのだ。

日本中の美人は自分の虜だと思っている節があり、一度脳を調べてもらった方がいいと思う。

兄貴の裏工作はそれだけではない。

まゆ子さんは研修のため、沖縄に行っているのだ。

警察学校時代の友達が石垣島にいて、その友達に頼んで研修を組んでもらったらしい。

何も知らないまゆ子さんは、兄貴の手回しの良さに感激し、嬉しそうに出かけた。

さすがのエロ兄貴も、まゆ子さんの笑顔には胸が痛んだだろう。

と思ったら！

瑠希弥さんを助手席に乗せ、嬉しそうに車を運転している。

どうしようもない奴だ。我が兄貴ながら、情けない。

「いやあ、瑠希弥さんが来てくれれば、もう事件は解決したようなものですよ」

バカ丸出しの笑顔で言う兄貴。

「そうなんですか」

いきなりＮＧワード炸裂の瑠希弥さん。

それだけでなく、最近その性格まであのメイドに似て来たような気がして、心配だ。

やがて、私達は現場に到着した。

そこはM市郊外の田園地帯。

G県の県庁所在地であるM市は、度重なる合併で巨大化し、山奥まで広がっている。

その麓付近の元はH村と呼ばれた地区だ。

何となく、「田舎の香水」の臭いが漂って来る。

え？　今時「田舎の香水」なんて言わないですって？

うるさいわね！　いいでしょ、別に！

「こっちです」

兄貴は瑠希弥さんの手を取り、道案内をする。

私は何か言おうと思ったが、瑠希弥さんが嫌がっていないので、口を噤(つぐ)んだ。

まさかとは思うけど、瑠希弥さん、兄貴に「ほの字」？

そこ！　また「死語の世界」とか言わないでよね！

殺人事件が起こったのは、水田に水を引き込むための水門を管理している事務所の一角にある水門の開閉をするモーターがある建物

だ。

その中で、事務所の作業員の人が首を絞められて殺されていたのだ。

別に霊視するような事件じゃないと思うんだけど。

あれ？　変だな。どういう事だろう？

私は思わず瑠希弥さんを見上げた。瑠希弥さんも私を見た。

「気づきましたか、まどかさん？」

瑠希弥さんはニコッとして言った。

「おお！」

その笑顔に兄貴が歓声をあげる。バカ兄貴め！

「はい。私達は試されたって事ですよね」

私は兄貴を睨みつける。要するに殺人事件なんて起こっていないのだ。当然、霊もいない。

「な、何だよ、その目は？」

兄貴はビクッとして私を見た。妙だ。兄貴からは何も感じられない。

兄貴は何も知らないのか。下っ端だから、そんなものか。

「ほう。どうやら、我々の意図を感じ取ってくださったようですね、お二人共」

そう言って現れたのは、確かG県警の本部長。そしてその後ろで揉み手しているのは、鑑識課長だ。

「さすが、君が見込んだお二人だね、箕輪君」

本部長は兄貴を見て言う。

「は？」

兄貴はポカンとしている。すると鑑識課長が、

「本部長、箕輪には何も伝えていないのです。妙な先入観を抱かれないために」

「なるほど」

本部長は瑠希弥さんと私を見てニッとした。

「どういう事でしょうか？　何となくは想像がつきますが」

瑠希弥さんが笑顔を封印して尋ねる。おお！　凛々しい顔の瑠希弥さん、素敵！

江原ッチが見たら、鼻血の海ができてるな。

兄貴もどうやら鼻血が出たらしく、慌てて背を向けた。

「我がG県警は、刑事部に正式に霊感課を作る方針で動いているのです。是非、お二人にはご協力を賜りたい」

本部長はにこやかな顔で説明してくれた。

「そうなんですか」

本日二度目の瑠希弥師匠のNGワード。倒れそうになった。

本部長は帰りは県警の高級車に同乗させてくれた。

兄貴は鑑識課長と二人でドライブだ。フフフ、正義は勝つのよ。

「昨今の事件の凶悪化、巧妙化により、G県内の犯人検挙率は驚くほど低下しています。それに歯止めをかけるために、貴女方のお力をお借りしたいのです」

本部長は後部座席に両手に花状態で乗り、話をしている。

え？　お前は花じゃないですって？　う、うるさいわね！

「科学だけでは人間は計れない。そう思っているのです」

本部長は、私の気のせいかも知れないけど、瑠希弥さんばかり見ている。

まあ、仕方ないけどね。兄貴みたいにならないだけ、本部長は凄

いと思うし。

「わかりました。微力ながら、協力させていただきます。ね、まどかさん？」

瑠希弥さんが私を見て言う。私は笑顔全開で、

「もちろんです」

と返した。

私達はそのまま県警まで行き、制服を貸与された。

むむむ。

本当に本部長は、私達の力が借りたいのだろうか？

瑠希弥さんが貸与された制服は、女性警官のものとほぼ同じ。

でも、超ミニスカートで何だかエロい。

私の制服も、エロくはないけど、非常に派手派手な色合い。

赤に金の刺繍つき。音楽隊の制服の使い回しじゃないの、と一瞬思ったけど、生地は新しい。

こんな格好で捜査に協力するのは恥ずかしいぞ。

「似合ってますよ、まどかさん」

屈託のない笑顔で瑠希弥さんに言われると、

「そうですか？」

とその気になる。

「うーん、予想以上のできですな」

私達を見る本部長は、只のエロオヤジにしか見えない。

本当に大丈夫なのだろうかと不安になるまどかだった。

転校生が来たのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の美少女霊能者だ。

はいはい。気がすんだ？

サヨカ会残党も退治し、大きな不安も去った。

ちょっとした不安は、先週依頼された「G県警刑事部霊感課」の仕事。

本部長の目的が気になる。

それに、私はボランティアなんだけど、エロ兄貴の給料がアップするらしい。

「まどか、毎週チョコレートパフェご馳走するからな」

妙に優しい兄貴にゾッとした。一体いくらアップしたのよ？

「毎週食べたら、太っちゃうよ」

私は冗談めかして言った。

「いや、それに関して言えば、もう手遅れだろう」

兄貴は残酷な現実を突きつけた。

「フンだ！」

私は思い切り兄貴を睨みつけた。

私は太っていない。太っていないんだってば……。幼児体型なだけよ……。ううう……。

そんなバカげたやり取りがあったのだが、いつものように学校へ行く。

「転校生が来るんですって」

教室でそんな事を話す噂好きの女子達。

「へえ、そうなんだ。コロッケ好きかな？」

相変わらず、力丸ミートの御曹司のリッキーは食い気ばかりだ。

世間にそれほどコロッケ好きの人ばかりいる訳ではないと知るべきである。

やがて始業のチャイムが鳴り、先生が教室にやって来た。

「ホームルームの前に、転校生を紹介します」

「おお！」

噂によると、今回の転校生は女子らしい。バカ男子共が目を輝かす。

「さあ、入りなさい」

先生に促され、その子は教室に入って来た。

ああ！　すっごい美少女じゃん！

まどか、大ピンチかも。

しかも、ショートカットでキリリとした目。

可愛いというより、カッコいいという容姿だ。

私の彼氏の江原耕司君には会わせられないぞ。

「F市から転校して来ました、柳原まりです」

声も可愛い。

「よろしくう！」

バカ男子共が大喜びしている。

「では、箕輪さんの隣の席に着いて」

定番通り、空いていたのは私の隣。柳原さんはそこに座った。

「箕輪さん、柳原さんの事、頼みますよ」

「はい」

私は笑顔全開で先生に返事をし、柳原さんに微笑んだ。

え？　何故か柳原さんは顔を背けた。

ガーン。もしかして、初日に嫌われるってパターン？　うおお！

ホームルームが終わり、一時間目の授業までの合間、たちまち男子に囲まれる柳原さん。

「好きな食べ物何？」

リッキーがいきなり質問する。

「コロッケ」

柳原さんがそう言うと、リッキーは大喜びだ。

「好きな映画は？」

別の男子が尋ねる。

「アリエッティ」

「おお、俺と同じ！」

ホントか？　調子のいい奴だ。

「前の中学では、部活は何してたの？」

私の親友の近藤明菜が割り込んで来て尋ねた。

「テニスです」

「そうなんだ」

明菜は意外そうに頷く。明菜も、今でこそ帰宅部だが、小学生の時にテニス教室に通っていたのだ。

え？　まさか？

私は柳原さんをマジマジと見た。また顔を背ける柳原さん。

ぐうう……。涙が出そうだ。

「おい、箕輪、あんまり柳原さんを睨むなよ。怖がってるじゃん」

男子の一人が言った。その言葉に私は反論する事もできない。

「ちょっと、酷い事言わないでよね！」

代わりに明菜がそいつに詰め寄ってくれた。

柳原さん、もしかして相手に合わせている？

私は目だけで柳原さんを見た。相変わらず顔を背けたままだ。

何か恨みでもあるの？　本当に落ち込みそうだ。

そんな感じのまま、一日が過ぎて行った。

柳原さんに嫌われた理由がわからず、私はガックリと項垂れたまま、学校を出た。

「大丈夫、まどか？」

明菜が声をかけてくれる。

今日は、明菜とダブルデートの予定なのに、何だかそんな気分になれない。

「あら？」

明菜が後ろを見て呟く。私もそれに釣られて振り返った。

するとそこには、慌てて物陰に隠れる柳原さんの姿が。

ううう。また落ち込みそう。

柳原さんの家って、こっちなの？

「気にしても仕方ないよ」

明菜は私の肩を抱いて、待ち合わせ場所のコンビニへと入る。

「よ！」

立ち読みをしていた明菜の彼の美輪幸治君が挨拶する。

「美輪君」

クールな明菜はニコッとするだけ。ホント、ツンデレクイーンね。

「あれ、江原ッチは？」

私は江原ッチを探した。すると江原ッチは、コンビニの外にいる柳原さんを見ている。

もう気づいたのか！　ホント、エロ男め！

「江原ッチ！」

私はさっきまでの落ち込みはどこへ行ったというくらい、怒りに燃えている。

「あ、まどかりん！」

江原ッチはビクッとした。

「誰、あの子？　何か、妙な気を放ってるんだけど？」

江原ッチは動揺しながらもそう言った。

「え？」

江原ッチも気づいたという事は、私の思い過ごしじゃない。

柳原さんは、何かの力を持っているのだ。

「気になるな」

江原ッチはコンビニから出て行く。私は明菜と顔を見合わせ、江原ッチを追いかけた。

柳原さんは私達が外に出て行くと、まるで待っていたかのように近づいて来た。

「何か用かな？」

江原ッチが微笑んで尋ねる。おい、お前、変な事考えていないだろうな？　そう突っ込みたくなる。

すると柳原さんはキッとして江原ッチを見上げ、

「ボクは君には用はない」

「え？」

いきなりそう言われてしまった江原ッチは、プライドを傷つけられたようだ。動かなくなった。

ボク？　ボクって、もしかして……。

次の瞬間、柳原さんは私の前に駆けて来て、

「好きです、付き合って下さい」

と言い、可愛い封筒を差し出した。思わず受け取ってしまう。

「えええ！？」

仰天する私、明菜、美輪君。復活しかけた江原ッチは再起不能になりそうだ。

「それじゃ！」

柳原さんは顔を真っ赤にしたまま、走り去ってしまった。

柳原さん、私を嫌って顔を背けていたんじゃないんだ。

恥ずかしくて、私を見られなかったの？

嬉しいような怖いようなまどかだった。

柳原さんはカッコいいのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者。美少女でもある。

……。何よ？

この前、私達のクラスに転校生が来た。

転校生は、いつもと違ってイケメンではなく、美少女。

しかも、私もビビるくらいの。

その上何と、女の子が好きな子なのだ。名前は柳原まり。私と同じ匂いがする。

更に驚いた事に、柳原さんは、私にラブレターをくれたのだ。

え？　蓼食（たで）う虫も好き好きですって！？　失礼ね！

ところで、蓼って、何？

私にラブレターを渡した柳原さんは、そのまま駆け去ってしまった。

「冗談よ、きっと」

親友の近藤明菜はそう言ってくれたが、事態はそんな展開を見せ

てくれないのである。

「ま、ま、まどかりん、大丈夫だよね？　そっちの世界に行ったりしないよね？」

私の彼氏の江原耕司君が動揺するほど、柳原さんはカッコ良かったのだ。

「行かないから、安心して、江原ッチ」

私はメイドも逃げ出すくらいの会心の笑顔で応じた。

そして、次の日。

「おはよう」

いつものように教室に入ると、すでに柳原さんが来ていた。

「おはよう、箕輪さん」

柳原さんは恥ずかしそうに頬を染めて挨拶して来た。

そんなつもりはないけれど、柳原さんのようなイケメン美少女に頬を染められると、私もドキッとしてしまう。

「おはよう、柳原さん」

私はできるだけ冷静に挨拶を返した。

「昨日はごめんなさい。箕輪さんの立場も考えずに、あんな事をしてしまって」

柳原さんは私に近づき、頭を下げた。私は面食らった。

「ああ、別にそこまでしてくれなくても。ちょっと驚いたけど、それだけだから」

「ありがとう、箕輪さん。優しいんだね。ボク、嬉しいよ」

柳原さんは涙ぐんで言う。私はそういう傾向はないけど、もしそっちの世界の方なら、柳原さんの涙に落ちているんだろうな。

「おはよう」

そこに明菜と力丸卓司君がやって来た。

「あ、リッキー、昨日の話なんだけどさ」

柳原さんは笑顔になってリッキーに話しかける。

「ああ、コロッケの事？　食べる？」

リッキーは鞄の中からビニール袋に入ったコロッケを取り出した。

「今はいいよ。後で」

柳原さんは楽しそうにリッキーとゲームの話をしている。

この人、フリじゃなくて、本当に「男の子」なのか。

しかも、いつもなら、可愛い子を見るとヘラヘラするリッキーがそんな感じではないのも奇妙だ。

「柳原さんが、あんたにラブレター渡したの、全校に知れ渡ってるわよ」

明菜がこっそり教えてくれた。

「え？」

ギョッとした。何、それ？

「そのせいで、男子は皆、柳原さんとお友達になろうとしてるみたい。その中でもどういう訳か、力丸君が最有力候補みたいよ」

明菜は呆れ気味に言う。でも、私にはその理由が何となくわかった。

リッキーは確かに可愛い子に弱いけど、決してエロくないのだ。

それから、柳原さんが人の心を読んで、相手に合わせる事ができるのであれば、リッキーに邪心がないのがわかるはず。

他の男子達は「お友達になりたい」とか言いながら、結局のところ、柳原さんの容姿に惹かれているだけだと見抜いているのかも知れない。

敵にはならないだろうけど、もし彼女が誰かに利用されたりした

ら、怖い事になるわね。

そんなこんなで、その日の授業は終わり、帰宅部の私はサッサと下校。

今日は江原ッチとデートのやり直しだ。

柳原さんのせいではないけど、昨日は落ち込みまくったので、デートを延期したのだ。

明菜と美輪君は、別の場所でデートらしい。

あの二人、何だかすごく進んでるみたいで、最近怖いのよね。

私もついつい、スキップしてしまう。鼻歌も混じっていたかも知れない。

「よお、彼女。楽しそうだねえ。俺らともっと楽しい事しない？」

あともう一息で、江原ッチのいるコンビニというところで、妙な連中に行く手を塞がれた。

どうやら、近くの高校生のようだ。五人もいる。私ってば、モテるう、とか言ってる場合ではない。

しかも、M市では有名なヤンキー校の連中だ。でも、決して中村ト〇ルはいない。

え？　古いとか言わないでよ！

「おお、近くで見ると、すっげえ可愛いじゃん！　ますます一緒に楽しい事したいなあ」

その中のリーダー格の奴が私を舐め回すように見る。

「失礼します」

私はそいつらを避けて先に進もうとしたが、邪魔をされる。

「つれない事言うなよ、彼女。俺ら、優しいんだから、心配しなくてもいいよ」

二番手らしき奴がニヤニヤしながら言う。

言ってもわからない奴には、実力行使ね。

私は真言を唱えようとした。

「ほらよ」

いつの間にか、背後に回った奴がいて、私は両手を後ろに回されてしまう。

「暴れるなよ、彼女。傷つけたくはねえからさ」

リーダーが私の顔を覗き込む。口が臭い。こいつら、タバコも酒も好き放題なのね。

まどか、貞操の危機だ。

ところで、貞操って何？

そんなボケをかました時だった。

「何してるんだ、お前達？」

救いの神が現れた。江原ッチ？

と思ったら、何と柳原さん！　いけない、いくら「男の子」のつもりでも、高校生五人を相手では……。

「おお、更に上玉が登場だぜ」

ああ。案の定、こいつらのエロ度に火を点けてしまったようだ。

「ボクの友達に何をしているんだと訊いている」

柳原さんはものすごい闘気を放っている。

何？　柳原さん、強いの？

高校生達には、柳原さんの怒りの凄まじさがわかっていない。

「貴方達、謝るなら今のうちよ」

私は思わずアドバイスしてしまった。

「あ！」

私を取り押さえている奴を除き、四人が柳原さんに一斉に突進する。

「生意気な事を言ったお前から可愛がってやるよ！」

リーダーの目は、すぐにやられる雑魚の目だった。

「はああ！」

一瞬の出来事だった。

柳原さんの放出した気が、四人を吹き飛ばした。

四人は地面に叩きつけられ、気を失ってしまった。

「ひ、ひ、ひいい！」

その様子を見た残りの一人は、私の手を放すと、転がるようにして逃げて行った。

すごい。柳原さん、あの修験者の遠野泉進のお爺ちゃん並みだ。

「大丈夫、箕輪さん？　怪我とかしてない？」

柳原さんはニコッとして私を見た。

「あ、ありがとう。やっぱり柳原さん、気を操れるのね」

私がそう言うと、柳原さんは俯いて、

「う、うん。ボク、怖い？」
「そんな事ないよ。カッコ良かった」
嘘ではなく、そう思った。すると柳原さんは嬉しそうに私を見た。
「ボクは、箕輪さんみたいに霊感はないけど、人の心を読んだり、気を操ったりはできるんだ」
「え？」
私は柳原さんに霊感の話はしていない。どうして知ってるの？
「力丸君が教えてくれたんだ。彼、いい人だね」
リッキーのお喋りめ！　でも、まあいっか。
「これからも友達でいてくれるかな、箕輪さん？」
柳原さんはモジモジしながら尋ねて来た。私は笑顔全開で、
「もちろんよ。だって、柳原さんは私を助けてくれたんだもん」
「良かった。嬉しいよ、箕輪さん」
柳原さんは私に抱きついて来た。何故かドキッとしてしまう。
「ボク、箕輪さんの事、真剣だから。じゃあ」

柳原さん、まだ私の事を……。どうしよう？

何故柳原さんが私の危機にタイミング良く駆けつけたのかも気になるし。

モテモテのまどかだった。

江原ッチが嫉妬したのよ！

私は箕輪まどか。中二の美少女霊能者だ。しかも、モテモテである。

泣きそうになるから、「モテモテ」はやめて。一生のお願い。

この前、転校生の柳原まりさんに危ないところを助けられ、

「箕輪さんの事、真剣だから」

と言われてしまった。何故か、ドキドキした。

その後、彼氏の江原耕司君と会って、その事を話したら、

「まどかりん、そっちの世界に行かないでよお」

と涙目で訴えられた。可愛い、江原ッチッたら。ウフ。

「おはようございます」

校門のところで、江原ッチの妹さんの靖子ちゃんに会った。

サヨカ会騒動が収まったので、最近は一緒に登下校していない。

靖子ちゃんは、肉屋の力丸卓司君と一緒に登下校しているようだ。

しかも情けない事に、リッキーは靖子ちゃんに勉強を教えてもらっているらしい。

知らなかったんだけど、靖子ちゃんて、頭いいの。

江原ッチより勉強できるらしいわ。

「おはよう、靖子ちゃん。今日はリッキーは一緒じゃないの？」

私はそう訊いてしまってから、まずいと思った。

靖子ちゃんの顔が暗くなったのだ。

「リッキーは、今日は柳原さんと一緒に学校に行くって……」

「ええ！？」

何という事だ！　コスモクリーナーが作動した時のデ〇ラー総統のように驚いてしまった。

あのコロッケヤロウ、何を思い上がってるのよ！

あれ？　でも、柳原さんは女子が好きなんだから……。えーと……。

「おはよう、江原さん」

その柳原さんが現れた。何故かその後ろにいるリッキーは項垂れ

ている。どうしたんだろう？

「お、おはようございます」

普段大人しい靖子ちゃんは、柳原さんの登場にどんなリアクションをとるのかと思ったが、やっぱりごく冷静だ。多少は動揺しているみたいだけど。

「ごめんね、知らなくて。今、力丸君に注意したところなんだ」

柳原さんは気まずそうに説明する。どういう事？

「毎朝、江原さんと登校しているのに、ボクとゲームの話をしたいので断わったって聞いたから」

「そ、そうなんですか」

おおっと！　靖子ちゃんがＮＧワードだ。ビックリした。

「力丸君には、しっかりお説教したから、心配しないでね」

「は、はい」

靖子ちゃん、何故か柳原さんをポオッとした顔で見ている。

「じゃあ」

柳原さんはカッコ良く言うと、私を見て頬を染め、歩き去った。

うーん、よくわからない。

「柳原さん、素敵……」

靖子ちゃんのその言葉に、私はギクッとし、項垂れていたリッキーがピクンと顔を上げた。

噂だと、何人か、柳原さんに夢中の下級生がいるらしい。

いけない事だ。え？　お前が言うな？　何でよ！？

「でも、柳原さんて、箕輪の事が好きなんだよな」

リッキーが言った。靖子ちゃんは目を見開いて私を見る。

「ええ！？　あの噂、本当なんですか？」

「ああ、その、私は靖子ちゃんのお兄さん一筋だから、安心して」

私は慌てて言った。お兄ちゃん子の靖子ちゃんにあらぬ疑いを抱かれたくはない。

「そうなんですか。良かった」

台詞も笑顔もあのメイドと同じ靖子ちゃん。私のダメージは大きい。

「力丸卓司君、後で話があります」

私はリッキーの背後に回って囁いた。

「ひい！」

リッキーはビクッとして駆け去った。靖子ちゃんは訳がわからず、首を傾げている。

「行きましょ、靖子ちゃん」

私は彼女を促して、校舎へと歩き出した。

そして、放課後。校門のところに江原ッチが立っている。

私の親友の近藤明菜の彼氏の美輪幸治君と話しているようだ。

「まどかりん！」

江原ッチは、もう何年も会えなかったような顔で私を見る。

「江原ッチ、どうしたの？」

私が尋ねると、美輪君がクスクス笑いながら、

「こいつさ、あのボクッ娘が気になって、ここまで来たんだぜ」

「う、うるさいよ、美輪！」

江原ッチは顔を赤らめて言った。

「そうなんだ」

危ない、危ない。危うくNGワード自爆してしまいそうだ。

でも、嬉しい。そこまで江原ッチが嫉妬してくれて。

私も罪な女だ。ムフフ。

「あ！」

美輪君が叫ぶ。どうしたんだろうと思い、彼が見ている方を向くと、そこには柳原さんと明菜がいた。

明菜はポオッとした顔で柳原さんを見ている。

二人はとても楽しそうに話をしていた。

「へへへ、あれれ、アッキーナがボクっ娘と楽しそうにお喋りしてるぜ、美輪」

江原ッチは仕返しとばかりに言った。意地悪ね、全く。

でも、凄いな、柳原さん。

靖子ちゃんといい、明菜といい、彼氏がいる子まで虜にしてしまって。

しかも無意識なのが、あの小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと一緒だ。

もしかして彼女、霊は見えないけど、感応力はあるのかも知れない。

「アッキーナ！」

心配になったのか、美輪君は明菜に駆け寄った。

「あら、美輪君。いたの」

明菜のつれない言葉に、美輪君は撃沈した。

「近藤さん、楽しかったよ。それじゃあ」

柳原さんは名残惜しそうな明菜に手を振って離れ、また私を見て頬を染める。

私もまたドキッとした。

「江原耕司君ですね？」

柳原さんは江原ッチの前に立って言った。江原ッチはちょっとビビり気味に彼女を見て、

「そ、そうですが、何か？」

柳原さんは鞄の中から封筒を取り出した。まさか、ラブレター？

そんなはずないか。

「決闘を申し込みます。箕輪さんを賭けて」

その言葉に私達は仰天した。

えええ！？　私を賭けて、江原ッチと柳原さんが決闘？

「受けて立ちましょう」

江原ッチは柳原さんを見据えて、バッと封筒を奪い取るように手にした。

どうなってしまうのか、ドキドキのまどかだった。

江原ッチＶＳ柳原さんなのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の美少女霊能者。

そんな自己紹介に突っ込みを入れられないほど、私は混乱していた。

転校生の柳原まりさんが、私の彼の江原耕司君に決闘を申し込んだのだ。

しかも、私を賭けて。

柳原さんは、どうやら「僕っ娘」という属性らしい。

そして私は「妹属性」らしい。

え？　お前は「ツンデレ属性」だろう、ですって？　フンだ！

その決闘は、放課後の予定。

江原ッチの住む町と柳原さんの住む町のちょうど中間地点にある空き地。

とは言え、某マンガのように土管が積み重ねられていたりはしない。

マンション建設予定地と立て札が建てられているだけだ。

しかも、本当は鉄条網が張られていて、入れないはずなんだけど、

どこかの悪ガキが破ったらしく、子供達の遊び場になっている。

ジリジリと梅雨の晴れ間の太陽がまだ照りつける時間。

空き地には、江原ッチと柳原さんが向かい合って立っている。

そして、私は木の陰から、まるで明子姉ちゃんのように見守る。

ショックな事に、江原ッチの妹さんの靖子ちゃん、私の親友の近藤明菜、更に中学の女子達の多くは、柳原さんサイドだ。

明菜に「いたの」と言われ、ショックから抜け出せないでいる美輪君は、しょんぼりしたまま江原ッチサイドにいた。

「まさか、喧嘩じゃないよね？　俺、女の子は殴れないよ？」

江原ッチが言う。すると柳原さんは、

「違うよ。ボクは君を気で倒す。箕輪さんを守れるのは、ボクだけだという事を君にわからせてあげるよ」

と言い返した。気？　やっぱり。まずいよ、江原ッチ！　柳原さんの気、半端ないよ！

私は心配で見ていられなくなりそうだ。

「行くよ、江原君」

柳原さんの気が一気に高まる。すごい。これは山形の遠野泉進ジイちゃんを超えてるかも。

「く……」

江原ッチも柳原さんの気の凄さに驚いている。

「遅くなりました」

そこへ何故か、小松崎瑠希弥(こまつざきるきや)さんが現れた。

「瑠希弥さん？」

私は瑠希弥さんの登場にキョトンとした。

「おおお！」

途端に高まる江原ッチの気。って言うか、エロパワーじゃないの、これ！？

瑠希弥さん、何故か、気の特訓の時のTシャツ短パン姿だし！

「おおお！」

美輪君までエロパワーが高まってる。あれ、いつの間にか来ていたリッキーまで……。

何なのよ、一体！？

「江原耕司君、後でじっくりお話しましょう」

私は闘気を噴き出して言った。

「後でね、まどかりん！」

江原ッチはエロパワーを使って気を高めたようだ。このために瑠希弥さんを呼んだの？

「何？」

柳原さんは、江原ッチのエロパワー、いや、気の高まりに驚いたようだ。

「でも、勝つのはボクだ！」

柳原さんは気を集束させて、江原ッチに放った。大きな気の塊が江原ッチを襲う。

「温(ぬる)い！」

江原ッチも気を放つ。二人の気がぶつかり合い、スパークした。

「ひ！」

周囲で見ていた女子達が仰天して空き地から逃げ出す。

「靖子ちゃん、明菜！」

私は二人を心配し、空き地の外に連れ出した。

「うわ！」

遂に気のぶつかり合いに決着がつき、柳原さんの気が江原ッチの気を粉砕し、江原ッチに襲いかかった。

「そこまでです！」

瑠希弥さんが言い、右手をかざすと、柳原さんの気をスーッと消してしまった。

「すごい！」

私は明菜達を庇いながら叫んだ。

柳原さんも江原ッチも、瑠希弥さんの大技に驚愕しているようだ。

「気は人を傷つけるために使うものではないわ」

瑠希弥さんは微笑んで柳原さんに言った。

「は、はい」

柳原さんは瑠希弥さんの存在感に圧倒されたのか、それだけ言うと、ペタンと地面にしゃがんでしまった。

私を賭けた決闘は、結局ドローという結果に終わった。

ところで、ドローって何？

そして、翌日。学校に行くと、校門のところに柳原さんが立って

いた。

何だろう？

「おはよう、箕輪さん」

柳原さんは私を見て微笑む。

「お、おはよう、柳原さん」

私は少し警戒しながら挨拶を返した。すると柳原さんは、

「ごめん、箕輪さん。ボク、好きな人ができたんだ。だから、ボクの事はもう忘れて」

「は？」

意味不明だ。私は別に柳原さんを好きだった訳ではないのに……。

え？　好きな人って、まさか……。

「小松崎さんこそ、ボクの理想の女性だよ」

柳原さんは白い歯を見せて、校舎へと駆けて行った。

えええ！？　瑠希弥さん！？

ますます十五禁に近づいているような気がするまどかだった。

恐怖体験をしたのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の美少女霊能者だ。

もうそれでいいわ。私の負けよ……。

先日、私の彼氏の江原耕司君とクラスメートの柳原まりさんが私を賭けて対決した。

結果は、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの一人勝ちだった。

え？　違うの？

何しろ、江原ッチは瑠希弥さんに助けられて大喜びだし、柳原さんはターゲットを瑠希弥さんに変更するし。

何だか、私は柳原さんに弄（もてあそ）ばれた気分だ。

「ふう」

暑さと期末テストの結果とで、フラフラしている私。

「溜息吐いても、何もいい事ないよ、まどか」

親友の近藤明菜が言う。それはわかっているけど、出てしまう。

「元気出せよ、箕輪。可愛い顔が台なしだぞ」

肉屋のリッキーが言う。冗談なのだろうけど、笑えない。

「そうですよ、まどかお姉さん。お兄ちゃんが見たら、悲しみますよ」

江原ッチの妹さんで、リッキーの彼女という奇特な女の子、靖子ちゃんが言ってくれた。

「そうね」

何とか笑顔になれた私。その時、携帯が鳴った。

このスチャラカな着メロは、エロ兄貴が勝手に登録したものだ。

「何よ、お兄ちゃん？」

私は恥ずかしくて素早く電話に出た。明菜達がクスクス笑っている。

「おう、今日はいい事があったから、みんなにご馳走してあげようと思ってさ。H和町のH嶋屋に四時に集合な」

「は？」

それだけ言うと、兄貴はサッサと通話を切ってしまった。

H嶋屋？　確か、G県名物焼きまんじゅうの名店だ。

どういう風の吹き回し？　世界が滅びる前兆？

取り敢えず、私は明菜達にその事を告げた。

「美輪君も呼んでいいかな？」

明菜が尋ねる。私はあのメイドに負けない笑顔で、

「もちのろんよ」

と言った。一瞬、周りが凍りついた。お父さん直伝のギャグは不発に終わった。

こうなったら、兄貴への日頃の恨みを晴らしてやろう。

たくさんみんなを呼んで、兄貴にいっぱい払わせてあげるんだから。

私は江原ッチに連絡した。

「瑠希弥さんも誘っていいかな？」

江原ッチがすかさず訊いて来る。

「誘ってもいいけど、一緒に来るのは許しません」

私は先手を取った。

「うううう」

電話の向こうで江原ッチのうめき声が聞こえた。
「柳原さんも呼んでいいですか？」
靖子ちゃんが目をキラキラさせて言う。途端に蒼ざめるリッキー。
「いいわよ。みんなで食べた方が、きっと美味しいし、楽しいから」
私は快諾した。明菜は顔には出さないが、嬉しそうだ。
こいつ、美輪君と柳原さんで二股かける気？
「あ」
しかし、大変な事に気づく。
「柳原さんの連絡先を知らない」
そう。誰も聞いていないのだ。ところが、
「俺、知ってるよ」
あまり乗り気でないリッキーが渋々口を開いた。
「さっすがリッキー！　大好き！」
靖子ちゃんは大喜びだが、リッキーは「大好き」と言われても手放しで喜べないみたいだ。

そしてしばらく、靖子ちゃんと明菜で、どちらが柳原さんに連絡するかを巡って激論があったが、

「連絡しといたよ」

とあっさりリッキーに言われ、二人は項垂れた。

こうして、総勢八人が参加する事になった焼きまんじゅう会。

兄貴の泣き顔が目に浮かび、私は悪い魔女のようにヒッヒッヒと笑った。

途中、いつものコンビニで江原ッチと柳原さん、美輪君と落ち合い、瑠希弥さん以外が揃った。

「江原君とは、これからもライバルだね」

柳原さんが爽やかな顔で言う。すると何故か江原ッチは酷く慌てて、

「あ、いや、そんな事はないと思うけど……」

しきりに私を気にしながら話す江原ッチを見て、二人の間にどんな会話があったのか、推理できた。

「江原耕司君、後でゆっくりお話しましょう」

「ひいい！」

江原ッチは蒼ざめていた。

私達はH嶋屋に到着し、兄貴を待つ。まだ三時四十分だけど、かまわない。

「さあ、今日は私の兄貴の奢りだから、思う存分食べてね」

「はーい！」

みんなは気持ちのいい返事をしてくれた。

柳原さんを挟んで座る靖子ちゃんと明菜。その二人の隣に、ションボリして座るリッキーと美輪君。

私と江原ッチは固い絆でしっかり並んで座る。

「いらっしゃいませ」

その時、宮川さんと同年代くらいの男の人と瑠希弥さんと同年代くらいの女性が入って来た。

女性は妊娠しているらしく、ゆったりした服を着ている。

歩き方も妊婦さんぽい。

でも、奇麗な人だ。笑顔も素敵。誰だろう？　何故か、知っているような気がするのだけど。

「おお！」

リッキーも美輪君も、そして江原ッチまでもがその女性を見て鼻の下を伸ばしている。

全く、男って奴は！

「江原耕司君、後でお話があります」

本日二度目。江原ッチは焦りまくっている。その時だった。

「そうなんですか」

「い！」

おお！　ＮＧワード。その女性がＮＧワードを言った。思わず叫んでしまった。

他の誰に言われるのより、衝撃が大きい。

どうして？

「あ！」

連れの男の人が入って来た瑠希弥さんに気づき、デレッとしている。

本当に、男って奴は！

「間に合いましたね」

今度は瑠希弥さんにデレデレする男共。もう！

ふとさっきの女性を見ると、男の人に焼きまんじゅうをアーンしてあげている。

親子かと思ったけど、どうやら夫婦のようだ。

「あの人、子供みたい」

明菜がクスクス笑う。靖子ちゃんも釣られて笑っている。

「遅れちゃったな」

そこへようやく兄貴が、何とG県警鑑識課最古参でロリコン疑惑の宮川さんと共に現れた。ギクッとしてしまう。

「遅いよ、お兄ちゃん！　私達、お金持ってないんだからね」

私はすかさず文句を言った。すると兄貴は私の言葉をまるっきり無視して、

「あ」

と妊婦さんに近づく。あんた、ホントに見境ないな、と言おうとした時だった。

「奇遇ですね、御徒町さん。お父さんとご旅行ですか？」

御徒町さん？　まさか！？

「誰がお父さんだ！」

旦那さんは当然怒り心頭だ。実際、兄貴は失礼過ぎる。

「いえ、左京さんは夫です」

「夫？」

女性の言葉に兄貴はクラッとしたみたいだ。バカ兄貴め。しかし、立ち直りも早いのが兄貴の兄貴たる所以（ゆえん）だ。

「おい、まどか、この女性がお前の大好きな御徒町樹里さんだぞ」

その言葉に私は衝撃を受けた。

「ええ！？」

江原ッチ達が女性に駆け寄るのを見たのが最後。私はそのまま気絶してしまった。

みんなはその女性、御徒町樹里さんにサインをもらい、握手をしてもらい、楽しく過ごしたらしい。

ああ。まさか、本物に出会うなんて……。

作者の悪巧みにしてやられたまどかだった。

瑠希弥さんとお別れかもなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

先日、某作者の策略で、天敵のメイドと遭遇してしまった。

いや、天敵ではない。

私の誤解だった。

御徒町樹里さんは、とっても素敵なお姉さんだった。

気絶した私を心配して、脈拍を計ってくれたり、体温を計測してくれたりした。

樹里さんは、旦那さんの杉下左京さんの話によると、看護師と介護士の資格を持ち、その他たくさんの資格を有する資格マニアなのだそうだ。

でも、決して西村知美ではない。若干、性格に共通点はあるが。

何しろ、私のお師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんをして、

「西園寺先生よりレベルが上です」

と言わしめたのだ。

今回、セリフがやたらに難しいのは、作者が私に舌を噛ませようとしているからだ。

え？　思い込みも大概にしろ、ですって？　うるさいわね！

そんな訳で、「ＮＧワードだ」とか言って、嫌うのはやめにした。

これからは、一日一度、

「そうなんですか」

を唱えようと思うまどかである。

変わり身が早過ぎるとか言わないでよ。

そんなある日、いつものように私の絶対彼氏の江原耕司君と下校デートをしている時の事。

「あ」

瑠希弥さんからメールが入った。

「瑠希弥さんから？」

嬉しそうに覗く江原ッチを一睨みし、私は携帯を開いた。

「西園寺先生が東京に戻ったと遠野泉進様からメールがありました」

遠野泉進て、山形の修験者のお爺ちゃんで、覗きが日課の人よね。

え？　違うの？

あの爺ちゃん、いつ瑠希弥さんとメル友になったんだ？

江原ッチより凄い女好きかも。

「まどかりん、酷い事言わないでよお」

江原ッチが言った。私はいつの間にか声に出していたようだ。

「アハハ」

笑って誤魔化した。

「え？」

続きを読んで、私はギクッとした。

「先生が長野県の宗教団体に狙われています。場合によっては、私も東京に行くかも知れません」

「えええ！？」

私より江原ッチの方が大声を出した。

「瑠希弥さんが、東京に行っちゃうの？」

涙ぐむ江原ッチを見て、私は呆れた。こいつ、懲りてないと。

だが、私も寂しさが込み上げて来た。

最初は、瑠希弥さんの魅力に嫉妬してしまい、江原ッチを盗られるのではと警戒した。

でも、瑠希弥さんは全然そんなつもりはなくて、自分を恥じたほどだ。

その瑠希弥さんが、蘭子お姉さんを助けるために東京へ行く。

これは私の思い過ごしかも知れないけど、瑠希弥さんが東京に行ったら、もうG県になんて戻って来てくれないかも知れない。

だって、G県は「影の薄い県」のトップ争いをしているほど知名度低いし、地下鉄もないし、空港もない。

瑠希弥さんが、「こんな県嫌だ」と逃げ出すのも無理はないのだ。

え？　違う？　わかってるわよ。ボケたのよ。気づいてよ。

「まどかりん、瑠希弥さんと話をしよう。俺達も一緒に行くって」

江原ッチは久々に凛々しい顔で言ったが、鼻の下が伸びているので下心丸出しだ。

まあ、それは目を瞑(つむ)ろう。今は瑠希弥さんと話がしたいのは、私も同じだから。

私達はデートを中断し、江原ッチの家に急いだ。

江原ッチの邸に着くと、瑠希弥さんが出迎えてくれた。
「待っていました」
瑠希弥さんは私達が来るのを予測していたようだ。
私達は、奥の道場で、江原ッチのご両親の雅功(まさとし)さんと菜摘(なつみ)さんを交え、瑠希弥さんと話をした。
「今度の敵はある意味では、サヨカ会以上ですね」
雅功さんが言った。菜摘さんが、
「瑠希弥さんは行かない方が良いでしょう」
すると瑠希弥さんは二人を見て、
「私の命は、西園寺先生と共にあります。行かせてください」
雅功さんと菜摘さんは顔を見合わせる。私と江原ッチもだ。
「今回の敵は、感応術を使うようです。瑠希弥さんには不向きです」
雅功さんが厳しい表情で言った。瑠希弥さんはビクッとした。
「しかも、教団の教祖は、若い女性に自分の子を産ませるため、あらゆる邪法を使うようです」
菜摘さんが付け加えた。それには私もギクッとした。

「瑠希弥さんは、淫術には耐性がない。行かせる訳にはいかないよ」
雅功さんは優しい目で瑠希弥さんを見る。
「でも……」
瑠希弥さんはそれでも食い下がろうとした。
「これは、西園寺さんの願いでもあります」
菜摘さんのその一言が、瑠希弥さんの頑(かたく)なな思いを止めた。
「貴女はもうしばらくここで修行を続けてください。いつか、西園寺さんと共に戦うために」
雅功さんが更に言う。瑠希弥さんは目に涙をいっぱい浮かべて、
「はい」
と答えた。私は瑠希弥さんより先に泣いてしまった。
「まどかりん」
江原ッチが優しく後ろから抱きしめてくれた。
「瑠希弥さん、もうしばらく、私達をしごいてください」
私は涙を拭いながら言った。瑠希弥さんもポロッと一粒涙を流して、

「はい。共に励みましょう」

と応じてくれた。そして、私と瑠希弥さんは、抱き合って泣いてしまった。

それを羨ましそうに江原ッチが見ていたのを知らないまどかだった。

勉強嫌いが玉に瑕なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者である。

あれ？　いつもの「ついでに美少女」とかはないの？

ないの？　えええ！？　なければないで寂しい……。

実は、今、心が折れそうである。

私のお師匠様の小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが、西園寺蘭子お姉さんのいる東京に行ってしまうかも知れないという不安。

そして、先日の期末試験の悲惨な結果に起因するお母さんの数時間にわたるお説教。

しかも、いつもなら私を慰めてくれるお父さんまで、お母さんの「お小遣いダウン宣言」で元気がなく、私が慰めの言葉をかけてあげなくてはならないほどだ。

「男にうつつを抜かしているからだ」

揚げ句の果てには、エロ兄貴にまでそんな事を言われてしまった。

「貴方も偉そうな事は言えないのよ、慶一郎」

このシリーズも百話を超えてしばらく経ったが、お母さんが初め

て登場だ。

私のお母さんだけあって、その美貌は女優のようである。

しかし、性格は「鬼軍曹」である。これは絶対に内緒よ！

「まゆ子さんとお付き合いしているのに、またあちこちで女性の影が見え隠れしているそうね？」

ギクッとする兄貴。お母さんには霊感はないが、情報網が英国情報部（ＭＩ６）並み。

町のあちこちに情報部員（おともだち）がいて、知らせてくれるのだ。

「ああ、しまった、仕事に遅刻しそうだ」

白々しい事を言うと、兄貴は家から逃亡した。

「まどかも、江原君とデートばかりしてないで、勉強を教えてもらいなさい。彼、頭いいんでしょ？」

兄貴が逃亡したせいで、お母さんは全神経を私に集中して来た。

「はい」

私はシュンとして返事をした。え？　随分殊勝な態度だな、ですって？　当たり前でしょ！

我が家の財務大臣はお母さんなのよ。お母さんに逆らったりしたら、例え我が家の総理大臣であるお父さんでも、空の財布を持って

仕事に行かないといけないんだから。

まあ、最近の総理大臣はそんな感じらしいけど。

ところで、話を戻すけど、殊勝って何？

「江原君をウチに呼んで、勉強を見てもらいなさい」

こころなしか、お母さんは顔が赤い。

ちょっと！　信じられないわ。この人、私の彼氏に会いたくて、そんな事言ってるの？

兄貴の気が多いのは、お父さんじゃなくてお母さんに似たの？

でも、まあいい。江原ッチと会うなって言われるかと思っていたから。

「はい」

私はまた素直に返事をして、江原ッチに電話をかける。

「お母さんに代わりなさい。直接お礼を言いたいから」

「はい」

私は呆れているのだが、そんな事は絶対に言えないので、仕方なく携帯をお母さんに渡す。

「江原君？　まどかの母の美里（みさと）です。お久しぶりね」

あまりにもテンションが高い母の勢いに、江原ッチは引きまくっているようだ。

普通、娘の彼氏と話す時、「美里です」とか自分の名前を言わないでしょ？

「ごめんなさいね、まどかが頭が悪いせいで、江原君に迷惑かけてしまって」

江原ッチは、十五分くらいでこちらに来ると言う。

「まどか、銀兵衛（ぎんべえ）に電話して、上寿司三人前頼んで」

「え？」

私は仰天した。世界が明日終わるのではないかと、耳を疑ったほどだ。

お父さんのお小遣いを「小麦商品の値上げとお父さんのお給料の情けなさ」を理由にダウンさせたのに、「上寿司」っすか？

しかし、私もいただけるようなので、何も言わない事にした。

お父さん、ごめんね。

でも、お母さんはキャリアウーマンで、お父さんより稼ぎがあるので、仕方ないかも。

しばらくして、江原ッチが来た。私は居間に通して話をしようとするお母さんの策略を見抜き、あらかじめメールでそっと玄関に入って、そのまま私の部屋に来るように伝えたのだ。

キッチンで鼻歌交じりに飲み物の用意をしているお母さんを尻目に、私と江原ッチは二階に密かに上がった。

「何だか、お母さんに悪いような……」

私の部屋に入ると、天性のお人好しである江原ッチが呟く。

「いいのよ。お母さんはお喋りだから、居間になんか入ったら最後、喋り倒されるわよ」

「そうなんだ」

江原ッチは苦笑いして、ベッドの端に腰を下ろした。

「そうなんですか、よ、江原ッチ」

私は言い直しを求めた。すると江原ッチは、

「あれ、でもまどかりん、以前は誰かが『そうなんですか』って言うと嫌がってなかった？」

「改宗したのよ」

私はちょっとだけ恥ずかしかったけど、そう言った。

「改宗？」

江原ッチには何の事かわからない。そう、私は「御徒町樹里教」の熱烈な信者になったのだ。

朝昼晩、そして寝る前に「そうなんですか」を鬼門の方角を向いて唱えるのだ。

え？　何言ってるんだ、ですって？　うるさいわね！

「何から勉強する？」

江原ッチが急に話題を変えた。私は肩を竦めて、

「勉強なんてどうでもいいの。ゲームでもしない？」

何だか、江原ッチの様子がおかしい。ソワソワしている。ふとドアを見ると、お母さんが少しだけ開いて、中を覗いていた。

思わずビクッとした。

「どうして私に声をかけないで部屋に入ったのよお」

恨みがましい声で、お母さんが言った。

「だってお母さん、江原ッチは勉強を教えに来てくれたんだよ。仕方ないじゃない」

「わかったわよ」

お母さんは氷の入ったカル〇スを置くと、部屋を出て行った。

カル〇スの工場は、実はG県にあるのだ。どうでもいいとか言わないでよ！

私と江原ッチは、お母さんの目もあったので、本当に真剣に勉強をした。

「まどかりんは頭が悪いんじゃなくて、授業をちゃんと聞いていないだけだろ？　教えれば、全部理解できて、豆テストも満点だもん」

江原ッチが言った。私は照れ臭くなって、

「いやあ、それほどでも……」

江原ッチは苦笑いしている。

「まどか、お昼にしなさい」

お母さんが呼びに来た。

江原ッチは、お昼が上寿司だと知り、涙ぐんでいた。

江原家は貧乏ではないが、贅沢はしない家なので、寿司を食べた事がほとんどないと言う。

「素晴らしいご両親ね。今度お話が聞きたいわ」

お母さんは江原ッチに顔を近づけて言った。江原ッチは思わず後退りして、

「はい、是非おいでください」

と応じた。この勢いだと、江原ッチのお父さんの雅功(まさとし)さんまでお母さんが狙いそうで怖い。

お昼をすませ、私達はまた勉強をした。そして、江原ッチは夕方まで付き合ってくれた。

「ありがとう、江原ッチ」

私はお母さんが階下(した)で洗い物をしているのを確認して、お礼のキスをした。

もちろん、唇によ！

「ま、まどかりん……」

江原ッチは真っ赤になって喜んでくれた。

玄関の外まで見送ると、江原ッチが、

「瑠希弥さん、すぐにではないけど、年内には東京に帰るらしいよ」

と教えてくれた。

「そうなんですか」

私は笑顔全開で応じた。そうでもしないと、また泣きそうだからだ。

「俺達に瑠希弥さんを止める権利はないけど、やっぱり寂しいよね」

「うん……」

江原ッチは、いつものような雰囲気ではない。

「靖子も寂しそうなんだ。だから、余計に辛くてさ」

江原ッチの妹さんの靖子ちゃんも、瑠希弥さんを慕っていたからなあ。

って事は、あの「僕っ娘」の柳原まりさんもショックを受けているのだろうか？

「柳原さんは、東京に転校しようとしているらしいよ」

「ええ！？」

それはまたすごい事だ。

「瑠希弥さんがいる間に、できるだけいろいろな事を教えてもらおう」

「そうね」

私と江原ッチは、互いが見えなくなるまで手を振り合った。

今日はお母さんの紹介編のようなまどかだった。

マナー違反はいけないのよ！

私は箕輪まどか。中学生の超美少女で、しかも天才的な霊能者だ。

前回、「なければないで寂しい」って言った事への当てつけなの？

意地悪！　え？　何かキュンとしたって、変態なの？

期末試験の惨劇の後、お母さんのお説教地獄があり、お父さんの絡み酒もありで、夏休み早々酷い目に遭っている。

その上、エロ兄貴にまで、

「まゆ子を宥(なだ)めて欲しい」

と懇願された。

エロ兄貴は、北海道へ行ってしまった小倉冬子さんに会うために、またしてもまゆ子さんを架空の研修旅行で沖縄に行かせようとしたのだ。

でも、いくらおっとりした性格のまゆ子さんでも、二度も同じ手には引っかからない。

と思ったら、引っかかって行ってしまった。

で、私のお母さん（つまりエロ兄貴のお母さんでもある）が、ま

ゆ子さんにチクッたのだ。

最初は信じなかったまゆ子さんだったが、お母さんに証拠の航空チケットの画像を送信されて信じたようだ。

「全く。私はまゆ子さんの味方だから、お兄ちゃんの肩は持たないからね」

すると兄貴は、金にモノを言わせて来た。

「これでどうだ」

樋口さんが目の前を行ったり来たりしている。

「何とかしましょう」

成績ダウンで金欠だった私は、ついその「悪魔の誘惑」に乗ってしまった。

「頼んだぞ、まどか。愛してるからな」

兄貴は投げキッスをして、私の部屋を出て行った。

気持ち悪いから、愛してるとか、投げキッスとかしないで欲しい。

私は妹なんだし。

え？　最近はそういうのが流行ってるって？

ウチは違うからね！

そんなこんなで、私はまゆ子さんを宥めるためにまゆ子さんの住むM市の高級住宅街に向かった。

もちろん、空は飛べないから、自転車でよ。

それから、スカートじゃなくて、ジーパンよ。

最近、変態が多いから。

兄貴がまゆ子さんと付き合い始めたのは、まゆ子さんがお金持ちのお嬢様だと知ったかららしい。

私もまゆ子さんとは長い付き合いだけど、全然知らなかった。

まゆ子さんは警察の寮に住んでいたけど、いよいよ結婚間近か、となったので、実家に戻ったのだ。

知らない訳だ。え？　本当は、作者が急に思いついたんだろうって？

ダメよ、そんな裏話しちゃ！　また干されちゃうわ。

そんな妄想をしているうちに、私はまゆ子さんの家の近くに着いた。

「あれ？」

いけない。また特殊能力が発動した。

住宅街の交差点の角に幼い男の子の霊が佇(たたず)んでいる。

それも、両目を火傷して、酷い火脹(ひぶく)れ状態。

どうやら、マナー違反の大人が歩き煙草をしていて、下ろした手の近くに男の子がいて、煙草の火が目に入ってしまったようだ。

しかも、男の子は熱さのあまり、その場で転んでしまい、走って来たトラックに跳ねられてしまったのだ。

トラックの運転手さんは驚いて車を停め、すぐに救急車と警察を呼んだ。

運転手さんは驚きながらも、立派に対応し、男の子のために手を尽くした。

でも、男の子は救急隊員の皆さんの懸命の努力も虚しく、亡くなってしまった。

しかし、歩き煙草の男はそ知らぬフリをしてその場を立ち去ってしまった。

目撃者はなく、トラックの運転手さんも煙草男を見ていない。

警察はその男の存在に気づく事なく、トラックの運転手さんの自動車運転過失致死と断定した。

酷い話だ。

その男は、自分のせいで男の子が転んだのに気づいている。

それなのに現場からサッサと立ち去った。

私は怒りで叫びそうになった。

「ねえ、煙草を吸っていた人を待っているの？」

私は男の子が悪霊化しそうな雰囲気だったので、声をかけた。

「うん。一緒に行って欲しいから」

男の子は火脹れの目を私に向けて言う。

背筋が寒くなるほど冷たい声だ。

「ダメよ、そんな事しちゃ。お母さんとお父さんが悲しむよ」

私は事故現場に供えられた花束を見下ろして言った。

「え？」

男の子はキョトンとしている。

「そんな事をしたら、貴方はその人と一緒に地獄に堕ちてしまうわ。悲しくて悔しいのはわかるけど、このまま行くべき場所に行って」

私は光明真言を唱えた。

「オンアボキャベイロシャノウマカボダラマニパドマジンバラハラバリタヤウン」

男の子が光に包まれる。彼の火脹れは消え、元の可愛い顔に戻った。

その火脹れは、煙草男に対する憎しみでできていたのだ。

だからそれさえなくなれば、消えるのはわかっていた。

「ありがとう、奇麗なお姉ちゃん。僕、行くよ」

男の子はニコッとして、光と共に天へと上がって行った。

私は彼が見えなくなるまで手を振った。

あれ？　何しに来たんだっけ？

ああ、そうだ、まゆ子さん！

慌ててまゆ子さんの家を探した。

この先ね。

その時だった。

住宅沿いの舗道の先に男の人が現れた。

煙草を吸っている。

こいつ！　間違いない。あの男の子に煙草の火をぶつけた奴だ！

こんな近所に住んでたのか。許せない。

何か言わないと気がすまない。

私は自転車を押して、そいつに向かって走り出した。

「え！？」

ギクッとした。黒い着物の少女。見た目は五歳くらいの可愛い子。

あのサヨカ会との戦いの時に見た凄い霊圧の少女が現れたのだ。

少女は一瞬私の方を見て、ニッとした。

あまりの恐怖に、私は漏らしそうになって立ち止まってしまった。

そいつはもちろん、少女の存在には気づいていない。

私は歩き去るそいつを追うのをやめた。

もうあの煙草男は死んでしまう。

その現場は見たくない。

以前見た事があると言っていた小松崎瑠希弥（こまつざき るきや）さんの話だと、壮絶な死に方をする場合もあるらしいから。

私はもう一度まゆ子さんの家を探し始めた。

まゆ子さんの実家で何があったのかは、また次回ね。

今回は、悲しくて怖い話だと思うまどかだった。

まゆ子さんは嫉妬深いのよ！ＰＡＲＴ２

私は箕輪まどか。中学二年の美少女霊能者だ。決してＦＭＧのアナウンサーではない。

意味不明だわ、今回のオープニング。

私は、エロ兄貴の慶一郎に頼まれ（樋口さんで丸め込まれたとも言う）、兄貴の恋人の里見まゆ子さんの実家に向かっている。

兄貴が、小倉冬子さんという高校の同級生に未練を抱いたために起こった騒動にどうして私が巻き込まれるのか。

どうにも納得がいかないが、一葉さんの魅力には勝てなかったまどかである。

途中、男の子の霊を霊界に行かせ、あの黒い着物の少女に出会った。

本当に怖いんだから！

見えない人にはわからないと思うけど、首筋にナイフを押し当てられて、耳に吐息をかけられたような感覚なのよ。

え？　怖いのか、気持ちいいのかわからないですって？

いいわよ、もう！

やがて、私はまゆ子さんの実家の前に来た。

凄い豪邸だ。

もしかすると、私が通っている中学校より大きいかも知れない。

大袈裟じゃないわよ。

尊敬する御徒町樹里さんが働いている五反田邸は、東〇ドーム三個分らしいんだから。

え？　いつから尊敬するようになったんだって？　気にしないでよ、そんな細かい事。

取り敢えず、門にあるインターフォンを押す。

「はい」

女の人の声が答える。

「あの、箕輪まどかと言います。まゆ子さんはいらっしゃいますか？」

私はよそ行きの声で尋ねた。

「ああ、まどかちゃん！　入って」

声の主はまゆ子さんだった。

門の扉が自動的に動き出す。すごい！

ウチのお父さんのお給料では、この門すら買えない。

「失礼します」

私は自転車を押して門をくぐった。

「げ」

門から家まで相当な距離あるぞ。

私は自転車に跨り、漕ぎ出した。

歩いて行くには遠過ぎるのだ。

兄貴、でかした！　絶対まゆ子さんと結婚してよ！

つい黒まどかが出てしまう。

でも、蘭子お姉さんの「裏蘭子」よりは大人しいものよ。

あ、ごめんなさい、蘭子お姉さん。

こうなったら、樋口さんは関係ない。

兄貴とまゆ子さんの関係改善に全力を注ごうと思う。

「いらっしゃい、まどかちゃん」

まゆ子さんは玄関のドアを開いて出迎えてくれた。

こんな背の高いドア、東大寺の大仏殿以来よ。

うん、それは言い過ぎ。ごめん、認めます。

私はリヴィングルームに通された。

フカフカの真っ白な革張りのソファに座り、出されたアイスティをストローで一口飲む。

「慶一郎さんに頼まれたんでしょ？」

向かいに座って私を見るまゆ子さん。

笑顔だが、闘気が背後に見える。多分、その凄まじさに世紀末覇王も逃げ出すはずだ。

「はい」

シラを切る自信がないので、あっさり白状した。

「まどかちゃんに頼むなんて、最低だわ」

まゆ子さんは闘気を引っ込め、悲しそうに言った。

「慶一郎さんとお付き合いを始める時、こんな事は何度もあるって思ったけど、それにしても多過ぎるのよ」

まゆ子さんは自分のアイスティをストローでかき回しながら独り言のように言う。

「小倉冬子さんでしょ、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんでしょ、西園寺蘭子さんでしょ、八木麗華さんでしょ、力丸あずささんでしょ……」

まゆ子さんは総勢二十名を並べ立てた。

それだけ気が多い兄貴もとんでもないが、全部暗記しているまゆ子さんも怖い。

「ねえ、まどかちゃん、慶一郎さんに悪い霊が憑いているんじゃないの？」

まゆ子さんは溜息を吐きながら、真剣な表情で訊いて来た。

私は苦笑いして、

「特に霊は取り憑いていないようですけど」

「じゃあどうしてなの！？」

まゆ子さんが立ち上がって叫んだ。私は殺されると思った。

「ごめんなさい、大声出して」

まゆ子さんは赤面してソファに戻る。

「いえ、大丈夫です」

私はニコッとして応じた。これが私の日常生活の師匠である御徒町樹里先生の教えだ。

え？　お前ほど白々しい奴はいない、ですって？　フンだ！

あれ？　そうか、そういう事か。でも、信じてもらえるだろうか？

「兄貴がまゆ子さんを見てくれないのは、まゆ子さんのせいですよ」

「え？」

まゆ子さんの目が、スナイパーの目になった気がした。凄い殺気だ。

「まゆ子さんが、お兄ちゃんを遠ざける気を出しているんです。それを改善しない限り、お兄ちゃんはまゆ子さんを見てくれませんよ」

私は死を覚悟して言った。まあ、それは大袈裟だが、それくらい必死の思いだったのは本当だ。

「そんな……。まどかちゃん、慶一郎さんにいくらで頼まれたの？　私、その十倍出すから、本当の事を教えて」

まゆ子さんは身を乗り出して私に言った。

十倍？　福沢さんが五人？　ああ、いかん、ジャストミートの変態オジさんが頭の中を駆け巡りそうだ。

「いくら出されても、真実はいつも一つです」

パクリ覚悟で言い切った。まゆ子さんは目を見開き、ドスンとソファにお尻を落とした。

「そんな……」

まゆ子さんの奇麗な瞳がジワッと湿りを帯びる。

「難しい事ではないんです。お兄ちゃんを大きな愛で包んであげてください。そうすれば、きっとお兄ちゃんはまゆ子さんだけ見るようになりますよ」

私は笑顔満開で言い添えた。まゆ子さんは赤くなった瞳を私に向ける。

「どうすればいいの？」

キュンとしてしまうくらい可愛いまゆ子さん。これがまゆ子さんの本当の姿なのだ。

あの世紀末覇王も逃げ出すような闘気を出すまゆ子さんの姿は、エロ兄貴のせいなのだ。

まずは、まゆ子さんの強過ぎる嫉妬心を抑え、その上で兄貴を懲らしめる。

これで万事解決だ。

「お兄ちゃんに『私、信じてるから』と言ってください。それだけで大丈夫です」

「そうなの？」

まゆ子さんは課題が簡単なのを知って、ホッとしたようだ。笑顔がこぼれた。

「私のお義姉（ねえ）さんには、いつも笑顔でいて欲しいから」

私はまた笑顔満開で言った。

「まどかちゃん……」

まゆ子さんは微笑みながら、瞳から数粒の真珠をポロポロと落とした。

奇麗だ。まゆ子さん、奇麗。

こうして、私はまゆ子さんの嫉妬心を抑えることに成功した。

問題はあのバカ兄貴だ。どうしてくれよう？

いろいろ考えながら、家に帰った。

夜になり、兄貴が帰って来た。私は兄貴を呼び止め、まゆ子さんの事を話した。

「そうか。ありがとな、まどか」

嬉しそうに言う兄貴に私は樋口さんを突き返す。兄貴はキョトンとした。

「返す。まゆ子さんに悪いから。だから、お兄ちゃんもちゃんとまゆ子さんを見て」

兄貴も真顔になった。そして、樋口さんを受け取り、

「わかった」

と言うと、自分の部屋に行ってしまった。

カッコつけて樋口さんを返してしまい、心の中で大号泣のまどかだった。

G県警刑事部霊感課始動なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の美少女霊能者。

霊感系のお師匠様は、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さん。

そして、日常系のお師匠様は、御徒町樹里さん。

え？　相変わらず、「長いものには巻かれる」タイプだな、ですって？

違うわよ。長いものには自分から積極的に巻かれていくタイプなのよ！

ところで、長いものって、何？

G県M市の中学校も夏休み。

いろいろあったけど、それなりに充実した一学期だった。

それより、心配なのは瑠希弥さん。

年内で、西園寺蘭子お姉さんのところに戻ってしまうらしい。

「親父達に頼んでみたんだけど、瑠希弥さんの意志を尊重するって言われた」

私の彼の江原耕司君は寂しそうだ。ちょっとだけムカつく。

「瑠希弥さんも誘ったんだけど、水着持ってないらしいんだよね」

更に残念そうな江原ッチ。私は当社比二百パーセント増しでムカついた。

「今日は、明菜達とダブルプールデートのはずなのに、どうして瑠希弥さんを誘うのよ、江原耕司君？」

私の怒りを感じたのか、江原ッチはビクッとした。

「あ、いや、その、瑠希弥さん、寂しそうだったから。ほっとけなくてさ」

そう言われてしまうと、何も言えなくなる。

小倉冬子さんが北海道に行ってしまって、親しい友人がいない瑠希弥さんは、確かに寂しそうなのだ。

「まあね」

私も何となく悲しくなって同意した。その時だ。

私の携帯の妙な着メロが鳴る。このスチャラカなメロディは……。

「何の用なの、お兄ちゃん！？」

私は携帯に出るなり、怒鳴った。

「仕事だ、まどか」

変に気取った声で兄貴が答えた。

「今日はプールデートなの！」

私はそう言って通話を切ろうとしたが、

「お願いします、まどかさん。来てください」

と瑠希弥さんの声がした。私と江原ッチは思わず顔を見合わせた。

エロ兄貴と瑠希弥さんが一緒なんて、子羊と狼が一緒以上に危険だ。

ってか、兄貴、懲りてないの！？　また恋人の里見まゆ子さんを泣かせる気？

「まどかちゃん、私からもお願い」

「へ？」

おおお！　まゆ子さんもいる。どういう事だ？　何が起こっているの？

これこそまさしく「呉越同舟」。

ところで、「呉越同舟」って何？　え？　訊いてばかりいないで、自分で調べろ？

フンだ！

私は一通り内容を聞き、携帯を切った。

「よし、すぐに行こう、まどかりん」

何故か一緒に行く気満々の江原ッチ。

「残念ね、江原ッチ。今回は、霊感課のお仕事なの」

私の非情な言葉に江原ッチは硬直した。

ごめんね。

そうだ、親友の近藤明菜にも謝っとかないと。

「あ、そう。そうなんだ。残念だなあ」

明菜は全然残念そうでないトーンで応じた。

きっと、美輪幸治君と二人っきりになれるからだろう。

あの二人の場合、明菜の方がずっと積極的だから。

硬直した江原ッチを置き去りにして、私は国道に面したコンビニの前で兄貴達の迎えを待った。

兄貴達は大型の黒塗りのワゴン車で現れた。

何故か、あのちょっとエロい本部長も一緒だ。

「急いでくれ。事は急を要する」

本部長は、私が乗り込んだのを確認すると、運転する刑事さんに言った。

「は！」

刑事さんは敬礼して、サイレンを点灯させた。

おお！　これ、初体験だ。え？　どうして悶絶してるのよ？　変なの。

ワゴン車は停止した車をすり抜け、やがてG県警本部に到着した。

そして、私達は、本部長の先導で県警本部の地下へとエレベーターで降りて行った。

「何なの、一体？」

私は小声で兄貴に訊いたが、

「俺達も何も聞かされていないんだ。ね、まゆりん？」

「ええ」

兄貴の「まゆりん」発言に、まゆ子さんは真っ赤になっている。

「さあ、ここが君達の新しい部署だよ」

本部長が誇らしそうに言って、目の前の扉を開いた。

そこにはたくさんのパソコンとプリンター、そして何だかわからない機械が並んでいて、机も四つあった。

「箕輪君、今日から君がこの霊感課の課長だ。そして、里見さん、君が課長補佐だ」

本部長の言葉に、兄貴とまゆ子さんは目を見開いて何も言わない。

「それから、小松崎さんとまどかさんが、この課の活動担当だ」

「え？」

私と瑠希弥さんも顔を見合わせた。

本部長の手招きで、私達は部屋の中に入る。

「ここには、最新のコンピュータと最先端の霊感対応システムを導入した。世界中のあらゆる霊現象のデータを瞬時に検索し、解析する」

本部長の説明は続く。

「そして、一番適正な対処法を割り出す。どうかね？」

何だか、嫌な感じ。霊感と電磁波って、相性が悪いはずだけど。

「すばらしいですね」

瑠希弥さんを見ると、目を輝かせている。そうだ。

瑠希弥さん、こう見えて、メカに強いんだよね。

蘭子お姉さんのメカ音痴を補っていたらしいし。

「そうだろう？　霊感課はこれから捜査の要になる。難事件を次々に解決していく。そう信じているのだ」

本部長は自分の言葉に酔いしれている感じだ。

「ですが、私に務まるかどうか……」

瑠希弥さんはメカには興味津々だが、仕事には消極的みたいだ。

「そこを何とか頼みます、小松崎さん、まどかさん！」

本部長はいきなり土下座をした。

その途端、本部長の本心が見えた。

本部長は幼い頃に両親を殺人事件で喪っている。

結局、その事件は迷宮入りした。

それがきっかけで、本部長は警察官を目指した。

しかし、下っ端で終わってしまっては、自分の目指す警察は作れ

ない。

だから、猛勉強した。なるほどね。

最初に会った時とイメージが変わった。

エロオヤジかと思ったんだけど。

「瑠希弥さん」

私は瑠希弥さんを見た。瑠希弥さんは頷き、

「微力ですが、努めさせていただきます」

と言った。本部長は顔を上げて、

「ありがとう、小松崎さん、まどかさん！」

と言いながら、机の上にあったアタッシュケースを開き、

「制服を改良したんだ。着てみてくれたまえ」

私はそれを見て、また考えが変わった。

瑠希弥さん用の制服、今度は襟元が開き過ぎな気がする。

大丈夫なのだろうか、この人の言葉に従って。

まだまだ不安なまどかだった。

今度こそプールでダブルデートなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

この前、G県警の本部長に連れられて、県警本部の地下にある刑事部霊感課に行った。

驚いた事に、エロ兄貴が課長で、兄貴の恋人の里見まゆ子さんが課長補佐。

そして、私のお師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんと私が活動担当。

その上、瑠希弥さんの制服はエロ度アップで、完全に胸の谷間が見えそうな襟だ。

私のは何も変わらず、音楽隊の使い回しのような赤い制服だった。

本部長はどうやらロリコンではないようだ。私の身体には興味がないらしい。

って、何言わせるのよ！？

という訳で、今日こそダブルデートだ。

しかも、恒例のプールデートだ。

「私、思い切ってビキニ買っちゃった」

親友の近藤明菜が囁いた。
「大胆だなあ、明菜は」
私は仰天してしまった。去年、私もビキニに挑戦したが、あまりにもずれるので諦めたのだ。
「寄せて上げる機能付きなのは、美輪君には内緒よ」
「は？」
そんな水着があるのか？　私も買いたいぞ。
私と明菜は待ち合わせ場所のいつものコンビニに向かう。
何度も言うようだが、ここにはアイスを買い占めるお姉さんは現れない。
「よう！」
店に入ると、雑誌コーナーで立ち読みしていた明菜の彼氏の美輪幸治君が右手を上げて挨拶してくれた。
「や、やあ。早かったね、まどかりん、アッキーナ」
何故か、私の彼氏の江原耕司君は、読んでいた雑誌を慌ててラックに戻した。
む？　今のは確か、良い子は読んではいけない類いのものでは？

全く。これから私の魅惑のボディが拝めるのに、何してるのよ、江原ッチは。

え？　幼児体型の癖に何言ってるんだ、ですって？　う、うるさいわね！

私達は、飲み物やお菓子を購入し、市営のプールに向かう。

そこからは歩いて五分とかからないので、すぐにプールに着いた。

「楽しみだなあ、アッキーナの水着姿」

美輪君が嬉しそうに言うと、

「期待していいわよ、美輪君」

と、明菜も嬉しそうだ。

「まどかりんはビキニじゃないの？」

江原ッチが寂しそうに尋ねる。

「まどかはお子ちゃまだから、ビキニなんか着たらずり落ちちゃうわよね」

どこかで聞いたような声が聞こえた。この性格の悪そうな物言いは……。

「さやか！」

そう、あの綾小路さやかが、私の元彼の牧野徹君と共に現れたのだ。

「う、うるさいわね！　あんただって、大した事ないでしょ！」

私は火照る顔を扇ぎながら言い返す。さやかはニヤリとして、

「まあ、プールサイドではっきりするでしょうけど」

と言うと、気まずそうな牧野君を引き摺るようにして先に中に入って行った。

「相変わらず、高圧的な女ね」

明菜はさやかが嫌いなので、ムッとしている。

「まあまあ、アッキーナ。そんなに怒らないで。可愛い顔が台無しだよ」

美輪君が歯の浮くような事を言う。

「まあ、美輪君たら」

明菜は嬉しそうに微笑んだ。バカップルだな、こいつら。

私達は更衣室前で別れ、着替えをすませてプールに繰り出した。

確かに明菜の水着は大胆なビキニ。

しかも、本当に寄せて上げたのが知っている者にはよくわかるほどの胸の谷間が出現している。

「どうよ、美輪君？」

明菜はモデルのようにポーズを決めて、美輪君を悩殺。

「おお！」

釣られて、江原ッチまで鼻の下を伸ばしている。

「江原耕司君、見るモデルが違います」

私は江原ッチの背後に立ち、言った。確かに、私のは、スク水に毛の生えた程度のワンピースの水着だけど。

「あわわ、まどかりんの水着姿、眩し過ぎて見られないよ」

見え透いたお世辞だ。でも嬉しい。

「ありがとう、江原ッチ」

水着姿なのを忘れて、私は思わず江原ッチの背中に抱きついてしまった。

「うおお、ままどかりん、刺激が強過ぎるよお！」

江原ッチは準備体操もしないままで、流れるプールに飛び込んだ。
「ははは、江原の奴、まどかちゃんに抱きつかれて、おっき……」
そこまで言った美輪君の口を慌てて塞ぐ明菜。え？　何？
その時、強烈な気が近づいて来るのを感じた。
「江原ッチ！」
私は危険を感じて、江原ッチを呼んだ。
「あ、まどかりん、そのまだ無理……」
江原ッチは何故かモジモジしている。
「もう！」
私は呆れて、一人でその気の方に走り出す。
「どうしたの、まどか？」
明菜が尋ねた。
「ここにいて！」
私は明菜と美輪君と役に立たない江原ッチを残し、現場へと向かう。

G県警刑事部霊感課の箕輪まどかの初仕事だ。

「きゃああ！」

女性の悲鳴が上がった。波動を探ってみると、浮遊霊がいるようだ。

付近にいた霊が、人々の声や気に誘われて、来てしまったようだ。

「インダラヤソワカ！」

ところが、そこにはすでにさやかが来ていて、浮遊霊を追い払った後だった。

「遅かったわね、まどか。もう解決しちゃったわよ」

「あ、うん。ありがとう」

私は、瑠希弥さんと小倉冬子さんから言われている事を思い出した。

さやかは寂しいから、意地悪をしてしまうのだと。

だから、こいつの性格の悪さには目を瞑(つむ)って、優しくしてあげようと思う。

「嬉しいんだけど、何かムカつく」

さやかが言った。でも笑顔だ。良かった。それはいいけど、あまり人の心を覗かないで欲しい。

「わかったわよ」

さやかはそのまま牧野君と立ち去ろうとしたので、

「一緒に泳ごうよ、さやか」

と誘った。さやかはドキッとしたようだ。

「いいけど、マッキーは私の彼だからね」

「何言ってんの」

私は牧野君と顔を見合わせて笑った。

さやか達と元いた場所に行くと、何故かプールサイドにベタッと座った江原ッチと美輪君しかいない。

「あれ、明菜は？」

美輪君に尋ねた。すると、美輪君は気だるそうにプールの方を指差す。

「え？」

そちらに目を向けると、明菜が楽しそうにビーチボールを抱えて誰かと話している。

「誰、あの人？」

乙女全開の目でさやかが尋ねた。私は溜息を吐き、

「柳原まりさん。私のクラスメートよ」

「ああ、私、また転校しようかなあ」

牧野君も、さやかの変貌にビックリしている。

「さ、さやかちゃん……」

牧野君は泣きそうな顔になった。

それに反して、さやかは目をキラキラさせている。

戻って来なくていいよ。

私のその心の声は、どうやらさやかに聞こえなかったようだ。

柳原さんの周りには、たくさんの女子が群がっている。

しかも、柳原さん、胸大きい！　この前、抱きつかれた時はわからなかったけど。

でも、水着は紺のワンピースで、大人しめだ。

あ。いつの間にか、江原ッチの妹さんの靖子ちゃんまでいるわ。

何なの、全く。

「あ！」

柳原さんが誰かに気づいて嬉しそうに手を振る。この気、まさか……。

恐る恐るそちらを見ると、瑠希弥さんが白の半袖のTシャツとジーンズ地の短パンを履いて現れた。

「おお！」

今度はプールにいた男性一同がどよめく。

江原ッチと美輪君も、さっきまでの気の抜けた感じはどこに行ったのか、いきなり立ち上がって手を振り出す。

「まどかさん」

瑠希弥さんは私に気づいて微笑み、近づいて来た。

「プールで足を掴まれたという情報が入って、霊感課の里見さんから連絡を受けて来たのですが、もう解決したようですね」

「はい」

私は苦笑いして応じた。

「私が追い払ったんです」

さやかが誇らしそうに胸を突き出して言う。瑠希弥さんは、

「そうなんですか」
と実にありがたいお言葉をおっしゃった。
え？　白々しいとか言わないでよね。
「そうだ、さやかにも協力してもらいましょうよ、瑠希弥さん」
私はさやかの能力の高さを知っているので、言ってみた。
「そうですね。綾小路さんは良い力を持っているようですから」
「え、どういう事？」
さやかはキョトンとした。
私はかいつまんで、霊感課の事を説明した。
「是非、ボクにも協力させてください」
いつの間にかそばに来ていた柳原さんが口を挟む。
「私も」
靖子ちゃんまで？
「私は計算が得意だから、お力になれます」
何故か明菜まで……。

「だったら、俺も」

江原ッチが手を挙げて言う。瑠希弥さんはニコニコして、

「わかりました。課長に言ってみますね」

え？　課長に？　エロ兄貴になんか言ったりしたら、女の子は全員合格で、江原ッチだけ不合格の予感がするまどかだった。

お母さんに怒られてお勉強なのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。それなりに美少女である。

何だか物悲しいのは私だけ？

先日のプールでの事件をきっかけに、G県警刑事部霊感課のメンバーに応募が殺到し、本部長は大喜びだ。

「良かった。これで議会にも顔が立つというものだ」

議会？　何、それ？

「相変わらずバカだなあ、お前は。予算を決めるのが県議会なんだよ。それ相応の働きをしないと、たちまち槍玉に上がるんだよ」

エロ兄貴改め霊感課の箕輪課長が言った。

「これからもよろしく頼むよ」

本部長は課長補佐の里見まゆ子さんから応募して来た人達の資料を受け取ると、ニコニコして霊感課を出て行った。

「いいんですか、こんな調子で？」

まゆ子さんが深刻な顔で兄貴を見る。

「いいんじゃないの。平和で」

兄貴は自分の席にふんぞり返った。

「何にしても、まゆりんと俺の給料上がったしね」

兄貴は人目も憚らず、まゆ子さんにウィンクしていた。

まゆ子さんは真っ赤になってしまった。相変わらず純情派だ。

「今日の面接はどうするのですか？」

小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが尋ねる。

瑠希弥さんは本部長の要望で制服に着替えていた。

「全員合格だそうなので、面接はしないそうですよ」

「そうなんですか」

瑠希弥さんは屈託のない笑顔で応じた。

さっきから兄貴は書類を取るフリをして瑠希弥さんの胸元を覗き込んでいる。

目に余ったので、私はまゆ子さんにソッとメモを渡した。

まゆ子さんはそれを見て目を見開き、私に小さく頷くと、

「慶一郎さん、後でお話がありますので、残っていただけますか？」

と悪霊も逃げ出す闘気を放った。

「え？」

全然自分の悪行が気づかれているとは思ってもいない兄貴は、ポカンとしてまゆ子さんを見た。

天罰よ、バカ兄貴め。

私は密かに笑った。それから瑠希弥さんに、

「その襟、開き過ぎですから、もう一個ボタンを着けた方がいいですよ、瑠希弥さん」

「そうなんですか？」

瑠希弥さんは笑顔全開で小首を傾げて言った。

良かった、江原ッチ以下、エロ男子達がいなくて。兄貴はまゆ子さんが怖くて俯いているし。

瑠希弥さんが怖いのは、あの尊敬している御徒町樹里さんと同じく、無意識に可愛いところなのだ。

私には無理。え？　お前には絶対無理、ですって？　うるさいわね！

「でも、あまり襟を狭くすると、胸が苦しいんですよ」

瑠希弥さんのその一言は、私とまゆ子さんを直撃した。どうせ私達は貧乳ですよ！

私はともかく、まゆ子さんは一瞬瑠希弥さんを睨んだようだ。

巨乳の人の悩みはわからない……。ううう……。

「もうちょっと開いていた方が楽ですね」

瑠希弥さんの天然爆弾がまた炸裂した。

まゆ子さんがブルブル震えているのがわかり、私は怖くなった。

「今日はもう用事ないでしょ？　帰るよ、お兄ちゃん」

私は瑠希弥さんを急き立てて、霊感課を出た。

「どうしたんですか、まどかさん？」

瑠希弥さんは状況が飲み込めず、キョトンとしている。

「暇だから、帰った方がいいかなって」

私は苦笑いをして誤魔化した。

「そうなんですか。では、送りますよ、まどかさん」

「ありがとうございます」

来る時は徒歩で来させられたので、瑠希弥さんの車に乗れるのは

嬉しい。

瑠希弥さんのスポーツカーは、あっという間に我が家の前に着いた。

決してお笑い芸人ではない。

「冷たいものでもどうぞ」

私は瑠希弥さんと話がしたかったのでそう言った。

「ありがとう、まどかさん」

瑠希弥さんと一緒に家に戻れば、あの小うるさいお母さんの小言も防げる。

私の悪巧みに付き合わせてしまってごめんなさい、瑠希弥さん。

ところが、お母さんはそれ程甘くなかった。

「まどかがお世話になっています」

瑠希弥さんには満面の笑顔で応じ、

「まどか、宿題終わったの！？　毎日遊んでばかりいて！」

私には鬼の形相。これがわが母の正体なのだ。

「まどかさん、宿題なら、私が見てあげますよ」

瑠希弥さんが言ってくれた。するとお母さんはまた笑顔になり、

「そうですか。すみませんねえ、瑠希弥さん。本当にこの子、誰に似たのか、勉強が嫌いで」

と善人の顔になった。その変貌ぶり、怖過ぎるよ、お母さん。

まあいいや。瑠希弥さんなら優しく教えてくれそうだし。

「じゃあ、お部屋に行きましょうか、まどかさん」

「はい」

私はニコニコして瑠希弥さんを案内した。

「宿題はどれですか？」

瑠希弥さん、何故か真顔。笑っていない。何だか嫌な予感。

「こ、これです」

私は机の上に山盛りになっているドリルやら何やらを指し示した。

「わかりました。時間的に考えて、急がないと間に合いませんね。超高速でこなしましょうか、まどかさん」

瑠希弥さんの目が、黒縁眼鏡の奥でギラッと光った。闘気が出ている……。

ひいい！　そう言えば、元々瑠希弥さんて、とっても厳しい人だったんだっけ？

忘れてた……。

お母さんの方がずっと優しいと思ってしまうまどかだった。

柳原さんに嫉妬されたのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者。どちらかと言うと、可愛いと思う。

え？　随分謙虚になったな、ですって？　それはそうよ。

あれだけ、打ちのめされれば、大人しくなるというもの。

先日、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんに送ってもらって、お母さんのお小言を逃れようとしたら、成り行きで瑠希弥さんが宿題を見てくれる事になって……。

お母さんより優しく教えてもらえると思ったら、とんでもなくスパルタだった。

お陰で、私は宿題の大半を終了する事ができた。

お母さんは大喜びし、

「是非またいらしてくださいな」

と瑠希弥さんを送り出した。

ああ。瑠希弥さんは大好きだけど、勉強の事に関して言えば、もう勘弁して欲しい。

あの人、真面目な人だから、妥協を許してくれないのよね。

「瑠希弥さんが家に来たのに、どうして俺を呼んでくれなかったんだ？」

エロ兄貴が後でブツブツ言ったが、

「まゆ子さんに言いつけるぞ」

と言い返すと、ギクッとして自分の部屋に逃げて行った。

本当に懲りない奴だ。我が兄貴ながら、どうかしていると思う。

いずれにしても、予定以上に宿題が捗（はかど）ったので、それだけは良しとしよう。

朝食を終えた私は、久しぶりのお通じがあったのも手伝ってって、何言わせるのよ！？

び、美少女はそんな事しないんだからね！　う、嘘じゃないわよ！

何となくウキウキ気分の私は、スキップしながら自分の部屋に戻った。

「え？」

その時、携帯が鳴り出した。誰だろう？　親友の近藤明菜は、確か彼氏の美輪幸治君と家族を交えて海水浴に行っているはず。

「お？」

開いてみると、柳原まりさんからだ。彼女（でいいのよね？）から電話なんて、どうしたのだろう？

「こんにちは、箕輪さん」

私が携帯に出ると、柳原さんが挨拶して来た。

「こ、こんにちは」

私的にはまだ「おはよう」なのだが、時計を見ると十時を過ぎているので、そうなのかも知れない。

「箕輪さん、酷いよ。瑠希弥さんと二人きりで宿題をしたんだって？」

柳原さんは言った。私は仰天した。どうしてそんな事を柳原さんが知ってるの？

「近藤さんから聞いたんだ。今度からはボクも誘ってよ」

柳原さんの声のトーンはかなり非難めいている。全く。明菜のお喋りめ。帰って来たら、お説教よ。

うーん。別に私は瑠希弥さんとはそういう関係ではないし、柳原さんと瑠希弥さんを争うつもりもないし。

「わかった。今度からは連絡するね。それより、瑠希弥さんに柳原さんの事、伝えようか？　そうすれば、二人きりで宿題できるよ」

私は気を遣ってそう言ってみた。すると柳原さんの気が乱れるのを感じた。

「そ、そこまでしてくれなくていいよ。二人きりだなんて、ボク、気絶しちゃう」

「ああ、そうなんだ……」

私は唖然としてしまった。そこまで瑠希弥さんの事が好きなんだ。すごいな。

「それより、この前の霊感課の件、どうなったか知ってる？」

柳原さんは、瑠希弥さんの話題を避けたいのか、急に話を変えて来た。

「それなら、全員合格だって。そのうち、県警から通知が行くはずだよ」

「え？　全員？」

柳原さんの声のテンション落ちた。どうしたんだ？

「じゃあ、江原耕司君も合格したの？」

「うん。江原ッチも合格したよ」

何だか、不穏な感じ。以前、柳原さんは私の彼氏の江原ッチと戦った事があるからなあ。

「そうか。わかった。ありがとう、箕輪さん」

柳原さんの声のトーンが明るくなった。訳がわからない。私はふと思いついた事があったので、

「ねえ、柳原さん」

「何、箕輪さん？」

「私達、名前で呼び合わない？　何だか、名字だと他人行儀な気がして」

私は思い切って切り出した。すると柳原さんは、

「うん、いいね。そうしよう。えっと、まどかさん」

「ありがとう、まりさん」

私達は更に近づけた気がした。決して、そっちの世界に私が近づいた訳ではないけど。

「やっぱり、まどかさんも素敵だな。また好きになりそうだよ」

柳原さんからの衝撃の言葉！　私は思わず携帯を耳から放してしまった。

「そ、そう。ありがとう、まりさん」

そして、お盆休み明けにプールに行く約束をした。

「できれば、瑠希弥さんも誘ってくれると嬉しいんだけど」

柳原さんはボソボソと告げた。私は苦笑いして、

「うん、いいよ。伝えとくね」

私は携帯を切り、大きく溜息を吐いてしまった。

プールへ行く日、どうなるんだろう？

先行き不安なまどかだった。

市営プールでどっきりなのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の美少女霊能者。

どうよ？　もう開き直ったわ。

この前、クラスメートの柳原まりさんと約束したので、私は連絡係となり、プール三昧をするため、まずは親友の近藤明菜に連絡した。

「もちろん、行くわよ」

明菜は速攻で承諾した。

「美輪君には明菜から連絡してくれるよね？」

私は手間を省こうと思って尋ねた。すると明菜は、

「どうして？」

と驚愕の質問返しをした。あんた、柳原さんがいれば、美輪君はいなくていいの？

恐るべし、柳原さん。

「女子会にしようよ。だから、後は瑠希弥さんと靖子ちゃんだけ誘えばいいよ」

「そうなんですか」

私は力なく「お題目」を唱えた。って事は、私の彼氏の江原耕司君も誘ってはいけないという事だ。

「そうすれば、靖子ちゃんに連絡するだけで瑠希弥さんにも伝わって、まどかは任務完了でしょ？」

何故か明菜は嬉しそうに言う。

「あれ、明菜って、瑠希弥さんの事、嫌いじゃなかったっけ？」

「ど、どうしてよ！？　そんな訳ないでしょ！」

明菜は非常に動揺していた。彼女は、柳原さんが尊敬している小松崎瑠希弥（まつざきるきや）さんを嫌っていたはずなのだが、何と変わり身の早い……。

え？　変わり身の早さでは、お前の方が上だろう、ですって？

ま、まあね。

「まどか、その事、柳原さんの前で言ったら、絶交だからね！」

「はいはい」

明菜は言い出したら聞かないので、従うしかないのだ。

そして翌日。

瑠希弥さんのお陰で、宿題をほとんど片づけた私は、意気揚々と家を出た。

ところで、意気揚々って何？

途中で明菜と落ち合い、江原ッチといつも合流に使っているコンビニに向かった。

「今日もあのビキニなの、明菜？」

こっそり尋ねる。すると明菜は顔を赤らめて、

「恥ずかしいから、やめた」

と俯いた。え？　なになに、この乙女な明菜は？　ちょっと怖いんだけど……。

「柳原さんを見ると、自分がどんなにさもしい人間なのか、よくわかるの」

「そうなんですか」

おお！　本日二度目のお題目だ。

で、さもしいって、何？

やがて、私達はコンビニに着き、先に来ていた瑠希弥さんと靖子ちゃんに合流した。

「今日は誘ってくれたありがとう、まどかさん」

瑠希弥さんは嬉しそうだ。しかし、プールに行くのに黒のスカートスーツはどうかと思う。

「瑠希弥さんが半袖Tシャツと短パン姿になると、お兄ちゃんがおかしくなっちゃうから」

靖子ちゃんが苦笑いして、教えてくれた。

「そうなんですか」

おおっと！　本日三度目。何かいい事ありそうな予感だ。

確かに、江原ッチや美輪君、そして力丸卓司君達を誘わなくて正解だったかもね。

「ごめん、遅くなってしまって」

そこに本日のメインゲストである柳原さんが登場した。

何故か、綾小路さやかと共に。

私と明菜は目が点になりそうだ。

「そこでバッタリ会ったんだ。いいでしょ、さやかさんも一緒で？」

柳原さんが爽やかな笑顔で言うと、
「もちろんよ、柳原さん！」
と明菜と靖子ちゃんが見事にハモッて同意した。
「まどか、酷いじゃない、私だけ誘わないなんて！」
さやかが小声で文句を言って来た。私は苦笑いするしかない。
「では、行きましょうか」
瑠希弥さんが言った。
「はい！」
柳原さんと愉快な仲間達は声を揃えて返事をした。
すごいな、あのシンクロぶりは……。
瑠希弥さんを先頭にしてゾロゾロと歩いている私達は、引率の先生の後ろを歩いている小学生みたいだ。
何だか、注目されているようで恥ずかしい。
私達は市営プールに着いた。

「呼んでいただいたお礼に、入場料は私が払いますね」

瑠希弥さんが言うと、

「そんな事はしないでください、瑠希弥さん。ここはボクが……」

柳原さんが鞄から財布を出す。男前な黒革の財布だ。おおっと、明菜達から歓声が上がる。

「いえ、私が出します」

明菜と靖子ちゃんまでそんな事を言い出した。

結局押し問答の末、瑠希弥さんが出してくれる事になった。

「ありがとうございます」

私達は瑠希弥さんにお礼を言った。瑠希弥さんは照れ臭そうに、

「そんな大した額ではないですから」

と言うと、スタスタと中に入って行ってしまう。何か可愛いな、瑠希弥さんて。

たまには男抜きの「女子会」もいいものだ。

あれ？　柳原さんは「女子」でいいのか？

更衣室でクラクラしてしまった私は、壁に掴まりながら、プールサイドに出た。

「大丈夫、まどかさん？」

瑠希弥さんが声をかけてくれた。

「はい、大丈夫です」

私は微笑んで瑠希弥さんを見る。そもそも、瑠希弥さんが原因なんだけどね。

とにかく、まさにこれこそ「ダイナマイトボディ」というプロポーションなのだ。

しかも、水着も豹柄で、余計に刺激的だ。

以前、山形で一緒にお風呂に入った時より、エロくなっているのではないだろうか？

周囲を歩いている男達が、全員瑠希弥さんに見入っていて、奥さんや彼女に小突かれている。

本当に、男って奴は……。

しかも、その後ろには「ボクっ娘（こ）オーラ」全開の柳原さんが、競泳用の水着みたいなのを着て歩いている。

明菜や靖子ちゃん、そしてあのさやかまでもがメロメロの顔で柳原さんに付き従っている。

何か、怖い。

「あ！」

私と瑠希弥さんはほぼ同時に反応した。

「まどかさん、一緒に行きましょう」

「はい！」

何故か周囲の男共が悶絶していたが、今はそんな事はどうでもいい。

私は瑠希弥さんと共に流れるプールの奥へと走った。

「待ちなさいよ、まどか！」

柳原さんにメロメロだったさやかも、さすがに気づいたのか、私を追いかけて来た。

認めたくないのだが、さやかは確かに私より胸が大きかった。

「認めなさいよ！」

さやかが怒る。私はそれを無視して、瑠希弥さんを追いかけた。

「やっぱり」

瑠希弥さんが呟く。そう、流れるプールの奥にいたのは、この前

さやかが追い払った浮遊霊だった。

「何でよ？　この前、私がやっつけたのに！」

さやかは悔しそうだ。すると瑠希弥さんが、

「霊全てを追い払ったり、攻撃したりするのでは、解決しない事もあります。見ていてね」

とさやかに優しく微笑み、浮遊霊に近づく。

霊がいる周辺は、他のお客達は逃げていて、まるでそこに何か仕切りがあるかのようにポッカリ空いている。

瑠希弥さんはゆっくりプールに入る。スケベな男が、それを舐めるような目で見ていたので、

（こいつ！）

と思った時、私より先にさやかが動いていた。

「インダラヤソワカ」

バシンと雷撃がそのスケベ男を攻撃した。

「ぐげげ！」

男は感電し、プールサイドに倒れた。

「いえい！」

私とさやかはハイタッチした。

「貴方はどうしてそこに留まろうとしているのですか？」

瑠希弥さんがまさしく菩薩様のような顔で尋ねる。

すると形を成していなかった霊が、若い男の姿になった。

『俺は痴漢にされて、会社も辞めさせられて、自殺したんだ。このプールが憎い』

その霊の言う通り、痴漢は間違いだったようだ。

金目当ての悪い女二人組みの仕業。そんな女がいるから、本当に痴漢被害にあった女性達まで疑われてしまうのだ。

許せないわ、同性として！

「わかりました。でも、そこに留まっても、何もいい事はないわ。早く、逝く所に行ってください」

瑠希弥さんの言葉に、男の霊は涙した。私もさやかも泣いてしまった。

「オンカカカビサンマエイソワカ」

瑠希弥さんが地蔵真言を唱える。私とさやかも唱えた。

やがて霊は地蔵菩薩の光に包まれ、天へと昇り始めた。

「貴女のような女性に生きている間に出会いたかった」

男の霊は泣きながらそう言った。

「ありがとうございます」

瑠希弥さんは笑顔満開で応じた。

そして何故か、誰からともなく沸き起こった拍手に瑠希弥さんはびっくりしていた。

たくさんの歓声を浴びながら、私達はその場を去った。

「今の、あそこにいた人達全員に見えていたんですか？」

私は瑠希弥さんに小声で尋ねた。

「はい。できるだけたくさんの人の優しさを借りて、あの霊を浄化しました。悪い霊ではないから、その方法が一番です」

「そうなんですか」

私とさやかのシンクロナイズド「お題目」だった。

今日は貴重な体験をしたまどか&さやかだった。

G県警刑事部霊感課が遠征なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者だ。ちなみに誰もが認める美少女でもある。

はいはい。気がすんだ？

さて。いつの間にか、夏休みも残り僅かになり、宿題を早めに仕上げた私は、惰眠を貪っていた。

去年と大違いなのは、私のお師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざき るきや）さんのお陰だ。

もう、瑠希弥さんには足を向けて寝られない。

ところで、惰眠て何？

「まどか、仕事だ」

またしても性懲りもなく、エロ兄貴が私の部屋にノックもせずに入って来た。

「もう、いい加減にしてよね、お兄ちゃん！　私が着替え中だったらどうするのよ！」

私は布団の中から怒鳴った。

「お前がまだ起きてもいないのはわかっていたから、そんな心配をする必要がない」

兄貴はまるで名探偵気取りで言い、フッと笑った。バカなのだろうか？

あまりに暑い日が続き、脳が溶けたのかも知れない。

「とにかく急いで朝食をすませろ。霊感課に緊急出動が発令された」

兄貴はそう言うと、部屋を出て行った。

「え？」

霊感課。私がボランティアで所属しているG県警の組織だ。

緊急出動って、どういう事よ？

取り敢えず、瑠希弥さんには迷惑をかけられないので、急いで着替えをすませ、顔を洗い、キッチンに行った。

「さあさあ、サッサと食べちゃってね」

お母さんがすっかり食事の用意をすませていた。

「え？」

私のお茶碗の脇にはお通じの薬があった。

「何、これ？」

お母さんに尋ねる。するとお母さんは私を見て、

「あんた、もう三日もお通じないでしょ？　相当溜まってるわよ。今日全部出しちゃいなさい」

ととんでもない事を言う。

「な、何言ってるのよ、お母さんは！　私みたいな美少女は、そんな事しないの！」

私は顔を真っ赤にして反論した。

「嘘おっしゃい。この前だって、『あー、出た出た、三日分』って鼻歌交じりに言ってたじゃないの」

「やめてー、私のイメージがあ！」

お母さんの口を誰か塞いで！　もう涙が出て来た。

そんなやり取りをしたのに、結局食後にしっかり薬を飲んだのは、彼氏の江原ッチには絶対内緒だ。

その後すっきりしたのは、もっと内緒。ばらしたら、死をもって償ってもらう。

もう、すっかり私ってば、便秘キャラじゃないのよ！

きっと作者の陰謀ね。許せないわ。

「まどか、でかいの出たか？」

兄貴の車に乗り込むと、そんな事を言われたので、

「まゆ子さんにあの事言いつけるぞ！」

と適当に脅かしてあげたら、

「わ、悪かったよ」

素直に謝罪されたのにはびっくりした。

G県警前でまゆ子さんを乗せ、江原ッチの邸の前で瑠希弥さんを乗せ、車はG県の山岳部へと向かう。

赤白山ではない。もっと北で西の方だ。

ほら、一時期、ダム工事で有名になった辺りよ。え？　もう忘れられてるの？

まあ、いいわ。

今回私達が向かっているのは、G県北部を流れるA妻川の河川敷。

急な大雨で河川が増水し、川の中洲に取り残された人達が、濁流に呑み込まれて行方不明なのだ。

公には言えないが、行方不明者は恐らくもう絶望的。

だから、一刻も早くご遺体を発見し、ご遺族にお引き合わせしたいのだそうだ。

何だか、すごく気が重い。

「瑠希弥さんやまどかは、ご遺族とは顔を合わせないように取り計らうから、あまり気にしなくていい。とにかく、ご遺体を探して欲しい」

兄貴は運転席で言った。

何だか違和感があるのは、いつもは助手席にいる兄貴が運転しているからだ。

そして、もう一つの違和感は、助手席にはまゆ子さんではなく、瑠希弥さんが乗っている事。

「箕輪慶一郎さん、後でゆっくりお話しましょう」

まゆ子さんは運転席の後ろから冷たい声で言った。

「ひいい！」

兄貴は仰天し、危うく信号無視をしそうになった。

やがて、私達の車は、現場の河川敷に到着した。

すでに私と瑠希弥さんは、亡くなった方の霊を見つけ、その近くに車を停めてもらった。

「貴方のご遺体を探しに来ました。教えてください」

瑠希弥さんが話しかけたのは、家族でキャンプに来て、奥さんと子供達を助けて、自分は濁流に呑み込まれてしまった男性だ。

公式には、まだ行方不明の扱いだ。ああ、辛いなあ、この仕事。

「こっちです。私の遺体は、川の底に引っかかっています。しかもその上に上流から流れて来た土砂が堆積してしまい、掘らないと見つけられないでしょう」

瑠希弥さんは、男性の霊から聴いた事を兄貴とまゆ子さんに伝える。

私は、河川敷の向こうにいる女の子の霊に気づき、近づいた。

そして、驚いてしまった。

その子は、同じ町内の子だ。

確か、楢久保さん。彼女は私より六つ年下なので、小学校でも会っていないが、何度か町内会の行事で顔を合わせている。名前は確か、鞠佳(まりか)ちゃんだ。

何て事だ……。まだ八歳だよ……。涙が出て来てしまった。

「あ、まどかお姉ちゃん！」

自分が死んでしまった事もわかっていないのだろう。鞠佳ちゃんは嬉しそうに手を振りながら、川の上を浮遊して私に近づいて来た。

「まどかお姉ちゃんも、ここに遊びに来てたの？」

屈託のない笑顔で尋ねられ、私は返事ができない。

「まどかさん、私が代わるね」

瑠希弥さんが察してくれて、代わりに鞠佳ちゃんと話してくれた。

どうやら、鞠佳ちゃんが最初にいたところに遺体があるようだ。

私は涙を拭いながら、兄貴に事情を説明した。

「そうか」

兄貴も悲しそうだ。鞠佳ちゃんは町内でも人気者で、皆に可愛がられていたから。

やがて、鑑識課の大型車が到着し、課員の皆さんがご遺体を探し始めた。

行方不明だったのは、さっきの男性と鞠佳ちゃんだけだったので、瑠希弥さんと私の仕事は終わった。

「悪かったな、まどか」

私の落ち込みようを見て、兄貴が声をかけてくれた。
「大丈夫だよ、お兄ちゃん」
まゆ子さんも涙ぐみながら、私を抱きしめてくれた。
私は瑠希弥さんと共に車に戻った。
するとそこへ、猛烈な勢いで走って来た乗用車が停まり、女の人が髪を振り乱して降りて来た。
それは鞠佳ちゃんのお母さんだった。
「あ！」
兄貴がお母さんに気づき、顔色を変えた。お母さんは私を見つけて、同じように顔色を変えた。
「まどかちゃん！　貴女がいるって事は、貴女がいるって事は……！」
お母さんが私に向かって鬼のような形相で走って来る。
私には、お母さんの嘆きがよくわかった。
私に霊感があるのは、近所では有名だ。
鞠佳ちゃんのお母さんも知っている。

それに私が警察の捜査に協力しているのも知られている。

お母さんは私の姿を見て、自分の娘がすでに亡くなっているのを悟ってしまったのだ。

本当は私達が帰ってから、ご家族が来るはずだったのだが、お母さんが早めに来てしまって、思わぬタイミングで顔を合わせてしまったようだ。

「お母さん、落ち着いて！」

鞠佳ちゃんのお母さんを止めてくれたのは、鑑識課最古参の宮川さんだった。

宮川さんは切々とお母さんを諭し、河川敷を誘導して行く。

お母さんは何度も泣き崩れそうになりながら、鞠佳ちゃんの遺体がある方へと歩いて行った。

「さあ、まどかさん」

瑠希弥さんに促され、私は重い足取りで車へと歩き出した。

今日はいろいろと辛い思いをしたまどかだった。

夏休みの最終日に思い出作りなのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。ついでに言ってしまうと、お通じが三日ないの。

って、こらーー！！

美少女関係をいじるのはいいけど、そこはやめてよ！

私は、「花も恥じらう乙女」なんだからね！

え？　言う事がいちいち古くさい？　余計なお世話よ！　フンだ！

先日、G県北西部のA妻川の河川敷で、私はとても悲しい思いをした。

同じ町内に住んでいた女の子が水死したのを霊視で見つけたのだ。

あのエロ兄貴が優しくしてくれるほど、その日の私は酷く落ち込んだ。

「悪かったな、まどか。しばらく捜査には参加しなくていいよ」

兄貴のその心遣いに私はキュンとしてしまった。

「ありがとう、お兄ちゃん」

心の底からそう言ったのに、
「今度からは瑠希弥さんと二人で行くから」
というオチを用意していたので、
「あの時の事、まゆ子さんに言いつける」
とまた適当に脅かしてあげた。
「ば、バカヤロウ、洒落にならないから、やめろ」
真剣な顔で言う兄貴を見て、真相が知りたくなった。

そして、とうとう夏休み最後の日。
私は彼氏の江原耕司君と二人きりで、デートに出かけた。
江原ッチとは、霊感課や女子会の件でしばらくデートしていなかったから、ウキウキしてしまう。
「まどかりん、どこに行こうか？」
江原ッチもこころなしか、嬉しそうだ。
そりゃそうよね。私ほどの美少女とデートできるんだもん。
な、何よ！　いいじゃない、それくらい思ったって！　誰にも迷

惑かけないでしょ！

え？　また2ちゃんねるで「香ばしい」って書かれるって？

いいじゃん、書かれても。書かれてナンボなのよ、この業界は。

そんな訳で、私と江原ッチはしばらく行っていなかった映画館に行ってみた。

しかも、ラブストーリー映画だ。

今まで一度も一緒に観た事がない。

私は苦手だったし、江原ッチは恥ずかしがっていたから。

でも、付き合い始めて一年以上経ったのだから、一歩前進したかったのだ。

別に、変な事をしたい訳じゃないわよ。私はまだ十五歳未満なんだからね。

ところが、私達が入った上映室は、やばいところだった。

「まどかりん、いるよ、ここ」

中に入るなり、江原ッチが言う。勿論私も感じていた。

え？　そういう意味じゃないわよ、オジさん！　もう、何考えて

るのよ。

恋愛映画を彼氏と観に来るのが夢だった女性が、闘病生活に疲れて自ら命を絶った。

そのどうしても観たかった映画を上映したのが、ここだったみたいなのだ。

スクリーンの左の端にその女性の霊は佇(たたず)んでいる。暗い表情だ。

でも、観客の皆さんがすでにたくさん入って来ているので、今は何もできない。

仕方がないので、映画が終わるのを待つ事にした。

場内が暗くなり、映画が始まる。

最初はラブコメ調のストーリーだったのに、最後の方では女性達は全員すすり泣きするような展開。

私も泣いてしまい、江原ッチに手を握ってもらった。

エンドロールの頃には、もう涙で字が霞むほどの号泣。

映画でこんなに泣いたのって、ＥＴ以来よ。

え？　バカな事言わないでよ、映画館で観る訳ないでしょ！

私は平成生まれなのよ！　テレビで観たのに決まってるでしょ！

そして上映時間が終了し、明かりが点いた。

ふとスクリーンの端を観ると、女性の霊がいない。

「あれ、どこ？」

私がキョロキョロしていると、江原ッチが、

「あそこだよ、まどかりん」

と指差して教えてくれた。私達の一つ後ろの列だ。

そこの座席には、男の人が一人で座っていた。隣の席には写真立てがある。

その写真立ての写真の女性こそ、さっきの女性の霊だったのだ。

「彼氏なの？」

私は涙を拭いながら、江原ッチを見た。

「うん。彼女と一緒に映画を観る約束を今日果たしに来たんだよ、あの人は」

男の人には霊感はないようだ。

女性の霊が隣の席に座っているのに全く気づいていない。

「ありがとう」

女性の霊は、最初に見かけた時と大違いの顔をしていた。

幸せそうだ。本当に嬉しそうにしている。

「貴方を好きになって、本当に良かった」

彼女の業は解けたようだ。光に包まれ始めた。

「さようなら。私の分まで生きてね」

女性の霊はそのまま光と共に天へと昇って行った。

「さあ、行こうか、まどかりん」

江原ッチも涙ぐんでいたようだったが、私に知られるのが恥ずかしいのか、眠いフリをして伸びをしてみせる。

「うん」

優しい私は、当然の事ながら、気づかないフリをした。

そして、その帰り道、公園の木陰でちょっぴり大人のキスをしたまどかだった。ムフ。

ボクッ娘の魅力爆発なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者。これは他言無用だが、実は美少女である。

あのね。他言無用の使い方がおかしくない？

夏休み気分も抜けようとしている九月。

またしばらく下校デートしかできないと思うと、絶対彼氏の江原耕司君がとても恋しくなる。

「ふーん、そうなんだ」

登校途中、私のその愚痴に対して親友の近藤明菜が言った。

「何よ、そのリアクションは？　明菜だって、最近は美輪君と下校デートしかしてないでしょ？」

私はこれぞツンデレの神と呼ぶべき明菜に向かってそう言った。

「美輪君とは一緒に帰ってもいないわ」

明菜はまるでゴミ当番は誰だという問いかけに答えるように気のない返事をした。

「え？」

私は仰天した。周囲が引くほどの熱々ぶりを披露していた明菜と美輪君だったのに、何よ、その答えは？

「明菜、どうしたのよ？　美輪君と喧嘩でもしたの？」

私は心配になって尋ねた。すると明菜は肩を竦めて、

「喧嘩？　する訳ないじゃない。最近、口も利いていないんだから」

と言うと、

「柳原さん！」

明菜は前を歩いている柳原まりさんに手を振りながら駆けて行ってしまった。

まさか……。ボクッ娘の魔力？

美輪君の男気が柳原さんの「ボク気」に負けたという事なの？

「まどかちゃん」

まるで蚊の鳴くような声が後ろでした。振り返ると、そこに暗い表情の美輪君がいた。

「美輪君！　一体どうしちゃったの、明菜は？」

私は思わず訊いてしまった。すると美輪君は力なく微笑み、

「俺みたいな喧嘩バカより、柳原さんみたいな才色兼備の方がいいんだってさ」

と答えた。見るも無残なほど、美輪君は衰えている。

「靖子ちゃんもだよ。俺みたいな只の大飯食らいより、カロリー計算をして三食を摂っている柳原さんの方がいいんだってさ」

そこへ、この世の地獄でも見たのかという表情の力丸卓司君が現れた。

「え？」

ハッとして柳原さんを見ると、いつの間にか江原ッチの妹さんの靖子ちゃんがしっかり付き従っていた。

何て事だ！　柳原マジックだ。

「まどかちゃん、何とかしてくれないかな。もう、まどかちゃんしか頼れる人がいないんだよ」

美輪君は情けなくなるような声で懇願して来た。

「俺からも頼むよ、箕輪。靖子ちゃんの目を覚まさせてくれよお」

リッキーは悲しそうにコロッケを食べている。この期に及んでも、まだそれか、お前は！

「仕方ないわね」

私はチワワのような目で私を見つめる二人の男子のために力を貸す事にした。

でも、どうすればいいのかな？

結局、下校時まで名案は浮かばなかった。

私は校庭から出ると、江原ッチに応援要請をした。

「わかった。美輪の一大事だから、力を貸すよ」

江原ッチはすぐに来てくれるようだ。

「まどかちゃん、まだ？」

幽霊のような存在になってしまった美輪君とリッキーが現れて、恨めしそうな顔で私を見る。

「今、江原ッチを呼んだから。二人で考えるわ」

私は苦笑いしてそう言った。すると完全に拗ねたリッキーが、

「何だよ、箕輪だけイチャイチャするのかよ」

「そうじゃないよ、リッキー！　落ち着いて」

リッキーはストレスが溜まり過ぎたのか、コロッケをスナック菓子のように食べ始めた。

「やあ、まどかさん。こんなところで何してるの？」

そこへ何も知らない柳原さんが、明菜と靖子ちゃんとその他大勢の女子達を引き連れて現れた。

美輪君とリッキーはますます暗くなり、存在感が薄れて行く。

何だろう？　柳原さんから、今までと違った気を感じるのだけど？

おかしい。柳原さんのこのモテ方、変だわ。

美輪君とリッキーの落ち込み方もおかしい。

私は柳原さんの気の流れを霊視した。

まず、明菜達から膨大な好意の気が柳原さんに流れているのが見える。

その気を柳原さんが受けて、自分の気と合わせて、相手に返している。

ここまでは問題ない。

ところが、その返している気が、何かの影響で何倍にも膨れ上がっているのだ。

そして、その膨れ上がった気が、負の気を発している美輪君とリッキーを圧迫し、余計落ち込ませている。

何なの、これ？

「まどかりーん」

そこに江原ッチが来てくれた。

「江原ッチ……」

笑顔全開で手を振ろうとした私は、江原ッチの隣にいる小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんに気づいた。

「ああ、誤解しないでよお、まどかりん。瑠希弥さんとは、そこで会ったんだよお」

江原耕司君が慌てて言い訳しております。と口調と文体まで変わりかけたが、

「まどかさん、柳原さんが危ないです。助けないと」

瑠希弥さんが真顔で言ったので、私はハッとして柳原さんをもう一度見た。

柳原さんの周囲に渦巻いている怨嗟（えんさ）の気。これって一体……。

「初めは、些細（ささい）な嫉妬心でした。でも、それが幾百、幾千にもなると、凶器にもなるのです」

瑠希弥さんはそう言いながら柳原さんに近づきます。

「瑠希弥さん！」

柳原さんが瑠希弥さんに気づき、その好意の気を向ける。
その途端、美輪君とリッキーを圧迫していた気が敵意となり、瑠希弥さんに向かい始めた。
「え？」
その妙な気の流れに柳原さんも気づいたようだ。
「アッキーナ、靖子、こっちだ！」
江原ッチが二人の手を引き、柳原さんから遠ざけた。
「きゃあ！」
他の女子達は、バチバチバチッという音に驚き、柳原さんから離れた。
「人の嫉(ねた)み、嫉(そね)み、羨望(せんぼう)、敵意、憎しみ。一つ一つは小さくても、それが集合体となると、命を奪う事すらあります」
まるで竜巻のような凄まじさで渦を巻いている気が、瑠希弥さんを取り巻いて行く。
「瑠希弥さん！」
私は瑠希弥さんを助けようと思って近づこうとしたが、
「ダメだ、まどかりん。瑠希弥さんに任せて」

江原ッチが引き止めた。

「何でよ、江原ッチ！？」

私は江原ッチを睨みつけた。

「瑠希弥さん！」

柳原さんには気の渦は見えていないのだろうが、その流れを感じる事はできるのだろう。

怯えた目で宙を見つめている。

「オンアロリキヤソワカ」

瑠希弥さんは観音菩薩の真言を唱える。しかも、感応力を全開にして。

瑠希弥さんから溢れ出すエロ、あいや、超強力なフェロモンのような気。

そのため、江原ッチも美輪君もリッキーも、鼻血を噴き出した。

周囲を歩いていた無関係のおじ様やおじい様、果ては幼稚園の男子達までもが、瑠希弥さんの感応力で恍惚としてしまう。

あれほど敵意に満ちていた渦が潮が引けるように消えて行く。

そして、その代わりに瑠希弥さんを中心にして、慈愛の波動が満

ちて行く。

こうして、ボクッ娘マジック事件は終わり、最後は全部瑠希弥さんの魅力に取り憑かれるというオチになった。

それにしても、瑠希弥さん、すごい。

私もその力が欲しい。

え？　お前は悪用しそうだから持ってはいけないですって！？

そ、そんな事する訳ないじゃないのよ！　私をどういう目で見てるのよ！？

それでも動揺が隠し切れないまどかだった。

瑠希弥さんに手解きを受けるのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者だ。

先日、同級生の柳原まりさん（ボクッ娘）が、あまりの人気ぶりに嫉妬の渦に潰されそうになったのを私のお師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんに救われた。

その時の瑠希弥さんはエロ、あいや、感応力全開で周囲を慈愛の波動で埋め尽くした。

そのせいで、私の彼氏の江原耕司君、私の親友の近藤明菜の彼氏で江原ッチの親友でもある美輪幸治君、そして、同級生で肉屋の御曹司の力丸卓司君までを巻き込んで、小松崎瑠希弥教ができるのではないかというくらいの魅力爆発だった。

「お姉ちゃん、抱っこしてえ」

幼稚園児まで魅了してしまい、これは新たな「生物兵器」になるのではないかと危惧したまどかである。

ところで、生物兵器って何？

そんなある日の下校時。

今日は江原ッチと下校デートなので、いつものコンビニに向かう。

改めて指摘しておくが、そこにはアイスを買い占めるお姉さんは現れない。

「え？」

私はコンビニに入り、意外な人物を見つけた。

このちょっと憎らしい雰囲気の女、誰だっけ？

「あんたわかっててやってるでしょ！」

その女は私を睨みつけて言う。ああ、私の心を読めるのはあいつだけ。

「何だ、誰かと思えば、さやかじゃない。どうしたの、こんなところで？」

そう、そこにいたのは、あの悪役商会の綾小路さやかだった。

「私はいつまでそのキャラなのよ！　もう親友でしょ！」

さやかは顔を赤らめながらそんな事を言った。

「悪い悪い。あんたのイメージ、固定されちゃってさ」

「何よ、便秘女」

さやかのその一言は、私のガラスのハートを見事に射貫いた。

「あれ、当たってたの？」

さやかは意外そうな顔で私を見る。もしかして、カマをかけられたの、私？

「三日くらいで心配しなくて大丈夫よ。私は最大一週間て記録あるから」

さやかはこっそり教えてくれた。何だか、ようやくこいつと友達になれそうな気がした。

「親友じゃなかったの……」

項垂れるさやか。私は慌てて、

「いやいや、親友だよ。あんたは数少ない私の本当の理解者だよ」

とフォローした。決してツイッターではない。

「ありがとう、まどか」

さやかは涙ぐんだ顔で私を見た。何だかこいつ、雰囲気変わったな。

「ところで、今日はどうしてここにいるの？」

私は最初に思った疑問をぶつけた。さやかはニコッとして、

「ここにいれば、あんたが来ると思ったからよ」

「私を待ってたの？　どうして？」

それも意外で不思議だった。するとさやかは、
「この前、瑠希弥さんが柳原さんを助けた時の事を聞いて、もう一度瑠希弥さんに手解きを受けようと思ったのよ」
「そうなんですか」
私はここぞとばかりにお題目を唱えた。
「あれ、その言葉、あんたのＮＧワードじゃなかったっけ？」
さやかは目を見開いて尋ねて来た。私は笑顔全開で、
「そんな事ないわよ。私の人生の指針よ」
「はあ？」
さやかは意味不明みたいだ。まあ、いい。
そんな訳のわからない会話をしているうちに江原ッチが来た。
「まどかりん……」
何かを話そうとした江原ッチだが、さやかに気づいて言葉を失った。
「こんにちは、江原君」
さやかはごく普通に挨拶した。

「あのね、江原ッチ」

私は江原ッチに事の経緯を話した。

「なるほどね」

私も瑠希弥さんにもう一度教わりたい事があるから、今日のデートを延期してくれるように江原ッチに頼んだ。

「いいよ。今日は僕も参加させてもらうから」

江原ッチの顔がエロ全開だ。

「断わる」

私とさやかは全力で言った。江原ッチは泣きそうだ。

「私だって、マッキーがついて来たいって言うのを振り切って来たのよ。瑠希弥さんの講義は、男子禁制なの！」

さやかは非情にもそう言った。それには私も同意する。

瑠希弥さんの魅力はもはや最終兵器にも等しいのだ。

江原ッチはもちろんの事、さやかの彼氏の牧野徹君でも同席はだめよ。

「うううう……」

私とのデートを延期された上、瑠希弥さんの講義も出入り禁止にされた江原ッチは、肩を落としている。

「江原ッチ、後でお詫びするから。ね？」

私は小声で江原ッチに言い、ウィンクした。

「う、うん！」

急に元気になった江原ッチ。唇にリップクリームを塗り始めたぞ。何を期待しているのだろうか？

こうして、私とさやかは江原邸に瑠希弥さんを訪ね、講義をお願いした。

「わかりました。先生の道場をお借りして、講義をしますね」

瑠希弥さんは笑顔全開で言った。何故かさやかはポオッとしている。

「どうしたの、さやか？」

私が尋ねると、

「柳原さんが落とされる訳よね。瑠希弥さんて、男も女も関係なく魅力的よ」

さやかは目がハートマークになっていた。

こいつ、マッキーから柳原さん、そして更に瑠希弥さんに乗り換えるつもりか？

節操がないな。

そして、道場。

以前と同様、私達はTシャツと短パンで瑠希弥さんと向き合っている。

ふと見ると、さやかの奴、胸が大きくなったような……。

「気づいた？　牛乳に相談したらこうなったのよ（個人的な意見です）。毎日一リットル飲んだら、こんな感じ？」

さやかは勝ち誇ったように言う。羨ましい。

「ホントに！？」

私は今日から牛乳を毎日二リットル飲む事にした。え？　便秘を治すのか、ですって？

う、うるさいわね！　そこから離れなさいよ！

「でも……」

さやかは瑠希弥さんの胸を見て溜息を吐く。

「あそこまで行くには、一体何リットル飲めばいいのか……」

「そうね……」

お腹をこわしそうなほど遠い道のりな気がする。

「どうかしましたか？」

瑠希弥さんはキョトンとした顔で言った。

「何でもありません！　よろしくお願いします！」

私達は雑念を振り払って、瑠希弥さんの講義を受けた。

相変わらず、気の巡らせ方は疲れる。

自然に気を巡らせる事ができる瑠希弥さんは本当に凄い。

「私なんかまだまだです。菜摘先生の足下にも及びません」

瑠希弥さんは苦笑いして言う。

菜摘先生というのは、江原ッチのお母さん。

そうか、菜摘先生って、そんなに凄い人なのか。

「気の巡らせ方をマスターすれば、どんな霊にも対処できます。ですから、必ず会得してください」

「はい」

私とさやかは声を揃えて返事をした。

瑠希弥さんが頂上かと思ったけど、まだその上には菜摘さんがいる。

そして、江原ッチのお父さんの雅功(まさとし)さんは更にその上なのだと言う。

で、雅功さんのお師匠様はまたその上で……。

気が遠くなりそうなまどかだった。

ひき逃げ事件を解決するのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者だ。

先日、お師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんに気の動かし方の手解きを一応親友の綾小路さやかと受けた。

相変わらず疲れる技だ。それを難なくできるようになれば、一人前だという。

「何よ、私は一応親友なの？」

あれ？　空耳が聞こえる。

「あんたね！　いい加減にしなさいよ！」

ふと横を見ると、今にも掴みかかりそうな顔で、さやかが私を見ていた。

あれ？　ここは一体？

「ふざけているのなら、降りてもらうぞ、かまど」

エロ兄貴の声がした。

そうか。思い出した。

今日は、G県警霊感課の仕事で、自動車事故の現場に向かっているのだ。

私とさやかは後部座席、エロ兄貴は助手席、で、兄貴の恋人の里見まゆ子さんは運転。

霊感課の専用パトカーで移動中だった。

「ごめん、お兄ちゃん」

向かっているのは、G県でも長野県寄り。

こんなところで降ろされたら、帰れないので、素直に謝る。

実は、瑠希弥さんが蘭子お姉さんのところに行ってしまったので、さやかと二人で現場に向かう事になったのだ。

何だか心細い。

「何よ！　言っとくけどね、私の方があんたより霊感強いんだからね」

さやかは相変わらず人の心の声を盗み聞きする。

性格が悪いのは治っていないようだ。

「あんたの心の声は、嫌でも聞こえて来るくらい大きいのよ」

さやかはムッとして言った。

「そうなんですか」

ここぞとばかりに、幸せになれるお題目を唱えた。

さやかの目が冷たい。でも、私は負けない。

そんなバカ話をしているうちに、パトカーは現場に到着した。

国道が長野まで延びるU峠だ。Gかるたにも登場する有名な峠である。

その峠の急カーブで、死亡事故が発生した。

長野県側から制限速度を遥かにオーバーした車が走って来て、坂の途中で立ち往生していたG県側から走って来ていた車のドライバーを跳ね飛ばしたのだ。

そのドライバーは、後続車に事故を知らせるために三角灯を立てて、車に戻る途中だった。

その衝撃は凄まじかった。

跳ねられたドライバーは道路から飛ばされ、崖下に転落したのだ。

時刻は午前十一時。霧も出ておらず、視界は良好だったので、彼を対向車が気づかなかったとは考えにくい。

しかも、辺りには血痕と車のライトやウインカーの破片が飛び散っていた。

人を撥ねた事を知りながら、走り去った可能性が高い。

悪質なひき逃げだと思われた。

幸いな事に目撃者がいて、被害者の遺体はすでに発見され、収容されている。

問題は逃げたひき逃げ犯の方だ。

「目撃者は被害者の救出を優先したので、加害者の車のナンバーを見ていない。しかも、この先にあるNシステム（自動車ナンバー自動読取装置）を避けるように脇道に逃げてしまったらしいんだ」

兄貴が悔しそうに話す。

「その後、どこのNシステムにもそれらしい車は映っていないの。加害者は車を乗り捨て、移動していると思われるわ」

まゆ子さんが言い添えた。

「それは違いますね」

さやかが誇らしそうに口を挟んだ。

「どういう事だ？」

兄貴は興味深そうにさやかを見たが、まゆ子さんは一瞬ムッとした顔になった。

怖い、まゆ子さん。でも、さやかが言った事は真実よ。

「加害者も怪我をしています。被害者を轢(ひ)いた時の衝撃で、彼は顔面をハンドルで強く打ってしまい、その先のちょうどガードレールが途切れているところから、車ごと転落しているわ」

さやかは現場から百メートルほど下ったところにあるガードレールの隙間を指差した。

「何だって！？」

兄貴とまゆ子さんは仰天して顔を見合わせ、走り出す。

「さすが、さやかね」

私は感心して言った。するとさやかは、

「あんただってわかってたんでしょ？」

と不機嫌そうに言う。

「いやいや、私がわかったのは、加害者がそれほど遠くに行っていないという事までよ。あんたほど細かくはわからなかったわ」

私は本当の事を言った。さやかはやっぱり私より霊感が鋭いのだ。

それは認めるしかない。

「あら、そうなの？」

さやかは逆に意外そうに私を見た。

兄貴とまゆ子さんは、ガードレールの隙間の向こうの崖下に、車らしきものが転落しているのを発見し、すぐにレスキュー隊と救急隊に連絡をとった。

加害者は命に別状はなかったが、意識が朦朧としていた。

さやかは搬送される加害者の手にちょっとだけ触れ、事件の真相を突き止めた。

加害者は急な眩暈を起こし、アクセルを強く踏み込んでしまった。

そして、被害者を跳ね飛ばした時には、ほとんど意識がなかったのだ。

「何て事だ。悪質なひき逃げじゃなかったのか」

兄貴はさやかの話を聞き、驚愕していた。そして私を見てニヤリとし、

「どうする、まどか？　このままだとお前、お払い箱だぞ？」

「ええ！？」

私はドキッとしてしまった。霊感課の仕事はそれほど乗り気な仕事じゃないし、メリットもないけど、お払い箱は寂しい。

「ダメですよ、お兄さん、嘘を吐いては」

さやかが兄貴の顔を覗き込んで言った。兄貴は何故かピクンとした。

「な、何の事かな、綾小路さん？」

妙に狼狽えた様子の兄貴。どうしたのだろう？

「可愛い妹が心配なので、この仕事を辞めさせたいんでしょ？　でも、そんな意地悪を言ってはダメですよ」

さやかはニヤリとした。私はその言葉に驚いて兄貴を見た。

兄貴は私の視線を避けるように顔を背けた。

「まあ、そうなの、慶一郎さん？」

まゆ子さんも意外そうに兄貴を見た。兄貴は頭を掻きながら、

「人選ミスったな。綾小路さんとまどかは組ませちゃダメだ」

と言いながら、パトカーへと歩き出す。

「お兄ちゃん……」

私は感動していた。兄貴にも、そして、さやかにも。

「お兄ちゃん、私、続けたいよ、この仕事。だから、お払い箱にしないで」

私は大声で言った。兄貴は背を向けたままで右手を挙げ、応じた。

まゆ子さんは私に微笑み、兄貴を追いかけた。

「さやか、ありがとう。お兄ちゃんの気持ちを教えてくれて」

さやかにお礼を言うと、さやかは照れ臭そうに、

「だって、私達、親友でしょ？」

「そうだね」

私とさやかは微笑み合って手を繋ぎ、パトカーへと歩き出した。

今日はさやかが大活躍で、影の薄いまどかだった。

新しい先生がやって来たのよ！

私は箕輪まどか。

先日、ひき逃げ事件を綾小路さやかと霊視に行って、さやかの能力の高さに驚かされた。

そして同時に、あのエロ兄貴がそれなりに私を気遣っている事もわかり、さやかに感謝した。

「私ね、本当にあんたと親友になりたいんだよ、まどか」

真剣な顔でさやかにそう言われると、何だか照れ臭い。

さやかは、数少ない本当の意味で私を理解してくれる存在だ。

「あんたが意地悪しなければ、ね」

照れ隠しでそんな返事をしてしまうが、私の心を覗けるさやかには通じない。

「この、超ツンデレめ」

さやかはニヤッとして返して来た。私は苦笑いした。

そして。

「新しい先生って、何？」

私はクラスの副担任で、産休を取った光浦先生の代わりに来る先生の事を全く知らなかったので、親友の近藤明菜に軽蔑の眼差しで見られた。

「あんた、本当にミスうわの空よね」

明菜が言った。誉められているような錯覚に陥る言葉だ。

「いやあ、それほどでも」

往年のボケをかましてみたが、更に軽蔑の眼差しが強まる。

「ほら、席に着け。もうホームルーム始まってる時間だぞ」

クラス担任の藤本先生が入って来た。顔が近いような気がするのは、遠近法を無視したような大きな顔のせいだ。

私は、一体いつから藤本先生がクラス担任になったのだろうと思った。

作者のいい加減さは尋常ではないのだ。

ところで、尋常って何？

「あれ？」

藤本先生の後から、若いイケメンが入って来た。

誰？　転校生にしては老けてるけど？　制服着てないし。

などというボケはいらないだろう。

多分、さっき明菜が言っていた新しい先生だ。

見境のない女子達は、小声できゃあきゃあ囁き合っている。

確かにイケメンかも知れないけど、私の彼の江原耕司君に比べれば、月と太陽よ。

あれ？　月とうなぎだっけ？　うむむ……。

「今日から、クラスの副担任になった新しい先生を紹介する。大沢先生、どうぞ」

藤本先生は、女子達の熱い視線にムッとしたような顔をし、そのイケメン先生を見た。

「今日から、皆さんのクラスの副担任を勤めさせていただきます、大沢一人（おおさわかずひと）です」

大沢先生は黒板に自分の名前を書いた。

「おおさわひとり？」

私は思わずそう読んでしまった。クラスが爆笑した。

「あはは、そうも読めるね、箕輪さん。でも、かずひとだよ」

大沢先生は白い歯を見せて言った。またきゃあきゃあ騒ぐミーハーな女子達。

藤本先生はますます不機嫌そうな顔になった。

「先生が担任がいいなあ」

酷い事を言う奴がいると思ったら、明菜だった。

目が恋する乙女だ。こいつ、こんなに浮気性だったっけ？

そうねそうねとあちこちから無情な声が上がる。

「うううう……」

ふと藤本先生を見ると、項垂れていた。ショックなのだろう。

「まだ僕では正担任は務まらないよ。でも、ありがとう、近藤さん」

大沢先生は、事前に私達の名前を覚えてきたのだろうか？

やがて、ホームルームは、藤本先生が打ちのめされたままで終了した。

「箕輪さん」

次の授業の準備をしていると、ボクっ娘の柳原まりさんが話しかけて来た。

「どうしたの、柳原さん？」

私は深刻そうな顔をした柳原さんを不思議に感じながら尋ねた。

すると柳原さんは声を落として、

「あの先生、何だか妙な気を放っていたんだ。箕輪さんは感じなかった？」

「え？」

その言葉にギクッとした。私は、項垂れている藤本先生が気になってしまい、大沢先生に意識が向いていなかったのだ。

そう言われると、明菜が恋する乙女の目になっていたのも妙だった。

「クラスの女子達が、みんなあの先生の虜（とりこ）になっているみたいなんだ」

柳原さんは、自分が虜にしていた女子達が大沢先生に虜にされたので、嫉妬しているのだろうか？

「はい、席に着いてね」

次の授業の先生が入って来たので、私達の話は中断した。

「また後でね」

柳原さんはそう言って席に戻った。

しかし、私はその後もずっと大沢先生の事を考えていた。

柳原さんは、気に関して言えば、私よりずっと上だ。

私が感じられないようなものも感じ取れるのだろう。

彼女が嘘を吐いているはずがないから、大沢先生が妙な気を放っていたのは間違いない。

それから、私と明菜の名前を知っていた事も、その辺りと関係があるのかも知れない。

大沢先生は何者？　何のためにそんな気を使うの？

疑問だらけのまま、授業が終わった。

休み時間になると、私と柳原さんを除いて、女子達は職員室に行ってしまった。

「どういう事なの？」

全く理解できない。

「女子達さ、藤本先生を担任から外して、大沢先生を担任にして欲

しいって頼みに行ったらしいよ」

コロッケを食べながら、肉屋の御曹司である力丸卓司君が教えてくれた。

「どうして箕輪と柳原さんは行かないんだ？　藤本先生の方がいいのか？」

リッキーは不思議そうに言う。私は柳原さんと顔を見合わせてしまった。

「やっぱりおかしいよ、箕輪さん。何かあるよ、絶対」

柳原さんが言った。

「え？　もうないよ、コロッケ」

リッキーの空気の読めないボケに私と柳原さんは唖然とした。

何だか急な新展開で不安なまどかだった。

大沢先生は怖いのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者。ちなみにどうでもいい情報だけど、美少女ね。

全く。展開が結構深刻なのに、何よそのオープニングは？　バカじゃないの？

そう。

先日、産休を取った先生の代わりに副担任として現れた大沢一人（おおさわかずひと）先生。

イケメンで、クラスの女子達はすでに虜。

正担任の藤本先生を外して、大沢先生を昇格させるように職員室に直訴に行った。

江戸時代じゃないんだからと思ったけど、何とその要望が通り、大沢先生は担任に昇格するらしい。

藤本先生はショックで寝込んでしまったようだ。

ところで、直訴って何？

「それはおかしいね、まどかりん」

下校デートの時、彼氏の江原耕司君に大沢先生の事を話した。

江原ッチも柳原まりさんと同じく、大沢先生を疑っている。

「そうなのよ。教頭先生って、確かもうすぐ定年のはずなのに、大沢先生にメロメロになっちゃって」

私は腕組みして真剣な表情で言った。すると江原ッチは、

「いやいや、それもおかしいけど、もっとおかしいのは大沢先生だよ、まどかりん」

「え？　そこじゃないんだ」

私はテヘッと笑ってみせる。いかん、私まで深刻な時にアホな事をする「りったん症候群」にかかってしまった。

「可愛いんだけど、引く」

江原ッチをしてそう言わせてしまった。ああ……。

「瑠希弥(るきや)さんに相談しよう」

今度は江原ッチがニヘラッとして言った。小松崎瑠希弥(こまつざきるきや)さんは私のお師匠様だし、以前学校で事務員をした事もあるので、力になってもらえるかも知れない。

でも、江原ッチの目的が違う方向性を有しているのに気づいた私は、

「瑠希弥さんにだけ協力してもらいます、江原耕司君」
と言った。
「ええ？　まどかりん、そんなの酷いよお」
江原ッチは甘えた声で言うが、私は受け付けなかった。
「じゃあ、美輪に頼むよ。俺、学校違うから」
江原ッチがあまりにションボリするので、
「元気出して、江原ッチ」
私はほっぺにキスしてあげた。
「おおお！」
まるで何とかサイヤ人のように気が膨れ上がる江原ッチだった。

そして、翌日。
「おはよう、明菜」
校門の前で親友の近藤明菜に会った。
「おはよう、まどか」

まずは明菜で小手調べだ。

「おはよう、アッキーナ」

江原ッチの親友で、明菜の彼でもある美輪幸治君が現れた。

しかも、瑠希弥さんと腕を組んで。

これは明菜の洗脳具合を計るための作戦だ。

洗脳の度合いが強ければ、何のリアクションもとらないはずなのだ。

「あんた、誰？」

明菜は予想通り、美輪君には無反応だ。

「大沢先生！」

明菜は校庭の端にいる大沢先生を見つけて走り出した。

すでに大沢先生は数十名の女子生徒と数人の女の先生に囲まれている。

「うううう……」

美輪君は、瑠希弥さんと腕を組めて嬉しがっていたのだが、明菜のあまりにつれない一言とその後の行動に打ちのめされていた。

「まどかさん、あの先生ですね？」

瑠希弥さんがやんわりと美輪君の腕を解き、眼鏡をクイと上げる。

「はい。どうですか？」

私には大沢先生の気が読めないので、瑠希弥さんに尋ねた。

「気を細かく分断して、自分の思う通りに動かしています。まどかさんにはあの先生の気が来ていませんね」

瑠希弥さんが解説してくれた。

どうやら、大沢先生はターゲットを絞って気を放出し、その人を操っているらしい。

「瑠希弥さん！」

柳原さんが現れ、瑠希弥さんに近づく。瑠希弥さんは柳原さんを見て、

「おはよう、柳原さん」

「おはようございます！」

柳原さんには、大沢先生の気が届いていないらしい。彼女の気が大沢先生の気を危険と判断したのか弾いているのだそうだ。

さすが、気功少女だ。

「気になりますね」

瑠希弥さんはジッと大沢先生を見た。その視線を感じたのか、大沢先生が瑠希弥さんを見る。

「く……」

瑠希弥さんの顔が苦痛に歪んだ。どうしたんだろう？

「これは淫の気……」

瑠希弥さんはポケットから数珠を取り出して右手に巻きつけた。

「インドの木？」

いかん、またりったん症候群が発症した！

瑠希弥さんは感応力が人並みはずれて強い。

だからこそ、相手がその力を利用して仕掛けて来ると弱いらしいのだ。

それにしても、中学生が主人公の話で、淫の気とか出しちゃっていいの？　問題よ、それ。

「試されたみたいですね」

瑠希弥さんが呟いた。大沢先生はこちらを見るのをやめて、また女子達と楽しそうに話している。

「今のところ、何かを仕掛けて来る様子はないようです。一旦帰り

ますね」

瑠希弥さんはそのまま校庭から去った。

「ああん、瑠希弥さん」

柳原さんは寂しそうだ。美輪君はまだ落ち込んでいた。

それにしても、どうして私にだけ仕掛けて来ないのかしら、大沢先生は？

ひょっとして、私が可愛過ぎるから？　もう、大沢先生たら、照れ屋さんなんだから！

おっと！　またりったん症候群だ。

でも、なんかムカつく。私だけ除(の)け者みたいで……。

ううう。綾小路さやかにされたいじめのトラウマが……。

大沢先生の目的がわからない。何がしたいの？

不安でいっぱいのまどかだった。

大沢先生が暴走したのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者。

私の通う中学校の先生が産休に入り、その代わりにクラスの副担任として現れた大沢一人（おおさわかずひと）先生。

イケメンで、クラスの女子達ばかりか、全学年の女子、果ては同僚の女性の先生、更には定年間近の教頭先生まで垂らしこんでしまった。

大沢先生が気を自由に操る人なのはわかったが、その目的がわからない。

そして何よりも、私にその気をぶつけて来ないのも。

しかも、私のお師匠様の小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの感応力を逆に利用して、淫の気を送り込んで来るほどの力があるようだ。

侮れないし、危険だ。

翌日、憂鬱な気分で登校した。

全校の女子達が敵のような気がして来たが、

「まどかお姉さん！」

クラスメートの力丸卓司君と共に笑顔で現れたのは、私の彼氏の江原耕司君の妹さんの靖子ちゃんだ。

彼女は江原ッチに大沢先生の事を聞いていたので、お母さんの菜摘さん直伝の邪気の跳ね除け方をマスターし、大沢先生の虜になっていなかった。

「さすが、靖子ちゃんだよねえ」

リッキーはニヘラッとして靖子ちゃんを誉める。

「そんな事ないよ、リッキー」

照れる靖子ちゃんは可愛い。

「おはよう、箕輪さん、江原さん」

そこにボクッ娘(こ)の柳原まりさんが来た。

全校の女子で、先生を含めてまともなのは私達三人だけ。

状況的にかなり不利だ。

「大沢先生はどこにいるのかしら?」

私は学校全体を探ってみたが、わからない。

「大沢先生は体育館にいるよ。何て事を!」

柳原さんが急に怒り出して駆け出す。

「どうしたの、柳原さん？」

私と靖子ちゃんは慌てて柳原さんを追いかけた。

「わわ、待ってよ、みんなあ」

リッキーは早速コロッケをかじりながらついて来た。

私達は体育館に着いた。まだホームルームも始まらないその時間に、何故か全学年の女子達が集合している。

いや、女子達だけではない。

女性の先生、そして教頭先生もいた。

演壇には大沢先生が満面の笑みを湛えて立っている。

その大沢先生をまるで教祖様でも見るような目で教頭先生や女性の先生方が見つめていた。

そして、女子達も皆、アイドルでも見るように大沢先生を見て手を合わせている。

「何、これ？」

私はゾッとして言った。するとそこにいた女子達全員が憎しみの目で私を見る。

「な、何よ？」

私は後退りしながら尋ねた。しかし誰も答えてはくれない。

（強力な気で操られているの？）

私は演壇の大沢先生を睨んだ。

「その四人は私の邪魔をする人達です。お仕置きをしてあげなさい」

大沢先生が狡猾な笑みを浮かべて言った。

「まずいよ、箕輪さん。逃げよう」

柳原さんが言ったが、すでに私達は取り囲まれていた。

「まどか、柳原さん、靖子ちゃん、今からでも遅くはないわ。大沢先生にお詫びして。そうすれば、お仕置きをしないですむから」

私の親友の近藤明菜が前に進み出て言った。しかし、明菜の目には生気がない。

自分の意志で話しているのではないのだ。

「嫌よ。誰があんな変態教師に詫びるもんですか！」

私は精一杯の強がりを言ってみた。淫の気を使うなんて、絶対に普通じゃない。

ましてや、崇めたり奉ったりする対象なんかじゃない。

「残念だわ。みんな、やってしまって」

明菜の号令で、一斉に女子達が私達に掴みかかって来た。

「靖子ちゃんは俺が守る！」

リッキーはその巨体を利用して、靖子ちゃんの楯になった。

「箕輪さんはボクが守るよ」

柳原さんは眩しいくらいの笑顔で私を見て言う。あれ？　また始まっちゃったの？

「はあ！」

柳原さんの気が女子達をなぎ払う。

彼女は力を加減していて、傷つけないように攻撃している。

しかしそれではこの大人数には対処できない。

『まどかさん、柳原さん、聞いて。二人の気を合わせて、摩利支天（まりしてん）の真言を唱えて』

瑠希弥さんの声が聞こえた。

私は柳原さんを見る。柳原さんも私を見る。

「オンマリシエイソワカ！」

私の放った真言が柳原さんの気を纏(まと)い、何倍にも膨れ上がる。

「ひいい！」

体育館全体に真言の力が広がり、女子達ばかりでなく、先生方もそれによって弾き飛ばされた。

「くそ！」

大沢先生が歯軋りして演壇を離れ、非常口へと走った。

「待て！」

私と柳原さんは大沢先生を追いかけようとしたが、体育館中に倒れている女子達が邪魔で追いかけられない。

（逃げられちゃう！）

私と柳原さんは焦った。その時だった。

「逃げられませんよ、大沢先生」

非常口の向こうから、菜摘さんと瑠希弥さんが現れた。

「く！　退(ど)け、ババア！」

大沢先生のその一言が命取りだった。

「ババアとは誰の事です！？」

菜摘さんがムッとして大沢先生を睨みつけた。

「ひい！」

大沢先生は、菜摘さんの強烈な視線にビクッとして硬直した。

「貴方にはこれから三ヶ月ほど、山に籠もって修行してもらいます」

菜摘さんが気を放った。それは大沢先生を縛り、完全に動けなくしてしまった。

こうして、全校を揺るがした事件は解決した。

大沢先生は、江原ッチのお父さんである雅功（まさとし）さんのお師匠様のところに送られた。

「まどかさん、柳原さん、そして靖子、よく頑張りましたね」

「はい」

私達は菜摘さんの労いの言葉に感動して返事をした。

「僕は？」

リッキーがコロッケをかじりながら、無粋にもそんな事を言う。

バカめ！

「もちろん、力丸君のおかげでもありますよ。これからも靖子と仲良くしてくださいね」

「でへへ、ありがとうございます、お母さん」

リッキーはニヤニヤしながら言った。

「生徒さんも先生方も、もう大丈夫です。あの男の縛りはそれほど深くなかったので、後遺症は出ないでしょう」

菜摘さんは倒れている女子達を見て言った。

私達はホッとして顔を見合わせた。

「まどかさん」

柳原さんと靖子ちゃんとリッキーが体育館を出て行ってから、菜摘さんが私に声をかけた。

「はい」

私も彼女達と共に教室に行こうとしていたので、ハッとして菜摘さんを見た。

「あの男、どうやらサヨカ会の幹部だったようです」

「ええ？」

私はギクッとした。西園寺蘭子さん達と苦労して残党までやっつけたはずなのに、まだいるのか、サヨカ会め。

「鴻池大仙(こうのいけだいせん)や仙一のように強力な力は持っていないようですが、全国に散らばった者がまだいるようです。気をつけてくださいね」

菜摘さんは私を不安にさせないためか、ニコッとして言ってくれた。

まさに慈愛に満ちた目だ。ああ、早くこの人を「お義母(かあ)さん」と呼びたい（ムフ）。

「また、共に精進しましょう、まどかさん」

瑠希弥さんが言う。

「はい」

私は大きく頷いた。

まだ当分最終回はないと安心したまどかだった。

今度は美人の先生が登場なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者。

先日、産休の先生の代わりに私のクラスの副担任として現れた大沢一人（おおさわかずひと）先生。

大沢先生は、女子達を一瞬にして虜にしてしまったイケメン先生だったが、教頭先生を虜にして、何とクラス担任の藤本先生を追い落とし、自分がクラス担任になった。

その揚げ句、全校の女子生徒と女性の先生方を体育館に集め、洗脳をし始めた。

私と同級生のボクッ娘（こ）の柳原まりさん、そして私の彼氏の江原耕司君の妹さんの靖子ちゃん、それから靖子ちゃんの彼氏で、私のクラスメートでもある力丸卓司君は、大沢先生の野望を阻止するために体育館に乗り込んだ。

大沢先生の気で操られている女子達が私達に襲い掛かって来たが、私のお師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの助言で、私の真言と柳原さんの気を合体させて、大沢先生の洗脳を吹き飛ばした。

大沢先生は逃亡しようとしたが、江原ッチと靖子ちゃんのお母さんである菜摘さんが瑠希弥さんと共に現れ、それを阻止した。

それにしても、さすが菜摘さん。強いっす。憧れるっす。

「箕輪、柳原、本当にありがとうな」

クラス担任に復帰した藤本先生は、大きい顔をクシャクシャにして涙を流した。

私と柳原さんは苦笑いをするしかなかった。

そして、大沢先生の代わりに違う先生が来るらしい。

今度は菜摘さんが間に入り、前回のような変態先生が来ないようにしてくれた。

ところがだ！

別の意味で心配事が増えそうな結果になるのだ。

「今度、このクラスの副担任を務めることになりました、椿直美です。よろしくお願いします」

そう自己紹介したのは、まだ二十四歳の髪は栗色でロングの若い女性の先生。

スタイルは、瑠希弥さんほどではないけど、健康的な感じの先生。

要するに巨乳だ。しかも、美人。何人か殺気立っている女子もいる。

「み、みんな、よろしくな」

何故か顔を赤くして言い添える藤本先生。

傍らで、ムッとしている藤本先生の奥さんの霊が見えた。

全く、男って奴は……。

「はい！」

リッキー以下、クラスのバカ男子共は今にもよだれを垂らさんばかりに返事をした。

ホームルームが終わり、私が教科書を鞄から出していると、

「箕輪さん」

と椿先生が声をかけて来た。それを羨ましそうに見るアホ男子達。

「はい、何でしょうか？」

私は立ち上がって先生を見る。先生から、微かだけど霊能力を感じたからだ。

「気づいたのですね。私も実は見えちゃう人なんです」

椿先生はニコッとして小声で言った。やっぱり……。

「江原菜摘先生に、貴女と協力するように言われました。よろしくね」

椿先生は右手を差し出して来た。

「よろしくお願いします」

椿先生と握手をした途端、私は仰天した。

（この人、もしかして瑠希弥さん以上？）

そう、椿先生は自分の力を完璧に押さえる事ができるのだ。

菜摘さんが指名した理由がわかった。

事によったら、あの西園寺蘭子さんより凄い人かも……。

「まどかさん」

するとそこへ、何かを感じ取ったのか、柳原さんが近づいて来た。

「柳原さん、貴女とも協力をするように菜摘先生に言い付かって来ました。よろしくね」

椿先生は柳原さんにも握手を求めた。

「あ、はい」

あれ、柳原さん、何故か顔が赤い。ええ？

そして、柳原さんも椿先生と握手をして、先生の凄さに気づいたようだ。

「じゃあ、また英語の授業でね」
椿先生はウィンクして教室を出て行った。
柳原さんは、椿先生の本当の実力を知って、呆然としている。
「いいなあ、箕輪と柳原さん。椿先生と握手してたろ？」
リッキーがアホな事を言って近づいて来た。
「靖子ちゃんに言いつけるぞ！」
私は久しぶりに呪文を唱えた。
「ひいい！」
リッキーは慌てて逃げて行った。
「かっこいい、椿先生。気をあそこまで自在に操れるなんて」
柳原さんは尊敬の眼差しになっていた。
確かに気の扱いに関して言えば、椿先生は相当な達人だ。
サヨカ会残党がまだいるのを考えると頼もしい人。
でも、あの胸と顔は困る。
何でかと言うと……。

放課後。

江原ッチと下校デートをするため、いつものコンビニに向かう。

その途中、江原ッチからメールが来た。

「まどかりん、今度来た代理の先生、美人なんだって？　写メ撮って送ってよ」

バカめ！　何考えてるのよ、全く！

すぐに返信する。

「後でじっくりお話しましょう、江原耕司さん」

今頃江原ッチは絶叫しているだろう。

心配事が増えたり減ったりのまどかだった。

瑠希弥さんが東京に帰るのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者だ。

この前、変態先生が代理で来て一時騒然とした我が校だったが、それも一件落着し、私の彼氏である江原耕司君のお母さんの菜摘さんの取り成しで、新に代理の先生が来た。

椿直美先生。二十四歳。

私のお師匠様の小松崎瑠希弥さんほどではないけど、巨乳で美人。

いや、年齢が上なだけ、美という点に関して言えば、椿先生の方が上かも。

瑠希弥さんは美人だけど、まだ二十歳だから、色気はないとクラス担任の藤本先生が言っていた。

あの先生、亡くなった奥さん一筋かと思ったら、瑠希弥さんと椿先生をしっかり観察していた。

本当に、男って奴は！

ある日の下校デートの時。

いつになく江原ッチが元気がない。

「どうしたの、江原ッチ？　元気ないね？」

心配になって尋ねると、何故か江原ッチはビクッとした。

どういう事？　素早く心を覗こうとしたが、さすが江原ッチ、すぐにガードしてしまう。

「いや、何でもないよ」

「何でもないのに、どうして心をガードしたのよ？」

私は江原ッチに詰め寄るが、周囲の視線を感じてやめた。

そこはコンビニだったからだ。

「ここでは話せない。家まで来てよ、まどかりん」

江原ッチは悲しそうな目で言った。

「わかった」

何を隠しているのかわからないけど、どうやらあまり嬉しい話題ではないようだ。

江原ッチの家に行くと、何故かボクッ娘の柳原まりさんが先に来ていて、江原ッチの妹さんの靖子ちゃんと話していた。

「あれ、まりさん、どうしたの？」

私はまりさんがいるとは思わなかったので、つい尋ねてしまった。

「うん、ちょっとね」

まりさんも悲しそうだ。靖子ちゃんも私を見ないようにしている。何だろう？

まさかとは思うが、私に内緒で最終回ではないでしょうね？

嫌な予感がする。

あれほど九月が誕生日だとアピールしていたのに、誕生日エピソードはなく十月になってしまったくらいだから、考えられない事ではない。

「揃ったみたいですね。こちらにどうぞ」

すると邸の奥から菜摘さんと雅功（まさとし）さんが現れ、私達は道場へと案内された。

道場に入ると、そこには瑠希弥さんと椿先生がいた。

二人は仲良く歓談している。知り合いなの？

「お待ちしていました、まどかさん、まりさん」

瑠希弥さんは笑顔で言った。私とまりさんは思わず顔を見合わせ

てから、もう一度瑠希弥さんを見た。

「私の姉弟子の、椿直美さんです」

瑠希弥さんが椿先生を紹介した。私はまたまりさんと顔を見合わせてしまった。

「私、西園寺先生のところに戻る事になりました。それで、直美さんにお願いして、こちらに来ていただいたのです」

瑠希弥さんのその言葉は、最終回以上に衝撃的だった。

「ええ？」

私とまりさんはほぼ同時に叫んでいた。

「まさか、瑠希弥ちゃんがG県の江原先生のところにいるとは思わなかったけど、偶然とは思えないこのお話に、私は強い宿命を感じました」

椿先生は微笑んだままで話す。私とまりさんと江原ッチは真剣な表情でそれを聞いた。

「サヨカ会は私達の村でも脅威でした。それが壊滅してくれたので、私は今こうして教職につけているのです。だから、瑠希弥ちゃんと縁（えにし）があるまどかさんやまりさんを守りたいと強く思いました」

椿先生の住んでいた村は、サヨカ会の大きな施設があり、村にいた霊媒師の皆さんが監禁されていたのだそうだ。

そのサヨカ会の大元を私達が潰したので、椿先生達は解放されたらしい。

「今度は私が貴女達を守ります、まどかさん、まりさん」

椿先生は真顔になって言ってくれた。私とまりさんは感動して目を潤ませた。

江原ッチは、椿先生にうっとりしているようだ。まあ、今日は大目に見ましょうか。

「まどかさん、まりさん、ごめんなさいね。本当はもっとずっと一緒にいたかったんだけど」

瑠希弥さんが涙ぐんで言ったので、靖子ちゃんが泣き出してしまった。

そうなると、私とまりさんも堪え切れない。声を上げて泣いてしまった。

「ごめんなさいね」

瑠希弥さんは私とまりさんと靖子ちゃんを抱きしめてくれた。

それを江原ッチが羨ましそう見ていたのを私は後で知る事になる。

「そんな、謝らないでください。瑠希弥さんが蘭子お姉さんのところに戻りたいのは、私も知っていた事ですから。それなのに、あの時も残ってくれたから、本当に嬉しかったんです」

私は涙を拭い、嗚咽を抑えながら言った。靖子ちゃんはまだ泣いていて、まりさんが慰めている。

「まどかさん……」

瑠希弥さんはウルウルした瞳で私を見つめた。何だかそんな気はないのにドキッとしてしまう。

そして私達はまた抱き合って泣いてしまった。

菜摘さんと椿先生ももらい泣きしていたのを江原ッチに後で聞いた。

と同時に江原ッチにお説教したのも事実だ。

「直美さんは、私以上に力があるから、きっとまどかさんとまりさんのためになるわ。頑張ってね」

瑠希弥さんが涙を拭って言った。私とまりさんは黙って頷く。

「よろしくお願いします、椿先生」

私とまりさんは、椿先生を見て頭を下げた。

「こちらこそよろしくね、箕輪さん、柳原さん」

椿先生は涙を拭ったハンカチを後ろ手に隠して言ってくれた。

そんな私達のすぐ近くに、すでにサヨカ会の残党の魔の手が迫っていた。

それに気づかず、号泣したまどかだった。

瑠希弥さんが東京に帰る日なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊能者だ。

先日、私のお師匠様である小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが東京に帰る事を聞かされた。

私と柳原まりさんと、私の彼の江原耕司君の妹さんの靖子ちゃんは号泣した。

それほど、瑠希弥さんの話は衝撃的だった。

でも、瑠希弥さんは、尊敬している西園寺蘭子さんのところに戻るのを延期して、私達を育ててくれたのだ。

もうこれ以上我が儘は言えない。

それに、瑠希弥さんの姉弟子の椿直美先生もいる。

気になるサヨカ会残党対策も心配ない。

気持ちよく瑠希弥さんを送り出してあげたい。

そう思った。

「どうして私に教えてくれなかったのよ！」

目の前でそれなりに美少女の綾小路さやかが泣きながら怒鳴っている。

「それなりにって、何よ！」

そんな状態でもしっかり突っ込んでくれるので、すごくいい子だ。だから大好き。

「え、な、何よ、急に誉めたりして……」

さやかの弱点は誉められる事のようだ。動揺しているのがおかしい。

私は江原ッチの邸に来ていた。

瑠希弥さんが帰るのだ。

親友の近藤明菜も、彼氏の美輪幸治君と一緒に来ていた。

明菜は、瑠希弥さんには複雑な思いがあるようだけど、助けてもらった事もあるので、もうわだかまりはないようだ。

ふと気づくと、何故かエロ兄貴とG県警の本部長も来ていた。

そうか。瑠希弥さん、霊感課も辞めるからか。

兄貴は涙ぐんでいる。理由は何となくわかっている。バカ兄貴め。

まゆ子さんに内緒で来たのだろうか、と思ったら、まゆ子さんは兄貴の背後にまさしく背後霊のように立っていた。

怖過ぎます、まゆ子さん！

瑠希弥さんが江原ッチのお父さんの雅功（まさとし）さんとお母さんの菜摘さんに伴われて出て来た。

椿先生も一緒だ。

「皆さん、今までお世話になりました。皆さんの事は一生忘れません。もちろん、何かあれば、いつでも駆けつけますから」

瑠希弥さんが涙ぐんで言ったので、私とさやかとまりさん、そして靖子ちゃんはもらい泣きした。

明菜は声は出さなかったが、涙を流し、美輪君にすがりついている。

むしろ、すがりつかれている美輪君の方が泣いていたのはちょっと後で問題になりそうだ。

気になって江原ッチを見ると、すでに瑠希弥さんの手を取り、

「遊びに行ってもいいですか？」

などと訊いていた。何してるのよ、全く！

「ええ。まどかさん達と来てください」

瑠希弥さんらしい返しに、江原ッチは撃沈していた。正義は勝つのよ。

瑠希弥さんはたくさんの花束とお土産、そして私達が書いた手紙を抱えて、車に乗り込んだ。

「お元気で」

瑠希弥さんはそう言うと、車をスタートさせた。

笑顔だったけど、目は潤んでいた。

「瑠希弥さーん！」

私達は車が見えなくなるまで手を振った。

やがて瑠希弥さんの車は通りの向こうに見えなくなった。

「まどかさん、ボクもお別れなんだ」

まりさんが突然小声で言った。

「え？」

また女子達に衝撃が走る。

「どういう事、柳原さん？」

まだ泣いている美輪君を突き飛ばすようにして、明菜が詰め寄った。

靖子ちゃんもさやかもジッと柳原さんを見つめている。

柳原さんは苦笑いして、

「ボクも東京に転校するんだ。短い間だったけど、お世話になりました」

スッと頭を下げられ、私達は顔を見合わせた。

まりさん、もしかして本当に瑠希弥さんを追いかけて東京に行くの？

凄い執念だ。私には真似できない。

「柳原さん、どうしてなの？」

明菜達に取り囲まれ、まりさんは戸惑っていた。

「霊感課に入ってくれませんか？」

兄貴はすでに立ち直り、椿先生に交渉している。

「制服も用意してありますよ」

本部長までノリノリだ。

「はあ、でも、私は学校がありますので……」

苦笑いする椿先生。ムッとして兄貴を睨みつけるまゆ子さん。

これからどうなっちゃうんだろう？

いろいろと新展開の予感のまどかだった。

新装霊感課が初仕事なのよ！

私は箕輪まどか。中学二年の霊感少女だ。

お師匠様だった小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんが西園寺蘭子お姉さんのところに帰った。

ショックだったけど、それを乗り越えなければならない。

私ももう十四歳。来年は十五歳になるのだから。

え？　当たり前の事を言うな、ですって？

十五歳は大きな区切りなのよ、知らないの？

私が十五歳になれば、十五禁にできるでしょ？

そしたら、私の魅惑のボディも披露できるしって、何言わせるのよ！

違うわよ！

瑠希弥さんがいなくなった事で、急速に仕事への意欲を失ったエロ兄貴は、恋人である里見まゆ子さんにこってり説教されたようだ。

今日は日曜日。霊感課の仕事だ。

私の彼氏の江原耕司君とどうやら友人らしい綾小路さやか、そしてクラスの副担任の椿直美先生が来ている。

霊感課の事務方である親友の近藤明菜と、その彼氏の美輪幸治君は本日は欠勤だ。

またあの二人、ボクッ娘(こ)の柳原まりさんが瑠希弥さんを追って東京に行ってしまったので、元通りになったらしく、デート三昧のようだ。

羨ましいけど、私も仕事を兼ねてのデート気分だから、まあいいのよね。

現場は、G県の西部、長野県との県境のある峠。

その崖下で、白骨死体が発見された。

衣服は見つかっておらず、恐らく全裸で放置されたとの事。

猟奇殺人事件の臭いがする。

「まどか」

さやかが小声で話しかけて来た。

「何？」

私も小声で尋ねる。

「私はまだ、友人らしい程度なの？」

涙目で言われ、苦笑いするしかない。

さやかは私の心の声を全部聞いてしまうから、うっかりした事を思えないのだ。

「そんな事ないよ、さやかは親友だよ」

私はあの御徒町樹里さんに負けないくらいの笑顔で言った。

「ありがとう、まどか」

さやかは本当に嬉しそうだ。もう完全に心を許し合える関係かもね。

「付近にガイシャの霊がいないか探ってください」

まゆ子さんが私達に指示する。兄貴はまだ落ち込んでおり、

「どうしたんだあ、箕輪？」

ロリコン疑惑がまだ晴れない鑑識課最古参の宮川さんに声をかけられていた。

私と江原ッチ、椿先生とさやかで組み、付近をサーチする。

「まどかりんと一緒に仕事ができて嬉しいよ」

江原ッチが言ってくれた。

「私もよ」

そう言って江原ッチを見上げると、江原ッチの目は椿先生を追いかけていた。

「江原耕司君、帰りは歩きにしますか？」

私は低い声で言った。

「ひいい！」

江原ッチはビクッとして椿先生を見るのをやめた。

全く、どうしてそうなのよ、男って奴は！？

「おかしいな。関係ない霊はたくさん見えるんだけどなあ」

江原ッチが首を傾げた。私もそうだ。全く手がかりが掴めない。

「そちらはどうでしたか？」

一旦兄貴達のところに戻ると、椿先生が尋ねて来た。

「収穫はなしです。どういう事なんでしょうか？」

江原ッチはヘラヘラしながら椿先生に近づく。

「椿先生はどうですか？」

私は江原ッチの腕を思い切り抓りながら尋ねた。

「私達も収穫はないですね。代わりに別の殺人事件の被害者の方の霊とご遺体を発見しましたけど」

椿先生はそう言ってさやかを見る。

さやかは発見場所を宮川さんに説明している。

宮川さんは「近過ぎだろ！」というくらい顔を寄せて、さやかに質問していた。

よし、そのままさやかに乗り換えて、宮川さん！

あれ？　さやかは嫌がっていないな。どうしてだろう？

あ。

その時、さやかのガードが緩み、彼女の心が見えた。

さやかはお父さんを小さい頃に亡くしている。

恐らく彼女は、宮川さんが娘さんを亡くしているのに気づいているのだろう。

だから、さやかは宮川さんに普段私達には見せないような顔を見せているのかも知れない。

何だか、さやかが更に好きになった。

「まどか、やめてよね、隙を突いて人の心を覗くのは」

さやかは顔を赤らめて言った。
「あんたに言われたくないわよ」
私はすかさず反論した。すると宮川さんが何を勘違いしたのか、
「なーんだ、まーどかちゃん、俺がさーやかちゃんと話しているんで、嫉妬したのかあ？」
と嬉しそうに訊いて来た。何てポジティブシンキングな人だろう。
「違います」
間髪入れずに答えた。宮川さんは項垂れて、
「そうかあ」
と呟くと、寂しそうに去ってしまった。
「酷いのね、まどかは。可哀想よ、宮川さんが」
すっかり宮川さんと同調しているさやかが非難めいた口調で私を責める。
「いつもこんな感じよ。あの人は大丈夫。娘さんにも会わせたから」
私は微笑んで応じた。するとさやかは、
「そうか。だから宮川さん、まどかの事をすごく信頼してるんだね」

と言った。私はその言葉に面食らってしまい、顔が火照るのを感じた。

さすがさやかだ。そこまで宮川さんの心を見抜いているのか。

私にはそれはわからなかったなあ。まだまださやかには敵わないみたい。

「もう一度白骨死体の写真を見せていただけませんか？」

椿先生がまゆ子さんに言ったのが聞こえたので、私とさやかは椿先生に近づいた。

江原ッチはそれより早く先生のそばにいた。もう！

「どうぞ」

まゆ子さんは、アタッシュケースの中から、ポリエチレンの袋に入った写真を取り出して、椿先生に渡した。

「この方が亡くなったのは、百年位前ですよ」

椿先生は写真を手に取るなりそう言った。

「え？」

まゆ子さんと兄貴は仰天したようだ。

「そんなバカな！　鑑識の話では、それほど前とは……」

兄貴は元鑑識課員として、椿先生の結論に賛成できないようだ。

「理由はわかりませんが、私の見立てに間違いないです。それにその白骨死体は、葬儀を経て、一度埋葬されています。理由までは本物を見ないとわかりませんが、複雑な事件みたいですよ」

椿先生の話は、兄貴やまゆ子さん、そして宮川さんにはとても理解できないだろう。

でも、私と江原ッチとさやかにはわかった。

椿先生と同じで、理由はわからないが、その死体は一度埋葬されたにも関わらず、掘り出され、何かをされたようだ。

猟奇殺人事件より恐ろしい事かも知れない。

そして実際に、それはとんでもない事件へと発展する。

久しぶりに霊感推理っぽい展開のまどかだった。

復活の会は怖いのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

この前、G県と長野県の県境で発見された白骨死体の不可思議な謎。

私のクラスの副担任でもある椿直美先生も同行して、その白骨死体が一度葬儀をされ、埋葬もされていたと判定した。

我がエロ兄貴達警察サイドは、鑑識の鑑定でそれほど昔に死んだ人ではないとしていた。

「理由はわかりませんが、私の見立てに間違いないです。それにその白骨死体は、葬儀を経て、一度埋葬されています。理由までは本物を見ないとわかりませんが、複雑な事件みたいですよ」

椿先生はそれでも自分の主張を曲げなかった。

私と綾小路さやかも、同じ考えだった。

理由はわからないが、その死体は一度死んで、もう一度死んだのだ。

そして、次の土曜日。

椿先生、私、さやか、そして私の彼の江原耕司君が、G県警に呼

ばれた。

そして、遺体安置所にある例の白骨死体を霊視する事になった。

「椿先生だけで良かったんじゃないの？」

彼氏の牧野徹君（私の元彼）とのデートをキャンセルさせられたさやかはご立腹のようだ。

「私はまたさやかに会えて嬉しいよ」

冗談めかして言ったら、

「や、やめてよ、もう……」

何故か顔を真っ赤にしてさやかは言った。

ええ？　もしかして、そういう意味だと思われた？

ボクッ娘の柳原まりさんに感化されたのかな？

県警本部の地下室の奥にある死体安置所。

もしかして、霊感課と同じ階なの？　知らなかったわ。

私、霊は怖くないけど、死体は苦手なの。

え？　今更可愛い子ぶるな、ですって？　うるさいわね！

「ひ」

遺体の腐敗を防ぐために中はひんやりとしている。

いくつもの担架のようなものが並べられていて、その上に厚手のシートがかけられている。

「江原ッチ」

思わず江原ッチにしがみつく。

「大丈夫だよ、まどかりん」

その時の江原ッチは、椿先生を見ていたのだが、私にはそれに気づく余裕がなかった。

「これです」

私とは違って、霊は怖いけど遺体は全然怖くない里見まゆ子さんがシートをどけた。

そこには白骨死体が寝かされていた。

小柄だ。確かに百年も前に亡くなった方のご遺体には見えない。

どういう事なのだろう？

「触ってもいいですか？」

椿先生が兄貴に尋ねた。

「どうぞ」

嬉しそうに返事をした兄貴の二の腕をまゆ子さんが抓った。

「いて！」

兄貴は思わず叫んだ。

椿先生はそれには全く関心を示さず、白骨死体に手を合わせてから、頭部、胸部、腹部、下肢と触って行く。

私はその緊迫感に思わず唾を呑み込んだ。

私はさやかと江原ッチに目配せして、死体に近づいた。

「なるほど。これは死者への冒涜ですね。目的は定かではありませんが、死霊魔術師（ネクロマンサー）が絡んでいます」

椿先生の言葉に、兄貴達はキョトンとし、私達はギョッとした。

「何です、そのネクロ何とかって？」

兄貴が尋ねた。椿先生は兄貴を見て、

「古代ギリシアの昔から伝わると言われている邪法です」

「ええ？　そんな事が現実にできるんですか？」

兄貴はまゆ子さんと顔を見合わせてから重ねて尋ねた。

「それはわかりません。ですが、このご遺体は明らかに蘇生させられています。だから、鑑識課の見立てと私の見立てが食い違ったのです」

椿先生は白骨死体を見てから兄貴を見て言った。

エロ兄貴はまた嬉しそうにしたので、まゆ子さんに腕を抓られた。

「もしかしてそれ、『復活の会』が絡んでいませんか？」

さやかが椿先生に尋ねた。

さやかの顔はいつになく真剣だ。

椿先生は弾かれたようにさやかを見た。

私と江原ッチもだ。

兄貴とまゆ子さんはまたキョトンとしている。

「綾小路さん、貴女、その組織を知っているの？」

椿先生がさやかに近づきながら尋ねた。さやかは小さく頷き、

「はい。亡くなった父がそこにいましたから」

さやかは衝撃の事実を明かした。椿先生は、

「そうなの。だからなのね、江原先生が『綾小路さんにも参加してもらってください』とおっしゃったのは」

あれ、江原ッチのお父さんの雅功(まさとし)さんは知っていたの？

「どんな組織かも知らずに力を貸し、知った時には後戻りできず、無理に抜けようとして殺されたんです」

さやかは淡々と語ったが、心の中は乱れていた。

私はもらい泣きをしてしまった。

「まどかりん」

江原ッチが優しく肩を抱いてくれる。

「もし、この件に復活の会が関わっているのであれば、もうこれ以上探るのはやめた方がいいです」

さやかは震えながら言った。

「彼らに敵と判断された人は、それとわからないように殺されます。私の父も病死にされました」

さやかは必死になって涙を堪えていたが、

「ありがとう、話してくれて」

椿先生が微笑んで、彼女を抱きしめた途端、声を上げて泣き出した。

私も江原ッチにすがりついて泣いた。

「でもね、綾小路さん、このまま放っておくと、貴女と同じ思いをする人達が増えて行くばかりなの。早く何とかしないと」

椿先生はさやかをギュウッと抱きしめて続ける。

「大丈夫。私と江原先生を信じて、綾小路さん。復活の会の悪事は必ず私達が阻止するから」

「先生！」

さやかは椿先生に抱きついて泣いた。

ふと気づくと、兄貴と江原ッチがそれを羨ましそうに見ている。

私はまゆ子さんとアイコンタクトをとり、同時に腕を思い切り抓った。

「ひいい！」

兄貴と江原ッチは見事にハモって叫んだ。

私とさやかと江原ッチは、椿先生を手伝って、白骨死体から更に情報を引き出すために力を結集した。

その白骨死体は古い墓地から掘り返され、様々な呪術によって別

の魂を宿された。

そして白骨死体は衣服を着せられて銀行強盗をした。

数カ月前に起こったG州銀行本店営業部の襲撃事件だ。

その中の強盗団の一人が、この白骨死体だった。

「じゃあ、あの事件でどうしてもわからなかった指紋が、この死体のものなんですか？」

さすがの兄貴も、もうエロい目で椿先生を見る事はなかった。

すっかり、元の鑑識課員の目になっている。

「はい。指紋も呪術で、そのご遺体が生きていた時のものを再現したのでしょう。まさに恐るべき完全犯罪ですね」

椿先生の言葉に兄貴とまゆ子さんは唖然とした。

確かに放っておけない。

何とかしないと、次々に同じ事が起こってしまう。

いつになく真面目な展開のまどかだった。

謎の強盗事件を調べるのよ！

私は箕輪まどか。中学生の霊能者だ。

先日、すでに埋葬されていた遺体を掘り起こし、それに別の魂を宿して強盗をさせるという事件が起こった。

G州銀行本店営業部事件だ。

私と私の彼氏の江原耕司君、そして私以上に霊感が強い綾小路さやかの三人は、私のクラスの副担任でもあり、あの小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんの姉弟子でもある椿直美先生と協力し、事件の解明に当たる事になった。

で。

放課後、私は親友の近藤明菜の愚痴を聞く事もなく、学校を飛び出し、校門前で待っている私の兄貴の慶一郎とその恋人の里見まゆ子さんが乗るG県警刑事部霊感課の特殊車両に乗り込んだ。

特殊車両なんて言うと聞こえがいいけど、実は廃車寸前の大型パトカーだ。

「予算がないんだよ、霊感課は」

助手席でムスッとした顔の兄貴。運転席ではまゆ子さんが苦笑いしている。

「本部長が制服に金かけ過ぎなんだよ」
「言っておくわ、本部長さんに」
私が真ん中の座席で言うと、兄貴は慌てたようだ。
「バカヤロウ、俺を左遷させる気か？」
「それも面白いわね」
更に悪乗りした。
「お前なあ……」
兄貴は項垂れてしまった。まゆ子さんはクスクス笑っている。
「そう言えば、椿先生はどうしたの？　今日はお休みだったけど」
不思議に思ったので尋ねた。するとまゆ子さんが、
「椿先生には、先に現場に行ってもらいました。危険な人がいるので」
と兄貴を睨む。兄貴はビクッとした。
バカ兄貴め、また何かしでかしたのか。仕方ないなあ。

車はやがて江原ッチとさやかのいる中学校に到着した。
江原ッチとさやかが二人で待っていたのはちょっとだけ気に入らなかったが、私は心が広いのだ。
そんな事でいちいち目くじらは立てない。
で、目くじらってどこに立つの？
何だかいい雰囲気の江原ッチとさやか。
嫉妬してしまいそう。
「まどかりん、お疲れ」
江原ッチは爽やかに挨拶して来た。そこまでは良かった。
「あれ、椿先生は？」
「江原耕司君、歩きで現場まで行きますか？」
我慢の限界だったので言ってしまった。
「ひいい！」
江原ッチはギクッとした。
「相変わらず嫉妬深いのね、まどかは」
さやかがニヤリとして言う。悔しいけど何も言い返せない。

まゆ子さん、確かにナイス判断でした。

椿先生がいたら、江原ッチがどうなっていたかと思うと、またイラッとしてしまう。

そんなこんなで、私達の乗る車は、G州銀行本店営業部に到着した。

そこはG県と埼玉県を結ぶ国道沿い。M市とT市の境付近だ。

今日は霊感課が捜査をするので、臨時休業にしてもらった。

「お待ちしておりました」

中に入ると、椿先生が銀行の人と出迎えてくれた。

椿先生、早速霊感課の制服を着ている。

瑠希弥さんが着ていたものほどギリギリな感じはないが、やっぱりスカート短いし、胸元が開いている。

「おお！」

兄貴と江原ッチが反応したが、私とまゆ子さんは無視した。

だって、椿先生の隣に立っている銀行の人も、チラチラ椿先生の胸元を見てるんだもん。

男って奴は……。

「ここにはほとんどあの遺体の痕跡はないですね。但し、重要な事がわかりました」

椿先生は、兄貴が胸元から目を離さないのを気にしていないのか、普通に会話している。

「何でしょうか？」

それでも兄貴は胸元から目を離さない。

「課長！」

堪りかねたまゆ子さんが、兄貴の足の甲を思い切り踏んだ。

「ぎゃっ！」

兄貴は大声を上げて飛び跳ねた。バカめ。向こうに行ってなさいよ。

私も椿先生が何に気づいたのかわかった。さやかもわかったようだ。

但し、江原ッチは椿先生の胸元の方が気になっているようで、全然気づいていない。

「江原耕司君、帰りは歩きでどうぞ」

「ひいい！」

江原ッチはビクッとして私を見た。

「続きをどうぞ」

まゆ子さんは兄貴に小言を言ってから椿先生を見た。

椿先生は頷いて、

「協力者がいるのがわかりました」

「協力者？」

兄貴とまゆ子さんは、いろいろあるけどやっぱり恋人同士ねという絶妙のハモりで尋ねた。

「はい」

椿先生は、隣にいる銀行の人を見た。やっぱりね。

「な、何ですか？　あ、いや、私は別に貴女の胸を見ていたのではなくてですね……」

そう言いながらも、その人は後退(あとずさ)りして行く。

「逃がさないわよ。知ってる事、全部話してもらうわ」

さやかが背後に回りこんだ。

「く、気づいていたのか……」

その人の顔つきが変わる。おかしい、この人、死んでる？

「ええ、気づいていたわ。ここに来る前からね」

椿先生はフッと笑った。何だかカッコいい、先生！

「オンマリシテイソワカ」

椿先生と私と江原ッチ、そしてさやかが摩利支天（まりしてん）の真言を同時に詠唱した。

「ぐはあ！」

その男は悶絶した。だがそれでも逃げようとする。

「はい！」

さやかと椿先生がお札を投げ、男の動きを封じた。

「もう逃げられないわよ。さあ、全部話してちょうだい」

椿先生がズイッと男に近づいた。

「お、俺は何も知らない！」

男は言い逃れようとしている。

「そんなはずないわ。貴方が手引きして実行したのよ、あの事件は。

誰が黒幕か答えなさい」

椿先生の顔が怖くなった。思わずビクッとしてしまう。

「俺は指示されたとおりに動いただけだ。何も知らないし、誰が上にいるのかもわからない」

その時だった。

何もない空間に亀裂が走り、黒い影が現れた。

「何？」

椿先生が数珠を取り出して身構える。

私と江原ッチもその不可思議な影に凶悪な何かを感じ、後ろに飛んだ。

「神田原明徹（かんだはら めいてつ）！？」

さやかが叫んだ。誰、それ？

「綾小路のところの小娘か。久しいな。元気そうで何よりだ」

影が喋った。さやかと知り合いなの？

「椿直美、お前の事、知っておるぞ。相当な使い手のようだな。だが、私達のする事を邪魔するのは許さぬ。そして、この件はこれ以上調べさせぬ」

また影が喋った。
「何ですって！？」
椿先生はキッとして影を睨んだ。
「ぐわああ！」
次の瞬間、男が苦しみ出した。
「魂を砕くつもりなの！？　させない！」
椿先生は印を結んだ。
「オンマカキャラヤソワカ」
大黒天の真言が放たれ、影にぶつかった。
「無駄だ」
影は全く影響を受けた様子がない。私達は唖然としてしまった。
「ぐぎゃああ！」
男の魂は影の放った呪術で魂を砕かれた。抜け殻になった肉体は、ドサッとその場に倒れ伏した。
「我々に逆らうつもりなら、それ相応の覚悟をせよ、椿直美」
そう言うと、影はスウッと消えてしまった。

私達はあまりの出来事にしばらく動けなかった。

それからどれほど時間が経ったのだろうか？

私達は我に返り、倒れた男の身体を調べた。

「思った通りです。この人は三ヶ月ほど前に殺され、魂を入れ替えられています」

椿先生が言った。兄貴とまゆ子さんは驚愕している。

元々の肉体の持ち主も魂を砕かれているようだ。

何て酷い事を……。

「先生、やっぱり手を引いた方がいいです。神田原明徹は私達が敵う相手ではありません」

強気なさやかが弱気な発言だ。

無理もない彼女のお父さんは、そいつが率いている復活の会に殺されたのだから。

「心配しないで、綾小路さん。私はもっと強いわよ」

椿先生がニコッとして言った。

瑠希弥さんの姉弟子で、江原ッチのお父さんの雅功(まさとし)さんが信頼しているのだから、相当強いのだろう。

「いずれにしても、もう後には引けないわ」

椿先生はギュッと拳を握りしめた。

悔しそうだ。先生の怒りが感じられる。

とんでもない敵の登場に緊迫するまどかだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7720j/

超絶美少女霊能者箕輪まどかの霊感推理

2011年10月26日12時59分発行